







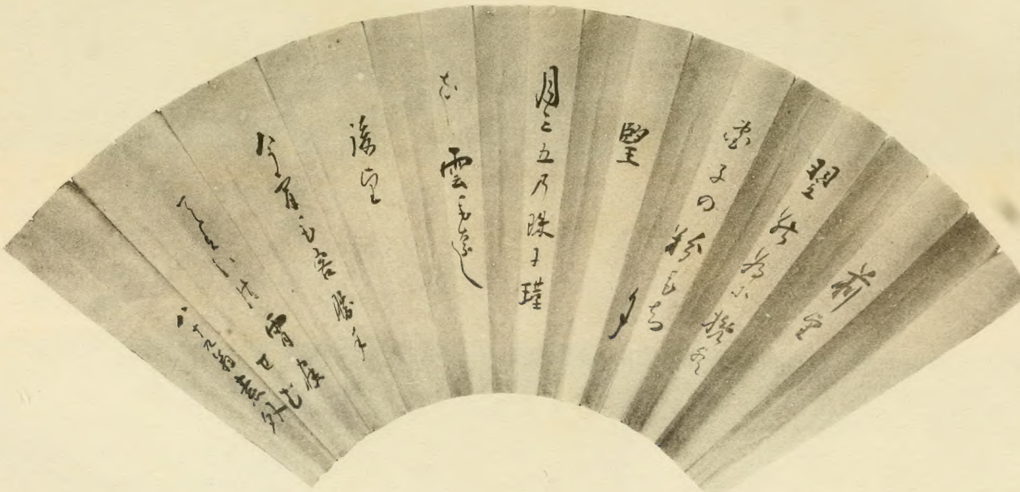




近世俳諧句集

装幀　津田青楓

素外筆扇面



前望

翌の爲に挽歟團子の粉もち月

望

後望

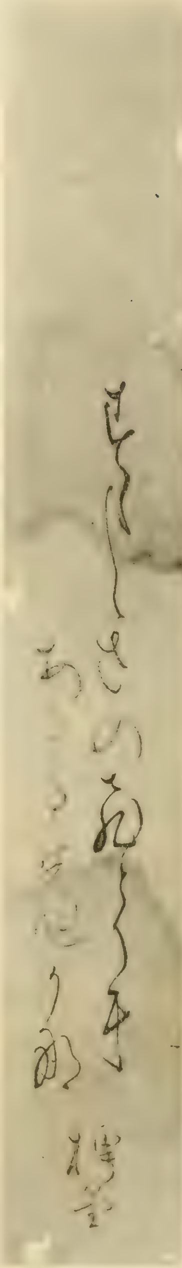
月三五の珠に瑾なし雲もなし

今宵も客勝手ではいざ宵寐せむ

八十九翁 素外

樗堂短册

（武藤一郎氏藏）

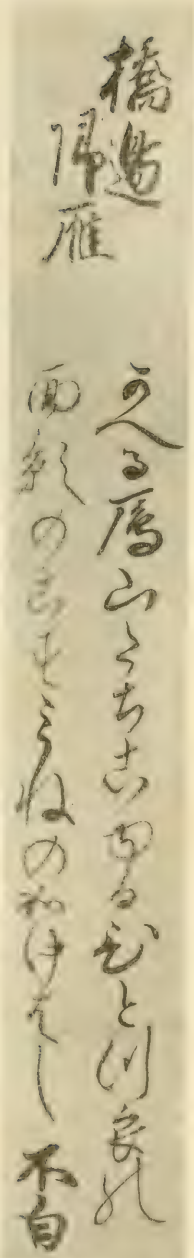


すゞしさのひとりにあまる莚かな

樗堂

不白短册

（同）

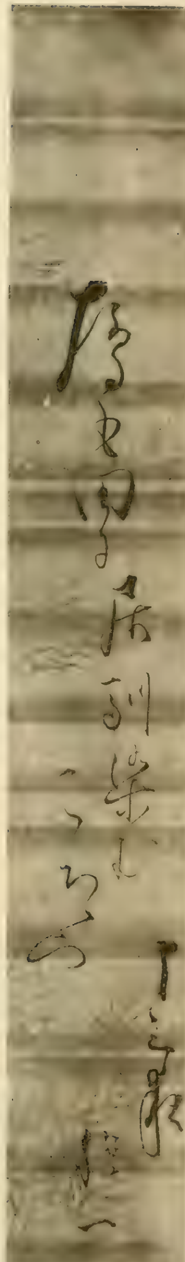


橋邊歸雁

かへる雁山たちこゆるひとつらの面影のこすみれのかけはし

不白

抱一短冊　（武藤一郎氏藏）



鴈も田に居馴染むころや十三夜　　抱一

梅室短冊　（同）



千世くくさ雀も祝ふ若葉かな　　九八翁 梅室

素檗自畫賛



元日のこゝろや
ありといへばなくてもありぬ初がすみ　素檗

（小池子一氏藏）

解題

誹諧根源集

寬政十二年板　　中本二冊

近世に至つて江戶談林の再興を企圖した谷素外は、俳諧卽滑稽の字義に拘束されて其の俳風が甚だ時世に懸隔したので大をなし得なかつたが、和漢の學に通じた博識は俳諧學者としていろ〳〵重要な仕事を遂げしめたのであつた。『誹諧根源集』は素外が俳諧の起源に關して自己の見解を示さうとしたものでないが、和漢の文獻に徵して其の根本資料を提供した点に於て、後人を裨益する處が多大である。史記滑稽傳通俗解は彼の門人山田保大が全文を國譯し、その讀みと訓とを同時に理解させる爲め、右傍には片假名を以て讀み方を記し、左傍には讀み方と紛れしめざるように平假名を用ひて、文中の熟語を平易な言葉に譯解したので、俳諧卽滑稽として其の字義を釋明す可く有効な方法であるが、讀者をして煩勞の感を起さしめない事もない。寧ろ本文の解說に止めた方がよかつたらう。杜子美の俳諧躰二首及び范至能の同聯句は漢詩にかうした見本のある事を知つて置くのによい。『古今集』その他の敕選集から誹諧歌の全部を拔き書きして載せ、『菟玖波問答』や『菟玖波集』の連歌の俳諧を抄出し、『犬子集』以下の俳書から古俳諧を摘錄してあるが、誹諧文字の辨幷に誹諧の大意の箇にして要を得た最後の一卷が、本書の使命を果す上に却つて効果がありはしないかと思ふ。跋は歌人の千蔭である。原本は五卷各分冊になつて居るが、覆刻用に供したのは滑稽の二卷に合せたもので本文は全く同一である。但し別に『誹諧古言躰』と改題してところ〴〵板木を倒つて雜談窓の舊板とし

た後刷本が流布してゐる。これは後の書肆のよく行つた新板本と見せ掛ける手段で、著者素外のあづかり知らざるところであらう。又、天保十二年板の『誹諧根源集補闕』一冊は湖上和月といふ者の著であつて、素外の遺稿ではない事を注意して置きたい。

玉池雜藻　文化十年板　小菊本　三冊

神田お玉が池に一陽井とよぶ庵を結んで居たので、素外はその隨筆を『玉池雜藻』と稱したのであるが、後刷本を見ると『滑稽著聞集』と改題されてゐる。これは著者を無視した書肆の仕事として甚だ不愉快なことである。素外は歌人の千蔭とは『誹諧根源集』の跋で知られるやうに、五十年來の知友であり、奇人涼袋とも旅行をともにしたりして交際があり、『田舍源氏』の作者として又考證家としての業績がある種彦の如きも、素外の藏書を借りて寫本としたものゝ傳はつて居る風に、學者文人に接近してその博識にかねるに見聞の廣きを以てしたから、その隨筆も俳諧に關する事のみにかた寄らずして甚だ面白く讀まれるのである。歌となく連歌となく讀書中の雜抄にも一見識を思はせるところがあつて、內容は多方面に渉つてゐる中にも、その常に敬慕する談林派の梅翁宗因に就いて、つとめて其の人物の洒脫にして逸事の掬すべきを紹介してゐる。かの梅翁が葺屋町の芝居にて或人の「子はまさりけり竹之丞」の上五文字に煩へるを見て、無造作に「おや〳〵〳〵子はまさりけり竹之丞」と冠を置いた時、芭蕉が同席して感嘆したやうに書いた本もあるが、素外は「一座手を打て感吟の聲暫し止まざりしとぞ」と記せるのみである。勿論芭蕉には敬意を拂つてゐるが、老鶯の題を「うぐひすや竹の子藪に老を啼　桃青」の句で夏季とするが、「うぐひすも老をばかくす太谷かな　宗因」の先作あるをかゝげ、連俳共に鶯に老を讀むは春季であると主張するあたりに、宗因の肩をより多く持つたとこ

ろが見掛けられる。『酒滴余談』といふ後編は嘉永六年板で、時には『玉池雑藻』の續編として本書に添へたものを見るが、本集の底本は三冊本であるし、續編の方は本文に格別の記事はないので採録を見合せる事にしたのである。

枇杷園隨筆　文化七年板　中本一冊

芭蕉と其の高弟との逸事を隨錄したので著者士朗の目に觸れたものもあるが、多くは門人が旅行中見聞したところを物語れるまゝに筆記して置いたので、卓池夜話とか秋擧夜話とか註記してあるのがそれである。芭蕉の眞蹟「万菊丸鼾の圖」は凸版に縮寫した爲め明瞭を缺くが、一寸めづらしいもので、寛政十三年板の『花は櫻』に摸寫されたものと同一である。竹二坊の『はせを翁正傳集』に載するのは、たゞその格好を寫したものに過ぎない。文中『土芳隨聞抄』とあるのは『三草子』の別本か、それとも其の稿本であるかゞ研究ものである。芭蕉の遺文として掲ぐるものにも、他に全く所見なく眞僞を鑑別に苦しむものがあるが、士朗の見て以て信を置いたものだから殊更疑ふにも及ぶまいと思ふ。丈草の潘川宛書翰は長文ではあり、文脈のつゞき工合に不可解なところがあつたりするが、前年伊勢の桑名で千葉吐月氏所藏の同じく潘川宛の手紙を見たものと、其の飄々乎たる書き振りが髣髴として同時代のものといふ事が直覺される。『琵琶園隨筆』の方の丈草書翰で去來の人物評に「此人も昔は具足を賣て傾城にかゝり候とて、其角なども大ほめのよし、自分にも笑ひ申候」の一條は謹厚な去來としては一寸思ひ寄らない情話である。琵琶園は居常琵琶を愛した士朗の庵號である處から、本書の標題に用ひたのである。

芭蕉葉ぶね　文化十四年板　中本一冊

鶯笠は後鳳朗となつた肥後の對竹である。江戸へ來て一家をなす野心を持つて居たが、俗俳を支配して行くにはた

ど技倆ばかりでは不可である事を知つたので、先づ傳統的背景のいはれなきを主張し、二別三變なる說を以て正風の俳諧を唱へたのが此の『芭蕉葉ぶね』の根本問題なのである。しかし蕉門の遺書を通じて其の直旨を承けたといつても、人の容易に服す可からざるを苦慮して「われ筑紫のはてに生れ、越人の傳統をうけ繼ぎ」たるが如く假託し、百年の後その馬脚をあらはす事になつたが、當時の人はそのいふまゝを事實と信じたらしく、且つ又傳統の如何によらず、その論は時弊をうがつて居つたので其の門に歸依する者あり、一茶時代の後、梅室・蒼虬と共に三大宗匠たる位置と勢力を占める事になつたのであるから、『芭蕉葉ぶね』一卷は鶯笠卽ち鳳朗の世間的に知らるゝ第一門となつた譯である。一茶が本書の校合者であるのはどういふ事情からであらうか。廣陵の跋に「或人、鶯笠庵に遊ぶ日、此書を反古溜の中よりぬすみ來れりとて袂より出しつ」とあるのが一茶その人の事であるか。一茶ならばやりかねない仕事である。今日は校正といへば編著者の意を汲んで行ふのであるが、むかしは著者の爲めに校閲者として同格、或はそれ以上の者と見られたので、これを以て一茶が鶯笠の著述の校正に備はれた如くに誤解してはならない。それと著者が廣陵となつてゐるが、これは出板者といふ程の意味であつて實際の著述者の鶯笠である事は疑ふべくもなからう。題名は朱拙の『芭蕉盥』にならつて、下心に芭蕉の助け船による事をふくめた事が凡例にあるので解る。

隨齋諧話　　文政二年板　　大本二冊

一讀して趣味の淺からぬ材料の扱ひ方に洗錬されたところあり、然も事實を蒐めて興味本位のものとしようとする無理がなく、考證的な記事をも廻りくどからず卒直にそして平明に記述したものとして、成美の『隨齋諧話』を措いて他に近世の俳話集にこれが同價値の書を求め難い、成美は富裕な遊俳であつたから望むところをほしいまゝにし得た

らうが、よく俗に落ちずして古書を愛し、その癖にとらはれて學を衒ふところがないので、學と識と俳の三者相向上して本書の內容をすぐれたものとなしたのであらう。貞德の『紅梅千句』に就いて其の發句の考證もあれば梅翁傳の紹介もあるように、俳諧の諸派に對しては好みはないが、芭蕉には常に關心して居たと見えて、其の傳記資料たる可きものが隨所に記し止められてある。四山瓢の一つ小瓢と銘と文章を臨摸して載せ、素堂が發起者としての芭蕉庵再建勸化簿の寫しの如きもの、或は眞なりや否やを疑はれもするが本間道悅に醫を學べる時の誓紙には、書判をまで叮嚀に影寫してある。行脚の掟は半信半疑のものながらとして、富久角左衛門の許に藏するを轉寫して居るが、文章に誤脫があるので成美の疑ひを挾んだのも無理ならぬ事を思はしめる。成美の珍本扱ひして居るものが今日では平凡の書となつて、全編種彥の考證の如く行屆いてゐるとは云ひ難いが、それは立場の上の問題であつて、古書の比較的に入手される今日でも『隨齋諧話』の引用書に通じた者はさう多くはあるまい。成美の文集は『四山藁』と題した二冊本であつて、これは序跋その他のものを歿後にその遺子の編輯したものである。本書の序文は雪門中の藏書家八朶園蓼松が書いてゐる。挿入の圖版は原本所載のものより縮寫されて居るから、そのつもりで見て頂きたい。

嵐亭誹話　文化十年板　大本二冊

古俳書の註解中で疑問の存するもの、及び季題に取扱はるゝものゝ訂誤を主として記述してあるが、偶然の發見を得々として然も輕卒に斷じ去つたのでなく、愼重に考へてみた上で自說を述べてゐる學者的の態度に、著者の人格が閃いてゐる。嵐亭は雪門でその嗣號を許す事を重視する庵號であるが、先代の嵐亭富屋から別號新月庵二世と共に讓られたのであらう。一に奚疑と稱して潤氏が本姓である。その說で臆斷と思はるゝのは『虛栗』の飽やことしの一卷は五十四句

であるから、「もと源氏行なりしが、六句脱せしを見ゆ」とある一項である。これは『其角七部集』を準據としての誤解である。『虚栗』の原本は歌仙三十六句であるのを七部集の覆刻者が次の詩あきん人の卷から十六句書き紛れたのを知らずして失策をかさねたのである。その他の說では芭蕉翁門人六感の語を一笑に附し、二十五ヶ條を支考の僞作と斷じてゐるなど孰れも論據がある。『曠野』の「宮司が妻に惚れられてうき」は私もグウジと讀んで居たが、『紅梅千句』の「宮司が妻に」ミヤジと振り假名があるので誤りを知つたが、『嵐亭俳話』に早く指摘してゐる事は氣附かなかつた。『毛吹草』にもミヤジの振り假名がある。猶「はせを翁眞蹟詠草一卷」の歌仙は果して芭蕉の捌いた連句か否かは解決を要する一問題であらねばならぬ。本文の中扉に『嵐亭俳話　富屋』とあるは「奚疑」とす可きを誤つてさしかへを忘れたのである。

古學截斷字論　天保五年板　中本二冊

貞門・談林・蕉風の推移は動かし難いけれど、その說の一所に停頓して三時代に於ける發達の見られないのは、切字を中心としての俳諧語法の研究である。連歌道の傳授を承けたまゝ株守して俳諧特殊の見解は絕無と稱してよい。芭蕉のいろは四十七字皆切字の說も見方によつては當座逃れの言葉といつても辯護し難い。秋成の『也哉鈔』に至つて系統立られたが、その後成元の『俳諧手爾波抄』が音義說による解釋をしてから、古學者の語法研究の爲め影響を受けつゝも切字の何たるかに就いて、確乎とした意見を持つた俳人はなかつた。北元の『古學截斷字論』は宣長の『詞の玉の緒』に據つた說で、序論を見ても連歌以來の旧說を脫して進んだ考へ方である事が解る。本文は『桐一葉』及び『有也無也の關』の如き芭蕉に假托した傳書、支考の『古今抄』その他竹亭の『をだ卷』より元木阿彌の『饒舌錄』に至る主要な諸書を批評して、七部集中の發句を例證として切字の一般を概說したので、北元の發明と見らるゝ處はないが、傳統的

な頑愚なてにをは論よりは遙かに進歩して學問的の組織を有してゐる。一名を『古學専褒抄』と稱してゐる。北元に嗣氏、櫃之本は庵号で、蓼太の門人午心の弟子である。其の生家は今のはい原の主家となる紙屋で錦草紙なども板行してゐたが、その弟に家業を托して俳諧を以て渡世し、『戀の栞』などの著作がある。此の切字論の後『玉のひかり』又は『俳諧作例集』の如き、和蘭語法より開けた新語學に基いた切字に關する書は、明治の初年になつて著作されたのであるから、明治以前の俳諧語法の書は切字論を以て終了したものと見られない事もない。

俳諧茶話　　嘉永七年板　　中本一冊

『俳諧多識編』の著者で本草學に造詣のあつた樨柯の子で、三世東杵庵をついだ顧言とその弟子との問答を一柯の筆記した書である。顧言は松本氏、醫道には天蹊と稱して居た。忍川巣連の家元で蓼太系統であるが、樨柯の時雪門を脫退して了つたのであつた。樨柯から家學を承けたので其の説もまた穏健である。其角の難句を釋明した説の多いのは樨柯の稿本『五元集小鏡』から出てゐるので、「小鏡の解」にといふ語がところ〲に見えて居る。「枯尾花」の芭蕉終焉記に「三更月下入無我」は『江湖風月集』の偈に「三更月下入無何」とあるを、「其角時記の一失にて、何を我に書誤りたる也」といふ首肯す可き説もある。切字に就いて樨柯の『猿蓑逆志抄』の解釋に不審あるところを質疑し、顧言のこれに對する答辨も古學の一通りを知つた者でなければ云へないが概略に過ぎないので、北元の『切字論』のような組織的なものではない。門答を筆記した一柯は宮地氏、可磨齋の二世である。茶話の題名は序文に「かの茶てふものはよく人の渇を止むれど――茶話も又よく俳諧の渇を止めんや」とある如く、輕い意味の「茶ばなし」を取つて用ひたのである。小冊子であるが讀んで多少得る處があるであらう。

不白翁句集　寛政十年板　中本一冊

表千家の茶道を以て權貴の門に出入した川上不白の句集である。不白は京都の宗家千如心齋の許で日夜の修行・功夫にその道の奧儀を究めたので、茶人式の侘びた持味を其の俳諧に表現してよい筈で、さうした傾向の見られないのは蓼太に就いて、その平俗な手振りに染まつたとばかりはいへない。茶人と雖時代を背景として生活するから、世間と沒交渉であり得ない爲めであるが、不白は又大德寺の大龍和尚に參じたので、茶味禪味に徹したに疑ひないから、かうした微溫的な心境に安んじて居たのは解らない。それは措いて不白その人は三駱の序文にあるように、紀伊新宮の人で川上氏、如心齋に入門の日は默雷庵宗雪といひ、江戸に表千家を弘むる爲め、駿河臺に默雷菴を、又柴崎の傍に蓮華庵をいとなみて、「左に酒瓶を提げ、右に茶筌を曳て一たび不審菴の紫旗を」ひるがへしてより、世間風を望んでその門にすゝみ入り、茶道の大宗となつたのである。俳諧は沾州に江戸座を、また五色墨の珪琳に就いた事もあるが、蓼太の雪門に會して殊に有名となり、此の句集も同門三駱によつて編集されたのである。文化六年十月廿九日、年九十三を以て物故した。近世の茶人として俳諧に席を列した特殊な人物として、その句集を本集に收めたのである。

能靜草　文化六年板　大本一冊

俗を遁れて隱者の如き生活をした晩年の淋しさにくらべて、その俳諧には江戸の世相の反映して明るい氣分があるのは莊丹の『能靜草』である。「かくれ家も今は求めじいづくにも老のすみかは靜也けり」の境涯を自得して武藏野の與野で、能靜翁とよばるゝ前の莊丹に蓼太門に人となつて『猪武者』を撰し、それには成美が良治のおさな名で入集して

ゐるさうである。高柳氏、菜窓と號したが、『猪武者』は初号の雪奴か、或は梅郎の時代のころの著であらう。成美はそれより五十年の風交あつて『能靜草』の序に過ぎしむかしを振り返つて、「かゝるひさしきまじはりもめづらしからずや」と述懷してゐる。江戸氣分のある發句として江戸半太夫の襲名に「はる霞いほり看板幾代へむ」また唐崎新之助の輕飛（カルワザ）に「ほめたりや蝶のふるまひ下り藤」の類で、尚、集中にこれを拾ふ事が出來る。附錄の「若葉の晴紀行」はつね〴〵信仰する日蓮の廟所身延山へ參詣の小旅行記である。寛政十二年八月の獨吟歌仙を添へて、句數のすくない割には賑かに編輯されてゐる。菲丹は芭蕉・其角・嵐雪三家の發句撮解に、和漢學の智識を示してゐるが、學問癖のあつた人としては俳諧はすなほに又おだやかである。文化十二年二月十四日故人となつた。享年八十。成美がその年の十二月歿したのは生前の交際に思ひ合はせて一奇である。

をのゝえ草稿　　文政六年板　　中本一冊

松窓乙二の句集は門人一具・古翠の共輯で小菊本二冊が出板され、その續編は一具が輯めて『乙二七部集』の中に收めてある。前者は『蕉門句撰』と題簽を改めた後刷本もあつて廣く流布して居る。『をのゝえ草稿』はそれと異つて乙二の子の十竹及びきよ女が相圖つて、父の病中その句稿の出板を企てたものである。乙二は刻成つて後、文政六年七月九日享年六十九で歿したのであるから、流布の句集よりも乙二の心境に接するに適當のものである事が知らるゝであらう。をのゝえは松前渡の紀行の題名でもあり、また箱館に構へたその社中を斧の柄と稱したので、乙二の生涯に取つて思ひ出の多分な題名である。乙二の句は蕪村に私淑してその發句解さへ口述した程なので、天明の遺響をおびて高邁なるところがあり、近世の俳人としては最もすぐれたものである。殊に『をのゝえ草稿』には四季別の外に雜外の部

を設けて、胡沙吹く蝦夷といはれた北海道の風物を詠じた作を錄してあるので、豪宕なるが如くして哀愁の迫るものが覺える。序者は「坊が其先はいさしらず、いその上ふりにし代より我家のけんざにて」とある通り、乙二が修驗者として扶持を受けた白石の城主片倉鬼孫である。跋文の松井元輔は仙臺の儒者で、きよ女の婿として俳諧を乙二に學んだ人である。本集には『松窓乙二句集』を覆刻する豫定であつたが、『をのゝえ草稿』の所藏者龜尾英四郎氏がわざ〳〵持參して貸與されたので、氏の許諾の下にこれを收容する事に變更したのである。

萍窻集　　文化九年板　　大本一冊

伊豫松山の富裕な町人廉屋三右衛門として大年寄を勤めた人望家であるが、老後安藝の御手洗に靜閑な一庵を結んで、近世の俳壇に知られた樗堂その人の句集である。樗堂は栗田氏、初め蘭芝と号して曉臺系統である。一茶が寬政七年の正月にその二疊庵をたゝいた時は松山に住んで居て、『たびしうゐ』には「大かたは散そめて花のさかり哉　樗堂」の句を錄してあるが、『三韓人』で見ると文化十一年の「八月二十二日、曳身まかりぬと聞て筆の落るもしらずおどろく折から」その年二月二十日附の書翰が屆いた。それに「老はことの外に衰たり、活て居ると申ばかり」とあるのも致死期の豫言の如くあはれに聞える。「此衣は我身の上か鳴烏　一茶」といたんで「大事の人をなくしたれば此末つゞる心もくじけて、たゞちにしなのへ歸りぬ」と一茶は悵然その筆を投じてゐる。樗堂と一茶とは風調はもとより、性格の上にも一致點があらうとは思へないが、樗堂の爲めその行脚中に受けた恩誼を忘れ難く、かくもその死に對して力を落したのであらう。『萍窻集』には遒勁とはいへないが、線のしつかりした平明調の句々を收めて、門人鹿門・才馬の共編で刊行されたのである。奥附の「藝州御手洗山本町、肥前屋嘉兵衛藏板」とあるのは板元の意味でないが、松山で

板にならずして邊鄙な御手洗あたりに此の句集の藏板されて居たのがめづらしい。樗堂の句稿は松山に保存されて、前年碧梧桐氏の好意で借受け通讀したが、發句・連句の數冊となつて居て『萍窓集』に收めてあるのは其の一部分に過ぎない事を記憶して居る。

屠龍之技　文化九年板　大本一冊

靜嘉堂文庫の『輕擧觀句藻』は通人抱一の全生活を知る唯一の記錄である。其の句藻の拔抄が『屠龍之技』である。風凉しき玉川のほとり蒼い森の中の靜嘉堂文庫に於て、私は松井簡治氏の好意で一日その『輕擧觀句藻』をくりかへして漸く解題を取つたに過ぎないので、輕卒に『屠龍之技』との比較評をなすのは憚られるけれど、此の『屠龍之技』一卷あれば抱一殊にその發句を理解するだけなら、大部の句藻二十卷を通讀せずとも敢て不足しない事はいひ得る。けだし『屠龍之技』は抱一の自選句帖であつて、その自信を以て文壇の巨擘である鵬齋及び蜀山の推讃的序跋を附して板行したのであるから、通人としての彼といふよりは趣味生活、つまるところが江戸座の俳諧から來た洒落に生きる人としての全幅が展開されて居るのである。屠龍は抱一の別號である。雨華庵、又は鶯村、時には庭柏子、或は輕擧道人の号を用ひたが、俳諧には屠龍で通して居たので此の句集の題名としたのである。酒井家の第二男で書と俳諧とに生涯を了つた人である事はいふまでもない。『屠龍之技』はその板下が婉轉たるその筆觸の美快よき彼の自筆である事も、句帖として愛好される一理由である。本集には帝國圖書館に藏するものを底本とした。抱一の歿年は文政十一年十一月二十九日である。享年六十八。

成美家集　文化十三年板　中本二冊

成美の性格はその号の如く美しい。金持のほこらしいところ、富におごるところ、傲岸なところが少しもないから、一茶のような階級意識の強い人間にも慕はれたのである。彼が接する人々に對して分け隔てをせず、俳諧の作に選に、閑居はして後も嘸忙かしかつたらう中で、望まれれば拒まず必らず書いて遣つたと見えて同時代の俳書には彼の序や跋や、少くともその發句のかゝげられないものは無い位に流行したのであつた。もと〱江戸座で培はれたのであるし、札差といふ派手な家がらからして其反映の句作にあらはれる可きであつて、彼の家集を見ればすなほに又おだやかに、高らかな笑ひも、利いた風の洒落もないので案外に思はれる。前々からの解題に成美の事はいく度か書いたように、これは彼の性格から來てゐるのである。成美は俳諧を以て侘び、澁味、そして寂の世界であることを性格の上に躰得して居たから、考察の仕方では故意に風流を衒ふところの月並者流にも見られようが、此の家集を靜かに誦する時はさうした考へ方のあやまりである事が明瞭になるであらう。『成美家集』二卷その男謙岡・子強の校合及び門人久臧（後に由誓）の補定で成美の死ぬその年に板行されたのである。そして歿したのは文政十三年十一月十九日、享年は六十八であつた。

曾波可理　文化十四年板　中本一冊

男性的な線の力がその畫と字と一致して蕪村の粗末なものよりは、俳諧として豪宕味のあるのは巣兆の特色である。その句集『曾波可理』は生前春夏の部を自撰全筆として板下を書いたまゝであつたのを、門人國村が秋冬の部を補

記して出板したのである。鵬齋と抱一の序文中、抱一の「秋香庵巣兆はもと俳諧のともたり」といつて互ひに句作を見せ合ひ、「彼に問へば彼譏り、我にとへば我笑ふ」とて相許さず、しかも「われ書けばかれ題し、かれ書けば我讃す」といふ心境一如の下に「かれ盃を擧ればわれ餅を喰ふ」といふのも對句のため多少潤色はあるとしても、よく巣兆の性格を語るものと稱すべきである。板本を見れば解ることながら春夏と秋冬とは同筆なる如く見えて、一は巣兆であり、一は國村であり、その筆致の酷似せる事奇異なる程である。『曾波可理』の句には巣兆の畫題になるべきもの、たとへば「隣家看白」との前置があつて「夜ざらしの二布干なり天の川」の如き、一句としてはたゞ平板の叙景に過ぎないが、それを巣兆の畫題として鑑賞すれば野趣の限りなきを覺えしむるものがある。彼の句はどこまでも畫人としての彼を看却してはならない。――巣兆は文化十一年十一月十七日故人になつたが、『曾波可理』の刊行はそれより三年の後である。

枇杷園句集

文化十四年板　　中本　二冊

士朗は常に「日ゝに狂唫すること三百余句」一年を通じて「自得のものわづかに八九、余はみな棄つ」といつて長歎したが、その年ゝ「自得の八九を拾ひて」門下の卓池・椿堂・蕉雨・宇洋・松兄の共に輯めた『枇杷園句集』には、その分擔責任者が四季及び雜のそれ〲終りに署名して居る。士朗の句集には『枇杷園類題發句集』小本一冊あるが、士朗の歿後に遺弟梅間の編輯したもので、詞書は文集に讓つて省略し、文政八年の出板なので、句集としての價値・體裁ともに本書にすぐれる處がある爲め、類題發句集の方は參照したまでゝ『枇杷園句集』を採擇したのである。士朗は國學を本居宣長に學び、醫者としても德望があつたので、俳壇的には梅間の讚仰の言葉に「芭蕉翁已來の一大家」とある如く

極端の崇拜者があり、勢力はその身名古屋にあつて江戸・上方を支配する程であつたが、實際句作の技倆はその師曉臺を凌ぐには至らないので、或は虚名を賣りて貪事の甚だしきを罵る者がある。『秋の夜のあけてもしばし月夜哉』は士朗の持句で短冊などに揮毫したものを再三見るが、本書の序文に「蓋シ其賞心殊在ニリ月下ニ故ニ其ノ所詠最多シ」とあるように、しきりに月夜の美感を詠じてゐる。文化九年五月十六日、七十一才を以て歿した。士朗の人物評は前に解題中に紹介したから再びいふまい。

素檗句集　　文政六年板　　中本一册

藍碧の水を湛へた湖上は冬になつて一めんの氷となる。さうして諏訪湖畔の人々は素檗の家に寄り合つては俳諧の會をした。素檗の家は嶋屋太郎右衛門とよぶ一町構への油屋であつたと聞く。彼は髪を剃つて福莽とよび、藤森氏である。その妻は曾良の生家から嫁いたので、曾良の持ち戻つた芭蕉の色紙の殘り一枚を曰人に送つた事などが曰人の手記に見える。俳諧は曉臺に接近した關係があつて、後には士朗を信じて『五七集』にその作が散見し、士朗の格調に化せられた傾向があるので、人によつては士朗の系統に入れてゐる。素檗の發句は士朗と同じく感激性に乏しいからピンと響いて來ないうらみはあるが、その俳畫は獨自のもので、巣兆のごつ〳〵して癖のある線ではなく、ふつくり圓味を持つて野性の人物をとほけて滑稽的に描くに長じてゐる。『素檗句集』のさし繪に依ても、一筆がきで擲りあげたらしく一見粗案のようで、いかにも俳趣のある畫風であることが見られよう。士朗も畫をよくしたし、句集の序を寄せた嵐外もなか〳〵巧みであつたが、素檗ほどの特徴は持つて居ない。跋の若人は同じ諏訪の人で曾良の日記それは『雪まろげ』とは別稿で、細道行脚の日附や泊り〳〵の事を控書にしたものを持ち傳へたといふ。素檗の殘したいは文

政四年二月二十六日である。

梅室家集　天保七年板　小菊本　二冊

その家は加賀藩の研刀御用で藩から俸祿を受けてゐたが、梅室は俳諧師になるのが第一の望みで文化元年に致仕したのであつた。それより師闌更から槐庵の号を許され、二條家から左記の如き花の下の允許を得るまでの努力は決して凡人業でなかつた。同五年十月一日、享年八十四で歿したが、翌年には『梅室翁紀年錄』といふ一代の年譜が單行本で出板になつたので、その偉人視されるの甚しかつた事が推測される。

梅室素信 俳諧之達者中興之器也 宜爲花下宗匠」 御印 嘉永四辛亥四月

『梅室家集』は扉に自撰とあ*るように生前の出板で門人林曹が校正したのである。開卷「元日や鬼ひしぐ手を膝の上」とあるのでうんざりさせられるが、あたまから罵倒してかゝる前に逐一讀んで見たら、流石に一代を風靡した人物である。愛誦すべき吟のある事を領くであらう。梅室の句集には鶯宿輯の嘉永六年板「類題發句方圓集」がある。細長い横本一冊で別号方圓齋を標題にしたものである。又、柳壺編の安政四年板『增補改正梅室發句集』小本二冊がある。二書共に歿後の出板なので疑問の起つた時對校するに止めたが、その附合集は別に板行されて居る。梅室は櫻井氏、字雄、後に素信〔初は[illegible]〕と号したので、その梅室は何々庵と稱すると同じく、素信が通号なのである。大坂の天來が「七草」を以て論難し、これに對して双方の難書が板行されてゐるが、天來の方が頑迷說で梅室は寧ろ進んだ意見を持つて居たのである。「梅林茶

談』でその新らしい俳論を見られる。

鳳朗發句集　嘉永三年板　小菊本　二冊

越人の傳統云々がうそだとすれば鳳朗は誰の系統になるかといふと、道彥に師事して其の引立てで顏を賣つたのだから、關東正風の一人であると見てよい。鳳朗は熊本藩の浪人で肥後五丁の鄉の惣庄屋永井卯七兵衞の子といふ說がある。時に杜川源吾と變名して素性を包んで居たらしいが、田川氏で知られてゐる。對竹は肥後在國からの號で、江戶に來て鶯笠といひ鳳朗と改號したのである。別號は自然堂である。天保二年十一月二十八日江戶で歿した。享年八十四。鳳朗の句は俳系から來た特色はなく、時流を巧みに泳ぎ廻つたので、その多くは人情味を覗つた技巧句であるが、寫生句にはとき〲よい句にぶつかるので、『鳳朗發句集』もまた捨てられないのである。生前の句稿は上總の船中で「わだつみの神にかくされ」とあるから難船して海中に投じたものらしく、その後續集を拵へて持つて居たが、これは「難波の旅寐にて相やどりの子にうばはる」と如息の序に記してある。「鳳朗發句集」は句稿によらず、歿後西馬が主となつて逸淵及び遺弟の寉翁・詠久が編輯校合したのである。奧附にある後篇は嘉永五年八月、同じく西馬の編輯板されてゐるが、正編で充分であると思ふから採錄しなかつた。その他に異本が存在するかも知れないが見あたらないので、右の前後二編のみであるまいかと思ふ。

訂正 蒼虬翁句集　弘化四年板　中本　二冊

豪奢の生活を睨まれて江戶拂ひになつた藏前の抱儀が、京都から蒼虬を江戶に招く時、金二百兩を旅銀として屆け

たさうである。その出迎へに抱儀が料理人まで引つれて行つた事は「金澤紀逝」に出てゐる。蒼虬の全盛はその一事で窺はれよう。加賀藩に人となつたが「藩中高祿の士たり」とあるから、梅室のような研刀と同視されないが、閑吏を師として京都に出て、俳諧師となつた徑路はよく似てゐる。成田氏、南無庵の嗣号に就いて師の未亡人得終尼と不和となり、尼みづから南無庵の文臺を立てゝ爭つたが、遂に蒼虬の名聲を壓倒する事が出來なかつた。天保十三年三月十三日、年八十二で歿した。その生前『對塔菴蒼虬句集』二卷を門人に托し、梅室の序文を添へて天保十年に出板したが、本集に收めたのは歿後、門人梅通の訂誤したもので、梅室の序文はない代り、蒼虬の小傳を附して校合も屆いてゐる。その他江戸の祖鄕がその十三回忌に『蒼虬翁發句集』二冊を編輯してゐるが、嘉永七年板の小本で句數も尠い。蒼虬の發句は梅室取び鳳朗よりはやゝつぶが揃つて、「柴の戶を左右へ明て花の春」の卷頭も梅室の「鬼ひゝぐ手」の如き俗も厭味もない。しかし嚴格に批評すれば天保といふ時代はこゝにも暗い影をさして、俳諧を俗了させた一人といふ汚名は永久にそゝぎ難いのである。蒼虬は梅室・鳳朗と共に一茶時代の後期三大家といふのが通說であるが、作品の上からは蒼虬に最も好き位置を與へるのが公平にして至當の見解であるまいか。（勝峯晋風）

日本俳書大系 第十四巻 近世俳話句集 目次

筆蹟

誹諧根源集（はいかいこんげんしふ）

滑稽

素外著

誹諧根源集序

倭歌者誹諧之艷詞也從古已來以能盡人情以能感異類矣喈々花間之流鶯咯々水際之游蛙莫不可皆入吟詠焉綿聯傳布其緒無墜矣然人情率好簡惡煩去冗就約長歌數十百言雖麗而巧却不若三十一言者之簡而雅雖則簡雅俗耳接之針砭不啻於是乎連者亦一變之今所謂誹諧興矣其體居簡而不失本原其辭混俗不離風雅上之皇代宮禁之故下之衢術稗說之瑣凡古今世態近遠方俗籠罩乎僅々十七字之內有無涯餘味無窮餘趣自非老於斯道者不必知其然蓋不俟昔成玩之則足以通下情識民苦士庶人遊此藝則温柔敦厚化鄙野至文雅無用之用有補於世教猶雅頌之屬詩也素外谷翁以誹諧為一家於江戸從遊甚多嘗慨嘆世誹人不明此道之本源故有趣乎彙經著根源集五卷博弘旁及探究此道所由為門人弟子揄揚風雅抑欲知翁之精乎此藝勤乎此業則繙卷可自識也翁一日携此書來求序於余余與翁比隣而相善不敢辭乃題是言塞其責爾

寛政庚申七月甲午

北山山本信有撰 [信有] [北山]

華溪稻貞隆書 [貞] [隆]

誹諧歌は、古今和歌集に撰み載られしをはじめとして、代々の撰集の中にも其部を立給ひしにや。しかありし後は、家々の集にも稀に見え侍る也。抑俳諧てふ事は滑稽とて、こと國の史記又漢書に普く擧出せしを、八雲御抄・奥儀抄等に其名目を委しくわいだめ置給へり。又誹諧連歌は、はいかい哥の本末をつらね歌となしたるなれば子細なし。いにしへは和歌に誹諧あれば、連哥にもはいかい有て別事にあらざりしを、永正の比、山崎の隱士宗鑑、犬筑波といふ集を編して印行し、天文の比、伊勢の荒木

田守武 獨吟千句に誹諧連歌の式を定めてより、いつとなく連誹二ッと成。はいかいにては此兩士を誹書・誹式の始めとせり。其後寛永の比、京師の松永貞德はじめて誹諧宗匠の免許を蒙り、此道大に開く。又我祖とする西山宗因は里村昌琢の門人にして、浪華 天滿宮の連歌所を預かり、誹号は梅翁とて守武の古風を慕ひ、且莊子の寓言によりて格調一家をなす。これ寛文より延寶の比也。夫より貞享・元祿にうつりて誹諧の風調一統に變じ、親句すたれて疎句のみとなる。今家ゝ流派あれど槩元祿の調に寄歟。右延寶年中迄は、誹師といへども歌人・連哥師より出て其源に委しく、はいかいをよく悟して教へを傳へられしにや。元祿の人も其敎へをとれば、句作は延寶にたがへど、意は誹諧によく貫通して名譽の人多く、今の世迄賞し聞ゆる也。又元祿の後漸星うつりて、延寶以前の誹諧を一向に古風と心得、親疎の事をも辨へず、誹諧の本をも糺さで弄ぶ人も多きにや。近來阪昌周、連歌辨義を撰まれ、古きを詳らかにして今にしめさる。誹諧も初學の人に其興りをしらしめ、俳諧は滑稽なる事を悟さむとおもふに、幸ひ門人山田保大、漢史を好みて、この道に志ある童蒙のため史記滑稽傳通俗解をなし道るに予考訂して、世に俳諧の文字の出所となすものなれば先ヅ是を卷首とす。又漢土に俳諧体の詩、同聯句有。何れの誹書にも只滑稽傳ばかりを引てこれを出さず。よて未練の人、滑稽又俳諧といふは辯舌利口にして諷諫せし事を、吾朝にて和歌の一体となし、古今集に撰み入給ふと覺え來れるもあれば、是又右の後に載す。次に古今和歌集をはじめとして廿一代集中のはいかい哥を出し、夫より連歌の發り、將誹諧の起りに用ある事を、古書・古說に寄て悉く擧あらはし、誹諧根源集と題す。此集、始めにいへる如く童蒙初學の爲に編したれば、聞え安からん事をむねとす。必や識者に見せむとの書にはあらざる而已。

江戸誹談林七世

一陽井素外述

寛政九年丁巳季春

誹諧根源集目錄

誹諧根源集 卷之一

史記滑稽傳通俗解

○淳于髡は。齊國の贅壻なり。長七尺に滿たず。滑稽にして辨多し。數〻諸侯に使して。嘗て屈辱せられず。齊の威王の時。隱を喜む。（隱は隱語なり なぞ〳〵のごとし）淫樂長夜の飲を好み。自ら治めず。政を卿大夫に委ね。百官荒亂し。諸侯に並び侵されて。國の危亡。旦暮にあれども。諫るものなし。淳于髡隱を以て說て曰。國中に大なる鳥あり。王の庭に止り。三年蜚ず。又鳴かず。これを何なる鳥とおもひ給ふぞ。王の曰。（さとりての給ふ也）此鳥飛ばずんば論なし。もしも一たび飛ぶならば。天に沖らん。又鳴かずんば論なし。もしも一たび鳴ならば。人を驚さんと。こゝにおゐて。國中諸縣の令長。七十二人を召集め。其うち賞したる者一人。誅したる者一人あり。兵を奮ッて出ッ。諸侯大に驚き。侵し置たる地を。みな齊にかへす。威の行るゝ事。三十六年な

り。威王の八年に。楚國大に兵を發して。齊を攻んとす。威王淳于髡を使として趙國へつかはし。救の兵を請しむるに。金百斤。車馬十駟を齎ふ。淳于髡天を仰で大に笑ひ。冠の纓索く絶ッ。王の曰先生これを少しとおもふて笑ふか。淳于髡曰しからず。臣今者東方より來る時。道の傍にて。田に穰する者あり。一豚蹄。酒一盂を操て。祝して曰甌窶は篝に滿ち。汙邪は車に滿ち。五穀蕃熟し。穰々として家に滿んといへり。其持ッところは狹にして。欲る所は奢なり。故に笑ふといふ。こゝにおゐて。王黄金千鎰。白璧十双。車馬百駟を。益し齎ふ。淳于髡夫より。趙に往て救を請ふ。趙王これに。精兵十万。革車千乘をあたふ。楚これを聞て驚き。夜兵を引て去る。齊王大に悦び。後宮に置酒して。淳于髡を召て。酒を賜ひ。問ふて曰。先生幾を飲で。能く醉をなすぞ。對て曰。臣一斗を飲でも醉ひ。一石を飲でも亦醉べし。王の曰。先生一斗を飲で醉ならば。安ぞ能く一石を飲んや。淳于髡曰。大王の前に酒を賜はらんに。傍に執法あり。後ロには御史ありて。髡。恐懼俯伏して。飲ときは。一斗に過ずして。徑に醉べし。又。親に嚴客あり。髡。帣鞲鞠跽して侍り。餘瀝を賜ひ。しば〳〵起て飲ときは。二斗に過ずして。徑に醉べし。又朋友の交りふかきが。久しく相見ざるに。卒然として逢ひ。歡然として故をいひ。私情語りながら飲ときは。五六斗ばかりにして。徑に醉べし。又州閭の會に。男女雜りて。酒をめぐらし。手を握れども罰なく。目眙ども禁ぜられず。前に隋珥あり。後ロに遺簪あり。髡。竊にこれを樂んで。飲ときは。八斗ばかりにして。醉十ッに二ッ三ッならん。それより。日暮れ。酒闌になり。男女席を同くし。履舃交錯し。杯盤狼藉となり。堂上燭滅し。髡ひとりとゞめて。主人は客を送り出で。羅襦襟解け。微しく薌澤聞ふ。この時にあたつて。髡か心。最歡んで。能一石を飲べし。故に曰。酒極則亂。樂極則悲といへり。萬事かくのごとしと。以て諷諫す。王の曰。善とて。長夜の飲を罷め。髡を。諸侯の主客となし。宗室置酒の時は。髡を側に在ら

しむ。
○優孟は。楚の樂人なり。長八尺。辨多し。常に談笑を以て諷諫す。莊王の時。愛する馬あり。衣するに文繡を以てし席に露牀を以てし。啗はするに棗脯を以てす。此馬。肥を病て死す。群臣に命じて喪せしめ。棺槨。大夫の禮を以て。葬らんとす。左右あらそふて。不可なりとす。王。令を下して曰。馬の事を諫るものは。罪死にあたるべしとなり。優孟これを聞。殿門に入り。天を仰で大に哭す。王驚て其故を問ふ。優孟曰。馬は。王の愛し給ふ所なり。堂々たる楚國の大なるを以て。何を求てか得たまはざらん。然るを。大夫の禮を以て葬らんは。薄かるべし。願はくは。人君の禮を以て葬らん。王の曰いかん。對て曰。彫玉を棺とし。文梓を槨とし。楩楓豫章を題湊となし。甲卒を發して壙を穿ち。老弱土を負ひ。齊趙の兩國を。前に陪せしめ。韓魏の兩國を。後に翼衛せしめ。廟食に大牢を以し。萬戸の邑を奉ずべし。諸侯これを聞かば。みな大王の人を賤しめて。馬を貴び給ふ事を知るべしといふ。王の曰。寡人が過。此にとゞまれり。これをいかんせん。優孟曰。願くは。大王の爲に。六畜を葬らんには。壠竈を以て槨とし。銅歴を棺とし。齎ふるに薑棗を以し。薦るに木蘭を以し。祭るに糧稲を以し。衣するに火光を以し。これを人の腹腸に葬らんといふ。こゝにおゐて。王馬を大官に屬し。天下に聞ふる事なからしむ。又楚の相に。孫叔敖といふ人ありしが。優孟が賢なるを知て。善待したり。叔敖病て死なんとする時。其子に屬して曰われ死せば。汝かならず貧困すべし。往て優孟に逢て。孫叔敖が子なりといへ。困をまぬかるべしといふて死しぬ。數年ありて。其子窮困し。薪を負ふて世をわたりしが。優孟が家に往き。われは孫叔敖が子なり。父死する時。われに屬するには。貧困せば。君にまみへよといひたりといふ。優孟曰。汝遠く之となかれとて。其より。叔敖が衣冠をなし。掌を抵て談語し。歳餘にして。叔敖が像をなすに。王の左右。別事あたはず。ある日。王置酒する時。優孟來りすゝんで。壽をなす。

王見て大に驚き。叔敖復生したるなるべし。相となすべしといふ。優孟曰。歸りて婦と計り三日過て來るべしといひて。三日の後又來る。王の曰。婦は何といひたるぞ。優孟曰。婦が申たるには。楚の相とはなる事なかれ。孫叔敖相となり。忠を盡し。廉をなし。楚國を治め。王。覇たる事を得たれども。死しては其子。錐を立るの地もなく。貧困し。薪を負ふて世をわたる。叔敖がごとくんば。自殺するにしかずといへりとて。聲をあげて歌ふ。山居田を耕し。苦んで食を得がたく。起て吏となり。身貪鄙なれば。財を餘して。恥辱を顧ず。身死しても。家室富り。又恐くは。賕をうけ法を枉げ。姦をなして。大罪に觸れ。身死して家滅す。貪吏安ぞなるべけん。念ふに廉吏となり。法を奉じ職を守り。死を竟て。敢て非をなさざれども。廉吏も安ぞなるべけん。楚の孫叔敖。廉を持て死に至れり。まさに今。妻子薪を負ふて食ふ。なるに足らずと歌ふ。こゝにおゐて。王優孟に謝し。叔敖が子を召て。寢丘といふ所。四百戸に封じ。其祀に奉ず。後十世まで絶えず。これいふべき時を知るものなり。

○優旃は。秦國の倡の侏儒なり。能笑言をなして。大道に合へり。始皇の時。置酒ありし日。大に雨ふる。陛楯の者。みな沾寒す。優旃見てこれをあはれみ。汝等休まんと欲るかと問ふ。皆對て。休む事を得ば。幸甚ならんといふ。優旃曰。われ汝等を呼ぶとき。はやく諾といへと約し。しばらくありて。殿上壽を奉り。萬歲を呼ぶとき。優旃檻に臨んで。大に陛楯郎と呼ぶ。郎等諾と對ふ。優旃曰。汝長なりといへども。何の益あらん。幸にして雨立す。我短なりといへども。幸に休居すといふ。こゝにおゐて。始皇。陛楯の者をして。半代らしむ。又始皇。苑囿を大にして。東は函谷關に至り。西は雍陳倉に至らんと欲す。優旃曰善し。多く禽獸を。其うちに縱し。東方より。寇の來らんとき。麋鹿をしてふせがしめんに。不足はあらじといふ。始皇故を以て輟止す。又二世皇帝立て後。城に漆んと欲す。優旃曰善し。城に漆する事。百姓は。其費を愁ふべけれども。佳なる哉。

漆城蕩々として。冠來るとも。上る事あたはじ。顧に。姿うつりて。陰室はなじかたからんといふ。二世笑ふて止む。

○漢の武帝の時。幸せらるゝ倡に。郭舍人といふ者あり。言を發し辭を陳る事。大道に合ずといへども。能人主を和說せしむ。帝少時。東武といふ所の侯母。帝を養ふ。帝壯年に至りて。これを大乳母と号す。率一月に再朝す。或は帛を賜ひ。或は食を賜ふ。乳母上書して。誰某が有する公田。願くは假倩せんといふ。帝の曰。乳母これを。得たくおもふかとて賜る。乳母がいふ所。聽されずといふ事なし。又詔して。車に乘て。馳道の中を。行事をゆるさる。此時にあたつて。公卿大臣。皆乳母を敬ひ重んず。乳母が家の。子孫奴從者に至まで。長安のうちにて。横暴なり。道に當て。人の車馬を掣頓し。人の衣服を乞ひ奪ふ。此事。中に聞すれども。法に致に忍びず。よつて有司奏して。乳母が家室を徙して。邊に居らしめんとす。帝これを可す。乳母入て帝の前に至り。面見して辭せんとおもひ。先郭舍人に逢て。泣を下す。舍人曰。すなはち入て見へ。辭して去る時。疾く歩み。數還り顧よと敎ゆ。乳母。其ことばのごとく。謝し去る時。疾く歩み。數還顧る。郭舍人罵て曰。老女子何ぞはやく行ざる。陛下今すでに壯年なり。尙汝が乳を須て活給はんや。しかるに。尙何ぞかへり見るぞといふ。こゝにおゐて。帝憐み悲むの心おこり。詔を下し。乳母を徙す事をとゞめ。譖する者を罰謫す。

○武帝の時。齊人に。東方朔といふ者あり。古の傳書を好み。經術を愛するを以て。博く外家の語を。觀る所多し。東方朔。はじめ長安に入り。公車に至りて。上書せしに。凡て。奏牘三千なり。公車の令兩人。其書を擧るに。數多く。重く。漸に勝たり。帝これを。上方より讀み。止る時は。その所に乙し。二ケ月にして讀盡す。詔して。拜して郎となす。常に側に侍す。しば〳〵前に至て談語するに。帝よろこばざる事なし。前に食を賜へば。飯巳で。餘肉をみな懷にして去る。衣こと〳〵く汚る。

數〻縑帛を賜へば。擔揭して去る。徒に。賜ふ所の錢帛を用て。少婦を。長安中の好女に取る。おほむね婦をとる事。一歲ばかりにして棄去り。更に婦をとる。賜ふところの錢財。みな女子に索す。帝の左右の諸郎。半。狂人と呼ぶ。帝これを聞て曰。方朔をして。事にあらしめば。彼が行ひをする者なからん。若等安ぞ及ばんやといふ。東方朔。其子を任じて郎となし。又侍謁者となす。あるとき謂て曰。人みな。先生を狂人なりとすと告。朔曰。古の人。乃世を深山のうちに避く。朔がごときは。所謂。世を朝廷の間に避るものなりといふ。時に坐席のうち。酒酣なり。地に據て歌て曰。俗に陸沈して。世を金馬門に避く。宮殿の中。以て世を避け身を全すべし。何ぞ必しも深山の中。蒿廬の下のみならんやといふ。時に。宮下に會聚する。博士諸先生。論議して與に難じて曰。蘇秦張儀は。一たび万乘の主に當ッて。卿相の位を都べ。澤。後世に及ぶ。今子は。先王の術を修め。聖人の義を慕ひ。詩書百家の言を。諷誦する事。勝て數ふべからず。竹帛に著し。自以て海内双なしとおもへり。すなはち博聞辯智なりと謂ッべし。しかも力を悉し。忠を盡し。聖帝に事へて。數十年を積み。官は郎に過ず。位は執戟に過ず。意に。なお遺行あるか。其故何ぞや。朔曰。これ固に子が能く備にする所にあらず。彼も一時なり。此も一時なり。豈同じかるべけんや。張儀蘇秦か時は。周室大に壞れ。諸侯朝せず。政を力め。權をあらそひ。相禽するに兵を以し。幷で十二國となり。いまだ雌雄あらず。士を得るものは彊く。士を失ふものは亡ぶ。故に。說聽かれ。行通じて。尊位に至り。澤後世に及び。子孫長く榮ふ。今はしかるにあらず。聖帝上に在て。德天下に流れ。諸侯賓服して。威四夷にふるひ。四海の外を連て。席となす事。盂を覆すよりも安く。天下を平均に合せて。一家となし。動發事を擧る事。なを掌のうちに運がごとし。賢と不肖と。何ぞ異ならん。今天下の大なると。士民の衆を以て。精を竭し。說を馳せ。ならび進て。輻湊する者。勝て數ふべからず。力を悉し義

を慕ひ。衣食に困しみ。あるひは門戸を失ふ。張儀蘇秦をして。今の世に生ぜしめば。嘗て掌故をだも。得る事能はじ。安ぞ敢て。常侍侍郎を望んや。傳に曰。天下害菑なければ。聖人ありといふとも。其才を施すところなからん。上下和同せば。賢者ありといふとも。功を立るところなからんといへり。故に。時異なれば。事異なり。然りとはいへども。安ぞ務て身を修めざるべけんや。詩に曰。鐘を宮に鼓す。聲外に聞ふ。鶴九皐に鳴く。聲天に聞ふと。苟も能く身を修めば。何ぞ榮へざるを患ん。太公は。躬。仁義を行ふ事。七十二年。文王に逢て。其說を。行ふ事を得たり。しかふして。齊に封ぜられ。七百歳まで絕えず。これ士の。日夜孜々として。學を修め。道を行ひ。敢て止まざる所以なり。今の處士。時に用ひられずといふとも。崛然として獨り立。塊然として獨り居り。上。許由を觀。下。接輿を察。策は。范蠡に同じく。忠は。子胥に合し。天下和平にして。義とともに相扶け。偶寡く。待少き。固に常あるなり。子何ぞ余を疑んやといふ。諸先生默然として。應ふることなし。又。建章宮の後閣。重櫟の中に。物ありて出ヅ。其狀麋に似たり。以て聞す。帝往てこれを視給ひ。左右群臣のうち。事を習ひ。經術に通ずる者に。問ひ給ふに。知るものなし。朔を召て視せ給ふ。朔曰。臣これを知れり。願くは。美酒粱飯を賜ふて。臣を飧し給へ。言さんといふ。帝可なりと。飧し給ふ。又曰。誰某が有する所の。公田。魚池。蒲葦。數頃を。臣に賜へ。乃言さんといふ。帝ゆるし給ふ。こゝにおゐて。肯て言て曰。所謂騶牙なり。其齒。前後一のごくひとしくて。牙なし。故に騶牙といふなり。遠方の國來りて。君の義に歸すべきとて。先。騶牙のあらはるゝなりと言す。其後。一歳ばかりにして。果して。匈奴混邪王。十萬の衆を將て。來り。漢に降る。乃。朔に錢財を賜ふ事。甚多し。朔老に至り。且に死なんとする時。諫て曰。詩曰。營々たる靑蠅。樊に止る。愷悌の君子。讒言を信ずるとなし。讒言極り罔し。交四國を亂といへり。願くは。陛下巧佞を遠け。讒言を退け給へといふ。いく程なく朔死しぬ。傳に曰。鳥の將に死んとするとき。其鳴ど哀し。人の將に死んとす

るとき。其いふとよしとは。此をいふなり。

○武帝の時。大將軍衛青は。衛后の兄なり。封ぜられて。長平侯となり。匈奴を撃ち。吾水の上に至て還る。首を斬り。虜を捕て功あり。詔ありて。金千斤を賜る。こゝに齊人。東郭先生といふもの。方士たるを以て。待詔してありけるが。衛將軍が車を遮り。拜謁して願くは事を白んといふ。將軍車を止む。先生言て曰。今。王夫人あらたに。上に幸せらるゝ事を得たり。しかれども家貧し。今將軍。金千斤を得給ふ。其半を以て。王夫人の親に賜へ。帝これを聞たまはゞ。必喜給はん。是所謂奇策便計なりといふ。將軍謝して曰。先生幸に便計を告る。教を請べしとて。金五百斤を以て。王夫人が親の壽をなす。夫人。此事を以て聞す。帝の曰。此事をなさんと。大將軍は知らじ。何くより。此計策を得たると問はしむるに。待詔者。東郭先生より。受たると對ふ。すなはち先生を召し。拜して郡都尉となす。先生。久しく待詔したるにより。貧困飢寒して。衣敝れ。履完からず。雪中に行に。履上ミありて下モなし。足盡く地を踐めり。道中の人これを笑ふ。先生應て曰。履はいて雪中に行に。誰か能く人をして。これを視せしめむ。其上ミは履にして。其下モのところ。人足に似たりとせんといふ。拜せられて。二千石たるに及んで。青緺を佩て宮門を出往て主人に謝す。故。官を同じくして。待詔する者と。都門の外に。祖道する頃に。道路に榮華し。名を當世に立つ。所謂褐を着て。寶を懷にするものなり。其貧困なる時は。人省視るとなし。其貴に至ては。爭ふてこれに附。諺に曰。馬を相するものは。瘦たるに失し。士を相するものは。貧に失すと。それ此をいふか。

○むかし。齊王。淳于髠を使として。楚に。鵠を獻ぜしむ。邑門を出。道にて其鵠を飛し。徒に。空籠を掲て。楚に至り。王に見て曰。齊王臣を以て。鵠を獻ず。水上を過るとき。鵠の渴せるに忍びず。出して水を飲ましむる時。我を去て飛で亡たり。吾腹を刺し。頭を絞りて。死んと欲れども。恐くは。人。吾王を議して。鳥獸の故を以て。士に。自殺せしむるといはんか。鵠は。毛物にして。類するもの多ければ。買て代んと欲れども。是不

信にして。吾王を欺なり。他國へ奔亡せんと欲れども。吾兩王の。使の通ぜざるを痛む。故に。來りて過に服し。頭を叩て。罪を大王に受るなりといふ。楚王の曰。善し。齊王に。信士あると。かくのごとき哉とて。厚く賜す。財。鵠の在し時より倍せり。

○武帝の時。北海の太守を徴す。文學の卒史。王先生といふもの。太守に請ふて。倶に行かば。君に益あらんといふ。皆曰。王先生は。酒を嗜み。多言にして實少し。恐くは。與に倶にすべからずといふ。太守曰。先生意に行んと欲す。逆ふべからずとて。遂に與に倶に行き。詔を宮府の門に待ツ。先生酒を飲み。日に醉て。太守を視ず。太守入て。拜せんとする時。見て曰。天子君に問給ふに。何を以て。北海を治め。盜賊なからしむとのたまはゞ。何と對へ給ふぞといふ。太守曰。賢材を擇み。各これを任ずるに能を以し。異等を賞し。不肖を罰すといはん。先生曰。かくのごときの對は。自譽。自功に伐るといふ物にして。不可なり。願くは。これ臣が力にあらず。悉陛下の神靈。威武の變化する所なりと。對給へといふ。太守諾す。召て殿下に至る時。詔あり。問て曰。何を以て。北海を治め。盜賊をして。起らざらしむるや。太守對て言す。臣が力にあらず。盡陛下の神靈。威武の變化するところなりといふ。帝大に笑ッて。於呼。いづくにか。長者の語を得て。これを稱するや。誰にこれを受たるぞや。對て曰。文學の卒史に受たり。帝の曰。今いづくにか在る。對て曰。宮府の門外にありと。すなはち召て。王先生を水衡の丞となし。太守を水衡の都尉となす。

○魏の文侯の時。西門豹といふ人。鄴の令となり。鄴に往て。長老を會し。民の疾苦する所を問ふ。長老曰。河伯の爲に。婦を娶る事に苦しみ。故を以て貧といふ。豹。其故を問ふ。對曰。鄴の三老廷椽。常歳。百姓を賦斂し。數百万の錢を收取り。其うち。二三十万を以。河伯のために婦を娶り。其餘れる錢を。祝巫と分て持歸れり。娶る時に當ッて。祝巫。人家の女の。好ものを視て。これ河伯の婦たるべしとて。娉し取て洗沐せしめ。新に。繒

綺縠衣を治し。閒居齋戒せしめ。齋宮を河上に治し。緹絳帷を張り。女を其うちに居き。牛酒飯食を具へ。行こと十餘日。ともに粉飾し。女を嫁せしむる床席のごとくし。女を其上に居らしめ。河中に浮ぶ。始は浮んでゆき。數十里にして沒す。こゝにおゐて。人家の好女あるもの。大巫祝が。河伯のために取らんことを恐れて。遠く逃れかくる。故を以人益少し。貧困の從來る所なり。民人俗語に。河伯のために。婦を娶らざれば。水來りて漂沒し。人民を。溺らすと云傳ふといふ。豹曰。河伯のために婦を娶り。三老。巫祝。父老。みな女を。河上に送る時。來り告よ。吾も亦往て送らんといふ。みな諾す。しかふして其時に至り。豹往て會す。其巫といへるは。老女子なり。年七十。弟子の女。千人ばかりを從ふ。みな繒の單衣を着て。大巫の後に立ッ。豹曰。河伯の婦をつれ來れ。其好醜を見んといふ。すなはち女を將て。帷中より出來る。豹見て。三老。巫祝。父老を顧て曰。此女好からず。大巫嫗を煩はす。爲に入て。河伯に報ぜよ。更に好を得て。後日送らんといへとて。卒吏をして。大巫嫗を抱て。河中へ投ぜしめ。頃して曰。巫嫗何ゆへに久しきぞや。弟子趣とて。一人を河中へ投じ。頃ありて。弟子何とて久しきぞやとて。復一人を投じ。凡て三弟子を投じて。曰。巫嫗弟子ともに。女子なるが故に。白ことのあたはざるなるべし。三老を煩はす。爲に入て。これを白せとて。三老を河中に投じ。豹すなはち禮を正して。河に嚮て立て。待こと久し。傍に觀るもの。皆恐れ驚く。豹顧て曰。巫嫗三老還り來らず。奈何せん。廷掾と豪長者と。一人ヅヽ入て。白せといふ。みな頭を叩て。額を破り。血流れ。色。死灰のごとし。豹諾して。又待ッこと。須臾なり。須臾ありて。廷掾起矣。河伯が。客をとゞめ置事の久しきを狀せよ。若等。皆能去て歸れといふ。吏民大に驚き恐れ。是より後。河伯の爲に。婦を娶事をいふ者なし。

史記滑稽傳通俗解終

杜子美詩集　卷之十八

劉辰翁會孟評點

戲作俳諧體遣悶二首

異俗吁可怪、斯人難並居。家家養烏鬼、（養字去聲最怪。無用養字代供字之理。且烏蠻鬼稱烏鬼、亦可笑乎。鸕鷀自是。不必謂黃魚為所捕。自不相悖）頓頓食黃魚。舊識難為態、新知已暗疎。（新知漸熟漸厭。未能遂合其形容。世態深得心體識事之餘。倍覺語味）治生且耕鑿、只有不關渠。（賴此事不關渠耳）

西歷青羌坂、南留白帝城。於菟侵客恨、粔籹作人情。（蒸裹如千室。倘有小意。謂送者縱橫似家家如此。至粔籹作人情則俚矣）瓦卜傳神語、畬田費火聲。是非何處定、高枕笑浮生。（語日可第無上干涉）

公自注頃歲自秦涉隴從同谷縣出遊蜀留滯於巫山也

事文類聚

上元紀吳下節物俳諧體三十二韻

范至能

斗野豐年婁。吳臺樂事拜。酒壚先疊鼓、（歲後即鑪亭先擊鼓不已。以迎節意）燈市蚤投瓊。（臘月即有燈市。珍奇者數人醵買之。相與呼盧彩擲。勝者得燈）價喜膏油賤、祥占雨雪晴。篔簹仙子洞。（坊巷以連枝竹結成洞門。多所數千）菡萏化人城。（蓮花燈最多）炬燄飛龍見。（舟人接竹為檣之表。置一燈。望之如星）橋星訝鵲成。（橋燈）小家厖犬睹。（犬燈）高閣鹿嬰撐。（鹿燈）屏飛輝雲母。（瑠璃）屏風雁垂晃。水精（瑠璃）簾萬鵝花眼密。（萬眼燈以碎羅紅白相間砌成。工夫妙天下。多至萬眼）千隙玉虹明。（琉璃毬燈每一隙映成一花。亦妙天下）簾筒丹房挂。（梔子燈）葡萄萬緌蒔。（葡萄燈）方縑綰史冊。（生絹糊大方燈。圖畫史冊故事。村人喜看）圓魄綴門衞。（月燈）擲燭騰空穩。（小毬燈時擲空中）推毬衮地輕。（大毬燈）映光魚隱見。（瑠璃壺瓶貯水養魚。以燈映之）轉影騎縱橫。（馬騎燈）轉鬪行歌過。（燈）顛狂社舞呈。（民間皆鼓樂。謂之社火。不可悉記。大抵以滑稽取笑）村田簑笠野。

（村田樂）街市管弦清、（街市細樂）里巷分題句、（毎里門作長燈、題好句其上）官曹別扁名、（官府名額多以絹或琉璃映燈）旱船遥似浮、（夾道陸行爲競渡之樂、謂之戔旱船）水傀近如生、（水戲照心燈）鉗赭裹牢戸、（獄燈）嘲噎繪樂棚、（山棚多畫一時可嘲詼之人）堵觀瑤席隘、喝道綺叢争、禁鑰通三鼓、歸鞭任五更、桑蚕春繭勸、（春蚕自臘月即入食次所以爲蚕事之兆）花蝶夜蛾迎、（太白蛾花無貴賤悉載之亦以卯春句也）鬼子描丹筆、（紅畫鴨子加饒遺）鸞毛剪雪英、（剪鸞毛爲雪花與夜蛾並載、）寶糖珍粔籹、（鎚拍吳中謂之寶糖鎚特爲脆美）烏膩美飴餳、（烏膩糖即白糖俗言能去烏膩）撚粉團欒意、（樹子）熬稃膈膊聲、（炒糯米以卜俗名孛婁北人号糯米花）筳篿巫志怪、香火婢輸誠、（俗謂正月百草靈故帚葦針箕之屬皆卜焉多婢子之賽爲之）帚卜掩裙驗、（敝帚繫裙以卜名掃帚姑）箕詩落筆驚、（即古之紫姑今謂之大仙俗名箕姑、）微如針属尾、（以針卜何其尾相属爲兆俗名針姑）賤及葦分莖、（葦莖分合爲卜名葦姑）末俗難訶止、佳辰且放行、此時紛僕馬、有客靜柴荊、幸甚歸長鋏、居然照短檠、生涯唯病骨、節物尚郷情、掎摭成俳體、咨詢逮里甿、誰修吳地志、聊以助譏評

誹諧根源集　巻之二

誹諧歌之部

古今和歌集　巻第十九　注は季吟八代集抄又一説を記す

題しらす　よみ人しらす

梅花見にこそきつれ鶯のひとく／＼といとひしもをる

素性法師

山吹の花色ころもぬしや誰とへとこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはか郭公しての田長を朝な／＼よふ

七月七日たなはたの心をよみける　藤原兼輔　朝臣イニ

いつしかとまたく心をはきにあけて天の河原をけふや渡らん　待に蹉く心を急て也　いそきありく体也

題しらす　凡河内みつね

むつこともまた盡なくに明ぬめりいつらは秋の長してふよは

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時　ことく／＼し也

よみ人しらす

秋くれは野邊にたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき　てにイニ

秋霧のはれてくもれはをみなへし花のすかたそ見えかくれする

花と見てをらんとすれは女郎花うたゝあるさまのなに社有けれ　うたての意也

寛平の御時きさいの宮の哥合の歌

在原むねやな

床風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきり／＼す鳴

あす春立んとしける日隣の家のかたより風の雪な
吹こしけるを見て其隣へよみて遣しける

清原深養父

冬なから春の隣の近けれは中垣よりそ花は散ける

題しらす

いそのかみふりにし戀の神さひてたゝるに我はいそねかねつる
枕より跡より戀のせめくれはせんかたなみそとこなかになる（哉イニ）
戀しきかかた（形）ちかたこそありときけたてれなれともなき心地する
ありぬやと心見かてらあひ見ねはたはむれにくきまてそ戀しき（あはて有ぬへきやと也）
みゝなしの山のくちなしえてし哉おもひの色の下染にせむ

きのめのと

足曳の山田のそほつおのれさへ我をほしてふうれはしきこと（といふイニ）（水ニしかけしかゝし也　我にあはまほし也）

きのありとも

ふしのねのならぬおもひにもえはもえ神たにけたぬむなし煙を

小野小町

あひみまくほしは數なく有なから人につきなみまとひ社すれ
人にあはむつきのなきにはおもひをきて胸はしり火に心やけをり（便りなき也）

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

藤原興風

春霞たなひく野邊の若菜にも成見てし哉人もつむやと

題しらす

よみ人しらす

おもへともなをうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉のつま戀に飛たつ雉のほろゝとそ鳴

きのよしひと

秋の野に妻なき鹿の年を經てなそ我戀のかひよとそなく

みつね

蟬のはのひとへにうすき夏衣なれはよりなむ物にやはあらぬ

たゝみね

かくれぬの下よりおふるねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ（そたてしイニ）

よみ人しらす

ことならは思はすとやはいひはてぬなそ世の中の玉たすきなる（かけたる事也）
おもふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな
思へともおもはすとのみいふなれはいなやおもはしおもふかひなし
我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして（あれこれの手をかくるものといふ意也）

一本　ふかやふ

われを思ふ人をおもはぬ報ひにや我おもふ人の我をおもはぬ

一本　よみ人しらす

おもひけむ人をそともに思はましまさしやむくひなかりけりやは
出てゆかん人をとゝめんよしなきに隣のかたにはなもひぬ哉（出行するにはなひれはいむ事也）
くれなゐに染し心も頼まれす人をおくにはうつるてふなり（紅の色は灰汁には頓てうつろひかへるもの也　倦を灰汁にいひなせり）
いとはるゝ我身は春の駒なれや野飼かてらにはなち捨つる（たるイニ）
鶯のこそのやとりのふるすとや我には人のつれなかるらん

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜を我獨ねる

平中興

逢ことの今ははつかに成ぬれは夜ふかからてはつきなかりけり

ねイニ

左のおほいまうちきみ

もろこしのよし野の山にこもるともおくれんと思ふわれならなくに

よしのは深き山也 其山かもろこしにありとも也

なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

伊勢

浪花なるなからの橋もつくるなり今は我身を何にたとへむ

なからの橋は古き事にいひたるに新らしく造ると也 又一說盡る也と

よみし人しらす

まめなれとなにそはよけくかるかやの亂れてあれとあしけくもなし

とはイニ

人のまことかましくみゆれと底の心さもなきは何のよき事そと也

おきかせ

何かその名のたつ事の惜からんしりてまとふは我ひとりかは

いとこなりける男によそへて人のいひければ

くそ

よそなから我身にいとのよるといへはたゞいつはりにすくはかり也

題しらす

さぬき

ねきことをさのみきゝけむ社こそはてはなけきの杜と成らめ

大輔

なけきこる山とし高く成ぬれはつら杖のみそまつつかれける

よみ人しらす

なけきをはこりのみつみて足曳の山のかひなく成ぬへら也

人こふる事をおも荷とになひもてあふこなきこそわひしかりけれ

相 逢期にそへて也

よひのまに出て入ぬるみか月のわれて物思ふころにもあるかな

そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

世中のうきたひことに身をなけは深き谷こそ淺くなりなめ

在原もとかた

世中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうらみらるれは

おほく也

よみ人しらす

なにをして身の徒に老ぬらん年のおもはむ事そやさしき

おきかせ

身はすてつ心をたにもはふらさしつゐにはいかゝなるとしるへく

放ちやらし也

千さと

白雲のともに我身はふりぬれと心はきえぬものにそ有ける

題しらす

よみ人しらす

梅花さきての後の身なれはやすきものとのみ人のいふらん

法皇にしかはにおはしましたりける日猿山のかひに叫ふといふ事を題にてよませ給ふける

みつね

わひしらにましらなゝきそ足曳の山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらす

よみ人しらす

世をいとひこのもと毎に立よりてうつふし染のあさのきぬなり

五倍子染也つるはみ色とも云僧尼の服也

後拾遺和歌集 卷第二十

題しらす

笛の音の春おもしろく聞ゆるは花のちりたりと吹は也けり

花ちりたりとイニ

橘季通みちのくにゝくたりて武隈の松を歌によみ侍

りけるにふた木の松を人とはゝみきと答へんなと
よみて侍りけるをつてにきゝてよみ侍りける
僧正深覺
たけくまの松はふた木をみきといふはよくよめるにはあらぬ成へし
はゝイニ
よくかそへよむには也
題しらす
源　道濟
さかさらは櫻を人のをらましや櫻のあたはさくらなりけり
藤原實方朝臣
また散ぬ花もや有と尋みんあなかましはし風に散すな
隣より三月三日に人の桃花をこひたるに
大江嘉言
桃のはな宿にたてれはあるしさへすける物とや人のみるらん
好色を桃の味にそへて也
三條太政大臣のもとに侍ける人のむすめを忍ひて
かたらひ侍けり女の親はらたちてむすめをいとあ
さましくつみけるなといひ侍けるに三月三日かの
北の方の三日のよのもちゐくへとて出しけるによ
める
藤原實方朝臣
みかのよのもちゐはくはしわつらはしきけはよとのにはゝこつむ也
新枕三日めに餅祝ふ事也
夜殿に母の嫉たつむ事を添てよめる也
荻野
みな月夜をよみ侍りける
和泉式部
思ふことみなつきねとて麻の葉をきりにきりてもはらへつる哉
ひろくひて侍ける人今は香もうせぬらんと思ひて
人のもとにまかりたりけるに名殘の侍けるにや七
月七日に遣しける
皇太后宮陸奥
君かかす夜のころもそたなはたはかへしやしつるひろくさしょて
小一條院入道前太政大臣のかつらなる所にて歌よ
ませ給ひけるに紅葉をよみ侍りける
堀川右大臣
もみち葉は錦にみゆと聞しかとめもあやにこそけふは成ぬれ
紅葉の散果たるに風のいたく吹侍りけれは
増基法師
落積る庭をたにとてみるものをうたて嵐のはきにはく哉
人のすみ奉らんいかゝといひたりけれはよめる
よみ人しらす
心さし大原山のすみならは思ひをそへておこすはかりそ
題しらす
天台座主源心
雲井にていかて扇とおもひしにてかくはかりになりにけるかな
手をかくるほとに也物をかくに添て也
法師の扇を落して侍りけるをかへすとて
和泉式部
はかなくもわすられにける扇哉おちたりけりと人もこそ見れ
題しらす
さなくてもねられぬものをいとゝしくつきおとろかす鐘のこゑ哉
七月はかり月のあかゝりける夜女のもとに遣しけ
る
少將藤原義孝
忘れても有へきものをこの比の月夜よいたく人なすかせそ
好心を起させる心たるへし
三條院御時ゥへのとのゐすとて近く侍りける人〳〵
枕を落してまかり出けれは書付て上に遣しける
小大君
道芝やおとろのかみにならされてうつれるかこそくさ枕なれ
荊
棘
人の草あはせしけるに朝顔かゝみ草なとあはせけ

ろにかゝみくさかちけれは　よみ人しらす

まけかたのはつかしけなる朝顔を鏡草にも見せてける哉

入道攝政かれ〳〵にてさすかに通ひ侍ける比帳の柱に小弓の矢を結ひ付たりけるを外にてとりにおこせて侍りけれは遣すとてよめる　大納言道綱母

おもひ出つることゝあらしと見えつれとやといふにこそ驚かれぬる（人を驚かするといふ呼かくる事をかにそへてよめり）

人の長門へ今なむくたるといひ侍りけれはよめる　能因法師

し涙の立なからたに長門なるとよらの里のとよられよかし（立よられよ成へし）

めのとせんとてまうてきたりける女のちのほそく侍りけれはよみ侍りける　大江匡衡朝臣

はかなくも思ひけるかなちもなくてはかせの家のめのとせんとは（智にそへて也　匡衡は江家とて儒業の家也）

返し　赤染衛門

さもあらはあれやまと心しかしこくはほそちにつけてあらす斗そ（才たにかしこくは也）

千載和歌集　巻第十八

花のもとによりふしてよみ侍りける　道命法師

あやしくも花のあたりにふせる哉ならはとかむる人やあるとて（あやふみなから也）

卯の花をよめる　源俊頼朝臣

うのはなよいてと〳〵しかけ鳥の涙もさこそは岩をこえしか（所未考）

五月五日菖蒲をよめる　道因法師

けふかくる袂にねさせあやめ草うきは我身にありとしらすや（泥の事也憂に添たり）

ともしをよめる　橘俊綱朝臣

ともしして箱根の山に明にけりふたよりみよりあふとせしまに（鹿をよせて射るか度かさなるをいくよりといふ也）

みな月晦日かたはたなりの啼を聞てよめる　江侍從

夏のうちはたかくれてもあらすしてなりたちにける虫の聲哉

題しらす　輔仁親王

怺くれは秋のけしきも見えけるを時ならぬ身と何にいふらん

萩の露の玉と見ゆるとて折けれとも露もなかりけ（ナシイ）れはよめる　藤原爲頼朝臣

朝露を日たけて見れは跡もなし萩の上葉に物やとはまし（うらイニ）

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる　花園左大臣家小大進

つはな生し小野の芝生の朝露をぬき散しける玉かとそ見る（家持集につけなぬくとよめり）

野の花を見て道にとゝまるといへる心をよめる　僧都範玄

落にきと語らはかたれ女郎花こよひは花のかけにやとらん

九月十三夜によめる　賀茂まさひら

暮の秋ことにさやけき月影は十夜にあまりてみよと也けり

隔我間他戀といへる心をよめる　顯昭法師

板ひさしさすやかやゝの時雨こそ音し音せぬかたはわくなれ（あるイニ）

堀川院の御時百首歌のうちに戀歌とてよめる

笛竹のあな淺ましの世中やありしやふしのかきり成らん　ありし夜寐たるか君とふす夢のかきり成らんと也
藤原基俊

旅戀　これも同し百首の中也
したひくる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕とゝろきは
源俊頼朝臣

百首歌奉りけるに戀の歌とてよめる
逢事のなけきの積るくるしさをおへかし人のこりはつるまて　木をこりこつみにおへの心也
待賢門院堀川

六波羅密寺の講の導師にて高坐に登るほとに聽聞の女房足をつみ侍りけれはよめる　良喜法師
人の足をつむにてしりぬ我方へふみおこせよと思ふなるへし

山寺にこもりて侍りける時心ある文を女のしはしは遣はし侍りけれはよみて遣しける
空人法師
おそろしやきその丸木橋ふみ見るたひに落ぬへき哉

賀茂社に籠りて侍りけるに政平のつねにまうてきて歌よみ笛吹なとして遊ひけるかたはらなる局にこもりたる人をもしりてそなたへもまかりなとしけるか其人出て後久しくまうてこさりけれはつかはしける
心覺法師
笛竹のこちくと何におもひけん隣に音はせしにそ有ける　胡竹を此方來に添て　文選馬融か序に隣人有吹笛者發聲寥亮ト云云

あつまのかたにまかりけるに八橋にてよめる
道因法師
八橋の渡にけふもとまる哉爰に住へきみかはおもへと　身かは　三河に添て

女をかたらひ侍けるをいかにも有ましき事也思ひたえねといひ侍けれはよめる
安性法師
つらしとて扨はよも我山烏かしらは白くなる世なりとも　烏頭白は史記燕丹か古事也

阿彌陀の小兕の文字を歌のかみに置て十首讀侍りけるに奥に書付侍ける
源俊頼朝臣
かみになける文字はまことの文字なれは歌も闇路を助さらめや　上ニ置る文字は黃泉也

山寺にまうてたりける時貝吹けるを聞てよめる
赤染衛門
けふも亦午の貝こそ吹つなれひつしのあゆみ近つきぬらん　午の刻にふく貝也

題しらす
空也上人
極樂ははるけき程と聞しかとつとめていたる所なりけり　夙に勤めを添たり　拾遺ニ仙慶法師詠と有

新千載和歌集　俗第十八

亭子院にて梅花をよみ侍ける
大中臣頼基朝臣
ちるまてはきつゝたに見む春雨に我なぬらすな梅の花笠

物へまかりける道にて梅花の咲たりけるを折とてよめる
良濯法師
梅かえに苔の衣の袖ふれて花の名をさへ折我身かな

花の歌の中に
正三位知家
たちぬはぬ霞の衣春きては花の錦をなりかさねつる

西の國のかたへ修行にまかりけるに美豆野といふ所にてともなひ馴たる同行の侍けるかしたしきも

のゝ例ならぬ事侍るとてとゝまりけれはよめる
西行法師
山城のみつのみくさにつなかれて駒ものとけにみゆる旅かな
題しらす
津守國冬
苗代に心のたねを蒔そへてなくや蛙のやまとことの葉
百首歌奉りし時夏秡
入道前太政大臣
年なみのなかはをこよひこゆる輪に菅貫かけて七十はへぬ
題しらす
山里にたゝかりそめの薄かきふちする人もなき我身哉
九月盡のこゝろを
基　俊
露ふかきお花か袖をひかへつゝなく〳〵秋をとゝめつる哉
亭子院御時御前にめしてまゆみの紅葉に簑むしの
かゝりたるを題にて歌つかうまつれと仰ことあり
けれはよめる
頼基朝臣
もみちはの枝にかゝれるみの虫はしくれふるともぬれしとや思ふ
心さしもなくてたゝにやみにける男のもとにつか
はしける
よみ人しらす
いかなれはしめちか原の冬草のさしもなくては枯はてにけむ
題しらす
小　侍　從
しのひこしん紅いまゝならてくやしや何のあくにあひけむ
六帖の題にてよみ侍ける歌の中に　前大納言爲家
我ことくおくのこほりのえひすかけとにもかくにも引ちかへつゝ
後法性寺入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時

の百首歌に述懷の心を
源　仲綱
ひき〳〵に人は高瀨ののほり舟つなてこさるゝ身をいかにせん
車を
俊頼朝臣
なけきつむ力車の輪をよはみ立めくるへき心地こそせね
康貧王母とり子して久しくまうてこさりけれはい
ひ遣しける
伊勢大輔
たらちねの親をは捨てこはいかに人の子をのみおもふ我子そ
返し
康貧王母
人の子の親に成てそ我おやの思ひはいとゝおもひしるらめ
題しらす
賀茂遠久
やはらくる光も塵にましるらん朝清めすな神の宮つこ
かひの國へくたるまかり申侍りけるに
忠　岑
君かため命かひにそ我はゆく寉のこほりに千世はうる也

新拾遺和歌集　卷第二十

山鶯を
中務卿宗尊親王
さひしくて人くともなき山里にいつはりしける鶯のこゑ
題しらす
大江千里
玉柳みとりの枝のよはけれは鶯とむるちからたになし
俊惠法師
よしさらはしるへにもせんけふはかり花もてむかへ春の山風
忠　見
秋とにかりくるいねはつみつれと老にける身そ置所なき

雪のふりける朝院の御粥おろしたまはせて歌よめと仰られければ　　藤原仲文

しら雪のふれるあしたのしら粥はいとよくにたる物にぞ有ける

めのとの弓のふくろをとりいてゝくたものをとり入ておこせたりければ　　藤原實方朝臣

なしはりて弓の袋としるしや思はぬ山のものをいるらん

法性寺入道前關白家に男女房物語して侍ける程に薫を包みて出されたりければあらそひ取て見るに物にて侍ける又の日まいりたりけるに昨日の薫の爭ひこそおかしくと女房申ける返事によめる　　清輔朝臣

玉たれのみすのうちより出しかは空たきものと誰もしりにき

旅泊をよめる　　光俊朝臣

夕なきにほつゝしめなはくりさけてとまりけすらひ寄る舟人

題しらす　　從三位(マヽ)行家

我戀はめさへいつかはあふみなるやすきいをたにぬるよしぞなき

入道二品親王性助家五十首歌に　　後西園寺入道前太政大臣

風あらき山田の菴のこもすたれ時雨をかけてもる木の葉哉

わらひを

けふの日は暮ると山のかき蕨あけは又見む折過ぬまに

曉水鶏をきゝて　　よみ人しらす

明るまを猶たゝくこそ夏の夜の心短かき水鶏なりけれ

一夜松にて觀音をつくり奉りけるを

ゆふかけし神の北野のひと夜松今は佛のみそきなりけり

冬歌中に　　從二位行家

瀧津瀨にみたれし玉のをたえして水の糸筋氷しにけり

柳隨風といふ事を　　西行法師

見わたせはさほの河原にくりかけて風によらるゝ靑柳の糸

寶治百首歌奉りけるに　　前大納言爲家

つらき哉山の柚木の我なからうつすみなはに引ぬ心は

文保三年百首歌奉りけるに　　權中納言公雄

大井川かへらぬ水のうかひ舟つかふと思ひし御代ぞ戀しき

新續古今和歌集　卷第十九

百首御歌の中に　　崇德院御製

ねの日すと春の野毎に尋れは松にひかるゝ心地こそすれ

題しらす　　賀茂重保

あやなくも風のぬすめる梅か香に折ぬ袖さへうたかはれぬる

灌佛の心を　　大僧正慈鎭

百數の賀茂のみあれのしめのうちに佛の身をも猶すゝく哉

人〳〵遊ひ侍ける所にて隆源法師いたくねふりければ土器さすとて　　俊頼朝臣

おひしける眠の(未勘)森の下にこそめさまし草はうゝへかりけれ

ひえの山にかたわきてけつり花しける事侍るにかたきの方にをみなへしをつくりたりけるを人々訛ひければねたくて結ひつけける　　僧都觀敎

草も木も佛になるといふなれは女郎花こそうたかはれけれ
はたなりの啼けるを聞て　頓阿法師
秋の夜は露になりはへたなはたの手にもをとらぬ虫の聲哉
長月の比花なしを法印靜賢許に遣すとて
よみ人しらす
これを見よ菊より外に此比は花なしといふ人はありとも
木賊に露の置たるを見て　三條院女藏人左近
しなののやとくさに置る白露はみかける玉と見ゆる也けり
冬の比高野に住ける僧のもとへふすまをつかはし
たりければ　よみ人しらす
寒かりしあらしも今は音はかり嬉しさのみそ身にはしみける
題しらす　源　親房
しろらめやあかてひさしのまき柱ひとま〳〵におもひたつとは
戀の歌の中に　清輔朝臣
うす衣のいかにはるとも心よく寄あふへくもみえぬ君哉
大原へゆくとはなしに戀すれはやせ通ぬるものにそ有ける
寄筍戀を　前中納言公雄
梓弓ひきもとむへき別路をやといひしにもかへらさるらん
法師顯昭まうてきて朝にかへるとて袈裟を忘れた
りけるをかへし遣すとて　左京大夫脩範
名殘をは夜すからこそは詠めつれけさを忘るゝ人も有けり
返し　法橋顯昭
我はいさけさ忘るとも覺えぬを(にイ)かへすは夜の衣なるへし
源通清熊野よりかへりまうてくと聞てよき炭や侍
ると尋けるにあしきよし申たりけれは
すみよしと今はたのまし津の國のなにはたかへる所なりけり　藤原朝家
あひしれりける女の男に髮きられにたりと聞て遣
はしける　大藏卿胤村
千早振かみもなしとかいふなるをゆふ(木綿に添て)はかりたに殘らすや君
筑前守にて國に侍けるに日のいたくてりけれは雨
の祈りにかまとの明神に鏡を奉るとて添たりける　藤原經衡
雨ふれと祈るしるしの見えたらは水鏡とも思ふへきかな
人のえひをこひにおこせたるにありけるまゝに十
九やるとて　大中臣能宣朝臣
世の人は海のおきなといふめれとまた廿にもたらすそ有ける

廿一代集中誹諧歌終

草菴和歌集　四　誹諧　頓阿法師

花を人の折ければ
かをぬすむ風たにうきを櫻花ぬしにしられて枝を折哉
病ひおこたりて三月盡によめる
我身こそ今はかきりと思ひしにかへりて春を惜しむけふ哉
曉水鷄をきゝて
あくる戸を猶たゝくこそ夏の夜の心短かきくゐな也けれ
東へくたりし時醒か井といふ所にて馬眠を覺して
短夜の朝のねふりさめか井に耳もおとろく水の音かな
月を見て
浮雲にくると見ゆる月影にはや追かゝる村時雨かな

駒迎をよめる
あふさかや影見るほともなかりけり曳越駒の走井の水
はた織を聞て
秋の夜は露に織はへ織女の手にもおとらぬ虫の聲哉
夕　雁
かや帋にかくかとそ見る墨染の夕の空の鴈の玉札
（紙屋紙也）
狩　獵
さを鹿よ招く薄にはからるなねらふさつ雄の弓杖こゆ（み歟）也
千　鳥
なをさりの心なくさの濱千鳥四代まて跡を殘しつる哉
年の暮によめる
水の面にうつれる影の逆にたつはかへらぬ老のなみかな
互思戀
契のみ猶あさ河の舟くらへともにこかれてあふよしもなし
夢
ぬるときにみるものとてやむは玉の夢をもかへといひはしめけん
（夢の事をいふ也）
ちからのかみなる人に車をかり侍しにかねておもき人の仰らるゝ程に潰すよし申侍りしかは
いはすともちから車をやるにはやおもき事とは知ぬるものを
一夜松にて觀音を作り來りけるを
ゆふかけし神の北野へひとよ松今は佛のみそきなりけり
念佛申侍りし時
老ぬれは佛の御名を唱ふるも同し事すと人や聞らん
此外家々之集中ニ稀ニも載之

續千載和歌集　卷第七

む月七日おかしき文とも人々の許に見ゆる身にはさもなけれは
祐子內親王家紀伊
春たつと聞につけても春日野のわかなをなとか人のわするゝ
題しらす
大貳三位
袂たに匂はさりせは梅花ひきかくしても折へきものを
柳垂門前といへる心を
源三位賴政
青柳のうちたれ髮をみせんとやいつへき門にまちたてるらん
百首歌奉し時
入道前太政大臣
空はまたあまけになれや春の夜の月も霞の袖笠をきて
二月の比俊惠法師わつらふ事はへりけれはつかはしける
大僧正行尊
君かため風をそいとふ此春は花ゆへとのみなにおもひけん
題しらす
信實朝臣
まねくとてさのみも人のとゝまらは尾花かもとや所なからん
大貳三位
みたれたる名をのみそ立苅萱のなく白露をぬれ衣にして
よみ人しらす
我とくはたをる虫も音をやなく人のつらさをたてぬきにして
辨乳母
山のはをいつるのみこそさやけゝれ海なる月のくらけなる哉
嘉元百首歌奉し時
前大納言爲世
よる〳〵は砧の音をさそひきて風そ枕に衣うちける
題しらす
正三位知家
賤の女かきなれ衣の秋あはせはやくもいそくつちの音かな

はつ瀨にまうてゝさほ山の紅葉の散たるを見て

康資王母

さほ山のあらしそやかてぬかせける紅葉の錦身にはきたれと

物申ける人の母に申へき事有てまかりて尋けるに

たひ〳〵なしと申てあはさりければ

俊頼朝臣

はゝきゝはおもてふせやと思へはや近つくまゝにかくれ行らん

題しらす

正三位知家

ふりかくろひたいのかみのかたみたれとくとたのむろけふの葉哉

返迴車戀といふ事を

従三位頼政

のせてやろ我心さへとゝめ置てねたくも返すむな車哉

題しらす

衣笠内大臣

ますらおか菅のおみかさ打たれてめをもあはせす人そ成ゆく

雁の子を人のをこせて侍ければよみ侍ける

和泉式部

いくへつゝいくつかさねて頼まゝしかりのこの世の人のこゝろは

題しらす

前大納言爲家

かち人の野分にあへろふかみのゝけを吹よこそ苦しかろらめ

光俊朝臣

世を捨て人にも見えすしられねは我こそ今はかくれみのなれ

道因法師日吉社の哥合によき哥を讀てまけにけり

と聞ていひつかはしける

俊惠法師

君か歌しかまの市に見しかともかちのなきこそあやしかりけれ

誹諧根源集（稽）卷之三

連歌之始元

莵玖波問答 後普光園攝政良基公御作

上略問云、連歌は此芦原國はかり翫ぶ物に侍るか。ひとの國にも侍る事にや。答云、筑波翁いとを新らしき御尋にもはべる哉。連歌は天竺にては偈と申也。諸の經に偈を説たるは則連哥也。唐國にては連句と申也。我國にては歌をつらねたれば連歌と申にや。むかしの人は續け歌とも申侍りし。

問云、連歌はいづれの御代より始まるにや、傳はれるやうも細かに承るべし。荅云、古今假名序に貫之の書る天の浮橋の夷歌といふは則連歌也。中略

愚云、此部筑波問答の略文をもて著す。夫が中に引歌又連歌の引句は其原本に寄て出す。但本書の文字を傍にして假名書となすものは、初學のめやすからん爲也。

日本紀神代卷上卷二

をがみは。ひだりよりめぐり。めがみは。みぎよりめぐる。くにのみはしらをめぐりて。おなじくひとつおもてにあひき。ときにめがみまづとなへてのたまはく。あなうれしにえや。うましをとこにあひぬ。をがみよろこびずして。あれはこれますらをなり。まさにまづとなふべし。いかにぞたをやめかへつてことさきだつや。ことすでにさがなし。むべもつてあらためめぐるべし。こゝにふたばしらのかみ。かへりてさらに。めぐりあひたまひぬ。このたびは。をがみまづとなへてのたまはく。あなうれしにえや。うましをとめにあひぬ。中略こゝにめをはじめて。みとのまくばひをなす

(口)愚云、又古事紀には

なれはみぎよりめぐりあへ。あれはひだりよりめぐりあはむと。ちぎりをはつてもつて。めぐれるとき。いざなみのみこと。まづのたまはく。あなにやしえをとこを。のちいざなぎのみことのたまはく。あなにやしえをとめを

二柱の神の歌、發句・脇句に非ず。此句三十一字にもあらず。短く侍るは疑ひなき連歌と翁心得て侍る也。古の明匠達にも尋ね申侍りしかば、誠にいはれ有とぞ仰られし。又連歌とていひ置たるは先に申侍りつるやう、景行天王の御代、日本武尊の東の夷をしづめにむかひ給ふて、此翁が此ころ仕侍りし筑波山を過て、中略

古事紀景行條ニ曰、そのくにをなづけてあづまといふ。すなはちそのくにより。かひにこえいでて。さかをりのみやにいますとき。うたひてのたまはく。にひばりつくばをすぎて。いくよかねつる。すなはちそのみひたけるおきな。おんうたをついでもつてうたひていはく。かがなべて。よにはここのよ。ひにはとをかを。これをもて。そのおきなをほめて。すなはちあづまのくにの。みやつこをたまふ

其後萬葉集に入たる

萬葉集第八

尼作ル頭句ヲ并大伴宿禰家持所レ誂レ尼續ク末句ヲ和歌一首

さほかはのみつをせきあけてうゑしたをかるわさいひはひ

奈流俗思りなるへし　　家持

かやうの事ども次第に多くなり、拾遺・金葉などより勅撰に入侍る也。

拾遺和歌集巻第十八

中将に侍ける時右大弁致方朝臣のもとへ八重の紅梅を折てつかはすとて

流俗のいろにはあらす梅花　　右大臣實資

珍重すへきものとこそ見れ　　致方朝臣

愚云、右集に連歌十二首出、餘略之。又云、右の十二首は拾遺集雑の賀の哥の次に、何と云部分もなく戴られたり。其後後拾遺には入ずして、又金葉集に連歌の名目始て見えたり。

金葉和歌集巻第十

連歌

居たる所の北のかたに聲なまりたる人のものいひけるをきゝて

あつま人の聲こそ北に聞ゆなれ　　永成法印

みちの國よりこしにやあるらん　　律師慶範

愚云、右集には十ヶ首有餘、略之。

されど唯一句ヅヽ云捨たるばかりにて、五十句百句抔に及ぶ事はなかりき。建保の比より白黒又色々の賦物題取連歌を、定家卿・家隆卿などめされはべりしより百韻などにも侍るにや。又さま〲のかけものなど出されて、おびたゞしき御會ども侍る也。中略 問云、連歌の式目はいづれの比より起る事にや。荅云、中古迄は一二句をつらね、あるひはひとり連歌・有心無心の句などにて有しほどに、まことに式目を作りたる事もなし。然れば文永・弘安の比より、本式愚云、此本式は善阿法師作とぞ・新式などいふ物出來侍り、鎌倉には爲相卿・藤ヶ谷の式目とて北林と号していだされたり。當坐用ひたる新式は、大納言爲世卿つゞられ侍るにや。しかあれども地下の輩、多く當時の了簡によりて古き式を背く事侍る。翁が存所の式目を出し侍る。もし異なる誤なくば是を用ひらるべきにやとて、懐中より一通を取出し侍りしかば、有の儘に寫しとゞめ侍る也。中略 愚云、新式後普光院殿御作と云ふは此書歟 問云、連歌に百員など申事はいはれあるにや。聯句は韵字を置はこそ百韵とも申せ、連歌は定まれる韵の文字なければ、唯百句などこそ申さめ、といふ人のあるは誠に侍るにや。荅云、其事に侍り、京極中納言入道殿も、連歌を百韵と申然るべからず。聯句をこそ韵の文字あればさやうにも申せ、連歌は唯百句などにてあるべしと仰られし。さらば脇句を入韵とこそ申侍

らめ。夫は又唯脇句をこそ申せ、夫ながら近比申付たる事にて侍れば、今更本説をたどしても詮なき事にて侍るべき。大かたはいはれなき事とぞ承り置し。下略

愚云、本式は後宇多院御宇建治二年善阿法師作、新式は後村上院御宇應安五年二條後普光院殿御作也とぞ。又云、右に出す連歌の始元は、誹諧連歌の川のみなれば、委しくは連歌辨義を見るべし。

連歌之誹諧体之部

菟玖波集 巻第十九　文和五年三月 後普光園良基公御撰

雑体連歌

誹諧 詠誹ィニ

大内の朱雀門もあるものを
ひくに鶯ゝけふのあをを馬　導誉法師

二品法親王北野社千句に

鳥のふたつぞ羽をかさねたる
鶯のあはせの聲はこまかなれ (りィニ)　關白前左大臣

梅のはなを折てつかはすとて

流俗の色とは見えず梅花 (あらず 拾遺 に)　後小野宮右大臣

珍重すへき物とこそしれ (同)　源致方朝臣

さえかへりても春ぞ霞める
鶯の子かひすたちを啼あはせ　導誉法師

近つきかたき戀をする哉
奥山に巣かくる鷹のおとしかひ　讀人しらす

たゝひとゝきのたのしみも夢
いかにして百とせ蝶と成ぬらん　前大納言爲氏 (尊氏ィニ)

物ごとの心に叶ふ時なれや
月に雲なく花に風なく (しィ)　周阿法師

をちこち霞む宇治の曙
うはそくのみやは告めぬ山櫻　(田 重ィ) 周世法師

なくなくをしき春の別路
花を見し庭の朽木のふしまろび　藤原信藤

阿彌陀講行ひける所に雪の降けれは聽聞の人の中より

極樂にゆきにけるとも見ゆる哉　讀人不知
空より花のふる心地して　弘圓法師

法勝寺の花見侍るに人々酒たうへて

山櫻ちれは酒こそのまれけれ (リィ)
花にしゐてや風はふくらん　法眼顯昭

かへるのなくは山吹の花
したへともとまらぬ春ぞ力なき　頓阿法師

おやにしられぬ子をそまふくる
我庭に隣の竹の根をさして　讀人不知

かり人の巣これは黒駒
夜川にや (はイー) 水のからすを (やイニ) つかふらん　關白前左大臣

たかんなははや末高く成にけり

土よりいつる蟬とおもふに　前大納言爲氏

福原の京にて月くまなかりける夜登蓮法師文を持て簾の前を過侍けるに

文も見つへき月のあし哉　六波羅入道前太政大臣

大空は手かくはかりもおほえぬに　登蓮法師

五歲に成侍るときあそひけるにめのと成ける人

御はやわさの夕暮の空　と申けるに

山の端をこえてや月の出ぬらん　藤原爲道朝臣

おなし所に見ゆる遠山

四の緖のかたはれ月のかた〳〵に　讀人しらす

中將に侍ける人〳〵連歌し侍けるに

かりきぬはいくのかたちし裝束な　法性寺入道前關白大政大臣

是を人〳〵附かねけるに

鹿さそひつさいふ人もなし　源俊明朝臣（頂明イニ又俊頼臣）

（本ノマヽ）

おく山に舟こく音も聞ゆ也

なれるこの實やうみわたるらん　紀貫之

夕日にのほる月の遠山

枝は椎木を折猿の一さけひ　導譽法師

關白規恩寺にて百韵連歌侍りしに

弓につくるはしとこそ見れ

前後竹ある里に鶉啼て　素阿法師

家の千句の中に

けふ關こゆるまきの奥駒

もる小田に近き鹿笛とひすゝ（本ノマヽ）め　關白前左大臣

右のかたにそ千鳥啼なる

釣針のさほの河原の夕霧に　頓阿法師

間にこそ見ぬ事なれと知られけれ

二人むかひて衣うつ音　よみ人しらす

むしり捨るは花さかぬ草

栽たつる籬の菊に綿きせて

あやしくも瞔より上のさゆ（ひイニ）る哉

こしのわたりに雪やふるらん　實方朝臣

死たる鴛に札を附て書付侍ける

たしとおもへと謎ころしけむ

水鳥はいけなからこそ見るへきに　良心法師

すみをひくかと見ゆる黒髮

おもふすぢかきやる文のむすひめに　良阿法師

おやにかはるもすかた也けり

灯のあかきか（色イニ）けなる鬼を見て　救濟法師

油わたをさしあふらにしたりける

いとかうはしく匂ひければ

灯はたきものにこそ似たりけれ　上西門院兵衛

てうしかしらの香や匂ふらん　待賢門院堀川

あしもてかへる難波江の浪

みたれ藻はすまひ草にそ似たりける　源頼義朝臣

建久元年上洛し侍りし時濱名の宿

に着て酒たうへてたゝんとしける
に
橋もとの君には何かわたすへき　前右大將頼朝
たゝ杣山のくれてあらはや　平　景時
熊野へ參りけるに孔子の山といふ
所にて
くしの山たふれしぬへき岩根哉　鴨　長明
はなつりますなかつらもそある（本ノマヽ）　證心法師
（瞻）贍西上人雲居寺の極樂谷に住ける
時坊をふかせけるを見て
ひしりのやをはめかくしにふけ（と云けれは）　京極前大政大臣
あめか下もりて聞ゆる事も有　贍西上人
皇后宮のすけあき國のもとにまか
りて物申さむとしけるに人も出さ
りけれは人して言送て侍ける
やり水の心もゆかてかへる哉　俊頼朝臣
後に女房のかたりて是を得つけさ
りしと申けれはかくいへとて申け
る
たてならへたるいはまほしさに　藤原顯國朝臣
吉水坊の庭に蓼といふ草のもみち
したるを見て
からにしきとや是をいふらん（ゆふへなるイニ）　大僧正慈鎮
愚云、此附句なし。

月をのむかとおもふ遠山
くしらとる越の大船心せよ　關白前大政大臣
舟をたゝくは沖津白浪
夜になれは笘屋の窓を立にけり　前大納言尊氏
後には左右の袖ありて（本ノマヽ）
たてをつきたる舞の袖には（本ノマヽ）　二品法親王
足はやくゆく駒のいなゝき（つなひきイニ）
人毎にいそく松木の下かさ（本ノマヽ）
いほのゆふへそ只ひとりなる　導譽法師
松あれは風ふくろうの聲きゝて　周阿法師
又みるも海又見るもうみ
賤の女かぬきなしはたを立置て（きイニ）　讀人不知
ぬるほとや暫し心を休めけむ
山からの子の夕かほのうち（はイニ）
こそ〳〵とこそ暇はなりけん（のイニ）（鳴）
川舟の淺瀨も近く成けれは
家に人〳〵あまた來て酒たうへて
各立歸り侍るに
さら〳〵やさら〳〵とこそ立にけれ　後普明照院前關白左大臣
風とあらしは名こそ替りける　同　家宣旨
上にたゝ山の見えたるはかりにて　敬心法師
石のうへにて休らひにけり
双六の手打わつらふ指のさき　救濟法師

春の田にすき入ぬへき翁かな
かの水口に水た入(ひかイニ)はや　宇治入道前關白大政大臣

鶯の子のほとゝきす(山ほとゝきすイニ)哉
親の名の末一文字や取つらん　敬心法師

遠き所へまかりたる道にあにの社と申神の御前にて
あにのやしろはこのかみの名か　藤原清輔朝臣
と侍るに十四五はかりなる童部の立りけるか附侍りける
ちゝふ山はゝその森にをゝはん(けイニ)

川のほとりに牛は見えたり　讀人しらす
水わたる馬の頭や出ぬらん

軒の下にて夜を明す也　同
籠のうちのねくら尋る放ち鳥

いかてなさん心強さを　よみ人しらす
あら牛の岸にむかへるよと車

ひたるきにつの引るゝそ心えね(牛)
やふれ車をかくるやせうし　救濟法師

狩に出ける道に狐の走り出たるを見て
しらけて見ゆる晝狐哉
契りあらは夜こそこんといふへきに　平景時

人〳〵伴ひて鎌倉へ下向し侍るに行つれたるおのこの口すさみにいひ侍けるは
足あらひてやくつのやをはく
これをきゝて
てこしよりわらしな川をわたる人　鴨長明

御まへにて人々酒たうへけるにかれこれ盃を多くさし出させ(よせイニ)ければ
左京太夫何某とかや申ける
淺なへの心地こそすれ千早振
ちくまの神のなにあらねとも　崇德院御製

鷲の尾の花の下よりかへりけるに
花を見捨て歸る猿丸　と人のいひかけければ
星まもる犬の吼るに驚きて　皇太后宮大夫俊成女

あられ横きるかしは木の森
いねふりの木兎のみや臥ぬらん　前大納言爲家

世の中にふしきの事をみつる哉
鷲の尾にこそ花はさきけれ　讀人しらす

人の國にも二子こそあれ
隱岐佐渡は八島のうちに顯れて　同

數七ツある神のみやしろ
うへに置其名の文字は十なるに　前大納言尊氏

くつるゝ土そ流れ行ける
軒にもる雨のふる屋の壁ぬれて　素阿法師

烟りに成て句ふたきもの
其すかた富士と伏籠と一ツにて　導誉法師

また馴ぬ旅にきそ路を遠く來て
つかれの駒のあしひきの山　藤原家躬

わらひはすれとあなつりはせす
鷹のゐる森の梢のむら鳥　よみ人しらす

ちさき[まイ]馬首[本ノマヽ]からさきそにたり[わイ]ける
きこりのうしはひく力なし　俊頼朝臣

ゑとゝいふ所の障子はなれたりけるに書付侍ける
のりからはゑとの障子[本ノマヽ]の花ならん
又後に書付侍ける
虫のくらふに骨はをれけり　前中納言爲明

青き鬼とも成にける哉
古寺のむねの瓦に苔むして　敬心法師

いのり來む世は今も恐ろし
うはそくは鬼すむ峯に行ひて　救圓法師

水[さイ]にたまれる花を見ろかな[こそ見れイニ]
山もとの筧の末に舟をきて　讀人しらす

常にきくやまと言の葉[とはのイニ]かはらぬは
久かたの空あしひきの山

磯家の庭は暮になりぬる
浦にまた干す薪をも取入て　前大納言尊氏

しつくより露をもそゝく石の上
弟子はかならす師をそいたゝく　二品法親王

しらけのよねは只人のため
神垣の庭のまさこをうちまきて　救濟法師

關白家千句に
門ふかき池ある寺の水すみて
すかたは白き馬の四ッ足　素阿法師

おこなひ人や手を抑くらん
室の戸の花ふみ散す鳥を見て　良阿法師

うちはなたるゝ鷄頭花哉
せうから[木ノマヽ、らイ]の夕つけ鳥のいかき行[さかイニ]　大納言爲氏

犬蓼といふものゝ中にゑのこ草おひたるを見て
犬たての中にはえたるゑのこ草[おひイ]　藤原實清

といふを聞て
こゝと見置てのちにひかせん　讀人しらす

東國[あつまにノ]に下向し侍りしに伴ひたる人
てにとるはかり手こしをそ見る
と申侍けれは
峯高き足からこゆるあしもとに　頓阿法師

手洗にて足をはいかゝ洗ふへき
水かめの湯はわかぬものかは　俊頼朝臣

梨を燒けるにやけさりけれは
からくしたれとやけぬなし哉　前大納言爲家

と有けるに
おふの浦あまのもしほ火燒さして　安嘉門院四條

ひろき空にもすばる星哉
深き海にかゝまる海老もあるもの[のイ]を[からにイ]　西行法師

玉章や同し儘にて通ふらん
春の雁かね秋のかりかね　よみ人しらす

夜を通してもいかゝかよはん
山里のかけひの竹のふしことに　素阿法師

春秋たてる市はこの市
花もみちうりかふ人はよもあらし　素暹法師

日より薄のおひ出にけり
狩人の野邊に射捨るわれかふら

犬こそ人の守りなりけれ
みとり子の額にかける文字を見よ　良阿法師

たつさはる杖こそ老の力なれ
おもへはとてや子をはうつらん　救濟法師

我こゝろなたれはかりに成にけり
人くひいぬをけしといはれて　西音法師

修行し侍けるに奈良路をゆくとて
尾もなき山のまろきを見て
世の中はまん丸にこそ見えにけれと侍るに　西住法師
あそこもこゝもすみもつかねは　西行法師

鵜とかさゝきの侍けるを見て
愚云、此前句なし。
木の實かとかきはまくりも聞（はイニ）ゆれは　俊頼朝臣

鯉つきたるもの・馬にのりたるを見て
力かはよりのほる鯉かなと云ければ
馬のせにいかなる淵の有やらん　前大納言爲家

あしのやまひにひれふしにけり
大鯉のさ（本ノマヽ）いた事なき身を持て　素阿法師

きんのまとこそいふへかりけれ
ひきめぬる御所のむふや（うふやのまへのイニ）のふるたゝみ　順覺法師

そとはみちたる山寺のかき
戸をあくろうちに佛を立並へ　導誉法師

老たるねすみぬるそらはなし
古寺の壁またらなる犬はしり　救濟法師

とまるへき里はさすかに知れけり
犬の聲する道のすゑ哉　前大納言尊氏

前右大將賴朝上洛の時守山を過けるにいちこのさかりなるを見て連哥せよといひければ
もり山のいちこさかしく成にけり　平時政朝臣
むは（かイニ）らはいかにうれしかるらん　前右大將賴朝

堀川院御位の時弓場にてあわせ（本ノマヽ）給しけるに
春くれは弓場殿に來て圓居せり　中納言國信
愚云、此附句なし。

金の色に菊やさくらん
山路よりほりもとめたる草なれは　藤原爲守

連歌をは立なからこそ初めけれと侍るに　前大納言爲家
こし折歌は居てそよむへき　從二位行家

禪林寺仙洞にて爲言（ユキ）朝臣ふたあゐ

のかり衣にうらしたるを着たりければ

ふたへに見ゆる一重かり衣と侍るに　後西園寺入道大政大臣

うらもなき夏の直衣もみへたすき　藤原爲言朝臣

（古イニ）亡車に乗て花を見侍けるに誰ともなくていひける

破れては片輪に見ゆる車かな

なとよこ神のたすけさるらん　前大納言爲氏

年中行事のさうしのもとにゐませ給ふて人々に連歌せさせてあそはせ給ひけるに今まいりたる人の殿上にゐてもの申けるをきゝて中納言國信のしりにおはしますにあしうもゐたるものかなと申さるゝを聞しめして御口すさみのやうに仰を有ける

雲の上に雲の上人のほり居ぬ　堀川院御製

俊頼つかふまつれと中納言（イニナシ）國信申ければ

しも侍にさふらへかしな　俊頼朝臣

夢窓國師西芳精舍にて本尊のへうほういのゆかみたるを見て

へうほういをゆかみてしたる阿彌陀哉といふ句をみられけるに

是を觀音勢至たまへよ　救濟法師

衆てより名号をこそ申けれ

佛にならん事はちやう／＼　敬心法師

法勝寺花のさかりに夜に入までゐたりけるを見て

糸櫻よるまてみるは誰ならん　よみ人しらす

といひ侍りければ

沓の上座覺豪そかし　覺豪法師

いとおかしかりけむ

散花を追かけて行嵐哉　中納言定家

大長刀ににくるうくひす　よみ人しらす

夜行屋の下に立たる（けイ）石佛とあるに

火あやうしとてみあかしもなし

ふるかはころもぬきそ捨つる

二本の杉の木かけに水浴て　素阿法師

主も從者もさけをこそもて

（本ノマヽ）かめなを口にくしたる平次との　敬心法師

伊勢の國を修行し侍けるに林崎といふ所にて

林さきまてはいかゝ歸るへき

皷かたけを打鳴しつゝ　玄忠法師

我手の寶をしきもの也（かなイニ）

（本ノマヽ）玉こくは地藏ほさつのえ（えイニ）給ひて　西圓法師

疊に舟虫といふ虫の有けるを見て

舟虫は疊のうらをわたりけりと侍るに　讀人しらす

高麗よりやさしてきつらん

風呂に入たりける人のなはをよひけれは

風呂のうちにてなはを呼けり

我親のおねか小路の湯に入て　十佛法師

曾阿彌夕くれに來れるをみていひける

あらぬかとよく〳〵見れはそ阿彌陀佛　無生法師

無生のもの〻老のひかめや　曾阿法師

人の家の庭に椾のふしたるを見て

ふしたるを椾といふこそ心得ね　と申侍ければ

ふしたれはこそたてといふらめ　念阿法師

わらへは齒こそ二ッ白けれ

雪のうへに足駄やはきて遊ふらん　導譽法師

佛たちにかき物なや好むらん

極樂はよきところなりけり　敬心法師

後鳥羽院の御時白黑賦物連歌の中に

豐のあかりの雪の曙　といふ句に

こはいかにやれ袍見くろしき　按察使光親
（やぶれはかまのイニ）

綿の黑きて額をそゆふ

大ひけの御車そへて北面　中納言定家

天文博士なりける人の葺を朝日のあざりといふもの盜みける折ふし男に行あひて西の方へ逃ければ

あやしくも西より出る旭哉　と云ければ　讀人しらす

天文博士いか〻見るらん　とそ付ける　同

何とてか〻たて湯のからくなかるらん　といふ句に　同

むめ水とてもすくもあらはや　從二位家隆

連哥はて〻人のねたりけるに

連歌師は皆賦物に成にけり　といひければ

何木をとりて枕にはせむ

敵討たる曾我の殿原

十郎かおもひ切しを五郎せよ　敬心法師

堀川院御時中宮のうへわらはの連歌といひ侍けるを左中辨惟家忍て物申と聞しか程なくおとせさりければ

誠にや連歌なしては音もせぬ

しはしもやとにすゑつけよかし　俊頼朝臣

說法しける道場に鳥の形なりける聲をうつせみの聽聞の人の中にいひける

うてともたゝぬ鳥のありけり

かく申けるを聞て唐人の附侍ける

捨　身　惜　花　思　身を捨て花をゝしとやおもふらん

菟玖波集誹諧之部　終

愚云、菟玖波集全部廿卷、文房の本は先年去方の藏書を乞需めて、門人等に寫させ置しなるが、元名家より出し書ながら、烏焉馬の誤少からず。よて其後兩本校合すと

いへども、是かれたがひめ有て、是非定めがたかりしを、南都中沼家にひめ置給へる傳來正しき本をかり得て、三たび校合し、槃事を極め侍る也。されど四本ともに落字・落行、又誤字のうちに句意衆議の上もわかちがたきは、こたび誹諧の部の傍にもしるしぬ。後人糺し補ひ給はゞ、是亦己が幸なるべし。

誹諧犬子集 寛永十年松江重頼撰 後苦雑卅

愚云、此集の末に上古誹諧と部を立、うぐひすのあはせの聲はこまかなれ といへる句を巻頭として百四十餘首を出す。第二句めは、

有とはきけとかへらさりけり

鳥の子のひとつ殘るは巣もりにて　乘阿上人

此句は菟玖波集連歌雜之部一ニ見えたり。誹諧に非ず。其外連誹混雜也。

秀衡征討の爲に奥州に向ひける時、名取川わたるとて

われひとりけふの軍に名取川　前右近大將賴朝

君諸ともにかちわたりせん　平景時

貞任・宗任は、衣河の城を落行を追かけて、かく云侍る。

ころものたてはほころびにけり　源義家朝臣

と侍るに、馬の鼻を返して

年をへし糸の亂れのくるしさに　安部貞任

此連歌も菟玖集中の句なるを、犬子集ニ出。重頼は貞徳の高弟也。師傳有て誹諧の部ニ入たる歟。但自見歟。これらは世によく知れる句なれば、初學の人犬子集を見て此集にもれたる事を疑惑せむと爰に著す。

誹諧根源集 巻之四

誹諧之連歌之部

新續犬筑波集 萬治三年　北村季吟撰

わざとは、漢家のまはりかしこき人のこと草より起りて、御所車の和國にひき傳ふることは、やまとの体にては古今集に始まり、つられ歌の品にては𤣥玖集にぞ見え侍る。夫が後の中むかしに、祇公の百韻・荒木田氏の千句などあれど、なかにつきて山崎の宗鑑法師がこゝ筑波集なむ、これが逸物なりける。抑正道に非ずして正道をすゝむるわざとかや、先達もいひ傳ふる事なりければ、歌道に積れる劫の石をなで盡さずば、いかでか誹諧に連ぬること葉のいづみも、よくくみしる事侍らん。先師貞德老人は、若かりしより玖山の高く貫き陰にかくれ、細川の淸く淺からぬ流れより出て、和哥のうら波を額にたゝへ、筑波山の雪を頭につめる老の後の口すさみに此ことわざを翫びて、彼山崎の油火を百とせの後に再びさしつぎ、てらしつゝ、往昔新撰犬つくば集といふものをなむ、みづから製し侍りき。下略

獨吟百韻之内 十集中ニ出　宗祇法師

堂はあまたの多田の山なと

まんちうな佛の前にたむけ置

たれみそすくふしやくそんやある

いと細き手にあかゝりやわたるらん
日々にまさりて旅はたえかた
關守のこゝろはきひし錢はなし
忍ひ路ならは天くらふなれ
名やたゝん月のさはりな身につけて
百韵の外
月に簾のへりやさすらん
疊屋のあるしなとへは伊豫の人
いはうくと鳴川しりのなみ
大皷又小つゝみの瀧落て
いふすへたるたき木な舟にとりつみて
まつやたぬきのあなしふく風

獨吟千句之内 右同

荒木田守武

ぬかれやするの野へのかたらひ
けふにあふ子の日のまつもかすかにて
春も卒都婆もたつ森の陰
若菜つむ生田の小野の小町にて
うそないふかとおもひこそすれ
鶯の赤きかありと告られて
けさははや花もきりゝと押開き
いつまて握りつむろわらひ手
蕨の花さけるは定家かつらにて
西行さくらうつろへるころ
うつろふと黒ふも花のいろこかた
底に蛇のすむ岸の山ふき
ころもかへして藥煎しよ
春過てなつめにけさや成ぬらん
いつれはあふる八橋の水
風呂に人いりてはあかな杜若
くりとや五條あたりの物ならん
ゆふかほふくへふくへゆふかほ
七日に巾はわれ初にけり
牛の子のあしやたなはたつめならん
うちなかむれはみくさ生けり
我宿の桔梗かるかや女郎花
うつりかはりて猿とこそなれ
花の春もみちの秋の桃のさね
おもひきれともきられさりけり
泪にはかたなの刃まてこほれきて
昏に木より袖は赤くして
あつきかゆなや打こほすらん
いくたひか君かかたへは呼るらん
たのむのかりなむしろはる秋
すゝ木殿とは誰かいはまし
名なつかは鯛三郎やます五郎

新撰犬筑波集中拾二廿句一ノ

山崎宗鑑

非懸のうへに春はきにけり
うくひすのすこもりといふつくりもの
春の野にゐんきんかうのはしまりて
まつつくくし袴なそきる
夢のうちにもいたくこそあれ

花にぬるこてふは雨にたゝかれて
　五條あたりにたてる尼御前
夕かほの花のほうしを打かつき
　あかつきことにたゝくひやうたん
山からの籠にくゐなを入かへて
　十王堂に秋風そふく
淨はりの鏡に似たる月出て
　おほそれなから入てこそ見れ
足洗ふたらひの水に月さして
　家はつくれと破れやすさよ
さゝかにのはせなに糸をよりかけて
　月日の下に我は寐にけり
暦にて破れをつゝる古ふすま
　ひたいのしはす寄あふを見よ
ゆく年をうばやおほちの忘るらん
　人間万事いつはれる中
塞翁かむまからせてはとひもこす
　泪そ川のうへに流るゝ
及ひなき人に心をかけつくり
　女夫なからや夜を待らん
誠にはまた打とけぬ中直り
　とんほうに似たる虫飛須磨の浦
とふ人あらはあぶとこたへよ
　印をむすへは手こそくさけれ
にんにくの衣をきたる護摩の壇
　苦〱しくもたうとかりけり

皆人のまいるや露の塔供養
　切たくもあり切たくもなし
盗人を捕へて見れは我子也
　同し前句にて
さやかなる月をかくせる花の枝
　又
心よき的矢の少し長きをは
　尻の穴より桐立なり
さしよする火吹の竹のふしこけて（新増ニへよをこめて）
愚云、此前句の如くざれたるを、かく附なしたる作意、
此作者ニ數々有。全集を見るべし。

新續犬筑波集（中拾ニ廿句ノ一）　　松永貞德

　夢のやうなり大原の春
ちら〱と霞みのうちの黒木うり
　綸旨をは箱にとく〱納め置
柳か風をあてぬ梅かえ
　わらはへともそおほくあつまる
印地又後は喧嘩と成ぬへし
　烏丸亞相公にて　ちる萩の錦をつ
ゝれいとすゝき　といふに
寒うならふそやれきり〱す
　やせたる腕をいたす松陰
猿猴かほしさうにする峯の月
　月に煩惱つくる山住
百八の鐘の望みはなかき夜に

花の前句に　紅葉の陰にうたふ小
謠
花のころ生れしちやぼを秋に見て
東御門主北山へおはしましけるに
遲引ながら御見廻申ける時　遲け
れと扱もよふこそきたしくれ　と
仰せられければ
木の葉ふみわけうしにのる人
あられの玉を投る雲龍
ちよほ〳〵と穴ある淵のうすらひに
ものをもたねば用心もせず
旅ころもきのまゝ出てゆく道に
心よりなと發心のなかるらん
人かほるれば泪たれ尼
てきの藁屋へふかいりやする
浪士にはたゞこそやらねさいめろん
ふしたる人のはなをふすふる
たはこをやすかきの下で吹ぬらん
みたれ心のやみはいとしな
鑓すぢのつるをめいわくがらせられ
さるをまはせるしなの上手さ
しろうとの能をは所望遊はさす
後鳥羽のゐんなしたふ世の中
おもしろき歌のおほきは新古今
唐ころもにや汗なかきぬる
案せずは折句の体はよまるまし
法の場にやこけのはへたる
久しくてせめぬる駒はついすへり
からのものこそふとみしかなれ
藪よりもなれたる棒をさし出して
烏丸殿より鯛を給りて　うらゝま
でおめでたい哉年のくれ
すゞきあくるは冬川の民

獨吟十百韻中拾ニ廿句ノ　西山西翁（後ニ梅翁）

猫より外の音つれもなき
恨む文鰹かくほどかきちらし
眼とほつく熊野山伏
藤代の谷にころりとこけの行
四十にみたせ給ふよろこび
うます女とおもひの外の初産に
一見は奈良三輪初瀨よし野山
寺をももたぬ僧にてゆ
扱もその後みやこ戀しき
うき沈む平家は夢にひとしくて
山の手にもつかねもいらぬそ
ゆかみなりに建る峠の茶屋大工
若後家の殊勝氣もなき寺參り
聲をきくよりついほれけきやう
待賢門のあけかたの空
大内へ名乘てまいるほとゝきす
うらゝかな松ふくりをや出しぬらん

かすみのころもはかれたる山
　日まちはとかく小うた三絃
傾城に雨にとめられ室とまり
　長物かたり西の海まて
光源氏末や平家に成ぬらん
　とはゝや嫁御ものや思ふと
青梅の色に出にけり是まいれ
　寐覺からから〳〵衣しころ打
女の聲てわらふ月の夜
　ならの葉の名にあふさらし恥さらし
又鎌倉へわたされにけり
　三十もしあまりひもしかりけり
素盞烏の御代にもありし不便者
　戀そ積りておく山のいも
みなの川流れて落る大うなき
　たかひに時宜を墨染の袖
極樂の花見は先へまつこされ
　白旗にこかね作りの太刀も有
社頭の御藏御らんゆへ
　うかれめなれとつよき心中
大磯に殘すかたみのちから石
　中立に長物かたりくりかへし
いつ歟女房にしつのなたまき

新續犬筑波集中拾二廿句一

北村季吟

我心おもしろなかしけさの春
　はいかいていなこのむ書そめ
たるゝよたれの糸の長き日
青柳のみさり子おもふれろ〳〵に
　袖ひけは花橘の匂ひして
きいたかそなたあれほとゝきす
　親のかたきな心よくうつ
若竹はほやけて釘に成にくし
　見あくる森はふくろふの聲
なにかしのゐんきな軒端月も哉
　けんくはなかはにかい逃て行
ひとつ猪はいあふ獵師えもとらす
　夜〳〵ふたん月のともし火
螢なき秋も書籍はよむまい歟
　見えつかくれつ泉水の月
かいつふりかいつんふりといろ波に
　節分のよはにすさふ大風
たから舟もふすまのうらにかゝるめり
　香の烟もふすふるは憂き
まつ人はきもせぬ蟵に蚊はいりて
　あた波にういたやうなる契りにて
君かこゝろは水くさのはな
　あふ時は口舌に泪たりけらし
うすへらるゝそけふりよりうき
　けさまて部屋の内もひえぬる
露とふられ霜とおきゐる口舌して

我ともからの人のにくいひ
仇心なき身に誰か恪氣せむ
　いかさまに公家そたちなる兒そかし
くつかふりよく揃ふ手ならひ
　立寄やすむ杉は六本
辨當の三人前に箸そへて
　青葉の笛の青きふしきさ
鼓にはしらへといへと赤うして
　借錢の淵は瀬田ともなりねかし
世をから橋のかけ落やせむ
　まつ黑に降くる空の五月雨
からす蛇もや龍となるらん
　淵へやとんとなくろみしま江
つふてもて芦間の鳥を打損し

和歌連歌家誹諧之發句

從二諸集中一拾レ之

美濃國の何某御禮申上たる時
五月雨にようこそきたれみのゝ者　近衛關白信尋
けさむかふ東鑑のもちひ哉　烏丸大納言光廣
門に打玉やころ／＼いぬのとし　細川二位法印玄旨
著そはしめ老い皺なものしめ哉　仝
花遲かりし年田舍わたらひして
よしやふれ峯はおしくも花の雨　仝
はむ鳥のはしはみならす茂り哉　仝
東山遊興のかへさ祇園の御旅所に侍る榎の陰に立休らひをくれし友人を待侍けるに紹巴法師まみえてしきたひして通りけるに申かけ侍る
涼しさにゑのきもやらぬ木陰哉　仝
秀吉公唐入の時
からたちのそのみは頓てきこく哉　仝　此御句頓て其儘きこく哉なりしを後一直して入集との說有
小倉といふ所にて
月弓を居なからに見るやくら哉　御同作のよし
見えすくやかたひら雪の松ふくり　玄旨法印御作のよし
若和布や汁のつまこめ出雲海苔　救濟法師
花匂ふ梅は無双の梢かな　宗祇法師
美濃國關といふ所の山寺に藤の咲たるを見て
關こゆる爰も藤しろみさか哉　仝
八幡の萩の坊にて
なけよ鹿啼すは皮をはきの坊　仝
冬は猶奈良のならひて朝茶哉　仝
行脚の序に伊勢の國關の地藏といふ所にとまり侍りしに庭の橘の花さかり成ければ
橘のかにせゝられて寐ぬ夜哉　宗長法師
醉はせては笹にみたるゝ螢かな　櫻井基佐入道永仙
金銀の扇は風のもとてかな　仝
先ちるや風の中なる虫くひは　仝

老松のはにはさかむやあられ餅　仝
薄帋といはむ若葉の檀かな　仝
河原には蓼やみたれてからにしき　仝
けふこそは神代もおもふ若ゑひす　仝
願はくは花のもとてや生とふり　櫻井永僊
朝顔にたか露ひとつ入ほくろ　同作のよし
紅葉する蓼やさなかからから錦　仙吟法師
花よりもみこそほしけれ櫻鯛　榮載法師
空にしろや雨の望の秋の雲　牡丹花宵栢
花けしの無常すゝむろ夕卞かな　蜷川親當
墨の袖洗ひてほしのあまの川　宗養法師
梅の花香なから寫す筆も哉　紹巴法師
花そ散まいれとゝめよ茶屋のかゝ　玄的法師

誹諧遠祖之發句

新撰犬筑波集中拾二十五句一　山崎宗鑑

正月六日

なへて世にたゝくは明日のくゐな哉

春寒きとし

にか〳〵しいつまて嵐ふきのたう
きえにけりこれそ誠の雪ほとけ
けふ日よし土の戸開けかきわらひ
くゝりにていさ見にゆかん犬さくら
花よりも團粉とたれかいはつゝし
なかはこそたゝなし鳥よほとゝきす
口たゝく水鶏にならへ郭公
竹の子のふときも親のめくみかな
誰色に染るは柿のもみち哉

田に虫の多くつきけるとし

大わうの闕も恐れぬ田虫かな
かさな着は雨にも出よ夜半の月
しら山の神の本地や雪佛
風寒し破れ障子のかみな月

五葉の松のある所にて

つもれはや雪の五葉の庭の松

右集之外一

まん丸に出れと永き春日哉
天神そ梅に増たる花もなし
花なしそおもふほの〳〵と赤つゝし
手をついて歌申上る蛙かな

獨吟千句之發句　荒木田守武

飛梅やかろ〳〵しくも神の春
青柳の眉かく岸のひたひ哉
花よりも鼻に有ける匂ひかな
うくひすの娘鶯啼ぬほとゝきす
繪合せは十二の骨の扇かな
かさゝきやけふ久かたの雨の川
錦かとあまめに細き小萩哉
名のりてやそも〳〵今宵秋の月
氷らねと水引とつる懷帋哉
からかさやたゝえかゝみのけさの雪

右集之外二

元朝や神代の事もおもはるゝ
又うへも内宮やたつ神の春
列卒の者來へき宵也とまり狩

菩提山にて

ちる花な南無阿彌陀佛と夕ァ哉
なでし子や夏野のはらの落したね

犬子集中拾二十句ノ　松永貞德

鳳凰も出よのとけき西の歳
香は四方に飛梅ならぬ梅もなし
鶯のほころはす音や歌ふくろ
花よりも團粉やありて歸る鴈
しほるゝは何歟あんずの花の色
歌よまて見るなや花の笑ひ顔
鳥には似ぬうの花そ鶯の色
樂に世なわたる歟なかぬ子規
慈童かや菊水鉾の羯鼓打
長歌歟吟しもやらぬ蟬の聲
七夕の仲人なれや宵の月
くふよりも氣の藥哉鹿の聲
一聲はあまり尾もなき鴫哉
皆人の晝寐のたねや秋の月
雲霧や芋名月のきぬかつき
山や故郷錦着て行入日影
紅葉にて又花なやる櫻かな
脚はやき雲や時雨の先走り

富士のみ歟一夜に出來る雪の山
ほとゝきす聲つかへかし寒のうち

新續犬莵玖波集中拾二廿句ノ　北村季吟

日の鳥のとけき三ツのあした哉
左義長にほこらす藁やひの袴
鶯の和歌三神や月日ほし
花筒は八千代やこめし玉椿
へし折や花にたはれ男おそ櫻
うつりやすき花や美人のあた心
冠の追かけゆくやまけ競馬
碁をや打せん/\せんの蟬の聲
破るなよ五戒の理をも持扇
天の戸や明れは秋のたちから雄
荻ふくやそよや土用も秋の風
天に在てひよくや契る星の中
女郎花たとへはおはの内侍かな
たつ田川うくや淺みにこい紅葉
玉と見る露の蘇鉄や孔雀の尾
さくや此今を春邊と冬至梅
ひれふりし雪見事さよ姫小松
閑なるよや栓さす門かまへ
餅花をしたり柳や糸さくら
かへせ/\ゐの歳ならはとしの暮

從諸集中拾二十句ノ　西山梅翁

新春の御慶はふるき言葉かな

宵の年雨降ける元日に

浪花津にさく夜の雨や花の春

愚云、此句世ニ梅の花と流布す。されど翁の眞蹟

又風虎子御集夜の錦ニ前文有て花の春と出たり。

江戸に下回せし時鍛治町誹諧談林

の連衆より發句を乞れて

されは爰に談林の木あり梅花

愚云、右談林とあるは、其頃誹連の會する所なり。

當流談林風の唱、江戸より起る。

とへは匂ふ梅や自身の取合せ

江戸を以鏡とすなり花に樽

鷄合せ左右へくはつとそ退にける

松に藤蛸木に登るけしきあり

ほとゝきすいかに鬼神も慥にきけ

鮓桶やなれぬをもつて後の爲

五月雨や天下一まいうち曇り

あふけ〳〵いつく歟王地なら團扇

きのふこそ水にたてしか葛の葉の

いもは〳〵先ッ月をうる夕ドかな

しら露や無分別なるをき所

おもひ入奥そ聞ゆるかいろと啼

摺子木も紅葉しにけり唐からし

やとれとは御身いかなるひと時雨

里人のわたりい歟橋の霜

鴨の脚は流れもあえぬ紅葉哉

雪の松曾根も久しき名所哉

愚云、此部新續犬筑波集の序をかり、略し用ゆるものは、其文責根源集自序の趣是に似通ひて、わかちやすき故也。祇公の百韵・守武の千句は、右集の拔粹に任せ、其餘將發句は同集又それ〳〵の集中より、纔二十句を限りに拾ひ載す。これ悉くせむには事の繁ければと察し見るべし。又云、貞德の門人立圃・重賴・西武・貞室・梅盛等數ゝ侍れど、思ふ所有て季吟而已を出す。委しくは末の卷に評すべし。

誹諧之連歌之部終

誹諧根源集　卷之五

誹諧文字之辨并誹諧之大意

俳　正字通　鋪埋切音牌雜戲也

諧　同書ニ雄來切音骸和也偶也說文ニ語也

俳諧　史記百廿六卷滑稽傳ノ註索隱ニ曰滑ハ謂レ亂ヲ也稽ハ同也以レテ言ノ辨捷之人言レテ非ヲ若レク是說レテ是若レクス非ノ

同書ニ崔浩曰滑稽ハ流酒ノ器也轉注ノ吐レクコ酒ヲ終日不レ已言ハト出レテ口ヨリ成レ章ヲ詞不レルコ窮若ン 滑稽之吐ヒクガ酒ヲ

同書ニ 揚雄曰 滑稽者轉注之器也若ン二漏巵之類一ノ以比ニ人之言語捷給應對不ルニ一レ窮也

同書姚察云滑稽ハ猶ニ俳諧ノ一也

誹　正字通ニ甫尾ノ切音斐說文ニ謗也

誹諧歌　古今和歌集卷第十九

奧義抄下卷　藤原清輔朝臣作

問云、誹諧歌之委趣如何。　答云、漢書之誹諧者滑稽也。滑ハ妙義也、稽ハ詞不レ盡也。史記滑稽傳考物ニ云、愚云、此文右ニ出セバ略ス。傳云、太史公曰、天道恢ミタリ豈不レ大哉談言微中亦可ニ以解一レ紛ヲ優孟多レシ辨常ニ以ニ談笑一ヲ諷諫　優旃善ヲ爲ニ咲言一ヲ然モ合ヘリ於大道ニ一　淳于髡滑稽多レシ辨　郭舍人發言シテ陳レ辭雖レ不レ合ニ大道一然モ令ニレ人ノ主ノ和悅一是等滑稽ノ大意也。誹諧の字はわざとゝよむ也。これにより皆人編(偏)に戲言と思へり。かならずしも不レ然歟。今案に滑稽の輩は非レス道ニしてしかも成レス道ノ者也。又誹諧は非ニス王道一ニしてしかも述ニ妙義一ヲたる歌也。故にこれを准ニフ滑稽一ニ。其趣辨說利口あるものゝ如ニシ言語一ノ。火をも水にいひなす也。或は狂言にして妙義をあらはす。此中又心にこめ、詞に顯はれたるべし。

淳于髡　愚云、趙へ兵を請にゆきし事、此初卷ニ解す。其事に似かよひたる心の歌を出し給へる也。

古今
なにはなるながらの橋もつくる也今は我身を何にたとへむ　是等のこゝろ辨說也

同　愚云、齊王より楚に鵠を獻ぜらるゝ使せし事右ニ同。

仝
世の中のうきたびごとに身を投は深き谷こそ淺くなりなめ　是等の詞辨說なり

西門豹　愚云、河伯の娶レ婦ヲたとゞめし事右ニ同。

全
もろこしのよし野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに　是等の心利口なり
淳于髠　愚云、酒極則亂すの諷諫せし事右ニ同。
全
むつこともまた盡なくに明ぬめりいつらは秋の長してふ夜は　是等の詞利口なり
僧旃　愚云、禽獸の爲に苑囿を大にせんとあるを諷諫せし事右ニ同。
全
世の中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人に恨みらるれは　是等の心狂なり
優旃　愚云、陛楯郎と呼し支右ニ同。
春の野ゝしげきことはの妻乞に飛たつ雉のほろゝとぞ啼　是等の詞狂なり

おほむね此趣に過ず。これらにて心得べし。但辨說利口、くはしくいへば、わかれたるもなきもの也。

問云、誹諧の趣如レ釋ならば、古今他之部にも誹諧の心ある歌まゝ侍る、いかゞ。　荅云、各あひまじはれり。そのゆゑは、誹諧の心ある歌を盡していれば、彼部すぐれて多かりぬべければ、よろしきにしたがひてはからひ入たる也。四季雜部にもこの繪（會）釋はある事也。

八雲御抄　一條禪閤兼良公御作

誹諧歌　これはいかなるをかあらん、まさしきやう知る人なし。公任卿なども不レ知レ之而通俊何と心得たるにか有けむ、入ニ於後拾遺ー。經信卿が云、入ニ誹諧哥ーにてことのわろさも被レ知云々。誠如ニ公任・經信ー不レ知ほどの事なれば、末代人非レ可レ定。又千載（載）集にもあり。大かたはさよめるべきやらんなどは推せらるれども、共さましる事なし。後拾遺・千載集に入たる歌は物狂の事なれば、さやうの歌をいふにやあらん。但これを知がほに定るには非ず。哥体可レ見ニ古今ー也。或說曰、

誹諧有ニ様々ー、

一俳諧　二誹諧　三俳詭（いつはかす）　四滑稽　五諧讔（なぞだて）　六謎字
七空戲　八鄙諺　九狂言　　此等子細末辨レ之

飛鳥井殿古今集の說には、誹諧といふこと世間には、あれたるやうなる詞などをいふと思へり。此集の心は更にしからず。たゞ思ひよらぬ風情をよめるを誹諧といふ也と申されし。されど歌のあらきをもまじへたる也とのたまへり。　季吟埋木ニ出

誹諧埋木　撰者北村季吟

式義　俳諧は躰も心もともに狂言也。誹諧は、躰狂言にして心直なる也。俳諧は詞・字がらとばの歌也。誹讔は心あらはに聞えず。物外にすがりて狂じたる也。

滑稽はまはりかしこしとよめり。其心如二奥義抄一。笑戯はひたすら謎字はなぞ〳〵のやうにいへる也。鄙諺はいやしき詞を嫌はにたはれて實すくなき也。狂言は偏におかしきやうにいへでいひたてたる也。

狂言といへる流（字歟）によらば、火をも水とまげて言なせる也とぞ。　愚云、流布の八雲御抄に俳譃・狂言の二ツなし。又埋木に俳譃なし。八雲に異本有歟。又云、譃の字義未（註）祥。又、

續連珠誹諧用意問答　同作

問、八雲御抄に誹諧の名あるが中に、八鄙諺、九俚諺といへり。鄙諺はひなびたる詞を言出たる成べし。俚諺はたゞ世俗のいやしき詞をいふ成べし。下略　荅、上略　此誹諧九ツの名は、古今の誹諧哥の註の清輔自筆の本を見しに、まさしく俚言とかけり。狂言は書寫の誤り成べし。

愚云、同作の埋木には狂言の註あり。案ずるに此書に明暦二丙申春の述作、用意問荅は延寶元癸丑冬とあれば、十八年後の著述也。程經て清輔の註に寄、書改められしものと見るべし。いづれの書にもかやうの義はある事也。

誹諧厚顔記　撰者見島胤矩　愚云、當流季寄通俗志之作者也

ある日友來て誹諧といふ事を問。　荅、此事昔も俊頼と基俊との料簡わかれて見えたり。俊頼は公任卿の詞にたよりて、古今集にあれどもさだかにしれる人なし。後撰・拾遺にもなし。後拾遺に入しは、もしをしはかりの事にや。基俊は通俊をたすけ、史記の滑稽傳を引て、撰集必しも同じからず。後撰にひがことにて入ずとならば古今集なくなり侍りぬ。貫之ひがことすとも、延喜聖の帝にて御覽ぜまじやと云々。清輔云、其おもむき、辨舌利口なるものゝ、火をも水にいひなすが如し。或は狂言にして、しかも妙なる義をあらはす事有。此中に又心にこめ詞にあらはしたるもあるべし。云々　扨人々のいひがちをばのけても、千載集にあり、其後の集にも入たるをみれば、貫之をやうなづきたまひけむ。寒い中から春來り、暑いといへば秋風のふくは、目の前火をも水にいひなす所にうまみ有べし。

又問、誹の字はひの音也。俳の字や叶ふらん。　荅、誹は微の韵にて芳微反、又敷尾反、斐なり。は・ふ通

音なればにや、かな書にするには、はひかいとも書よし也。音の伸縮の心ならんかし。八雲御抄に誹諧哥の事に付て或説を引て云、愚云、右ニ出せば關レ之。又史記評林に滑稽は猶（ゴトシ）ニ俳諧一也。これらによりて俳の字をも書と見えたれども、誹の字を用ゆべき事にや。勅定（諚）をもてあめる代々の撰集に、みな誹諧とあるなり。俳にてもよかるべけれども、是を書時は勅定の集をもどくやうにやあらん。世に名の高かりし俊成卿は、殊勝の歌道者也。撰給ひし千載集にも、古今の通りに書のせ給へばゆゑある事とおもひ、假初にも誹の字を書べし。

愚云、はいかいの文字、和歌にては古今集に誹の字を書給ひしより、世々の撰集に其文字を書來たり給へるを、誹諧連歌は和漢混雜のものから、梅翁門人惟中、滑稽傳を本據として俳の字をもちひしを、貞徳の弟子隨流、書を著してこれを破す。其後貞徳支流桃青門下支考に到て、同じく滑稽傳を出所として俳の字に改め、今も其徒にては俳諧と書なり。當流は才麿語錄に、ひの假名かへしの事をも辨じ置れ、其上胤矩厚顔記にしたがひ、誹諧の文字に定む。纔廿年ほどの間に、誹諧の文字自他斯の如く變化す。されど漢字に拘る時は、俳の字をも書べきにや。季吟の書給へるもの、又師說も同樣也。依て此序文にも俳誹の文字を書わくる也。又云、字書に俳諧に類するもの數〱見えたり。俳優 詼笑 俳倡 倡俳 倡噱 優倡 詼諧 倡狂 倡和 諧謔 諧詼 此外にも有べし。但何れも雜戯なる歟。又云、左傳註疏、史游ガ急就篇ニ云、倡優俳笑 是優俳ハ一物ニシテ二名也。今之散樂戯ニ爲ニ可レ笑之語一ヲ而令（シム）ニ人ヲシテ之笑一ハ是也。宋ノ大尉袁淑取テ下古之文章令ムルニ人ヲシテ笑一ハ者上ノ次而題レ之名テ曰ニ俳諧集一ト。又愚考るに誹諧（ワザコト）は言（コトバ）をもつてし、俳優（ワザヲギ）は象（カタチ）をもつてする歟。依て今世俳優は放蕩不貫の徒にも比すれど、滑稽傳にのせし優孟は、叔敖が談語をうつし、象をなして楚王に諷諫す。其さま、身ぶり・聲色の妓藝をなすものにも等しきといへども、その子の窮を救ふ。又、

神代卷上卷ニ
あまてらすおほんがみ（天照大神）。あまのいはやにいり（天入ニ石窟一ニ）。いはと（閉ニ盤戸一ヲ）をさして（而）。こもりいましぬ（幽居焉）。中略 やそよろづのかんだち（八十萬神）。かんつどひにつどひて（合）。あまのやすかはらにおいて（於ニ天安河原邊一ニ）。そのいのるべきわざをはかりたまふ（計ニ其可禱之方一）。中略 またさるめのきみの（又猿女君）。とをつおや（遠祖）。あまのうすめのみこと（天佃女命）。すなはちてにちまきのほこをもち（則手持ニ茅纏之矟一）。あまのいはとのまへにおいて（於ニ天石窟前一ニ）。たくみにわざをぎす（巧作ニ俳優一）。下略 此わざをぎに大神盤（磐）戸をひらき玉ひしとぞ。これ神樂のはじめ也。人の代となりていはゞ、いにしへの白拍子・今の舞子にも似

かよひてむ。されど其業に尊卑有、又用ゆるに好惡あり。いはずや、詩衛風ニ、善ク戲謔スレド兮不レ爲レ虐ノ。又奥義抄ニ、道に非ずして道をなし、王道に非ずして妙義を述る。是誹諧の大道也と。又云、今世誹諧のことくさに遊ぶ人、はじめは平句の點取より入て雜戲而已となせど、席をかされ月を經て次第に句作の自在を得れば、和漢の事に疎くしては此道成就しがたきを悟して、おのづから書籍に心をよせ侍る事ともなれり。さりや兒俗のうへには、いかにも有がたき道なるべし。上のくだりの條々、いにしへの高貴又は名匠の著し置玉へる書を擧て、いさゝかも自己をまじえず。初學の人其本を知て誹諧の正道に入むと修すべし。

或人問云、誹諧根源集、誠に此道の大綱と申べし。夫が中、菟玖波集誹諧体連歌に、今世よめる所の發句又平句の長句・同く短句にていひかけたるあり。すべていひかけたる句を發句と申べきや。　答、發句にていひかけしは發句とも申べき歟。長短とも平句は發句と申がたかるべし。前句又かけ句抔申さむ歟。いひかけて附人なき平句は、筑波集に片句と出し、發句は發句として別に出たり。略連歌にては發句の事を片歌と申す人有。よて尋ね侍れば、附句なきを片歌と云、脇・第三と續て百韻卷頭と成を發句といふと也。誹諧にても左申べきや。　答其事辨義にも出されたり。俳連歌は宗匠家より悉く習ひあれば、傳へを受ざるもの率爾には申まじき事歟。夫片歌と申は、

古事記景行之條ニ曰

はしきやしわぎへのかたゆくもゐたちくも
波斯祁夜斯和岐弊能迦多由久毛韋多知久母
麗哉我家方雲起來

此者片歌也。　斯の如く五七七によめる也。

我前の師綾太理、誹号は吸露菴涼袋、おもふ所有とて誹諧の發句の名目を私に片歌に替、五七七を旋頭歌の片歌、五七五を短歌の片歌とす。後京師に登りし時、かたじけなくもやごとなき御方より、片歌の道の師といへる御書を下し玉はり、其道愈行なはるべかりしを、惜いかな不幸にして沒したえたり。但歌ははじめの五文字を發句と申よし。されど連歌も繼句の有無によらず、いにしへより發句と唱へて、これを輯めしを大發句帳と題せし印本あり。尤發句ばかりにて語をなし、短册にも書、又入集するは中昔より後の事にや。往古は下の句なくては句意立がたかりし故歟。

清輔袋草紙ニ

或人ノ云、連歌ハ元ノ意趣を末ニ荅也。又連歌を歌一首ニ取成テ入ニ撰集一常ノ事也。中略但以ニ末句一ヲ爲レ主ト歟。

此趣にては下の句附たる人、一首の主となる也。右古事記に出しは五七七にして語をなし、下の句なく一首と成る片歌といふ歟。されば片歌は繼句のなきもの成べし。はいかいは連俗をもとゝすれば、是迄數百年唱へ來れる通り、發句と申べき事歟。略延寶の頃の誹書を見るに、貞德門よりは當流を難じ、當流よりは貞門を擊て、筆陣止時なし。さるを此書に多く季吟の著述を出し擧らるゝ

事如何。　答 昔難陳の書ある事は貞門・當流にかぎらず。これ貞徳沒後は其門互に爭論絶ず、著せる書も數〻也。こはいづれも一派を興立して祖ともなりし人〻なれば、各文才に驕りて也。夫より年暦段〻をしうつりて貞門の末、其角・嵐雪杯、當流西鶴・才麿・來山等を友とし睦びて双方の著述に句も入集す。猶又今世と成ては、諸流繭なく交はる也。殊更北村季吟子は、貞徳翁の末弟ながら博識多才にして、歌書・物語の註釋又誹諧の階梯と成べき書數編を著され、普く世寳とする事は衆人の知る所也。かく高名によつて、關東歌學所の　台命を蒙り給ひ、今も子孫連綿して相續也。其撰み玉へる書なれば、引用ひて難なかるべし。勿論季吟とても古書・古說に寄給へる事ぞ。

問 誹諧に遊べる中に、滑稽を嫌ひ、只閑寂なる所をむねとする徒あり。是又據ある事にや。答 誹諧・滑稽別事に非ず、雜戯より和して正道に入るゝとなれば、閑寂なる句作を、ひとむきによしとは申がたし。されど閑を好まば、閑なるうちにも滑稽の意の扱ひかたあらん歟。はじめに出せし諸書の事どもを熟讀して、其深意を自得有べし。

此書自序に述が如く、初学の人に誹諧の根源を知しめ、且大意を示さむ而已著せし也。よて誹式は流風の諸書に讓る。志す人、學ばむと思ふ處の師に寄らるべしと筆を閣く。

誹諧根源集全部五巻終

一陽井のをぢ、この冊子をもて來て、すゑにひとひらのこれるに、何にまれ書てよとこふ。いかなるふみにかとひらき見れば、はいかいのみなもとをへぼらにせり。まろ、はいかいをしらずしてなにをかいはむ。しかはあれど、此をぢをあひしれることは、かたみにくれ竹のよこもれる時より、かぞなべて五十とせに近づきぬるを、をぢはわれにさかふことなく、われはたをぢにさかふ事なむあらざりければ、とまれかくまれとて、ふみてをとるものから、耳しひの物のねのことをいふにひとしくこそ。

千蔭

東叡山南下五條天神前
花屋舊次郎
星運堂

玉池雑藻（ぎよくちざつさう）

一・二・三

素外著

筑波山端山しげ山の事茂き隨筆の書は、むかしよりすそわの田井のそこはかとなく、限りしられまじくや。爰に先師より〳〵かい集めをかれしは、雅となく俗となく誹諧の材となるべきなれば、諺に風に順がつて呼べば聲高からずして聞者多く、岳に登つて招けば臂長からずして看ものおほしと。此道に寄輩に便りよからんにぞ。さりや今年夏日の永き心ずさみに、このもかのも拔萃(粹)して冊子にせられむとなるを、星運堂耳とくも聞つけ、己が櫻木にうつさむと予に乞ふ。よて師に其よしを告るに、年月わけて親しく用をなすの書肆なれば頓にゆるし、あるに任せてはじめに其故をしるす而已。

葛飾　一龍井壺外

謹述

文化辛未秋

玉池雜藻　一

一陽井素外誌

此書は玉池の珠を拾ひ、石を省くとにも非ず。いにしへ今見聞し事、將己がおもひ寄事をも、筆のまに〳〵藻塩草、書集めし儘文房に置しを、みな月の風入る折から、虫打はらひ開きよめば、さるとの有しとも覺え、又忘れて珍しと見るもあり。よて爰かしこ寫とらせ、別に冊子となせし物ぞ。

一明和八辛卯夏、御影參りといふ事はじまり、四月八日より八月九日まで伊勢參宮人、凡貳百七万七千四百人餘なりと。愚云、此事昔寶永二年、又其むかしも有しとぞ。老若男女、街道・歩道を撰まず、御影でぬけたとさ、と口々に諷ひつれツ、晝夜となく群參す。これ神慮すゞしく叶はせ給ふ事有て誘ひ玉へるにや。先年晋子は法躰の遠非を悔て、

身の秋や赤子も參る神路山　其角

内宮法樂之連歌發句

山やこれ天照す日のはつもみぢ　宗因

外宮

尊とさに皆押あひぬ御遷宮　桃青

西上人かたじけなさに泪こぼるゝの和哥を慕ふ前書ありて、

何の木の花とも知らず匂ひ哉　仝

神路山は內宮の御山を稱すよし。又兩宮を申の說あり。猶可ㇾ尋。

一厄歳之事、源平盛衰記ニ、治承三年二月廿二日宗盛卿大納言幷ニ大將を上表あり。今年三十三になり玉ひければ、重厄の愼みとぞ聞えし。愚云、今世にては卅三と十九を女の厄どし、四拾二と廿五を男の厄と云。是三十三は散々、十九は重苦、四十二は死の響きある故とぞ。廿五の事は男の盛年にて、是より段々に衰ふるとなれば、其盛なる所を愼むにや。されどはじめは女子の詞などより起りて、本據ある事には非るべし。

一有氣　無氣　松岡如菴瞻々言ニ、陰陽家ニ、人身ノ氣有餘に當る年を有氣とし、虛耗ニ屬する年を無氣とす。又閑田耕筆と云ものニ、大般若經ニ貧窮無暇入ㇾ有暇ニ。俗ニ貧乏暇なしといふも是より起ると祖芳老禪の話也。いま有卦・無卦の文字を用るは非也と。愚云、有氣を祝すには、ふの字の物七ッ贈る事世風也。己は是を一句として、

富貴七重八重もうけあふ花牡丹　素外

一哥一首を開果ざるうち難ずまじき事、和哥又誹諧ニも有。昔上東門院住吉の浦へ御幸有ける御時、うき鳥多くなみにゆられたる躰叡慮に叶ひ、此けしき哥によむべしと、和泉式部へ宣旨有けるを御うけせしうへ、おもふ所有ければ何とぞ娘によませたき趣願はれしを、御ゆるしありて小式部御前へ出しが、しばし案じつゝ扨母のかたにむかひ、千早ふると五文字を出せしに、式部小聲にて、夫は神の御事にこそよめ、いかに心得しやといふを院叡覽ありて、おさなきものゝ事也、いづれにもよませよと仰下されけるに、心ならずも有がたく母もゆるしぬれば、　千早ふる神のいがきにあらねども波のうへにも鳥ゐたちけり。君をはじめ御供の

人〻大に感じ給ひけり。御感のあまり下されもの有けろうへ、小式部の内侍と召れけり。此時十一歳にて有しとぞ。

一花園左大臣、南殿に出て機織のなくを愛おはしましけるに、暮ければ、下格子に人參れと仰られけるに、藏人、五位もゆはぬと申て侍參りたるに、汝ならば兼て哥よむと聞しまゝ、あの虫をよめと仰有けるに、御格子おろしさして、青柳のとはじめの句を出したるを、女房達折にあはずと思ひたりげにて笑ひ出したるを、大臣、物を聞果ずして笑ふやうやあると仰られて、とく仕ふまつれと有ければ、　青柳のみどりの糸をくり置て夏へて秋は機をりぞなく、とよみたりければ大臣感じ給ひて、萩をりたる御直垂を押出して下されけるとぞ。

一涼岱南北新話　元祿の頃にや加州金澤の會に、月折端と附て裏移り付かね、少し沈みし時北枝といふもの、郭公と句を出しければ執筆、秋いまだつれずといふに、その荅へはせで又、ほとゝぎすと申ゆへ、執筆其詞を請ければ、　時鳥啼ころ植し田を刈て　かくはじめより案ぜし歟、又頓に一直せし歟、句の拔ひのはえ〴〵しきに連衆大に感ぜしと也。

一飮レ酒ヲ時之頌　此酒芳氣　遍滿天下　祭諸佛等
祭諸靈等　天福皆來　地福圓滿　拾芥抄ニ出

一大酒する人は腹中に虫あり。其虫、口又尻より出れば、其人其後酒を飮事なしと、白氏文集を引て出せる醫書あり。愚云、己が社中に大酒の士有て、假初にも二升三升を飮事常也。ある日酩酊して嘔吐せしに、其中に一寸ばかりにて色黒く平めなる石有。夫よりして酒を飮事ひしと止し也。これ酒を吸石にや有けむ。又外の人の草履取に大酒の者有よし、其主人に聞えければ、何程歟のむ、ためしみんと閑日に庭へ廻し、椽さきにて鉢に次て呑せしかば、塩を肴とし六升迄飮たり。其上も強なば飮べき歟なれど、餘りの事故後の煩あらんとを思ひてやめしと、其主人の物がたり也。聖語を思へば、

量りあれ年わするとも升で酒　素外

一物の味はひを試み、君公に奉るをおにみと云。此事或抑木〻元日の屠蘇に起る。公事根源集ニ、薬子とていまだ嫁せざる少女に屠蘇を飲しめ、扨天子に奉る也。小兒と書てをにとよむ故也と。愚云、此事證としがたき歟。小はをの假名、鬼は和名鈔ニおにと有。其上小兒ををにとは湯桶よみ成べし。予先年高貴の方に出て在し時、配膳の近習へ、今日の煮味は誰やいたせしと仰有けるにて、ふと心づき思へば、煮味の事を下より申詞故、敬して御煮味と申なるべきなり。又屠蘇によらば、天上の鬼の間は御膳の具を置所なれば、薬子鬼の間に在て夫より進むと也。然れば小兒に及ばず、鬼の字を用ひ、鬼味とも書べき歟。又一口食す事故鬼一口より出し歟ともいへり。乍レ去御煮味の方、安らかにして理に近かるべし。

一牛馬門ニ、牡丹餅は盛並べし形也。又萩の花と云は、あづきあるひは黄な粉をかけし色をもて云とぞ。かい餅はもちの中でも和らか故、粥餅の横訛り也と。又黑牡丹といふは牛の異名、冬牡丹は火鉢を云。火のさかむなるを牡丹花に形容せしなるべし。愚云、當流李寄通俗志ニは十月之部ニ寒菊・冬牡丹と續け出す。勿論今珍花を好む者、これを鉢植等にせり。されど新井氏の火鉢とあるも亦一說也。其意に作せば火鉢にも用ゆべし。

又百菴が句ニは、　はぎが花黄な粉の方やをみなへし。

又愚が句に、窓の斜日を、

窓に日の一りん牡丹冬ごもり　素外

右の如く譬諭して案ぜば、いろ〳〵句作もあるべき也。

一同書に、或日客來ての話に、先年舟にて旅せし折から蛇と烏賊相爭ふを見しが、いか、波をすいて腹中の墨を吐かけしかば、蛇段〻にきれて海に流れ失たりと。又其後他の客云、小兒蟆にさゝれし時往あひしに、其親烏賊を庖丁せしが、業に疎く兩手を墨にしつれど、小兒泣叫ぶにおどろき、そこ爰と撫さすりて痛む所眞黑に成しが、いつ歟愈て泣をとゞめ、遊ぶ事常の如しと語る。本草ニ烏賊墨蝎螫の疼痛を治すとあれども、墨の能をのせず。よつてしるし置事を出せりと。

一河豚、本草綱目ニ無毒とあれど、時珍食物本草ニは大毒あ

りと見えたり。此毒有なしに說區也。ある年此毒にあたりし者、海上にて大家の御舟を見かけ、御藥を願ひしかば砂糖を下され、是を素湯に立て用ひしに、頓に快氣せしとの事、是も右の書に載たり。又南嶺子には鮭と河豚の文字の事につきて、既に命を失なはむとせしを、靑砥の粉を水にかき立て用ひ本腹（復）せし事を出す。又予が知己の中に右の毒にあたり大發熱せしに、深更成ければ醫藥に及びかねしを、物に心得し男ありて丸裸となし、土間にて腹を冷させければ、次第に熱氣さめて平生躰に成し事を、當人の物語にて聞し也。右時珍が說の如くいづれ大毒魚にて、是が爲になやまされ又忽に死するもの時ゝあれば、心あらん人ゆめ食すべき事にあらざるべし。此因みに云、先年外櫻田邊に夫婦とも鰒を好み食するものあり。其中に幼年の女子一人あるが、毒也といひて堅くあたえず。或時又これを煮るに女が云、其魚いよ〳〵毒ならば、我もくひたく思ふなり。其ゆえは、毒にあたり父母とも相果給ひなば、己ひとり生殘りていかゞせむ、夫よりは死をもともにせまほし、よてこれを願ふなりと云ければ、夫婦其孝心の詞に顏を見合せ詞も出ず、暫し落淚して大に耻思ひて、今煮し鰒に手も附ず捨たりしとぞ。此事を聞て、其藩中これまで內ゝくひし人も、誰とゞめねど一統やめしと也。是亦女が孝の餘慶ならん歟。愚老も若き時は其友にも交はりしが、今は他をも製（制）しとゞむる也。

親は子のためにかくす歟ふぐと汁　素外

おや有て卑怯におちず河豚嫌ひ　〃

危うしとやふぐに見らるゝ人の顏　〃

一當流の祖西山宗因、誹號は梅翁、正保の頃浪花天滿宮の北に偶（寓）居し、はじめての會席に、

（連吟）淵とならんよるべの水や菊の露　宗因

其後明曆二年住べき地をもとめ、向榮菴の成たる時、

（同）神やうけしついによるべのきくの水　仝

梅翁の誹諧を桃靑・去來・其角等が賞美せし事は、去來抄・雜談集など蕉門印行の集物に見えたり。其文は前に愚が著す手引種に載す。又許六が歷代滑稽傳に、露の發句は古今なきもの也。梅翁が　白露や無分別なる置

所　後代にいたるとも、是ほどの事いひ出すべき作者有べきとも覺ず。又、何をいふても六十の秋　と云句などは、末代不易にして妙也。愚云、又近年故人の數に入られし歌人千蔭翁は、五十年餘の知己にて、折には物をも聞し人也。先年梅翁哥誹諧の自書を見せしに、我誹諧の事はしらず、哥連將其書に於ては耻かしめらるゝ事あるまじく、今世の誹人もかく有たきものと申され、汗面せし也。

名はいまも千世も春邊歟梅花翁　　素外

一梅翁、江戸に下りし頃、饗けする人ありて葺屋町芝居見物に行しに、あるじ其席柴にて、　予は增りけり竹之丞とせしが、五文字とかうすれど居りがたしと添削を乞けるに、翁取あへず、

おや〳〵〳〵予はまさりけり竹之丞

と五文字を添られしかば一座手を打て感吟の聲、暫しは止ざりしとぞ。此おやといふ詞は、關東にて稱嘆の發語也。其詞を親にかけて也。後拾遺藤原保昌朝臣哥ニ、かた〳〵の親のおやどち祝ふめり子のこの千代をおもひこそやれ。又是も同じ頃、加友といふもの加斧を需む。　上を下へえいとう山の花見かな。翁云、面白けれども連哥めきたりと引直して、

花見衆やえいとう〳〵東叡山　　加友

扨おのれ脇をつけむとて、

かすみひけ〳〵をす車坂　　梅翁

えいとう山の句、連歌めきしとは厚き誹諧成べし。（此事米仲靱闌筆ニ出）

一宗因手紙の切レに、　我等隱居所南に四疊敷つけ候て廣くなり、壺の内へ草花を植、氣慰みに成申候。五人十人は客も成候間、別而之者近日會催し候。

（連哥）老が來る木陰ならなむ若葉哉　　宗因

連歌おもしろく成申候。誹は當風成まじくおぼえ候。秋風が新しき口ぶり、三吟を見て我を折候。愚句古きうへに躰いやしく思ひなされ候。

一秋風京三井氏、當流の作者成しが段〻長じて異躰と成。

右は山左は園錺シ梅シ曙シ　　秋風

一日にいく度歟暮るゝ歟と思ふさ月雨　　、

あたゝかに眞白なる飯を見む歟の氷室哉　、
此時分は秋風のみならず、皆此やうな体はやりし也。天和の末より貞享にうつり元祿に至つて、當風・貞門共外の風詞槩正風躰と成。雅にせちなる人は、よく古今の書を見て變化をも明らむべし。但今未熟の誹士、適右異体の句を見て古風と心得、斯る句作に倣ひ、又點にするもある歟、笑ひつべき事ぞ。予が門人、ゆめ右の趣によるべからず。

一字餘り之事　右秋風が時代の句は法外の作也。和哥のうへにて作例あるは、近來風躰抄ニ云、卅一字より餘す事、秀逸の事は子細なし。さなくては無用の事なりと云々。又八雲口傳にも、文字餘る事させるやうなく、餘さでもやすく有べからん所に、わざとたくみ入たるはわろし。あまらで叶ふまじく、あまり聞にくからぬは、いく字も苦しからず。忠仁公哥ニ、としふればよはひは老ぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。又定家卿歌ニ、わすれぬらな恨めしと思ひおもふとても待べきにあらずとはむともいはじ。此哥は卅六字、はじめの歌は三十四字也。誹諧發句にもよくよみ叶へしは、哥同樣にゆるしきたれる事ぞ。

一鬼貫ひとり言ニ、おのれ廿に充ざる頃、先師松江の翁と維舟也梅花翁と列座の會に出て、ちよと見には近きも遠しよしの山　といふ句に、　腰に瓢をさげてふら〱と附侍りければ、吉野山にふくべ、其故ある事やと師の咎めにあひけるに當惑して、　美芳野の花のさかりをさねとひてひさごたづさへ道たどり行、といふ古哥にすがりて付侍りきと、當座にこの歌を作意して答へければ、此哥珍らし、何にあるやと尋られけるほどに、たしか萬葉歟夫木にて見ゆと言ければ、やがて執筆にかゝせられける。いかなれば師の心をかすめ、かく僞りをもて勿躰なくも懷帋を穢したる科人、かへす〱も道に背きし事、今更恐敷ぞ侍る。下略　愚云、鬼貫僞りといへ共、壯年にしての才力感ずべし。たとへ此事師に洩て不興有とも、亦免し有べき事歟。

一同書に、鎌倉右大臣、西行上人に弓馬の事尋給ひし時、馬は大江千里が月見ればの哥の姿にて乘給へと答へら

れければ、程拍子が心得玉ひて、即座に馬の乘かたを悟り玉ひけるとぞ。愚云、誹諧にも句の程拍子は上手の上のわざ成べし。先師若狐ニ門人文字餘りの事を聞し荅に、和殿馬をよく乘給へば、夫をもて考へらるべし。譬はゞ五十間の馬場をのるに、四十七八間にて乘まはる時も有べく、又八九間の時も有べし。是其氣滿ざれば馬廻りかへるまじき也。句の字數も意みちざれば、風格調ひがたしとしらるべき也と示されし。げにさる事ならんか。

一西行、諸國修行の時道に勞れ給ひければ、其所に有合ける牛にのられしを、牛ぬし見咎め、此法師牛盜みしとのゝしりぬるに、われは西行と云修行者にて、中々左樣の者にあらずと申されければ、さあらば十二のえとを一首ニ讀べし、其事成ずばゆるさじと責けるに、

　午未さるとりいぬよそちもいねうしとらぬさへうき名たつみに

と取あへず物の名によまれければ、皆々感じゆるしけるとぞ。（此哥夷曲集ニ出）

一みそとせばかりの昔、献殘の魚とて、高貴の方より己に下されける。其使井筐隼太と有ければ、御與によみ奉りし也。

　御こんいの（猪隼太）はや給りし献殘（源三位）味鵜に美女よりまさる（頼政）

　御（紅）情　素外

一頼政立春の歌ニ、珍らしき春にいつしかうちとけてまづものいふは雪の下水。又貞室が句ニ、戀の叶はざる人にかはりて　打解ぬ雪や深谷の底ごゝろ。又加賀の希因が句ニ、梅さけばゆきにも聲や谷の水。愚も先年、打とけよ花なる春に去年の雪。此句いづれも同根より出れど、等類は遁れつべし。

一延寶の頃、茶亭の女つるといへるが有ける。其名に寄て、

　葛の葉のおつるかうらみ夜の霜　梅翁

程へて後、ばせを其あたりに休らひしを、見知りてや有けむ、内へ招じ入れて、我はもと此家の遊女なりしを、今のあるじ妻とし、名をてうと呼ぶ。此先のあるじの妻をつると申せしが、難波の宗因この所へわたり

給ひぬる頃、發句願ひかけたれば、已にもあたえ給はれと、おかしき例を引てあながちに乞ふに、いなむもいなみがたくて、なにはの老人が句を前書にして、

　蘭の香や蝶のつばさにたきものす　桃青

一桃青、奥の細道に北國の難所をこえて勞れ侍る夜、一間隔て若き女と老たる男の物語りするをきけば、越後新潟の遊女參宮するとて此所に泊り、定めなき身の上咄しを聞〳〵寐入て、

　ひとつ家に遊女も寐たり萩と月　桃青

愚老もむかし爰かしこ旅せし頃、或夜のやどりへ、邊りちかき若人にや遊びもの呼て、糸の音かしがましく、だみたる聲して謳ひ、酒くみ興ず。へだての障子とてもなれ破れて物事あらはなるが、其中によそぢばかりとも見ゆる傀儡の、わきて仇〳〵しく寄そひもてなし侍れど、其けはひ何となく寂しく、哀れに思はれければ、

　老にきと汝はしらじな女郎花さがなくて日に露ぞこぼるゝ　素外

一鸚鵡返し哥の事　古今著聞に、櫻町中納言成範、配所より召かへされて內裡へ參りたりけるに、元在し時とはやうかはりければ、女房のうちよりむかしをおもひて、雲のうへはありしむかしにかはらねど見し玉だれの內やゆかしき、と書て出したりけるを、返事せんとて灯籠の際に立寄けるに、小松內府參り給ひければ急ぎ立退くとて、灯籠の火のかきあげ木のはしにて、や文字をけちて、ぞもじにかきて、翠簾の內へさし入て出られけり。愚云、此哥の事は、あふむ小町と云謠ものに作りしより、世に小町と誤り傳へたる歟。成範の歌なる事は右著聞集を以證とすべし。されど晋子が雜談集にも出せし如く、謠は誹諧の源氏也とて其頭專ら取用ひて、古人も謠取の發句多し。謠によりてせば小町の事にもすべき歟。いづれ時のよろしきにしたがふべし。又八雲御抄、鸚鵡がへしと云は、本哥の心詞をかへずして同事をいへる也。むかし今多けれども指させる事なければ、集などに入たるはすくなし。後一條院春日行幸に上東門院そひて奉りたりけるを見て、法成寺入道、そのかみや祈り置けむ春日野の同じ道にも尋ねゆくか

な。上東門院かへし、　曇りなき世の光りにやかすが野の同じ道にもたづねゆくらん。か様にかはらぬをいふ也。

一犬に信ある事　　述異記ニ、陸机が飼し黄耳と云獵犬あり。机、洛に在る時戯れに云、我郷の家に大事出來ぬ、書を持て行むや否や。犬、尾をたれ聲をなしてこれに應ず。机、書を竹筒にして犬の頭に繋ぐ。犬、驛路に出て机が郷の家に至る。人、筒を開きて書を見畢れば、犬聲をなして荅を求る所有が如し。人、荅を筒に入て又犬の頭につなぐ。犬出馳て洛に歸る。後死せし時、机、弃るに忍びず、家に回つて殯し、呼て黄耳塚とす。

一晉の大和中揚生、犬を飼て甚愛す。ある日大澤の邊に行て草中に醉臥す。折ふし野火起て其上風烈し。犬驚きほゆれども生更に起ず。火次第生が方へ近づく。犬これを見て、前に有一坑水へ走つて身をひたし、生が左右の草にそゝぐ。かくせしによつて、草ぬれて火きえたり。生其後目さめ、犬の忠情により火の難にまぬかれし事をしれり。

一御堂關白、白き犬を愛し飼せ給ひけるが、其頃法成寺へ日ゝ御參詣有しに、或日その犬御先にふたがり又吼廻りて、御車より下りさせ給へば、御裾をくはえ引留め申さんとす。いかさまやうある事ならんと、晴明を召て占はせ給ひければ、是は君を呪咀し奉るものを道に埋てゆ也と。その所を占ひ堀せたりければ、土器を二ツ合せ、黄なる帋捻にて十文字にからげたり。開き見れば、中にはものもなくて、朱砂にて一文字を書たるばかり也。是堀川左大臣顯光公の語を得て、道摩法師（一ニ道滿）がせしと申事あらはれければ、道摩は本國播磨へ追下されけり。犬はいよ〳〵不便がらせ給ひけるとなむ。

一參州碧海（ヘツカイ）郡雨和田村犬頭犬尾の社は、天正年中領主宇津左衛門五郎忠茂、獵に出て一樹の陰に睡眠せし時、手飼の白犬裾をくはへて引に目を覺せしが、又眠れば犬しきりにほゆる。よて其妨をいかり、腰刀をぬいて犬の首をきれば、飛で樹上の蚺蛇（ウハバミ）の頭にくひ付。忠茂是を見て大に驚き、蚺蛇を殺し、扨彼犬の忠情を感じ、頭

尾を埋て祭レ之。

冷まじな難に一 犬虚は吠ず 素外

一小田原町魚問屋に、誹名東爲とて廣く知れし男ありしが、其家内猫を愛す事他にこえたり。ある夜盗賊入て伺ひめぐるを、其猫見つけてしきりに啼さはぎ、後は飛付などせしかば、家内音に驚き追／＼に起出けるに、賊は早々逃失たり。夫より已來は又格別に愛せしとぞ。右に出す犬は、性陽物にして飼るゝ人を知り、又因緣有てや伊勢參宮する時抔時々有。夫とは違ひ猫は陰獸にて、年旧く成ては妖怪をなすもの也。されど東爲が猫の如き、主恩を知り賊を追退けしを見ては、人として報恩の情なきは禽獸にも劣るべし。是予が若かりし時也。

一猿丸 ねこま 宇治拾遺ニ、美作の國に中さんかうやと申神おはします。かうやはくちなは、中さむは猿丸にてぞ有ける。その神年毎の祭りに必人の娘を生贄に取けるを、吾妻の方の狩好む武者、はからず爰に來りて猿丸を從へ、生贄を止めし事有。畧文 但猿丸とは猿の事也。又猫をねこまといふ事、徂來成べしニも、ねこはねこまの略、こまといふもねこまの略言也と書れたり。因みに云、猿丸太夫は百人一首其外の抄物にも官・姓・時代等知れず。鴨長明方丈記ニ云、近江國田上に猿丸太夫が旧跡有レ之と云々。又、丸は人の名に何丸・角丸と云は、是諸王抔にある事也。大夫は從五位に成給ふ時に付る也。其名を後迄もよべりと云。又平家物語ニ猫間中納言光高卿といふ有。木曾殿出會の時名をおかしがりて、猫殿／＼と嘲勞(マヽ)せられし也。この猫間殿と申も所謂有ける御名也。猶尋ね見るべし。

一惠心僧都の妹安養尼のもとへ强盗入て、物どもみな取て出にければ、尼うへは紙ふすまと云ものを引着ておはしけるに、姉なる尼のもとに小尼君ありけるが走り參りて見ければ、かの賊小袖一ッ取落し行けるを、尼前の前へ持て出られければ、尼の給ふやう、是も取て後は盗人我ものとこそ思ひつらめ、いまだ遠くは行まじ、持ておはしましてとらせ給へとあるに、小尼君やゝと呼かへし、これ落されたるまゝ參らせんといひければ、盗人共立留り、暫し案じたるけしきにて、あしく參り

にけりとて、取たる物共を返し置て歸りけるとなむ。

盜泉もすめば凉しし性は水　素外

一昔賤しきものゝ釜失たりけるを、隣の腰居が盜みたりといひつぎ有て、雜物を搜し取出したりけるに、共もの申けるは、手を以てこそゐざりあるきゆへ、手をはなれてはいかで財取侍るべき、他人ぞ盜み置て侍らんと陳ず。其義なきにしもあらねば相論はかゆかざりしを、檢非違使謀をめぐらし、腰居が申所不便也、此釜は汝にとらすべしと仰有ければ大に悅び、頭に打かづき居ざり出けるを見て、かたわの身なれど扨は斯して盜てけるよなとさとりて、科に行はれけるとぞ。愚云、是は又よそとせばかり以前なりしが、草庵の几上に竹細工の小さき糊入を置しに、いつの頃より歟見えず。其後掃除せし時額のうしろより出たり。極めて鼠賊の業成べきが、いかゞして鴨居の上へ引たりけむ、ためし見んと思ひて、又のりを入、居間の灯を消をくに、亥過る頃ことく＼と音す。よて秉燭して是を見るに、己が尾にて彼糊入を卷、しかと腹に押當、柱を揺てのぼりしが、明りに驚き、糊入をおとし、逃うせたり。其智の工みなる事は、腰居が釜にも勝りなむと覺えし。又其後或客の語りしは、陶器に入し油を鼠の甞るには、其口より尾の屆くだけさし込、己が口にてしごきのむとぞ。

一袋草紙ニ、元慶は大山の別當也。筑紫にて杜鵑を詠ず。

我宿の垣根な過そほとゝぎすいづれの里もおなじうの花

其後上洛の時、山崎邊にて下女の臼唄に唱レ之。元慶是を聞て淚を拭ふと云〻。又良暹が歌也とも云。又俊成卿の哥ニ、

世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれどはなれざりけり

此哥を鏡のくゞつどもの神哥にうたひければ、至りにいたりける哉とていみじう悅び給ふとなむ。其頃永緣僧正此事を聞てうらやみ、我よみたる　聞たびに珍らしければほとゝぎすいつも初音のこゝちこそすれ、の哥を、琵琶法師どもに物とらせ、爰かしこにて諷はせ

ければ、時の人有がたきすき人となむいひける。又敦賴入道も是を浦山しくや思ひけむ、物はとらせずして我よみし哥を目くらどもに、うたへ〳〵とせめうたはせて世の人に笑はれけるとぞ。

蛙等がうたふはむかし誰が哥　素外

一播磨の盤珪禪師は元祿の頃の人なり。法德世に聞え高く、よつて信仰の僧俗夥し。遷化後勅して大法正眼國師と諡す。將禪師、佛道善導きの便に、うす挽哥廿一首をよむ。今印行して世に行はる。爰に其一二を載す。

生れ來りしいにしへとへば何もおもはぬこのこゝろ
希妙不思儀は一ツもないぞしらにや此世が皆ふしぎ
悪をきらへば善しやと思ふ嫌ふ心があくじやもの

又誹何有、

草よ木よ汝にしめすけさのつゆ

一丹波栢原の捨、右同じ頃にて哥をよみ、又誹諧に名をしらる。

いざ摘む若菜もらすな籠の內
花をやるさくらや夢のうき世もの

後に右禪師の弟子と成、貞閑禪尼と号す。

一伊勢音頭、むかしの作者は大休誹諧師にて、發端は時の名高き發句にて書出せし也。就中梅路が作多き歟。虛つきに煎じて呑せ天の河　とうたひしは加賀の珈凉が句也。是は千代と同時代の女にてよき句有。いせ古市中の地藏にては、盆中は勿論、常も客あれば傀儡等うたひつれて踊る。今も音頭に名ある作者ありや知ず。

一梅路、はじめは伊勢川崎といふ處の魚商人にて、日々夫を荷ひて市中にひさぐ。或日皮くじらを商ふに、土地の風俗とて秤にかけゝれば、買人何ほどありやと問に、　霞の中に二〆五百匁。白きに黑き筋ある其見様体を以答えすみやか也。次第に人用ひて點者となし、後には古老のもの、守武の𦾔号をもゆるせし歟、神風館と成、奇作妙句、其頭南北に普く知らる。ひとゝせ加賀に旅せしころ、金澤にてはじめての會に、前句磯邊の体出たる所、梅路が一順に當りければ、いかなる句をやいひ出すと一座息を呑て待居たるに、案じ入けしきもなくて、うつむけてと五文字を出す。先ヅおかしかりき。

うつむけて舟の休みかほしてある　梅路

又後會の時前句、剃氣はあれど咳氣して居　とあるに、

おかしやな捨たいものを盗まれて　、

句案いづれも屈せず、かろ〴〵としてしかも作意深し。但此五文字、其頭つき放す詞といひしよし。夫よりして金澤の誹諧二ツにわかれ、なかばは梅路を信じていせの風調と成。又是は程經て後凉佾が集に、

酒のめど十日の菊も淋しうて

巻つきさうな文が來てゐる　梅路

天狗には寺中殘らずおどされて

使者一通り清盛といふ　、

寐ものがたりは灯がきえてから

米櫃へあづかる錢いれて見て　、

此作者右に云如くなれば文字の事に疎かりしかども、自然に得る所の滑稽なるべし。

一吸露菴凉佾、其先野坡門にありし時は誹号葛鼠。一たび釋門に入し頃の紀行霜の袂に、越の久保田白馬寺にやどる。此禪師、法の中にも文を好み給ひければ、風雅にやつれたるをおかしがりて、三千沙界一圃園、何ぞ旅寐の寒かりしやと問れければ、三千沙界悉破圃園也と荅えしを禪師打笑ひ給ひ、いふ事は禪に似たれど唯菩提心のなからん風人は、深山の猿に似たりとあれば、我もいふ事の侍りしが、實さる事ぞと思ひし。扨夫より加賀の國にうつり、大乘寺の夏に籠りけるに、當寺の和尙師の一棒を受、脫身の工夫に入て長崎の東明寺に安居せられし時、放參の日老たる尼の茶話に、䕶耳はいつも初音ぞ時鳥　と云句を語りけるを和尙餘所ながら聞て、はじめて胸中の疑團氷の消るが如く、おのれ此句をむかし聞かば禪師の欺きにはあはざりしものをと、皆々に垂示し給ひし也。葛鼠思ふ、我安禪の室に入といへども菩提心はなく、只彼風雅の一場なりしかば法の事は覺えず。こは誹諧なればよにとまりて、誠に尊き垂示とぞ成ぬ。愚云、右に出す初音の僧正の和哥、これも脫心の場やこめられけむ、此䕶耳の句と、いはゞ同意同案成べし。

ほとゝぎす又なけ耳は無門關　素外

葛鼠、誹諧の修行は野坡沒後洛の百川漢醫人也。俳諧は支考門、後いせ國と成しが進めに隨ひ、發句は加賀に旅して希因に學び、附句は伊勢に行て梅路を師とす。但北國に在し頃は都因と号し、後淺草に吸露庵をむすび、風神を據として凉袋と改む。是己が壯年の頃の師也。袋子、中頃書家と成て誹諧を怠り、高貴の命を蒙り崎陽に赴き、山水の法を費漢源に得、花鳥の意を熊斐に取て共道にも熟せり。最初野坡門たりし時師弟の發句、

竹に來て猶脚早きしぐれ哉　野坡

からかさのかつら男やほとゝぎす（一ニ我ヤ桂男）　、

晝の蚊の夢や一筋いもの蔓　葛鼠

むら〳〵は茶色にかすむ小春哉　、

加州金澤にありし頃是亦同じく、

春たつやつらゝの鉾のしづくより　希因

名月や風さへ見えて花すゝき　、

浦の春千鳥も飛ず明にけり　都因

海を出てぬれぬ月日やさ月雨　、

淺草の庵成たる事を諸〻へ申觸るとて、

笠ほどな庵とおもへ初しぐれ　凉袋

斯てより遠近の門人つどひ寄つゝ、誹と畫をもて世に鳴し也。

ひらけてより凉し袋の風の聲　素外

兎角して其後居を神田に轉じ益行はれしを、知命に及ぶ頃思ふ所有て誹諧の唱えを止め、古事記に寄て片歌の名目を起し、是亦一家をなせし也。又云、凉袋、性旅を好むの僻有。よて其已來も諸〻に曳杖し、將洛に登りし時、やごなき方より片歌につきて有がたき御墨附を下され、風流の上の規模とせしが、沒後其妻彼御書を愚に讓らん事を申送る。我傳へをも受ずして、得べきやうなければ固辭せし也。右の御書今何方に傳りし歟。

一之終畢

凡、人壯年の時は、嚴寒をいとはずして極暑を苦しむもの歟。今おのれ耄近きに及びて苦樂大に反し、冬は寒夜に寤覺して時告る鐘の聲遲に倦、夏は心のびやかに臥て短夜の鷄の音明早きを悅ぶ。よて夙に起出て前栽のみづ／＼しき木草を愛し、晝は風のたよりよき處に座して炎熱を凌ぐ。扨夕影となれば、或日は田圃の眺めある亭に招かれ、又は河邊に誘はれ出て風景に暮るを知ず。かく有がたくも思ふ儘に老を養ふ物から、みづから三夏の題をまうけて發句す。爰に日々草菴に訪寄門人、右の題に倣ひて追々これをよめり。此事貴家にも聞召て、何某くれがしの君よりも同じ題の玉章を賜り給ふ。女案塵、其吟の紛れちらむ事をおもひ、ひとつ稿に書とゞめしを、たれかれ進めて印行すと告るに、ともかくも衆人に隨ふべしとうち任せやりぬ。

一陽井老人述

文化八辛未林鐘

誹諧夏三月題

第一 卯月の木草 ○卯の花 漢名水晶花又白判花の說有。猶識者に寄て聞べし。花うつ木。雪見艸。垣の花。月夜 花の白きが月に似たり。うの花くたし 降 四五月の雨を云、但くたしとばかりは當流降物に非ず ○牡丹。廿日草。深見草。鎧ぐさ。名取草。富貴草。花の王 是は今櫻をもいへば、句作心得あるべし ○杜若 これかきつばたに非ずといへど、いにしへより通用也。顏吉花 漢名燕子花

第二 皐月の田畑 ○早苗。早乙女。田植。田植唄 ○瓜 并ニ花。眞桑瓜 本唐國也、昔みのゝ國眞桑村より作出し、今は夫を名によぶ也。白瓜。胡瓜。冬瓜(カモウリ) 今江戸にこれも瓜といふは色なくて別種也。ほし瓜 此外瓜數種あり、今取扱ふのみを出す。

○茄子 并ニ花 漢名崑崙瓜 鴫燒 辛茄あへ等

第三 水無月の川 ○涼し。露涼し。納涼。涼船 ○川狩。網(サデ)。四手網。投網

○形代(カタシロ)。撫物。川社 月又さみだれたるのみ合せし說有。いにしへは卅日にかぎらざる也。今は晦日のみたし給は、十九日より卅日迄也。これ御祓也 ○あらに。夏祓。夕祓。御祓。名越の祓 汲の字をはらひなごむるにかへかく申とも ○はらひぐさ。菅ぬき。茅輪。麻の葉流し

誹諧奈都美津起 一之巻

卯月の木草

卯の花

卯の花の山路やこれも銀世界　錦車
さくらから續くや雪の花卯木　錦交女
卯の花はむく起の目に寒さ哉　冬央
卯の花や淡きは詠め倦ぬもの　亀幸
うのはなや雪の垣根と咲かくし　文賀女
卯の花や垣にすゞしく見せる雪　升來
卯の花のいよ〳〵白しやつれ垣　雀媛女
おぼろ夜のうつりや花のうつ木垣　素麿
卯の花やあからむ夢の畑境　時麿
卯の花や徑によりし徳もあり　如水
卯の花や人なら下戸といはむ色　理外
うの花や綿ぬく頃にわたの色　左人
卯の花も解る螢と見る夜は朧　亀紫
卯の花や青葉まじりのはだれ雪　[illegible]龍
卯の花を雪と散すやむら雀　吳竜
鷄啼や卯の花垣のはやしらみ　凉山
うの花や霜夜を思ふ神樂笛　蒼洲
はつきりと卯の花白し雨もよひ　素玉
卯の花やからたち垣も花さけど　素德
卯の花の波に兎や岨のみち　素隣
蚊くひ鳥卯の花のゆきに鳥とも　霞外
卯の花の露重げ也梅雨近く　其葉
うの花やまだ綿ぬかぬ老が衣　素翠
うの花や木の間こぼるゝ月の色　玉翠
卯の花やきのふと同じ時あかり　仙兒
うの花やまだ咲さかぬ宵月夜　玉英
うの花や朝茶のいろは猶黄ばみ　一秀
暗き夜の垣のしなりや花うつ木　素蓬
うの花や月なき夜にも垣朧　靜雨
うのはなや山には雪のなき時節　輝月
卯の花や月なき宵もかつら影　紫山女
卯の花にしらぬ涙よる垣根哉　蓮車
うの華や卯月に寒きはなの色　春裡

混合

卯の花の雪や日なたが積はじめ　素行

色涼し卯の花月夜卅日にも　言外
うのはなやしのび車は闇の方　五蝶
卯の花や枸杞とうこぎを雨隣　百我
卯の花や雨に書をよむ窗明り　斗溟
卯の花やさらし干てふ里の垣　女 沾紫
卯の花や枝道は温泉の箱根越　素外
衣ほす香具山もかくやはなうつぎ　寛之
卯の花やまだ片言のほとゝぎす　候得共
闇の夜や卯の花ひと木垣の窗　奇峰
晝靜かにうの花見るや間の宿　素牧
卯の花の雪折ならむ崩れ垣　都双雅
うの花を暦や貢ぐ氷のはじめ　花外
卯の花のちるやひよこのあさる庭　花丸
卯の花の雪や月の夜なく鳥は　素轉
うのはなや佛は黑き茶の産湯　素周
みたらしや岸のうの花影淸き　龜流
うの花の垣やからすの猶黑き　雨簾
うの花や驛からわかる道しるべ　意外
卯の花やまだ田植女も色白き　分香
うの花や小野照崎を月に笛　仙里
うの花を幣の手むけや道祖神　舊香
卯の花や卯月の不盡のふもと道　素綾
卯のはなや入は淨衣の瀧詣　花慶
卯の花や城の麓のやしき垣　米粒
うの花や水に積れる雪歟とも　烏孝
卯の花や月にさまよふ田舍道　壺外
うのはなや藏も白壁ならぬ里　素粒
卯の花や妹が垣根にさらし臼　白英
卯のはなや長百姓の外がまへ　社来
うの花のしまきおろしや箱根山　義粒
くれ殘る畑の境やはなうつぎ　木英
月の兎雲のうさぎやはなうつ木　岩閒 雀郎
卯の花や謡いはずとも夏のゆき　、調布
うの花や其雪の夜を杏手鳥　、在泉
うの花やゆきの垣穗に虻の聲　、千朝
卯の花の雪やうぐひす谷ごゝろ　没花 蘭陂

牡丹

富は屋を潤してさく牡丹哉　錦車
曇りたりおのれははれし白牡丹　錦女
花色も花形も豊の牡丹かな　冬央

富貴にも奢らぬさまや白牡丹　龜幸
立添せたしな牡丹に緋袴　素麿
唐織にさくや能ある庭牡丹　左人
牡丹にはむらさき幕や樹屋が庭　呉龍
清きうへにたくましき花や白牡丹　凉山
八重牡丹露の白きに又ひとへ　蒼洲
見物も狂ふさまあり花ぼたむ　龜榮
福やかにさくや牡丹のはなの笑み　龜龍
ぼたむかな獸の中の獅子も王　霞外
牡丹今さくや郭凞が筆は爰　其葉
返禮歟牡丹に招く菊つくり　素隣
大粒な音やぼたむの雨障子　玉翠
白牡丹この庭きりの月夜かな　一秀
大白の牡丹や目だつ虫ひとつ　素蓬
夕日遲き牡丹や花の不老門　輝月
富つゝも奢らぬ花や白牡丹　些山女
荷ふたり牡丹に富と貴きを　連車
牡丹哉香ものゝふの花の勇　春裡

廿日草

見に入も來るや十日の廿日草　升來
廿日ぐさ菩むや握るその日數　素玉
照す燈に宵闇はなしはつか草　仙皃

深見草

色に香にすがたに愛もふかみ艸　文賀女

鎧草

風いれの頃に又さけよろひぐさ　玉英
さきにけり花を兜によろひぐさ　靜雨

名取艸

いさましな治世にも武の名とり艸　時麿
奇花珍花げにや富貴の名取草　素德

富貴草

邯鄲の夢たゞや蝶も富貴ぐさ　空媛女
花びらの耳たぶ厚し富貴草　如水
田樂で見る花ならずふうき艸　理外

花王

植し鉢もこれ南京の花の王　素翠

混合

ぼたむかな人のさかりも十九廿　寛之
大兵にさくや牡丹は花の關　素牧
植て見たし金一升の地に牡丹　右外

祈願所は庭もめでたき牡丹哉　（女）糸園
座敷出來て新分限者も庭牡丹　素綾
さくや牡丹威有ておもき花一輪　素久
夏來ても春の衣紋やはな牡丹　分香
花壇出來し寺も福地の牡丹哉　舊香
牡丹なれや花びらにきく雨の音　千來
ぼたむ哉体ゆたかなる花のさま　五蝶
花は富めど莖は驕らぬ牡丹哉　龜流
福耳のあれや牡丹のあるじかも　秋策
牡丹今ぞ笤むたからの珠の形　在泉
傾城も傾むかせたる牡丹かな　蘭陂
咲けらし大腹中にはなぼたむ　素登
ありとても上見ぬ花の牡丹哉　千朝
巖石にまけぬ牡丹のさかり哉　世義
獅子口にいけても見たき牡丹かな　爲有
世わたりに寶歩かぬぞ花牡丹　百我
暮るまで身じろぎもせず花牡丹　烏孝
往つ來つ牡丹に眠る蝶ふたつ　金馬
牡丹かな雜劇て見る花ならず　都奴雅
公時が笑顔もかくや紅ぼたん　途外

玉ならば夜光歟闇の白牡丹　花丸
あるが中に花の品まで白牡丹　曉柳
獅子を飼て見たし牡丹の眞さかり　壽溟
牡丹いつかゆるしの色も稀に咲　花慶
庭牡丹かの白かねの猫もがな　花外
釣臺なおも／＼鉢の牡丹かな　庶富
葉がくれにありあけ月や白牡丹　左簾
德ぞ牡丹花に猥（[illegible]）雜ものはなし　竜外
富貴地にあり／＼と咲や花牡丹　規外
活ぬるも廿日はもたむ花ぼたむ　素粒
もらすなよ露もぼたむの掌　義粒
一りんの花はきよせし牡丹かな　田社
花深う蝶おどろかぬぼたむ哉　木英
拜見といふべき花や庭ぼたん　素塵
琴唄や庭も牡丹の富貴自在　在郎
睡猫のいよ／＼くろし白ぼたむ　五計
夏來ては一華當千の牡丹哉　素外
取葉げ牡丹に猫も花に駒　（鎌倉）英珠
筆太ぞよけれ牡丹の銘の札　（常存中）素弟
五日の風十日の雨後や廿日草　宜秀

角力なら十日でちるをはつか草　意外
佛のかはらで愛つはつかぐさ　女沾棠
ほの笑むは朔日頃歟はつか草　素外
客繁し後の十日のふかみ草　透瀨
蝶は見えかくれつはなのふかみ艸　素外
さくまでのその丹誠や深見草　米粒
緋おどしの武者ぶりゆゝし鎧草　春瓜
和らぎし世や花の名によろひ草　素外
五日めの風も通さじよろひぐさ　規外
ものゝふにまづきて見よ歟鎧ぐさ　白英
醉臥て見るは似げなし名取草　有市
力こぶしつぼみに見せつ名とり草　從一
稚子もむさと摑まず名とり草　斗溟
人ならばこや寛活の名取草　素外
目にたのしく耳にも果報富貴草　候得共
奥庭の猶うるはしやふうきぐさ　社時雨
其庭も屋はもとより富貴草　言外
白に紅ににしき重ねつ富貴艸　曉柳
たつぷりと咲たり花の富貴草　、女賀重
白かねに黄がねの蝶やふうき艸　蘭兒
この花に雅俗はあらじふうきぐさ　呂舟
ふうき草このひとひらは銀盞歟　爽逸
瑠璃燈に夜のにしきや富貴草　素周
花の形も大黑頭巾ふうき草　素外
優美なり背柏が牛も富貴艸　常府中五柳
大雨頻りかねて覆ひな花の王　調布
貴妃は又君を愛し歟はなの王　素外

杜若

辨天の手染歟池のかきつばた　錦車
飛石の爰に有たしかきつばた　錦交女
絞りより紫白位はあり杜若　冬央
泥中に貴きいろやかきつばた　亀幸
おのづからむらさきも江戸の杜若　文賀女
濁りなし水はともあれ杜若　升來
泥中の玉や根に持かきつばた　奉媛女
咲ばえや築山褶濃かきつばた　素麿
折事はゆるさぬいろや燕子花　如水
影を繪とゆく水に數やかきつばた　左人
花を見る蛙のつらやかきつばた　亀榮
萬歳も鍬とるころやかきつばた　亀龍

つばくらも白きは稀ぞ燕子花　呉龍
和らかに淀むながれやかきつばた　凉山
田舟うけて蜘手にこぐや杜若　若洲
杜若蟬やもぬけのからころも　其葉
にくまるゝ色目にすゞし杜若　仙皃
かれいひに水も旬也かきつばた　玉英
梅は匂ひこの花は色やかきつばた　一秀
ゆく水も色は奪はずかきつばた　素蓬
春夏を水にへだてつかきつばた　輝月
かきつばた畫工みも筆に限りあり　柴山女
似たりとはあやめ贔負歟杜若　連車
中に江戸を都の色やかきつばた　春裡
あふたりな京の水にもかきつばた　靜雨

顔吉花

水鏡見るほどあるぞ顔よ花　理外
どう見てもおのこにあらず皃よ花　素玉
八橋や在五の昔もかほよばな　霞外
いろ風情なんな形なり顔よ花　素翠

混合

きのふまで馬洗ひしかかきつばた　奇峰

豆蟹の穴から見るやかきつばた　雨簾
燕子花中にしろきや鷺の友　素轉
道で咲そゆろや土産の杜若　千來
朝起は氣のまめ男かきつばた　逸外
昨なれや夏日は池にかきつばた　素外
蔓草の花ならねどもかきつばた　宜秀
すむ水に足の跡ありかきつばた　金馬
さくや濃く江戸の色なる杜若　賀重
年月の古池清しかきつばた　素久
かきつばたさくや昨夜の雨の池　有市
ゆく水のなりにかたちや杜若　玉柳
殺生も禁斷の札やかきつばた　素弟
水くさ生し池に一際かきつばた　社來
折かねつ蛭が游ぐてかきつばた　田社
ぬしありと闇沼ながらかきつばた　五計
一二りん飛はつばめぞかきつばた　英玦
杜若さくや世に出しむかし杭　簾富
色に愛て魚も躍る歟杜若　秋策
柵みも土橋もはえつかきつばた　爲有
庭にあらば八ッはしかけむ杜若　壽溟

日はいまだ朝むらさきの燕子花　素登
かきつばた咲せつ庭の池之坊　仙里
杜若咲てぞ人を誘ふ水　左簾
かきつばた暮も見よとや花しろし　右外
かきつばた花も蜘手に咲にけり　昌舟
江戸自慢色に見えけりかほよ花　素行
むらさきは江戸にのみかはかほよ花　社時雨
業平のむかしぞおもふ皃よばな　春瓜
花に葉を松かさねとも顔吉花　逢瀬
かほよ花の鏡や池に月のあさ　素塵
影水にかほよ花ぞやすき額　夷逸
むらさきのはえつ帽子の顔よ花　従一
外こゝろ守宮やまもろやかほよ花　世義
宗鑑に似ぬぞや似ぬぞかほよ花　素外

追加　混雑

うのはなや入ても三日の薄月夜　琴志女
手入まで富てとゞきし牡丹かな　〃
鷺下りてけしきを添つ杜若　〃
獅子鼻の僕やはなさく牡丹守　素兆
うの花や鄙びし垣に愛相もの　〃
紅白の色も目だつや富貴卿　落山
杜若溫泉や涌山にわかぬ沼　〃

鬼貫獨言に、雪と見て寒からずと書しが、今年は、

其寒さうの花月夜ゆき歟とも　素外

同書に、深見草はほこりかに美くしと

金屏の極彩色やさく牡丹　〃

又同書に、杜若を洩せしは仇〳〵しきと憎みし歟

見ればこゝろ動く流れや顔よ花　〃

玉池雜藻　二　　一陽井素外誌

一供ニ郁子(ムベ)ノ　昔天智天皇の御時、近江國高島に三夫婦揃て長壽の民あり。此事叡聞に達しければ、帝行幸ありて常に食するものを尋させ給ふに、此むかふの隱岐の島に一ニ奥の嶋猶可ㇾ尋ある所の郁子と申菓を取てくらひしよしを奏す。左あらばこののち年〻夫を取て奉るべき旨勅有けるにより、今に至るといへども絶ず、十一月朔日に献ずるとぞ。愚云、當時は又江戸巢鴨邊の樹肆、爰かしこに有。其枝は常盤蔦の如き蔓物にて小白花を開き、實は烏瓜に似て色紫紅、味ひ酸甘し。又貴家にも有て已にも給はりし也。

一菅家幼き時よませ給ふ御歌、　梅のはなべにの色にも似たる哉あこが顏にもつくべかりける。一休禪師の書るものに御阿古女郎と有。是は御中居と云に同じと、

一時軒が續無名抄ニ出。

一淸巖茶話ニ、上手になるものは、はじめから見ゆるなり。

家隆卿稚くて、　霜月に霜の降こそ道理なれなど十月に十の降ぬぞ、とよみ侍るに、後鳥羽院、重寶に成べき物とて御感有し也と。

一吉野拾遺ニ、藤親房卿十歲の時の詩ニ、春來ニ品物都テ靑容。木母花開テ香正濃ナリ。今日大平ニ洞且。家〻醉賞更ニ飛ㇾ鍾(サカヅキ)ヲ。此句を御覽じて、上古の名士にも劣るまじと勅賞、誠に有難う思ひ暮し侍りしか。下略　木母に因みて云、湖海新聞ニ梅を木母と名付と有。又角田川梅若の塚ある寺を木母寺と号す。又云、昔は梅と栂通じけるにや、嵯峨集ニ、雲村、諱名は友梅、栂尾ニ至て此山の名は我がいみ名の字也と。又栂の事、關西にてトガ、關東にてツガと云り。

一伊勢山田乙由は、歲ゆかざる頃より誹諧を好みしが、桃靑杖を曳し時、席へ出し連衆其よしを申に、翁、發句有やと問へば、臆する体もなくて、

結構な日をなきくらすかはづかな　　乙由

桃靑自然の誹才を感じて、成人せば適の作者成べしと賞せしよし。はたして後麥林の名を諸國へ響かせ、江

戸の柳居・加賀の希因も此門に遊びし也。

一木は例論名の草の部も芽出しから　　素外

一麥林、ある時古市の芝居へ行しに、隣の棧敷に所の遊女客に添て來たりしを、相しれる女故物いひ、盃など取かはせしが、其翌日も社中に誘はれ、又見物にゆきけるに、きのふの遊女、向ふ棧敷にありて禿に菓子持せ、けふは遠く隔たりぬるよし申おこせしかば、其禿が腰帶を解て、

うき艸やけふはあちらの岸にさく　　麥林

と書て遣しける。彼誘ふ水あらばの古哥に寄て、うかれ女へ贈れる詞にはよしあるうへ、時にとりておかしく、雨棧敷の客即事の活作に感ぜしとぞ。其頃殊に世に聞えし句は、

よいものをわらひ出しけり山ざくら　　麥林

かんこ鳥我も寂しい歟飛でゆく、

鹿の聲こゝろに角はなかりけり、

祖父祖母の京にも多き十夜かな、

又、肌寒きはじめや星の別れより　と云句は、歌人眞淵翁もとの外感心のよし、時々申出されしと凉帒師の話也。

一書狀、百文清規ニ出。一口上、臨齋(濟)錄ニ出。一口狀、清輔袋草紙ニ出。愚云、狀は陳也と有て、のぶるともよむなれば、書狀は事々を書のべ、口狀は物々をいひのぶる歟。又口上は下より上へ申をいふにや。通例には口狀よろしかるべし。

一嵯峨帝、或時、一ッ伏ク三ン仰不來待書暗降雨戀筒寢[カウフライタイシヨアンカウウレントウシン]と書せたまひて、小野篁にこれをよめとのたまひければ、

月夜には來ぬ人またるかきくらし雨もふらなむ戀つゝも寐む

此歌古今集には、よみ人しらずとして、わびつゝもねんと出たり。

一菅神御作の詩ニ、東行西行雲渺々。二月三月日遲々。と有を、或者北野の寶殿に詣て詠じける其夜の夢に、やんごなき人仰られけるは、とざまゆきかうざまにゆくもはるばる。きさらぎやよひ日うらうら。とよむべしと覺えて夢さめたり。定めて天神にてましませる成べし。此とざまかうざまニ讀々有。夫が中ニ、とゆ

きかく行と心得てよき歟。（今昔物語）

一堀川院の御時五月五日江師（帥）、菖蒲を奉りたりける狀に、

進上　水邊菖蒲　千年五月五日　大江爲武

此狀よむ人なかりけるに、師頼卿案じ得てよみ侍りける。

たてまつり上るかはべのあやめ草千とせのさ月いつかたえせむ

一或所に佛事有しを、唐人二人來て聽聞したるが、うちならしに八葉の蓮を中にして孔雀を左右に鑄付たりけるを見て、一人の唐人、　捨身惜花思といひけるを、今一人が聞て打うなづきて、　打不立有鳥といひけり。聞人共こゝろを知ず。或人のどかに案じつらねければ連歌にて侍りける。

身を捨て花ををしとや思ふらん

うてどもたゝぬ鳥の有けり

此連哥、つくば集には附句を前句に付替て出たり。愚思ふ所あれどしるさず、重て述べし。右二ヶ条は古今著聞に出、わけて始の哥は諸書に載て人口にあれど、同じ類ひ故爰に双べ出す也。誹諧には其角が發句に、乾ヶ兌坎震離ゝ艮坤巽　この脇書に、

空や秋水ゆりはなす山おろし　と御よみ候へ。

下の字自然にまいりゆこそ彌三五郎にてゆ。

一文學上人、高雄興隆の頃其邊見めぐり給ひしに、清瀧川の上に猿二三疋在けるが、一ッの猿、岩の上に仰向に臥たり。其處へ鳥の飛來りて、其猿死たると思ひ　歟、あちこちをつゝき、目をくじらんとする時、猿かれが足を取て起上りけり。其時外の猿長き葛を持來りて鳥の足につけ、水に投入、一疋の猿かづらを捕へ居れば、二疋は川上より魚をかけるさま也。是人の鵜つかひけるを見て、魚を取んとてしけるにや。されど其益なく鳥終に死ければ、打捨て猿共は山へ入にけり。ふしぎなる事をまのあたり見しとて、上人語り給ひしとぞ。

まねぬ事をしらざるや寄て鵜の呵嘖　素　外

一上野國烏川にて、鵜のまねする鳥といふ事を宗祇法師歌に、

取も得ぬ魚のこゝろも耻もせで（をイ）うのまねしたるか

らす川哉

又、乙卯春歳旦の發句に、愚はこれを反して、

　鵜はまねもならじ今朝はつがらす　　素外

一引雁　引鴨　當流通俗志二月の部ニ出。又花實年浪草ニ、

　引雁の聲によろづ代契るらし御代も長尾の浦ののどけき

右集ニ、此哥の事椎本派の誹士に問しに、雁の聲を引事に荅しよしを云。愚も同流蒼狐門なるが、師説は左に非ず。歸鴈に續け引雁・引鴨と出すは、歸る鳥の事也。今も北越にて、春になれば引鴨を取んと、未明又黄昏に山或は屋の棟に登り、坂鳥網・起網（ヲコシ）抔いふを懸て是を獲とぞ。又三月に引殘雁と有は、二月に歸おくれしを云。又古事紀（記）ニ控鳥（ヒケ）と云事有。是は日子遅神（ヒコチノ）歌ニ、上略いとこやの（寐床屋）。いものみこと（妹命）。むら鳥の（群）。われいなばひけ（吾行控）とりの（鳥）わがひけいなば（吾行）。なかじとは（不泣）下略　ひけ鳥を、むれいなばの枕詞によめる也。

一三千風和漢田鳥集、西行法師歌ニ、こゝろなき身にもあはれはしられけり鴫立澤の秋の夕ぐれ。説ニ、此哥鴫に非ず、死木にて卒都婆也と。又四木・四儀、或は神木也といひふらせど、いづれの古書に有ともしらず。大かた歌道の僻案成べし。ゆめ〳〵信用すまじき也。鳥の鴫第一の證據には、和哥所雅章卿、彌生の頃此所へ御立寄にて、

　哀れさは秋ならねどもしられけり鴫立澤のむかしたづねて

此哥、御眞筆の短冊に鴫の字にて、所も此所に定まりし也。又説、此心なしとよまれしは、賤・山がつの心なきにも非ず、卑下の心なきにも非ず、何鳥にてもふと飛立て、無念の念・無心の心を誘し出したる當意即妙が肝要成べし。愚云、此御歌につき冷泉家にてよみ給ひしとの説もあれど、右田鳥集は印本にて世人も知る所なれば、證なき事はしるしがたき歟。又碑を此澤に建し時よめる哥ニ、

　哀れしれむかしの秋のそれならで鴫立澤に殘す我名を　　三千風

此外鴫の哥、右集にのすれど、此所にてよみしのみに

も非る歟、依て略。

春の吟鴫立てなきものは何よぶことり　　、

又、右同集に、古き屏風に有しを感じ覺えてと書て、

西行のすがたは秋のゆふべかな　　梅翁

置字が過なし要には秋はこの法師すがたの夕ㇾ哉　として、嵐雪・其角とならべて三夕の吟を出す。又此句先年短册にて予が見しも、秋は此　なれば、法師姿の方極めて再案なるべし。

道哥これぞそれと鴫たつ澤の夕ㇾ哉　　宗因

筧の灯の澤にちら〳〵鴫たちぬ　　蒼狐

鴫もくれからすも暮て鷺つつくり　　素外

眼に秋を湛える澤の夕ㇾかな　　、

夏日此あたりに旅して

常にたつ鳥さへ麥にあきのくれ　　凉袋

一西行法師、長月廿日餘り江口の里にて村しぐれのしければ、賤がふせ屋に立寄、晴間まつ雨やどりをかり侍りしに、あるじの遊女ゆるすけしき侍らざりしかば、

世の中をいとふ迄こそかたからめ假のやどりををしむ君哉、とよみて侍りしかば、遊女うち笑ひて、家を出る人とし見ればかりの宿に心とめなと思ふばかりぞ、と返しして、いそぎ内に伴ひ入侍りき。下略　是は過し冬岩槻の門人、江戸に出てかへるさ雪にあひしが、草加の驛にてはや暮かゝりければ、旅舍りの女ばら、我がちに競ひとゞむるとて雨衣の袖引裂たり。されどいそぎ道成しかば、からうじて行こせしといひおこしぬるに、

桐油の袖いとふまもこそあらざめれ雪のやどりを留女には　　素外

一朔日頃の月　源氏藤のうら葉の始めに四月朔日頃と書て、末に至て月はさし出たりと有。或書ニ是七日迄を朔日といひて宜しきよし故也と。又うき舟の卷にも朔日頃の夕月夜と有。愚云、朔は月立（ツイタチ）、晦は月隱（ツイモリ）也。月立頃の頃の字にて思へば、朔、一日に限らざる歟。

けふも見たり朔日頃の二日月　　蒼狐

又、西行の哥、其きさらぎの望月の頃、とある其忌日を十五日・十六日の說あり。此歌は辭世といふにも非ず。

只其頃死なむものをとねがひよまれし歟ならんを、今案十五日とする也。又薩摩曆を見るに、十四五六日の內に望の字をしるす。是大小によりて違へば也。併ながら撰集抄ニ跡を隱せし人を美れし文所々に見ゆれば、西行も跡を隱されし故、日定まらざる歟ともいへり。

一宗祇法師三十歳ばかりの時、猪苗代兼載に寄て連歌の事を問給ひけるに、兼載云、惜い哉歳十ヶ年闌(タケ)たり。連哥は廿ヶ年の功を積ざれば至りがたし、歸られよと云。宗祇又云、然らば十年晝夜つとめなば廿年にあたらむと。兼載大に感じて、至道の器量也、我及ぶ所に非ずとて學びの道を傳へしと也。雜々拾遺ニ出。又鬼貫獨言ニ、宗祇法師は連哥にて餘に双ぶ人もなしといへど、祇公一人の上には、今五とせ居給はゞ五年の功、十とせながらへたまはゞ十年の功も有つべき事にこそと。愚云、執行は祇公の勤功、又鬼貫が詞の如く成べし。已も年月其事を思へば、勿レ謂今日不學而有ニ來日一。勿レ謂今年不レ學而有ニ來年一。日月逝キヌ矣。歳不ニ我延一。嗚呼老タリ矣。是誰ガ之愆(アヤマリゾヤ)。又學ヘ者速追テ漸ニシ成ル。一滴不レンバ止滿ニツ大器ニ。この語を二枚の聯とし、柱にかけたり。されど志のみにて書に暗く、今はた老にたれば、己があやまりを思ひツヽ日月を過すのみ。

一耳底記ニ、物の注は宗祇のせしほどのはなし。短かくて、長く書たるよりはよく聞ゆる也。是ものによくたけたる故ぞ。又物の委しく成たるは宗牧より歟。人によく物ををしえたるものにて有しと也。又、宗長は古今傳授したれども、餘り念をも入なんだと也。我は連哥師にてこそあれ、道を傳へむよりは附味だによくばといひしと也。略文愚云、宗長法師は祇公門人の中にもわけてまめやかに、終焉の際迄も隨身し、駿州桃園に葬して其記を書す。右物に搆はれざりしとあるは、禪ニ不立文字といふが如く、道を相極めて上の一見識成べき歟。此人、元沼津の鍛冶が子なる事をいさゝかも隱さず、自分より物に書載し程の大器の人也と。又、宗養は連哥いかにも細かに有し也。もとめたるやうなる事は一圓なく、只狹の上風など云事也。夫が誠によい物が出たよ。、是でなくばといふやうに有し也。愚云、先師、此宗養法

師の事を引て時〻示されしは、何にても句は作にある也。夫は古し、これはおかしからずと、其物を嫌ひ除くべからず。作意の自由だになさば、古きものも新らしく、おかしからぬもおもしろき事にいひなすべし。されば其自在を得むには、ひたすら修行するにはしかじと。

一顯昭と寂蓮　顯昭云、哥はやすき物也。無才の寂蓮すら哥はよくよむといへりければ、寂蓮云、哥は大事のもの也けるよ。あれ程大才なれども、顯昭、哥は下手也といひしとぞ。されば俊成卿、嫡子ニ兵部卿成家と云し人有しかど、寂蓮を哥道の養子にせられし也。其後定家出生のうへ寂蓮斟酌有しと云。又家隆は若かりし時俊成卿に哥の事學れしに、古實はさし置、只哥よむ事ばかり問れしを、俊成ことの外褒給ひしよし。愚云、誹諧にも句者と指合くりの二樣有。此事浪花春耕が糸切歯ニも著す。但、昔の句者と唱えしは、万事を心得し上、指合に着せざるを云歟。今世未練の人、只句者と計聞はさみて不法の數句を吐は、愚者の甚しき成べし。

一幽齋公へ、いり豆に青海苔を付たる御菓子の出ける時、

　君が代は千世に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむす豆

此豆と中一字をもて、ざれ哥となし給ひし。其御席別して此哥叶ひ侍る。御場所なれば人〻厚く感じ給ひけるとぞ。又いづれの歳の暮に歟、

　寄としの目にはさやかに見えねども豆の數にぞ驚かれぬる　　桃青

右は豆の字に因みて出す。次は寄としの心を双べて、

　ものゝふのやそぢも祝ふ御代なれやこゞまぬ腰の弓はお袋　　素外

武家の母の年賀なれば、かくよみて贈りし也。夫、母たる人を袋に比らべ侍る事は、胎中に其子こもれる故也と、後宮名目に出侍るよし。又山崎垂加翁云、俗に人の母を袋と稱するは諸胞胎の義を取と。

一或日紹巴茶に行しと聞給ひて、幽齋公、　花香ある人をば御茶に呼るれどこちや又跡に殘る壺底。紹巴返しに、　殘るこそ猶も別義にはな香あれうちある人はちや〳〵と呼れず。又肩ぬぎの葉茶壺の銘、はつ音とある

に、貞德、弓取のひきてたてむと思すにや葉茶壺迄も肩をぬぐらむ。又一首、葉茶壺を初音といふは松の葉のかはらぬ花をためしにやひく。葉の替らぬ松に因みて云、愚、性齒弱かりしが人の勸めに、松葉塩といふを製し、每朝齒に用ゆべし。其方は、春、松のみどり立しを刻みて、一升に塩一升を合せ、霜となして磨けば胃火を消し、齒を固む。みどりなき時には松葉又松脂も宜しきと也。かく敎えのごとくせしに漸ゝ居り、先ヅはぬけじとおもふものから、其翌年元旦に、

　齒固やよしゆるぐともかなめ石　素外

鹿島の神の惠みもや有けむ、いよ／＼固く成ぬれば、又の歳の朝は、

　齒がためや歲とむかふかゞみもち　、

今は老て追ゝぬけしには詮すべなし。其後或人より塩の方、問におこせしに、

　(考)常盤なる松のみどりを齒藥に今一塩を合せてぞ燒　素外

一曉月法師は爲家の御子にて阿佛尼の腹也。はじめ爲守と云。承久の亂に清水寺に在しが、勇士ならねど鳥羽院に御味方申、宇治の手にむかひし所生捕れ、旣に刑に及ばむとする時よめる。

　勅なれば身をばよせてきものゝふの八十うぢ川の
　瀨にはたゝねど

泰時、此哥に感じ、哀れと思ひてゆるし歸されしとぞ。又、此法師を狂哥ばかりよめると覺えし人有。元來哥よみにて上手也。夫が中に、

　遠く成近くなるみの濱衞なく音に汐の滿干をぞし
　る

　此たびは定めて和哥のうら千鳥もるゝ數には入ぞ
　しつらめ

或人此法師に向ひて云、和尙はよき哥多くよみ玉ひしが、近ごろは狂哥のみにていかゞと申ければ取あえず、

　曉月に毛がむく／＼とはえよかしさる哥よみと人
　にいはれむ

又、

　西の宮ひるともなくのむ酒にあしたゝぬ迄醉にけ
　る哉

これも和尙の狂哥也と。

一後堀川院の御時、人ゝ集り物語りしける折から、少將、內侍臺盤所の御坪の楓の木を見て、此楓初もみぢのしたりけるが見失ひしといひたりければ、人ゝいづれの方に歟と目を付見けるに、藏人永綱とりあへず、西の枝にこそゆはめと申たりけるを、右中將實忠朝臣其詞を感じ、近來是ほどの事も心とく打出たる人はなきに、優にゆもの哉迚入興し給へば、滿座感心しけり。此心は古今集に、　おなじ枝をわきて木の葉の色つくは西こそ秋のはじめ也けれ、と侍るを思ひていへり。誠に取あえずいひ出るも、亦聞咎むるも、いと優に侍り。愚云、先年己も初紅葉の題にて、

　けさ見そめ晝は靑葉の夕もみぢ　　素　外

是は旭にちらりと見そめし紅葉の、午時頃は見うしなひしが、日は西にまはりて再び爰かしこに、あか／＼と顯はれたる也。併只眼前体のみにて、御哥に類ふべき事にはあらねど、西の字に因みてしるせるなり。又云、櫻は端山より咲そめ、紅葉は奧山よりそむるとあるも、陰陽の所、西を秋のはじめとあるに同じこゝろ成べし。

一霧の海　是は雫の立かくして見えわかたざる所をよむ歟。夫木集人丸哥に、　秋來ればかふかの山に立霧を海とぞ見つる浪たゝなくに

連歌　朝ぎりの松やうきしまあきの海　　宗　祇

、　朝霧やなみのうへなる琢の海　　宗　長

、　みなの川の霧やつもりて秋のうみ　　宗　因

　霧の海これや神代の島もなし　　梅　翁

　鷄啼て里を告るやきりの海　　蒼　狐

愚云、先年秋上京の頃、愛宕詣せんと淸瀧にやどり、早朝雲霧の中をわけ登り、拜し終て下向の時は山／＼快く晴渡り、右の霧は谷あひに湛え動きて誠に白浪の打が如く、是なむ霧の海とも云べく思ひしが、其後人の語りしに、みちのくの國の守の御詠とて、

　谷あひの霧はさながら海に似て浪かときけば松風の音

扨は其君も斯るけしき御覽有てよませ給ひぬるやと思ひし。

谷の屋根は龍の都歟霧の海　素外

一冷（スザ）ましき月　先著齒がために連誹とも秋季とする事を述しが、猶亦辨ず。先ッ冷は玉篇に力丁ノ切、合ナリ力頂切寒ナリと有て、冷（スヾ）し・すさまし・さむしとよみを附たり。されど連誹には季節の定めあれば、右の三ッのよみを夏秋冬とわかつ也。又、增匀に淸甚也と有。是はすゞしき事はなはだしとよめり。すゞしさつのりてひやゝかの意成べし。これ又秋とす。又、つめたきとよみては冬也。寒氣強く爪痛きと云和訓のよし。文字は同じくも日本は詞の國なれば、訓を以夫ゝをわくる。此類ひ冷の字に限らざる歟。又すさましき月を今誹諧に冬季と心得違ふ徒ある事は、枕草子に、冷ましき物、師走の峯の月と書れしとて也。此義、流布の枕草子になし。但、源氏河海抄に有といへども、冷ましきは連誹秋也。併師走とせば冬に論なかるべし。又冬の月を賞する事は清女父元輔の歌に、　いざかくてをりあかし見む冬の月春の花にもおとらざりけり。其始として冷ましき物にいひなさむ事いかゞ歟と或書に見えたり。愚云、冬の月、歌にはひたぶる愛る意にもよみ、又いかにも寒き心にも詠て其休色ゝ也。連誹又これに同じ。

賞　さはりなき月は落葉の木の間かな（連）　紹巴

、月の色になりゆく冬の木末かな　宗因

寥、月さゆる色は音なきあらし哉　紹巴

、冬は月待ぬにむかふ木の間かな　昌琢

賞　一葉ちりいくらもちりてつき夜哉　嵐雪

寥　鈴鴨の聲ふりわたる月さむし　、

、霜寒し雲にくひ入るみねの月　淡ゝ

賞　一夜づゝ十夜はさゆる月夜哉（清）　蒼狐

、鮟鱇の月見やゆきのはれて後　素外

寥　申分なくて愛なし冬の月　、

、寒月や我慢高雄の峯にすむ　、

一晝寝　圓機活法夏之部に出。但其書に載る所の事實、夏のみにもあらず。されど先年浪華同流故馬城が點には夏に取しを見し也。是活法に寄し歟。此地にては自他とも季節の沙汰なし。又、桃青句に、殘暑の心をと前書して、冷〳〵と壁を踏えて晝寐哉。是冷の字を以秋

にせしなれば難なし。されど壁をふまへ、心持よき趣にては冷やかなる賞美也。桃靑は眞の隱士にて名聞の意なく、只思ひ寄所を述たるが、冷物を賞翫するは氷水（ヒミツ）・冷汁・煮ひやし等六月也。爰を以思へば、右翁が句は夏の方感深かるべしと、先年句鑑附篇を著述の時、夏之部ニ入たり。いにしへより撰集ニも此類ひある事也。又拾遺集ニ、安法、師秋の初めに、夏衣まだ單なるうたゝ寐に心してふけ秋の初風。此哥、ひとへ衣の轉寐はいまだ夏の形成べし、よて秋風に心してふけといとひしにや。晝寐・うたゝ寐、打出さねど心には夏をふくめる句有べし。句作により季節の事は衆議判ニ寄歟。

一草木子ニ、形有て聲なきは木石也。聲有て形なきは雷霆也。形有て聲あるは人物也。形なく聲なきもの鬼神也。又、古今の序ニ、やまと歌は力をも入ずして雨つちをも動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、畧文。又、天龍寺策彥、入唐の時西湖を見むと欲す。彼國の人策彥の才を試ん爲、黃昏に及びて相伴ひ、風景を賦さむ事を請ふ。策彥立とゞまつて唱していはく、餘杭門外日將レ晡ント。多景朦朧トノ一景モ無シ。語ニ雨奇晴好ノ句ヲ得テ。暗中ニ摸索ノ識ル西湖ヲ。誠にこれ叢林の絕唱也と。又兼載作ニ連歌四十四ヶ条の楽じ方有。其一ヶ条ニ、夜の柱と云事は、譬はゞ他の家にとまりし夜、ふいと起ては方角わからぬもの也。其時は常に見置て心覺えの柱ある所を探り當、扨柱をとらまへて氣を鎭め考ふれば、外の柱又障子・襖も心に目にうかみて、段々案內が知れて來るもの也。句案も其如く、題を得ても趣向の柱なくては取付がたし。依て闇がりの柱を探り當、夫に取付て句を考ふべき也。是を夜の柱と云ぞ。

一先師蒼狐菴へ時々門人集り、當座の句して判談を乞ける中に、此句更に見えず、或は聞えずとて評にも及ばれざるあり。此事は禮記曲禮ニ、聲無して聽、形なうして視ると。又、徒然草ニ月花はさのみ目にて見る物かはと有。是等の語に寄れし也。

（見ゆる）雨の日や門提てゆくかきつばた　信德

（如き）葱白く洗ひ上たる寒さかな　桃靑

（の）吹さらす旭大きしかれ野原　初代宗瑞

（句）

聞える　すゞしさや荷をおろしたる馬の聲　千皐
如き句　瀧は耳の外に落たり鹿のこゑ　千代尼

右統てかく案ぜよとの教には非ず。上にいふ所の引句に出す也。愚も、先年仲秋良夜いつよりも限なく晴たるに、麗日を思ひて、

名月や心に見ゆる舞ひばり　素外

又、名歌とも云傳ふる中に、思ひかね妹がりゆけばの哥をおもへば、暑中にも寒風身を通す心地し、風そよぐ楢の小河の詠を吟ずれば、忽すゞしさを襟袖に覺ふと。こやとの葉の妙所、鬼神を感ぜしむるとあるも、かく心に通ずるをもつて成べし。

一乘載云、作者と非作者は纔に一字・二字のかはり成べし。立よりてすゞしさまさる木陰哉　と云は、三歳の嬰兒もおもひ寄べきを、

立さりて涼しさまさる木蔭哉　心敬

此さ文字・よ文字の替りにて、樹陰の間はさほど覺えぬ涼しさを、暑き所へ出て知たる所が作意のはたらき也。詩にも、火鼠不レ知レ暑。氷蚕不レ知レ寒。又乘載句ニ、やすらはですゞむしげきの山路かな。休らひて來ては沙汰の限り成べし。又、はいかいには、奥の細道ニ、

田一まい植て立よるやなぎかな　桃青

是は西行の、道の邊の清水流るゝを本哥として、田植人のいこふ体をよめる也。又、植て立さるの説有。夫では田植を見し趣也。是憶説歟。

一乘載の家は、代ゝ宗匠と成て皆古今傳授もせしよし。五代め乘如は元祖にも劣らざる連哥上手成けるが、京師住居の頃、國詞を人ゝおかしがりて猪苗代の名字をばいはず、岩城乘如と呼て異名のやうに覺えしと也。ある時誹歟たはむれによめる。

奥州の岩城乘如に誘はれて多くの人のまよひこそすれ

と有ければ、乘如これを見て、て文字に濁りをうち、誘はれで、として返哥としたりしかば皆人大に感じ、右よみたりしものも耻思ひけるとぞ。是亦あふむがへし成べし。

一眞壁平四郎と云は、天正の頃常州眞壁の城主右衛門大

夫入道道無の草履取成しが、主人入湯の時木履の直し樣心に合ずと怒て、木履を擲付ければ額に強く當り、齒欠けて血流れたり。平四郎、ロをしき事骨髓に通り、主人なれども夜中忍び入、害し、此憤りを晴さんと思ひしが、夫にても猶飽足らじと工夫し、髻を切て立出、佛道に入て學問しけるに、其一心故段〻見開き、其上入唐して彌怠ざりしかば、終に經山寺の住職と迄成けり。今は我念願も屆くべくと彼寺を隱居し、鄕國眞壁の傳照寺へ異(他)轉せむ事を謀るに、道無、平四郎なる事を知ず、大に悅び迎えられんとなれば、兎角して歸朝し、眞壁に來たる。道無途中迄出迎え、傳照寺へ入られたり。扨和尙倚子(椅)に上れば、道無其前に出て禮拜す。禮終て和尙倚子を下て道無を倚子へ進む。道無敬して辭す。其時和尙、首に懸たる錦の袋より下駄の齒を取出し、これ御覺えゆ哉、某事は履奴の平四郎にてゆ也。先年御入湯の時木履にて額を蹴給ひし其疵の寇を報ぜんとの意より、發心の氣に移り、今斯の如くの場に及て懷旧を達す。倩身の上を考れば、君は釋迦の化身

にて我を善道に導き給へり。故に如來と心得て拜すべしと語る。道無、一言のいらへもなく、只伏て恥られしとぞ。其時和尙解(偈)を作す。　曾入二經山一分二風月一。皈來開二眞福道場一。發心覺了無二一物一。本是眞壁平四郎。

愚云、和尙爰に於て瓦解氷消歟。

　高く飛てうらみやはれし杏手鳥　　素外

一元政法師は岩井氏也。廿六歲にて出家し、法華律と成。季吟次嶺經(ツギテフ)ニ云、此法師、深草瑞光寺に住て霞谷山人と号し、貞德和哥の門人也。或年の夏、河五月雨と云兼題にて、　五月雨に濁れる浪や龍田川うすき紅葉の色ぞ流るゝ。貞德翁褒美の歌也。其身法中に在ながら孝心厚く、母の好みに隨ひ市に出て魚をもとめ與へ、又母兼て身延詣の志あれば、八十歲の時伴ひ行し紀行有。詩・文章にも達し、草山集・元〻唱和集・本朝遂史等世に行なはる。又草庵の壁書有。手の奴・足の乘物抔世によく知る文なればしるさず。

一熊澤良海は備前の人也。王陽明派中江与右衛門に學び、良智良能を說。又淡〻が雜談集ニ云、先生關東に寓

居の時人〻善教を乞に、論語爲政篇ニ北辰其處に居て衆星のこれに向ふといふ所を三席迄讀れけるに、いかなる事と傍人の尋ねければ、聖語は幾たびよみても心替り、聞人も心をつけば盡ずして直かるべしとぞ。有がたく大きなる事也。統て道と呼ぶ時は、道として眞の道なきといふ事なしとぞ。

一良海、後ニ卽游と改め、洛に住し、元政と友としよし。但元政は哥學に委しく、卽游は音樂に長じて、相互にこれを傳ふ。其物語の序〳〵、元政は佛道へ導むと思ひ、卽游は儒道に引入んとせしが、互に心の儘に成ざる故自ら疎く成、元政より哥を贈り、其後は會する事なし。

朽ねたゞ猶をり〳〵はとふ人のこゝろにかゝる谷のかけはし

一家語ニ曰、善人と居（マジハレ）ば芝蘭の室に入が如く、久しうして其香（ニホヒ）を聞ず。不善人と居ば鮑魚の肆に入が如し、ひさしうして其臭（クサキ）をきかず。是に我知ず其香のよきに移りて善にそみ、又其くさみがうつりて、いつ敗惡に誘ひ入らるゝを云り。水は方圓の器に随ひ、人は善惡の友に寄と有も同じこゝろぞ。又史記ニ、蓬麻の中に生ず、扶けざれどおのづから直しと。是を西明寺殿、

よき人にむすびてあしき事はなし麻の中なる蓬見るにも

此御哥によりて過し年の春、

麻につるゝ御慶上下蓬生も　素外

一昔殿上の人〻、花見むとて東山におはしたりけるに、俄に心なき雨のふりて騷ぎ給へり。中に實方中將、いとさはがずして、

櫻がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の陰にかくれん

とよみてかくれ給はざりけるに、花よりもり來る雨にさながらぬれて、裝束絞り乘侍りければ、人〻興ある事に思ひけり。然るを藏人頭行成のみ、哥は面白し、實方おこ也との給ひしよし。是を實方もれ聞、深く恨み玉ふとぞ。こゝに江戸にては延寶より元祿の頃にや、上野の花見の時には小袖を綱に懸並べて幕とし、又着用にも花見小袖とて我劣らじと美を盡し、着飾り出る

に、折から雨にあひても其儘ぬれて歸るを曠とせし事のよし。實方卿の昔をしたひて、好主（事）のものゝ仕はじめし歟。其角門人の句に、

花のあめ小袖をしうてかへるかや　氷花

（先年一日花百句せし中に）なふ其小袖はこなたのにてや花の幕　素外

一澄憲法印參內して、止觀の月重山に隱る、扇を擧てこれに譬ふ、と云事を說法中されて、歸るとて扇を忘られけるを持せ遣さるとて、譬へつる扇は是に忘れたり月はとゝはゞいかゞ答えむ。御返しに、秋風のたつや雲井の月を見て馴し扇も忘れ果けり。愚云、是とは違ひ、暑中に親しき方へ參りて、そこに有扇を遣ひしが、其儘持歸りければ、あけの日戻すとて、

返す手を忘れて腰にさし扇此不拍子は開き見ぬから　素外

又、みそとせばかりの昔、御庭の花見、ある方へ召まつはれ出しが、時ならぬ大雪にて、歸りは送りの駕を下されけるに、昇夫辷り、又取落しなどせし故甚困じて、腰の物を駕に忘れ出たり。それといふ內、はや歸りぬればせんすべなし。扨翌朝持せ下されければ、

こは花に忘れたりとよたましひも　素外

かく卽案して謝し侍りしを、あるじの君より御咄や有けむ、諸〻御席にて、魂いかに〳〵とたはぶれ興じさせ玉ひし也。

二之卷畢

誹諧奈都美津起 二之卷

皐月の田畑

早乙女

早乙女や脛より白き笠の色　錦車
早乙女やいつか出て居月も暈　文賀女
早乙女よ汝等が尻も棚津もの　素鷹
早乙女や笑ひも笠の内端もの　左人
戀しらぬ身も濡衣や小田乙女　呉玉女
さおとめや魚鱗備えのあと歩み　素翠
松陰に田うゑ乙女やわすれ笠　霞外
背戸田や登りつなりつ植乙女　玉英
早乙女の唄や皐月もはれし聲　一秀
うたふ哉早苗とり／＼老若き　靜雨
青む時しろや早苗に富士の裾　輝月
風ぞ誘ふ植る早苗の手元から　春裡

田植

上な見ぬなしえや民の田植笠　錦蕊女
我影もともに植こむ田うゑ哉　冬央
浪花浮短かきあしや深田うゑ　龜幸
濟だなら唄で踊れよ田植ども　龜春
腰なのすひとりは黒し田植笠　如水
畔ひとつ男女別あり田植にも　時鷹
我顔を水にも見せず田うゑ笠　龜榮
菅笠の眞向に見ゆる田植かな　龜麗
けふも／＼田うゑやみちの奥の旅　呉龍
雁行に揃ふ行義やたうゑ笠　凉山
雨な乞ふ鳥ものかは田植笠　蒼洲
へら鷺の觜や田植の手のくばり　素玉
子は乳に來たり田植の晝餉時　琴志女
龜も這ふ子も這ふ畔や田植時　玉翠
きゝ事よ庄屋が嫁の田うゑ唄　些山女
今めかし都近所のたうゑうた　連車

青田（但六月）

苗植て淺くも青し小田の水　龜龍
白鷺の愛な蕎がけの青田哉　其葉
山と實のれ青海原の田千町　仙兒

混合

早乙女の笠や田毎の晝の月　奇峰

早乙女のうたひ足らでや道〳〵も　右外
水に畫を數かく手業早苗とり　呉鄉
早乙女や月に笠ぬぐもどり道　秋策
さおとめのうたや一むれ若い同士　女 糸蘭
早乙女は嫁歟達目も笠の顏　蘭兒
千町田も今や早苗の一歩より　規外
早乙女や旭夕日に笠の榮え　社來
早乙女の聲も晴たり夕づく日　義粒
農業のうちの見ものよ早苗とり　素外
早乙女の笠や田毎に富士の影　岩槻 在郎
さおとめや濁りにそまで聲の玉　浪花 蘭陂
雨も隨時みめぐりの其はつ田植　龜流
嫁ならぬ笠紐めだつはつ田うゑ　木英
樋の口で椀も洗ふや田うゑ時　分香
植る田や人は天地のみたまもの　仙里
仙人も田植の脛は見たか見ぬ歟　從一
植し田や席のまふけの庭の如し　素牧
田植けふぞ三夫婦連な村の噺　柳雪
雨性の時こそ得たれ田うゑ女は　言外
よごれてもこゝろは淸し神田植　逸外

尊とさよ聲すみよしの御田植　女 賀重
女とも見えつ田うゑのあら男　寬之
田植濟で水も皺のす日和かな　壺外
田植しもふあとやかはづの頸　素粒
植のぼる富士や棚田は青〳〵と　白英
衣手もぬらさで長が大田植　宣秀
山田うゑ僧都の茶釜傾けぬ　惠風
來た歟はや今朝植し田の水すまし　壽溟
雨程よき水穗の國や田うゑ時　素登
牛馬は隙に倦なむ田うゑ月　素綾
田植横に見つゝ行なり黑木賣　素外
むかし殘る江口あたりや田植唄　素周
聲もよし評判の嫁が田うゑ哥　素轉
負た子もともにうたふや田植うた　素久
豐年の開口やうたふ田植うた　素行
仰向てきくや棚田のたうゑ哥　千來
唄につれて笠の浪よる田植哉　春瓜
別業へ賤や召れし田うゑうた　花丸
田植哥に和らぐや嫁も姑も　應富
田植時に乳母かも畔に子もり唄　杏香

御製ならば天智天皇田うゑうた　素外
文句皆万葉ぶりやたうゑ哥　左簾
賑はしや神に貢のたうゑ哥　世義
日のもとぞ身は賤しくも田植うた　昌舟
田うゑ女の笠や横日に眞帆片帆　烏孝
ゐなか女や日〳〵に着る田うゑ笠　有市
ぬぐかぶるてりみ照ずみ田植笠　花慶
笠とりの山や田うゑもくれの月　素外
人の手をかりてむすぶや田植笠　田社
少しづゝ降もしほなり田植がさ　素塵
稗まきの鷺とも白し田うゑ笠　岩槻 調布
田植見て歟大門口の立すがた　、、在泉
夕瓜やけふ植し田を吹て見る　、、千朝
植てから五日の風や田のそよぎ　鎌倉 英玞

越瓜

たちわればこそ白瓜の種は藤　錦車
しろ瓜や闇に葉をもる星月夜　龜榮
白瓜もまだ初生りや青うるり　玉英
しろ瓜や鄙にそだてど生れつき　一秀
その白さ瓜にくらべん肘まくら　春裡

胡瓜

きうりもしや海にはえなば生海鼠とも　龜春

もみ瓜

もみ瓜や水は絞れど酢にすゞし　玉翠

茄子花

其色は藤に似たるぞ茄子のはな　冬央
ゆかりまたうす紫や花なすび　文賀女
寺島やむらさき匂ふ花なすび　霞外
憎からじ鉢にうゑても花なすび　素翠
畑にこれをゆるしの色や花茄子　琴志女
植るはや花を見せたりなすび苗　一秀

初茄子

茄子はや餘の初ものゝ青き中　龜幸
夢ばかりなる吸ものや初なすび　如水
おさなくも艶なるものよ初茄子　京山
花落の茄子や人の乳房ほど　龜龍
手にふれて猶も色よしはつ茄子　龜麗
初生りの茄子や老をよろこばせ　春裡

茄子

盛なるや九夏三伏のなすび畑　錦交女

江戸在や茄子の出來も濃紫　素麿
花壇にも降るや庭のなすび畑　時麿
根附にもならぬ茄子の形と艷　左人
露黑し茄子ばたけの朝げしき　龜春
遊び業に茄子や人目しのぶ摺　吳玉女
茄子生れどまだ尖もつや富士おろし　蒼洲
茄子にはゆかりの畑やむらさき野　玉英
なすび今や紫もあり瑠璃紺も　玉翠
榔形は嫁が料理やなすび汁　靜雨
くひきろも白齒氣味よし茄子漬　歩山女
先づ凉し團扇なすびに鯨さへ　連車

新茄和

聓また嫁がはつもの新茄あえ　錦車
ひとり居の馳走や見てもしんき和　素玉

鴫燒

鴫やきや犬西行にふるまはむ　龜榮
茄子鴫と化して燒るゝ夕卩設　仙皃
麥秋や茄子に鴫のとなへあり　輝月

崑崙瓜

この玉は磨かで光りこんろん瓜　吳龍

夏も末のころ

葉がくれに露重げ也種茄子　其葉

混合

名な色に後は黃瓜と成にけり　在泉
淺漬の色や胡瓜の深みどり　素外
もみ瓜の仕あげや母のちから業　素周
むらさきな先づ藤色や花茄子　曉柳
ほの黑しなすびの花の底ごゝろ　素外
朱を奪ふ名も憎げなし初茄子　素行
鰹にも劣らじな間のはつなすび　素轉
むらさきの初元なりや茄子今朝　女賀重
箱根なば駕籠でこえけり初茄子　花丸
其價不盡とも高しはつなすび　寬之
拂ふのは駿河の塵歟はつ茄子　侯(候)得共
僧正のゆかりの色やはつなすび　奇峰
はつ茄子いろよしこれも江戸自慢　岩槻五計
初なすび折よく得た歟不時の客　素牧
愛敬はまけぬぞ富士に初茄子　英玞
夢ならじ不盡の國から初なすび　春瓜
黑白の夢もめでたし富士茄子　斗溟

夢は獏なすびは己が得ものかな　世義
朝むらさきなれや茄子に夜ゝの雨　金馬
切れと／＼なすびは畑に日／＼新　宜秀
武藏野や濃むらさきのなすび畑　沾紫女
をく辷るなすびに朝の露すゞし　素綾
朝市やまだいろ若き籠茄子　調布
まはしむく茄子の皮や觀世水　惠風
茄子むけば皮や黑雲まひさがり　從一
新茄あえむかしはかくもあえざる歟　素外
おのれ蠅追手もあれと新茄和　素粒
煮た歟はや馳走するがの産茄子　宜郎
鴫燒に寂しみはなし夏のくれ　仙里
トならで燒や茄子の龜の甲　素外
酢の過た寺や茄子のさし身など　廉當
烏羽玉の夜食もの也茄子漬　花外
漬ても色かへぬ茄子やかうのもの　夷遠
初ものを鬼一口やつけなすび　進外
鉄丸を食すとも見ゆ漬茄子　素外
みづ／＼し生れの色の漬茄子　蘭陵
浅漬の茄子は夏の朝顔や　糸園

うろにやすき玉や出さかる崑崙瓜　素外

瓜 但六月

皮むけば縐紗になつめ瓜の形　龜幸
まかなくにこぼれて二葉瓜の種　文賀女
大原や今雑喉寐せば瓜まくら　素麿
闇路にも匂ひを栞瓜ばたけ　左人
時の井の水も甘露や瓜所　吳龍
瓜籠に蝶歟とも見め結びのし　吳玉女
檜葉敷て其葉がくれや籠の瓜　素玉
賣聲に瓜の暑さや眞晝中　龜麗
釣臺に風かほりゆくや籠の瓜　霞外
瓜番を寐させぬ役歟瓜の蝿　靜雨
瓜のつるに茄子も見えつ畑隣　輝月
餘所よりもつよき暑さや瓜所　連車

眞桑瓜

網の目にもろや府中の初眞桑　其葉
香に寄れば我も狐ぞ眞桑瓜　冬央
菊ならで匂ふまくらの眞桑かな　如水
持前は黄金ならんを銀眞桑　龜龍
眞桑瓜白きは後に味はふ歟　琴志女

鳴子瓜

馬幾駄うたひつれけり鳴子瓜　錦交女

冷し瓜

つるはふていつ歟淸水に冷し瓜　凉山

ふるさとをおもひて

井にうかむ金の枕やひやし瓜　蒼洲

天暑く井は又底にひやし瓜　時鷹

極熱もしらぬ住居や冷し瓜　素翠

ふはり〱うき寐鳥とも冷し瓜　仙皃

ひやす瓜に出水せばや瀧野川　岦山女

混合

瓜も匂ひあるからよそのはなに蝶　花外

花のうちはもろ人もなし瓜ばたけ　素外

もどかしや瓜かい包む小ぶろしき　秋策

獅子の子よ投ればころげかへる瓜　規外

畑ぬしは引伸すこゝろ瓜のつる　侯(候)得共

鼠通ふ畑からはたや瓜のつる　有市

盜む箸よ色は黃金の瓜の蔓　斗溟

入る沓を引もどす手や瓜の蔓　柳雪

瓜番をしつゝも小屋に沓作り　昌舟

瓜畑に沓ふみこむな旅座頭　素登

瓜つけし馬には沓もゆるしけり　田社

裸足でも深入するな瓜ばたけ　言外

照年は田もよく見えつ瓜の出來　沾紫女

折ふしは人も追れつ瓜なる子　右外

交代をひく歟鳴子の瓜番屋　五計

瓜小屋を狐の覗く月夜かな　白英

一さかり日の匂ひせり瓜ばたけ　曉柳

瓜畑や暮ても暑き日の匂ひ　千朝

瓜畑や熱して暑き風薫る　義粒

降ぬあつさ瓜盜人もとはりや　素外

たはれ聲瓜ぬす人をやろまひぞ　左籬

日のもとにはひ隨ふや狛の瓜　素外

夏痩歟鳥羽繪歟鳥羽の瓜つくり　素久

水瓶にかいつぶりうくや冷し瓜　千來

山の井や淺くも旅のひやし瓜　吳鄉

これはそも黃金水歟冷し瓜　祉來

猿の手も屆かぬ井戸や冷し瓜　木英

これも亦流れに枕ひやし瓜　素外

白かねやげにかんたむのまくら瓜　寒逸

大黒に臺坐そなえむ瓜ふたつ　壽濱
をしあふや目白の色の籠の瓜　素外
しつかりとすゞしや瓜の六角牛　龜流
日晝もすゞしや錫の鉢に瓜　烏孝
ほし瓜や戸板に並ぶにはたづみ　花慶
むく瓜をこゝろの笠や立およぎ　壺外
むき捨る愚愛厚し瓜の皮　素塵
鳴騷ぐかみなりぼしやにはか雨　分香
むかしたれ菜瓜を丸でつけそめし　舊香
姫瓜に目はなや兒の筆すさみ　女蘭兒
水に香の殘るもすゞし眞桑瓜　金馬
花の色をうつしにけりな眞桑瓜　素外

追加　混雜

榮えたりな晴わたる日の田うゑ笠　升來
蔓引て鼠追へかし鳴子うり　ヽ
つや〱しこや國ぬりの初茄子　ヽ
一村が中よき聲や田うゑうた　容暖(媛)女
抱て寐し子はをみなりも瓜一ツ　ヽ
目にうつきり朝むらさきや茄子畑　ヽ
ヽ
遠くからなく子だますや早苗取　社時雨
色見よの雨や紺屋がなすび畑　ヽ
水に類す瓜や方圓の籠の内　素兆
朝露やうす刄ではらふなすび畑　ヽ
にこり〱冬瓜の花のうそつきめ　素外
しろ瓜に青つね丸ぞおもはるれ　ヽ
ほし瓜や水を掬せし手のかたち　ヽ

玉池雜藻　三

一陽井素外誌

一五雜俎ニ、聖廟の檜木、周・秦・漢・晉の代を歴て幾(ホトンド)千年、晉の懷帝の永嘉三年に枯ぬ。夫より三百九年の間、子孫これを守りて堀移す者なし。隋の恭帝義寧元年、又芽を生じたり。夫より五十一年、唐の高宗乾封二年再び枯ぬ。夫より三百七十四年、宋の仁宗康定元年又榮え、金の宣宗貞祐二年、兵火に摧(クダカ)れて殘りなし。其後八十二年を經て元の世祖卅一年、故根より生じ、日に茂盛し、明の大祖洪武二年に至て、九十六年を歴て高き事三丈、圍み四尺ばかりと云ゝ。天命の品物、賦(稟)予するの玄妙、尊みかしこむべき事ぞ。

一荒人神　神中抄ニ顯昭云、あらひと神とは、まさしき人の神となれるを申べきにや。八幡大菩薩は應神天皇、北野天神は菅相丞にておはしませば、ともにあらひと神と申べし。

一醒眠(睡)笑と題せし隨筆の書に、百三十年餘以前、愚云、この書元和九年出板とあれば、明應のはじめ歟。今年文化壬申までは凡三百廿年ばかり成べし。大(太)宰府宮前の飛梅、天火の爲に燒損じ、再び花咲ず。人皆恐れ驚き、祈念し又和哥を讀て奉り、取〴〵。兎角せし中に、檢校坊とて勇猛精進なる老僧(メウ)の哥ニ、

　天をさへかけりし梅の根につかば土よりもなど花の開けぬ

これを短冊に書て枝に附しかば、忽みどりの色めきわたり、花さく春にかへりしとぞ。此事遠近の國〴〵にも聞えて、きんけい貴賤群集せしと也。又これはいづれの年に歟、神殿の屋根破損ニ及びしかば、修理有べきとて木工みに命ぜられけるに、梅年〴〵にはびこり、屋根に覆ひかゝりあれば、枝を伐拂はずしては事成がたきよしを申す。されど神木、其上年ふりたる大木なれば、猥りニ手ヲ附がたく、評議(義)に日數立けるうち或夜大風雨あるに、いよ〳〵屋根の損じなむ事を人ゝ恐れ思ひ、夜のあくるを遲しと待て見れば、かの梅を吹起して其枝屋根を離れけるに、工ゝ等大に悅び、何の煩ひ

なく。やす〳〵と修理出來上り。靈驗の尊き事今にはじめざれど、衆人の信心彌增けるとぞ。扨諸事相調ひぬるうへ、梅又もとの如く屋根に覆ひかゝりしと也。又いふ、菅廟の神德を仰ぐ事は海内もるゝ國なしといへど、別して五畿内より西の方は、御愛樹とて梅核を嚙破ず。又船中にては梅ぼしのたねをも隨意に捨させずして器に入置、着船のうへ土中に埋む。夫が中には稀〳〵芽を出す事もありとぞ。又太宰府に詣る者は、極めて梅干を食し出るよし。是は身を淸むる意歟。

一葛飾龜戸の菅廟は、江戸砂子ニ、寛永の頃大鳥居信祐、宮居其外太宰府の体をうつし造立せしと有。愚云、近年右の正圖を石里洞秀筆にて畫馬とし、筑州藩中より納らる。其圖取彼地に旅して詣る心地す。又鎭座有し歳を當流初祖の發句に、

　寛永年中東安樂寺の新たに成たる時

新地にもかくなるもの賤梅の核　梅翁

又已が先師、但六世也、寶曆の頃、法樂一日獨吟五千句卷頭、

かしは手や五ッにひらくむめの花　蒼狐

今稔享和二壬戌春、菅廟九百年の御忌に當り給ひ、本宮造營有しによつて、宮前の紅梅神社を門人等寄附して修理を加え、將右の兩句并予が吟を碑して建たり。

　此宮居を勸請せしより凡百七十餘年と聞て

神留まります〳〵爰に梅榮ゆ　素外

右の後又十とせ立て文化八年と成、兼て思ふ紅梅・老松の兩社、數の星霜を經りし故、再び新たになせし上、永代修補せんの志を起し、誰かれをかたらふに、何れも信心を同うして、高貴の方へも申て、今年辛未企し如く成し也。夫が故に神木の松の傍へも、三世才麿と已が松の吟を、是亦社中石文とせし也。

　空すみわたる碑ゝ樂、との謠曲に題して

面の眉なすび上るやまつの花　才麿

　菅廟の德風に御愛樹の色なき皆て

神松や千とせ近くも若みどり　素外

又、二祖西奄、梅の發句、其事成て後これを得たれば此碑に彫添て、

　香の風や（一ニ古人）あるじかしこし梅のはな　西奄

是迄處々に建し碑の句は、梅祭祀と題す小冊あればしるさず。

　筑紫から爰までとぶや神の梅　風虎

　社頭から只ひと飛や梅屋しき　存義

この梅の盛りなる頃、ざれ哥よめる大屋裏住に行合て、

　是は〳〵飛だ所で大屋なるうら住吉の松ならで梅　素外

一先年駿河臺邊に、他にこえ梅を愛せらる方ありけるが、追々數品を集め、鉢植槃百株に及びしを年々手入有し故、人よく知て花の頃は乞て見に來る人多しと。然るに其あるじ、はじめは輕き病ひ成しが次第に募りて、醫藥盡せども今は頼みなき容体と見えける。其夜夢現ともなく枕もとに來たるもの有ていふやう、此たび君が病ひは、いかやうに禁じ有とも死を遁れ給ふまじきぞ。されど己、是迄厚き恵みの報恩に、御命に替り参らする也。其驗、庭の梅にて知れ申べしと告しが、忽心すゞやかに成て目ざめ、夜もほの〴〵と明たり。不思議の事故看病の者へ咄し有ければ、怪しみながら皆々庭に出て見めぐる中に、わけて祕藏の梅のいまだ盛りにも成ざるが、花散、蕾さへ凋み枯たり。扨は非情ながらも仁愛の恩義を思ひ、其身を枯て命をすくひけるよと、見る人感涙を催せし也。夫よりして日々快く、遠からず本復有しとぞ。これ近來の事にて人よく知る所也。又梁の何遜、或は隋の趙師雄が故事をおもへば、此木に於ては和漢とも奇とする説古今多し。

　風にしるき梅に花あり信あり　素外

一後柏原院の御宇、江州唐崎の松枯んとす。逍遙院實隆卿歌ニ、　花のさくためしもあるに此松の再び青きみどりともがな、とよませ給ひければ、其哥の詞を感じてや色を增、再び榮えを見せけるとぞ。然るに又年たゝざる内、大風して松甚いたみしかば、天正九年の秋新庄家より新たにふりよき松を植改められし時、よみ人しらず、　おのづから千とせへぬべし唐崎の松にひかるゝみそぎなりせば。其後青蓮院宮、松の記を書せ給ひ

しよし。段々繁茂し、今猶栄ふ也。

一百日紅、誹諧に夏と秋との辨　沾徳文蓬萊に、一名紫薇花、四五月より花ひらきそめて六七月に至ると云り。八月迄も咲也。東坡李義山が詩に秋風秋庭の句有。かく花の久しきを稱して名とせる物なれば、久しきを用ひて秋にとる方がよしと。此説一々分明也。扨當流通俗志には夏六月の季とす。増山の井・をだまき并に沾徳枝葉集にも同様也。然るを文蓬萊以來改め、秋にせられしか。傍に七月也とあるは、後に書添しやうに見ゆる也。此花の事、格物論に紫薇花、俗に怕痒花と名づく。人、手をもて撫ればゆれ動く。但怕痒はかゆきを恐るゝの文字也。樹は光り滑にして丈餘、花さく事は右の如し。圓機活法、紫薇花詩句の中に、八月呉天覺ニ早涼ヲと有。呉は暑の强き國故秋を遅く知る歟。よて残花も久しきにや。打任せては初夏より初秋迄凡百日紅の花成べし。

すゞしい歟安居の目には一夏紅　素外

百日紅照や其木も赤はだか　、

又、文蓬萊、百日紅の次、雀公の条下に沾徳云、哥には已がさつきとよみて、五月を專らにとる也。誹には大かた其はじめを稱する故、先ヅは四月にとる也と。此文面にては百日紅も初夏にて宜しかるべきを、盛りの長き所をもて秋季とせられしは、衆に反して一見識といはむ歟。其上詩にも作例あれば右の支流に向ひ、ゆめ爭ふべからず。唯當流にては、夏六月の季と相心得べき也。又夫木集雜之部民部卿爲家哥に、　足曳の山のかけ路の猿なめりそべらかにして世をわたらばや。又藻塩草には、世をやわたらむ。是は花の哥ならねば雜成べし。又此樹を今世猿辷りと云。よて誹句にもよめり。然るに貞徳御傘に、木の子の猿すべり、又、猿の腰かけ、出がちに一ッと有。近國には此唱の菌を聞かず。なめ茸・なめすゝき抔いふ類ひのもの歟、尋ね見るべし。

一鶺鴒　是亦誹諧に春と秋の辨有。桂坊沾山翁の道に、我師沾徳云、秋也、春と云説用ひがたし。増山の井にも秋小鳥の部に出たり。此鳥、もろ〳〵の誹書に、春又秋區々にして一定仕がたしと書て、扨春秋の詩數〳〵を

出し、次に藏玉集の歌に、

　しやこといふ鳥の上毛のくれなゐは散し紅葉の名
　　殘也けり

此哥の外、しやこの歌いまだ見當らず。統て季立は和をもつて證とす。和になき時は漢を用ゆる此道の法也。重ねて春に讀合せし哥あらば、又委しく論ずべし。先ヅ此哥を以秋に極められ侍ると也。愚云、當流にては宗因の師里村昌琢宗匠の說、春也。依て誹諧季寄通俗志にも員九春に出す。沾德秋にせられしは増山の井に寄られしを、猶右の哥を以彌秋に極め、師をてらひし所弟子の道たるべし。將、沾德派と當流は、先人皆入魂にて有し故今以しかり。よて事を爭論の意はいさゝかもなし。されど百日紅又しやこに於ては、當流と季節違ひある故初學の門人時々是を問。よつて其荅に有增をしるす也。しやこ、詩の上にては春秋わかちがたき所、桂坊が譜の如し。扨藏玉集の哥を祕藏抄の注に、しやこと云鳥の、木の葉を背に負たるが、霜置、あらしはげしくなれば世にわぶる也。餘の木の葉は散はてたれど、此鳥の背ばかりは纔に殘れると也。此注に寄ても、愚案ずるに連誹の上にては、もみぢ秋、かつちるも秋、散とばかりは冬也。其散し名殘とあり。統て殘るとすれば、雪・寒さなども春の季と成。其意をもつて此哥を見れば、已は春也ともいはむ歟。又紅葉散を秋にとるは、蓮二が古今抄のみ也。是は此外自見をもて季節を色〳〵狂はせたれば、其徒の外にては更に用ひがたき歟。又落葉の題にしやこを結びし句合に判者才麿云、しやこは甚寒を恐れて、たま〳〵飛て東南に回る。風をいとひて高きに望まず。木の葉をかぶりて百花の開くる暖氣を待と。此文も格物論又本草に寄て書れし也。爰にこれをわけていはゞ、鷓鴣わたるとせば桂坊がいへる如く増山の井に倣ひて秋、木の葉を負て寒を凌ぐ意ならば冬、扨暖氣を得て飛めぐり、詠物と成所、是此鳥の稱美成べければ、昌琢定め置れし通、しやこと斗にても春に用ゆべし。何事も通俗志の通り心得取扱ふべき事也

　鷓鴣さむい歟梅はさけども出からかひ　素外

ふいと耳の閑日に聞やしやこの聲　、

又唱への等しきに寄て云、海老の類ひにしやこといふもの有。大和本草ニ蝦姑と出。文字おかしき歟。

一雞の五徳　韓詩外傳ニ田饒が曰、頭に冠を戴くは文也。

日に朝す雞の冠毛（トサカ）やあけの春　素外

足距にてうつは武也。

眞鉤よ距のさえの諸羽風　、

敵前に在て敢て鬪は勇也。

いどみあふ雞は物かは〳〵と　、

食を見て相呼ぶは仁也。

譜あてゝ生餌（イヤエ）讓るや春の雨後　、

夜を守て時を失なはざるは信也。

夏近き夜と衣〳〵や敎え鷄　、

又、揮塵新譚ニ、萬壽寺の僧彬（ヒン）師の戯言ニ雞に五徳と云事有が、我猫にも有。仁　此猫鼠を見て捕事なし。義　鼠來て其食を奪へば則讓る。禮　客人至つて饌を設る時則かけ出る。智　食物をよく藏し置といへども、よく盜てこれを食ふ。信　冬來れば則竈に入。來客これを聞て絶倒して大に笑へり。又丘元集ニ、或お寺にねう比丘とて（猫をいふ）おはしけり。住持の深くいとをしみ申されしに、五ツの徳を感ず。

能睡　あたゝかな所嗅出すねむりかな　其角

忘　おもへ春七年飼た夜のあめ　、

捕　鶉歟と鼠の味をとひてまし　、

狂　陽炎としきりに狂ふこゝろかな　、

耽　髭のある女夫珍らし花ごゝろ　、

一老の鶯　四たび結びたる深川の菴を立出るとて、

うぐひすや竹の子藪に老を啼　桃青

此句よりして今老の鶯を夏と心得し人あり。是は笋を結びし故夏也。尤うぐひすの音を入るは五月の季なれば、句作にて夏にもなるべき歟。祕藏抄ニ、さゝえ小鳥とは鶯の親にて、老てはかくいふ鳥になる也。赤人哥ニ、うきね傳ふさゝえ小鳥よはや行て鶯さそへ春のまうけに。此哥并ニ鶯に老を讀たるは連誹春也。然るを梅翁發句集を編せし時、校者心得違有て春を夏に入替たり。依て印本を改めさせしが洩たるもあらん歟。

春迹　うぐひすも老をばかくす太谷かな　宗因

、したしむやおいのうぐひす花の兄　玄札

右に等しき事故いふ。尾花枯るは連誹とも秋なり。さるゐ桃青、冬の句に、ともかくもならでや霜（雪イニ）のかれ尾花　とせしより、近來冬と心得て作せし句見ゆる歟。是は霜を結ぶ故冬ぞ。其後蓮二が古今抄ニ自見を以老鶯夏、かれ尾花を冬とす。但薄枯るとしては、連誹一統冬也。又云、かく桃青句を據として季に取扱かはるゝは、亡跡の面目とも云つべきが、見違へ・心得違へ引句に用ひらるゝは、蕉翁の靈却て迷惑成べし。

一嫁が君　是亦論固ニ出せど、異說あれば再び云。去來が湖東問答ニ、嫁が君といふは、除夜人家の柱ニともし火をかゝげて終夜置也と。又許六が篇突ニ歳旦無季の格として出す二句、

明る夜のほのかにうれしよめが君　其角

君が代にあふや狩野家の福祿壽　許六

又、先年短冊にて見し句に、

もち花やかざしにさせる嫁が君　桃青

餅花冬なれば、是は去來が語の如く除夜歟。其角が句も許六詞添ずば、燈火の趣にも聞ゆる也。同じ蕉門ながら兩說齟齬せり。又元祿の頃、順也が五節句と云季寄ニ、嫁が君、三ケ日の間の鼠也と見えたり。又季吟撰師走の月ニ、

ひめ松もはつねのけふや嫁が君　季吟

又、同撰誹諧合秋之部ニ、

左　月の鼠よめ入するやむこの山　如貞

右　むこの山鼠だけもやよめがきみ　則常

姫松の句、春ながら歳旦とも申がたし。誹諧合は秋にて季吟判左右持の句也。此趣にては嫁が君を、季吟は鼠とし雜とせられし歟。桃青は其門なれば是等の事心得有べし。沒後其徒心〳〵の說を立て、古書をも信用せざるにや。當流は先師の說、季吟同樣也。

雛棚のはまぐりふむやよめがきみ　蒼狐

後京極哥ニ　君が爲蛤踏つくへといはむかひなき身とて我をいとふな。又、通俗志、汐干の所に蛤にしるとあるは、踏にじり取事也。

一蛙のくひあひ　寛喜三年夏の頃、高陽（コヤ）院殿南の大路の

堀に蛙數千集まり、方きりてくひあひけり。或もの試みに其中へ蛇ひとつ投入たるに、蛙少しも恐れず、くちなはも亦呑むともせず逃去し也。京中のもの市をなして見物しけるとぞ。愚云、此事今世も折節有。先年下谷邊武家地境、北後麹町原、又去文化八季春、本所或屋しき内菜園にてもくひあひし也。又むそとせ近き昔田舍わたらひせし頃、奇なる事を見しは、百姓の庭の草むらより蛙一ッ飛出しが、凡六寸も有べき小蛇を尾の方よりのみかゝりしに、へびくるしみて振返り、蛙をなめ又くひ付とも見えし。とかくする内もとの草むらに入し也。其後彼家に行し時、あるじの云、蛙又庭に出て、はらばひして死たるが、腹破れ小蛇蟠り出て、これも死せしとぞ。小也といへども、蛇の毒に蛙あたりしにやあらむ。又右ニ云本所にて蛙くひあひし時、人多く集まり、不法の事抔ありければ、何者歟書たりけむ、　蛙合戰御見物の方門内へ御立入無用と。これを見るもの大に笑へり。扨日ゝ暮に及びぬれば、いつとなく人も散、蛙も引取、はや爰かしこに鳴聲聞ふるニ、

　よむや蛙軍せし日も行くれて　素外

一蚇蠖（シャクトリムシ）　一名歩屈。此虫樹に升降して木末をはなるゝ事を得ず。愚云、已若かりし時客來つて語りしは、先年材木の用につきて處ゝ山國に旅せしが、ある山にて所の人足、立木の下枝ニ藥鑵を釣し、柴折くべて湯のわく内、四方山の咄などせしに、其やくはんをいつ歟目の上迄引上たり。人皆驚き騒ぐ中に杣人も在しが、更に動ぜず、是尺取虫の樹也とて、山刀をぬきて根本より伐倒し、扨段ゝと切るに大根抔の如し。客其ゆへを問に、是は此木いまだ二葉の頃、尺取虫這來りて止るに、折から雨數日降て他にゆく事あたはず。其木の成長するに隨ひ木とともに育て、いつ歟皮に卷込れて木の心と成たる也。よつて其木非情にあらず、斯の如きの怪しみをなす。老て後伐る時血の出る抔あるは、此木の類ひならん歟といへり。是うたがはしき說ながら、其客の咄す所を記し置侍りし也。

　ふりゆくや尺取むしの秋の果　曲菴

一蜘蛛　西京雑記ニ此虫集りて百事よしともあれど、又物を害する故憎まるゝ也。又勝非録ニ、王守乙は洛陽の市に薬を賣。此人蜘の網を見れば杖をもて必破る。或人其故を問に守乙曰、凡天地の間いきとし生るもの、皆口腹の爲に勞苦して性命を養ふ。夫が中に蜘蛛ひとり工みに網を張、居ながらにしてものゝ命を取れば、吾これを憎む。よつて網を見れば則破ると。

　夕だちに糸のみだれや蛩の舘　素外

又、書言故事ニ、五月五日蠅虎を取てつき碎き、豆にかきまぜれば豆おのづから踊る。もつて蝿をうつべし。愚云、己おさなかりし時、はへとり蜘の術さかしきが面白くて、竹筒にかひ置などしたり。右守乙がいひし所を思へば、網をまうけず、爰かしこをめぐり、蝿にあへば身をこらしてねらひ、飛付て取なり。其名の文字は虎に寄れど、働きは鷹に似たる歟。又釣すとも網せずの意に、當らずといへども近かるべし。将退て云、網張蜘のふるまひをつくづく見れば、中々容易の事に非ず。徒に取はらひ捨むも情なき歟。小虫ながらも天性をうけてなす業なれば、あながちに憎しともいひがたからむ。延寳の頃、令巾が句ニ、夏をむねと汝もつくるや蜘の家。又、はへとり蜘を、

　蠅をむづと組とめし蛩や五郎丸　素外

一案山子　禪語ニ出。愚若かりし時、此文字を鹿驚に當る事解しがたくて或禪師に問し其答ニ、案山とは大山に添し小山を云。人ならば前に書案を置形也。陰に有て不用の山故影法師の心にて、用立ぬ人を案山子といふと申されしにて思へば、藁にて作り、人の影ほうし同前のもの故、右の文字を假用ひしなるべし。又禪語に因みて云。世に虚談多きもの、千に三ツならでは信なしとて、千三ツとはむかしより云里(俚)諺也。然るに近來右の事を万八と云。但是は千三ツとちがひ、禪の句双帋ニ孟八郎といふ事有。其注に、方語ニ云不レ由ニ道理ニ作レ支ッと見えたりと。此語より出し歟。又自然にいひ當たる歟。

一鬾簫乙之符　此三字を帋に書て門口に貼は、疫病のまじなひと云。此起りは、もろこし豫章の南西米渡と云

所へ僧一人來たりて、渡し守にいふ、追付此所へ異相の者五人來たるべし。かれらをわたさば災ひあらむ、右の符を見せよとあたえて去りぬ。程なく黄衫を着し笈を負たる者五人來たり、舟にのるを、すはやと思ひ拒みて渡さず。異人等推て渡らむといふに彼符を出し見せしかば、恐れまどひて笈を捨逃去りぬ。扨其笈共ニ内にこめし物ども不レ殘燒捨、彼符を書て家々に傳ふ。其後此渡の南の地は疫病はやり、人多く損ぜしが、北の此處は更に病るものなし。夫より此符段々弘まり、今世日本に迄此札を門戸にはる事と成ぬ。右の文字はこれに出たるのみ。外に訓釋なし。畢竟文字に非ず、符にあらず、如何ともせざる所是則鬼を避る利也と。

愚云、先年神田に葛坡山人と云儒者あり。此人俠客の雜話を興じて、閑日には酒食をあたえ、咄させけるに、或日還りちかき俠者、あはたゞしく來たり、掌を出して、是に師匠樣にもよめぬ文字かきて給はれと乞ふ。先ヅおかしかりしが、需めに應せしかば早々に歸りぬ。何にかせしと思ひけるに、翌日又來たり、昨日の禮を述て扱いへるは、私相店の者に狐つき有て、いろ〱すれど落ず。ふと思ひ付て先生へ願ひ、かの書て下されし文字を狐つきに見せ、汝何にても差つかゆる事なしといへるが、此文字を只今よむべし、讀ざるに於ては一刀の下に命を斷べし、あさましくも此男、獸の爲に正氣を奪はれ、數日家業をなさゞれば、頓て家内餓死に及ばむ。さあれば其方は家内の讐也、速やかに落る歟、いかに〱と、刄ものを胸に指付ければ、狐付大きに驚き、飛退り、低頭平身して、ゆるし給へ、只今落去ゆと哀の方へかけ出、戸外に倒れふしたり。有あふ者ども取寄、扶け起し、病床に臥させしが甚勞れし樣子にて、前後も知ず寐入ゆ。是全く先生の御影也と申す。俠者剛毅木訥也といへど、朋友を思ふの信厚し。よつて斯る奇特も有し歟。葛坡書て與えし文字も、是籛籲乙の類ひにやあらん。

一嚔時ノ頌 休息万命急々如律令。此文ハ藝文類聚・袖中抄・奧義抄・拾芥抄等の書に載す。いにしへは和漢とも嚔はよからぬ事とせし故右の符を唱え、又つゝしみし事

と見ゆる也。四分律には世尊嚏り給ひし時、諸の比丘尼咒願して長壽と云。又今の俗、正月元日早旦に嚏れば則稱して曰、千秋万歳忽々如律令。この緣也と有。右世尊の事より引て云歟。又今嚏るもの、誰歟己が噂するやと云。是は毛詩ニ、嚏て云、人我をいふならんと。又人の家を出る時はなひる人などあるは、いむ事にて侍るにや。哥ニ、　出てゆかむ人をとゞめむよしなきに隣のかたにはなもひぬかな。これは留めむと思ふ人ある時、隣にて成とも嚏る人あれかし、さあらば其人のとゞまるべきをと思ひ讀る也。これらの事いづれも右に出す所の書より採。又つれ〴〵草ニ、ある人淸水へ參りけるに、老たる尼のくさめ〳〵といひもてゆくを、何事をかくの給ふぞととひければ、やゝ、はなひたる時、かくまじなはねば死る也と申せば、養ひ君のひえの山に兒にておはしますが、只今もや嚏ひ給はむと思へばかく申也と。愚云、人はなひる時は休息万命と祝言せしを、後其解語をつめてくつさんめいと唱え、又夫がいつ歟はなひる事と成て、今はくさめが通用の詞に成しにや。但是は己が憶說也。或年御秡詣して、

船でくさめ災ひも更になつはらへ　素外

一富士　淺間　富士太鼓の謠物ニ、信濃なる淺間がだけもゆるといへば、富士の烟りのかひやなからん。此詞によりて、名こそ上なき不盡也とも、あつぱれ淺間は增うずるものをとあり。謠の作意は世に普く知る所なれば畧す。扨其意、いかにも富士はあさまに劣りしと聞ゆる也。此哥は後撰離別之部ニ、信濃へゆく人に薫物を遣す詞書して、淺間の山ももゆなれば、と有。これは駿河といふ人のよめれば、我名に富士を寄て、たきものゝ烟りを卑下せし成べし。左なくば淺間よりふじの劣るべき所謂有まじきぞ。其角も、此哥の事よく〳〵了簡せば、富士無念に思ひ、淺間を討べきものをと戲れ書て、

謠にてあさまになりぬふじの雪　其角

此一之卷ニ則、其角が語を以て謠は誹諧の源氏てふ事を書置しが、戲作なる事み辨へずして、猥りに證となす事なかれ。

一高島玄札は江戶誹諧點者也。或連衆より百韵の點を額

みしが、廿日斗過て又同卷を遣し、先日點を申受し卷、取込の事有て開かず、其儘置し所、誰ぞ持行し歟、又鼠にや引れけむ、更に見えず。何卒今一度賴み度段申おこしぬるに、安き事也とて再び點して與えけるに、又十日ほど立て、こたびは兩卷を持參し、其者云やう、日外より兩度同卷の評を乞ゆ所、御承知被ㇾ下忝旨を申、さてはじめの卷、本箱に紛れ込有しを昨夜見出しゆ故、兩卷を引合せし所、はじめと後とは點違ひ申ゆ。何れを用ひ宜しかるべく哉、稽古の爲承りたきよし申ければ、玄札兩卷を開き、一々見合せ、横手を打、扨〳〵誹諧は日々上達するものぞ。己か點も纔の日數の間に大きによく成ゆ。後の方を御用ひゆへ。作者方は猶しも成べく、隨分無ニ油斷一出情(精)あれかしと申ければ、其男かへりて連中へ此荅を語るに、流石當時名たゝる點者也と皆々感心せしとぞ。

蠅うちや何れにかゝる點こゝろ　　其角

月花や其あらそひも運は點　　素外

一津田休市は浪花に住す。ひと日境より百員の點を乞けるに、發句より擧句迄長點はあらざれど、九十三句點を懸ければ、但其句は平點長點無也。會主甚悅び、名產の品を持參し、初心の者共の卷ニ御坐ゆを、思召にも叶ひしにや點數多く御出し被ㇾ下、連衆一統大慶いたしゆ故御禮に參ゆ段申ければ、休市、以の外不興にて、夫は大きなる了簡違ひ也。點せし百員一卷の內、五七句の外は一向用に立ず。よつて片はしからわるい分を消たる也。已來はよく案じ給へかしと、目をいからして呵りけるとぞ。又ある時休市、寺の杉戶に虎を畫きしが、髭を忘れければ和尙見咎め、筆を添給はれと望むに、髭はかゝずして、傍に圖はづれの鑷を畫きそへしとぞ。是亦滑稽。

一支考、伊勢山田に在し頃、日々引墨賴みの卷來りける。其中に三の裏一面書落し來りしを其儘點懸おこしければ、常〳〵むつかしきおのこ故、連衆大に悅び、此僞相を咎め、誤まらすべしと早々彼卷を持せ遣し、か樣に一おもてなくても苦しからぬ事にやと尋させければ、其返事に、此方句の點は致せど、書落しの事は其元の無念也。夫共卷中悉く改め賴みとならば、謝義定例の

一倍たるべしといひしとぞ。是のみならず、万端辨才を以て負る事なし。されど段〻門人多く成て、此所に永くとゞめ置んと思ひ、庵をも新たにしつらひ、絶ず會席有けるに、假初の事より地主と爭論に及び、其地を退くに成し時、

芦にこそ濱荻に角はなきものを　支考

雪間にのこる隺のあし跡　乙由

夫より美濃にうつりしと也。是等の事、山田御師鈴木氏入楚、已への話也。此人はじめ支考門にて、右の誹号も貰ひしよし。寶暦の頃迄存命にて後神風舘を繼。

一藪に香の物　尾州阿波手の森の堤のもとに鳥居有。夫より行事半町斗にして諸冊の二尊を祭る。其境内大藪の中に、五斗も入べき桶に蓋をして大なる石をのせ、傍に札を立て、香の物頂戴望の人寺へ參るべしと有。但、寺は正法寺といふ曹洞宗也。いにしへは農民耕作の往來に、瓜・大根の類ひをその桶へ投入て通りしが、おのづから香の物と成し也と。今は唯形計歟。一說ニ昔熱田の神供は此所より調進せし、其内とも云。此事、南嶺子其外是かれにものす。尤いさゝか違ひ有。

狐なはみそ藪に漬たる神の瓜　素外

愚云、又ある方の藏書ニ、やぶにもかうのものといふ事、世に香の物と思ひ迷へり。是は三國取あひの時司馬仲達が辭ニ、野夫ニ功の者有といひし事、武備史ニ見えたり。又、唐の列長卿が詩ニも此語有。夢中の香の物に混じあやまつ事なかれと。將今治國の御代ニは、

横綱の關や野夫から功のもの　素外

又、庸醫の手柄せしを賞して、しかいふ事もあれば、

暑の節は藪醫にもこれ香薷散　、

右唱えは等しくも物〻違ひあれば、誹句は時の宜しきに隨ふべき歟。

一松露　蘘荷　昔、京俳師に隨身して下總わたらひせし時、路傍の酒肆に松露有けるを見て、師も己も好物なれば、其松露殘らず求むべし。煮つ燒つしてあたえよ、酒は飲ざれば茸食の菜にせむと望みしかば、亭主云、夫は御無用ニ候也。これを多く喰へばどろ馬鹿になるよしを申すと。俳師打笑ひて、さる事も有べし、去ながら我

等は習有過てこまる也、少しも苦しからざる儘早ゝ望みの通りにすべしといへば、心得ぬ様子なれど調じて出せし所、取たてなれば風味よく、夥しく食せし也。

俗師、當座をと有けるに、

音によめば味ひ美也まつの露　素外

松露の事、香月牛山食鏡に、氣味甘く、松氣有美性、輕くして毒なし。但、山に生ずるものは大毒有、食ふべからずと。又云、松露を食し魯鈍と成事は、已いまだ聞ず。世人茗荷をばしか云。この草は佛弟子般特が墓より生ず。此子愚癡にして我名を忘れしかば、背付首にかけける。其墓より生じける故、名を荷ふと書。されば食すれば其氣をうけて記憶宜しからず。夫故異名を鈍根草といへり。此事隆寛祕傳抄に有と。併ながら本草異名の中に此名なし。不祥の氣を去、虫毒を解し、能多きくさといふ事は見えたり。好む人は食ふべし。たとへ鈍根の名ありとも、大馬鹿にもなるまじき也。

天竺と同じ草でも口のもとは富貴自在とて冥加ある名よ　素外

三之卷畢

誹諧奈都美津起　三之卷

未那莵機川

凉

帷子も山藍さびや社地すゞし　素鷹
すゞ風や顯はれ出し雨後の月　時鷹
色凉し風なき暮も青田面　呉龍
不忍もすゞしや月に島の景　呉玉女
凉しさの心にうごく柳かな　其業
富士はみな疊て凉し雲のみね　、
嘸すゞし繪で見てさへも浮御堂　輝月
夕がほの宿ほの〴〵と花凉し　些川女
すゞ風や蚊柱倒ろ月の前　連車

納凉

兩國の橋に人咲すゞみかな　冬央
夏や夜な長くも哉の庭納凉　龜幸
松風に琴ひかせつゝ庭すゞみ　左賀女
すゞむ夜や燭臺引せ螢籠　龜春
挾(狹)夜納凉更て咄の聲高し　升來

納凉とろ川やあつさの捨所　如水
昇る月に誘はれ出つすゞみ人　素秩
僧徒凉む月下の門や明はなし　左人
肌入て氣がつきにけり川岸凉み　龜洞
納凉過て冷たく成しすゞみ設　龜榮
物見さきに川ありすゞむ客まふけ　龜麗
門すゞみ友二人ふえ又ひとり　凉山
親と子歟遠く遊ばで門納凉　霞外
雨國は寐ぬにあけなむすゞみ時　仙皃
見てもすゞし納凉浴衣の伊達競　素翠
碁の友を月にまつ也すゞみ臺　玉翠
背に入月こゝろなや門すゞみ　一秀

納凉船

川はこれ別世界なりすゞみ船　錦車
啼かば猶けふらほとゝぎすゞみ舟　榮枝
船頭もすゞみながら歟夕小ぶね　龜龍
襲に汗は乾く間もなし納凉舟　琴志女

混合

空すゞし雲脱すてゝ月まどか　淇園
夏もはや鈴虫すゞし夕薬師　宜秀
すゞ風や吳猛が孝の蚊を拂ひ　吳鄉
流水の音や晝寐の耳凉し　世義
くみかへて冷水うりも暮すゞし　有市
凉風や供待人が顏の笑み　曉柳
今朝も凉し夜下の打水殘る月　花外
行ぬけて別してすゞし橋の上　規外
すゞしい歟浴れば鷄の砂水も　義粒
月すゞし兎も波をはしりぶね　惠風
盃を流すもすゞし四條川　春瓜
賀茂凉し四條は人に暑かりき　花慶
見てもすゞし褌ひとつで帆ごしらへ　田社
驚すゞし日は色のみの夕川邊　素外
忍び駒にひくや月夜の庭凉み　侯(候)得共
足る事よ舟より己が庭すゞみ　社時雨
凉み支度庭樹伐せつ植させつ　右外
茶を入れて門の凉みや水いらず　秋策
いつの間に月は入し歟門すゞみ　素行
雪國の咄しも出たり門すゞみ　千來
童部等もむしろの友や門納凉　夷逸
門すゞみ月よくて更ぬ二三軒　素綾

擬寶珠は風みつ玉歟橋すゞみ　雀郎
子を寐せて月入までや縁すゞみ　逸外
無禮講のさまや下部が樂すゞみ　千朝
釣やめてこれから涼み木場の月　壽溟
時や七ツさるまはし舟すゞみ船　仙里
御大家歟行儀に女義のすゞみ舟　素久
漕出すや人も滿汐すゞみぶね　調布
月と風とすゞし三俣川一丸　、
富士はまた不盡と見えたり夕涼み　龜流
砂川に足うちひてつ夕すゞみ　金馬
見られ見つ舟と橋との夕すゞみ　女賀重
めでたけれにいとま申てゆふすゞみ　呂舟
水茶屋もすゞみ支度歟夕化粧　素登
すゞみ臺この下流れあらば猶　素周
極樂はこれぞ此世のすゞみだい　言外
足る事よ只一疊のすゞみ臺　素外
商人は夜なむねかもすゞみ時　都奴雅
すゞむ夜も蚊を追ふのみ歟諸團扇　素牧
涼む夜や人にかたちの欲氣なし　素外
夜松魚も天のあたえ歟涼み客　從一

我のみとおもへば人もさよすゞみ　素塵
風なくば寐なまじものよ挾夜涼み　英共
鐘つきも納涼がてら歟さよの月　壺外

川狩

川がりや獺もしばらく住居かへ　錦車
かはがりは水馬角力のたはれ哉　冬央
川狩や魚は獲ずとも時のもの　龜幸
川がりやねれ顔撫るなつ柳　升來
狩くらす川ややなぎの下休み　素塵
河狩や泥をはしらば兎でも　時麿
川狩やおさまる御代の舟いくさ　如水
かはがりや氣轉きく人利ぬ人　榮枝
川がりや辨當所には柳かげ　吳龍
かは狩やかりせぬ身にもよい見もの　吳玉女
罪むくひ思ひも出さじ河がりは　涼山
川狩や魚を根こぎの大仕かけ　素翠
かはがりや瀨の鯉見つけ惣がゝり　玉翠
河狩やとれる側からひさぐ魚　霞外
河がりに脫ですくへよ網じゆばん　一秀
かはがりや七騎が中に鯉一本　輝月

川狩にうきぬ沈みぬ大うなぎ　連車
川がりや殿も笠とる大獲もの　琴志女

纚・扇網

さでもよし岸に寄浪よる魚を　素秩
日ざかりの暑さ知ずやあふぎ網　龜龍

四手網

星影はすくひ殘すや四手網　錦車
上げるたび月も雫やよつで網　文賀女
四手ひきあみと人との首引歟　龜春
集めとるや主従の瀨に四手あみ　左人
きらひでも一ぷくすふや四手あみ　龜洞
日に光るよつ手の魚や星月夜　龜榮
引上れば四手のうなぎのゝ字とぞ　龜麗
四手網にかゝるや鯔もおぼ子とて　仙皃
網歟もや歟見えつかくれつ四手引　紫山女

混合

川がりの岸や岩間を俄凼突　侯徃共
河狩や石龜ひとつ紛れもの　奇峰
かはがりや蓑の下なる小脇ざし　金馬
河狩や藻ふしつか鮒つかみ取　淇園
かはがりや混沌未分すめる瀨も　我蝶
川がりや魚よりは先ツ水遊び　素兆
河がりの大將軍歟すゞみ臺　社時雨
川狩やよし濁すともすみだ河　素轉
河がりや暑は忘れても丸はだか　素牧
かは狩や鯉取得たる剛の者　言外
川狩にまじる仲居やをんな武者　遙瀨
川がりや十人寄れば智惡十色　仙里
川狩やはだかに禮も主家來　寬之
かはがりや禁斷札の近所まで　春瓜
取ちらす田草序や野川狩　右外
夏川やじゆばんに帶を狩衣　花丸
かは狩や其川上へ垢離行者　素綾
河狩に脛のしろさよ京女中　素登
川狩の日も甲干て岸に龜　英玦
かはがりや踊れば躍る魚と人　秋策
河狩の報ひ歟夜の此あつさ　康富
河狩や淺瀨を耄るはだかむし　斗溟
かはがりや僧に見られて耻かしき　女沾紫
川がりや鵜でゐる中に鳥あり　素外

川狩の留守や女護の嶋歟とも　在泉
かはがりや柳につなぐ小辨當　千朝
川がりや月かき濁す丸はだか　蘭陂
持網や舟に酒ありさかなまたゝ
歸ろ帆歟舟のよつ手歟夕月夜　女賀重
はねる氣も見えず四手の大鯰　龜流
さし汐や月ひき上る四手網　五計
何ならめ魚五ツみつ四手網　素外
夏のみの網うちも出つ夕川邊　有市
舟に照網のおぼ子や夕月夜　吳鄉
得たらばと瓢たん酒や鯰がり　在郎
手ぬぐひを纒や四條のうかれ人　曉柳
振袖のすなどりも見ゆ夏川邊　世義
月にちろや鵜のかゞり火も波の花　逸外
光陰の早瀨にそだつ鮎や獲ん　素粒

撫物

撫ものに淸し汗さへこゝろさへ　龜龍

川社

宜禰な烏帽子とられそ風の川社　一秀

名越秡

なごしけふはらひうゝほと　榮枝

夕秡

げに命のぶ心地せり夕はらひ　龜幸
蠅は猶烟らせて蚊も夕はらひ　龜春
夏の日もこゝろよい哉夕はらひ　素袂
目に見ゆるもの皆淸し夕秡　時麿
みたらしも淸くすむ世や夏はらひ　其葉

御秡川

悪魔なも千里の外へ御秡かな　冬央
風そよぐみそぎや心さらし河　文賀女
日は西に今ぞみそぎの風すゞし　升來
御秡川邊暮しら鷺や五十串拆　素麿
こゝろまで水に洗ふやみそぎ河　如水
こゝろから涼しみそぎのかへり道　涼山
雨や催ふ御秡の幣に風せはし　龜榮
御秡けふや日にもろ〳〵の舟遊山　龜麗
淨衣より淸しみそぎの染浴衣　琴志女
そよ風は人すゞしめや御秡川　些山女

はらひぐさ

けふもまた扇や暑氣をはらひ草　仙鳧

菅貫

菅ぬきやくゝる心もすが／＼し　呉玉女

茅の輪

(稚)雅子よ潜るちいわも智惠の輪ぞ　左人
につこりと茅の輪くゞるも俠者哉　龜洞
潜り行歟虹な茅い輪に夕がらす　霞外
人に添てくゞるちい輪の風すゞし　素契
茅の輪流る今や御秡もすみだ河　玉翠
茅がやもて輪もゆふ秡夏もはや　連車

夏神樂

晝と夜の行あひの間や夏神樂　呉龍
川風にけふや暑さもなつかぐら　輝月

混合

形しろや流せばよろづ葭川邊　素周
川風は身を撫ものや夕川邊　斗溟
撫ものは神やゆどれる天窓から　素粒
浪の鼓うつは神樂歟川やしろ　素塵
すゞしとや神も思さむ河やしろ　遊瀬
河社すゞしめい風や待乳山　花外
鳥居たつは鷺や鷗や川やしろ　素兆
神の灯歟星歟みそぎの河社　宜秀
身の罪も蠅も何所へ歟川社　沾棠（女）
はらひ濟て後宴の凉みかは社　素外
着つれたり麻の葉絞り川やしろ　花丸
ふらんとす八重雲や吹はらへ川　素外
照ながら何所やら暑氣も夏秡　素轉
すが／＼し殊に月ある夕はらひ　素久
夕はらひ荒關取もにこ／＼と　都奴雅
今や凪む風荒にこのはらひ河　寛之
幣そよ／＼科戸の風歟御秡川　我蝶
盃も流せ下向のみそぎぶね　奇峰
幕すゞしく御秡を拜むあらたさよ　惡風
こゝろもて心あらふや御秡河　素行
うかれ女のうさもはらふや御秡河　從一
あれもすゞし浴衣に羽織御秡人　夷逸
下向には玉屋が花火みそぎ川　壽溟
戀せじな神もうけじ歟御秡今　田社
賀茂河の夏越や翌は蝶も秋　五計
舟も無事名越の秡する人は　品舟
出むと潜る茅の輪は夏の裏門歟　應富

くゞつたな流す茅の輪をかいつぶり　素外
人清淨今や茅の輪にむかふ顏　在泉
なみなぞや潛る茅の輪のおもはゆげ　壺外
ちの輪ぬけて夏もうしろと成にけり　義粒
麻の葉に夏も流れつたゞす川　千來
葉も麻を身にふるゝ時や夏はらひ　花慶
麻の葉に瀨織津比咩や涙の文　規外

追加　混雜

すゞし船と舟の咄しのへだつほど　春裡
影騷ぐ夕川狩やかつら男も　、
爰に暫しよるべの水や川やしろ　、
、
川がりや底にも見ゆる樽の影　笠樵
歸さには羽織尋つすゞみ舟　、
はらへする日と成ぬ恙なつ三月　素外

癸酉夏

全部三冊了

枇杷園隨筆

士朗著

枇杷園隨筆

嘗テ窺フニ朱樹翁平生隨筆ヲ與下余遊歷シ四方ニ所見聞スル者上吻合スル者甚多シ其吻合スル者譬フルニ之ヲ如下劍合ニ延津ニ珠還ルガ合浦上ニ近ゴロ與ニ大蘇五道ト謀リ欲下鋟メテ之ヲ于梓ニ以テ公ニセンコヲ于世上ニ請フ之ヲ于翁ニ翁點頭ノ曰善哉是レ實ニ可レ謂ニ我徒之大幸ト者也

曙　蓊　秋　舉

姑射城の東に一朱樹の翁あり。我ともがら、雛の親鳥をしたふやうに、夜明ろきは・日くるゝきはみにも、其木蔭をしたひよらざるはなし。ある夜、翁一卷を出して予にしめし給ふ。ひらき見るに、皆古人の俳諧にあそべるあらましごとなり。我ひとり祕藏せむもほひなくおほえてかく。

大　蘇

目次

蕉翁珍夕へノ消息
丈艸法師截斷指頭之詩
伊勢法樂之句
三聖之事
脇二編并文
高野登山端書
菊句奈良難波之事
萬菊丸鼾之圖
伊賀上野ヲ出テ旅行七十里之事
丈艸法師潘川へノ消息

枇杷園隨筆

○去來曰、蕉翁の俳諧を學び給はんとならば、先師在世の集・其高弟達の集をよく見ならひ給ふべし。そのうち或は不審の句も多かるべし。其不審の句をうち捨て、たゞおもしろきとおもひ給ふ句をとりあげて學給ふべし。或は先師眼前の俳諧といへども、その辭あしき句の有まじきものにもあらず。猿蓑集にも先師の心にかなはざる所二ッ侍るよし、常にうけ給はり侍る。まして其後の集には、さばかりの句多かるべし。第一は唯今見給ふ人ゝの眼に及ざる句もまた多かるべし。しかるを其不審の句になづみて全篇の俳諧を考ざる人あり。さやうの人は先師の直示を受らるゝ人にも、終に上達したるを見ず。まして後人には有まじき事なり。たゞ先師目前の俳諧或は高弟達の俳諧貴しと、一筋にその流にうちこみ學び給はゞ、おのづから上達し、後には不審とおもひ給へる句も、其まどひはるべき也。

右は去來正筆にて、先年大津䑓道より來る古筆いろ〳〵の

中にあり。

○芭蕉翁病中の吟、夢は枯野をかけ廻る　と書捨けん後誰か追つくべき疾足もなし。剰、正風の杖をうしなはんとす。獨行の翁いかに心ほそくや。

　ある道を人の通らぬ枯野哉　　雅堂主人

右、藤堂家の話とて行脚の桑門のかたりける。

　○綠筠軒

可使食無肉。不可使居無竹。無肉令人瘦。無竹令人俗。人瘦尙可肥。俗士不可醫。傍人笑此言。似高還似癡。欲對此君仍大嚼。世間那有楊州鶴。

　元祐二年　　超郡蘇氏　十四日書

○問曰、そなたの文字、よみばかりきゝことなるはなし。よみやうはや。

荅、まことに大事のものなり。よみやうは、句の起るべき所、又うけてよむ所などの分別也。三光院殿、せつ／＼しかられしなり。ならぬものなり。三光院殿、今時の校合よみといふもの也と仰られしなり。中にも古今の序、よみにくきものなり。よみならはせ給へ申べしとて、半分ほど、又、はてとをよみて聞かせ給ふ。俳諧の上にもよみ方大事なり。連句などはよみ方にて、よくもあしくも聞ゆるものなりとぞ。

許六曰、發句は正風体を宗とするなり。見聞たる所を句に作るなり。幽玄の寂・ほそみみへかけて人の感ずる事をするなり。

○わするゝひまもなくゆへば、おもひ出しもせずゆ。かしく。

　右、遊女高尾がふみとぞ。

　○古　語

天下老和尙の容僧とや。今宵訪來るものどもは、南池の鯉魚、東野の馬頭、西竹林の一足鷄、椿木お宿にか。

　春もやゝけしきとゝのふ月と梅

かつて芭蕉翁の自畫賛を見る。紅のつけたてにて薄紅梅なり。心得べき事にこそ。

　○犬蓼に殘る螢の覺束な
　　月に狸の㒵をかけおく
　　句作のあらひ又感心申ゆ。

霧くろく包める瀧の落る音
守なき堂に紅葉まゐらせ
かゝるけしき此春多く見申候。あはれ催し候。
芭蕉翁の評なり。東海道の一筋をも見ざる人、風雅の道におぼつかなしといへるは、かゝる事に心をつけよとにこそ。
○坂本にて一宿、早苗に鹿を追ふ聲、なつかしく覺え申候。坂本の鹿いづれの秋にかと存る斗ニ御坐候。罷歸候得ば、又いつ上り可レ申樣ニも無ニ御坐一、一しほ〳〵御ゆかしさのみニ候。

下向の頃桑名本當寺御會に
芒をきつて笞に茨けり
琵琶負て鹿聞にいる篠の隈
坂本を心の底に置候か。

熱田會に
ひとり書を見る艸菴の内
二町ほど西に砧の聞ゆなり
重て委細に書付可レ進候。

七月十八日　芭蕉

右、千那・尙白・靑鴉におくり給ふ文、芭蕉翁眞蹟、知多野雀にあり。
○抑、俳諧に連歌の式をはなれて一卷の式を建る事、よる所なきにあらず。旣に荒木田守武、發句一章にして千句の連歌あり。此式をもて我徒の千句とし、哥仙とよびて三十六句をつゞるは、千句の花三十六章なればなり。又、千句の月を計えて七十二候と號す。是は百韻の中を一折ぬきておのづから叶。

千句懷帋　三十六枚
百韻懷帋　四枚
歌仙懷帋　二枚

本懷帋三折・小懷帋四折なり。本懷帋綴やうは、水引を女結びにして、みつを上へなすべし。七文字にて二つとなる所を二行にかく。

發句の事

○發句は和歌をちゞめしものから、必切字あるべし。
世を旅に代かく小田の行戻り

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

事ふたつに成て丈あるは發句なり。

發句附句案様之事

發句は萬代の寶なり。いかにも執を引て案ずべし。心の顯るゝなれば、はづかしきものなり。風流を忘るべからず。附合は執を引べからず。一卷をさばくべし。己よくても他の附句あしからんは、是連席の耻なり。俗談はよし、片言を吟味すべし。變化を第一と心得べし。

〇月花の事

前句に泥むべからず。風流を盡すべし。前後を見合て、ひとしからぬやうにすべし。

右、落柿舍覺書抄

〇吹ながす哉といふ事あり。櫻さくかなの類なり。是を鳶の尾にたとへて聞せ給へり。鳶の尾はなくてもよからん、ものゝひら〳〵とひらめくにつけて、身の自在は出來るもの也と、よき人は仰られしとなり。

俳諧の發句の上には、さることぞたま〳〵多き。

〇芭蕉翁偈

胡蝶窗前午影空　蒲團眠覺步溪東

花塢艸底總飛盡　黄鳥一聲深樹中

右、富春山和尚話

〇辰巳某の家の櫻の木にて、家來彥六といふものを手うちにしたり。其後、年〳〵花下飮に會する人、醉狂喧嘩の沙汰に及びければ、白梵庵馬州といへるが是を聞て、

彥六よ花となりてもちるものを

かくいひて吊(弔)ひければ、其後は喧嘩のさたもなくなりけりとぞ、ある人はかたられける。

〇早春佛頂和尙へ御狀被レ遣候を則愚庵へ爲レ持御越、微細熟覽仕候處、木兎の角あるけしき、先感心仕候うへ、病床に病と組て勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ、驚入奉レ存候。和尙の肝膽いまだしかと探られず候間、重而評判可二申進一候。和尙にも舊願は寒ぬるく候故御持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し止て俳諧にて到二半夜一候。

梅櫻みしも悔しや雪の花

と御申し候。感心致事ニ候。且又正秀三ッ物、さて〳〵お

どろき入、定て御ちからかりㇷ゚ものと甘心仕ㇷ゚。褒美之旨正秀へ申遣ㇷ゚間除算ㇷ゚。

有、芭蕉翁眞蹟、松兒にあり。

○龜子が良才、是華原神童子か。且予が附句禁止之事、中分尤あさきにあらず。されども生涯五十にちかく、天命私にはかりて今より十年、日數三百日、一日の愁に一日を損し、一夜の樂は一夜のよろこび、身に行ずるとはなけれども、六塵おのづからちか付く。さればおのづからけがれすくなし。只三千六百の日數をかぞへつくす。只一無常迅速の觀中において、何をかさたせん、しらず。只一念動ずる風雅の情のみをしれども、いまだ宗因ごときの興作なし。宗因ごときの悪句なし。只善悪の兩意をいはむ。病魔仙狐の障をうかがふて、死するまで此事あらじ。

有、芭蕉翁眞蹟、徐英にあり。

○皆模二見形文臺記

夫倭歌之文臺之製作者。載明月記勸善記等。而誹諧之製度中絶而世有識者鮮矣。獨松永貞德先生與之而傳諸土佐國燕石子。石子寄芭蕉翁才授之。翁終命一名匠新造之。畫以二見浦圖。世云之二見形文臺也。先師晋子其角老人爲蕉門顏閔授之。而祕于庫底有年。偶憐予與學業傳之。予亦思往師之恩不敢爲人許也。而揚馬深嗜風雅厚耽我道。誠可謂一時之李杜。頃造文臺一個(箇)乞記諸予。〻惟古芭蕉詠郭公之一句安其短册於文臺之裡。蓋是安短册於文臺裡之起原也。今用其故事豈揚馬得芭蕉翁杜宇之句之眞蹟。則安其德。嗟呼道之弘宇宙也皆自蕉翁。採例諸芭叟者誰爲不然之乎。聊述其始末以備于後之證云爾。

享保十八歲
夏五月下浣日　　半時庵

○土芳曰、師の思ふ筋に我心を一ッになさずして、私意に師の道をみて、其門を心得顏にして私の道を行事有。門人よく己を押直すべき所なり。松のことは松にならへ、竹の事は竹にならへと師の辭ありしも、私意をはなれよといふ事なり。此ならへといふ所を、己が儘にとりて終にならはざるなり。ならへといふは、物に入て其微の顯れて情感ずるなり。句となる所也。たとひものあらはに言出ても、其ものより自然に出る情にあらざれば、物と

我と二つに成て其情誠にいたらず。私意のなすわざ也。たゞ師の心をわりなく探れば、其色香我心のにほひとなりて移るなり。詮義せざれば探るに又私意あり。詮義穿鑿責るものは、暫も私意に放れて道あり。只忘らず詮義穿鑿すべし。是を專用の事として、名を地拵といふ。風友の中の名目とす。功者に病あり。師の辭にも、俳諧は三尺の童子にさせよ、初心の句こそたのもしけれと度ゝいひ出られしも、皆功者の病を示されしなり。又、氣を養ふと、殺すといふ事あり。氣志を殺せば句に入らず。先師も俳諧は氣にのせてすべしとあり。又、我氣をだまして句をしたる、よしともいへり。皆氣をすかし生して養ふの敎なり。門人、功者にはまりて唯よき句せんと私意を立て、分別門に口を閉て案事草臥るなり。心の愚なる所也。多年俳諧好たる人より、外藝に達したる人、はやく俳諧に入るとも師いへるよし、ある俳書にも見えたり。師曰、學事は常にあり。席に臨て文臺と我間に髮を入れず、思ふ事速に言出て、爰にいたつて迷ふ念なし。文臺引おろせば則反古なりと、きびしく示さるゝ辭もあり。

右、土芳隨聞抄

稻妻を椽まで來ては歸る波

いな妻やくだけてもとの入處

門人曰、此句古今の名句といへり、いかん。翁答曰、いかゞあらん。

稻妻や闇のかた行五位の聲

我風流はかくこそありたけれとのたまひたりとぞ。

右、斗入夜話

いかさまとすることによき事はなきものなり。いつもの事にて、其うちに何とやらむめづらしき事のあるがよきなり。

〇支考三年を經てはせを庵に仕候せし時、翁のたまひけるは、久しく句をきかず、定めてあまたあるべしと也。支考、心に思ふ句有て去年の秋、

牛呵る聲に鴫たつゆふべかな

かゝる句仕ゆとてうかゞひければ、翁はとかくの返事に

も及び給はず、久しうして後、予も此ほど一句したりとて、

よく見れば薺花さく垣根かな

支考、その時腋下に汗ながれたりと、或人には語りけるとぞ。

右、斗入夜話

○越人よりも状こし候よし、一段の御事ニ御坐候。此方へもとゞき候、發句有レ之候。

思ひきる時うらやまし猫の戀

と申越し、よろしく候。

愚句

不性さや抱起さるゝ春の雨

又、こゝもと門人の句に、

庭興

梅が香や砂利敷流す谷の奥

今おもふ所に御叶候へば書付進候。

二月廿二日　芭蕉

珍夕様

右眞蹟、三河新築和楽にあり。

○甲子仲秋五鳥訛白截斷指頭

截斷指頭大阿劒　倶低端的勢還喃
血流染出秋林色　喫倣空擧紅葉看

右、支草眞蹟、犬山岡田氏にあり。

○貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前の土を踏事、今度五度におよび侍りぬ。さらに年のひとつも老行まゝに、かしこきおほむひかりも、たふとさも猶思まされる心地して、かの西行のかたじけなさにとよみけん、涙の跡もなつかしければ、扇うちしき、砂にかしらかたぶけながら、

何の木の花とはしらず匂ひかな

右、蕉亭夜話

○夫風流に心をとめて其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむ人は、ことの葉の聖なり。されば文明のころ其道さかんなりし聖たちのこと葉、今の掟となりて其實なる事、今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とともにうつりて、只つきぬをたつとぶべき也。されば、かの宗祇・宗鑑・守武の壽像をもとめて、此道の好士許六の筆

勞をかり、我拙き一句をつゞりて、道のたゞ萬古にさかむならんことをいのるのみ。

月花のこれや實のあるじ達

右、桌池夜話

○折〳〵や雨戸にさはる荻の聲　雪芝

放つ處に居らぬすゞ虫　はせを

荒〳〵て末は海行野分かな　猿雖

鶴のかしらをあげる粟の穗　はせを

こゝもと折〳〵の會御坐候得ども、いまだかるみに移りかね、しぶ〳〵の俳諧、散ゞの句のみ出して迷惑いたし候。此中臨いたし候間御目にかけ候。

○高野のおくにのぼれば、靈場さかんにして法の燈消る時なく、坊舍地をしめて佛閣甍をならべ、一印頓成の春の花は寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲・鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御廟を心しづかにをがみ、骨堂のあたりに彳て倩おもふやうあり。此處はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬢髮をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨も、此内にこそおもひこめつれと袂もせきあへず、そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

右、秋擧夜話

○一兩吟感心、拙者逗留の内は此筋見えかね無二心元一存候處、さて〳〵驚入候。五十三次前句とも秀逸かといづれも感心申候。其外珍重あまた、惣躰かるみあらはれ大悦不レ少候。委細に御報申度候得ども、いまだ氣分も不レ勝、何角取紛候間伊勢より便次第ニ以二細翰一可レ申上一候。右之氣分故發句もしか〳〵得不レ仕候。

九日南都をたちける心を

菊に出て奈良と難波は宵月夜

秋夜

秋の夜を打崩したる咄かな

秋暮

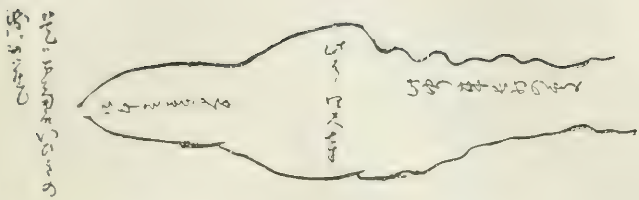
この道を行人なしに秋の暮

廿三日　はせを拜

意專様

土芳様

芭蕉翁眞蹟
万菊丸鼾之圖



伊賀上野
内神屋三四郎所藏

○三月十九日、伊賀上野を出て三十四日、道の程百三十里、此内、船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、雨に逢ふ事十四日。

瀧の數 七ッ　龍門　西河　蜻蛉　蟬　布留　布引
箕面

古塚 十三　兼好塚　歌塚　乙女塚　忠度塚　清盛石塔
敦盛塚　人丸塚　松風村雨塚　通盛塚　越中前司盛俊塚
河原太郎兄弟塚　良將楠塚　能因法師塚

峠 六ッ　琴引　臍峠　野路小佛峠　櫻尾峠
クラガリ峠　當麻品屋

阪 七ッ　糀坂　西河上ちいか坂　うばかり坂
宇野坂　かふり坂　不動坂　生田小野坂

山峯 六ッ　國見山　安禪嶽　高野山　てつかいが峰
勝尾寺の山　金龍の山

此外橋の數・川の數、名もしらぬ山は書付にもらし申候。

卯月廿五日　　　万菊
　　　　　　　　桃青

惣七様

右嵐跡、伊賀上野猪來にあり。

○淋しさにたえたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里。嵐吹く深山のいほの夕ぐれを古さと人は來てもとはなん。と古狸の西行・昔猿の兼好、さかしき筆のすさみながら、さて〳〵草臥たる淋しさもありけるよと思ふ折から、よくこそ〳〵をりかへして御文、はじめにははしり能筆、後にはねばりなき墨おくり給り、誠ものもらふ友といひし古も、今もかはらぬどぶるき事をくり返し、御返事とて申入候事、隣人の所作と御しかりなく、どふらくには奇得(特)と御覽可レ被レ下候。先ゝ打つゞき寒へわたり申候空にも御息才に御つとめ、何寄の御事と悦入候。爰許にても御宿所御無事之由は、さだめて折〳〵御聞可レ被レ成候。野僧事も痛氣に責付られ、火燵の櫓にのみ風情ながら手療治のはたらきで、けふがけふ迄持こたへ、もはや春は隣の艸の戸さらりと明たらば、ひらに天目の淚〳〵打寄〳〵ものすべきよし、千石・正秀・九郎などひたとすゝめ申候。よの事聞やうにもあらず、何處やら氣むずきやうにて、ともかくもと申折から、其許にも極尤に思召との御事、極の一字過分至極、殊に極月にさへ潜付たら、年波も程はあらじと樂候上、猶更放下僧の御句とて咲ふとの端と珍重。此方は歲旦の心當などは、さら〳〵是なく候得ども、いかなれたゞはゐられぬであらうと我身を賴暮候躰、たゞ〳〵不性のみ年〳〵に増行くせに、來年は〳〵とて暮しけり　と露川が發句が的中にて、さだめて膳所には、わつさりと三ツ物出可レ申と存候。其元は勿論すさまじき事御たくみ置候半とおそろしく候。御發句、わり玉子のいさぎよき所・すはりたる處、御手際之程感入候。幸頃日去來方にて長崎卯七が集を取立候付、愚句など遣候序に其角の發句・野徑のなど一所に書付、集中加入候やうに申遣候。愚句の御褒美悦入候。されども世上切物の發句を澤山にいたし候との御事、どこやらそこきびわるく覺え候。是は先日お顏のやうな御心じやと、さるものゝ申たると申入候得者、つめるやうなとの御ひげにて、其かへしにやと存候。さき〳〵も進じ候句ども、みなてんこのかは、おほくは千石がくるりけのたぐひにて有レ之候。されどもみる事聞く事たゞと越さぬとのおほめに

あづかり、さのみ腹は立不レ申候。頃日も西國邊より折節書中さま〴〵の事聞え候うち、肥後熊本使帆と申候僧は、助成寺の住持、今度蕉翁の墓をきづき、月並興行申候との事、此寺はむかし大磯の虎、西國巡禮の砌助成のためとて此處にて墳をつき、十郎の笛など寄進致したるとの事、由緒のたら〴〵八百八駄程有レ之候。是は是にして、さても蕉翁の德光、年〴〵に墓の出來も寔に祟く覺え候事ニ候。彼寺月並の講式を書てと申越候へども、例の不性病ほうけと斷申遣候。發句一ッ石碑の前に手向てと、いかめし皃に申遣候句、

在し世の寂よそのまゝ霜の石

頃日、又、

雪の夜にかさなり行や鴈の聲

詩なども候はゞ懸ニ御目ニ可レ申よし相心得申候。これとても同じどうらく、ふつ〴〵と無レ之候得共、一ッ二ッ思ひ出すにまかせ候。とかくさらりとよめぬ所が一物にて御坐候。雨の夜・雪の日ぞろ〴〵御覽可レ被レ下候。何やらかやら是もいふて、あれも申てと存候内、あとさきへなり畢竟は一ッとやくにたゝぬこと、あくびたまぎりて、こよひは六日の夜も亥時過、腹ばいして筆にまかせ、わけもなく覺もなき事ばかりにこそ。

苔蘇人起予

强催文飲草堂中　使我秋山睡味濃
若是有情休再訪　枝疎老樹不陰風

重而御見舞ないがお情、ものぐさの野僧は、たゞ老木の枝さびしく、風にもひゞかぬやうなりと、我まゝを申たるが一物、

閏八月望夜月下書懷

桂轂推雲輾嶺頭　草廬有約待吟遊
山深若是獨看月　爭識年光加仲秋

喜落柿舍去來處士到山房

遠吟落葉到茅衡　柴火當燈道話淸
一味幽情偕欲賞　寒天霹靂震三更

閑自慢をする所に、夜中散〴〵雷がいたし候故、とりあへず申候。

かね〴〵去來見え來候はゞ御近付になし可レ申候よし、夜

でも夜半でも御しらせ申せとの事、いかにもと相待候事、いつか〳〵と存候處、先月初に晝過より入來、一宿にてさま〳〵の事咄申候にも、貴丈存出候べき、

　寒き夜やおもひ付れば山の上

去來が挨拶。此方は無句にて茶をわかし、長崎の唐人哥所望いたし候。甲頭巾影をかしく壁にうつり、夜着蒲團のないをとり得に火燵にてはなし明し、さきに書付候詩を一ッむりにまげ出し候。隨分かたやも又おかしみの通ずる男にて御坐候。句もまた何やら咄候へしが忘れ申候。にや〳〵風詠たえず、やさしき事とほめ仕舞にいたし候。したが此人も昔は具足を賣て傾城にかゝり候とて、其角なども大ほめのよし、自身にも笑ひ申候。石部金吉と出たるさへ雪に煮湯のとろ〳〵姿、まして〳〵人樣達のわかさでは極〳〵至極なりけらし。扨もはや詩もなく候故幸に御挨拶として一首、

　謝贈毛穎

久無興味動吟情　唉對睡猫爐火傍

雪鎖松窗氷鎖硯　友人贈筆促回章

　筆くれて返事させけり雪の庵

先日は祈願所法印、はな〳〵しく出立、御旅宿へ見舞候よし。夫行者といつば、ゑんの小角のあとをつぎとかまえたる所常にうせず。山伏の見事に出立師走かな　とたれ〳〵も見て置た所也。輪袈裟に大小目玉のぐりつきも、さすがに富士見たいきほひにや、貝吹たくせにや、御内衆のきづかひがられしは、ことはりに過たり。されども此方の文御覽の後は、エ、それかと御安堵の体、さて〳〵おかしく候。

　評曰、大燈國師の歌に、

あなおかし法報應とばけし身があらはれぬればもとの人道。と三身の佛を一呑に聞ゆべしにも似たるかな〳〵。松波集とやらむ、聞は聞ても燈臺もと闇し、つゐに見不ゞ申候而悦入候。ちよつ〳〵と異類異形の集出來のよし、みな〳〵申候へ共、よそにのみうち過候。其内方へ内證にて發句見せてくれよと遣候。人の事、いかなる心にや、作者の心、名作の上、愚案に及がたし。されども、

　評曰、小栗の判官兼氏の草稿を案ずるに、彼照手の

姫のもとへおくりたる文を、つかひのあき人いとかしこく、此文は道にて拾ひ候ひぬ、よくば手本、あしくば當坐のわらひぐさにもしたまへとて、女房達にまゐらせければ、つるにてる手の目にかゝりて、おもふ戀路のさら〳〵と叶ひ候よし。もしさやうなる事にて侍るべきにやと、在所の物しりどもが語り申候。

支考、近頃美濃のお山の夕しぐれにぬれ歸り申候。春は又來てと一筆殘して、萩の里よりすぐに矢橋船、あとに心やひかれけむ、先にもよき事のありけむ。

はつしりといへば又そのあとに、三吉・千石・善七・九郎兵衞・志賀の又助など一鍋の趣向、いつでもかくさきわらふ達、ことに頃日養生喰とて皆〳〵赤ひかり申候。御傳言すらりと屆申候。

正秀、中〳〵はりよく、勤よく、よく醉てばかり、頃日西は尾花川よりせどかけて、數十人手に餘りて、足までくじき、にが〳〵しき顔つき、火燵に醉たるやら何に醉たやら、むせうにいきり申候。其元へも狀もいだせしよし申候。埒の明た手紙懸ニ御目ニ候。此手帋にも夢想發句有レ之處、今日足に錢所望とて參り、古扇をさらりと見せて、此曉まざ〳〵と見たる夢想、そのまゝはね置て書とめたるよし。

池水に軒の煙のかげさして

夢想と醉とにて埒明候處、さて〳〵おもしろき男、四軒屋の留守はいつも〳〵申出、感入たる御句、今はみそさゞゐ斗あちこち見舞あるき、外はうは張に木の葉籠、女とも見えつ、狸ではないが、山路を行坊主など淋しきものゝ寄合、南隣は後家娘三人、あながちに佗寐の枕引かへて、艸菴は鼠も獨栖、間にはチイ〳〵いはするやうでも、かひいぬるやら食つぶもへらず。頃日は野猫の妻ひとつうかれ來て、雪のねぐら雀をしてやり、狐の手かけじやけなと、子どもおほきおやじあつて、庄右衞門隣に竈をかため、茶のみ所もかさみ、おかしくも軒傳ひに森の日陰、冬は淋しく夏はあつくるしきは仕合なと立寄、茶のもともはやて、今朝から三くわんす、明てもめいよ人にあかぬ庄右衞門夫婦と、むりにたしなませ申て、ことに御ことづてくどふもからう申候得ば、咽かはいて例の五く

わんすをかたぶけ、かまど將軍兒でさゐはゐを取、鼻に櫓を上ゲ、足打て、雨の日・霞の朝に、四時まで小きげんに小ばなし、頃日ゟ馬の脊かく膝さし出してはたらき風情は、ひたと御噂申出候。もはや來年の七月とてもやがての事、今の事なんと待かけ候。隨分夫婦のはたゝき、見事といふもあまり有にや。かゝはそろ〳〵足がへろ〳〵扇の骨も要も、はしりそこなふて、井のもと・畑道にてうちこけ候て、ゐにやはせて、とゝはくろがねきかねきつなしに、のつてもそつても、てつてもふつても、さとへ毎夜〳〵歸りには謠の圖・經の圖・歸り付ての圖・寐ても圖は、頭のあがらぬと御推量可レ被レ成候。其身もよう心得てたのみ申候故、かやうに心得て申入候とて、先この元にてよみきかせ進じ申候。いやがるやうでもうれしがり申候。臥高、頃日ちらりともひらりともわせられず候。かはる事はなくこそと存候。しかれどもとつとさき頃、去ル若き人の庵へのぞきて、こゝにてはなきか、それならさきへじやあらうとて、いきすたとかきいそがれ候勢ひ、唐へやら天竺へやら、何じややらかじややら、月見の夜の徙瓢のかたき、中〳〵われもかけもせず。思ひなしか次第にしまつて、ちいさうなるやうに見え申候。しかれども風雅の仲間じやと有て、老人のようこそ年〳〵にといへば、かたほうでにつこりは、さこそ戀しくおぼしめし出候やとあきれ果こり果候。惟然、諸國奉加帳の力入渡り、帋衣・襟卷・十德姿、チト鉢たゝきを遁れ出たる躰よと見えしが、又いかなる心やおこりけむ、風羅念佛といふ事をあみたて、木魚に似たる鳴りものを拵へ、則、風羅器と名付て是をたゝき、

古池に〳〵かはづとびこむ水の音
ナムアミダブツナムアミダ

いかめしき音やあられの檜木笠

雪の帋やなげ頭巾

なんど、か樣唱歌九ッ有て、九品蓮臺にかたどりぬ。此夏西國かた〴〵にて是を唱しかば、米五升・六升づゝ志たとの廣言、古翁墓の下にても、いかゞ見られけんと、もはや一言を出しがたし。十月十二日、草菴へ勝所案、例の一列集候節、かの念佛を手向とて皆〳〵所望、殘多い

事は風雅器がないとの様躰、是斗はいかなる笙の岩屋の無言上人も、あごは合中まじきと、あきれたもあきれぬも御坐候。たまられぬ仕合、チヨツト聞てモライ可レ申候と書付候。

日頃茶簔めがナニヲト御申被レ成候。ちやせんゆへ折ふし御噂申出候。いつの事にや有けん、庄右衛門畑にて的あそばし候時、つく／＼と見とれ候を似合ぬ見物、男のやうとて人のしかりたる折ふしも有けりトナン。是等はよしなき事ながら、思ひ出すにまかせ御噂いふ内なれば、御寐覺の節御ゑかうのはしにもと書付候。的もようあたるが、きつう白いこと、むつちりと肥て御坐るとやらいふたとやら。

判曰、コノ茶簔ハ鉢タヽキヨリナコリタル文勢ナリ。

扨是は六游丈へちよつと一筆さゝけ奉る。つき湯のかくじやと御なふじ候あらせ給へ。去し頃よりは能こそ／＼兩度まで御文、殊に筆ほしき段御きゝ被レ下、おくり給り忝存斗御坐候。何書事もいらぬ身の上、かゆき所ばかりかいてゐるが能筭と存候得ども、さびしきに筆とるは老がくせにや。かゝるよしなし事、人の見給はゞ、ひまさにたはことゝ罪を得べきわざながら、其元御兩人別而御心易、せめて草菴一時の咲ひも、あたれかしとおもひ出るにまかせ候。必／＼御他見あらで、ひそかに御わらひ可レ被レ下候。きん上さいはい／＼。

過し秋の事にや、さる若き人の草庵へおはせしと聞召、是はてきとたゞではあらじなど、御心をつけられ候段、さて／＼御尤至極、さすがに軍記發明の上からと、甲の代に頭巾・ゑり巻迄ぬぎ捨申候。然ども今世のわかき衆は、寸斗智恵ふかく用心きびしくて、兄分ばかりでゞも心もとなくてや、外にも又連有て、以上三人にておはしまし候へば、そのあたりへ行ことでもなく、稗の穂に馬とりはなつ心にて、何ともかとも、ひよんな事斗咄ちらして仕舞申候條、御不審をなさせ給ふまじく候。

述懐曰、義鑑坊が新田義治にめでまよひ、均首座(キンシユザ)が鍋屋藤四郎に戀渡りけんは、にくからぬむかし語、今とてもさる人さへあらば、さる人もあるべきものにや。草の扉に露ふかく、苔の袂のちりはらひ行峰の嵐に年をかさね

しも、あらぬ方にながめとられたる花の、色すぐるゝといふが因果、名にしおふつるぎしら山の衆徒等が、織部の大夫のもとより賴むと有し文も、いたゞく事のあまりて、一字づゝ切て旗の紋におしつけたりけむも、さのみもてはなれたるにもあらじかしなんど、物がたりする人の有けるかたはらより、又ある人の、いやとよ、それはもつけな分別、何ぞのしたじで有う、心をしづめて諦聽せよ〳〵。判斷曰、凡花にめで月にまよひてうかれ寄る色事に、三ツの品有とみえたり。一ツには、其生れつきたぐひなくつやゝかなる皃、情こめたる目もと、聲も笑も俤も、諺にものする、立ば芍藥とゝすりや牡丹なんど、つを引手を引たぐひは、望次第に一言で、さら〳〵さつと竹のあられの、てまひまいらずに埒明ぬ。二ツには、おもざし・形もさのみよからねど、ものごになれ〳〵て、心からわけよく、ものやはらかにて、わたのよりそひ糸のさばき、きり〳〵と心地よければ、かへらぬかたのうら浪もなし。三ツには、みめも心も松木、ふちこぶがゝつた所はなひと見えても、はつとちらせし山吹色・かねての中もよそにして、はね付とび付、いけすの鯉の手につく自由、千萬無量たとへもなし。此三ツをもたざる人は、さらりとやめてゐよかし。ましていはんや、茶壺ほどの眼玉・鬼芒の髪髭、うき世のさがのわれ竹聲、紙のたもとのあらし山、あられもないこと多く、意もいかなこと、八百里すまた〳〵わらひける。實尤〳〵と感じて、いよ〳〵ひとり坊主の板かへし、やう〳〵ねむた油一皿・帋五枚、たはけの有がせうと筆にいとまやりぬ。

十二月六日夜半　丈草

潘川樣

跋

知を養はんはかりごとは、乞食俤のやうにせよと、かしこき人はのたまひしとぞ。誠にかたじけなくもうれしくもはべるかな。すべて目にふれ耳にとゞまるほどのこと、ひとつとしてのこすべきかは。さればさゝの落葉も木のきれも、俤の口のあはぬばかりひろひ入て、たくはへもつべきことにこそ。

五道

芭蕉葉（はせをは）ぶね

鶯笠述
一茶校

鶯笠居士述
一茶坊校合

正風俳諧芭蕉葉布爾

北總 芙蓉廣陵著

凡例

一此書を芭蕉葉船と題するものは、はせを葉の船のかたちに似かよひたるに思ひ寄せ、ひとつには朱拙が芭蕉盥に傚ひ、下ごゝろには、蕉翁たすけぶねを出して救ひ給に、われ敢てその吏として諫を傳るのこゝろをこめたり。

一名利をむさぼり、おのれをたてんとはかる輩のつたなきこゝろばへにならはず、信を述て諫をすゝめ、友をしてかゞやかしめ、ともに風流のうちにたゝむことをねぎ思ふのこゝろざしよりおこりぬれば、素撲にしてまさに謗言をはなつに似たりといへども、志のおこるところ左にあらねば、熟覽する人自然に其味を滴覺ることあらん。さるによりて文章をかざらず、能く徹するをもて要とす。もとより書ざまのつたなきは、不敏のいたすところ、いかにせむ、そしりを耻ること深し。

一二別・三戀などゝ名目を製作し出す、わたくしあるに似て恐なきにしもあらねど、こは永世に垂れ及ぼさんとにあらず、時の見様をもて、たゞしばらく此書における假初たるかし。

一かつしか五色墨の稱を頻く唱るものは、雜俳と差別あらしめんがためなり。又其風味の違へりとするものは、かならずしもわが管見をもて論るのみにあらず、十指のさすところと、わが見る所と、古とを照し合ての論なり。

一當時の句を出し古の句をならべて、其違るをてらし論ずべく草稿しはべれど、そは作者を顯し、またく人をうつの意に相當るをもてはぶきつ。よつて文中句論のあらまほしきいきほひの所もあるべし。

一附言をなすものは、この序を得て傳記のかくれたるをあらはし、或は今世のうへにて初輩の惑ふべき事の可否を告しらしめ、道の正しきに寄らしめんとのこゝろざしなり。

一卷末に句を載す。古人の句を用ひずしていまをあらはすものは、句格の論にあらずして、今尙古人の糟粕をなめず、日〻に新に流行し、しばらくもとゞまらざるの活道、しかも正風の外に迷ひ出ざるの證をしらしめんがためにして、その次手を

もて死活・新古・上手・下手の作の差別、手爾か葉のつかひざま等をわかち出す。勿論名句をゑらぶといふにはあらず、卷中日記に集れる中にて、さとしやすからんを旨として撰載す。

一此書、句編といふにあらざれば、句別其法にあづからず、列ゝほしひまゝなり。又、諸名家のもれたるもすくなからず、罪することなかれ。

已上

はせを葉船

東都 蕉風林鶯笠居士述
信陽 俳諧寺一茶坊校合
北總 芙蓉樓 廣陵 著

泉の湧て地にある、きはめて流れざることあたはず。流れの卑きに付てやまざる、かならず源なきことなし。いづみの性すぐれて清潔なり。しかれども泥土是をつゝみ玉砂これをかゝげて、そのすゑ或はにごり、あるひは澄む。是泉のあづかるところにあらずして、ながれのゆきはじむるかたの土石の清汚によるの美悪なり。又高きをつくすものは卑きに歸り、ひきゝにせまるものは、たかきにおもむく。なべて物、その一回するときは、すなはちはじめに復す。是ゆきてかへらざる事なき自然のことはりなるをや。人間のうへに、ものゝみちのおこなはるゝも、またく其ことはりにしたがひ、一道はじまりてすゑ千すじ・もゝすじにわかれ、日ゝにうつり月ゝに換るとも、

まさに其實をうしなはざるものは、ふたゝびみなもとに歸り、かへりては又ゆく。そも〳〵しきしまのみち、よろづ代の下にながれ、それより連歌のひとすじをわかち、俳諧したがつておこり、長頭丸に至りてはじめて其一源の湖水をたゝひしより分流して、四方その水下の蘊藻にからまれ、屈伸にくるしむとやゝひさしかりけるを、宗因なる一傑騷〻としておこり、たゞちに變風してもつれたるをほつり、ねばりたるをそゝぎて活水をひくといへども、いまだ狂言戲語に過ずして、たとへば婦女の談笑するがごとく、たゞ觴政の興をたすくるのみなりしが、貞享のはじめにあたりて蕉翁の德大に高く、始て虛中に實を備る正風の活道を見ひらき、猿に小簑の幻術にたましひを招き、斷腸の一聲に其實をあらはし、こゝに又一家の別源湧出し、其流蕩〻として海內に布き行はるゝと、草に風を加るがごとし。其委しきに至りては世の普くしれるところ、今なんぞあらためいふに及ばん。しかるに蕉翁寂して其門生すゝきのごとくわかれ、蚊のごとくみだれて、あるひは亡師の的旨をうしなふに至る。こゝに於て蕉門に又獅子虫のやまひを生じ、異論雲を起し僻說月を覆て、左は右のために惑はされ、右は左のためにくらまされて、終に的僻混雜　、近く明和・安永の比に下りては正き道をしれる人、わづかに指頭をかゞむるに足らず。正風既に絕なんとせしを、たちまち英傑四方に起り、其落〻たるを平撫して、央いにしえにかへすといへども、いまだ練磨の世に當らず。夫より連綿として行はれ、やうやく都鄙巷街にみつるに及て今や其盛る事古に十倍し、諸大家したがつて頭をならべ、牽敎切磋のいさほし海岳に布き、かづきの海士もしをかきの一ふしをうたひ、木賊刈る翁も木の間の片月に吟ず。こゝに至りて元祿（缺）の膽をさぐり腸を古にそゝぎて、みづから邪僻のやまひをたちさり、正風泉の金玉をみがくの時來り、不易流行車輪に倣はずして並び備り、曲節死活おのづから明らかに、舊きを尋て日〻に新しく、初華といふとも安永の初華にあらず。實に正風花をなせるの春にあへりといふべし。おのれ對竹、雪閑す山・霞こめるうみ、いづこの空かもしらぬ火のつくしの邊境に生れて、蕉翁の杖の跡だに見もしらず、よしあ

しのすがるべきひとふしのたよりさへなく、たま〲越人なるもの同鄕に産して、其余風はつかに殘れるに似たりといへども、阿蘇野のすゝきみだれがちに、おほつかなくもやみ路をたどる思ひして、十ヲあまり三ッふたつと指折る齡より深く此みちにこゝろざし、ひとゝなるにしたがひ、かれにうつりこれにわたりて諸流をこゝろみ、諸家の文庫を抑て眞僞の是非を正し、こゝろを天に練りまなこを地にさらし、是がために粉骨細(碎)身して寢食をわするゝ事どもに三十有余年、執念髮を通すの謗むなしからず、終に正風滿月の大道にわけ出、あしたに僻雲をはらひ、夕に邪霧をかきのけて、千練萬調怠らざれども、いまだ眞如の月の清光を臆にするに至らざるは、かぎりなき活道にあらずや。しかはあれど海内に頭を見しられ名家に膝をならぶる事を得て、遊歷又こゝに十有余年、三都にまたがり四隅にそばだち、數千の客に對すといへども正風の奇妙、貝燒く浦のはてまでも符節に毫髮をいるゝの違目なし。こゝをもて正風の正風たる事感ずべし、歎ずべし。しかるにわれこゝに此期に於て歎息する事のはべる。

おほよそにこれをかたりなば、阿房ともうつけとも誹りにあづかるべかめれど、われ生得實地にこりやすき僻ありて、その凝るときは、羽黒の山を脊負出て海を見せたく思ひ、佐渡が島を提入て谷に休せたく願ふ。其格もて人に當らんは、からさけに羽をうへて、行鴈の供せよといふにひとしからむ歟。しかれども人と人との間は、信なくしていかで交の厚き事を得ん。四海兄弟とも聞くときは、更に廣く信を用ゆべし。中にも風客は、しるもしらぬも朋友なり。しからばいよ〲信をもちひずんばあるべからず。信を用るときは、あしきはかならず諫むべし。いさめて容られずともわが罪にあらず。おのれにあはずとして人を捨んは、丈夫のわざにあらじ。しばらく口ににがくとも堪しのびて深く味ひ給はゞ、朋友の信の醍醐味舌頭にあらはるべし。ゆめ〲人をうがち、おのれをたつるの意にあらず、今いふひたすらに信を用るの見より出る所也。たまにも是を容用ひて春宵の睡をさまし、一刻のあたひ千金なるとをさとり給はん英子あらば、諫る叟が幸甚限なからんもの歟。この諫實を汲て今下にあらはす

ところを薫習し、工夫の糸口をひらき給へかしとねぎ申にぞ。

〇今こゝに名目をまうけて事をわかつの假そめ

二　別

曰く、あしの丸室と稱る、こは貞德の流也。素より蕉翁已前の俳諧にして、俳諧の字義を用る狂俳なり。

又いはく、談林風宗因の流、是も貞德流に同じ。

三　變

一に曰、皆都にて今世向坐（一ニ今世なる又其角坐 又江戸坐とも）と唱るものは、根元蕉門の高弟晋子に出る所なりといへども、晋子、師翁の滅後變風して、みづから一派の新義を起せり。初は翁の意味を用ゆといへども、終に破てその別意をなす。しかれば其角を祖として今は他流なるものをや。

　此變風、既翁在世に萌ありて是をうかゞふ、ゆるし給はず。

　其趣意爰に用なければ略。

二にいはく、美濃派支考が變風、是も其角坐に同じ。

　此變風、翁いませるうちにいさゝか形をあらはす。滅後に至りて自己の風を立て、意味異れば正に他流となれり。

三にいはく、伊勢風麥林が變風也。いさゝか當流に似かよひたりといへども、さりながら違ふ所ありてわが正風にあらず。

右五ッのものは、わが輩と道を異にすれば、あづかるべきにあらず。されば其徒に對して蕉門の正風を議するはひがごとなり。其祖とする人に蕉門の人あるに蹉跌し、かならず混ずべからず。其角・支考が何等時代をもて取捨すべき物なるかし。

雪門嵐雪が徒いふに及ばず。嵐雪はものがたき人にて、蕉門の歴ゝ或は變風の企ありといへども敢て取合ず、ひとり亡師の遺風を守りてたのしみはてしとぞ。

此都に於て五色墨と号るものゝうち、葛飾社中と稱るものは素堂の門裔なりと歟。素子は翁に左右する友人にして名達なりき。變風の沙汰いまだきかず。

　此外宗瑞・梅隣等の流れもありと歟。其外にも翁の支流を汲て正風と唱る家ゝも多からむ。繁ゝなれば其委きに及ばず。他は是に倣てさとりしるべし。淡門等の類は變風より出たる支流なれば更にあづからじ。点取の社中のごときは雑

俳にして論の外なり。

右嵐雪已下のながれを汲給ふ人々は、わが輩と同根同胞にして、今更膝をまじへて遊ぶべき友なるを、しかれども風交のうときはなんぞや。俳風の合がたく調味のともに異るところあればなり。師祖とする人々變風なくして翁の教のまゝを請傳へたらんには、異るところ毛頭なき譯なり。それが相和せぬといふところが、歎然として今諫を發るの要所なり。先雪門の事は跡へ廻すべし。かの葛飾已下の人々とたまさか風交して其適日を試るに、傳道の衰よりおこりて活所をうしなひ給ひしなり。其故に死物となりて悉古みに落、心足居付て一歩もはこぶとあたはず。たとへば有情を細工にうつして、又それがかげほうを見するがごとし。かたち、氣あるに似て魂魄なく、其上いやしき点取に泥じ給ひ、雅俗の穿鑿斷絶したる歟、俗中の俗に落いるもの多くして正調も備らず。いはゆる俗談平話を用ゆとは、俗中の俗語までひらおしに用よとにはあらず。雅俗をゑらぶ也。扨こそ翁も俗談平話をたゞさんがためなりとは申されき。（此俗談平話をたゞさんがためといへる條下にいはく、俗中の雅言は用ゆ、鄙俗語は用ひがたし。鳶をとんび、雲雀をせんち、牛房をごんぼうの類なり。かゝるたぐひは和にて言ふりたりとも用べからず。）いはんやこゝろの雅俗をや。扨又連句はとりわきかたしと見ゆるは、發句は門人達のうちにもさるべき上手も出來たれど、附句は二十年老吟骨を得たりなど申されつる。中々たはやすく遂べき道にあらざるを、俳諧は修行なくも出來る事のやうに江戸の俗衆はおもへり。いかんとなれば傍に点取といふものが行はるゝ故なり。こは學ぶにも及ばずしていひ習ふ安き事なり。つのもじのひとふしをだにひくとかなはぬ輩が、判者などにもなるあさましき拙きものなり。正風といふは翁の道と異りとは、世俗はしらず、俳諧といふ惣別の稱に混じて、かの点取と同じものにこゝろへる故なり。上方には点取といふもの別にはなく、やはり正風の句をもて点もとる也。故にはいかいをいやしむものなく、儒者も詩人も書家も哥人も文家たる人々、兼學びて風交する人少からず。さるによりて誰々も蕉門の俳諧の高風にして得やすからぬ事をしり、賞歎する人多し。されば雲上貴族も是を用ひて、かつていやしとし給はず。江戸にてはいやしむる人多し。尤至極也。点取の

つたなきものが混じて正風を汚すゆゑなり。元禄(唐)のむかし當風一統の比、去來・其角が輩議して名目をあらためんと請ふ。翁の曰、名は所詮かりもの也、何にてもくるしからず。正風と與何と歟いはむもしかるべかめれど、改てわづらはしからんよりは、あり來りのはいかい、書なれたる名を用るがよし。尤俳の字、にんべんの方然るべしとて止にき。此時變名し給はゞ江戸風の点取などに混ぜずして、今はよろしからむに翁の氣(頭)量、瑣細の事にかゝづらはざる、又高しといふべし。それはさて置、かの道の衰たるはかくのごとく、点取に混じ思ふゆゑに丹誠する人なし。つまらぬ唯事或は俗中の戯言などをいひ、一廉出來る氣取にて大に高ぶり、正風の味には近所までも喰付かずに仕舞ふ也。しかのみならず江戸に生給ふ人々は、大かた江戸を廣しとして、天下の廣きをしり給はず、其家々の教の可否もたゞさず、丸呑に請纔て同門の外風交なく、諺に井の中の蛙といふに近く、甚狭きにあらずや。江戸を廣しと賴みて道のちどけ垢を生るとをわきまへ給はず、其師〳〵のすゝびたる入子鉢をさづかり、代々の癖のみに落入、教の意味も次第〳〵にうとくなりて、終にいつとなく道のおとろへとなる。それさへおのれに悟り得ず。天がした廣き正風にあふ歟合ぬか、當世正風行はるゝやいなや、さていづかたへ何といふ上(手)戸がある、將かゝる句がいづかたより聞へて、今世感激する事なりなども、一向ぬり壁世界也。たゞ一社中の初心の輩ばかりを相手に鼻を高めて居るときは、おのれが慢に覆はれ、前後左右眞暗になるが凡情の常也。そこを蹴やぶり我を捨て、世に聞る人あらばたよりて聞もし見もし、ひろく今にわたり高くいにしえをさぐりて、夙夕に工夫をこらし、晝夜に術を練り、江戸のうちはわづかに庭前同(然)前、師門の外たりとも東西南北に馳て練磨し給ふときは、たちまち正風の正眼あきらかになりて、檜舞臺の蕉門正風の列につらなり、廣く天下に名をあらはし、諸邦の風調一目に見わたし給へども、唯々今いふ井の中を廣しとして、かたかげにおはすゆゑに、終に天下融通の俳諧とは別ものになりて、生涯を一社中の汚泥にかゞまり給ふなり。あさましきにあらずや。われこれを歎くは、ひとつには道

（俳の字葛の松原に支考が説あれども今こゝには越人が筆記の説を用ゆ）

を重んじ、ふたつには人をおしむ故なり。翁の教の儘と思ひて持傳へたる道が、あめが下の正風に調和せず、翁の意味にも違へるをば蕉門の正風也といはんは、道をもて道を傷ふにあらずや。又其社中には春の花の英才俊傑もおはすべし。左もあらん人々、みがかば連城ともなりぬべきを、嶮峻の間に捨て生涯を瓦礫たらしめんは、おしむべきのはなはだしきにあらずや。ひとりも天下の龜鑑に英名をとゞめ給ふ人になし給へかしと、いのるこゝろゆきぞかし。いかに聰明なればとて、正道の砥にかけてみがゝざれば、光は出ぬなり。殊に此正風は一朝一夕のものにあらず、生涯のほだしならずんば、なんぞ後世の鑑に光を殘す事を得ん。翁もみづから至極せりと思はれしぞならば、いまごろは下手の汚名を唱るならむに、死期に至るまで切磋と思ひ、慢るこゝろは素よりなく、さてこそ名人の名も殘りつれ。われこそはと羽たゝきし、こゝまでこそと極るときは忽下手になると、この正風ほど顯然たるはなし。扨慢ずるより思ひ出せり。これらは人をいやしむに似たれど、諫のたよりにもなりはべらん歟。たま／＼五色墨の門下などより行脚しはべるに、俳諧は一向不通用にして、唯高慢兒に正風連に聞もなれぬ口を利、見もなれぬふるまひなどして、いと異やうなる、是を世間にてあぜもの行脚とていやしめ用ひず。一所兩夕の杖を休るとあたはず。さうじて何某が門下正風呼り、誠に氣毒千萬也。是によりて小さかしき輩は忽師の風を捨、天下普通の俳諧にうつす事を旨とし、普通の名家の名をかり、何某が門人なりと師の名を僞り通る類すくなからず。實に恥がはしき事にあらずや。われさへつめたき汗をほし兼るをや。又汗の次手の汗物語、此ころの事也、或人來りて笑止がりけるあり。誰かはしらず、五色墨の連衆とかのよし、誰やらへ對して物語あるうちに、かならず道彥が邪風になど引込れ給ふなと諫めし人ありとや。われ是を聞て惡寒發熱して、氣毒に存ぜしなり。尤一僻ありとはいへども邪風にあらず。抑廣きむさし野の正風に、天下に普く二十年來指折らるゝものは誰ぞ。成美・みち彥、此ふたりのみ也。夫を邪風と思ひ違て人をしもさとし給ふ人のこゝろの暗きこそ、いたましきの限りなりけれ。素よりわれ、みち彥を念者にした

るにあらず。成美、われを義弟と愛するにあらざれば、いづれへもわりなき助太刀の肩持すべきいはれもなけれど、われ筑紫のはてに生れ、越人が傳統を請繼、道彦・成美遠くあづまの中央にありて名をきゝしれるのみ。日ごろものひとつしめしかはせし事なく、立かゝりに風交するに、番匠が曲尺をからずして柱は横へまがらず、うつばりは竪にそむかず、大槌にも小槌にも及ばずして、響・匂の間取より竹の細戸の寂しをりまで、とはずこたへず備りつる。是にて邪風にあらざるとさとりしり給ふべし。けだし成美は成美、道彦はみちひこ、かくいふ對竹は對竹が天然備たる風姿あるは、人面こと／＼く同からざれども、しかれども畢竟同じ人なるがごとく、膽吶の同ずる所百人一調也。さればこそ翁の教を見給へ、一事をしめし給ふに共受用する人の生質によりて一人／＼に異れり。今五色墨等の天下の正風に普通せざるたぐひとは、別段の所なるをや。扨雪門の事、近く蓼太に至りて初て一風發りしと見へたり。形は翁の風に似て、こゝろ翁の筋にあらず、たやすく見へがたかるべき場所なり。さりながら近世關東の正風再發せしは蓼太糸口をひらけるより、のちには白雄などいへる哲人もおこり、いまこゝに成美・道彦が類も出來て、いよ／＼正しきに至りぬれば、いさゝか遺目ありとも此男は關東の一物ともいふに足りぬべし。しかるに今雪門といふ俳諧は、又是とも雲泥の違にて、翁の道は退轉したるに似たり。是何人の誤よりおこれるわづらひぞや。なげかはしき事也。惣じて何に漢語をたち入、よめぬ文字をゑらびなどする事の骨折、翁の教はいかなる事ありや。俳諧といふものは点取のみのものと思ひ、付句などいふものゝありとは一向夢中にて居る輩もありと見ゆ。漢語入らずの句は、ぼや／＼とぼかし、よぢらかし、あしきやら、よきやら、いづれに句眼ありや、いづくに感ありや、一向につまらぬ一作なるを、流行とか何と歟申とかや。翁曰、俳諧いまだ俵口をとかずと。こは流行をさぐらしめて、後世まで斯道をうしなはしめまじとの金言なるべし。されどもたましひもなきかけぼうしに流行しなせとはおしへ給はじ。扨又つたなきかぎりの道をはづかしむる事あり。いつの比にか予行脚の折

から雪門の徒に一宿しけるに、連衆五三輩面會せしに、皆ゝ一言の風話もなく、唯眼と眼を合せて默爾たる外なし。予氣毒に思ひ、皆に對し近比の御佳作承たしと挨拶しければ、やがてあるじ一間へ立、ものかげよりさしまねきて連衆を呼込たり。しばらく有て各短冊二枚づゝ句を書、わが前にさし出せしを見るに、漢語まじりもあり、よめぬ字二三字、句主に問てよみたるに、誠に無理なる當字也。沉吟再三すれども何の譯やらふしあしわからず、挨拶に當惑せり。かくておの／＼句の肩に朱をもて輪をかけたり。是は何ぞと問。あるじいふ、こは先生の輪五点なりと。まことに聞くわれさへはづかしき思ひせり。次に予又折ゝ御連句などもありやと問ふに、いづれも唯ク、ト口ごもり、噛吞をして返荅なし。付句といふもの有る事しらざる躰なりし。あまりきのどくゆゑ、此方よりさま／＼俳話をさそひければ、その荅にはなくして、其うちの一人いはく何某は今年にて十年ほどの弟子に候へども、やうやく師の名の下の一字をゆるし給ひ、それがしはわづかの年數なれど上の一字をゆるされ候と語て、羽たゝきせぬばかりの自慢に見へたり。嗚呼かなしひかな。翁の道かくも拙き事になりくだりたるや。いつの世より何人のなせる罪ぞや。完來叟もし耳にふれなば定めて教示あるべからんに、かゝりとは告しらす人もなしと見へたり。こはわけて道の恥辱なれば、誹謗に似たれども諫の一助としてこゝにしるす。さりながら雪門にも蓼松と聞ゆるつはもの出來たれば、かゝるおろかなるともやがてなくなりなんと、いともたのもしくよろこばしくぞはべる。將又願はしきは、東都も諸國に倣ふて、蕉門葉の正風同士は四海一つ友として互にゆき通ひ、翁在世の格にあらまほしきもの歟。さて段ゝ述るところ、過言の罪まさに死にあたるべし。しかはあれどはじめより申ごとく、かへす／＼もみだりに誹言を放ち人をうがつのこゝろばへならねば、あさきを捨て深きを汲、正風千里一躰ならんいきどほりをおこし給ひて淵源の清潔にかへし、蕩ゝ乎として松濤をしらべ、風流のむしろを武都の四境にしきあまして互に月花の膝をまじへ、雲雀のこゑのくれ遲き夕ゝの筵をおしまんは、又大なるたのしみならずや。

附言

芭蕉翁を世の人俳諧師とのみ思へるは大なる誤なり。此翁の膽をさぐり得し人々は門人達のうちにも多くはなかりしとしらるれば、まして今の世の人をや。此翁の新風よつておこるところをしらずんば、何ぞ翁の腸に入る事を得ん。そも〳〵蕉翁は一家の道人にして傍に俳諧を好まれしなり。しかるに此僻終に捨がたく、幸に其道をもて一筋の新風を發し、生涯のはかり事となして是に道志を述られしなり。老子五千言を吐、孔子春秋を書給ひしも、事こそ異れ志に於ては同意なり。翁は素より隱者なれば世の中にかゝづらふとをうとみ、西行・宗祇の跡をしたひながら、亦その糟糠をむさぼらん事のくちおしさに、俳諧の名をかり、こゝろを大道にもとづき、一家の新躰を發明して一期の道德を是にかくされたるなり。其證は翁みづからそれとなく、ホ句にも文にもみちみて、わが道はかくぞといはぬばかりにあきらかなれども、それさへわきまへしる人なく、唯景曲詠物にのみ興ずるものと思ひとりて芭蕉流と名乘んは、まことに詮なかるべし。さればこそ近世翁の句を明らかに解したる人まれなり。大道の腹がなくては、翁の腸にわけ入る事かたければなり。今の人やゝもすれば、氣員の、腹のと口功者をいふ。いづれの氣員か、いづれの腹か、いと覺束なし。翁の門に遊びたりし人々を見よ。去來・丈草・許六・越人・其角・嵐雪、其外嵐蘭・凡兆・支考等の輩、皆一家の大儒道德、英才の歷々なり。それを嬰兒のごとく愛し扱ひ、慈母のごとくしたひつかへしならずや。たゞもとづくところもなく正風といふものいかに發明ありしとて、夫のみにてなんぞかゝる人々、親のごとく尊みしたがひはべらんや。これをもて翁の高德を考しるべし。或人、蕉翁は道をうらざりしゆゑよく賣れたりといふ。誠に拙き蒙說なり。それは今時の点者などいふものゝ俗腹にくらべたる謂也。此翁もし俳諧をこのみ給はずんば大道一家の賢名をとゞめらるべきを、いはゞ惜むべき事なり。書に名高かりし雪山は、予が所緣のものなり。書道に達し過て學德の名かくれ、唯書家とのみ思へり。此類なり。かゝる高德あればこそ、身陪藩ニ出て道は天下に布き、德は雲閣もかろしめ給はず。剩かたじけな

くも神号までさづけさせ給ふ。是自然隱德の顯はるゝ所なり。扨又隱者に神号など給ると、翁の靈意に叶ふまじなどいふ輩あり。笑ふべし。隱者は生て居るうちの事也。是又俳諧師の先祖とのみ思ふ蒙昧の了簡なり。よく考て心伏すべし。

○今の世の形をもていはゞ、しきしまの道は此御國の學びの花、詩はもろこしの學問の花といふべくなれり。こゝをもて類する時は、翁の俳諧は大道の花といふべし。佛道は此三ツのものゝ材につかふものとなれり。かゝる事もわきまへなく儒僻の口質などに、雜俳に泥じて翁の道をむざと小事などゝいふは、かたはらいたき事なり。大道、小事にあらんや。其花ともいふべき道なれば、いはずかたらず此道より大道に入らるゝものなり。是をなんぞ小事とせんや。

○翁の流れを汲む輩、滑稽と書はこゝろへ違なり。翁の捨給ひし所也。既にみづから申されし事など考合すべし。猿蓑集の後に、翁は滑稽なりと丈草が書るは、翁といふ字を入たるこゝろゆき深く味ひしるべし。翁のみち、俳諧の名はかりものぞ。それを漢文にてしるすにより、又字義にかゝはらず俳諧の字のかりものに傚ふて、滑稽の字をかりたる也。さるが故に翁の字を用ひて、かれとこれとを差別し、いにしえの滑稽と等きものにあらず、翁一家の滑稽でといふこゝろを含めしなり。許六が滑稽傳は翁已前よりの傳統をしるせばなり。

○翁は佛頂和尙に付て禪學をし給ひし悟道の人なりと。是又何もわきまへぬ輩のいふ事なり。大道と禪家の道と相同じ。翁は素より道人也。同じ道ゆゑ禪門は捨られしなり。ひろく學を試んがため禪家に入て聞かれし也。同じ道ゆゑ禪門は捨られしなり。

但、大道と禪家の道と同事といふには子細あり。大道がもとにして禪は末也。此論明らかなる證あれども、憚る所ありてしばらく口を閉。又こゝに用なきをや。

○調子の事、當時の人、何を仕立るに上品のこゝろ言葉を用れば調の高く、鄙意鄙言を用れば調ひくしと思へるも少からず。誤也。調子といふは管弦（絃）糸竹の調子に異らず、呂律の應ずる所なり。俳諧のみにかぎらず千萬の諸道、是をはなるゝ時は其位とゝなはず。日用の談話のうへにもある事也。いかに言葉をたゞ高く、いかにいやし

くいひたればとて、そこにはかゝはらず、高きは高く卑きはひくき也。語路の轉勁(マヽ)、手爾葉のあつかひにて自然と高下を備るもの也。冬の日は極て高調なれども鄙語をも用ひ、猿簑は中調なれども上品の言葉つかひ、炭俵已下下調なれども鄙言ばかりを用ひたるにてはなし。是にて味ひしるべきたり。將、㒵面の形を見て、おもしろき調なりなどいふ人有り。これも心得違也。調に面白きの、おもしろからぬのといふはなし。調はきはまりたるものなり。かくのごときは、おもしろき風姿なりといふべきものなり。

○句の光りあるとはなや〳〵しきとあり、是を高調と思ひ、句のにぶきとぬるきとあり、これを下調とおもへるもありと見ゆ。是も相違せり。似たる場にてたがひやすかるべき所なり。腹中に呑たる人は取違へまじき事なるを、やゝもすれば此こゝろへしたる人歴々にもあるぞ。にぶく・ぬるき・光り・はなや〳〵しき、此四ッのものはともに句のやまひにて、當流にはわけて嫌ふ事なり。先光をぬく事、中段已上の人は第一の修行ぞかし。上手の句に光りはなきもの也。にぶき・ぬるき・はなや〳〵しきも相同じ。句の清水のごときは凄く風味なし。垢あるはきたなくつたなし。おぼろにうち匂ひたるこそ、ゆかしくもなつかしくもはべる。よく〳〵翁其外門人達の句までも沉吟して味ひしるべし。たゞし高調は得安く下調は得がたし。眞草行の躰も自然とあり。草の躰は極て下調たるべし。俳諧の修行は第一草躰にあるなり。翁もわが俳諧は草にありとこそ申されつれ。是に自在ならずんば俳諧を得たりとはいひがたかるべし。けだし初輩の修行は先、冬の日・猿簑を目當にして高調より入べし。是に熟して後自から下調の得がたきをしらむ。

○翁の道は淡薄を尊ぶ。是こゝろ空無に處すればなり。胡甘きをさりて辛きを用ゆ。其からきにさま〳〵あり。胡椒は凄く、山葵は寒く、生姜はしたゝるく、番椒はいやしく、山椒はねばく、辛子は鼻にたちてくるしく、塩は咽にしみてせつなし。たゞ青蓼の淡く跡なきにしかず。鬼貫などが風味、塩に胡枡の配剤にして少諧白を加ェたるなり。翁の口に甘味し給はぬ所なり。初心はこゝにお

どろくなり。高腹にはうるさく飽やすく、氣員高きに似て却てひくし。しかしからくせんとてにがみに落べからず。あぶなきところ也。味つゝしむべし。

○句はさびたるをよしとす。さび過たるは骸骨を見るがごし。皮肉をうしなふべからず。

○俳諧に賦・比・興の論をいふ。古今に始て六義を載たり。翁はこれを取給はず。いはく、六義は詩のうへの事なり。わが道に是を用ひず。强ていはんとならば、磬(マヽ)・句・寂・栞、此四ツをもて四義ともいはん歟。それも入らぬ事なるべしと也。はじめにいふごとく翁の道は正しく大道の花なれば天地とおほきく、六義などのちひさき論にかゝはらず、寓言をもて萬物一呑にいひこなすなり。人界を花鳥に寓し、花鳥を人界に寓し、有情非情互に寓し合てこゝろをば大無に所し、理を去り玄をもとめ、人の敎戒にもかゝはらざるにあらず。さればこそ微妙にして舌頭に說がたき深長に至るの道なり。既に翁曰、無念藏(マヽ)の中に一物發る、是をなづけて發句といふ。

○不易流行の說、いにしえになくして翁の發明なる事は云に及ばず。實に是不思義の活法なり。其說は既に先哲の沙汰して明らか也。然るに當世心得違たる人又少からず。流行〳〵とのゝしる口つきを聞くに、たとへば婦女の髮の結ぶり樣や笄などのはやりゆくと同義のやうに思へるさうなり。さにあらず。不易流行と一時流行との二ツあり。不易に組合かたは、万代にうつりて捨らぬ流行なり。四時のうつりゆくに隨ふ自然のことはりなり。されば不易中に流行あり、流行中に不易あり。互に組て千萬年の末にも新しく見ゆる活法なり。一時流行は即坐の句にて當意即妙を述、一座限の捨句なり。翁の景淸の句のごき是なり。見よ〳〵、翁の句ながらも百年の今手本に取れず、其時限の座興なり。翁の心月をさぐり得て日ごろこゝろに治(マヽ)め置、日ゝ夜ゝに先吐の句に倦、新みをさぐり、糟粕をなまじと工夫を凝すときは、今夜はあすと明て新しく、今月は來月とうつりて古からず。人一歩よりおこりて千里に駈るが如く、居らずとゞまらず。是みなわれとこしらふる事にあらず、天然にしたがふ所の活法なり。これを名づけて流行といふ。是翁の高才大道

にもとづく發明、感歎するにあまれり。ものゝ筋、人のあらはしたるうへは誰も思ひつくべく見ゆれど、中〻是等の事凡愚の發見に及ぶ所にあらず。かゝる事さへわきまへしらず翁の道を覗得もせぬ愚眼にて、翁を文業(マヽ)なりなどいふ暗雲ものも今の世にはありとかや。其ほんのくほの見へすけて笑止千萬なり。しかしかゝる輩は愚人なれば取に足らず、捨置べき事になんある。

○輕み重みといふと、是をも當世心得違ひ、ものまね・おとしばなしのかる口などいふと同じ事に思へる人多きかな。その違へる品さま〴〵ありと見ゆるぞ。

一に曰、沉案もせずして卽坐に、目に遮るまゝをさつといひ出すを輕みとおもへるもあるが、是は輕みにあらず、安みなり。

二にいはく、いやしき言葉を用ひ俗中に引落し、うつかりと言を輕みとおもへるもあるが、是はかるみにあらずして、うき拍子なり。

三にいはく、意幽玄にして急に聞取がたき句。

四に曰、深く案じて工みにいひのべたる句。

是を重みとこゝろへたがへるもあるかな。

右のごく思ひ違る輩亦少からず聞ゆ。それ重み輕みとは根元口中の事にあらず、心のうち也。尤、作の輕重・手爾葉の輕重もあれど、畢竟は是もこゝろより出る枝葉なり。第一は趣向にある也。たとへば野中に月が捨てあると見出して句に作る、是趣向の輕み也。女郎花の文字になづみて草枕に一夜契たしといふ、是重みの趣向なり。更にいやみ也。猶、越人が蒴黄の幮の句、翁の論のごし。

きられたる夢は誠か蚤の跡　　其角

是作の重み也。趣向は誠に輕し。誠かとかへて、跡と坐語を押付たるにて重み出來たり。

長松が親の名で來る御慶哉　　野坡

是古人、輕みの格に引たり。是は作の輕み也。こゝろは左のみ輕からず。

水引のとけぬ寒さを箔のちる　　對竹

これ手爾葉の重みなり。再案して、

水引やとけぬさぶさにはくの散る

右にかぎるべからず、千變萬變なり。一やうにいひがた

し。くだ〳〵しければ略。一をもて萬をしるべし。惣躰翁清撰の集には、重き句とてはひとつもなしとしるべし。かるみとてちよつと口先にもの言事にはあらず。一段深く案じてかろ〴〵と句作る事なり。趣向の重きはいかに句作をかろくすとも、勿論輕くなるべきやうなし。此重みといふは杢躰病にて、翁の道にては尤嫌ふ事なり。はやく捨べきものぞ。輕きはいかほどもかろくすべし。害なし。しかれどもかの安みに落べからず。又俗中に引落して言ふを輕みと覺違へるは、炭俵・俗(續)猿蓑をかるみの俳諧とするよりの取違なるべし。此二集の輕みそこにてはなし。世話に落したるは其時の流行也。

此二集より深川集迄の俳諧の仕ざま、甚翁のこゝろを用られたる傳あり。今しばらく口傳とす。

○文章の事、當時文章と俳諧とは別義と思へるにや。俳諧につり合ぬのめりたる躰を用ひ、或は漢文を假名書に直したるばかりの躰も有り。又、翁已前の狂俳滑稽も見え、或は戯作・草双帋に落る俗にチャリといふ躰もありてまち〳〵なり。翁の言のごく、いにしえ何の文章も取べし。しかれどもこゝろ・かたちは翁一家の躰なきにしもあらず。是をうしなふ時は翁家の俳諧にあはず。他流はしらず翁の家におゐては俳諧中皆文章也。書讃一筆などいふがごく俳諧同一躰に書べきわけ也。しかるを俳諧は當家の流行にして、序・跋及び言葉書等は、今國學者流に古學家といへるものゝ用る万葉風などいふべき躰を取合せ書る。誠に後家ものにしてわけて見ぐるほし。さらば俳諧も萬葉躰ならでは取合ぬなり。翁の曰、俳諧の集は俳諧のうちにてすべしと。是一集中皆文も句も俳諧なればなり。曠野集の道具立にさま〴〵の事持込過たるさへ心にかなはざりしとなん。惣じて文章も句もつれ立ちて、俳諧中にて流行すべき事なり。扨又俳諧中に和哥の枕言葉又地の詞、其外物語の言葉或は古言等用る事、當門に於ては其つかふべきしをりなくてはつかはず。何のわけもなき所へつかふときは、平地に浪をおこし、物しり兒にそれがいひたくて遣ふたりと見へて、畢竟は出ものとなり、其詮なきのみかは翁の意味に叶はずして、當流の俳諧の仕ざまといふべからず。かゝる事も今はやみくも

の世の中なり。よく〳〵つゝしみ味しるべき事ぞかし。

將、猿蓑集の序、晋子が名をかりて實は翁の稿なり。此文の書ざま、今の人ゝ何と見給ふやいかに。

○當門に遊學する輩、たゞ議論穿鑿のみに走り、口授口決ばかりを聞たがりて術を練るにうとく、たゞ上へ走りて天狗づらをする輩、當世のはやりもの也。かゝる人は決て誠の上手にはならぬもの也。是を名づけて茚川俳諧といふ。術より入て然して后の傳なり。術にうとくしては口授口決を聞ても胃中に入らずして、發明する事あたはず。たゞ口うつしを辨のうへに走りて心は暗やみ也。辨と術と相對し明らかならずんば何の益かあらん。口授も口決も術に達る時は聞ずして至り、さづからずして得るをや。

○此道に於ては、いかなる學才ありとも先夫を用ひず、愚を守りて心を蒙昧にかへし、小兒のいろはより習ふがごく師に付て堅く謹み學び、さま〳〵の私意をまじへず、正直に師の教を受用し分骨（粉）して學ぶべき也。才にはこり上手めかしたる事をしたがい、或は点取などいふものに交り種ゝ混穜（雜）するときは、少ゝ術に叶ても當流の規則備らず、終に雜俳となりて本場の哲には入がたきもの也。よく師の教を守り切磋琢磨の功をつみ、其教腹中にうつりて千變自在の手裏に至りては、口にいかなる惡風を吐ともこゝろの明鏡是をうけざれば、いさゝか害になる事なく、則をやぶりても則に叶ふ。是翁のいふ格に入て格外に遊ぶの時節也。正道を遂んとならば此禁戒黑（遵）正直に守るべし。もし才に慢じて此戒をあなどり思ふ輩は、愚夫にして用ゆべき人才にあらず。

但、初より正道の師をえらぶ事肝要なり。もし永泥にはまりては、うかぶ世さらにあるべからず。且こゝろ高ぶりたがろ、凡情の常也。是を克己していつも人よりおとりたろと耻る所に目をつけしめたらば、是上達するのきざしなるべし。尤生涯にかけて修行すべきなり。

○蕉風中に俳諧をチャリとこゝろへたるも近ごろおこれりと見ゆ。あやまれり。それは翁已前の事也。翁變風の俳諧ならばかつて狂戯にあらず。今おかしみといふは可笑のをかしみにあらず、おもしろしと感美する意也。ちかくいはゞ雅俗の差別ありて、戯場を見ておもしろしとい

はんと、花をながめておもしろしといはんとのかはりめなり。かならずしも戯語狂言の繪双帋ぶりにおちいるとなかれ。

虚を逃て實に叶ふ、此間に正風の微妙ありて、こゝにおかしみはあるなり。將、對竹按るに、唐詩に白髮三千丈と前置に虚を逃、依憂知個長しと下にてうけたるにて、上の三千丈のうそが忽實となりて、憂るこゝろの甚しき姿があらはれ、こゝに句の神ゝとゞまり、是よく正風の虚をつかふに似かよひたるもの歟。

○此都會にて芭蕉の正風隨一とおもひ、おもはるゝ宗家の會席に行あひ、傍より其付合をうかゞひ聞留たる句とて三句のわたりをしるし來り、善惡を問ふ人あり。その付句、

かつたりかたりぬり下駄をはく
とつさりと脊中うたれて死ぬばかり
いつ來なんすといふが御仕着せ

是坐中殊に感じ合たる付なり、よろしきやいかにとなり。予唯脇下より冷汗を流して返答に當惑せり。かゝる正風いづれの魔國にて行はるゝや、わが翁の正風にては先文臺に近くる事を憚るべし。惡風といふにも程もあるべき。第一は世の風俗をも害すべき魔道なり。是を正風と思ひて感ずるこゝろいかにぞや。門人には親の寵愛玉にもかへぬ人の子も多かるべし。夫ものゝ師となりて牽敎する人物にかゝる事をよしとして、大切の人の子を魔界に引込む惡行のおそろしきかな。師たる皃付して吟聲もしらるゝ口つきかや、かなしむべし歎ずべし。其宗匠の名をわすれしが、其問たる人も不幸にして泉下の客とはなれり。尋問ふべき便をうひなひつ。[四]もし其名を耳底にとゞめたらんには、天下のためにもこの宗匠の膝もとをせめ抑て、直言の節[五]諫をつくすべきを今更殘多くもせんかたなし。

○このごろ諸國風士の名をあつめ、すまいの番付に比諭[六]し、梓にかけて此都のちまたに出し賣る也。愚人凡俗のなせるわざなれば取にたらずとはいへど、風說には其こしらへたる輩が師たるものも、おのれ〳〵が名をうらるゝがうれしさに、みそかに聞てゆるし置ならんとぞ。しかれば風流門の中にかゝるいたづらものありや、耻べし

〳〵。剩、元鋒(祿)の祖師笑はゞわらひ給へたど書たる、實に風流門中の重罪人かな。大德の翁をおのれが描き傷腸に引當、大穢をつけまゐらす也。哥舞妓評判戯作草帋の中に噂ばかりも混じけがされ、何ぞよろこばしく一笑し給はんや。わがみちのかくもおとろへたるかなと、黄泉に足ずりして千嗟萬歎し給ふらんと、おそろし勿躰なし。

○葛飾の素丸、冬の日解ならびに說叢大全とてあり。かゝる類の書、世に林をなすといへども、おの〳〵僻說繁ゝとして却て人を惑はす類少からず。此素子が述は夫にことなり、述るところ實に明らかにして說本の冠たるもの歟。初心のたより大方ならず、好て見るべし。說叢の方わけてよし。よきは斷りかな。去來が言葉を丸にて我力のごく引直し書たるものなればなり。中にいさゝかづゝ誤れる条あるは、去來がもらしたる所を素子が了簡にて補へる所と見ゆ。さりながら和漢の書・上古以降註解傳說、悉く誤なき事あたはず。あながちに責べきにもあらじ。素子が功つとめたりといふべし。しかし去來抄など見たらん人には、此書無益の書なるべし。おしひかな。

○或人問ふ、

梅が香にのつと日の出るやま路かな

此句神祇なり。のつとの言葉、下心に祝詞(ノット)をふくめりと或る宗匠の著述に載せて、やがて梓にもかゝるべきよしなり。實にさる事にはべるやとなり。荅ていはく、以の外なり、句情も姿もわきまへぬ業說也、論ずるに足らず。かならずかゝる邪論に惑はさるゝ事なかれと。此人も左こそと伏して去りぬ。嗚呼笑止。假初に宗家の稱をぬすめる輩にもせよ、知たふりをするにも程もあるべきに、これらはあまりなるめつた的なれば、今時の世界誰かまとゝするものあらん。初輩といふとも一笑して止べきにぞ。扨註解の次手に、

梅が香にちやうりやうふりやう黑木賣

是嵐雪が畫に翁の讃なり。ある家に秘藏せり。書は柴垣のごくなるものゝやうへに梅の畧畫なり。翁の句悉解せずんばあるべからず。諸大家の說を聞ん。予は唯翁の博識を感ず。

梅さくやしらゝ落くぼ京太郎

此句物語より作し給ふといふ說、まことに業說也。左には

あらず。しらゝも落くぼも所名、梅の多き所也。京太郎は京より西の近國にていふ雲の名、是を物語の名に借たる也。その所に行あたりて物がたりの名にかりたるを思ひ出し、おかしく思ひて作ありしとは、下の京太郎にてしらるゝ也。疑ふ所なし。しかれば物語のうへにて作し給ふにあらず。物語も此地名に寄り、此句も此地名により、双方別々なり。たゞものがたりの名にかりたるを、おかしなつかしと下心に思ひ寄せられしとは見るべし。

右の句、物語より出たりとて、むつかしき僻說をこじつけ言人多し。何も六ツかしき事なし。世に人々のいひふるゝ解、こじ付の僻ゆへ、此句の神ゝは留守になりて居るぞ。物語にかゝはるによりて解兼る也。解するに何も物語にかゝはる事なし。しらゝ・落くぼはともに所名、京の方にむかひ登り勝手の所、しらゝ・落くぼと地つゞけり。京太郎は京のかたより出て西の方へ行向ふ白雲の大なるもの、雲の峯の類なり。是を京より西の隣國にて京太郎といふ。丹波山を見こしに見ゆる雲を京にて丹波太郎と云に同じ。（太郎といふは第一に大なるものをいふ本邦の通語也。嫡子を太郎といひ、關東第一の大河利根をさして坂東太郎といふがごとし。）此句春の央其地の景姿に望み、梅の盛白妙なるに感じて先、梅咲やといひ出し、扨梅花のしろきよりしをり出し、幸にしらゝ落くぼとつゞけ、（落くぼはしらゝの地續）又落くぼより遥に山上を望めば、眞白なる京太郎雲が見ゆると也。上五文字より下までしろきをしをりつゞけたる句也。一天暖和にして長閑なる春色言外に見へて誠に名達の作也。物語をかする所は、はじめにいふごとく、物語にも此名をかりたるかとおかしく思ひ寄せられたるのみなるべし。さまざまの僻說述ふべからず。

古池や蛙飛込む水のおと

深川六間堀鯉屋藤右衛門（私曰、杉風が子、此家代ゝ藤右衛門をも名とす。此時はさはや杉風は隱居なるべし。）野屋敷あれはてゝ藻屑にうづみたる寓感、放魚池潤蛙棊の律の句思ひ寄せけ。

こは翁文音の留書なり。

此句ことふりにたれば、今更句意を論ずるにあらず。しかれども當時猶僻說にくるしみ、まどひ疑ひて決せざる輩甚多し。かくては翁の腹に入る事かたかるべし。さるによりて此證據を顯して人の惑を解しむ。他よりはいか

やう共見次第也。當一派の人々に於てはかならず惑ふ事なかれ。此證據を的にして落付くべし。素より翁の句、心月あるは此句にかぎるべからず。初にいふ大道の高腹より出ればなり。今世我黨に至りても其心月を詠ずんば、何んぞ芭蕉の家流といふに足らん。

句の次手あれば今こゝに當時の句を揚て、しり安からしむるの意也。

句の活所なく居付て死物と成り、しかも古みに落る躰

花芥子のちらずに鐘の鳴る日哉

土手下り篠笹つゞくほたるかな

右の句をもて活所を得せしめ、居付を除きて新みに出す

へ花芥子のこらゆるとよやまの鐘　宇橋

へ土手くだり篠をこぼるゝ螢哉　北尼

一句の作にて死活ある

長袴犂の着て出る茅輪かな

へ誰が犂ぞ茅輪に餘る長ばかま　石海

一字にて只事となり發句と成る

道ばたの畫兒さくや雲の峯

へみちばたのひるだほ咲きぬ雲の峯　士朗

一字にて死物となると活ると

荒るゝより折るゝにはやし女郎花

へあるゝより折るゝに安しおみなへし　護物

一句の主になるとならぬと

花あらばしのばしからじしのぶぐさ

へ花もたばしのばしからじしのぶ草　素檗

朝ゆふの寒さつれなくなくうづら

へあさゆふのさぶさかはゆく鳴うづら　篤老

三日月もゆらるゝ萩の山邊哉

へ三日月もぐらつく萩のやまべかな　心芽

言葉に俳諧なく、心にはいかいある

俳語の字例のかりものゝはせをの意といふ義なり

はつてふやさらでもいそぐ草まくら　對竹

きさらぎは扇をひらくはじめ哉　道彦

右之大下手

鶯の小兒半分あさ日かな　對竹

鐘のなるさかりを花の散にけり　作者しらず

下手と上手の取まはし
　みのむしも出て聞たいかほとゝぎす　茅丸
＼簑虫も聞人のうち歟ほとゝぎす
　湯あみせぬ身にこぼれけり梅の露　年彦
＼湯あみせぬ身のはづかしやうめの露
　をれやうのいかめしげなる紫苑かな　雪雄
＼いかめしく風折したるしをにかな
　花に倦て蝶にこゝろのうつりけり　有美
＼はなに倦ば蝶にもなけといひたいぞ
　宗鑑は酒きらひし歟ふきの臺　道彦
＼宗鑑は下戸でありけめ蕗の臺
正風に似て正風にあらざる仕立
　豎兒の命の親歟馬の息
正風になる仕立
　豎兒のいのちや草に馬の息　得布
正風にあらざる趣向
　頼朝のかうべに似たる牡丹かな　古人 春来
其角正風をやぶるの變より出
　百姓の口にもの見せん蔦もみぢ　作者しらず
生れよりの新しみ
　こと〳〵となるやしぐれの馬の腹　竹有
　河千鳥なくや博奕にゆくなとて　調ミ
作のあたらしみ、たけ高き躰
　此ごろは蟲ざはりも落葉哉　成美
おなじく利口なる躰
　痳よとてのまうけ歟蝶にふとん干す　芦圓
道具立の作、精神なき句
　小男鹿の生田を越てはるの月　ある人
　　生類　名所　春　月
　是切續の細工物也、句にあらず。
流行してむかしと今の風姿のかはりめ
　待つおしむあなさはがしの花ごゝろ　孤山
　ふえるほど耳にさはらぬ蛙哉　玉光
　死たいといふ鼻先や室の梅　一瓢
　しら露にあそび過せば萩のちる　茶静
　莽ほるこゝろ不斷のものになれ　岸居
　朝露になれと投けり火取むし　芝山

海老の手も泥かくまでに水涸し　可麿
紅梅に思はぬさまや個葉切　竹馬
鶴見せに子も負ゆく歟浦の春　守靜
浦波の音引更る火桶かな　松雄
分別の日歟鶯の日のうるみ　南竟
かゝる日は鳥も糞する紅葉哉　夫州
拍子なやきぬたに寒き母の年　竹營
うき葉にも朔日いふ歟船世帯　壽翁
ものに倦て夜寒を覗く眼鑑かな　謙園
しら露の丸く見へてもいそがしや　一茶
花のおもてこちら向けり松の間　太節
葬やとかく隣は神たゝき　星譜
うきときは見ぬ事にせし櫻かな　鹿太
はつてふやかれ萩からで置しかば　まさ岐
もる雨もかはゆき宿ぞ花まつ夜　木老
拾ふては榾火呼つぐ木葉哉　百貢
其こゑが夜のほこりぞきり／＼す　三津人
けふも出て雨に追はるゝすゝき哉　梅價
灯ともせば遠し入江のかいつばた　杜蓼
はつはなと息才な兒あはせけり　蓼松

あかつきの花はおぼろ歟風寒し　曉河
ひとつづゝ日の落かゝるつばきかな　幸雄
さびしみの足らでやどつと小鳥たつ　奇貨
あさがほにこりて植ればなつかしき　丘高
たび人に啼よる雪の千鳥哉　久臧
水際の暮兼て居る田にしかな　菊塢
秋の夜や風よりはやき松のこゑ　梅間
鰒の骨きのふの骨もかさねけり　嵐外
誰も來ぬ鞍馬のさくら雨越る　廣陵
卯のはなはどれ歟近江の何祭　壺丁
吹あれしのちや雉子なく天の川　雨綸
草がみななくやうすなり舞雲雀　蘿岱
しら魚は水の中なる水ならめ　梅我
釋迦の身に枯つめて來る嵯峨野哉　春棃
わがおもふこや空ふくはなすゝき　椿堂
藁一把ありとて我にとしのくれ　東野
ぬか味噌に冬といふ夜がたまりけり　大年
風に喰うものくらし峠の菴　草丸
千鳥なくや産家の伽の入かはる　碓合
名月やすげなく通る荻のこゑ　素樸

橋銭のしぐるゝばかり人も居ず　浦人
鯛の目のすゞしかりけり冬の月　了圃
はつ月やとかくさばけぬ宿ぶらみ　至長
こゝろゆくや木の葉しく夜のうつしもの　杜年
門あれば垣根もありつけさの雪　重行
寒しとは世にある人の言葉かな　幽嘯
おく底もかくさぬ芥子のひと重哉　衣重
どの家もけぶらぬはなしかたつぶり　亮几
ふぐと汁くらべあふたるかいなかな　しう
飯の泡ひくころ菴はしぐれけり　蒼虬
七夕も過けり門のあすならふ　史千
朝がほのけふは雨をとたのみけり　句光
蕎麥喰のしなのゝ客もうめのはな　芦菴
ものかけば墨滲うなる若葉哉　金堤
門松に今年の雪のふりにけり　鬼洞
啼聲にすがるこゝろよほとゝぎす　寄淵
燈籠の邪魔になるまでふけにけり　雨塘
はるの雪帯煙かくせば見ゆるなり　簾左
影までは見足らぬ雁や二三日　二蝶
松風を肩にかけてやなく蛙　才馬

出るものに見るものにして秋の月　雨考
庭草に螢ありとはしらざりし　卓池
いせの春先宮川の無錢より　一悳
飯蛸は光源氏のなんぞかな　漫々
水雞きくはし居や紫蘇のうかし汁　秋擧
殿童にかれ野を月の守りけり　梧井
中〳〵に身は捨られぬ紅葉哉　雲舍
冬思ふほどはあそべずはるの月　たり彦
いざよいといふひまもなき月夜かな　潭月
はつ雪を直にして買ふぞ柴一把　百非
春の月あそび過してやみにけり　百二
若菜からわか菜の年を見る日哉　百慈
やい梅の四五間中でなくすゞめ　松保
夕ぐれや掃残されしみそさゞゐ　桐栖
遠ばれのするや芒の八九月　宜彦
水鳥のほりしと思ふ入江哉　釆彩
あさがほの蔓となりけり草の蔓　烏頭
魂棚の灯は白露のたぐひかな　寶水
瀧の上ミ赤松ばかりのどかなり　其文
かゝるいをそしろに近しへちま沙汰　玉珂

着て出れば人の袷のまさりけり　篤老
日を別にくらしもしたり小春やま　五國
等閑に見るを桃にも月のさす　物二
川島や尻目にかける夏の月　都英
水の香にこゝろとゞけば鮓を呼ぶ　菲彦
眞ごゝろの月見て歟戸をはやくさす　完来
のらの跡奇麗に暮て鴈わたる　武曰
大根のからみにそむや秋のくれ　里丸
瓜むくや蠅なき宿を取當り　柿麿
篠の葉にゆくや名越の跡の風　瑚璉
うぐひすよ聲をこぼさば余吾のうみ　一峨
何をしに來るぞあやめに夜の雲　杉長
さくら木が連理になれば閑古鳥　風至
かし捨の笠かへせと歟蓮匂ふ　素其
それと見て見へずなりゆく鵜舟かな　葛三
しら魚にひかれて春も曉にあふ　光躬
三ヶ月をくゝりつけゝり鹿の角　南爪
四五輪の梅が香入歟鉢たゝき　濃水
蚊のこゑや路のうら葉は日もさゝず　一甘
思ひ切て坂東太郎しぐれきや　馬六

鎌とぎに出る口はあり雪の家　東蒼
雛達もこゝろがゝり歟峯の雲　直一
須磨明石見に來た春を月の出る　秋人
仲のよい道の柳もかれにけり　竹本菅大夫
落し水どこまで行て酒になる　普買
ほとゝぎすなくやもかりの淺黄幕　遊慶
枯芦のかれ殘しけり小田の寉　月蝶
かざしまで起してまつや初しぐれ　宙太
さかやきの跡からすべる落葉哉　園むら
あかつきはわれが蛙でないのみぞ　至德
寢るてふをつまみそこねて興に入　也好
乳くさく成たる晝の火燵哉　呂律
かほばせに秋たつ人よ戀もせぬ　米砂
鉢たゝき月は下地の待かゝり　可来
山水に蛤活るさくらかな　万和
小ともしをさし出す空や歸鴈　千崖
雀子やうられゆく子の袂より　与人
雉子啼や身に山彦のあるやうに　路丈
春の夜や檜の香にも人の寄る　二鶴
こもらばや四方は花の壁にして　米彦

閑古鳥さびしき聲もなかりけり　桂瓜
うぐひすは居ぬよ目白な聲ぎりに　白彥
見らるゝや松露かく子のぼんのくぼ　布席
踏脱で寢た夜明れば木芽哉　羅風
こがらしやにくまれものゝ高足駄　靈守
夜やおかし花の小桶に手のさはる　東陽
いで花のかたらば聞かんちりごゝろ　壺半
寒き日や瀧より白き筑波山　月鴻
たゞ居てもおもしろき日や蝶の飛　李長
むら千鳥落れば數もなかりけり　龍門司
網の目にひたふる雨や楷明り　五渡
ものわすれしてやすゞしき家の口　蕉雨
いなづまやあとかたなきが秋のもの　非眉
ひとたびは分別もなし雲の鰒　似藻
かれ尾花枯けり月にけぶるほど　楊州
乙鳥の來るや朝〳〵茶釜拭く　方呂
夕げしき鵜の足水にはじまりぬ　乙二
出た所はなくて出てあり雪の月　扇暑
花になく鳥にてあり朝雲雀　玉匣
鳥の巣や嵐の跡もつくろはず　一葉

人の事いはぬよ音戸の花すゝき　松隣
猫の手も一時あるに蕗の薹　荏老
菜のはなや夜の思ひのうすしとみ　樛雲
姥捨は苗代見てもたゞならず　竹里
ほろにがき匂ひもすなり春の野ら　燕市
うぐひすの嚢にも殘るあつさかな　武陵
蚤に寢ぬ朝の趣向は青すだれ　自由
あさがほや蚊の一群にわれひとり　その女
夕皃や簷にかゝる湖の水　眞彥
ゆく水の先からくらき鳴子哉　素迪
棹にあたる壺大きうおもひけり　風篁
水もある水田の中の小草かな　玄蛙
なけ水鷄月のある夜は多事ないぞ　南非
せきぞろの來るや疊のやきこがし　木海
しら露の夜に入門や馬ひとつ　可盈
なでしこやけさはわするゝ蚤の跡　斑車
遠里のあるふりでとぶつばめかな　六響
しらぎくにさへゆくさまの在所哉　長齊
六日にはどこへ出るやら天の川　若人
秋の風あさは千鳥もふきこす歟　草史

浦山も捨ずよ月の有あける　盧一
窓の竹さはつても夏の夜は明ろ　千影
古郷のはや手にとゞく清水哉　葵亭
おし鳥のものいはぬこそ奇麗なれ　木甫
きのふ見しまゝにもあらず枯尾花　岳幹
牡丹切てやるおもひなり年のくれ　月底
夕皃の一むら見へて船の飯　岱雲
よしきりの口もほどけん花の空　車兩
はせありく人には鳴かね小田の鴫　湖中
見すごして月のいろさを恨まじ　蘿月
麥囲の二ヶ國ならぶ雲雀かな　對竹

翁曰、品高からんとすれば言葉足らず、こまやかなれば其さまいやし。艶なきはたはれやすく、強きはなつかしからず。

○近ごろ俳門の徒にもあらず、もとより蕉門正風の妙所などわきまふべくもあらぬ輩、みだりに俳論をかきちらし、いかめしく梓にものし、名利をむさぼるありと見ゆ。こはけしからぬ事なり。俗書なればいふに足らずといへども初輩のまどひを起す事にて、わづらはしきのはじめなり。初學の輩其心を得て、蕉門中に聞もなれぬ輩の著述とあらば、まづ師に監定(鑑)をうけてのち信用し給ひて可也。

○續猿簑集を贋作といふ事、是あながちに贋書といふにはあらず。翁、編中にして難波へ下り、寂し給ふゆゑに首尾をも遂給はず。草稿伊賀の無名菴にありしを支考行て編續たり。尤己れが名のもれたるを悔て、哥仙のうち他の名をおのれが名にもりかへ、或は名月二句の評ならびに今宵の賦などこしらへ入たり。良夜には支考は伊勢にありて、廿日の日伊賀へは來れり。翁死後の編纘なれば良夜にも居合たるやうにして、己が勝手にしたる也。されぱこそ猿簑にもれたる、霜の松露哉　といふ句の巻は續猿簑の集名に於る發句故、第一番に編置給ひしを猥に(繰)操下ゲなどしたる故、此句何の譯やらしれぬ句と成たり。さりながら俳諧は翁の俳諧に相違なく、こと〳〵く斧正ありて、自筆の中清書ならびに斧正の草稿ともに祕存せり。俳諧をも味ひ見よ。支考が手に及ぶ力にあらず、付肌もかれが筋ならず。將、門人達の句は翁死後の

編纂なれば、滅後の何も何ごゝろなく入足したりと見ゆ。こゝに支考ひとつ不屆のはかりごと有り。此集おのれが名を顯し、翁のこゝろざしを追なしたりとせば論なかるべきを、翁の手にてさせねばおのれが威光なきにより、唯翁の草稿の儘をうつしたる躰にて本書は己もらひとり、うつしを翁の姉聟山岸半殘にあたへ置、時を經て井筒屋庄兵衛へ含めて、何ぞ翁の遺書はなきやと伊賀を搜させ、くだんの草稿にさがし當らせ、庄兵衛が奥書を加ェさせて梓にのぼさせ、おのれは飛退てしらぬ皃にて居たりとぞ。しかれども其事誰かれしりたる人も在ながら、去來などは篤實にて口を閉、其外の輩もひそ〳〵言のみなりしが、越人ひとり大にからかふたりと聞ゆ。是越人・支考不和の一ツなり。不名者（不猫蛇）にもいさゝか其はしを述たり。

但、越人・支考不和の起りは奥にしるす。

○二十五ヶ條を貞享式といふと、いつの世よりの誤にや。是は翁、去來が所望によりて長崎卯七へしるしあたへ給ひしものを本ゝとして、或は已翁に聞、或は同門に尋給ひし事をも見聞して書あつめ、それにおのれが了簡をも加ェて小冊とし、翁の奥書を贋して正風裁錦と名題し、うり歩行たるもの也。後に已が一派を立るに至て名題も替たりとぞ。又別に翁の旨とおのれが了簡と混じてこしらへたる新式あり。板にはせず、翁の遺書とて寫させて金銀をむさぼりし也。定て今も彼一派には持傳るならん。是を名付て貞享式とは申なり。

○奥書を加ェてはせを在判と有ものは、悉支考等が贋作也。其中に翁の旨もあれど多くは捨給ひし翁已前の事をも取用ひ、それに已が了簡を加ェて惣別翁の謂と僞り作り立たるもの也。心得なくては見分にくかるべし。たゞ翁の筆を取給ひしものは、露沾公ェ傳へられし手爾葉の一書ならびに其角へ帋一枚ばかりに書てあたへられしもの有。是に奥書らしき事をいさゝか添て、はせをとしるし朱印也。是いづ方へぞ傳りてあるべし。支考大方此奥書のさまをぬすみ、少しづゝ文を増して諸書に贋附せしもの歟。手爾葉の書は露沾公の家に秘し給ふらんと思はる。翁はかゝる俗がましき事にかゝはり給ふ膓なしとしるべし。

○當時の俳則、悉支考が涎をなめながら翁の則と思ひ、支

考を誹るともがら正に多し。考るに翁滅後は諸國一統支考が勢ひにしかれ、一旦皆夫にうつりたると見ゆ。翁の教は大半かくれて行れず。近ごろになり俳諧はいにしえにかへりながら、流布したる支考則の洗濯人がなしと見ゆ。古集を目當にいさゝかしんしやくして用るのみ。故に中には、やゝもすれば他門さばきがある也。あやうしや。尾張の士朗はさすがによく洗ひて、獨すめして居たり。

翁曰、式は古式に倣へど、こは高慢ゆゑ強て式などにかゝづらはざる謂なるべし。されど則は然(唖)ト一家の則備てある也。志ふかき門人ならではかたり給はざりしとぞ。然して式も古式は大かた捨用ひ給はず、されば翁家の別則式とやいはん。文臺かゝり執筆および一坐の式などは、翁の定に近ごろ二條家の御手入ありて、偸閑(簡)易な旨としいさゝか改給ふ式ありし。是を本とすべきもの也。将、七部集俳諧のうちに古法を破り翁一家の法を立る口決ある巻一二あり。廣くしる人ありやいかに。

〇支考、翁よりはいかいの血脈をさづかりたりとみづからいひふらしたる。素より血脈とは傳統の景(系)圖の事にこそ。勿論おのれがこしらへものながら種なき事にもあらず。其根元は越人に翁の語り給ひし条々のうち、各別なる事をわかちて書留置たるもの有り。夫を支考ぬすみ取たるが越人と不和の初なり。是を種としてかの血脈をもこしらへしとぞ。翁滅後續猿蓑の爭論より意恨をかさねしが、支考とかくに越人を邪魔に思ひ、越人こそ翁の勘氣を請たるなどふれ廻り、同門の中を隔させたり。その事もいさゝか不名者に匂ひを出せりと覺ゆ。野水・荷兮も勘氣を請たりと言なしたる。これは越人が連衆なればなり。越人は肥熊の藩士、中比いさゝか変ありて浪人せし時名古屋にあり。後に歸參して舊餘(縁)につく。熊本にて終れり。佐分利氏にして其家條鄕に存す。墳墓は熊府流長院といふ禪林にあり。其歷代の檀寺なれば也。

〇門生問、或人のいはく、今四方垣のあるじの俳諧哥と号るもの、貴丈の學ぶ所の俳諧を三十一文字に延作るのみにて全く同じ道なりと。某左もありぬべく存ゆ、いかに。と也。答ふ、違へり。蕉翁已前俳諧と稱るものは、古の俳諧哥にもとづき、おどけたるやうに言ふとなり。俳

諧哥の事は、古今集につらゆきの書る通りなるべし。今眞顏のとれる所則其古ぶりならん。わが翁の道は左にあらず。初て虚中に實ある正風を發明して不易流行の活法をたて、其意は高く大道より來りて、別に一家の新風をおこされたる也。此故に俳諧に古人なしとも、又、名は古のはいかいにして、こゝろはいにしえの俳諧にあらずなどの謂あり。所詮名は借ものにして何にてもよしと也。さるによりて蕉門の道に於ては、實は俳諧といふものにあらず、一家新風の短哥也。强て名を改なば鄙短哥ともいはんかと翁も申されき。俳諧と稱しながら其字義にかゝはらざるいはれ、かくのごとし。今は大道の花ともいふべきもの也。四方垣のとれる所と混ずべからず。

或人、鶯笠菴に遊ぶ日、此書を反古溜の中よりぬすみ來れりとて袂より出しつ。ひそかにうかゞふに實に雨後の月夜に逢たるが如く、心快然として讀て眠らず。忽そこばくの益を得のみかは、未聞の珍說もまた少からず。よつて予あながちに乞得て深く匱中に納ながら、つら〳〵思ふに、かくまでいさほしなりて反古になし申されしと、いかさまにもこゝろありげには覺はべれど、かばかりの物一己の料に祕め果さんは空おそろしき業なれば、しのびやかにはかりて櫻木にものし、あまねくおし廣めんとするを書肆何がしいそぎ奪て、ふところにしかへるも亦おかしくや。もし居士の見そなはしていきどほりあらんには、予あやまり謝して地に伏すべからんのみ。

北總　芙蓉樓廣陵識

おもふといはざるははらふくるゝわざなりと、さる法師のいひけむをむべもとこゝろにとゞむれば、又くちびる

に秋風のさぶくて、さうもゑはたさずぞなりける。さはあれ凡ゝなるはらのへちにをさむべきりやうなければ、いかにもこゝろうきまゝに、いとまあるあさなゆふなふでにまかせしよしなしごとの、ひとゝぢばかりもありけるを、やがてかいやり置ける。こはたかき世のかしこきひじりのしわざに似つかむとにはあらで、ひきく徂徠のものよみがとしつきのたのしびに、屋づくりの圖繪しくらしたるたぐひにして、あさましく人に見すべきにもあらざりしを、いつの間にかは花のしらなみひきながして、しもつふさのなにがしが手にとゞまりつとはほのきこえながら、それさへうちすて置けるが、おもはざりき、櫻木に匂ひて世ひろうふきしきはべらなむとは。じちに見きくにつけて、むねにこゝろにおどろ〳〵しかりつれど、いまはいかにすともせむかたなくぞなりにたりける。日過てつら〳〵おもひめぐらすに、かくありてのゝちの思ひには、成美うせてこれによしなく、完來さりてかれにとゞかぬいとのこりおほしなどいふに、うつりすましてはじめのせちなる眞ごゝろには、いつはとなくうとくなりにたるは、かの三百篇と歟いふめるなかに、のちの婚いろこくなりて、はじめの寵さめはべるを諷したりしおもかげにかよひて、たれをかわれを諷すらむなどおもひあはするにつけても、ほいなくもそらさぶうのみおぼへはべれば、おのれにおのれをいましめつゝ、やとちからいれてめんもくをひしかめ、まろまどのほのくらきに、おぼつかなきこゝろの月をすましかへさんきはのさんげものがたりを、ふみはしのしろきところにあはてゝかきそふるなめり。

文化の丁うしにやどるとしのなつのなかころする日、老うぐひすのかさのかげに

居士みづからす

隨齋諧話

乾・坤

成美著

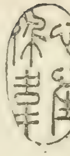
文政二己卯仲秋刻成

成美先生著

隨齋諧話

米諫園 豐久藏 校

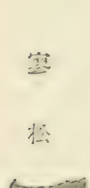
東都 慶元堂梓



とにかくにおほく年つみぬれば、なみ〳〵のものとはひとしからぬ氣はひ見ゆめり。かつら苔などのおひまつはれるいは木のたぐひさへだにしかなるに、人のうへにおいては、なか〳〵かくすにあらはるゝ德もおこなひもなくてやは。かゝる諧話のゆゑ〴〵しきをみるにても、さはおもひしらる也。まして隨齋のおきな、いにしへをこのみてつねにふみよむに、くらきをかうがへ、まどへるをたづねて、我見るところよし有とおもふものは得てをしまず、人にもうつししらせんとのこゝろばせ、世に信を(篤)薦うするのわざといはざらめや。その書あつめおけるくさ〴〵の中より、まづすこしをぬきいだして一帖となしぬるは、叟がつれ〴〵をまぎるゝ手すさびとなむ。をとつ日のゆふがたなりし、諫圃ぬしふといり來て、此帖の首に題せむことをまうさる。叟が言もそへばすみやかにとおもひしが、きのふはをかし、一甌の餅おくる鄰のために、ひねもすいとまをつひやせり。老のこゝろはれいのものいそぎにて、まつことのさぞもどかしからむと、今朝はよこ雲にさす日のにほひさらぬうちに、とく硯によりつ。あら〳〵しくも辭つくりて、すぐさまもたせおくる。墨もまだしめりふくめるまゝなるべし。

ひのえねのあき

塞松



隨齋諧話　乾

夏成美輯錄

紅梅やかの銀公がからころも　貞徳

是千句卷頭の句にて、世に紅梅千句と唱ふ。かの銀公といへれば、衆人みな知りたる故事のやうにきこゆれども、銀公誰人なるやしる人なし。今按るに、古今榮雅抄に、色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも、といふ歌の注に、(註)漢仙記に云ク、銀袖匂ヒ移リ木花古情留マルと云、漢ノ武帝の后銀公の袖の香、梅のはなにうつりて匂ひをとゞめたりといへり。おもほゆれの詞、今は詠ずべからずとなりとあり。銀公は此をいへる事疑なし。但シ漢仙記といふ書(二字闕)いまだ見ず。全文を見ねばくばしくは知りがたけれど、飛鳥井殿のかくしるしおかれし事なれば、浮たる說にはあるべからず。

冬之句

狂句木がらしの身は竹齋に似たるかな　芭蕉

ある人の說に、狂句とおかれしは翁の謙辭なり。後に門弟子の、狂句の二字をとり捨て、集などに出せしは面白き事なりといへり。案るに此說しかりとしがたし。まづ句を作るに、人に對するにもあらで謙遜の詞をおくべき謂なし。是はその比の格調にして、此外にも、＼御廟年を經て＼牡丹蘂ふかく＼芭蕉野分して、＼芋あらふ女＼あら何ともな＼猿をきく人＼晦日月なし＼風鬚を吹て、のたぐひあまたあり。此句も狂句の二字ありて尤風味あり。門人などの、師の句を沒後みだりにあらため削らん事、甚いはれなし。文字あまりたりとて、たま〳〵此句のみに付て臆說をなすは心得がたし。外にも是等の體裁あるをしらぬ故にや。但シ竹齋は尾張の名護屋にありて、後に江戸神田に住す。醫を業とし狂歌をよくす。世に誰人の作にや、竹齋ものがたりといふ草紙あり。

俳諧の句に点あはする事、むかしは百韵の中二三十句に過ず。中にも逸興ある句には長点をかくるもの二三句なり。貞德・季吟・芭蕉のころ迄大やう如レ是なりし。浪花の宗因・西鶴の門派より次第に点の句も多くなりしなり。

京の高政、俳諧惣本寺と名のりて世に行なはれし頃、京の隨流が破邪顯正といふ書を板行して宗因・高政等を批評し、貞徳の流派の一變したるを歎たり。その書の中にいへるは、諸國へ廻文をまはし同類をすゝめ、わけもなき俳諧に百句の中七八十点、長二三十もかけて初心を譽そやし、鳴わたれりと語る。この喝をきくに、けうとく胸おどろき空おそろしく、口を閉て閉居たりと書り。此書延寳七年の刊行也。百句の中長二三十句におよぶを、氣うとく胸おどろきしとは古風に殊勝なるとならずや。かく点の句（一字闕）多くなりしかども、今の世のごとく点に數をさだめてあらそひしにはあらず。其後其角が世上に点のおほくなりしを憤り、世俗を撓おどろかさんと半面美人等の印を刻み、是を句の傍に施して、かれは幾点これは何点と点數をかぞへしも、すべて世を玩てなしはじめし事なるに、その頃の俳士共角が顰にならひておの／＼点印をつくり、卷毎におしける也。今世上の俳士、是を俳諧第一の事のやうにおぼえ、都鄙にわたりて勝負をのみあらそふ事になりしは、其角が俑をつくりし也。

近來風体抄に曰、点に長点とて二ッ引事いかなる事ぞと試しに、まづ基俊の悦目鈔に、点の長サあまりおびただしく長く引事、口傳なきがいたす處也。長点一寸二三分に過（一字闕）べかず。平点は七八分乃至一寸なるべしと書たり。また備州に宗祇の点の卷あり。点の長短ばかりあり、二ッ引し点はなかりしなり。またいつのころか烏丸資慶卿（卿）へある人歌の点を乞しに、点の長短のみ有て奥書に、歌の勝劣は点の長短を以て定むべしとあそばしたるなり。かれ是おもふに、長とはながき也、一分二分のあらそひもたび／＼定めがたき事なれば、二ッ引て長のしるしとするなるべし。されば点、わざと長く引ちらし、色ゝ形をしてひくと、（一字闕）かゝる故實をわきまへぬなり。点者のしるべき理にこそ云々。

寶曆（一字闕）ころ黒露といひし老俳士あり。ある時甲斐山中を行とありしに、二月なかば草麥の青み立たる山畑に、獸の皮を燒て四五寸づゝに切て串につらぬき、畦ごとにいくつも立たり。畑うつ男に此ものゝ名をとふに、是はやい

かゞしと申て、猪の皮を燒て、麥あらす猪にその匂ひを嗅せ追おどろかすものなりと答し。されはかゞしといふ語は、もと臭き香を獸の類にかゞしむるよりいふと見えたり。御傘にかゞしと濁点を加へあれば、淸てはよむまじき事なりといひし。案るに、續犬筑波集に可政が句〳〵國の名のかゞしを立お梅田哉　といふ句も加賀のくにゝいひよせたれば、古くは濁音にいひし事疑なし。古昔にいふ香火屋もその趣にて匂ひを獸に令レ嗅なり。鳥驚の人形をかゞしといひ、また案山子の字を用ひし事は、友人芝山曰、案山子の文字は傳灯錄・普灯錄・歷代高僧錄等幷ニ面前案山子の語あり。注ニ曰、民俗刈レ草作ニ人形ヲ一令下置ニ山田之上ニ一防中禽獸ヲ上、名曰ニ案山子ト一。又會元五祖師戒禪師章ニ、主山高、案山低。又、主山高嶮〻。案山翠靑〻。などあり。按るに、主山は高く山の主たる心、案山は低く上平かに机のごき意ならん。低き山の間には必田畑をひらきて耕作す。鳥オドシも案山のほとりに立おく人形故、山僧など戲に案山子と名づけしを通稱するものなるらんといへり。さもあるべき事なり。徂徠鈐錄に、主山・案山・輔山と云ことあり。多くの山の中に、北にあたりて一番に高く見事なる山あるを主山と定めて、主山の前にあたりてはなれ山ありて、上手につくえの形のごくなるを案山とし、左右につゞきて主山をたすけたる形あるやまを輔山といふとあり。

昆山に
梅漬はうぐひす飲のさかり哉　　貞德

此うぐひす飲といふ事、酒宴の席にある事なり。その比の俗にて、いまの世はしる者なし。酒ののみやうにさま〴〵の名目ありしとなり。宗佐記に云、十度飲とは、たとへば十人まどゐして盃を十ヲ中に置て、まづ一人盃と銚子を取て始めさせ申シ、さて次の人にさして其人に銚子を可レ渡ス。さて又次の人飲て前のごくすべし。まはり酌なり。鶯飲とは、兩人出て十盃とく飲ゆを勝と申ゆ。盃は定り不レ申ゆとあり。その外も名目いろ〳〵見えたり。是を鶯飲と名づけし意は、古今集物の名の歌に、心から花の雫にそぼちつゝうくひずとのみ鳥のなくらん、といふ心をひきあはせて、酒を十盃ひきつゞけて飲ムはうき事にて盃のひるまもなき故に、かく名づけしものなら

んと、伊勢氏の考なり。

近江路のうらの詞をきゝそめて

此句はあふみの浦人のことばをきくと云事におぼえて過しに、此ごろ李由が湖水の賦を見て、ふと心づきし事あり。其文に、國中土に灰汁なく水に泥なし。音聲に清濁をわかちてうらのことばをつかふ云々。かくあればうらのことばは一種のつかひやうあるをほめたる趣にきこゆ。たとへば入門言葉などやうの事にやと、近江の人にかれこれ問しに明らかならず。後の人なほ考べし。

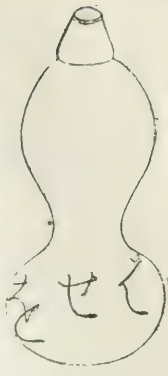
佐保姫・龍田姫は、春・秋の色を染出す造化の神の名なりといへり。おもふにこれは奈良の朝庭のころの諺なるべし。その故は佐保山は帝都より東にあたり、龍田やまは西にあたれる故、春・秋の方位を取てしかいふと見ゆ。また萬葉集第九に、吾去者七日不過龍田彥勤此花乎風爾莫落。此歌春に龍田彥をよめりといふ先達の違論あり。されど萬葉の歌は風の事を專によみたる故、龍田彥とは云る也。龍田は風神なればなり。神祇令ニ曰、風神祭義解ニ謂フ、亦廣瀨龍田ノ二祭也とありて、佐保姫・たつたひめの春・秋にやまの名をよせしとは別事なり。

おはらさしは五月廿八日なり。丹波國桑田郡大原の社へ諸人參詣するをおはらさしといふ。さすとはその處を心ざしてゆく義なり。壒囊抄ニ云、さすとは早く步む義、指の字を書なり。上林賦ニ、率呼直指と云々。これははやく行心なり。呂向注ニ、指ハ行也と釋せり。道をさすとは此心なるべしとあり。言塵集に舜蓮、鶉はふ門は木の葉にうづもれて人もさしこぬ大原の里。又三月廿三日を春さし、九月廿三日を秋さしとて一年に三度詣る由をいへり。蚕する人の殊に信ずる社にて、社地の小石を猫と名づけて携歸るとぞ。是は蚕に鼠のつかぬまじなひ也といへり。

芭蕉叟六物といふは、文臺〈學ニ見〉・大瓢〈米入号…〉・小瓢〈[illegible]〉・檜笠・菊ノ繪・茶ノ羽折なり。おの〳〵素堂老人の銘ありて家の集に見ゆ。その中小瓢と大瓢の文章とは故ありて予家に藏す。小瓢は芭蕉沒後松木紋水といふものにつたへ、

それより段々傳へたる趣、明和年間に黑露といふ俳士の傳來書にくはしく有。

小瓢圖



はせをの三字は眞蹟にて、たはぶれにしるし置れしを、后に消うしたはん事をおそれて金漆にてとめたるよし、傳書にあり。

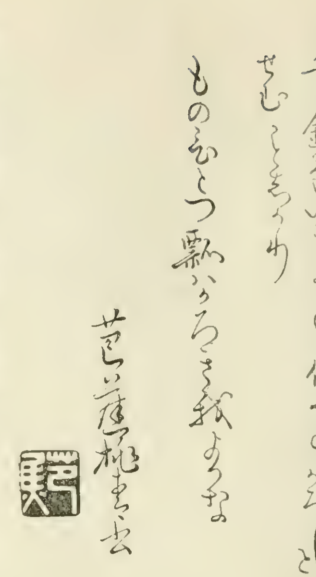
大瓢の文章は文集等に出ざれば、眞蹟のまゝに寫し出す。

按に、大瓢はいまだ川[illegible]十邸が家に在といふ

瓢之銘　山素堂

一瓢重黛山　自笑稱箕山　莫慣首陽餓　這中飯顆山

顔公の垣穂におへるかたみにもあらず恵子かつたふ種にしもあらで我にひとつのひさごあり是をたくみにつけて花入るゝ器にせむとすれハ大にして規にあはすさゝえにつくりて酒をもらむとすれハかたちみる所なしあるひとのいはく草庵のいみしき糧入へき物なりとまことによもきのこゝろあるかな隠士素翁にこふて其名を得さしむそのことばは右にしるす其句みな山をもて送らるゝかゆへに四山とよふ中にも飯顆山ハ老杜のすめる地にして李白かたはふれの句あり素翁これをもて我貧をきよくせむとすかつむなしきときはちりの器となれ得るときハ一壺も



徳元が俳諧初學抄ニ云、俳諧には連歌の外に五ツまさりたるたのしび侍るとかや。第一に俗語を用る事、第二自讃し侍りてもをかしき事、第三とりあへず興を催す事、第四初心の輩まなび安くして和歌の浦波にこゝろをよせ侍る事、第五には集歌古事來歷分明ならずとも、一句にさへ興をなし侍らば、なにごをも廣く引よせて付侍る事、是五ツの徳なりと云り。其角が猿簔集の序に、五徳はいふに及ばずと書しは此事也。徳元は齋藤齋宮といひて、岐阜中納言の家人、二千石を領す。後に江戸に出て法服を着し、徳元とよびし事、滑稽太平記に見ゆ。

芭蕉、ある時許六を尋ねし折、彦根ちかくの野中にて賊とおぼしき大男、あとにしたがひ來る。芭蕉自若として過ゆくに、賊せまりて衣を乞ふ。はせをやがて布子ひとつをあたへ、とかくして許六亭に至る。そののちかの賊、彦根の少年に云よせて、彼布子をかへし贈れり。はせを微笑してその事を衆にかたる。かの少年いはく、賊は犬神五郎といふ惡徒なり。先に芭蕉の跡に付て野徑にて只一討にせむとおもふに、いかにをくれけるにかうち得ず。いま許六亭にある芭蕉翁なる事をきく。あしう仕りてけるかな、よくよく侘給れとて返し贈れりといふ。按るに、昔門覺上人は西行を憎みて、あはよかならずしや首打はらんなど常に云り。ある時西行高雄にのぼり、文覺が室をたづねしに文覺よろこび、さまざまいたはりて一宿せしむ。そののち弟子ども、平生のことばにたがひて西行を奔走せし事いかにと問ふ。文覺いはく、我西行を打得ん事かたし、西行こそわれを打むずるものなれとまうされけるとかや。はせをもまた西行の沈勇ありけるならんと、そのころの人評せしとぞ。

彥根の許六は世に自負放言の人とおもへるに、常に溫厚謙遜の人にてありしとぞ。ある時一士人來りて俳諧の指南を乞ふ。許六辭してうけがはず。士人懇にいひてやまず。許六のいふやう、われ人におしゆべきほどの事しらず、ゆるし給れといふに、かの士すこし不興し、某此道執心なればこそかくまでには申せ、御敎示を得ても、ものゝやくにたつまじきものなりと御見かぎりありて、さはの玉ふなるべしと、すこしあらゝかにいふ時、許六大に迷惑せる体にて、さらにさやうの事ならず、われ俳諧に何の心得たる事なければいなみ申なり。足下はまた何によりてかくは仰らるゝぞといふに、かの士いよ〳〵憤りて、それは某をあざむき給ふなり。既に御著作のものあまた熟覽するに、芭蕉門において血脈相承せる人世史になし。君ひとり實に傳灯の俳諧なりといふ事をあらはし給ふ。さる故にかくは望み申すなりといふに、許六打わらひて、まことにさにて侍るや、あの著述のものはみな〳〵一時のたはぶれごとにてゆぞや。あのたぐひの書るものをもて實とし給ふは痛入たる事なり。もとより跡なしごなれば、必それらにすかされ給ふなといふに、士人閉口して戻りしとぞ。是を思ふに、許六はよく俳諧に遊戯せる人といふべし。いまの世の俳士の人をそしり、をのれを高ぶりて、やゝもすれば名を賣、利に走らんとする輩とは霄壤のたがひにして、その心の高き事をおもふべし。

右二條は古雪中蓼太の話なり。予若輩のころなれば、唯およそに聞て、何に出たる事なるや、また何人の傳へ置る話なりやといふ事をも聞ざりしを今後悔す。

古池や蛙とびこむ水のおと　芭蕉

ある人の說に、池のふりたる形容はさもあるべし。されど古き池をおしつけて古池といはん事いかゞと。按るに筑波問答の序に、過にし春のころかとよ、ふる池の亂草をはらひて蛙樂を愛する事ありきと、良基公あそばされしうへは難なかるべし。

信夫摺
芭あからむ六條が髮　はせを

ある本に叢とあるは誤なり。六條は少將成經の乳母なり。平家もの語少將歸還の條に云、少將の母上靈山におはしけるが、きのふより宰相の宿所におはして侍れけり。少將のたち入給ふ姿をたどひと目み給ひて、命あればとばかりにて引かづきてぞふし給ふ。北のかたはさしもうつくしうはなやかにおはせしかども、つきせぬものおもひにやせくろみて、その人とも見え玉はず。六條が黑かりし髮も白くなりたりと云々。

芭蕉、深川の菴池魚の災にかゝりし後、しばらく甲斐の國に掛錫して、六祖五平といふものをあるじとす。六祖は彼もののあだ名なり。五平かつて禪法をふかく信じて、佛頂和尙に參學す。彼もの一文字だにしらず、故に人呼て六祖と名づけたり。はせをも又かの禪師の居士なれば、そのちなみによりて宿られしと見えたり。その後其角が招きによりて、ふたゝび江戶へ立かへりて、

　　ともかくもならでや雪のかれ尾花　　はせを

ときこえしはこの時の事なり。

　　また是より若葉一見となりけり　　素堂

此句、とく〳〵の句合に、一見となりにけり　といだせり。かの句合は、歿後年を經て宗瑞といふ人淨書して印刻す。その時草稿に文字脫たりとおもひて、みだりに〵なりにけりと書りと見ゆ。誤なり。其角が句兄弟にも、〵となりけりとありてその評のと葉に、となりけりとは素堂が平生の口ぐせなれば、これを證には取がたしと書り。扨、と文字は大やう下につけてよむ句法なり。その證ひとつふたつをいはゞ、

　　古今集

日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬとおもふは山のかげにぞ有ける

　　この歌賢仕(顯註)密勘に、とみしはやまのとあり。

　　曾丹集

夜をかけて春くれ夏は來にけらしとおもふまもなくかはる衣手

　　慈鎭和尙の長歌に

かくてや今はあとたえむ　とおもふからに　くれは鳥

その外にもあまたあり。されば西行上人のいづくにかといへる歌も、へ〳〵とおもふかなしきと、へ〳〵と文字下句につけよてむべきなり。

ある人のつたへし芭蕉・立圃兩吟の附句あり。立圃は万治十二年に卒せし人にて、はせをの仕を辭して伊賀を出し年なり。此附句の風調を考るに、いかにもそのころのものならず。ひとへに信ぜられぬものなれば、我家藏の俳諧錄に是を載せず。其後享保八年に琴風が著したるおく記行といふ集を見しに、立圃といふ名多くあり。彼の雛屋立圃が後に又立圃と名のれるものありとおぼえて、尤まぎらはし。近世は父の名・師の名を襲ひて名のるもの世上往ゝあり。昔はかつてなき事なり。すべて物に名のあるは、その物を辨別する所以なれば、かくはあるまじき事なり。たとへば硯をスヾリと名づけ、筆をもおなじくスヾリとよび、墨をもまたスヾリといはゞ、何を以てわかたんや。されば人の名を次ゝに名のれる輩も、みづから是をわかつ事なければ、或は二世某・三世某と書る事止事を得ざるヿなれども、わづらはしく見ぐるしき也。人のくににも古人を慕ひて我名に用ひし例もあれど、それは世をも隔、ヿにまぎるまじき故ありて尤まれ〳〵の事なり。いまのごとく人每のやうにせしにはあらず。是らは百年以來の事にて、かの立圃などやはじめなるべきとおぼゆ。但、菴号などは、その庵をつたへたる人の次ゝに書る事は、かの例にはあらぬにや、それさへ古人さやうに書るを見ず。

又按るに、後の立圃は雛屋が孫なり。たばね菅といふ集の中に云、

祖父雛屋立圃、第三の句を存じ出て、この花のすがた發句にむすび侍りて、手向草にもとつく。

鷺草や御旅のあちよりこちらむく　立圃

とあり。此書、正德二年四月刊行。

夜寒・肌寒は秋のと葉なり。はだ寒はいさゝか寒き義にて、漢字の將ノ字にあてゝ、はたと淸ミて唱ふべしとい

ふ人あり。温故日錄にも將寒と文字にて書り。連歌には將寒の義なるべし。按るに、萬葉集第二十、防人歌に、佐ゝ賀波乃佐也久志毛用爾奈ゝ辨加流去呂毛爾麻世流古侶賀波太波毛。また古今六帖、むかしある人といふ部に、

〽ひとり寐の夜はだの寒さしりそめてむかしの人ぞいまもこひしき。是ら肌寒とはつゞかざれども、俳諧にては此歌どもを引あはせて、肌寒とせんも障(サハリ)あるべからず。

元祿七年のころ、芭蕉の家兄松尾氏の後園に無名菴をいとなみ建し。八月十五夜入菴の時の献立とて、尾張國より寫しこせり。

　八月十五夜

一煎物(のつぺい)　せうが　ふ　こんにやく　ごぼう　木くらげ　里いも

吸物　ゆ　つかみ豆腐　しめじ　めうが

中猪口　もみうり　くるみ

すり山のいも　しぼり汁　すしやうゆ

肴　にんじん　やき松茸

くはし　柹

吸もの　松だけ

冷飯

一芋(とりさかな)　煮入　さけ

宗長記の中の附句

　人のなさけやあなにあるらん

　女ぶみかしこ〳〵とかき捨て

これはあなかしこといふつゞきにて附合せたり。宗長は大永頃の人なれば、そのころまでは女文にかしこと書る事疑なし。かしこは甚ふるき詞にて、はたらかしては〽かしこみ、また〽かしこまるなどいへり。上古の神の御名のかしこねの命と申奉るにも惶の字をあてたり。男の文の終に恐惶と書るおなじこゝろなり。蓮如の文の終にもあなかしことあり。今の女文にかしくと書はこのかしこの轉ぜるなり。いつのころよりかあやまり來たりつらん。

　ほつれたる去年の寐蓙のしたゝるく

關西にて汚(ヨゴ)れ垢(アカ)つきたるを、したゝるし、或はしたるしと今もいふなり。此詞古き事にや、扶木鈔に、

加茂社百首　慈鎭

賤の女もおほぢ井づゝにゆふすゞみしたるき麻の

　　衣すゝぎて

源平盛衰記に、重衡捕はれて後北のかたに逢給ふ條に、北の方の詞に、したるげにみえ給へばこれを着かへ給へとて、袷の小袖に白帷具して奉れば、練貫の小袖の垢づきたるにぬぎかへ給ふと云々、したるきは垢づきたるをいふ事證すべし。

上野館林松倉九皐が家に、芭蕉翁再延勸化簿の序、素堂老人の眞蹟を藏す。所々虫ばめるまゝをこゝにうつす。九皐は松倉嵐蘭が姪孫なりとぞ。

しん庵列けて芭蕉庵を求む力を
二三子にいなみてのかれんやせめくこゝを得す
生み給んや廣くもとむるに
はくくし柿も我やとすらんと也甲を
このこゝすしたと恥ぢ章なからに志
乃貧にみ任ゑと志らいふこれを清
貧とせんやなし、猶貧とせんやいぬ
ことはりいふるめし貧也と貧乃する

ひん許子之貧を移す一瓢一
軒のもとめ有雨をもり風をふ
せく備なく鳥あつまりて及ばず
誰か志のひさこの人すこし無を
草堂建立給よりいでん也
天和三年秋九月竊汲願主之旨
濺筆於敗荷之下　山素堂

一五匁　柳興　一三匁　四郎次　一拾五匁　楓興
一四匁　長叶　一四匁　勝延　一四匁　茂右門
一三匁　傳四郎　一四匁　次貞　一壱匁　小左衛
一五分　七之助　一弐匁　愚心　一五分　伝三郎
一五匁　内記　一五匁　五右衛　一三匁　九左衛
一四分　六右衛　一三匁　八郎兵衛　一五分　伝左衛
一弐匁　不嵐　一壱匁　枳女　一弐匁　不外
一壱匁　泉友　一弐匁　不卜　一壱匁　弁也
一五匁　洗口　二五卜　中楽　一弐朱　枳風
一壱匁　雪柏　一五匁　半右衛門　一銀一両　文鱗
一五匁　峯白　一五分　三右衛門　一壱匁五分　朴四
一五分　市右衛　一三匁　調和　一五分　暮角
　　次叙不等
一弐朱　嵐雪　一銀一両　嵐調　一銭め　雪叢

一三匁　源之進　一二拾め　重定　一弓人ゝ二把代一匁　嵐虎
一二拾め　正安　一五分　淺門　一二拾め　西彩
一五分　もゝ　一小匁　嵐柯　一壱匁　釈信
一　嵐竹　一五匁　一破扇一柄　嵐棠
一天紙一束　北鯤之一竹二尺四寸山居之

はせを、昔常陸國本間氏に寄宿して醫を學ぶ。其時の自筆の誓紙、いまつたへて本間松江が家にあり。其文、

相傳醫術啓迪院一流ノ祕書祕語、雖ヲ豈ニ漏レサン他ニ乎。若シ於ニ違背スルニ者、大小ノ神祇別而生緣ノ氏神可レ蒙ニ御罰ヲ者也。仍而起請文如レ件。

貞享三年
丙寅四月十二日

物部道意

松尾桃靑

本間道悅樣

友人幽嘯曰、陸奥須加川相樂順藏といへるは等躬が末なり。いまも躬が筆のもの多くあり。その中に獨吟の歌仙五卷を並べ書たるもの有。その第一卷目に、今の世はせを松島獨吟と稱する松の花の發句の卷あり。芭蕉の獨吟といひ傳へしを日比疑ありしが、是にて躬が獨吟なる事しられたり。尙按るに、此句の詞書に、我ガ松嶋の松といふめるに云々とあり。躬もまたみちのくの人なれば、我松島とはいへるならん。はせをにおいては我の字穩ならず。

噎草の奥書にいふ、地藏のかしらに蓼すりこ木、面を嫌ふ古來の法なりと云云。板本の末に、此奥書は烏丸大納言樣被レ遊ケと也、と記せり。光廣卿の戯れに筆を添給ふものなるべし。さて是はとりもつかぬ事をたはぶれにの給ひしと覺ゆるに、此ころの諺にかくいふ事のありしにや。砂石集に云、中頃念佛の弘通さかりなりける時は、餘佛・餘敎みないたづらものなりとて、或は法華經を川に流し、或は地藏の頭にて蓼すりなどしけり。ある里には隣家の事を下女の中にかたりて、となりの家の地藏は既に目のもとまで摺つぶれたるぞやといひけり。あさましかりけ

るしわざにこそ、とあり。おもふに是らや諺の事のもとなるべき。

又案るに、鷺水が俳林良材にいふ、此翁丹州保津の産にして野々口氏宗左衛門親重といひける武士にて、累代弓馬に星霜を經て云々。上は後水尾帝の御前句をかたじけなうして、骨肉の句意をはいかいにうたひ、或は烏丸亞相の賢筆を申くだして、はなひ草の卷の末に芳吟を得給へり。又曰、ある日跡をくらまし名をかくして九重のかくれ家をもとめ、雛といふものに生涯をたすけ、子陵がこゝろざしをしたひ云々。是を合せ考るに、此ころより雛をつくりて雛屋とはいひけるなり。

句は万はじめをよくおもふべきなり。古人の句きこえがたきやうなるも、廻しめにて聞ゆる也。たとへば冬の日の脇に、たそやとばしる笠のさゞん花　是は發句の竹齋に似たるといふに對して、笠に山茶花のとばしりかゝるは誰そやと問たる心にて、何の事もなくよく心得らるゝ也。此まはしめを見ざるゆへに、さまざまの說をなすものあり。或は、たそやとゝ句を切て、走る笠のとよむべしといひ、または、たそやとバ知るなりなどいふ說あれども、みな非なり。八雲御抄にたばしるは、とばしると云り。古人の說なりと書せ給へり。たばしる・とばしる、同語にて、たゝいひとゝいひ共に發語ながら、唯はしるといふより語勢つよし。萬葉集に、霜の上にあられたばしり、また實朝卿の、あられたばしるなすの篠原、など形容おもふべし。

元日や土つかうだる顏もせず　去來

此句、遣土ひたるとおもふ人多し。土をつかふとはいはず。是は土抓みたるなり。み文字をのばして、つかうだると云り。文字濁りてよむべし、音便なり。平家物語忠度最期の條に、薩摩守はきこゆる熊野そだちの大力、くつきやうの早わざにておはしければ、六彌太をつかうで、につくいやつが、味方ぞといはゞいはせよかしとて云々。また曰、しばしのけ、さいごの十念となへんとて、六彌太をつかうで、弓だけばかりぞなげのけらる。又狂言のとばに、たのみたる人といふべきを、たのうだ（一字闕）人とい

へり。此類なり。

立志はいかにもちひさき男なりと見えて、京にあそびし時、團水が戯の句幷ニ小序あり。

古ニ曰ク、設ルレ名ヲ本ト名ツク二其體ヲ一。無ハレ体何ヲ以當ン二其名ニ一。言ハレ体ノ本ト、以テ當ン二其ノ名ニ一。无ハレ名何ヲ以テ當ン二其ノ体ニ一。是則所ニ以名實之顯ル一也。其ノ名大ニ而其體小者ハ、和諧堂立志法師。

中〱にちいさかりけり蟬の口　團水

なにゆへに名をよぶこゝろふと　立志

これにて心圭と三吟の歌仙あり。立志が撰の都のしをりに見えたり。

惟然は法師なれば、キ子ムと呉音にとなへたる事とおぼえしに、漢音にてキゼムとよびしと見へたり。伊丹の鬼貫が家をたづねし時、

秋はれたあら鬼つらの夕やな　惟然

と即事にたはぶれしに、鬼つら、とりあへず、

いぜんおじやつた時はまだ夏

と脇してたはぶれあひし事、七車にのせたり。鬼貫が名おいひ出でたはぶれしを、脇もまた其人の名にて附たれば、キゼムと唱し事しるべし。

其角が雜談に、支那彌三郎入道宗鑑は、生涯をかろんじて隱德たかく、山崎の桑の門しかも車馬の喧(カマビスシキ)なし。ひと日近衛殿宇治へ逍遙の頃、さる法師しれるものなりと尋ね入らせ給ひけるに、瘦つかれたる老法師ひとり、庭草とりなどして、その邊の池のたゝへに水かゞみ見けるさまを、

宗鑑が姿を見よやがきつばた

と仰下されければ則、

のまんとすれば夏の澤水

とつかうまつりける。當意興ありけるにやとあり。此御脇、鑑が申上たる事誰もおぼえて異論なし。然るに滑稽太平記に、或時逍遙院殿へ宗長誘引して參向す。宗鑑は杜若をめで、庭の池に植て愛しけるに、折ふし咲亂れたれば一本持參し獻じければ、御挨拶として、

手にもてる姿を見ればがきつばた

　のまんとすれば夏の澤水　宗長

蛇に追はれていづちかへるらむ　宗鑑

宗鑑參向のよし申上ければ、發句すべし、汝脇はやくして宗鑑をせかすべしと仰ければ、脇を御發句出ると附たり。宗鑑も名人にて、宗長いひもきらざるに附たりとなり。宗鑑はやせ形なりければ、餓鬼つばたと仰られき。また犬子集に載たるは、逍遙院殿へ宗鑑法師始て伺候の時、宗長法師伴ひて罷出けるに、逍遙院殿御當座、

宗鑑がすがたを見ればがきつばた

　のまんとすれば夏の澤水

蛇に追れていづちかいるらん

右、脇宗長、第三は宗鑑なり

鶉尻卷七、山﨑宗鑑は、もと[illegible]の[illegible]らうたくしなしも垂也。能しとかや。ほまれ有ての今世にたりほくにのこれ[illegible]俗えもの[illegible]書[illegible]る家は[illegible]災あがりほてのかし[illegible]。

と見ゆ。此二說によれば、宗鑑が室へ立入らせ給ふにはあらず、御脇も宗長作なり。雜談集に夏法師の池水に水かゞみ見たるなど、御發句のさまにはよく取あひたるやうなれども、二說ともに宗鑑が近衛殿へ參殿したる趣なり。犬子集たまぬかるゝといへりは雜談集より五十余年以前の撰なれば、右二說を正しとすべし。

按るに、宗鑑は讃岐國にしばしすみて、そこにて終りぬと見ゆ。一時軒惟中が記行に、八月六日讃州一夜庵に至る云々。宗鑑法師、心を茅塔（ホツタン）にとゞめ眼を煙（エン）霞（カ）にあかしめ給ふ。げにとはりなり、天下の多景こゝにあつまれり。更にいふべきとのはもなし。

月白し此一夜庵をいかゞせむ

後の山路を四五反ばかりわたりて宗鑑の石塔あり。草茫々と生しげり、徒に土中になかばしづめり。夕陽の僧、折々落葉を拂ふ。われも此ところに來りて終り、此塚のもとにふせらん事をおもひ、一炷の香をひねりて感慨（カンガイ）やまず云々。かくあれば此ところに終りし事明らかなれば、雜談集に、天狗になりて月のあかき夜さまよひ歩行しなどいへるは、一時の文花に書るにて信ずべからず。

又案、近來風体抄に云、讃州興昌寺といへる禪院は、一夜庵宗鑑法師の開かれし地にて、終にその處にて

終られたるとなむ。かれ是緣起にくはし。

下の客とよしいへ月の一夜菴　　一三

又、對月庵ともいへれば、

月に對すあんの外なりあか名人　　一時軒

其角十七年忌に大坂淡々が編集四卷、その標題（ヒヤウダイ）、たゞ十七回の三字を題せり。集中に其角年立を記す。

寛文丑

うまならばいかほどはねんうしの年
さてもはねたり寛文元ねん

七月十七日、母の靈夢

人目には過ると見えてうろくずの
かずしらなみの寶まうくる

七夜曉

すみよしの松の秋かぜふくからに
こゑうちそふる沖つしら浪

寛文九酉九月廿二日曉

東順靈夢

ことの葉をせどにも門にも植置て
いづれやくにはたちつてと哉

十歲　入學　大圓寺

十四歲　於ニ堀江町一本草綱目寫
修治　主治　發明

十五歲　內經素本　易經素本寫
蒲生五郎兵衞需にて伊勢物語書レ之
右表紙出來　本多下野守殿へ獻レ之
右之御褒美として刀申請ゆ

十六歲　草刈三越講筵
服部平助講述

十七　桃青廿歌仙

十八　延寶午　發句合　杉風五十句合作
秋洪水

二十　延寶申　次韵　信德七百五十句ニ對

辛酉

壬戌冬　朝鮮來聘

天和亥　みなし栗於ニ芝金地院前一

貞享甲子　於レ京蠹（シミ）集

丙寅　新山家（サンカ）木賀の記
丁卯　續みなし栗撰レ之
四月八日　妙務尼卒五十七才
元祿元　上京　季吟亭講ニ歌書一
十一月廿二日宗隆尼卒ニ於堅田一葬八十四
元祿三庚子(午)　花つみ二巻夏百日撰レ之
四辛未　雜談集二巻撰レ之
五壬申
六癸酉　八月廿九日東順卒行年七十二歳　萩の露撰レ之
七甲戌　句兄弟三巻撰レ之　上京
十月十二日芭蕉卒五十二　枯尾花撰レ之
栗津義(仲)中寺葬レ之
九丙子
庭竈牛も雜煮をすわりけり
十丁丑うら若葉二巻撰レ之
十一戊寅十二月
寛文　延寶九　天和四　貞享五
虛栗　蠹集

續みなしぐり
新山家
花摘上下　非人句　雜談集
句兄弟上中下
枯尾花
わか葉合　末若葉上下
元祿十二 三上吟（サンジヤウ）跋之叓
元祿十四 焦尾琴六月

右、其角翁書捨置レシテ募シテ爰ニ出ス。此外、類柑子一集上中下アリ、年記ニモレタルヲ以テ記レ之。淡々撰

旅ごろも早苗につゝむ食乞ん　曾良
いたかの皷あやめ折すな　はせを

職人盡歌合に、いたか

文字はよし見えもみえずもよくめくる
いたかの經の月のそらよみ

いかにせん五條の橋のしたむせび
はてはなみだのながれかんじやう

とありて、その畫ヽ僧のすがたにて笠を着、おひさき卒塔婆を持る体をかけり。いまの世にもある流勸(灌)頂(クワンテウ)などすゝむる、いやしき僧形の者に似たり。此事をいへるにや。されど皷など持べき風情にはあらず。或人の云、奥(一字闕)南部の邊、今の世にいたこと唱ふるものあり。それは盲女(ゴゼ)にて修験などやうの事をするものなり。ずゝだま・野猪(キノシヽ)の牙などを糸につらぬきて襟にかけたり。脊におんだいじといふものを負ふ。それは竹の筒にて固(カタ)く封ぜり。何物たる事をしるものなしとぞ。また三春の俳士の語りけるは、我里にいたかと唱ふるものあり。それは攝津西宮の社人の配下にて、惠比須の社の札を配る者也。何故なるや、平民とは嫁娶(カシュ)などもせず。ことにいやしまるゝ者にて、祇園の犬(ツル)神人(メツ)などの類なりといへりし。此二說の中の者の、元祿比には皷など打ならして歩行けるにや。なほそのくにの人にたづぬべし。

按、此襟にかけたるものは、猥褻の俗のシトキといふものに似たり。祈禱などする事などあるは、巫覡の古俗ののこりしならんとおもはる

一晶が獨吟千句をうつしもたる人あり。その自序に七是といふ事を書り。その文、

一時之所是未必是。蓋一時之所是者是其所是而非我輩之所謂是也。一時之所非者非其所非而非我輩之所謂非也。燕石在當時則得十襲之尊重、和璧在當時則逢再刖之毀棄。豈燕石可寶和璧可罪乎。不知者顛倒錯亂而已

自警七是

句をかざらむとすれば、必粉(フン)をほどこして腮(アギト)にたらざる類、たゞ娟醜(ケンシウ)浴(ユアミ)のまゝならんを是トス。

句にちからあらんとすれば、必牛馬の騰驤駑駑(トウジヤウメド)にひとし。唯穩にして勇悍(ユウカン)ならんを是トス。

句をたはぶれんとすれば、必臀(ヰサラヒ)をたゝきて笑ひをもとむるにちかし。唯箕居袒裼(キキヨタンセキ)ならずして、はなやかなるを是トス。

前句にすがりてあながちならんとすれば、或は衣を縫に膠漆(キヤウシツ)をもて補ふがごとし。たとへば襟裾(キンキヨ)は別にして褸(イトスヂ)のはなれざるを是トス。

前句にはなれんとすれば、或は襪を不レ脱して踵をさぐるに似たり。たとへば五指ひとしからずして、しかもあひしたしみたらんを是トス。

破れば矩をうしなひ、泥めば變化をしらず。やすらかなるをこのめば淡し。あたらしきを求ればと様なり。すゝむものは飽く、屈するものは鈍し。その是ならんを是トス。

いま一是は虫ばみて見えず、可レ惜。

原松が古き手帋をあまた持るものあり。その中に晉子雨乞の句、

夕立や田も見めぐりの神ならば

（案、其角眞筆の卷ものに、ゆふ立や田をトアリ）

只今三圍稲荷の神主方、晉子直筆奉納のたんざく、寶物にて御座候。以上。

九月一日　猩々庵

都不覺様

とありて、其末に俳諧の論を書るものあり。その中ニ云、去來死後の傳書、去來妾是を祕藏す。支考、乾字金十五兩出して買得て後翁直傳と僞り、其目六十條を作りかへて己が門人を誑し、多くの金錢を貪れり。十論幷ニ古今抄といふ書を撰て、祖翁の流義なりと稱して自作の妄談を出す事數百ケ條あり。嗚呼一人其虚を傳へて萬人實を稱す。死して何の面目ありて師に黄泉に見えんや。無間の罪おそるべし〳〵。去來妾、在命尼となりて、今下長者町油ノ小路西へ入町に住す。去來は向井元丹弟、今の向井元桂伯父なり。是故に去來妾今元桂孝養す。

按、原松、号猩々菴、加藤氏、江戸人、狂名鳥陽坊、また虎翼居士といふ。其角が高弟なり。後京師に住す。都不覺は比叡山大善院に住す、佛行坊といふ。

風俗文選に載たる松島の賦、こゝろみにおくのほそみちの文章と參考するに、はせをの書る處を前後に錯綜して、しひて賦の体につゞりあらためたりと見ゆ。許六さしもの英才にて、しかもはせをの書るまゝながら、前後に引たがへてつゞりぬる故、語脈のつゞかざる所あり。學者

よくこゝろを付て考ふべし。

玉かづらなまりもゆかしつまね花　　史邦

後猿蓑に上五字、佐用姫のとあり。つまね花は鳳仙花をいふ九州の方言なり。源氏物語玉葛の君は、豐後にてひとゝなれゝば、その方言の訛(ナマリ)もゆかしとはいへり。松浦佐用姫になしても西方の國にて、寄せなきにはあらざれども、其事古きに過てをかしからず。史邦が自撰の小文庫に玉かづらとあれば、是を用ふべし。

不猫蛇に云、予、石臼の銘といふ戯の文かきて翁の許へ、あしかるべきは勿論、殊に聞にくき所は加筆給るべしと、京に居られし時遣はせし。翁の定めて書直し置れし處もあるべし。予も草案のまゝ名もかゝずつかはしたるに、翁滅後に左樣の反古など集が取しと見えて、文選とやらん文をあつめたる物の中へ、石臼の銘を翁と名書入たり。予むかし若き時書たる文にて、格別さわがしき文なるに、はせを翁と名づけし不調法さ、言語同斷なり。と書り。不猫蛇は越人作にて、支考が十論を破したる書也。

今按るに、文鑑・文操、石臼の頌をのせず。これは史邦が小文庫にあり。越人みづからかくいへれば、此文章、はせをの造意(ゾウイ)にはあらざるべし。文中筆力似たる所は、加筆の處と見ゆ。されど、はせをに似ざる所多くあれば、越人が作として可なり。次でおもふに、小文庫に載し煤掃の說といふものも、ひそかにおもふに、はせをの筆力ならぬやう也。これらも支考が手に出たるを、史邦漫(ミダリ)に書加へたるもしるべからず。文中つたなき語どもゝ交れり。殊に結句に、ほどなく暮て高鼾とはなりぬ、と書て、その發句、暮ゆく宿の高鼾　とあり。これら決てはせをの造意にはあらぬ也。先達の此文章の事なにとも議論なきを、かくまで臆說(オクセツ)をなす事はゞかりあるに似たれど、しばらく思ふ所をしるして識者の評をまつ。

霜の後なでしこ咲る火桶かな　　はせを

此句大かた聞へがたし。按るに、火桶に撫子書く事故實也と許六云り。またつれ〳〵草諸抄大成といふものにも此事を書りとおぼゆ。今忘却ス。されば火桶の書をさして、

たゞちに咲るといふとおぼゆ。拾遺愚草に、

　霜さゆるあしたの原の冬がれに
　　ひと花咲る大和なでしこ

定家卿の此詠をおもひ寄て、その霜の後も又火桶になでしこありといふ意なるべしとおもひて、人にもかたり物にも書付しに、ある人の説に、是はたゞちに火桶に撫子植たる句なるべし。著聞集第二十九、草木ノ部ニ云、延喜十三年十月廿三日御記ニ云、仰テ侍臣ニ令レム進ニ菊花各十本一。分テ三番ニ相ニ争ヒ勝劣ヲ一。賭ルニ以ニ中時ヲ一各方領ノ花參入ス。（一番入レ白ニ仙花一二番入レ白ニ瀧口一）次第ニ進テ花ヲ立ニ庭中ニ一。（一番種レ花以ニ石洲形ヲ一二番栽ニ火桶ニ一各藏人所二人取テ立ニ御前ニ一）火桶にもの栽る事、是を證とすべしといへり。此句のと葉書に、古き世をしのびて、とあれば、延喜の菊あはせをおもひよせて作れるにもあるべし。又火桶には、時にあたりて何にても入べき物なるにや。順家集ニ、天元元年十月はじめの亥の日、右大臣の女御の火桶にもちひ・くだものもりて、内裏の女房につかはす。大臣此火桶ひとつ奉らせ給ふ。しろかねして亥の子瓶（カメ）の形をつくりてするさせ給へるとぞ。これらを見れば、火桶にたゞちになでしこを植たるにもあるべきにや。後の人思ひ定むべし。

　ちる花になむあみだ佛とゆふべ哉

あら野集に、守武が辭世とて載たり。其角が雜談集に此句を論じて、神職の辭世として何ぞ此境をにらむべきや。たゞア丶と歎美して打おどろきたる落花なるべしといへり。此ころ荒木田家の說を聞しに、彼家記ニ云、守武は文明六年九月廿日敍爵。同十九年二月廿日任ニス禰宜ニ一。天文十年四月廿三日轉ニス一坐ニ一。號ニス薗田長官ト一。同八月八日卒。

　辭世

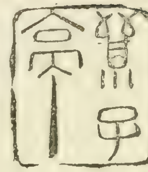
あさがほにけふは見ゆらむ我世かな

　また

　神路山わがこしかたもゆくするも
　　みねの松かぜ峰のまつ風

其角門人才木といふ人は、東叡山内淸水觀音の別當の御坊なり。其角沒後所持の印一顆を傳ふ。故ありて是を袁丁子におくる。丁子また嵯峨の重厚にあたふ。厚、東奥遊歷の頃旅囊にたくはへしが、南部の平角が數奇の志に

めでゝ是をゆづれり。今平角が文庫に藏して、十襲愛翫す。その印、





下の印文何とも讀がたく、久しく人にも見せ問ぬれどもつひに解せず。此ごろある人の話に、是は其角が附句の意味を人にをしへるとて、常に八十人入といふ事を口すさびけるといひつたふ。たしかにその文字なるべしといひし。いかさまにもさ見えたり。さて此文字を附句のをしへとするはいかにといふに、すべて附句は理にわたらず、たゞ前句よりの拍子をはづさず、心頭いさゝかの分別をもちひずして、たとへばノといへばヘと附、一とあらばーとうけ、ヘといはむにはノといふやうに、前句の調子をぬかず、いかやうにも附べしといへりとぞ。是其角が活達の氣象、さもあるべくおぼゆ。普化禪師の頌、四方八面來旋風打などいへるものと、同一轍の活法ならん。後世七名八体、あるひは二十四体などいへる案ヶ方の疑網を、たゞちに割斷すべき大光明の利鈕なるべし。

秋のくれ客か亭主か中柱　芭蕉

伊井家の邸に許六をたづねし時、許六たま〲家にあらず。依て彼が歸るを待うちの作なりとぞ。その中柱といふものは、今も猶伊井家にありといふ。

山田淺右衛門、俳号寛州が持る其角が眞蹟に、

景淸が世帶みせぬやふた齊　其角

このくせもの、宵は大宮司が娘にかよひ、曉は五條坂のあこやにしのぶ。君につかへて寐食をわすれし兵なりけり。

此自註にて、句意よくきこえたり。五元集にはこのこと葉書なし。

随齋諧話　坤

夏成美輯錄

卯辰紀行に、たれも〳〵いふべくおぼえ侍れども、黄哥蘇新のたぐひにあらずば、口をひらく事なかれ云々。流布の板本并芭蕉文集などにもみなかくのごとく書り。案るに、哥は書寫の誤にて、奇の字よろし。漁隱叢話に云、王荊公以テ巧ニ、子瞻以テ新ク、魯直以テ奇。とあり。魯直は黄山谷、子瞻は蘇東坡なり。是をつらねて、黄奇蘇新とはいふなり。

素堂は甲斐國の産なり。酒折の宮の神人、眞蹟を多く傳へ持り。その中に、松の奥と梅の奥と号たる二冊の草紙は、俳諧の教を書るもの也。その序、

長袖よく舞、多錢よく商ふ。ぜになしの市立とや笑はれん。それも絲瓜の皮財布と、かたげて出たつ市も、わがまだしらぬ大和とのはながら、俳諧の道芝

わけゆく末の一助もやと、寒爐のもとにれいのつたなきを忘れて申にゆ。また曰、松と梅とはかの御自愛の木蔭なるをと、なぞらへて爰に冠きせ侍るならし。

山口信章來雪みづから序

元祿三年午十二月廿日

また酒折の宮奉納和漢篇あり。

さきの年甲斐住原田氏吟夕子、予が閑庭に入て折ふしの興を詠じけるに、その冠の句、暗(アン)に菅家の(原虫損)送る詞にありければ、漢の(同虫損)けらし。それより漢和相まじへて百八句となし、かのくにの境にいつきまつる酒折の宮へをさむべきよし、なほと葉をそへてしがなとすゝめけれど、我何をかいはん。抑此神所は新墾(ニヒバリ)つくばねのうつりにて、日本武尊つらね歌のとはじめにてありしより、むかしの人は連歌の席には、尊のかげをかけまくもかしこくあがめ奉りて、いまの天滿神のごとし。しかれば願主の思ひよられし所、まことに故あるかな。

山口素堂

詩の家にあらん花遅き庭のけさの雪　原田氏 吟夕

鶯 寒(シテ) 似(レリ) 惜(ムニ)(レ) 聲(ヲ) 素堂

大氣なる春はいたらぬかたもなし 川口氏 元長

下戸も流れにあらふさかづき 内田氏 吉賢

鷙(ソ)(ヨ)波(ヤ)(破) 石(ノ) 間(ノ) 蟹 森氏

飛 達 野 等(ノ) 蜻 河村氏 吉重

ゆふ日かけ殘りし月の枝ながき 野田氏 長成

粧 薬 露 無(シ)(レ) 情 小野氏 助元

元祿三年庚午秋日

貞德居子(十)、老の後みづから標号(ヒヤウ)を長頭丸と書れし。かたへの人そのこゝろを問しに、老ゆくほど目のみ高くなりて口は年〻にさがりぬれば、さて頭の長くなり侍ると狂言申されしとぞ。

梅さくやしらゝおちくぼ京太郎 はせを

しらゝ以下はみな古物語の標題なりとばかりおぼえて、たしかなる說なし。嗇頃(サイツゴロ)小野のお通がつくれる淨瑠璃ものがたりといふものをつたへたる人ありて一見せしに、姿見の段といへるに云、まなの上手にかなの一、よみけるさうしはどれ〳〵ぞ。源氏・さごろも・古今・万葉・いせもの語・しらゝ・おちくぼ・京太郎、百余帖のむしづくし、八十余帖の草づくし、扇流しに硯わり云〻。この物語の眞僞はしばらく論ぜず、いかにしても今やうの文章ならず。はせをのころにもてはやせしものとおぼゆ。此句たゞちにその文句をとれるなるべし。

案るに、おちくぼ物語はいまにつたへてあり。しらゝ・京太郎はつたはらず。中にもしらゝは古き物にや。さらしな日記に云、源氏の五十余卷、ひつに入ながら、在中將・とほきみ・せりかは・しらゝ・あさうづなどいふ物語ども、ひとふくろとり入れてえて、かへる心地のうれしさぞいみじきや。又、古今著聞集卷五に、しらゝといふ物語に、しらゝの姬君、男の少將のむかへにこむとちぎりて遲かりしを待とてよめる。

たのめつゝ來がたき人をまつほどに
石にわが身はなりはてぬべき

かく見えたれば、しらゝも建長頃までは有しなるべし。

秋田の家士何某、其角が書狀を祕藏し持る人あり。例の快潤(クハイクワツ)なる文体、ことにおもしろくおぼえて左に擧グ。

（原註）不明
書(ママ)相認候處預ニ御返章一、不レ淺拜見仕候。其許樣倍御堅勝被レ遊ニ御巡政一之旨、珍重目出度奉レ存候。下貴樣御近膝(シツ)不ニ相更一御勤之御事、重疊令レ存候。下拙戸内無事相揃候。去冬震中客地板を敷寐候。霜雪、火事〳〵の迯筋とも氷風になやまされ、故疾(コシツ)ともかひ餠・淺漬の風味かはりにつれて酒茄わづらはしく、諸事不性ニ相成候。松山のせがみ、遠近の連衆交莚(コウエン)かさなり候而、二日狹(ハサミ)(挾)の宿醉(シユクスイ)御察可レ被レ下候。酒僎の招たゞもかへさず候故、折ゝ發句仕候。檀泉も一向俳源に染候て參會申候。御屋敷御用之閑ニ對交御噂申出候。例之桔槹屋幸八が簾を下させ候而樂しみ合候。秋航楓子のそゝりもをかしく、士農工商此春斗とぞよめき候。七太夫は品川仕舞と傳へ承候。式ア太夫又三月二日の夜やけ申候。大門通彌兵衞町は今度とも三度にて候。先以害の中ながらも御安慰(イ)に甜酔(クワンスイ)、山ゝ御美敷御噂申出候。破屋いまだ手ゝ附不レ申候。類火のがれ候を當日の樂しみと存候て、一句心を和らげ候。

（家去冬震中とは、元祿十六年の地震をいふなり。去冬とあれば此書通は寶永元年なるべし。）

此雨に花見ぬ人や家の豆

王維(キ)が山水の畫譜に、丈山尺樹寸馬豆人と遠山を詠じ、目のなき人形の勢を申候。自作は家の中に居たる人めありながらの豆人と存候。花は例の冠里公より拜賞仕候。

正月晦日の吟

山吹も柳の糸のはらみかな

二月晦日の吟

春雨のひしきものには枯つゝじ

三月の山吹・つゝじは古歌、詩人の物、連歌の手玉。此二句、俳諧の的星と自讃いたし候。花好の御眼中ひしきを能ゝ御心付られ可レ被レ下候。尤其許樣へ被ニ仰達一可レ被レ下候。

一めうが屋太夫大内蹴、聖堂の大儒三七と申浪人ニ、桔槹屋久兵衞與にてさしころされ申候。儒者は牢にて死罪。太夫心中の事、世始り（二字闕）これがはじめての事ニて

候。三月廿四日の夜六時、四十余の女房を犬八疋にて喰殺し申候。清六など立合、傘にてふせぎ候得ども、傘をくゞつてしてやり候。四月十日、あげ屋町より江戸町へ曲り候川岸にて、三春と申らしやう門宿なし男に心中半ごろしにて、是も成敗にて候。其外淋し（一字闕）米は百俵にて六十兩。七三郎・勘三良・霜月・竹生・團十・勘三七三・傳九・平九、山村へ幸左衛門・傳吉と入組申候。

一揺泉院どの淺野内匠頭殿後室御哥之事、とし三月十四日、長矩三年忌の御法事、芝泉岳寺へ御參詣あり。内藏助はじめ四十六人の新墓所へ、手づから花水をくみかはし給ひて、

おくれじとおもふ浮世にながらへて
なき數〳〵にとのはもなし

或人の申されしは、一句になき・なしと二字、病歌と沙汰仕候得ども、哥にくらきものゝ批判なり。

亡キ數〳〵に言の葉も無シ

と感涙にて、榮啓期が男に生れたる事を、樂しみといへるを、男ならぬ身とかや。是沙汰〳〵。

一糀町長門馬場のかど、堀小四郎殿御寄合なり。此屋敷化物出てゝ隣へも折ゝ參り候。

大坊主　目一ツ

右、客にても有レ之、賑やかなればなほ出候よし。天德寺門前日雇取吉兵衛妻、廿七にて三月十四日ニ一腹三男子を産申候。名を三番叟と付申候。公儀より御扶持被レ下候御書、寺社方へ出申候。

此きさらぎ團十郎刄傷にうせぬ。一子九歳、俳諧のまねと予にちなめり。かれをいたみて、

塗顔の父はなからや雉子の聲

親子の赤づら此ものにて候。年頃の句集候。満帋遂ニ精工ヲ候得ども、聊力足り不レ申候。つくば山のぼりかねたる有増分ニ入リ御心ノ奥ニ候而、其元御補ヲ相待候。猶もやう次第珍敷重便可ニ申遣一候。恐惶ゝゝ。

三月十日

又左衛門殿御一通之趣、被レ入ニ御念一忝存候、可レ然御心得、委儀は合信頼入存候。

紫孔様

（一字闕）虎吟御と傳申候。其元の事如何、死ナずに御暮被レ成候哉。去年の刈田其外御作承度事ニ候。（原註）本ノマヽシャツキふし・下谷風、さぞ古くなり候半と御噂申候。秋色も古着棚仕舞、そば切屋いたされ候。さめぎはのけんどんは一盃進じ度候。半右衛門様も御傳手次第ニ宜敷〱奉レ頼候。堤亭、尤此間も（原註）本ノマヽきくれ迄参候而、折ふし御事申出候。必〻江戸をなつかしいとおぼしめすな。

或人いふ、俳諧袖といふ製は、伊賀上野の梢風尼といふ人の芭蕉におくりたる衣にて、物かくに便よきやうにとて、右の袖を左より一寸みじかくしたる服なり。彼尼の姪たる未塵老人のもの語なりとぞ。名月や持れてまはる椽柱　といふ句は梢風の作なり。生涯の句集、木の葉と号す。世に流布せず。未塵老人は俗稱堀伊織、伊賀の家士にて秩（チツ）祿六百石。

江戸鹿子といふ双紙に、江戸の諸藝者を載る中、俳諧師の部に見えしは、

雪柴　桃青　（せと物町）一晶　（舟丁）不卜　（ほりえ町）龜宿

西丸　（芝）調和　（中橋）林中子　幸入　幽山

露言

とあり。按るに、龜宿は其角、西丸は才丸の誤字なるべし。此板本闕（ケツ）本を見し故、著作の年月詳ならず、大やう延寶頃の作と見えたり。其後惣鹿子と題せるものあり。是は元祿二年の撰にて、鹿子の誤をたゞすよしの序あり。序者は松月堂不角なり。惣鹿子にのせしは、

（[illegible]庄三十間堀）芭蕉　（本町一丁目川岸）幽山　（石町四丁目）才丸　（山下丁）工呷　（南小田原丁）蝶〻子

（日本橋一丁目）調和　（伊勢町）不卜　（伊勢町）キ角　（五郎兵衛丁）山夕　（石町一丁目）嵐雪

（南傳馬町）露言　（伊勢町）一晶　（本町三丁目）立志　（五郎兵衛町）沾徳

芭蕉行脚の掟といふもの、世に寫し傳るあり。半信半疑のものながら、ある人の、奥州高久角左衛門がもとにて、はせをの眞蹟を珍藏したるを、したしく見たりといひしその寫のまゝを左にのす。後人なほ正すべし。

一ひとつ宿に再宿すべからず。暖なるむしろをおもふべし。

一腰に寸鉄たりとも帶すべからず。惣てものゝ命とる

事なかれ。君父の讐あるものは門前にあそぶべし。いたゞきふまざるの道にしのびざる情あればなり。

一衣類器財相應にすべし。過たるはよからず、たらざるは悪し。

一魚鳥獸の肉好みて喰ふべからず。美食・珍味にふける人は他事にふれやすきものなり。菜根を咬(カミ)て、百事なすべき語をおもふべし。

案、汪信民曰、人常ニ咬ミ得テ菜根ヲ則百事可レ做ス

一人の求めなきに己が句を出すべからず。望をそむくもしからず。

一たとへ嶮岨(ケンソ)の境たりとも、所労(ショロウ)の念を起すべからず。おこらば中途より歸るべし。

一馬・駕にのる事なかれ。一枝の枯枝をそのれが瘦腨とおもふべし。

一好て酒を飮べからず。饗應によりて固辭しがたくとも微醺(ビクン)にして止べし。亂に及ずのそん（原註）本ノマヽ、幽亂、起歲の戒祭にもろみを用るも醉るを憎みてなり。酒に遠ざかるの訓あり。愼めや。

一冊錢・茶代忘るべからず。

一他の短を擧て己が長をあらはす事なかれ。人を誹て己にほこるは甚いやしき事なり。

一俳談の外雜話すべからず。雜話出なば居眠して勞をやしなふべし。

一女姓（性）を俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道にしたしまば、人を以て傳ふべし。惣て男女の道は嗣を立るのみなり。流蕩(リウトウ)すれば心(シン)、敦(ジュン)一ならず。此道は主一無適(テキ)にしてなす。よく己を省べし。

一主あるものは一枝・一草たりとも取べからず。山川・江澤にも主あり。つとめよや。

一山川・旧跡、したしくたづね入るべし。あらたに私の名を付る事なかれ。

一一字の師恩たりともわするゝ事なかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人に教るは、をのれをなして後の事なり。

一一宿・一飯の主もおろそかにおもふべからず。さりとて媚諂らふ事なかれ。如レ是の人は世の奴(ヤツコ)也。此道に入るものは此道に交るべし。

一夕をおもひ旦(アシタ)を思ふべし。旦暮の行脚といふ事は好

まざる事なり。人に勞をかくる事なかれ。しば〱すれば疎ぜらるゝ事をおもふべし。

以上

倚按るに、亡友五範かつて申せしは、芭蕉に俳かい傳書といふもの更になし。世に十七條・二十五條などいふもの印行にあれども、皆支考が門派より出たるものにて、尤うけがたし。梧の一葉といふ書は祇空が僞作なる事顯然なり。すべて生涯教へめきたる事をいさゝかも書ざる人なりといへり。是らをあはせ考るに、右の掟書も芭蕉の筆力に似ず。されば後人の僞作とおもはるれど、しばらくしるして明眼の人の批評をまつものなり。

信濃上諏訪李郭（俗稱和泉屋五左衛門）が許に、芭蕉白筆の和歌七首を藏せり。みな哀傷の作なり。

田中一閑身まかりし後、妻の加賀國に引こし侍りて、いまはとふ人もなければ、かの墓所谷中の新堀へはじめてまかり侍りて

とふ人もいまは夏野の草のはら
露ばかりこそ友とおくらめ

見ればかつむかしの夢のとくさを
おもひしられて袖ぞつゆけき

人の身のいまのなく日をありし世に
しらで過にしひとぞはかなき

のり姫の君みまかりし後、ほどなく鈴木主水身まかりければ

見し夢にゆめをかさねてかた糸の
こゝろほそくもおもほゆるかな

みるまゝにあなうつゝなやあだしのの
つゆと消ゆく夢の世のなか

五月十八日は、れいの講習にて、かのところへまかり、なき人をおもひ出て

かよひにし人は夏野のくさのつゆ
その名ばかりはきえのこりぬる

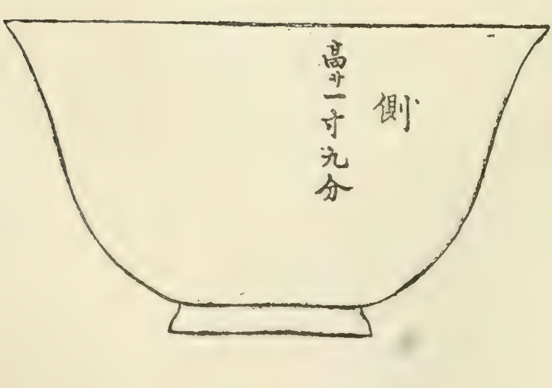
いつしかにむかしの人としのばれて
とのはぐさに露かゝる覽

また曾良が筆にてはいかい歌一首あり。

としの夜の更ゆくまゝにとしげき
みやこの市の音しづかなり

常陸國小川の里松江が家に、芭蕉留錫（リウシヤク）のころ常に食をすゝめたる古五器二具あり。文化壬申の年、日向國眞彦といふ神職の人、その住る所の翁が岡といふに、文明中に勸請せし翁大明神といふ有。（所祭猿田彦神）その社に芭蕉翁を合せ祭ると云事にて、諸國の句を勸進せし頃、松江が家に宿して此あらましを語り出るに、主、この人の志の深きにめでゝ、右の五器の中汁椀（ワン）ひとつをおくれりとて、來り示してこれをよろこぶ。はなはだ古雅なる器なれば、左に圖す。





貞德は細川玄旨法印の門弟にて、詩歌連歌にあそび、狂句殊にすぐれければ、法印のゆるしに依て俳道を興立す。時に寛永二年十一月五日、山本主として洛陽妙滿寺本文坊において、はじめて俳諧の文臺を立、百韻滿座し畢ぬ。連衆十人、須賀庄治郎執筆といへり。

つみわたかぬり桶なりの庭の雪　貞德
火ばちめされよ雲のころもで　西武
天人や寒さをこらへかねぬらむ　親重
下略

按るに、或說に、玄旨法印紹巴を請じ連歌興行ありて退散の折から、紹巴たはふれに永種が袖をひかへて、

酒にゑひしゆのかへるさの袖

と、はい諧して先に句を繼べしといふ。永種遲くして句をなさず。貞德父にかはりて、

ぬぎ捨し衣の棚をまくらにて

永種は貞德が父、そのころ衣の棚に住す。

かく付しに滿坐大に興に入、玄旨法印その才氣の神速なるを感じて、俳諧の道をあらたに興すべしと、

貞德こゝにおいて和漢連歌の式にならひ、七句のもの五句、五句の物三句にゆるして、百韻連句をつらぬべしと玄旨法印へ事をうかゞひ、やう〳〵世上に俳諧式目をふれおこなふと云々。

又按るに、武德編年集成卷十六、天正五年九月の條ニ云、一日　神君・信長對顏の時一老人豫參（ヨサン）す。信長神君に云て曰、是松永彈正なり。公方を殺し、其主三好に仇をなし、以前南都大佛殿を燒。此三大事は古來人のなしがたき所なりとの給ふ。久秀、平伏して耻憤（イキドホ）りて赤面し、汗流れて頭上煙ののぼるごとくなりしが、此度ふたゝび信長を背き、今爰に亡（ホロ）ぶ。誠に大佛殿燒却の月日にあたる處なり。その長子右衞門佐久道、城を出て一旦死をのがれけるが、搦捕られて誅に伏す。末子一人漸活のこりて永種と号し、洛の市中に寓居す。その子は俳諧師貞德なり。

園水が園俳といふ集に、俳諧一言芳談といふを載て曰、

案、西鵰は西鶴が後の名なり

芦月庵云、はいかいはやさしき道なり。

西鵰云、寓言とうそとは異なるぞ。うそなたくみ

そ。つくり事な申そ。
如泉云、附句はつけてつけよ。
誰やら云、附句はつかぬやうに付よ。
我黒云、つくとうつるとをあらはへ。
信德云、おもしろきがおもしろし。
言水云、木綿布子に冠きたるやうの作なこのみそ。
誰やら云、はいかいは連歌にてもなく、また童戯（ドッケ）方にてもなし。
又云、鵜の眞似して水のみ給ふな。
芝蘭云、はいかいは俳諧らしきもので。
淵瀨云、連歌は連哥らしきものなり。
鬼貫云、口ひらけばみな句なり。
誰やら云、とかくおのれが風がおもしろし。
又云、あたらしきはめづらし、珍らしきはあたらし。
團水云、いづれもの申さるゝ段みな尤。
誰やら云、みづからを下手とおもふ者、聖武皇帝の御時高野山に一人あり。さらに米のたぐひを喰ず、常に石臼をのみかぶりける。

右の數語、一時のたはぶれに出たりとおもへど、また意味ある事も見ゆれば寫し出す。

猿蓑集、餞二乙州東武行一の卷半より末、江戸にて次たる俳諧あり、路通が勸進帳に載たり。

名

　春の日に仕まふて歸る經づくゑ　　正秀
　　店屋ものくふ供の手がはり　　去來
眉おもきさがり衣のうそよごれ　　探志
　　戀のつくり繪つかうまつらせ　　其角
しづかなる杉を拜めば三輪の神　　路通
　　出し入やすきはやみちの錢　　曲水
まぎれずに返す芝居のたばこ盆　　其角
　　蜑の面ッつる家がさびしき　　乙州
樂ゝとやはらをしへて五人口　　曲水
　　よめかぬれども日蓮の御書　　路通
行月の中に附たる塩だはら　　里東
　　松にすゝきを二方荒神　　芹花
畑ゝのひと口茄子ちぎとりて　　其角

かりなるものは嶋原の坪　素蘂
あそこゝぬひなほしたる戀ごろも　雲水
二番煎じは茶の花香なき　莎荷
ちる花にさそふて見れど誰も來ず　路通
しきりに雉子のほろゝうつ朝　飛陰

築るに、猿蓑も勸進帳も、ともに元祿四年の撰なり。

店屋物ゞの去來が附句まで京にて出來て、そのはしたものを乙州持下りて、江戸の作者を催して一卷となせりと見ゆ。はせをもまたそののこりを、伊賀の連衆に繼しめしものとおぼゆ。

諸國嘶といふ書に云、初春の歲旦といふ事、慶安二年に長頭丸はじめて出さる。王城の地に在てその冥加を仰ぎ、都をことぶくとの事なり。はじめは都の中までの事なりしが、いまは俳諧も國〻にわたりて、年〻に三ツ物〱と出るは、めでたき御代の色なりとあり。此書寶永三年上木、撰者雨楓子と跋に見えたり。

はせを江戸より許六が方へ文通の中に、當方無レ恙、五句附点取脾の臟を捫体ニ候。此脾の臟もみ破りたらんのち、始てはいかい流行可レ申候云〻。又猪兵衛といふものへ文音の中に、桃隣いかゞ相勤候哉。暑氣の節、短夜といひ、會も心のまゝには成申まじく候。杉風・子珊心にたがはざるやうに實を御勤可レ被レ成候へと、御申可レ被レ成候。

京都俳諧師五句附の事に付閉門、俳諧さたひつしりと、蛭に塩かけたるやうに候樣子、段〻拙者口から申上せ候も氣のどく故不レ具候。ケ樣の所唯實を不レ勤故と合点をいたし、むさとしたる出合會等心得あるべき旨、桃隣へ御物語可レ被レ成候云〻。此五句附といふ物、その頃都鄙にはやりたる事にて、いまの世にいふ前句附なり。大和國葛城山下良弘といふものゝ記したる事あり。曰、去ル万治年中に泉州堺に、池島氏成之といふ好士ありし。そのころ河州小山村に日暮氏とやらん、重興と名乘たる俳書有し。此人成之の前句を取、初て六句附といふ事を始られたり。四季の句に、戀にても名所の句にても加へて、六句に十劒宛集め、褒美といふ事もなく卷勝にして、河州の俳友これをたのしめり。是ぞ此道の最初なる。予是を興ある事に

おもひて、同成之の前句を取て和州の清書をはじめけり。次に和州下田村に萍葉といふ法師、此道に妙なるありしなり。京都二條の住高瀬氏梅盛の前句をはじめて取下し、六句附をし次れたり。そのころいまだ京都にさたも無レ之時節なれば、点のいたされやう・脇書等までしどろもどろにて、初心なりし也。それよりして京も大坂も江戸も、諸國ともに此道さかんになりぬと書り。これらはさせる事なきとながら、そのはじめをば聞置べき事なり。

てふといふ詞は万葉集に、ちふとも とふともありて、古今集よりこのかたは、てふと詠り。されどと葉書にはかゝず。源氏ものがたりは大部のものなれども、一部にわたりて辭にてふと書る事なし。歌は文字數定まりてしらべあるものゆゑ、すべての詞をつゞめても、のばしてもよむなれども、詞書はまたその例ならず。近世俳諧の詞書に、てふといふ事を書る人多し。これらはよくおもふべき事にや。しひて雅言を求めて此度を、こたびと書、十余日を、とをまりいく日などいへるたぐひは、前後のことば發句などまでつりあふやうに、心してかくべき事とおぼゆ。

（勧進帳わか日那笄をこのみてくはれゝばしらせばや墨くふ虫にすしの味　是吉）

是橘が剃髪して醫門に入るを賀すと詞書ありて、

はつ午に狐のそりしあたま哉　芭蕉

この是吉といふは其角が僕なり。年〳〵置かふる僕を、いつも名づけてこれ吉とよぶ。さるはさま〳〵に名を付かへんもわづらはしとて、新古にかゝはらず、つねにたゞこれ〳〵と呼て埒せしといへり。其角が滑稽おもふべし。

二十五條に曰、花は櫻にあらず、さくらにあらざるにもあらずといふ事、我家の傳受とするしるし。許六云、唐朝の花は牡丹なり。我朝詩歌の花は櫻なり。連歌の花は櫻にもあらず、牡丹にてもなし。篇突にいふ、花は賞翫の惣名と註す。花に櫻付る事習あり。なんぞ花の句櫻ならば花に櫻付る事あらんや。茶の出ばな・藍の出ばな、正花たるべしと先師申されき。猿簑のはいかい、名残の花に櫻あり。是を見あやまりて、正花に櫻をする人も有け

り。櫻、正花にあらず、初心の人する事なかれ。口傳ありと云〻。今案るに、花とよめるは百花の事にて、櫻をたゞ花ともよめり。但、櫻をさして花とよむ時は、必詞書に櫻と書り。古今集などみな此例にして疑なし。されば花とばかりいふは百花の事なれば、櫻も又その中にこもれるなり。故に櫻にあらざるにもあらずといふは、この意なるべし。さくらとのみよめるは百花の心なし。されば花は櫻にあらずと云り。されど此詞むつかしくいひまぎらはしたるやうなれば、後學のまどひともなりぬべし。許子が說のごとき、(闕字闕)はなは賞翫の惣名と註せるは、今の世茶の出ばな・花よめ・花聟などのたぐひまで、正花に用ふる事になり來りぬる。その據をしらずといへども、流俗これにしたがひ來れり。但二十五條の奥書に、芭蕉庵桃靑とあれども全く僞書にして、支考が手より出たるものとおほゆれども、いまの世に廣くもちひて、花の論などはみな人の口實にせる事なれば、いさゝかしるしおくなり。花は百花をもよみ、櫻をも又花とよむ事、古今集の例格なれば論なかるべし。

冬之日
八十歳を三ツ見る童母もちて

東國の語に、七十三になれば八十年を三ツ見るとはいふ也。さてその老人にいまだ母あれば、わらはとはいふならん。たとへば五十二になれる者の、六十をふたつ見たり。六十五になれるものの、七十を五ッ見たりなどいふ。甲斐國などにて常にいふ事なりと、かの國人のものがたりなり。見るとは、他のうへをいふならず、みづからかくばかりの老の世を見るといふ心也。さる鑒集に、魚のほねしはぶるまでの老を見て　といへるも、みづからの衰老を觀じたる意なり。三ツ見ると互に照らしあはせておもふべし。

老談一言記に云、宗因はもと連歌師なり。よしみのありて加賀へ下りし。四月のころさくら咲てありしを見て、

されぱこそおもひこし路のおそ櫻

また明年の九月加賀へ下り、十三夜に群會して、去年のおそ櫻の發句の事いひ出しければ、

花ならば今宵の月やおそざくら

明年五月集會の時、内曇の紙を出して、是に一句とありければ、

　五月雨や天下一まいうちくもり

といふ句をまうけて、俳諧師になりしとかや。撰者案るに、宗因句集むかし口の跡に梅翁傳あり。近世のものなから、よく宗因をつたへとらしれず。またはいかいの風体をも論じて、おもしろくくし、おほえしまゝ、あらましをこゝに寫し出す。

梅翁傳

宗因は肥後國の人、姓は西山、諱は豐一(カツ)、俗名次郎作といふ。前の松代侯加藤風虎君の家士なり。寛永九年不慮なるかしこまりに、侯は奥の岩城にさすらへ給ひて後御暇を給はり、始山城の伏水に隱る(旦)。往年風虎君とともに釋將寺の豪信法印といふに和歌・連哥の道をまなびしが、今はた世に立交るべうもあらねば、ひたすら月花の嗟歎(ナゲキ)を事として、形をかへ名をあらためて宗因といふ。また號を一幽子・西翁・梅翁・野梅子ともいふ。その居を名づけて忘吾齋と云、また向榮庵とよべり。わきて連歌に志ふかく、かさねて里村昌琢の門に入て道の奥をも問きはめけるが、彼門には殊にぬき出たる作者なりき。さればこそ正保の頃西の國庄ゝの連歌の便宜に、浪花の天滿に居をうつせしとなり。連歌一代の發句は、西山三籟集といふ書に擧つくせり。はいかいに遊ばれしが、作意その頃の人にまさりしとて、都鄙一(檀林といふ名目の事下に出)たひこの格調(シラベ)にうつしなす。その門につどへる人ゝとはかりて、俳諧檀林の一体をおこし出ぬる。重頼も老ては西山のいま風をうつしなして、古風をやゝ忘れにたり。今の世になべて俳かいする人の評せるをきけば、西山の檀林風はあだとなり、はせをこそ心實(マメ)やかに、調はいと高しや。又云、檀林の邪路、正風に破斥(ヤキ)せらるゝなど、語をきはめて褒貶するはいかにぞや。俳かいのみかは詩歌の体の代ゝにうつりゆくめるは、ことたてゝ論ぜんも今更めきたり。いにしへ風は、たゞ連歌のなげきくしたる、興讃(ア?)にそこはかとなくいひもてたはぶれしは、犬筑波などをもむかへてし

れ。荒木田守武ぞ、この式目のはし（一字闕）はおこせしなり。其後松永貞徳、高き御あたりの命をかしこみて、此あそびみち〳〵しくなしませり。されど發句のたゝめるやうも、附なしたる心ばへも、大かた連歌のをしへにたがはざりし。西山の檀林ぶりも、姿はなやぎ詞うちくつろぎたるのみにて、その旨とせるは柿園のいにしへ風にとさらなる敎へはなかりき。いでその頃までのはいかいすける人は、歌・連歌の席にもをさ〳〵たちまじはりて、その事かの事おろ〳〵心得られしも多かり。くだりての世に、そも我家のはいかいはといふ人出て、達磨ほとけの敎化、曼倩（マンセン）らが滑稽のとはりに說まじへて、いにしへの俳かいとは百步のたがひある敎をなせしかば、朝ゐる雲・ゆふべの霧やゝ隔りて、末はた千里の外なる遊びわざとなりにき。それが詞に、はいかいだによくせば人間朝夕の働をもさとり、天下政敎の道をさへあきらむべしとは、いかに狂（枉）れる敎ぞや。さる賢き道は、さる書をよみてこそ學ぶべけれ。聖の敎をさとらんとて俳かいを學ぶは、なには人の都まうでせんに、雲ゐなるいこま山の岩根かきよぢて、八十宇治川の板橋ふみとゞろかすに似たりかし。翁がはいかいは只連歌のいとまなるたはぶれなりしかば、後の俳かいのみ學ぶ人の見給ひては、あだ〳〵しき方にいひそし給はん。かづらきや高間の山に春たつ霞をあはれむより、よしのゝおくの櫻花、こせ山のよぶこ鳥、たち花のはなちる宿に時鳥の聲をとほしみ、須磨の笘屋のたびねにあかしの浦の月を見さけ、霰やしぐれや埋火のもとに年のくるゝををしみ、或はあづまの方にたのみし陰のむかしをしたひ、または西の國の親・はらから・友がきを戀る心つくしの優なるあはれなるかぎりは、かの三籟集にかぞへつくせる千ゝの句をみてこそ、翁が風雅の誠はしるべけれ。それがあまりのはいかいは折〳〵のたはけごとゝ見て、さてなんほめもおとしもせむ人はともにかたらまく、俳諧のうへのみにて評する輩は、かくたけたる人のうへはかけてもさたすまじきぞかし。しかすがによき人の

たはれどは、今の人のひたすら實やうにあはれならんとたくめるよりも、かへつて世の教なるすさびも多かるべけれ。そはとばこそうちくつろぎたれ、心は歌・連哥のまとにもをさ／＼劣らふべきものか。

翁、齢七十八にて、天和二年壬戊(戌)三月廿八日に逝去せらる。法名を實省院圓齋宗因居士と申す云々。

いつぞやある方にて、丈草法師が眞蹟を見し事あり。詩二首、

新京竟(盡)句風光ノ前　院落淸蔭竹樹班(斑)ナリ
笑テ指眼華酬醉裡　漫ニ求ム腹稿懶眠ノ間
滿擔(檐)ノ山色連ニリ長等ニ　一寶ノ泉聲超ユ小關ヲ
蓮漏何ニ如蓮沼ノ潔ニ　主賓對坐不レ離レ閑ヲ

竹窗夜靜ニノ鎖ニ春霖ニ　微醉幽吟屈ニス老襟ヲ
灯盡キ香消テ高レメ枕ヲ臥　却テ知ル詩酒兩魔ニ侵ルヽコヲ

伊丹の鬼貫は肝のふとき者なりしとぞ。通稱三郎兵衛といひて、近衛殿の御領の造酒家なりし。かねて近衛殿へも御立入申せしに、或時御殿に御會ありて、何の宮・くれの殿上人などあまたつどひ給ふ。折ふし御勝手に三郎兵衛參れるよしを申に、それは鬼貫といひて、はいかい体の句つくれるものぞ。めし出（二字闕）て何申させよなど、まろうどたち申給ふに、やがて御席に參りて平伏す。何にてもはいかいの句申せ、題など得させんかと殿の申給ふ。時に鬼つら頭をあげて御座敷をきと見めぐらすに、御床に土佐の何某が畫る小町の掛繪あり。あはれあの御掛もの給はゞ賛して奉りたしと申に、みな笑ひ給ひて、やがてさし出させ給ふに、御硯こひて、すこしもためらはず筆たぶ／＼と染て、小町のかしらのほどに先、あちらむけと五文字書て、さてしばしあるに、みなさしのぞき給ふ。其後よく案じて、しづかに筆をとりて、うしろもゆかし花の色　と書付て、おそれ入風情してしさりぬるに、みな／＼めで興じ給ふて、けふの會は此三郎兵衛男にいひかたれぬればいと興たしとて、御會もそれまでにて止けるとぞ。是は浪花の大江丸がものがたりなり。

談林十百韻の序

御代ゆたけき餘慶に、此道甚さかんにおよび、その風俗まち／＼たり。あすか川のきのふの淵にふかくのぞきて、けふの瀬をしらず。今日の瀬をあさくふみて浮洲に首だけはまるも多し。こゝに八九人の佗の非（原註）本のまゝ、やみ、久かたの天の御下あらかねの槌音たえぬ鍛治（冶）町といふところへ時ゝ會合して、向後の初心、惡にそまらん事をかなしみ、端（ハシ）ゝ此事をのべて多くまよへるをたすくる其中に、この席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申べけれなどたはぶるゝよりおこりて、みな人談林といひならはす。この折節、難波江より道の名僧梅翁不斗下向し給ふ。是ぞ幸ひ渡りに船と、江戸の海の廣きおもひをなし、談林にこもるやつがれ、したしみする發句をこひ得て、すでに百韵を興行す。次而（ツイテ）おもしろきに、人／＼發句せよ、十百韵などうなづきあひて、六七座にして終にみたし畢ぬ。談林へつとむる疎（ソ）學の日、此十百韻の事、ねがはくはそれがし休の新發意濟度のために板行して見せしめたやと乞。もとより談林のことくさ、辭すべきにあらず。ともかくもとゆるしつかはす。凡市中に多年よしとおもへるふるくさきものと、今またあたらし過て一句のたゝざる二ッの惡を見れば、水火の二河たり。中に四寸の白道あり。此白道のあかりをはしらむとのみ立る處、談林の法也。見る人こゝを專ッに眼を付らるべし。

案るに、談林風といふ名は、宗因に權輿するとおもへる人多し。此序にて見れば、雪柴等以下八九人の者の集會せる江戸神田鍛治屋町に在し俳室に名づけそめしと見ゆ。年歴など追て考ふべし。

越後國高田今町聽信寺一向宗に、芭蕉行脚の頃の道服を藏す。地は紬（ツムギ）のやうにて鼠色、同く帶一筋・筆一本・墨・硯・九形等あり。白染のものはたんざく二葉、〽文月や・あら海や、又自畫の像上に、〽分別に花の鏡もくもりけりの句あり。その後支考、行脚の頃此寺に至りて、こと／＼く審定（シンテイ）の書付をそへたり。彼像自畫のよしなれども、或人のいひしは、畫は外人の筆なりとぞ。

素秋といふ事、連歌の家には習ひある事なるよし、俳か

いには野坡・杉風などが傳書とてつたへたる中に、發句か脇躰の中に他の季の月ありて、四五句めに至り芙蓉などの秋の句出されたる時は、冬にこさぬ秋季を考てたしかにする事なりとあり。さもあるべき事にや。月は折〻にあれば、素秋といふはおほかたあるまじき事也。はせを一世の附合におほやう見えず。左に其證を擧。

雪の薄集

陽炎のわが肩にたつ紙子かな　芭蕉

此卷の二ノ折表

行かへりまよひごよばる星月夜　嵐蘭

くんでこかせば案山子なりけり　嗒山

山風にきびしくおつる栗の毬　曾良

十一句め

狼の番して明る夏の月　嵐竹

案るに、杉風傳書に云、素秋は星月夜にかぎるべし。夫、秋は金神、節を按じ、天高く暑退き、衆星の光彩清明にして銀河きらめき、月なき宵も星の光、月夜のごとしといへる事なれば、月の字も天象も影輝(エイキ)のあしらひの句なりがたき故に、素秋は聯(ツレ)るなり。その余にて素秋あるべきとも覺えず。

雪丸

文月や六日もつねの夜には似ず　芭蕉

つゆをのせたる桐の一葉　左栗

朝霧に飯たくけぶり立わけて　曾良

案るに、此表月なし。文月と月の字あれども、月並の事にて月の心なし。されば素秋と云べし。

韻塞

此卷表七句め

けふばかり人もとしよれ初しぐれ　芭蕉

宵闇はあらぶる神の宮うつし　はせを

北より荻のかぜそよぎたつ　許六

八月は旅おもしろき小服綿(コフクメン)　洒堂

案るに、これまた素秋ともいふべきか。されど宵やみといふ詞に月の意あれば、八月といひて月の字をあらはして月になしたるよし、古人の說あり。

鄙懷帋

野は雪に河豚の非をしる若菜哉　　凉葉

まだ鶯のなききらぬこゝろ　　千川

門番の寐顔にかすむ月を見て　　芭蕉

けさむきそむる前栽の柿　　宗波

秋かぜにむしろをたるゝ裏座敷　　此筋

虫も雨夜はねざめがちなる　　濁子

肌寒く痞のかたを下になし　　千川

案るに、是は素秋のやうなれども、月の句よりすぐに秋を附出したれば、素秋とはいふべからず。右の外に所見なし。此中、星月夜・文月やの二ツ、全く素秋といふべし。後人是らによりてよく考ふべし。

去來抄三卷は疑もなき去來が筆記にて、後世に益ある好書なり。往年嵯峨の重厚、游嚢の中に祕藏せしを借受て全部寫し取て、予が文庫にあり。世上に刊行せしは、安永年中一晋といふものに清書させて、尾張の曉臺が板に刻みしなり。それより世にひろまりて、その賜をうくるもの多し。彼の板行のをり、いかなる子細ありてや、古實の篇を除きて上木す。故に流布の本には故實の篇なし。されば此篇を書加へて全備せしむべき事なり。

浪花の大江丸が俳懺悔に書しは、

牡丹餅や赤小角豆のかたに秋の風

是野作なれば殊によしとにはあらねど、此句においては等類はなかるべし。いさゝか新らしみをば得たるなりと自負して過せしが、ある日江戸の春來が東風流といふ集中の附句に、ぼたもちの　として、その外一字をたがへずあり。されば後の人句を作るごとに、等類の離なきやうに思惟すべしとあり。されば昔より幾億万の句あらんに、僅に十七文字の中なれば、おのづから等類もあるべき道理なり。忠知が、白炭や燒ぬ昔の雪の枝　といひて擧世賞譽し、白炭の忠知とよびしよしいへり。是らは一人一句の作ならんとおもふに、良保が彼枕集に、白炭はやかぬ昔か雪の枝　種友　とあり。此集は寛文癸卯夏刊行なり。忠知同時代とおもはる。是はいづれが先なるにや。殊に名高き句に等類はあるまじきに、いかにも不審の事

なり。

案、此說信じがたし

江州水口小坂町たばこ屋久右衛門、表号李風といふ人の許に、季吟の眞蹟を藏せり。即、季吟門人芥船といふ人より讓り得るものなりといふ。その文、

きのふ松尾氏桃青来りて、予に改名をこふにいなみがたく、八雲鈔のはいかい歌にならふて、はせをと呼侍る事しかり。

月はなのむかしをしのぶ芭蕉かな

とありと、殊に親しき人の語れり。眞僞いかなるにや、暫しるして後の評をまつ。

増山井四季の詞十二月の條に、岡見すると有て、註に堀川百首に、とたまのおぼつかなさにをかみすと栫ながらに年をこす哉 俊頼朝臣。師走の晦日の夜高き岡にのぼりて、簑をさかさまに着てはるかに我宿をみれば、あくる年有べき吉凶の事見ゆるとなり。と玉とは明年の吉相をいふ也云々。此說いかゞ有べき。壒囊鈔に、高き處に人をのぼせて遠き所を見するを、うかみといふ、侯(候)見と書たり。うかゞひ見る也。それを高き處にのぼれば、岡にて見る心ぞと心得て、人は皆をか見といふは誤也。侯の字全く岡の心なしとあり。日本記(紀)にも間諜また侯ノ字ともにウカミと訓ず。さればうかみといふが本說なるべし。こと玉は萬葉集第十三、志貴嶋倭國者事靈之所佐國叙眞福在與具。契沖師の說に、事靈とは書たれども言靈の義なり。第五に言靈と書るが正字なり。吾國は言に靈ありて、いはへばいはふしるしある國ぞとなり。まさきくあれは字のごし云々。加茂保憲女集序に、万代てらす日の本の國、とたまたもつにことかなへり云々。大鏡に、村上帝生れさせ給へる五十日に、

ひとゝせにこよひかぞふる今よりは百とせ迄の月影をみん

御製

御返し

いはひつることたまならば百とせの後もつきせぬ月をこそみめ

是らを引あはせて言靈の義を心得べし。但、俊頼朝臣の歌はいかなる意によめりけん、いさゝか解しがたし。後

の人なほ考べし。

又曰、浪花の昌喜が說に、菓木の來年よく熟せんやうにと、いはひてする事ならんと云り。此朝臣、さやうの事をとり出て、上手の口にまかせて詠れたる事少からずといへり。

予わかき時、句讀をならひし師は西野老人也。そのころ古人の詩の解しがたき多くあれば、講說を承らまほしと申せしに、師の曰、詩は必講談をなすべからず。口に出して其意を誦ずれば、詩は一等わろくなる也。只よく熟讀して、みづから其意のある所を見るべしと也。此論ふかく感ずる所ありて、今にその詞をわすれず。俳諧の句もまたしかり。芭蕉の句の中、初心には聞得ざるもの少からず。是にさまざまの論辯をまうけて解なす者あれども、多くその意に的當せず。只みづからつとめて深くあぢはひぬれば、多年の後自然に豁然として眼のひらくる時あり。たとへば禪家にいふ大悟徹底に似て、門より入ものは家珍にあらずといふが如し。さて一句の上はたゞ詞をえらむにありて、おなじ心ながらつゞけがらにて、よしあしは分れぬべし。大かた理をおして求るものは其意を得ず。句々に心情をあらはし、また物々の形容を見るが如くにいひなし、山川のけしきはたゞに打むかふが如き作あるもの、皆辭のつゞけがらにて何となくよき句にはなりぬべし。俊成卿の詞に、歌はたゞよみあげもし詠じもしたるに、何となくえんにもあはれにもきこゆる事のあるなるべしと。又曰、うたはかならずしもをかしき節をいひ、事のとわりをいひきらんとせざれども、元來詠哥といひて、たゞよみあげたる、うちながめたるにも、何となく艶にも幽玄にもきこゆる事のあるなるべしなど、かへすがへすの給ひしは、その理を捨よとのをしへとおもはる。されば句意をとかんとすれば、必其理をいふの外なければ、たゞ吟じあげたらんより一等も二等も下りてきこゆべし。後學のよく工夫すべき處なり。

其角が艷詞鉢たゝき

唱　哥

うめの兒髷そのまゝに、むすぶちかひはさくらさく、花の菩薩の數〳〵を、ねがふ此身は雲水の、世を墨染の色かへぬ。ナムアミダ〳〵

池の蓮の世を簑笠に、きつゝ三河の吉田の君が、とめたちまゝよひと夜さは、かりのなさけに衣ヌくれん。ナムアミダ〳〵

身にしむつゆや朝がほの、松にかはらぬよはひをば、たれにまたれてついしほむ、月のみひとりむかしがほ、人のなみだのたねふくべ。ナムアミダ〳〵

霜のゆふべにねをそへて、うかれ友鳥行さきは、たのしき國のつれ〴〵に、かをる茶の花目ざまし草に、ひとつまるれよいざひとつ。ナムアミダ〳〵

この曉の一聲に、冬の夜さへもなくほとゝぎす、なくほとゝぎすいざきかむ。

聞人ぞ子規なりはちたゝき

壬子冬夜

晋如菊直賢 [晋華] [如菊]

右其角眞蹟、大坂梶木町森三節所持、境の喜齋一覽の處、晋子手澤無レ疑云々。名号不審、されどもかゝる戯書なれば、時にのぞみて狂名を書るなるべし。喜齋又曰、此文章を察するに、哥舞妓子供などの追善の作なるべきにやといへり。さもあるべき歟。

ひさご

雜

龜の甲煮らるゝ時は鳴もせず　乙州

たゞ牛糞に風のふく音　珍碩

ある人云、史記の龜策傳を引べしと。また一説に、すべて龜を煮る事なし。されば冬の藥喰を作して冬季なるへし。脇句も枯蘆したるけしきを思ひよせて、牛糞に風のふくとはいへり。第三に至り、はじめて季の詞をあらはして、冬は來てとは云る也と。今按るに、龜策傳の心ともきこえず、また冬の季をかくせるならば、雜といふ字を題すべきやうなし。古人、冬の句なるを、ことさらにことばをまげて雜と書べきや。只雜の句なる事は疑なし。はいかいとて雜の句あるも、なんぞあやしむべき。さて此かめといふは、今の俗にすつぽんととなふるものとおぼゆ。

新六帖
川越のをちの田中の夕ぐれに
　なにぞときけばかめのなくなり

何を音にすほんなく覽五月やみ　　其角

これらを引合すれば黿ならんとおもはる。和名鈔ニ、黿、唐音に并列反、魚黿字、或作レ𪚥和名加波加米とあり。其外、黿鼉於保加米・揷龜古加米・秦龜以之加米等ありて、龜の類みな通じて加米といふべし。田舎にてはいまもすほんの事をかめとのみもいへり。句意は只打聞へたる通りなるべし。ひそかにおもふに、乙州一時憤懣の事ありて作れるかも知るべからず。但これらも臆度の事なれば、たしかにはいひがたし。すべて意のある處はその作者の心中、後人のおしはかりとはたがふ事あるべきにや。此句にかぎらず、人々の論說ある句ども、大かたは附會の說なれば、うけがたき事おほし。

猿簔集、丈草が跋に、
　猿簔者芭蕉翁滑稽之首讀也。非レ比スルニ彼山寺偷レ衣朝市ニ頂レ冠笑ニ云ヿ。
是は猿の故事ならんとおほゆ。後に、庶幾ハ一簔高ク張テ有レント補ニ于詞海ノ漁人ニ云と止たり。これ猿みのといふ事を前後にわけて文章をなせりと見えたり。此猿の故事の出處、識者に彼是問試しに審ならず。しひて按るに、古今著聞集卷二十、魚虫禽ノ部に、近頃常陸國たかの郡に一人の上人ありけり。大なる猿をかひけり。中略　はやく此猿他の郡へ行てけり。或人の許に白栗毛なる馬をかひける馬屋に至りて、件の馬をぬすみてけり。いづくにてか取たりけむ、下﨟の着るてなしといふ布着物を着て、鎌を腰にさして、あみ笠をなん着たりける云々。又、史記項羽本紀ニ、人或ハ說テ項王ニ曰云々。富貴ニシテ不レ歸ニ故鄕ニ如ニ衣テレ繡ヲ夜行ニ。誰カ知レ之者。說者曰、人言楚人ハ沐猴ニシテ而冠リスル耳ト。果ニ然リ。項王聞レテ之ヲ烹ニ說者ヲ。注云沐猴獼猴也　此ふたつの事をとり合せてかく書るにてはなきや。僻說ながらしばらく記して後人の批評をまつ。

落柿先生行狀　　佐々木倘義

先生、氏は向井、實名ハ兼時、姓ハ藤原、河邊ノ左大臣魚名公の裔、その先肥州の人、其考より帝都にうつる。世々儒家にして賢德を以て稱す。かつてまた醫術に達す。天

下の良醫なり。いまの益壽院法印は先生の兄也。落柿舍（第二、落柿舍の記は去來作也。其後芭蕉に此家居せしめ、嵯峨日記を書せり）は嵯峨に在、先生寓居の處なり。往歲、芭蕉翁桃靑此處に來て此舍の記を述しよりこのかた、此舍をさして落柿舍と號く。去來は俳集に載る所の名也。此故に諸友よんで落柿先生と稱す。後、洛東聖護院にうつり、幽窗のうちにかげをひそむといへども、春のけはひは東山の風景にあらはれ、月は加茂川の淸きながれにうつり、時鳥の折にふれ五月雨の窓をうつ音、夕の嵐・あしたの雪、自然に先生幽居の意にかなひ、山水のたのしびを枕として終焉の地とはなりぬ。先生もとより天資孝弟克養純固にして、平居恂々たる儒也。著述の詩賦も多からずとせず。和粹貞諒にして、智もつて偏く察するにたり、小なるものを詳にして蘊蔽のきざしをとゞむ。はじめ柴陽に在てひとへに武事を講習し、弓馬の故實をきはめ、御術は大坪式部大輔廣秀が嫡流福山某にきゝ、和は（一字闕）笠原氏の門にならひ、釼術は安部の何某に學び、共に其大意をさとす。軍は甲州一流の奥をきはむ。其後洛に歸て又薄田某の門にあそぶ事年あり。八重垣の神法および玉法陣の圖を傳受す。かつ橘家傳來神道の祕奥、三種ノ神器五科十種神籬神垣風水盤坂干滿土金等の諸傳を相承す。かねて餘力あれば古今の人物を論じ、忠義純確なるものはみづから撰て鑑とせり。もとより風雅の道に心をよせ・よみおける和歌もすくなからず。そのかみ芭蕉翁によつてその道をきゝ、かりそめのすさび・起居の笑話も、自然に風雅一体の實に出ざるものなし。これによつて貴价・公子もそのこと葉を味ひ其績をよみす。四方の俳師、遠き近き當世の騷客者流、才を挾み簡傲非笑するものといへどもその風采を感じ、恂睦、間言ある事なく心服謁拜して席下にわしり、此道の先達とす。凡かくのごとく得る事の多く守る事の篤き、文武の才をいだき、貞諒人を感ずるに至れども知るもの稀に、あげて薦むる人なし。先生もとより官仕の途をたち、退てもつぱら兄に仕るきはめて恭愛、其家事を治め、内外のかぎりわかち、財用の節を制し、使令を給する、おの〳〵その役にたへざるものなし。誠意懇切其勞をゆるべず、

人のかたしとする處、みづから處する裕如なり。いはんや、その子弟・宗族・朋友の間にあるをや。たまく家にかへるの道、農夫野に耕し耘あれば、必その勞をとぶらはざれば過ず。隣家比屋の艱苦をとひ、病をたづね、すくふて後やむ。その惻怛慈愛の心しのびざるにあり。命なるかな、秋葉零落し、曉の風をまたず山丘に歩がごとく、病あらたにして寶永改元甲申秋九月十日、眞讃院の寓舍に沒す。享年五十四。宗族・子弟聲をのみ、衆門慟哭す。遂に葬事を營み、東山神樂岡ノ北鈴聲山に葬り、先考の兆にしだがふ。

贊　曰

先生爲レリ人ト　孝弟貞誠　事レテ見竭レシ力　處レテ事必ス正シク
有レ文有レ武　風雅華英　存テハ思ニ其人ヲ　亡テハ慕フ其名ヲ

芭蕉終焉の時、次郎兵衛が記せし病中日記の切。

四日朝、木節申さるゝにより、朝鮮人參半兩、道修町伏見屋より取。同く包香十五袋取。天氣よし。之道方より世話にて洗濯老女をやとひ、師の御衣裝その外連衆の衣裝をすゝぐ。園女より御菓子幷ニ水仙を送る。支考・惟然介抱。次郎兵衛とても手屆かね、之道とりはからひとて舍羅・呑舟といふもの來る。按摩などうけ給はる。今日三十度余に及ぶ。度ごとに裏急後重あり。

右二條は、此抄淨書の折にあひて、堺の喜齋より寫しこせしによりて、幸にこゝに書くはへて筆をとゞむ。

跋

先君以靈慧之資援天地之慘舒、推遷人世之悲歡離合而收諸俳諧。意匠鬪於無數幻緣筆下洩於無盡化境。蓋其性情之眞與時相感與事相觸、自然雄渾豐潤、使人恍然心醉焉。是以四海騷人郵寄唱和而乞止者、推以爲一代宗盟。又遇先輩一時觸事感意發之於言、有不可知其旨意之所在者、則必徵之史冊以迎作者之意、咀其華含其英究其枝葉根柢而後止。其餘先輩軼事及簡冊私牒、有足以傳世者、皆裒收而不遺。久之爲編凡二卷、名曰隨齋諧話。謹與家弟包昌包德等、比對校讐鏤版而貽同志。雖未足盡先子學之底蘊、亦ニ以觀其浩博矣。

文政己卯仲秋

男　夏目包壽謹書　［印］（夏印）（包壽）

嵐亭誹話

富屋著

たのまれぬ哉あすは又、けふをきのふといはるべけれ。そもこのごろと覺えしも、ひとゝせさき文化九申九月廿五日、秋草をりふせて、いほりのちり立まふべきかげさへみえざるぞうたてき。さるは見しと聞し事ども、ともしびの花きりつゝ、ながき夜すが書集おかれしを、勁齋(翁)主人は兼てのちぎりすてがたく、其筆のまゝ、それのたくみにまかせてつゞりつけらるゝを、おのれも因あればとそゝのかされて、いさゝかこのはしにかきつくるも、なか〳〵のものけがしになん。

心菴

(嵐亭誹話)

枯尾華集に其角曰、天和三年の冬、深川の草菴急火にかこまれ。　又曰、其次のとし夏の半に、甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入ニ無我ーと書けん、むかしの跡に立歸りておはしければ、人々嬉しくて燒原の舊草に菴をむすび、しばしも心とゞまるながめにもとて、一株の芭蕉を植たり。と書て、おのづからはせを翁とよぶ事になんぬ。　又曰、貞享初のとしの秋、知利を伴ひ、大和路やよし野ゝ奥も心殘さず。と書たり。

案に、此文の年月よりこと〴〵く相違したる歟。其次のとしにては天和四年の夏にて、則貞享元年也。甲子紀行は實に貞享元年なれば、甲斐に遊ぶとしては合ず。おもふに池魚災は天和元年にてもありしか。虚栗集の跋にも、天和三年仲夏日芭蕉洞桃青鼓舞書と書給ひ、又集中の句々もはせをとしるして、其角みづからも芭蕉庵の夜と題せし句、芭蕉あるじの蝶丁く見よ　などの風流もあれば、元來災ひありて二年甲斐に遊び、其としふたゝび歸り住給ひしならん。芭蕉の号は天和二

年の末なるべし。

賑給　シンカウとよむ。明經道の故實なりと、篠崎維章が東海談にあり。

胃藥　唐の音にして、唐藥とよむ事勿論也。中原家實錄には、陽の音にして陽藥とよむべしと、榊原篁洲が榊巷談苑に見ゆ。

ひめはじめ

文來菴が風月帖に、雲松が記臆（憶）せし年山紀聞を引て出せり。なを愚考ヒメノメシとあはせてふたゝびしるす。

年山紀聞に曰、貴嶺玉日記明應十年正月一日ニ云、諸社之遙拜之後三獻有レ之、次看經、次ニ御コソ、次ニ比目始。海人藻芥曰、公家御膳、飯者强飯也。執柄家等如レ此。姫飯全分略儀也。但人々依ニ好惡一用レ之。强飯時飯湯也。而ルニ近代姫ノ飯ノ時、チモユマイラセヨト召ス。不レ叶レ理者也。按ニ和名集ニ精糗（和名比女。或説曰、非米非粥之義也。）とありて、其次ニ別に粥を出して、和名之留加由、薄糜也とあれば、糄糅はひたすらの粥にあらず。曆にひめはじめとあるは、年始に糄糅を喰はじむる事なるべし。

以上、年山紀聞の説なり。姫はじめ、是にて明らか也。扨このひめのめし、今のタキホシ飯なり。今川大草帋、三本立式の御飯の条に、三本立は姫の飯にばかり御手をかくる也。こは御物くろ御物と云ふは、はうをば只まいらせ置までの事也。今時分はかやうの御物をきこしめすやうしりたる人すくなきゆへか。ひめの御物といふは常の飯の事也。下略　ひめのめし如レ此。按に今の世俗のならはしに、元日あるひは三ヶ日、朝かしぎをせず。前の記によれば、さらに忌ましき事なり。

又、男女交會の事をひめはじめと心得たるもあり。尤笑ふべき說ながら、是も久しき戯言としられて、寛永の誹諧犬子集に、

　年おとこするはさほ姫はじめ哉　　境　慶友

其後も糸切齒に、

　高安の戀かしもじやひめはじめ　　作者しらず

なども見へたり。

虛栗集の

飽やことしの一卷五十四句あり。もと源氏行にてもありしか、六句脫せしと見ゆ。嘲ぞ黃金は鑄ニル小紫一ヲといい

ふ一句をはさみて、前後九句烋なり。こゝにて脱句せしとおもはる。

花摘集追善附合の後に、四十こゝのかにあたりぬる日、五十句にみちたれば、とありて四十八句也。是も又二句脱したる歟。

芭蕉翁門人六感の語といふあり。そのうちに、實なる事去來に及ばず、と書て、

　　應〳〵といへど敲くや雪の門

此句を出せり。是は翁迁化のとしの句にて、先師の聞給はざるを恨むと、正秀が歎し事まで去來も書置たり。又支考が、

　　そこもとは凉しさう也峯の松

此句も元祿十四年加州にての吟なり。翁、何とて去來をば感ぜられけん、一笑にたへたる語也。またこの句を、其許と字にて書て、ほとけたる事とあるより、そこもとを貴様・御手前なんどの詞に了簡をつけて解したる書も見へたり。非也。こゝもとに對したるそこもと也。句意は、老杜が苦熱の詩に、南方望ム青松ノ架スルヲ短氅ニ。何ゾ得ン赤脚ノ踏ヲ層氷ヲ。といへるにおなじ。

幻住菴の記に、かの海棠に巣をいとなび、主簿峯に菴をむすべる王翁徐佺が徒にはあらず。山谷、題ニ潇峯閣一詩に、佺老ガ海棠巣ノ上。王翁ガ主簿峯ノ菴。と作れり。徐佺、道を樂しみて藥肆の中に隱る。家に海棠數株あり。巣みその上に結びて、時に客とその間に飲す。王道人は四方に參禪し、歸て屋を主簿峯の上に結ぶ。嘗て毛人ありて、その間に至つて道を問ふとあり。

蠶　春也、又雜。

　　這出よ蠶家が下のひきの聲　翁

此句、おくのほそ道五月の条に出たれば、夏季也といふ説あれど非也。蠶飼、この頃專らなるもの也。只見る所を先にして當季の論にはかゝはらず。されば曾良も、蠶飼する人は古代のすがた哉　と吟たり。又初懐帋に、

　　友呼ぶ蟾のものうきの聲　仙化

かく作りて雜に用ひたり。

　　糸櫻腹一ぱいに咲にけり　去來

蕉門、花に櫻をかゆるは、此句を始のやうにいへども
非也。去來が詞もいぶかし。是も初懷帋に、
　三たびふむよし野、櫻よしの山　　仙化
此句を權輿とす。
ヒユルとさへ言へば冷の字と合点して、秌に片づくるや
からあり。寒の字の心ならば冬也。
百韻裏ウツリより神釋を出さずと。非也。他門は左も有
べし。蕉門此說にかゝはらず。
　朝まだき三嶋を拜む道なれば　　擧白
　念佛に狂ふ僧いづくより　　朱弦
　玉敷の御堂は瓦下地なり　　普船
　鳥に出家三條の音　　仙化
　榛名なる大夫の御師に一夜寐て　　擧白
　篝焚く牛の御前の森の中　　嵐雪
行燈　書にもよむにもあんどんなるべし。是とても國
音連のたぐひならん。あんどうと書たる、一二見へた
れど、板本なれば違へたる事もあるべし。
　濱名の橋にあんどんを出す　　常之
　あんどんとれば雨しきる空　　才丸
　發句にも
　油月はあんどんげなる光かな　　春可
　あんどんの陰にみだるゝ柳かな　　松星
　夕月夜あんどんけしてしばしみん　　才丸
　あんどんを消して引こむ夜寒かな　　正秀
三字韻字留は、天和に始りて蕉門の新格也。
　刈しほを告るや早稲のほとゝぎす
土用に入ては音をとゞむるなどもいふを、させる理屈
にもかゝはらず、古人の雅致おもふべし。げにもこの
頃まのあたり啼事也。
翡翠　支考が徒に夏は定たれど、蕉門もそれまでは秌
也。
　銅蓮の水に翡翠の影下りて　　其角
かくも見へたれど、此鳥はいかにも夏季しかるべし。
盛夏ざかりにあるもの也。
蜩　いにしえば夏なりしとおもはれて、筑波集夏の部
に、平等院の僧正行乘、諸國修行し侍りけるに、つか

れておほへければ、廡つくりたるほとりによりふして休ける所を馬に乘て過るとて、誰とはなくて言かけける。

あさがけにする夕すゞみかな　國重(津守)

是を聞てとりあへず、

日ぐらしのけさなく聲にばかされて

蜩も蟪も蟬の事なれども、これの國にていふひぐらし、蟬より殊にはやく出るもの也。詩に、五月鳴蜩アリ。此字を訓じてひぐらしの名あれば、夏ならんもことはりあり。

雪村が柳見に行棹さして

此第三をさしあたり珍らしとおもふより、傳受口決のやうに言ふものあり。何事もなき事ニて、他門に違ひて表に朱引の句作あるは、祖翁の延寶・天和の格也。〽子路が廟夕べや秌とかすむらん　〽傾婦を蘭の肆にうる　〽魔神を使とす荒海の崎　などもいへるがごとし。中の句にも〽今や角天地を樽と飲破る　〽蕉蕉あるじの蝶丁く見よ　なども有り。是とても他門の誹諧に聞ざる事ぞ。又傳受と言て可ならん歟。すべて古格によりて新格を立たる也。さるをおの〳〵一門戸を張り、相傳の祕說とて衆を愚にす。あるは又唐崎の吟のごとき、其角・去來さへ惑說を申て翁の樂に違ひたる事、二子も書あらはしたり。其唐崎も今頃は傳受の沙汰せらるゝやう也。口傳がましきは、支考が徒、あるひは乙洲(州)・木節・露川等數人より毒のながれて虛妄の弘りたる也。

桐の一葉と題せる板本あり。祖翁の述作也とあり。ことに僞書也。句作の法則・てには皆蕉門古集に叶わず。兩舌の論と謂べし。他門の古き法則の書に出たる事を、爰をとりかしこを用ひたるなれば、却て見劣せられたり。さるを此書に欺れて、こと〴〵しくてにはの敎に引用ひたる俳書出たるもまゝあり。かなしむべし。

夕顏や秌はいろ〳〵のふくべかな

支考が僞作二十五ヶ條に、はと抱へたれば切字にならず、哉難なしと也。抱へ字ありて哉とまりは說までもなし、定りたる法也。さにはあらず。初秌中一、此所に遊びて、と端書あるを見るべし。〽蕣や扇の骨を垣根

哉　と吟じて其角みづからの解にも、現在過去たしか也と書たると句法同じ。

青葉　夏也　二十五ヶ條に、青葉、夏季にあらず、若葉とすべしとあらはしながら、白集の笈日記に、＼青葉して御日の雫拭はばや　と出たるは何ぞや。おもふに翁も青葉とありしを、そのまゝかの集へ寫せしならん。＼あら尊青葉若葉の日の光　＼日には青葉山ほとゝぎす初鰹　＼夕立に青葉がうへの若葉かな　いづれも夏景をのべんとての青葉也。蕉門は夏なるべし。

　黑雲の折〱かゝる青葉かな　嵐竹

なすび　カシの轉語ナス、雜し。簾中舊記、女房詞にも、なすび　なす　とあり。

　初茄子(茄)や䏶の汐のいそがしく　松荷

萱が軒　萱葺　炦季勿論ながら蕉門は炦又雜也。

　めづら見る揚屋〱の萱庇　嵐雪

　四方椽なる萱の辻堂　浪花

冷麥　其角が

　酒の瀧冷麥の九天より落るならん

此句に隨ふて夏季も可なるべし。

茶飯　二義あり。菁を炊き交へたるは雜也。小大豆・角豆葉よりしてなべての畠もの、あるひは藜藋・山草・野草、何にても刻入たるも、邊境にて茶飯といふ。是は夏也。

　早乙女に替てとりたる茶飯哉　嵐雪

　夕ㇳの月に茶飯嗅出す　恕誰

蟬のから　空蟬　蕉門は夏也。

　蟬のからははたらくやうで哀也　句空

　あの蟬やもぬけと成て落所　沾荷

　しがみつく力や殘すせみのから　此筋

　陰になけ小野、小町も蟬のから　千春

　折を得て古着ぬぐらん蟬のから　巴山

　空蟬や石の鳥居を鳴捨し　一井

初懷紙の＼心なからん世は蟬のから　といへるは、炦はなれの附句なれば論なし。すべての蟄虫地より出れば、そのまゝに衣をぬぐもの也。死たるからとならば秋勿論也。

繪馬をヱマといふも子細なけれど、古人おほくは繪うまと句作せり。

檜原の奥の繪馬たづぬる　仙菴
繪馬をかくるとし越の宮　魯下
冶郎の繪馬その紋にしる　其角
牧の繪うまの時の間も見ん　仙菴
北野の繪馬花見がてらに　其角
荒神に繪馬かけたるとしの棚　嵐雪

發句にも

初午や一町として大繪馬　專吟
繪馬見る人のうしろのさくらかな　玄寮

増山の井にも、齋宮の繪馬にヱウマの假名あり。さらば砥井山集の其角が文も、時うつるまで繪馬をながめて、とあるも、ヱウマとよみたるがゆるやかなるやうにおもはる。

梅白しきのふや鶴をぬすまれし　翁

此句に、林和靖が贊、と題せし板本あり。是は三井秋風にての句なるを、その頃他流の俳士が翁に瑾を付んとて、諂へりと譏しより、吾が佛尊ぶやから、その言わけせんとて後に苦〳〵しき贊の字は題せしとおもはる。梅に鶴の注文さへあひたらば、貶るも褒るも相互ひに林和靖との勘定せられしとおぼゆ。さうではなし。白樂天が花樓に雪を望む詩に、

偸ミ將ル虞白堂前ノ鶴　失却ス樟亭驛後ノ梅

樂天は雪のけしきにけおされて、鶴も梅もどうやらしれぬと也。此詩をすぐに爰へ用ひて、梅の一めんしろければ、居るべき鶴の影もかたち無ひは、盗まれたかと也。本詩をもとかず、直にそれにて、しかも一作つけにてかの山莊の即景也。林和靖に鶴を盗とは、さりとては浮たる雅客たちぞ。翁は詩にはくわしかりし也。其一代の句法、慷慨悲傷にあらざれば、寂莫無爲の外を出ず。是ぞ生涯杜詩を枕にし山家集を懐にし給ひしゆへん也。さるを大顚・佛頂の兩師に參じて悟道深微の句也など、さらに妄也。古池・唐崎、子細なし。道ばた・稲妻・何事かある。高木は風に偃れて、出る杭はうたる。木槿は馬にはまるべし。なま禪學は迷ひのた

ね、なま兵法は大疵のもとひ、悟らぬ人がましなるにや。老佛の常談にありふれたる是らの數句、何の翁が巧ならん。やまと哥・からうたの正しく雅なるにめで給はん人の心からは、誹諧何と歟おとしめられんに、それさへ翁の句ゝどもは稱せらるゝ事、志情の正しきに至つては、なを貫之をもひそかに高しとはし給ざりけん越人が譏はあり。しからばつとめても學ぶべくぞ。秋十とせ・夜着はおもし・殘夢月遠し　なんどは、打出て本詩あらはれたり。舟に棹さして戴安道をおもひ、柳を植て郭林宗を學ぶやうなるも又明らか也。是らの句法すべて翁也。俊成・定家の卿にならひ、西行・慈鎭にもとづくは、同じきながら知りやすからんも、またかたき所あらんなれば、深く心に捜るべくぞ。

月花もなくて酒のむひとりかな　翁

先頃ある人、雜の句格はとて、やがて此句の話になりて、扨こゝろを問れたり。もつけの幸ひにおほへて居たれば書てあたへぬるを、つひでにあはせてこゝへのす。

李白月下獨酌詩

花下一壺酒　獨酌無相親　擧盃邀明月
對影成三人　月既不解飲　影徒隨我身
暫伴月與影　行樂須及春　我歌月徘徊
我舞影凌亂　醒時同交懽　醉後各分散
永結無情遊　相期邈雲漢

この酒のみ居たる圖畫賛、はやくもおもひより給ひし腹のうちおもふべし。漫遊稚(雜)記といふあり。醫人永富鳳輔にかはりて山縣孝孺先生かの書れし也。其文のうちにも、南郭服子の詩における、雪山道人の書における、芭蕉の誹歌における、我常に坐右に置てこれを見るとあり。あの人たちの見て高しと定めらるゝ事、祕說の分際にあるべくや。おほく諸子百家により、まゝ一己の案をまじへて、くはだて及ぶべ(か)らぬ所あれば也。翁〳〵ととなへて虛妄の傳にたらされんより、西行・子美はせめても知れ。

冬の日集に野水が、　雉追に烏帽子の女五三十　といへるに杜國が、　我月出よ身は朧なる　と、四句去に春

を出したり。常式にはあらざれども、古式より出たる新式也。三句去たらば難あるまじ。況四句去勿論也。ひさご集・深川集なんどに、夏冬二句去にしたる新格、尤味ひあり。されど他門に對して論ずべきにはあらず。

鐎の道もしどろに春の來て

金篇（鐎）につくりたるは、雪國の山民は、かなかんじきとて、鉄に鍜へて爪ある具を草鞋の下へかけて履て、引廻して結ぶ也。谷をわたり峯をにゆるに踏込るまじき爲也。これをいはんとて金篇には換たる也。常の橇の句作にはあらず。

雪踏とはいつの頃より書にや。とつと久しき誹諧に（マヽ）には見ゆるに、蕉門には節たとも雪踏とも書たり。まそつと前にも季吟翁のへせちたにやいとすべし廬地口 安靜のへせちた草履のおはき濱はた　等の句あり。

古池の吟、臆見を加ふるに、呉融が廢宅の詩に、放魚池涸テ蛙爭ヒ聚リ。といふより、案をもとめ給也しもしられず。此落句に、不ニ獨リ凄涼タル眼前ノ事ノミニ。咸陽モ一火ニ便チ成ル原ト。と作れり。焼あとの深川にふたゝび住給ひし頃の吟なれば、此感ありしかともおもはるゝやう也。

鴬の羽も刷ひぬはつしぐれ　去來

刷の字、物めかしくて元祿ならず。假名にてなりと書てあれしと（か）おもへど、樂天が喃々トシテ致ニ言語ヲ。一々刷フ毛衣ヲ。とあるより、斯もつくり斯も書たりと見ゆ。されどあまりこのもしからず。

唯牛糞に風の吹く音　と珍碩が雜の脇句は、卜尺がへ冬枯の道のしるべや牛の糞　と吟ぜしを學びし也。

何某の家藏、はせを翁眞蹟詠草二卷

獨歩

此土手の筋や柳の片折戸　岩泉
くどまりゐるは田にしとる賤　岩翁
遲き日の赤きに鶴の足のべて　乎竿
氣まゝにやれば旅もなぐさみ　路通
商の有國〱はすなを也　横几
皷の師さへもとは侍　沾德
十六夜の月迄酒の坐をかへず　遠水
早稻米のけて置も孝行　尺中

秋雨に居風呂立て僧を待　翁
掃し疊に猫の足あと　泉
うか〳〵と後の朝に打ふして　通
妹が碁石の袖につめたき　竿
燭とりて又一しきり牡丹見む　德
魚類もたちてためす夏の中　几
末の子にありし家督を讓りけり　中
人の心をうかすいとたけ　水
夕月に見れば敷寐の翠簾かけて　泉
生身魂までむすぶかけ帶　翁
新米をかすゝ下女の手はあれし　竿
つれをもとめぬ山科の塢　通
花あれば參りも多し寺の庭　几
若鮎迄は札たてぬ川　德
春風にまとひ寄たる橋のごみ　水
社わびぬる國替のあと　中
半分は作りをしても暮す醫師　翁
寺領のうちに鳥の運上　竿

片言もつたへにのこす三の戶　通
岩手の山を橫に見る海　泉
生延て年〳〵問る雪の上　德
穢れなきとて用の羚羊　几
牢人はよめぬ書物をもたせらる　中
村の庄屋としるひらき門　水
名木の根は鋤殘す畠中　竿
ふへたる鮒に水の盆池　翁
急雨の月に晴たる砂の跡　泉
柴胡の花を子どもばひあふ　竿
射落せる鵰に夷と身を恥て　德
御所つゝくらん大工なき浦　通
笘敷て臥に寐にくき舟の底　几
愛の有ても子はつれぬ旅　中
武藏には聞つたへたる六阿みだ　水
地金まづしき鎌倉の鍛冶　竿
世を遁て煤掃日も忘れけり　翁
片器にやかゝん大小の額　泉

いたづらに寐てはくらさず觀世捻　通
　月見と親も酒すゝむ慈悲　德
東堂と成ては秋もゆたかなる　中
　燕かへれと巣をば崩さじ　几
花紅葉小荷駄にさせる下屋敷　水
　いくとせつよき垣にそふ松　筆
いでや空うの花ほどはくもるとも　路通
　句の上おもへはる〱の旅　其角
以合鉢親の帷子身にかけて　普船
　油桶には荷ふ夕月　仙化
牛町の車休むるあきの風　溪石
　さからぬうちと鰮つけこむ　通
手の窪はいやしく喰をうらやみて　角
　あら湯には先他(ヒト)をいらする　船
看經に巾かゝれる夜の雨　化
　碇しづかに舟ゆする灘　石
髮結ぬ女は無下に見下され　通
　御旅の店を前わたりする　角
扇折り月にせわしき槌の音　船
　小鮎に水をかゆる堀井戸　化
朝時にははづるゝとても場を踏　石
　老ても針の目斗はたのまず　通
花盛猫は身持に成にけり　角
　春はいつもの借坐敷する　船
年頭にさゝれて下る知行寺　化
　刀をくれておとす前髮　石
うつり香も黑き衣裝はめにたゝぬ　通
　繩手をかへる遊人の數　角
飛(原註)本ノマヽ石も樹も庇に預ヶ置　船
　借藏たつる老のたのしみ　化
湖は不斷たしなむ鮒の鮓　石
　母にはうとき三井の小法師　通
禁中の御能をみるは夜をこめて　角
　藥施す霍亂のため　船
夕月に戸渡りて行押送り　化

淡路見かけて須磨およぐ鹿　　石
雪降は塩屋に運ぶ稗のから　　通
敷ものとりにかへるかごかき　　角
抱きついつ袖をひかれつ市の中　　船
湯帽子かぶる顏の翆さよ　　化
花に醉て餅も喰さず朽木盆　　石
十日過ても笑ふ山科　　船

かつみ〳〵と尋てその日もくれぬ、と書れたるもの是也とて、田字草とかやいふ四ひらの水艸を、近頃かの國の人の持來るをこひ得て、もてあそぶものあり。これもかつみいへるにや、いにしへの甲冑・太刀・薙刀の類ひに此模樣ありと、ある識者の語られき。されどあまりに事を好み過て、似もつかぬ說に成行たり。たゞこゝらも菰にて濟たる事也。又、

かつみておしき烋の色かな　といへるに

風にちる野邊のちぐさの花かつみ　後鳥羽院御製

これらはいかゞあるべき。とかく淺香のふる事のいなものになるやう也。

橘やいつの野中のほとゝぎす　翁

句撰などいへるいつもの板本にも見へず。卯辰集に出、花ちる里をたづねてぞなく　とおもひたるに、いつの野中、あはれ深し。橘、加州の地名にあり。

水取や氷の僧の沓の音　翁

是を、水鳥や氷　と書、又、水取や籠り　と書たるあり。共に非也。山谷が淨因壁に題する詩に、履聲ハ如ク度ニ薄氷ノ過ルガ上。催ス粥ヲ華鯨吼ユ夜闌ー。當季の詞たしかならずとも、決着の案ならば當季勿論也。

柴の戸や蕎麥盜まれて哥をよむ　史邦
稗と塩との片荷つる籠　孤屋

發句にも

大日にまいるなむせる粟の飯　作者しらず
龜ぬるか爐のさぶらふ衣川　慶友
そば切や打て腹だに入ならば　宗因

□若黄精ある陝の日の影ちり〴〵に　其角
夏て遠、灯を置全
同き庭薄も葵を露子堂
烋夕べさやかにも 金宗むかしのもの 九
□おの〳〵味ひあり。今時の冬の日流の及ぶべき手段ならず。

鶴とばかりゐ烋に川ゆべし。聖護院道興准后の廻國雜記に、

霧ふかし鎌倉山のほし月夜
　あさなく鶴が岡のまつかぜ
葛の葉の色づく野澤水かれて

のんどり　春也。のどむるも、あるひは春に用ゆべし。のど〱といふ詞も又同じからん。

のんどりと神垣ひろき宮所　可頼
のんどりと古き駿河の町つゞき　嵐雪
のんどりとしも鶴を見る袖　如風
世の中を観じのどむる詩の心　可頼

うら〱　春也。あまり用なき詞ながら、すつべきにはあらず。

みゝづく　冬也。猿簑撰の例に隨ふべし。

木兎やおもひ切たる晝のつら　芥境
みゝづくは眠る所をさゝれけり　半残

淡雪　冬也。

ちら〱や淡雪かゝる酒強飯　荷兮
あは雪のとゞかぬうちに消にけり　鼠彈

支考が僞作二十五ヶ條以來、各門春に用ゆれども、あら野集に隨ふて蕉門は冬なるべし。

耕（タガヤシ）　雜、勿論也。又、春にも用ゆべし。

鍬立て耕す肩を打休め　梢風

白魚

あけぼのや白うを白き事一寸　翁
一塩に初しら魚や雪の前　杉風

兩句のさまは打あらはれて冬なれど、

白魚のしろき匂ひや杉の箸　大坂 之道

この句は紛れもなき春なるべきを、炭俵集冬の部に出たり。案ずるに、西南海の國には、白うを嚴冬之節さかりにて、とし明てよりはある事なしと。之道、かしこの風土なんどの折にふれたる吟なるべし。又、

むつかしき拍子も見へず里かぐら　曾良

此句も猿簑集秋の部に出たり。是も祭祀の見る所を先にして、秋冬の詞をゑらばざる也。此例諸集あまたあり、一概に見るまじくや。さらば千梅が詞もこと〱く非にもあらざるべし。又、里神樂、打まかせては冬ながら、いつあらんもいふ也。

宮司　大宮司は格別、宮司とばかりはミヤジとよむべ

し。

宮司が妻に夜還するらし　正章

松の木に宮司が門はうつぶきて

宮司が妻に惚られてうき

支考曰、附はかならず一句に一句也。去來曰、附句は一句に千万也。場は多くなし、句は一場のうちいくらも有べしと。二子の語よく盡せり。支考が語ことに深微なり。此語に理ある一ツふたつをいはゞ、

經よみ習ふ聲のうつくし

竹深き筍堀(畫)に鴛かりて

椎まだ若き匂ひ成けり

是に似通ふもの

塔にのぼりて消るしら雲

賣に出す筍堀ておしむらん

茶時の雨のめいわくな空

又

羅に日をいとはるゝ御かたち

熊野見たきと泣給ひけり

是に似通ふもの

綾の寐卷にうつる日の影

泣〳〵もちいさき草鞋もとめかね

又

馬に信する瀬田の烁かぜ

花ざかり掛ならべたる首を見て

是に似通ふもの

我跡からも鉦鼓打來る

山伏を斬て掛たる關の前

又

簔をくむとて寐ぬ渡し守

火ぶりして歸るおのこは何者ぞ

是に似通ふもの

雨氣の月の細き川筋

火ともして藥師を下る誰が娵

又

耳たぶを削るゝやうに横しぶき

行儀のわろき屜ひ六尺

是を顛倒したるもの

伴僧はしる鶺鴒の脇

侧やうに長刀坂の冬の風

又

鳴子おどろく片藪の窻

盗人につれ添ふ妹が身を泣て

是を顛倒したるもの

烋をなを泣く盗人の妻

明るやら西も東もかねの聲

但し、鳴子おどろくと恐怖の体を、倹悪のものと定たる翁の玅所は、野水が及ばざる所ながら、附は一場也。

その餘のものも心を責て深くさぐれば、おほくは此論を出る事なき歟。

長命丸　今は尼籠なるものゝ名になりて、何にも結ばれねど、むかしは虫癖のくすりに此名ありしと見へて守武千句に、

腹のいたきもやすきはたもの

きりはたり長命丸やあはすらむ

帆ばしらの蟬よりおろす雲雀哉　との其角が句も、例のもとめ過たるやうにおもふたれど、

嶋かげの船の帆ばしら蟬ありて　永運（旅の僧都）

秋雨（アキサメ）　鐘の音（テ）　砧うつ

ともにすまじきは勿論也。されど俗談平話の誹諧とならば、又限るべきにもあらざらんか。前に出せる五十韻にも、岩翁烋雨の句あるが如し。鐘のおと・鐘の聲は却て口なれ、耳にふれず。鐘のね、野人の常語也。此尾陽の卜枝が句に、〱斧のねや蝙蝠出る烋のくれ。此ね、いかゞながら、〱まりこ川沓のね高くきこゆればあすか井たまへさきにあい〱、とも聞へたると同じやうなるねなるべし。天王寺の鐘の黄鐘調とかや、十二律おととは言ふまじくや。さらば鐘のね、又くるしからじ。衣うつ・うつ砧なんどは正しき詞也。されど正しき詞をのみ、中人以下の誹諧におしおよぼすべからず。支考二十五ヶ條に、鐘のね・砧うつとはせぬ事也。（口傳子々ノコアリ。）されば よくしかねのおと・衣うつといふべし。

りてするは、一座の扱ひによるべしと書たり。是又僞作、附會の說也。遠鐘はのかにひゞき聞ゆるなどは、ねといはんも難なし。砧うちて我に聞せよや坊が妻　は衣の有無にかゝはらず。砧は、きぬ板の義也。そのきぬいた、かたばかりにも打まねびて我に聞せよとなれば、砧うつ、論なしと歟。さにもあらず、やはり衣うつ事ぞ。是とても常談也。

初懐紙　役仕女きぬたうち〳〵　其角
湯殿山本坊興行ニ　北も南も砧うちけり　梨水

十年の學問を跡へもどりて誹諧せよとは、支考みづからの發明ながら、龍頭蛇尾の傳まゝあるにや。

山路來て何やらゆかしすみれ草　翁

箱根山の吟也とて、いづれの年にや、かの山中に碑を立たる人あり。是は其角が新山家に出たるより心得違ひたるべし。類柑子に匡房卿の、箱根山うすむらさきのつぼすみれ、とよませ給ひたるなどおもひあはせて、筆力に書出たる迄の事也。甲子紀行に、大津に出る道、山路を越て、と端書ありて、かしこの吟也。此紀行、貞享元年八月に江戸を出て、翌二年東海道を下りに甲斐に懸りて四月末歸庵也。箱根ならざる事明らか也。

朝附日　貞德翁の曰、朝月日と書也。朝附日ならびの岡、など枕詞におけるも、月日のふたつならびておはすると、いふ事なり。夕附日も同レ之。皆秋になりて面の月を持也。是正說也。うたがひ給ふべからずとあり。されど新式も限りての說にもあらぬか。賦物の朝何・夕何に月日と取よしもあれど、只それ迄の事なるべし。その連歌にも朝附日といふ句出て、面の月外にあれば、誹諧もおもての月、限りて持にはあらじ。

うら枯　又曰、蘭・野・邊・原・庭などの文字を入る也。うら枯とばかりはせずと。下萠も同じ說也。理りながら、此說もひたすらに連歌により給ひたれば、誹諧には不自在ならん。枯るといひ、萠るといふふたつの名目、外物に泥むべきもなし。あながちにかゝはるまじきか。いはゞ、ヘとさか哉　海苔明らか也。ヘ三ッ葉哉　芹としらる。打きこへたらば可なるべし。なべての說も、くらきはもとよりまどひ也。くわし過んも又まど

ひ也。帝の字の如き、御にも門にも不レ嫌と定め給ひたるは識見也。すべてかくあらぬはおしむべし。

鳶に鳶の附句の前句の見やうの一ふしあるはいはず。格は古きによりたる也。翁にもあれ、言ひたきまゝの新格はなき事也。老杜飲中八僊歌の重韻、山谷が七言三句の詩なんどの珍らしき、前後にもなき事ながら、是また古格のあれば也。さればとて後の作者、ひたもの眞似んは奇ならぬを、未練の風客、鳶にひとしき附句まゝあるも見ゆ。

所を、トコといはんは、一巻・一句のさまによるべし。常と心得たらんは非なるべし。

うら葉の柳翠の紋所(ドコ)　氷花

この巻のもとめたる風流也。さればこそ表の月にも、

青空をつく夜になぞへ晝寐せん　擧白

かくも言ひ、又、

春もなみだの流れかんぢやう　李下

などもすねくれたり。

錦から來て臺所に付て居る　乙由

是もまた山王の額を打たれば也。ゆへに、

一歩に豆が四石八斗ゥ　季覽

みな一巻の風体也。

發句にも

乞食の寐所かゆるやおぼろ月　毛紈

彦根の手垂ながら、初句と二の句と詞釣合ひよからぬやう也。

蝙蝠や出所わすれて家のうち　會友

白雪やよごれたとこが道通り　桃先

これら其頃一變の流行にて、俗話の諷調也。五句七句のはこび、あるひは一巻のさまにて取捨あるべし。猶、許(バカリ)を、ばかといふも同じ。

竹の子やさて〳〵酒もちつとばか　合羅

口ばかで見せておかるゝ祭かな　湖舟

影法師の笠ばかになるあつさ哉　松針

さらば煙(ケブリ)を、けぶといはんも、山東の鄙言とも片づけがたからん。場所により句体によらば、あながちの非にもあらじ。

ねまる

涼しさを我宿にしてねまる也　翁

ある書に、翁といへどもことごとく邊鄙の語には通じ給はず。ねまるを寢る義とし給ひしは、此作の謬也と見へたり。此說非也。翁さはおもひ給はずしての作なればこそ、其角ちから帥の文に畢白集を引て、今暫しねまり申べいを、それがし旦那のえらまからんとて立ぬる。かれがふるまひにつけて、と書て翁この記の詞により給ひたるよしをいへり。涼風、時に颯とし來るを我ものとして、此宿にかりに居るとのこゝろ也。

遣出て落葉にねまる蛙かな　加州ツルギ　跡松

今川大草紙に、　馬上の人も馬よりをりては、弓を擇より少上を、弦を下へしてひつさげて持て、ねまるべし。

嵐亭俳話一卷、新月菴二世奚疑子倣詩話之體例所著也。論議(頭)簡明、援據正校、不唯便俳學、其辨乃斷二百年來之滯疑。先生有將傳之于世使覺來裔之志、而草稿纔脫、忽就鬼錄。可爲痛惜矣。先生嘗余之親戚有舊。且余姊有故幼時蒙先生撫養以至于成立。姊聞其凶赴也嘆曰、高恩久不報、幽隴此長鬲。烏虖哀哉。今茲癸酉春、阿姊造先生之舊廬、搜遺書於几笈得此卷。於是命余以上梓事。余乃與姊戮力以出其費、以附剞劂。非敢謝覆育之恩也。聊以終先生之志耳。此書未嘗經再校、魚魯亥豕亦不少。余素非俳徒、不宜猥加手訂。姑以識歲月而已。若夫是正敢乞諸覽者云。

文化癸酉三月

勁齋主人

古學截斷字論

こがくきれじろん

上・下

北元著

總敍

神代の昔より。手爾袁波の道は天然の定りあれど歌の文字の數も定らで。三言四言五言六言にも。おもふ心をよみなせり。其歌の始といふは。伊邪那美命阿那爾夜志愛袁登古袁とのり給へば伊邪那岐命阿那爾夜志愛袁登賣袁とのり給ふ是なり。其後須佐之男命夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁とよみ給ふ是三十一字の歌の濫觴なり。人の代となり神武天皇の御時の後までも。今のごと假名眞名の文字なく只口に耳言つたへ聞つたへし事ぞかし。日本紀十八代履中天皇四年秋始之於諸國置國史記古事とあれば。是より前にも朝廷には史士有て記されしとしられたり。其頃も今の假名文字なくて漢の文字を借用ふ。古事記は四十三代元明天皇成姫帝と申奉る女帝の御世。年号は和銅大和國奈良の都也此御時稗田阿禮といふ者。神代よりの事をよく記憶に覺えゐたれば勅して阿禮が口より聞とらせ太朝臣安万侶といふ人。古事記を撰錄和銅五年正月二十八日貢進けるよし。同本序に見えたり。凡是まで千四百余年を上代といひ。神武天皇より前を神代といへり。此上代の哥を集錄て万葉集と言漢の文字を我國の音訓に借用ひて。馬はいと嘶故に。馬聲と書ていとよませ。蜂はぶといふ故蜂音と書てぶとよます。手爾袁波のかもには鴨。つるには鶴と借用のゐる。擧て算がたし。かく不自由に文字の開けぬ時にだに。てにをはの自然の定は。言靈のさきはふ日本なればなり。古今集までは。てには詞の活などいさゝかもたがへるよしはあらぬを(此所にいひたきとあれど別にいふべし)共後の集には歌の上にも。てにをはのとゝのはざるが有よしは。本居翁が詞の玉の緒にも擧其外にも見えたり。中昔の頃より手爾波詞の道のあれこれ亂たるは。前々太平記前太平記平治の亂哥の仙定家卿のまします頃は平家の世。保元の春の花壽永の秋のもみぢ葉と物さわがしく。續て源家の世になり。南朝北朝足利應仁の亂。永祿天正の頃迄によりての事也。有難き今となりては世の中靜謐上代にもためしなく。泰平に治り〳〵て。四民安堵の思

をなし。各我等念ぜずして極樂に生れ出たり。恐多も悦ぶべし。恐多も悦ぶべし。往昔静かならざる世のうち。正しき上代の詞も手爾葉波も家々にかくれ廢たるやうになり行し乎。有難き世になりて開けにひらけたれど。我道の祖翁の頃迄は。今のごとく微細にひらけず有故にや。翁の俳諧に手爾葉波截斷字の事をなしへおかれし梧一葉。支考が古今抄などを見るに。發句切字の事は十八字の品有て。哥にも連歌にも其法あれど　何故と其事秘すれば。意さらにしれず。只童の心經をよむ心地ぞせらるゝと書れたるを見ても知るべし。其の敎への目安には。挨拶切中の切無名切心の切玄妙など。いろ〳〵に名目をたて。かれはかれにて切。是は是にて切るゝと敎へられたれど。二師もしかと心に分明ならざるが故に。一坐の衆評をうかゞひ。猶百世の明鑑を待と。所々謙退の詞を述置れたり。此事此書を見ておもひあきらむべし。是只祖翁支考其外七部集に有人々の句に。てにはのとゝのはざるあり。是等の人の句におきては。曾て誤なしと思ふべからず。一々後に擧て其誤を見す。扨祖翁の世に鳴給ひしは。

貞享元祿の頃なれば。彌世の中治りて廢れたるを興し絕たるを嗣給ふ御政事にならひて。古へ學びする人出るは。難波に契沖法師ありて。万葉代匠記を著し　君に奉り。世に和字正濫抄を出す。是假名遣ひの書の濫觴也。續て荷田東麿翁。加茂眞淵。不二谷成章。本居宣長。同春庭。前後數有。此翁達は古學の先達。古學といふは。世の私に立たる學にはあらず。正しき考据有事也。鈴の屋翁古事記日本紀万葉集より古今集迄の哥の手爾乎葉を考合せ。詞の玉の緒なれり時代のうつりかはりて。今の世の有難く開けたるをも知らず。芭蕉支考の申されし事をのみ。頑に守りゐる人あるは。無下に怯き事ぞかし。たま〳〵開けたる今の世の考をもて。てにはのとをいへば。これは歌のてにはなり。俳諧には俳諧のてにはありなど聲高に罵りいふめるは。愚なるうへにもおろかなる本性なれば論におよばず棄置べし。哥のてにはは俗言を一ッも遣ふ事なし。俳諧には雅言俗言ともに遣ひて。自在なる物なり。されば祖翁の著されしといふ梧一葉に。切字十八字のかな｜けり｜らん｜といふも皆雅言ならずや。此

外に見しを見た。行まじを行まい。寒きを寒い。あくるをあける。あたふるをあたへる。合するを合せる。敲るゝをたゝかれる。はるゝをはれるの類。又一段俗に下りて。どうする。かうする。さうぢや。なんぢや。めつさうなとんだ事抔遣ふ詞又へねめまはすへいやがるへはんなりとへめつたにへひだるき抔。又物の名に竈の火を掻物を。江戸にては。じうのう京にては糖かき。ざるをいがき。ながしをはしりのるる又因ゝの方言。皆俳諧に用ふる所也。剰や古今集にも甲斐歌とてへかひがねをさやにも見しがけゝれなくよこをりふせるさやの中山（此しがといふてにははいかいしの常にいふしがとはたがへり）けゝれなくは。心なく也（かひの方言也）是にならひてや風俗文選に近江ぶりとてへ鶯にきどろはさぶいみなべらのうらゝがことの軒にけよやれ。何れも擧るにいとまあらず所謂俳諧の俗言正例とする所也。又嬉し。久しと言べきを。嬉しゝ。久しゝと遣ふは一向の誤也。輝やかしゝ殘しゝといふべきを。かゞやかせし。殘せしと遣ふは詞の活きをしらぬ誤なり（はせを翁發句に）へ玉川の水におぼれ[そ]女郎花（てにはとゝのはず）（十八楼記に）へ高欄のもとに鵜飼するなど誠にめざましき見物なり[けらし]（鹿島記行に）誠に愛すべき山の姿なり[けらし]共にけらしといふてにはかなはず。なりけりといふ。けりを延てけらしと遣ふとならば例もなし。文にも不叶（又支考がによしと定られたる句に）振舞に馬でゆかじ雪見哉（此事は本文にいふべし）（去來枋舍先生挽詞に）へことしはいかなる年[なれは]かくあぢきなき人をのみ見る[らん]（らんとなくてよし同じ文の中に）是より誰が身の上を[や]鳥もなくらんと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我斗殘り居たらん（りとつゞくか。のこり居と切らゝ稀なり）沖の船の友を失ひて。老の浪のよ[す]るかたなき心地ぞせらる（中略）あはれとは思ひけ[め]驚くほどの悲しさにはから[す]（老の浪のよるかたなきとせねばとゝのはず。よするにては何なり。此所は支考が自にしていはるゝ所なれば。よるといふべき所也又心地ぞせらるゝとせねばならぬ所なるをせらるとしては。あじひとつたらでとゝのはず。印は。ここには詰たき所なり）是等はてには。詞の誤也。前にいふ雅俗のたがひは論におよばねど、詞の活の誤によく學ずんば紛れ安し。一向の誤と言は發句詠ほどの人にはなき事ながら。やゝもすれば名ある人のうへにも有事なれば。本文に擧て共一二を見す。てにはの上に於ては芭蕉支考とても誤は誤なるべし。抑俗語を正例とするうち。なるたけはいやしき詞を遣ふたと梧一葉にあれば。

芭蕉翁の流は雅言の方を多く遣ひて。俗言のかたはすくなしさるを心得ひがめ。俗言を一向にきらひ。句のすがた艶にせんとて。連歌やら。俳諧やら。何やら分らぬやうになりたるも。又俳諧の邪道といふべし。比諭(喩)ていはゞ。佛の道は八宗九宗とやらに分れて。淨土は淨土。法花は法花と。其教化する所の趣は替りたれど。其說所の言葉てにはにおいて宗旨はなし老子孔子の道も同じ。唐土の詩をよむにも。我日本のてにはをいれてよまねば其意解せず。言葉の道は歌連歌俳諧狂歌舞句女わらべの赤本。うたひものには。神樂催馬樂謠淨瑠理下〻のはやりうた。いろ〳〵さまゞ高く低く品替れど。てにはにおいては只ひとつなり故に天踈人等。俳諧には俳諧のてには有といふ事なやめよ

文選盧子諒詩曰。崇臺非二一幹一珍裘非二一腋一いふ心は家を建るに一本の木にてはたゝず。皮の衣も一疋の狐にてはならぬといふ事なり。今著はせる此抄も我一人の力もて。私に推あてがひあみなす書にあらず。前にいふ先達のいろ〳〵考おかれし書籍(籍)を操(繰)返し〳〵。猶道の委しき人にもたづねもとめて編る抄なれば。俳諧古學蘽褏抄となづけつ

一名切字論とせしは名を呼に安からん爲なり

天保五甲午年六月　橿之本北元

凡例

一行〻上より書下したるは。擧る書の本文なり

一一字下て書たる發句は。本文にある所の句也

一又一段下て書たるは。此抄の論なり

一＼点掛たるは。論に引所の發句古歌。又は詞のわかちなり

一は|も|や|かな|けり|かくの如く字のかたはらに点掛たるは。其所によりて要とする文字の。見安からん爲なり

俳諧古學臺裘抄 一名切字論

櫃之本北元著

芭蕉翁著述梧一葉といふものあり。いづこの人か僞作せる。上の卷は俳諧の式目を擧(アゲ)。下の卷は截斷(キレ)字手爾乎波を敎たり。段々に寫し取たる物にて。殊に予が持る本は寫し誤多き惡本也 寛政八年 芦の丸家藏板二冊世に行はる

梧一葉 古寫本　　芭蕉庵桃青著

本文 句口にかなひ。心にも叶ひ侍れば吟心より來り。心吟より行と古人も申されける也。されば猿丸太夫哥に「奥山に紅葉ふみわけ啼鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき。ぞといへるには。えけせてねへめれの留りの掟なれども。此哥き」と留りたり。心と吟ひとつになりてかくつらねたれば。何の子細かあらん

と云れたるはいかにぞや。此哥はぞ」とかゝりてかなしき」と定りたる格にて留たるをえ」け」せ」て」の掟などいふめるは。一向にてにをはの事は。しらぬいひざまなり。文の內世の中の俳師のことを。今世盲俳師といひ。其外俗俳師と言たる所も有。翁(ハセヲ)の口より人をさしてかくの如。今の世の自惜(テング)といふ俳師のやうに拙(ツタナ)くのたまふ物かは。是にても梧一葉は僞作なることを知るべし 此書有也無也の關は。支考が古今抄に言れし如く。祖翁(ハセヲ)の夜話を后に門人誰か書集て翁の著述とし。世に殘したる事あきらけし。上の卷のうち。五尺の菖蒲 夜の杜 乞食袋 人の皃ばせ。其外式目の事はいはず。此抄はてにはと言葉のみによればなり

一手爾於葉の事

手爾裒波の手」文字を。於」と我古寫本にあるは全く寫し誤と思ひ弃(ステ)しを。あしの丸家の藏板にも於」の字を書れたり。こは古寫本のまゝを書いれし物か。其後寛政九年の板本白雄寂栞にも於」の字をかけり是も古寫本の儘とおもへど。此抄を補へる拙堂老のいかゞ

おもはれけん直しも改めず其まゝおかれたるはいかにぞや。是が見てや。初學の人の今にあやまる事多くあるは。うれたき事ぞとかく驚かしおく

一切字は　かな｜もがな｜や｜し｜じ｜ぬ｜はね字｜か｜けり｜ぞ｜つ｜す｜よ｜せ｜れ｜へ｜け｜いかに｜　以上十八字也

截(キレ)斷字く｜す｜つ｜ぬ｜ふ｜む｜ゆ｜る｜うの事はいはで。斯(カク)十八字となしへられけん。此内や｜か｜よ｜せ｜れ｜へ｜け｜いかに抔は切字ならで。詞とてにはなる物を總(スベ)ての俳書に切字と教へたるは。大かた此十八字より出たれば。初學の輩是をもとゝして。や｜か｜よ｜れ｜抔の文字を一句の内に入だにすれば切るゝと心え。や｜といはれぬ所をや｜といひ。か｜と置れぬ所にか｜と置。殊にや｜の字は遣ひ所多きゆゑにかといふべき所も。よ｜といふべき所も辨へずやとさへいへば切るゝと心え。切や疑のやの差別もなく。宗匠皃する人までも遣ひ誤る事多きはいかにぞや。ひとつ〳〵句を擧て初學の爲に見せんと思へど。まがつひの神の祟(タヽリ)も恐しければいかにせん。とにかく此誤多きは。此梧一葉　有也無也の關　貞享式　新式　をだ卷　芳山が曉山集　白雄が寂しほり　或家の抄。是等の書の教のみ眞心に用ひて。其余は大かた是は是にてよからんなど。私に推量(オシハカリ)てよしと定め。てにをは。詞の道は。さま〳〵入組て紛らはしき事あるを露しらで。只輕はづみに麁(ソ)くおもふから今の世に聞ゆる人達の文章發句にも誤多くある事ぞかし。＼てらし見よ本末むすぶひも鏡三くさにうつる千ゝの言葉をと＼鈴の家翁のをしへ置れし本末結ぶ事も三くさにうつる事もしらで。只私によしと定しよりの僻(ヒガ)事也

一かな　切字十八字の事

ふ｜る｜む｜く｜し｜つ｜の留りにては哉と留らず。落付ぬ物也

此説は捨べし。浮哉といふ事なり。奥に生得の哉といひたるぞよき

一や・古來七ツのやといふ。＼切や＼中のや＼うたがひのや＼はのや＼すみのや＼捨や＼口合のや

中のや　切やといふ名も古學の方にていふとは違り。

やの事はくさ〲多ければ別にいふべし

一し　古來三世のしといふ事

此名目も斉べし。未來のじといふはずの將に然する詞にて。ずの轉用なり。見せじこゝろを。みだりに人をよせじ物をやと。躰言へも續く詞なれば。しとは違へり。此事は古今抄にいへば合せ見るべし

一けり　落着の詞なり

〽けり　下に置ときは。中七文字の末ににの字を置て〽けりといふべし〽けり〽けらし〽き　けりの反きなり

〽けらしはらしの反りなり皆けりと同意

とあれど皆捨べし。をだ卷にも此事をいひて。〽初夜と四つあらそふ秋になりにけり〽荷ひ茶屋も花見る人になりにけり　といふ句を引て敎へたれど是にも限らじ。にの字との字に意の替る事はあれど。てにはのとゝのひにかはる事はなし。又阿佛尼のけりといふ事あり（吾妻問答　相卿之句）九月晦日會連哥のほくに〽けふはゝや秋のかぎりになりにけり。同十月朔日の會にけふはゝや冬の始となりにけり　とあり。是もにとに意こそあれ（是を二句共ににになりにけりと。あれこれの其にあるはいかゞたづぬべし）扨けらしけり　き此三ツの事に此書を始曉山集にもいへり。其をしへたるは十七字の内にけりと遣ひて。一字あまるときはきと遣ひ。一字たらぬ時はけらしと遣へよといひて。同意のよしを敎たるはいかにぞや。きけり　けらしと遣ひて三ツながら意の替る事は知らずやけりは來る（と書て言定るてには）けらしは（推量なり）きは現在と過去の二品あり又次にいふべし

一が

が　切字にならずさりながら〽見しが〽きゝしが〽いひしが　といへば切なり

傳書のをしへといふにはいと麁し。〽見しが〽聞しが〽いひしがは。上に過去のしの字添たれば。只のがとは異なり。しがといふは。〽見しがな〽にし哉の上下を省きたるものにて願ふ意なるもの也又〽見しか〽聞しかと。か文字淸てよめば常の哉なり。又しかと淸てはこその結詞なり。俳師のほ句に作るは多く此格に外てものをといふ辭にあたりて。下に詞

をふくみ切るゝ格と。又上のしの字過去より受たれば。俗言たの字に轉用してたがといふにあたれり。然るを初學の輩もとの意をしらず。しがとのみ言て裁斷(ドレ)たる心に濟しるるは拙(ツタナキ)わざなり。又しがと濁と。しかと淸(スミ)て讀とは意も替り有事なれど。今の人の句を見るに多くしがとのみ濁り。しかと淸てよまねばならぬ句も。口にはしがとにごりてよめり

一はね字　へ一字ばねへ二字ばねへ三字ばね　と。いふ事有へきんへ見んの類一字ばねへ咲らんへ縫らんへ別つらん　有へうくすつぬふむゆるに通ふ二字ばね也へやらんへならんへるらんを三字ばねといふ　皆切字也

一字ばね二字ばねといふは中ゝ手早き教へかたにてよし。三字ばねは然らず。やらんは疑のやより受たる也。又やらうをやらんといふも有。へ早乙女に結びてやらん笠の紐　なり。ならんはなり　なる　なれの將然(マサニシカコトバ)(セントスル)言より受たるなり。けん　てん　なんも同じ。るらんは裁斷言辭より受る二字ばねなり。總てんといふは活く詞の將然言を受て。連用連躰裁斷の三ツをかぬる詞也

一らんとはねゆにはやと疑ゆと古來よりの法なりらんは察する詞。疑の詞とのみ思ふは。少したがへり。上に疑の詞のや　いづれ　いかに　たが　いく　かなどの詞あれば。それに引れて疑の詞となる。なきときは只察する詞也。察するとうたがふは些(チト)の違有

一つ

へ花は見つへ鶯は聞つ　の類なり。心なうといふべき切字にあらず。鶯は聞つ。何はと外へうつる時の詞也。つるといふるをつめたる也　花咲ぬるといふるの字をつめて。花さきぬといへば則切るゝ心なり。聞つるといふるを添れば語絶せぬなり。いづれも下のるをいはざる所にて切字になるなり

見つる　聞つる　咲ぬるとつゞく詞も。そのや何よりかゝれば定りたる結びにて切るゝ也

一ず

古來まれなる切字なり。五七五の留りに置字なり驚たる詞。切字の下に心なき字を置ては留らず切れず月雪花時

唐梅櫻等の景物などを置てよし。是もならひの切字なり

連歌 一聲は思ひもあへずほとゝぎす

俳諧 御簾からおもひもよらず雪礫

是等のとは取にたらず。別卷にいふべし

一よ かろき下知なり又かれよこれよと片付たる下知なり

よの字かくいひてはあらし。よはやの裏なり やといひてもよしと思はるゝを。よといふと有。義利替れり。恨みずやよ 思はずやよ いふやよ 聞やよ 筏士やよ 七夕やよ 此類いくつも有べし。是を呼出しのよといへり。又てよ とよ よな そよなども有へ えけせてねへめれへいきちにひみゐの下によ文字を添て皆下知なり。

別に輕き下知もなし

一れ 下知にもおのづからの心にも。雪もこそふれ自 氷れたど自 しめりふれ知下 急でかへれ知下

氷れたどはいかにも自。氷らすれといへば他なり 又氷とくれば ども 氷とけず じ けんつゝ けり んといへば白にて氷とけば ど ども 氷とかず でぬ じ まじ んといへば他なり。此るい詞によりて自他入替る也 集と散と寄と放と也 よくせずんば、まぎるべし。以下せ へ けも皆同じ

一こそのてには れといふをあましたる作例

しばしこそ人も影せし花ちりて かげせしなれ

道あればこそ雁の來る空 空なれ

しばしこそ人も影せしと過去のしにてこそを結び。花ちりてと遣ひたり。影せしなれと意をふくむにはあらず。

右切字十八字也 初心の人あやしき切字用事なかれ。上工のうへは心が句になり。句が則心なり。此故に切字なくとも語絶するなり

あまり大まかになしへられて初學の爲にならず。あやしき切字を用る事勿れとはいかにぞや。切るゝか切ざるかはしらねど。大かたこれにて切るゝで有うと推度て遣ふ人もあればなるべし。又上功のうへにては心の句になり。句が心になりて切字なくても語絶するなりと有ては老俳にも初心にも只ぼんやりと

してはきと分らず。かの十八字は皆截断字の目安なり。大まかなる教により遣ひ誤ると多し。や　哉　けり　し　ぬなども上のかゝりによりてとゝのはず。又つづく詞も上のかゝりによりて切。又上のかゝりにかゝはらず切もし。續きもする辭あれば。是を切字と定る文字なし猶次にいふべし

一に留

現在有　過去有　おもはぬに現在　おもひしに過去

是はぬとしにこそよれにの字のあづかることにはあらじ

一過去のしにて留る事法あり。過去のしは。下に詞なくてはせぬとなり。近來の人の句を見るに。過去のしにて留たる句あり。一向にせぬと也　其句に

見ぬうちに花に鐘鳴日の暮し

此句を擧。切れぬとて難ぜり。此句はのとかゝり過去のしにて切たり此頃の人は此格をしらでかく難ぜしか。此のは紐鏡にいふ春の日秋の夜などいふ常ののとは異なり。鶯のなく。月のかくるゝなどいふのにて別なり

一むかふしは留る也　松青し　雪白し　言葉嬉しゝ

嬉しゝとはいはれぬ詞なり。よく人の誤る所。此抄の文の中に。片輪の噂など好みていふ事あしゝ。浮哉とてあしゝ　此格を見てや名高き人の句にも。嬉しゝ　久しゝと遣ひたるも有。是は詞のはたらきといふ事をしらぬひが事なり

一あなはかな　あなたうと　うたて　あやな

是もやノしノをいへば切れず

かくあれど。や文字を添れば歎息にて切。しを添ふれば現在のしにて切なるべし

一二字切　三字切といふ名あれど一字ならでは切字なし

上の切字やくにたゝぬやうにする法なり

風すゞし何とてもてる扇かな

此かなばかりが語絶なり。上は問荅なり

此句作なればやはりかなとは留らず

一浮かな　光る哉　見ゆる哉　開く哉　匂ふ哉の類あし

此事は前にもいへり。捨べし。浮哉とてあしきは

月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑
靑くとも木賊は千々の見物かな　文鱗
あの雲は稻妻をまつたより哉　はせを

是らは七部集の内の句なれど浮てよろしからず。此外＼大廻し＼玄妙切＼二段切＼三段切＼押字＼見ゆ留は有也無也の關 古今抄 貞享式 蓼太家の抄など大かた此梧一葉より出たる物にて引句の違たるはあれど。一ツとなれば次の有也無也關に擧て見す。註の違たるは梧一葉は＼キリ 貞享式は＼古と合印を付て見す。是等の書十に四ツ五ツ僻が事有故。今もほく文章のてには詞のあしきゐ常に和學家より笑はるゝとの多かり。されど片田舍の人の言事をきけば。俳諧にに俳諧のてには有など强情をいふめれど。和哥の手爾波俳諧のてにはとてふたつなし。是日本のてにはなりと祖翁も申され。支考が古今抄に百世の明鑑を待といふとゐ幾所も書したれば。是にても悟べし。かく同じ事所〳〵にいふをうるさしとなおもひそ

幻住庵有也無也の關　古寫本　芭蕉庵桃靑著

元祿の新式ともいへり

序に曰むかし花の本に於る神代八雲の和哥を始（中畧）虛を實に綴るを是とし實を虛につゞるを是とす。實ゐ實といひ虛を虛と顯すも俳諧の道にあらず。正風は虛實の間に遊んで虛實に止らず。是我家の秘决也（中畧）口中に曲を貪るとなかれ。心中に曲ゐ捨る事なかれ。口曲は他門にして。心曲は正風也

此文によりてや芭蕉翁自正風を立るといふと諸書に見えたり。案ずるに正風正門正流といふは。祖翁が門人の心より師を敬いて言る名にて。蕉翁自僭して正風正門と申されしにはあらじとおもへど。此序實に蕉翁の自作ならんにはいかゞならん。故に松屋与淸が俳諧歌論に。芭蕉翁に一棒を与たり。ある人それに答へしかどよしとも聞えず。又是等の人松の家の學にもしかず。されど今芭蕉翁の俳諧四海に廣りて熾んなれば。たとへ邪風なりともいかでか松の

屋がいひごとに降参すべき。予がおもふ今も正風正門といふうち。蕉風蕉門蕉流などいふもあり。かくいはゞ何の子細かあらん

發句切字の事は十八字の品ありて。和哥にも連歌にも其沙汰あれど。何故にと其故秘すれば意さらにしれず

支考が古今抄に貞享式といふは。前にいふ梧一葉 有也無也の鬮をあつめて貞享式と号け出ししよし同本に見ゆ

古へ昔より切字の事は十八字の品有て 同文中畧 其ゆゑをあかさねば。童の心經をおぼえたるやうにて自己に分別するとあたはず

かくの如く此頃は事開けぬによれば也。かくいへるはかの十八字のかな もがな し じ ぬ か けり など。總て十八字の切字の其癖をしらず童の心經を讀こゝちすといふめるは。かなといふ義利も。けりの譯も。もがな し じ とは何の事やらしらねども。斯いへば品切字になるとこゝろえしものなりかし。今の世にて見れば蓮二坊はづかしげもなく怯き事を世に書殘しゝ物とおもはる。かな もがな けり などのくはしき解は。初學の人にもよく分るやうに次にいふべし

挨拶切

いざゝらば雪見に轉ぶ所まで

挨拶切は他に對するの一ッにして。挨を天とし拶を地として。いざゝらばは天也。雪見にころぶは地なり 此類の上下の詞。主客の隔を以て一句の切とす。是あいさつなり

此句の截断とする所かくむつかしくいひては初學のをしへにならずへいざゝらば雪見に轉ぶ所まで と動かぬ詞にて留りたり。切字といふは。彼十八字ならで。く す つ ふ む る が截断字なり。此文字が切たりつゞきたり。遣ひやうによりて自由に活く。早く元祿頃の臆度のをしへを弃て。正しき古學にならふべきなり。扨此句は曠野集員外にいざゆかんと有。かく有ては切字の論なけん。土芳が赤双紙にいざゝらばと後に直されしと也

自他切

人に家を買せて我はとし忘

此切は全く新製なり へ(古)貞享式には引句たがへり

いかに蕉翁とても切字に新製といふ事の有べきぞ。

此句ははとかゝりて。年忘と動かぬやうの詞にて留りたり 忘ルレルレ と活(ハタラ)く詞を。うごかぬやうの躰言にいひなして遣ふ一格。何の子細もなき事なるを。天ぢやの地ぢやの新製ぢやのといふめるは。無下につたなきいひざまなり動かぬ詞にて留る哥の例を引て見すへ あら玉の年立かへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ又文字をへてもへ さびしさはみやまの秋の朝ぐもり霧にしほるゝ槙の下露 かくの如はとかゝればはの字の意の下迄至るなり。はの字に限らず。總て首とする辭(コトバ)のてでにをはばものとどへ是等を一ッに合せて。紐鏡に徒としるせり。續く詞の首たるは。ぞの疑のやなどなぞたれたがいかにいかでいづれいづらいついく此るゐを合せて一ッに何としるせり　以上の文字を辭(コトバ)の本とも首ともいへり。是等の辭を上に置て。下を結にかゝはらず。動かぬ詞にて結ぶ一格なり。こは元祿のをしへにいまだいはざる所。不思儀(議)にもおもふべけれど。此格を遣ひながら此格の事を知らざれば。へ挨拶切へ中の切へ心の切へ無名切へ玄名(妙)。口傳秘授などいひて初學の用にたゝず

中の切

猫の戀やむとき閨のおぼろ月

猫の戀止時は青明也。閨の朧月は立春の後にして。物と物との七文字の中に。心言葉ともに替るを。中の切といふなり へ(古)貞享式引句同じ和哥にもかゝる句讀有て習ひとやらん有識の人に聞傳へ侍りき

是もむつかしく言て初學の爲にならず。只うごかぬ詞にて留りたり。此抄にいへる挨拶切 自他切 玄妙等の引句に。印付たるく す つ ふ む る 名詞の所に意を含め切るゝのと。續く方に用ひて。下を躰言に結ぶとの二品有。そは句に依て辨ふべし

心の切

秋風に折れてかなしき桑の杖

詮取にたらず[古]へ貞享式には追善の格として。この句かなしやとも歎息のや〻用べけれど。追善は情を先にして平話の儘に演たらん。そこを俳諧の實なれば是この句格を鑑にして切字の有無を論ぜざれ

此るゐ皆かくのごといひて。しかと留る所の自己にも知れざれば。いろ〳〵あやなし書ちらして用に立ず。是全く十八字の切字といふ。其切字句中になき故。さま〴〵なづみもてあつかひていへればなり。是は支考の申されし如く。悲しやとありてもよき所なるを。かなしきとつゞけられたれば。是もによりか〻りて。杖と動かぬ詞にて留りはすれど。格別意のふくめるとも聞えざれば悲しやのかたまさりて聞ゆ。又追善の格と一格立ていはれたるもをかし。悲しな

とあらばよからん

[古]へわづらへば餅さへくはず桃の花

眉はきをおもかげにして紅の花

老の名のありとも知らで四十雀

類へばの句は喰ずにて切。紅の花の句はてよりか〻り。四十雀はでよりか〻り。動かぬ詞にて切たり。初學の人や〻もすればて文字にて切る〻とおもふは違へり

押字

何の木の花とも知らず匂かな

押字はのとの〻狹き紛らしき切也。是は上にて押。下にて浮。一句切たり [古]へ貞享式へ何の木の花とも

前にもいふがごとく。ずはぬの轉用。しら〔ぬにほひ哉／ずにほふ哉〕共いふべきを。しらずとして深き意をこめ。歎息なり。源氏桐壺命婦の歌にへ鈴虫の聲のかぎりを盡しても長き夜あかずふる涙哉。哥は文字數あれど。ほくは文字すくなき故へ何の木の花とも知らず(アヽヨキ)匂哉と。稱歎の辭なり。此句は皆人の知る所へ何ごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼる〻。西上人の歌より出たり。又此哥は中庸の文末に文王の詩を引て。天下之載ハ無レ聲モ無レ臭モ至レルカナ矣 是より出たりと

抱字

夕がほや秋はいろ〳〵の瓢哉

右のやは切なり。しかし五文字のいひやうふがいなくして不切。秋はとはの字にて抱へたれば上のなり。彌されず。よりてかなと留りたり。哉はうき哉にて不切　一句分るべし

かくのごとくやを切といひ。又不切といひ。又浮哉といひ。一向にわからず

〽古此やは疑のやとしるべし。秋はと句を切て。下に心をことはるなり

支考が此やを疑のやといひしは。いかに物に狂ひけん殊にをかし。此や　哉の事は不二谷が手爾波抄にいへるをよしとおもはる。いかにもやと哉の心をよく辨へてのうへはくはしく分るべし。何丸が七部大鏡に。此哉を未來の哉といひしも珍らしき説なり。前にもいふやもかなも何ゆゑにと共譯しらず。童の心經讀如しといふ心よりは解しがたき筈なり。此や　かなの事を具にいはゞやといふはもと切字にあらず。嘆息にて切也　歎息といふは。嬉しきにも。悲しきにも。よきにも。あしきにも。月を見ても。花を見ても。何にもかにも。物の至極したる時の事を歎息といふ　扨此夕皃やのやは歎息にもあらじ。總て此類の〽夕皃や〽明月や〽白雪や〽梅咲くやといひて。たんそくになるも有。又ならぬも有て紛るゝ事有　よくせずんば有べからず。此夕皃やのやは。や文字の本義なり。成元がいへる。やは内のもやうの他を添せんとすれど。あたはざる事を思ひ入るゝてにはなり。夕皃のとしてもよき所を。のにては内のもやうの付そひがたきを。おもひ込迠にはかゝらぬ也。かくいへば初學の輩は蒙朧としてわからぬやうに聞ゆれば。予猶もくはしくいふべし。夕皃の花を見れば皆同じやうに白き花なるが。秋ふくべとなりては。長きみじかきいろ〳〵の象に變るといふ事の。外の花にはあらで。此夕皃にのみあるといふ心を。かく永ゝといはで。只やの一字にこめたるてにはなり。是を成元が他を添せんとすれど。あたはざる事を思ひいるゝてにはといへり。夕皃のやの字截斷切ざるの

論にかゝはらず。秋はいろ〳〵のふくべになる事哉といふ心なり。是にかぎらず。すべて上の五文字へ元日や〳〵明月やと。題よりうくるや文字には是と歎息のふたつ有。心すべし。是や|の字の正義なり。猶此事は饒舌録の所に言ば合せ見るべし

無名切

咲みだす桃の中よりはつざくら

無名切は一句の立所なし。何を切字ともしれずして吟聲に切あるを。無名切といふ

是も咲亂す桃の中よりと躰言へつゞけて。初櫻とうごかぬ詞にて留りたり。吟聲に切有などいふめるは。取所なきいひごなり

四方より花ふきいれて鳰の海

明月や花かと見えて棉ばたけ

家はみな杖に白髪の墓參

此解もおぼろ〳〵として前に同じ。前の二句はてよりかゝり。家は皆の句。は|の字下までいたりて。墓參と留りたり

玄妙

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

赤〳〵と日はつれなくも秋の風

玄は玄ゝ也。妙にして心も詞も及ばず。詩に觀見庭前梅与松 ならべ返してよめる心なり。是玄妙也

むつかしくのみいひて是も用にたゝず。始の句は同じく上より言つゞけて。月と梅と結たり。此事元祿の教にはいはず。赤ゝとゝいふ句は。つれなしと切たるを。つれなくと詞を活(ハタラカ)し。も|と遣たり 扨も|の字は切字にあらず。歎息にて切ともなり やの字なども切字にあらざれど。歎息にて切るゝは同意也。猶此外にも歎息にて切るゝ文字あり。後編にいふべし。但し是も夫(ソレ)も|など遣ふもにはあらず。此も|は我おもはぬ事をいひて我おもふ事に思ひよせさせんとする心なり。故に歎息の詞となるなり。作者はかくまでくはしき筋を知て遣はれたるにはあらねども。我日本(クニ)の人が。我日本(クニ)の詞を玩(モテアソ)ぶ上から假令(タトヘ)知らずもよく叶ふとの有ものなり。今の初學の人の言へるはくに

も。切字手爾波詞の活抔はしらずも天然と十に六七はよく叶へるが有如し。然れば知らずに遣ひ中(アメル)と。知て遣ふとは。大なる損徳あり。祖翁此てには知りて遣はれし事ならばたれ〳〵にもよくわかるやうに教へらるべきに。其事はいはで。玄は玄ゝ妙ゝ心詞も及ばずと。其上詩まで引れたれば。中ゝ知り給はざるに等しくて。人の爲にはならじ

二段切　二字切　三字切　句讀切（さしたる事もなければいはず）

夕にも朝にもつかず瓜の花

空鮏も空也の痩も寒の中

水無月の暑日にも。瓜の花のみ露けくて。夕皃にもあらず。朝皃にもあらずとは。慥に二段の差別成につかずとは詞の双關にして。爰に句法を稱すべし

夕にも朝にもから鮏も空也の痩もと。ふたつ物はあれど。切るゝ所とてはなし。是を二段切とはいかゞならん　此も|はつゞくるも|にて。前のつれなくものも|とは異なり

小まはし

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

桐の木に鶉なくなる塀の内

柚の花の句はしのぶ|（前よと意は合）切たり。此抄の註はくだ〳〵しければ畧す。古今抄には

古へうづらの句は田莊の酒屋といふ題ありて。こなたより其家の富貴を思ひやりたるやうなりとぞ。然ば五文字に句を切て。桐の木やともいふべけれど。さいへば桐の木ならん。是は桐にも鶉にもあらず。田家を稱するほくなれば。鶉なくなりと句を切て塀の内を隔つべきにもあらず（下畧）（かく長ゝと書れたるは用なし是も塀の内と驚言にこむすべり）を廻し

青くても有べき物をたうがらし

米くるゝ友を今宵の月の客

心に赤ゝと見る余情を。を|の字に含て下の轉ずる所すくなければども。上へ返して切侍るなり。何底心なければ切れず。殊に据がれなどいへる病句なり

這教(コノヲシヘヲホムテ)梗よしと聞えたれど。下の轉ずる所と書るより以下。事のわからぬやうにせし言葉なり。此句意は。青くても有べき物を。青くはあらで赤きたうが

らしと。裏へ返る詞を含たるてには也 ものをといふてにはは。皆かくと。心うべし 上へ返りて切侍るなりといはれたれど。此てにはは上へも返らず。切も侍らず。来くるゝ友をのをは。數息のをなり。来くるゝ友をといひ。客といひ 此をの一字に。いろ〳〵の心籠れり。故に數息にて重きをの字なり。然るを何底心なければ切れず。殊に裾がれといふ病句とはいかにぞや。

大廻し

辛崎の松は花よりおぼろにて・

行春を近江の人とおしみける・

天地未分の切にして初心の人知る事なし 口傳

あまり大いなるいひごとにてをかし

＼古芭蕉門には祕授なるが。是は正しく哉の治定を恐れて。にてと心を返されけん。然れば心詞の殘る所は下の五文字の句絶にして。是を下段の切とや言ん

蕉門の祕授といふもこと〳〵しく。大躰祕授口傳などいふ物は。自己(ワレ)にもはきと分らぬ事を。分らぬやうにては。文(アヤ)をなさゞる故に。祕授口傳と書紛らしたるものなるべし。哉の治定を恐れてと書るも。をかしきことなり にてと留るは。上へ返るとかへらぬとの二品あり。此句のにては上へ返らず。はとかゝりて下に詞を含切たる也次の行春の句は定りたる格にて。おしみけりといふべきを。古學には變格といひて。けるの下へ。事よ 事哉 などの辭をふくみ。意を深くしたるもの也。何の子細もなき事なるを。蕉門の祕授口傳天地未分の切にして。初心の人しる事なしとは。いかにぞや。此外いく所もいひたきことあれど略す。總て是迄にいふ。＼挨拶切＼中の切＼自他切＼無名切＼玄妙＼に回し＼を回し＼大まはし＼心の切＼句讀切＼押字＼未來のし 抔の名目は捨べし。前に具(ツブサ)にいふが如く。僻(ヒガ)事のみ多く交れり

今の世には是等の名目用る人なしとおもへど。返す〳〵も俳諧には俳諧のてにはあり抔いひて。是等のをしへを證とし用ふる事なかれ。祖翁の詞にも俳諧に古人なし。いにしへをもどきて今をつゝしめと申されしにても知るべし

古今抄（貞享式 東花式）

東花坊支考著

芭蕉翁十九ヶ条を。貞享式と題せしは。滅(眞)後門人の稱なるよし序に見えたり。享保十四年板本蓮二房。前の有也無也の關にあらかぢめ引上て言ば合せ見るべし。此抄の要とする所。てにはの事にかゝはらざれども其ひとつをいふ

東花坊序に曰。俳諧は五倫の交を和らげ。諷諫に談笑の用なるをとしるべし（中畧）はせを庵序に。聞ずや聖典の掟にも。道は日夜におごそかならん事を思ひ。法は年月に安からん事をおもふといひ（中畧）世法は五倫の和を本として君父の善を進めんにも。婦弟の惡をこらさんにも。善を善とし惡を惡とし。直言を以て直諫すれば。其時其人の機嫌をまたず。夫を一音の大道とはいふなり（略）楚の子西が王の惡を和げし故事を引出。又所〴〵百世の明鑑を待といふ事を擧。學べきは俳諧の機變にして。恐べきは俳諧の高學なるべし（下畧）

一道段は二師の金言にて返す〴〵も味べき所也　丈艸猿蓑跋曰。猿蓑者芭蕉翁滑稽之首謌也。史記姚察曰滑稽猶ニ俳諧ー也屈原卜居之語曰　突梯滑稽（王逸註轉ノ隨レ俗）也　如レ脂如レ韋（柔弱曲也）　以レ絜レ楹乎（諂同言諛也）　されば俳諧は。人とむつましくするの媒。此抄にも諷諫をもて道となし。談笑をもて法と言り。人の上にていはゞ。學んで學ばざるが如く。才ありて才なきがごとく高學ならず。人を妬まず。人をあしざまにいひ下さず。禮を正し約をたがへず。常にをかしみを持たる人。則是を滑稽とも俳諧とも言べし然るを世の俳師の中には。萬これに反し。學ずして學びたる皃をし。才なくて才ある皃をし自借にて情強く負をしみ有。然して后。己が拙は露しらで。常に人を怯く言下す癖あるによい。今迄むつましき朋友も。俳諧故に中惡敷なりゆくものまゝあり。此輩は此道の不正門といふべし

卽興躰

景清も花見の坐には七兵衛

むかしきけ秩父殿さへ角力取

右二章は一坐の談笑にして切字の論に不及

ふらずとも竹植る日は簑と笠

當歸よりあはれは塚の菫艸

爰には切字のさだかならで。蓮二等が管見を加ふ發句に何躰何格とは滅後の推量なれば。例の明鑑を恐るべきは是なり

切字といふ事に苦勞あるにより。かくのごといへり。定りたる切字はなしとも。意の留りだにすればよき事なり。秩父殿の句は下知して角力取と留まり。余の二句ははとかゝり。動かぬ詞にて留りたり。はとも は殊に譯あるてにはなり。依て紐鏡にもは もとして。其余は徒と一ツにいへり。はは物を分る意。

双也　葉也　齒也　くはしくは後編にいふべし

二品のかなの事

かなといふ事は何故といふ事をあかさゞればしれず。漢家の字書にも。哉の字は疑と稱歎と二用。倭には只かと訓ずべし。歟は疑の重きをいひ。乎と哉は輕きをいふ。やとかは同意なり。哀やなども。哀なる哉とも。なの字は日本の助語にして。漢には那の字を用る也　是を詠嘆の餘韵といへば。那兮と詞を詠べし。倭眞名には哉那の二字なるや

漢家の字書にあてゝ。歟乎哉の輕重。那の字の事言出たるより。總て此抄にいへる。日本の手爾波の事を。漢文に引當て言るは。何れもよろしからず。いかにもかなはかといふ辭になを添たる物なり。故にかなといふべき所を。かとのみ言たるも多し。万葉にはかなといふ所をかもと有。又かねとも訓ず。又やとかの同意別訓なるはよしと聞えたれど。漢には那の字を用ひ。倭には哉那の二字ならんといへるも。よからず　予が考にかなやの事は。いまだ先達の發せざる所なれば。いかゞと思ふ人も有べけれど一說を儲て言ん。かなといふ心は。此抄にも稱歎なりといへる如く。治定歎息したる所を哉と言り。歎息といふ事は。前にもいふ。月にも花にも物の至極したる所を歎息といふ。歎きの意のみにもあらず。嗚呼よ

ぎ咄嗟かなしき於痛き咨たのしき。抔いふが如く嗚呼といふ。惟歎息也。新撰字鏡に。阿者嘆聲也阿は五十員の始。言靈にいふ所。永ければ略す。櫻哉月見哉光哉思ひ哉といふも。よい櫻ぢやなあ。よい月見ぢやなあと。いふ心をかなといひたる物なるべし。かなの反か　かの反あ　もと皆あの一字になる。あを重ねてあゝと歎息なり。やの字も同意。反あなり。物を譽るに俗語。やんやといふ。則歎聲なり。

故にか　な　やの三字同意別訓なることとしるべし

古式の名目に願のかなといふ事あれど。漢文には決て其字なし

束花にも蓮二にもせよ。いかにひらけぬときぞとて。あまりつたなきいひごと也

三品のやの事

古抄よりやの字の事は。七品八品の名目あれど和漢に通用をば。只三品に過ざらん。第一疑の耶といふは。和漢にやの字の正義なれば。一用にして餘衍なし。第二に稱歎の哉は。漢家の字書にも多用にして。彼いふ一名二意にも限らず。第三に口合の也は。漢文の常にして。爲道也　回也　白也　韵會の言る助ならん。然ば也の字は句勢のみにて切字にならぬ時もあり。春雨や秋雨やの類は句躰により　て哉と留るべし。名所の也に留るは論なく古式の常法也。

疑のやをやの正義といへるは大なる僻が事也　漢文に中てよからざるは前にも言り。春雨や秋雨やのやの事。かくの如いひては。初學に惑妄し。猶やのとは。有也無也爛。夕皃やの段。饒舌鉾冠のやといふ所にいへば。合せ見るべし

三ツのしの事

助語の中にも。三世のしは明らかならず。連俳の兩家ともに。現在未來は切字にして。過去は切字にならずや。夫にはタ　イの口傳あり。暑い寒い喰まい飲まいと。いに通ふを切字となし。見た聞たと。たに通ふを切字ならずと。古抄にはかくいひすてゝ。例に其二字の道理をあかさず。口傳古實とは言り　未來の喰はじ飲まじとは。眞名には不喰不飲と書て本より文句の用にして。助語にあらざれば。切字に用べき道理なし

かく言るは。切字を助語と思ひたる誤成べし

我家の式目には。現世と過去は切字にして。未來のじは切字にあらずといはんか。是等は一部の大騷にして古式の名目を減(ゲン)ずるに似す。我家の學者は心々に或は用い或は捨て天理の一統に任すべし

東花云此一段は大切の沙汰にして。漢土の文字に音韵のあまりならんとは。一發百中の的言と言べし。猶撰ずるに未來のじの字は。驢馬に乘たる東坡の書賛に

振舞に馬ではゆかじ雪見哉

とせしに切字重なりておだやかならずと。其時は人の難ぜしが。今思へば故翁のいへる業儀(議)はおぼえず。東花坊に定りて天理の冥合に叶ぬるやと尊とし

ずのいまだ然らぬをいふ時はじといふ。俗言にじはまいといふ詞。此抄にもタイの口傳と有是也。ずと定ていひがたきとき。じといふ辭(テニハ)也。ずは強くじは弱し。ずはずぬねと活き。じはずの將(マサ)に然(シカ)する詞にて。留りの格はずに同じとあり。又じは。有也無也の闕。三世のしにいふ躰言にもつゞく詞なれど。かなの打合よろしからず。とにかく此句は。時の人切字重なりておだやかならずといひしぞよき。作者の心には。振舞に馬ではゆかじ(トオモヘドモヤッパリ馬ニノッテユク)雪見哉といふ心をのべられたらんなれども。さまでは詞もはぶかれず。外に何の作り方も有べきを。然(シカ)しては哉と打合ず。天理の冥合にも叶はじとぞおもふ。此抄の＼心切＼中の切＼挨拶切＼二字切＼三字切＼を回し＼大回し＼玄名(妙)等のとは有也無也の闕に引上古＼印を付ていへば器す

（古學切字論　下）

をだ巻　元祿十年板本　　洛　溝口竹亭

自序に古人の式にしたがひ。かつみづからが趣をも童蒙のたすけにもとおもひ出る折〳〵（下略）

をしふる所。前の三書にるゐしたれば（略）發句切字として切るゝ所に＼印を掛たり　そは

五月雨＼何を茶にくむ淀の人　　鞭石

子をもたば＼いくつなるべき年の暮　　其角

ぬしは＼たれ木綿なだるゝ秋の雨　　尙角

扇折＼いかに持たる汗のごひ　　千那

かくの如く＼印を掛て。此所を切字とをしへしはひがごなり。故に初學の人の誤ると多し是等の句は皆上に疑の詞ありて。下に其結びあれば。其結びにて調ひ切たる也。其結びと言は　何を茶にくむ　いくつなるべき　ぬしやたれ木綿なだるゝ　いかに持たる　かくの如く△印付たる所を結びといひ。切ともいふべし。此抄の切るゝ所とて＼印付たるは。皆詞の首なり。△なきは動かぬ詞。又言かけにて結ぶなに　切るゝ何。又結びに抱(拘)はらぬ何　外にさま〳〵格有

けれ

我こゝろ鞭におそけれ櫻狩　　松木

なく鹿もさかるといへばをかしけれ　　團雪

此二句切るゝとをしへたれど。上にこそとなくてはとゝのはず。啼鹿もさかるといへばコツをかしけれの。社を省きたる物といはゞ。笑べし。こそを省きて。けれとのみ遣ふ例はなし

下知そ

ちらすほどきらはゞなきそ花に風　　道村

是は下知に似てすこし意違へり。禁しむる詞也　勿のなといふ。な何その。なの字。なきなるべし。此例なるは＼玉川の水におほれそ女郎花、芭蕉翁にもかくの如きの誤あり。此例にならひてや。今の世

の人の句にもあれど。こは其人の罪ならず。古人の罪なり是も〽玉川の水にナおほれそとの如くなの字を省（ハブ）きたる法などゝいふ人あらば笑べし。下のそをはぶくは定りたる例なれど。上ハ首たるなを省く例なし〽玉川の水におぼれな女郎花　と。なの字ばかりならばよろし一段强く禁る意也

數ならぬ身となおもひそ玉祭　はせを

皆かくのごくあらまほし。万葉に〽いもがあたり我袖ふらん木の間より出來る月に雲なたなびき。かくのごくたな引そといふ。そを省（ハブク）は定也。夫木集源仲正哥に〽ちりぬとも外へはやりそいろ〳〵の木のはめぐらす谷のつぢ風。此哥はなの字なくてその字ばかり也。依て此うたも誤なり

切字なくて可レ有二分別一句

是は〳〵とばかり花の吉野山　貞室

余の草にたとへおとるとけふの菊　和及

にくまれてながらふる人冬の蠅　其角

かへす〴〵も初心のすべき事にはあらず

かくのごあれどさにはあらず〽はより〽により〽てよりかゝりて。下は動かぬ詞にて留り。外に分別もいらず。とかく切字といふ物になづみもて煩ふ故。いろ〳〵むつかしう言て用にたゝず

やは　福壽草やは明がたの梅の花　富丸

かは　くらべ馬神の科かは負の方　周木

やはとかはとは些（チト）の違ひあれど。大抵同じ事にて。共に意の裏へ返る辭也〽くらべ馬神の科かは（トガニテハナシ）負の方といふてには也、やはとすれば〽神の科やは（トガニテハ有マジ）といふほどの違のよし。福壽草のやはゝ一格あり〽福壽草やは（は）明がたの梅の花（ノコトカヤ）といへる辭のよし北邊翁の申されたり。やは かは の事委敷は後編に擧

煠やはくにごれる京の流哉

口傳にいふ後に置たる五文字なれば。上に切字有ても哉と留るなり

是は圖のごく。上は上にて辭とゝのひ。哉と留りたり。口傳といふほどの事はなし

たる ぬる つゝ あり なり けに ばかり が
是等の字いづれも切れずとあれど。たる ぬるはぞ
のや 何 よりかゝれば切るゝ也
へつゝは上へかへりて留ると。下に詞を含て切るゝ
と。てに通ふとながらに通ふとあり。いかにも切れ
ずへあり なりは七部集の所にいへば合せ見るべし
けに ばかり は元より切字にあらず。詞なり。是に
よらず。一切の詞動く詞と動かぬ詞あり。名は元ゟ
動かず 山川の類。山は山。川は川にて事すみ。切も
し續きもし。躰言にも用言にも續くなり。へ是は。
是はとばかり。こゝに意を含め躰言に續け。花の吉
野山と留りたり。余は皆是になぞらへしるべし定り
たる切字の外なり
へが 見しがといへば。見しがなの詞にて切なれど
我が君がといひては不切。是を一ッに たる ぬる
つゝ あり なり けに ばかり が 切れずとせしはあ
し

曉山集　元祿二年板本　　應々芳山著

下の卷百二十八丁メ。てにをはと言事
ひとりのいふ手爾於葉へ今ひとりの言。於にあらず葉
なり。又はにあらずばなりへ若て皆よろし皆あし。しら
ぬ人の爭ひ也。假名四十七字共にてにをは也。其内てに
をはの四字は。殊に近く活き侍る故に。四十七字をちゞ
めて呼て。てにをはと言。自の名となれり。又畧して。
てにはともいふ
予が考も是に同じ。荷田訓之が國語考寫本と言物に。
へてにをはといふとの考あり經緯終始の四言を一
語にして。へてにをはと名づく。てにをはは骨也。
經緯とは。アイウエオの五言をたてとし。アカサタ
ナの十字をぬきとし。終始は萬にあると。此四言一
語にするとは。タテの反て。ヌキの反に終始の頭
の。をはの二字を取て。へてにをはとし。又ハチ
の反ホ。ニテの反子なれば。てに をはを骨とせし
物なりと。よくこぢ付たれど。是は猶曉山集の說よ

しと思はる　仲縮家にはよく此やうなしひごをいふ物ぞ　又假名四十七字共に。てにをはといへるもよろしからず。別に條を立ていふべし

事替りてるいする切字の事

へ涼しへ嬉しは切へ涼しきへ嬉しきは不切へつへぬは切へつるへぬるは不切へ思はるへ恐るは切へ思はるゝへ恐るゝは不切。是に紛れて切れざるはへ替るへ溜るの類なり。

替る　溜る　の類切れぬとあれど切もし。つゞきもする辭なり。初學にもよく分るやうに。紐かゞみ詞の玉の緒に敎へられたるは。摧に闇き夜に挑灯の出たる如く。ひとつも誤るとなく。有がたき書なるを。夫さへ見ずて世に借上し。又潜に紐鏡。玉の緒。八ちまたを見ては。只譯らぬ〳〵といふ聲聞えて。解らぬ所をわかる迄に學びたるも聞えず。句をよみ文を作る人ゝは。よくこれらの書を譯る迄學ずんば有べからず。さて此翁のへはも徒へそのや何へこそと目安を三條に立。始て世に出しゝ時は。世の人さらにうけがはであしざまにのみいひふらし。書林に活(迹)れざるは我親の噺に聞たり。近き世となりては。彼紐鏡玉の緒。神佛の御作のやうに尊みて。風雅の道に遊ぶもの。机の側をつかの間も放たず。既に玉の緒板摩減(滅)先年再板せり

へあなたうとへあなたうとやへあな笑止へあな笑しやへあなたうと春日のみがく玉津嶋　の句を引てあなたうとやと。やの字いはぬ所に切たりといへど(ママ)かく遣ふ例はなし。前にある思はる　思はるゝ　といふ例とは違へり。たふとゝは一ツの詞なる物を是はみがくといふ縁に。玉と續け動かぬ詞にて留たり

神垣にふりて久しき松の雪

此句切字なしとて。久しゝと改めしよしなれど。宗砌もとの久しきとするかたよしと申されき

有也無也關に言。秋風にをれて悲しきといふ句の格と同じ。元より久しゝとはいはれぬ詞也　此句は久しやと正例に遣ひて難なし。翁の追慕の句も。秋風にをれてかなしやにてしかるべし。しきといふ詞はつ

ゞく格にて。ぞのや　何よりかゝらねば不レ切。余は
皆前の三書に引上いへば畧す

手爾波抄　文化三年板　不盡谷成元

此書は言靈(コトタマ)の學を元とし。五十韵を正し。古學より出て七部集發句附句により。てにはを教へたり。宣長翁のをしへ方とは異(コトカハリ)て。又一見識有一派の書也

さればこそひなの拍子のあなる哉

上にこそとあれば。けれと受べき句なり。然るを哉と言たるは。こその例と哉の例とふたつをひとつに遣ひたるものなり

かくいはれたるは聞えず。是は〱花すゝき大名衆を哉と祭いふ。嵐雪の句の前文に〱さればこそ鄙(ヒナ)の拍子のあなる哉神田祭の太鼓打音〔數足〕拍子さへあづまなりとや　とあるを取出。季立もなく　靡(ナノキ)の哉といふ引句に出されたるはをかし

第二例名の哉

欅の木の花にかまはぬ姿かな　翁
雲折〱人を休むる月見哉　仝
山吹のあぶなき岨のくづれ哉　越人

如此――引たるが。則下の哉へつゞくべきが其間に〱姿〱月見〱岨の崩と言事の狹(［illegible］)りたる也。是をもてもとは靡の哉が正例たる事を知るべし

靡の哉といふは。いはゆる浮哉といふかな。是を哉の正例といへり。〱かまはぬ哉〱休むる哉　の類也心は言。花にかまはぬ哉姿をといふ心也。さればかまはぬ姿哉とも詠べけれど。下上になすは深き理ある事なりといはれしは返てむつかし

細〱とごみたく門の乙鳥哉　怒雅
團扇うる侍町のあつさ哉　野坡

〱ごみ焚門〱團扇賣侍町。上の詞直に名につゞきたればしからず。打合詞をやがて哉に合たる例なりと可知

是は〱ごみたく門の乙鳥ナル哉〱侍町の暑キ哉　と言心にて。元は靡の哉を正例といはん爲に。かくいはれたれど是もつるさし。是等皆物の名よりかゝりた

る哉にて子細なし。

大峰やよしのゝ奥の花のはてナラン　曾良
五月雨にかくれぬ物や勢田の橋ナラン　翁

大峯やのや｜は。やの正義。かくれぬ物やのや文字は。歎息のや｜なり。是を〳〵中のやとして。疑のやの格にいれ下にナランと詞を含むよしいはれしはあし

あやまりてぎゞぞおさゆる鯆哉　嵐蘭

此句の遣ひかたよからぬ也。是はもとより下にかなといひたる事なれば。ぞの字は置るまじき事なるを。しひて遣はれたるは。哉の上に遣ひても苦しからぬ物と思はれけん。されど是は上古以來例なき事なれば。たとへ此事有ともゆめ〳〵遣ふべからず

かくのごとく書れたれども。成元が見誤にてぎゞぞにてはなし。本書にもぎゝうと書て有をぎゞぞゝ濁りを付ぞと有てかな｜はよからずといはれしは。大なる見損じ也ぎゞぞにはあらずぎゞう也鮧又鱯俗にぎゞう鰍と同じく山川にゐて。針の有物。よく人を刺。ゆゑに〳〵誤てぎゝうおさゆる鯆哉とあるを。う｜とそ｜とよく字形の似たれば讀違へて叱しはをかし

ほとゝぎす啼〳〵飛ぞいそがはし　翁

此句哥にはかやうにうち合せぬ事也〳〵いそがしきといはでは。正例にはあらざるなり

かくいはれたれど違へり。自他の事有。歌にも發句にも。我彼に暫くなり替りてよむは常のことなり。此句我彼に暫くなり替り。時鳥の上を察して。時鳥啼ゝ飛がいそがしさうぢやと察したる句なるべし。然るをいそがしきと定りたるぞの結びを付られては。我と彼。自他ひとつになりてとゝのはず。やはり祖翁の申されしいそがはしにてよく和合り此ぞはつむるぞなり

いづくにかたふれふすとも萩の原　曾良

いづくにかといふか｜の字。あたらぬことなり〳〵いづくにかといへば〳〵たふれふすべき〳〵たふれふすらん抔こそいふべけれ。もし又かくのごとく。たふれふすとも｜といはゞ。いづかたにといはではすまぬ事也

といはれたれど。かく言ばいづくにかと疑ひたる辭の結びには叶ひたれど。曾良が句意には叶はず。此

句意は曾良が行脚の身の上。もし倒れ死なん時は。いづくにもせよ萩の原に倒れ死なんといへる句なれば。かく定りたる結にて〳〵いづくにかたふれふすべき萩の原。又はたふれふすらん萩の原。かくのごとせよといはれては。萩の原が倒れふしたいといふやうに聞えて。曾良が萩の原に倒れ死なばやと願ふ意には叶はず。もし又たふれふすともといはゞいづかたにといはではすまぬことといはれたれど。是も聞えず。かくいへば〳〵いづかたに倒れふすとも萩の原はいやぢやといふ心になればなり。此句はとにかく曾良がともといはれしが叶はぬ也〳〵いづくにか倒れふしなば萩の原　又〳〵倒れふすならなどこそ有べけれ

山は皆蜜柑の色の黄になりて　はせを

此句發句のやうにはあらねども。附句にあらず。珍らしく遣ひ捨たるての字なり

是は伊賀の猿雖が家にて。興行有し五十員の内の附句なるものを。かくのごといはれしはいかにぞや。成元和學者にて俳諧師にはあらざる故の誤なり。是を思へば此附句を發句と心得違ひしたる例は。明和五年の板本伊賀上野簑虫庵が著はせる。蜜柑の色といふ集の序に曰。其頃も此句を發句と定め第三としるせる沙汰聞えければ。此懐紙の儘を梓(アヅサ)に上せて。祖翁の爲に此句の忠臣となり。同門の好士の爲に百世の惑を解んことをしかいふと桐雨がしるせり。初折は雪芝が執筆。二の折より支考執筆せしとなり

戊九月四日會猿雖亭

松風に新酒をさます夜寒哉　支考

　月もかくるゝ石垣のうへ　猿雖

町の門追るゝ鹿の飛こえて　翁

中略

二ノ折三句メ　道場の門のさし入だゞくさに　雖

　一里の船も腹のすきたる　望翠

山は皆蜜柑の色の黄になりて　翁

　日なれてかゝる畑の露霜

下略

寂栞　古寫本有 文化九年板本

春秋庵白雄著　拙堂増補

凡例に拙堂曰安永本寛政本二品有よし。予が持る寫

本は雪門蓼阿が持しを。若年の時寫し置たれば安永本なるべし。初學の輩見るべきもの。道に於て德をうるの書なり。今文化の板本を見るに大むね違はず。此書世に弘まりてよく人の柱となす書なれば。其内誤ある所を取出て珍重する人を驚かす

初丁に　おとろひや齒に喰あてし海苔の砂　翁

おとろひとはいはず。おとろへといふべし。書損とも思ふべけれど。下の巻九丁メにも同句を引ておとろひと書れたるはいかにぞや

補とあるは拙堂が增補せられしなり〵古哥を見るに本抄を見るはあし〻〵姿をあし〻といふにはあらず

など書り。是は詞の活（ハタラキ）きをしらぬ誤なり。あしあしき　あしく　と活てあし〻とははたらかず

手爾於葉の事

こは梧一葉の誤を傳へしものなるべし。てにをはのをの字だにしらで。人にてにをはの事ををしふるは。紙の橋を渡るよりも危（アヤウ）きわざ也

下の巻十四丁　浮句の事

椌木やうらがれの秋を立盡し

冬川や蕪ながれて暮か〻り

吟じてしるべし。立盡す。暮か〻るといはゞ子細なし發句の收り肝要は。切字といふも一句を收めんが爲也

かく難ぜしもあたらず。是は活詞を躰言に遣ふといふ一格なり。立盡すといふよりは。立盡し。暮か〻るといふよりは暮か〻りといふかた。丈高く聞ゆる物也。其例句を引て見す

水風呂の下や案山子の身の終り　丈草

初汐や鶴の羽白う暮か〻り　荷兮

余はなぞらへしるべし

きり〴〵す腕しびる〻添乳かな

宗匠なりをもせし人の句なり。もとより女の自の句ならば論なし。男の句ならば添乳いかゞ。他より見たる句といはゞ腕（カイナ）しびる〻は自なり。いづれ自他さへ辨へざる身にて人の師たるは

と笑はれたれど女の自の句を。男の女になり替りて作するは常のことなり。又男にても添乳せぬことはな

し。稚子（ヲサナゴ）を抱（カヽ）へ寐かす事は。我々が身の常なれば乳はなしともどりや已（オレ）が添乳してやらうなど眼前なれば。乳なくて男が添乳すると言は俳諧なるべし。難ぜしは利屈なり

同員外二丁メ　浮哉

月清し今宵は汐も滿るかな

浮たる故に上に切字を遣ひしなり

此いひ事もよらしからず。此句は二段に切たれど滿る哉を一句の切とす。は｜も｜のてにはに心を付べし

梅柳さぞ若衆かな女かな　翁

拙堂曰饒舌錄に古寫本に有と僞て〵梅柳さ゜も若衆哉女哉と出せり。梅と柳を若衆と女にたとへたる意にて。さ゜もと作り替て。人をたぶらかせり。此句は延寶天和の吟なり

｜さもと直せるはあしけれど。句の聞は予も是に同じ

此句は。其頭の風俗をよく述たり。其時代は人派手にして。伊達（ダテ）なる形容をなし。途中にて雨などに合たるとき。傘もさゝずぬれながら歸るをはれとせしなり中略取かき衆道大に流行。故に梅咲柳みどりせしを見て。嘸若衆や女の立派にて物見に出るならんと其世のさまなり中略さぞといふ詞にて思ひやりたるおもむきを重ねしなり

此說｜さぞといふ詞を推量の詞に取たるなり推量とはさぞ暑（カツタデアラウ）さぞ寒（カツタデアラウ）といふ則推量也　春秋庵が句の聞かくの如し。前に言る如く。梅咲柳みどりせしを見て。さぞ若衆や女などの立派に物見に出るならんといふ事ならば哉｜と留ては。てにはとゝのはず。故に此句。てにはとゝのはぬとて。饒舌錄の外にもあれこれ人のいふ事也。そは皆さぞといふ詞を推量の詞にのみ取たる故の事なり。嘸といふ詞。もとはそのやうにぞといふ詞也。さもは其やうにも也。後に轉じて推量の詞ともなれるよしは不二谷が考おけり引哥に〵あづま路やはまなの橋に引駒もさぞ待（ソノヤウニテ）わたるあふ坂の關〵歸るさをよしや恨みじ春の雁さぞ古（ソノヤウニテ）里の人も待らん

轉じて推量の詞といへど。きつと推すべき故のあるか。又はこなたに引くらぶるものゝ有て。夫も此や

うにぞあらんと知る心なればこそ。饒舌録の方聞よしと思はる。扨此句のてにはのとゝのひは梅柳さぞ（ソノヤウニゾト切テ）若葉哉女哉　と三段に切れて　留りの哉を一句の切とす。よく遣ひ給ひしてにはなり。

同五丁メに　饒舌録といへる書は。詞の玉の緒といへる哥のてにはをあらはせし書ゆ其まゝ俳諧のてにはに無理に合せし書なり。詞の玉の緒を用ひざる和歌者流もあり。いはんやこゝを以て俳諧を極むべけんや

かく言れたれども。上の巻二十二丁に古人の語をつみて。和哥のてには俳諧のてにはとてふたつなし。是日本のてにはなりと書れしはいかにぞや。是は尊とき遺語也

腰折の哉

何鳥の卯か落し野松かな

何といふ字をかと受てさて哉と留たり

何といふ字をかと受て哉とは留らず。何鳥の卯か落しと。何の字を過去のしにて結び。野松哉と二段にとゝのへり。是てにはの定なり

捨や

としの暮女のめがねすさましや

如此上にてにはなき五文字を居へし。上に切るゝ心あり

すさましやは切やなり。すさましと切たる下に置やなればなり。てにはなき五文字とは何事ぞや

口合のや

是や世の糞に染らぬ古盆子　翁

吟じてしるべし。口合のや。切字にもなるに限らねど此句は一躰の治り有故に切るゝ也。先にも出せし如く。口合のやは句によりて哉とも留るなり

是や世のゝやは疑のやなり。染らぬと不のぬにて結たり。如此定りたる格をしらぬ故に。此句一躰の治り有故。切るゝといへるは。どこにて切たるやらしかとしらぬやうの出格（カキザイ）なり

五合帆に蚊もあらばこそ沖の月

是はいひ放つ詞にして。こそを切字にせしなり。これの差別にあらず

此をしへ殊によろしからず。抑こそといふ切字はな

しこそとのみあるは。こそに打合辭を省きたる物也らん留は上に疑の詞を置べし。さなくては留らず

アラノ第三
夕霞染ものとりて歸るらん　冬文

此句上に疑の詞なし。染物取てやとやの字を句中にこめたる也 哥には へ久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん。しづ心なく(イカデ)花のちるらんと(イカデ)の詞をこめたる哥なりと。哥の傳にも見へたり。然れば。上にうたがひの詞を遣ふに子細なし

かくいはれたるは。らんの事にくはしからぬ故の事也 らんと句を留るに。上に疑の詞なくても遣ふなり らんは察する詞。疑の詞とのみおもふは違へり。桐の一葉 らんの所にいへば合せみるべし。此句は。夕霞染物取て歸るであらうと察したる句也。又染物とりて歸る哉と。かなにも通ふてには也。是に久かたのゝ歌を引るは意違へり。此哥は花のちるらんと。のよりかゝりて。らんと留りたり。らんと結びたれど其事を疑にはあらず。然る故をうたがへるてにはなり 故に是も花のちる哉と。かなにも通へり。然る故を疑とは。花のちる事は疑にあらねば。花のちるかなと言意なるを。其やうに花のちる故をうたがひて。何とて花のちるらんといへるてにはなり。夕霞の句とは意たがへり

饒舌録　文化元年板本　元木阿彌著

此抄に上の五文字に置。冠のやともいふやの字。へ明月や へ白雪や など發句の題より受るやの字 又名よりうくる へ君が代や へ曉や などの。や文字を詠のやとし。此や文字を一向に切れずといへるは違へり。や文字はくさぐさの譯(ワケ)あり。有也無也の閑。夕皃やの条にも。又此次にもいへり

十八 灌佛や日出度事を寺參(ス)　(支)反考
十九 君が代や筑摩祭も鍋一ツ(ナリ)　越人
仝 あかつきや灰の中よりきりぎりす(イツ)　淡々

かくのごとく。動かぬ詞にて留りたる下へ(ス)(ナリ)(イツ)と。一字入て手爾波合するを。十八のてにはといひ。二

字を十九。三字を二十のてにはといふとは古人の説もあれど弁べし

かけはしや命をからむ蔦かつら　翁

是は蔦かつら命をからむと切たり

かくのごとくいへるはよからず。棧やのや文字はやの正義。命をからむにて切もするを直に躰言へつゞけて動かぬ詞にて留たり。かくの如蔦かつらを中へやり。命をからむを下へやりて＼棧や蔦かつら命をからむにて切たりといへるはあし此句自他とゝのはず。別にいふべし

六月や峯に雲おくあらし山　仝

前に同じ。爰にや文字の正義をいはん。棧やの句は棧に。六月やの句は。六月はとしてもよからんなれど。棧や　六月やとや文字を遣ひたるは。棧は木曾の棧にて。千仭の深き谷の上に。藤蔓などもて。からみ掛たる橋なれば。命をからむと作せしは余の所にあらず。此木曾の棧に限るといふ。あまたの詞をやの一字に籠たるてにはなり。是や文字の正義なり＼六月はといふべきを。六月やとしたるは五月にも七月にもあらで。六月に限るといふ事を。やの一字にこめて歎息也。此抄にもいへる如冠のやにて切るゝといふにはあらず。今の俳師かくのごと遣ふや文字を皆切るゝと思ふはひが事なり。もとやの字は切字にあらず。歎息したる所にて切るゝ也

元日や神代の事もおもはれつ　守武

此句は諸集に。おもはるゝとあるを。此抄には。おもはれつと直して入たり。思はるゝにては切れざるにより。例の寫本にありとして。思はれつとせられしも中ゝにあし。やは前に同じ。此句はおもはるゝ事よと詞をふくむ意。何のてにはにても。かくのごとく。續きたる辭の下は。詞を含といふにはあらず。上へ返るも有。よく〳〵辨ふべし

玉の緒の＼そのや何の。のゝ字の事をいひて

春の雨日和になれば風のふく　宗夏

かくのごと引句を見せたるはのゝ正例なれど

京筑紫去年の月とふ僧中間　丈草

鳥籠のうきめ見つらん時鳥　季吟

此のは〵そのや何ののにはあらず。徒ののなり

梅一りん一りんほどのあたゝかさ　嵐雪

變格といひて出したれど。變格にはあらず。うごかぬ躰の詞にいひなして遣ひたる一格なり

山路來て何やらゆかしすみれ草　翁

此句てにはとゝのはぬといひ寫本に有とて〵何かゆかしきと直し見せられたるはよろしからずやはり何やらゆかしにてとゝのへり。何やらは何とさすべき物なき故に何やらなり。結びにはかゝはらず。何やらは何やらんなり　俗語なり

朝霧や宮より神も出るやうに　朋水

霜月や鸛のイならびゐて　荷兮

二句とも切字なし〵神も出るやうぞ〵ならびゐつともありしを寫し誤たるならん

といはれしはよろしからず。句意は朝霧やと言て。題より受たる歎息のやなり。さてかく朝霧やと言て。すさまじき霧のもやうを。宮より神も出ますやらんと朝霧の註したる句作なり歌には常に言事。發句にも其題の〵梅さくや〵明月やなどいひて。其もやうを思ひ〳〵に註するは常の事なれど。此註するといふ事は。俳師の教へに言ざるとなれば。いかにと思ふ人もあらんなれど註したるが常に多き物なり。是一ツの句作の目安なり。朝霧の句のてにをはの事は。宮より神も出るやうに見ゆと辭を含て聞もよし。又神も出るやうに見えたまふと一句心に添見るもよし。發句は字數すくなければ哥の例にならひて。かくので作るは常の事ならまし總(た)てに留て留は。上へかへると下に詞を含と二品あるは。てにをはの定たる法なり

霜月やの句は直されたる如く。居つともいふべきを。骨折て居てと置れたるてにはなるべし。それを又ゐるつと直されては。てにはの骨折見えずなりていかにぞや。此辭(テニハ)の骨折。木阿彌には見へざるやうにおもはる。此事七部集の所にくはしくいふべし

嶋むろに茶を申こそ時雨哉　其角

此人數船なればこそすゞみ哉　仝

此句も寫本には〽時雨なれ〽すゞみなれとありて。此方よろしとあれど。此抄にいふ寫本といへるは僞なり

此二句にはこその下へよきと。打合の詞を含てかなと留りたる句意なるべし。さなくては社と有て哉と留る例なし。欲得と有て。現在のきと結例は。古今集このかたにはなしとあれば好みてすべきにはあらじ。されど發句は字數すくなく不自由なるともあれば。ゆるす方もあらんかし　万葉に〽玉釧卷ぬる妹もあらばこそ夜の長きもうれしかるべき〽なにはびと蘆火たく家はすゝけたれどおのが妻こそとこめづらしき

袖にこそちぎれ花折野分哉

されぱこそ花におもひし野分哉

〽したにこそ人の心もうつろふを色に見せたる山櫻かな

是は下にこそ人の心もうつろへと結ぶ意なれど下へ結びながらつゞくるには。人の心もうつろへをとは。いひがたければへをふに活かしをと受て。下へ續たれば。下に哉ともいはるゝなり

かくのごとく云れたるはあし。是は下にこそ人の心もうつろふをと結び。下は徒のかゝりにて哉と切たり。此をはものをのをなり。玉の緒にもかくのごと有を。木阿彌の目損ひて出されたり。前にもいふ上の〽明月や〽白雪やのや文字。詠のやとして切れぬと心得違ひせられしより。此書を見て初學の輩大に迷ひし人有よし。此書所〳〵里語と目安を付て。願ひのなんは〽畢ぬのぬ　ぬる　ぬれの里語はなど元阿彌の書れしはいかにも初學の人には。大なる德をうることにて。雅言を俗言に直し。手早くおぼゆるの術なれど。是は今より昔六十年ほど前に。かざし抄。あゆひ抄といふ書に。京の不二谷が始ていひ置れしを。元阿彌が生捕にし。詞の玉の緒をよくも見わかで柱とし編たる僞書なれば。よき所もあしき所も纔ある書なり。

明月や北國日和定めなき　翁

是はもやの意の疑のやにて下のきは結也

かくいへどさにはあらじ。此やは稱歎のやにて。なきは前にいひしがごとし

じねん此藪ふく風ぞ暑かりし　野童

本書には。じねんこのとかなにて書り。笠といひて竹に病の付て枯たるを言り。皆赤葉に成ていかにも暑き姿なり。然るをじねん此と書ては自然と此藪ふく風があついといふ事になりて。わけも分らず。發句にもならじ

かくの如人の誤をしかりながら。我もかく誤りしは。成元がへ神田祭へぎゞぞへみかんの色と同罪なるべし。かくいふ我臺褻抄も又是に同じ

七部集の內てにはとゝのはざる發句

集中へ春の日はハ。へ炭俵はス。へあら野はア。と句の上に印しつ。△印は切るゝ所。文字を□此中に書たるは本文てにはのとゝのはぬ所。片はらに細字もて書たるは。かくあらましかはとの意

いづれの俳書にもや文字を切字とをしへしよりやとだにいへば切るゝと心え。やといはれぬ所にやと遣ひ誤る事多かり。やはへ歎息のやへ疑のやへ切や。其外くさ〴〵のや文字有て。今の世に聞ゆる人の發句にも誤り多く有事ぞかし。何と疑ふ物にうたがひのやを遣ひながら。疑の意にならぬや文字の句作あり。又治定したる事を自も治定しながら。句作には疑の意のや文字を遣へり。是今人の誤ならず古人の誤なり。古人の誤擧るにいとまあらず。今人の誤はいふ迄もなしわづかに七部集の內や文字の行ちがひたる所をつみ出してこゝに擧

簇道具の片〳〵やうき玉祭　去來

疑ふ事なき物を疑のやの遣ひざまなり。ゆゑに不ㇾ叶。和合ㇾ此類いくつも有。此ぞは疑のぞにあらず。結ある。中のぞいふぞなり

一袋是や鳥羽田のことし麥　之道

鳥羽の麥か。何所の麥かはしらねど。大かた鳥羽の麥であらうと察したる句ならば。是やといふ格なり。此句はさにあらず。前書に麥の粉を土産にすとあれば。かねて鳥羽の麥としりてゐる麥なれば。是やと

いひてはとゝのはず。是ぞといふべき辭なり。前のぞとおなじくがに通ふぞなり。一無是が鳥羽田の麥といふ句なり

サ　今は世を頼なけしき[や]冬の蜂　且藁

や文字居らず。つむるぞといふ。ぞ文字の行べき所なり。前のぞとは又異なり。是を見てやとぞの行ちがひたる事を辨ふべし

ソク　流れ木の根[や]あらはるゝ花の瀧　如雪

ス　麥跡の田植[や]おそきほたる時　許六

ア　喰物[や]門うり歩行冬の月　里圃

やの字居らずかなり。是を中のかといふ。結びて切るゝかなり。皆おしあて問ふかなり。喰物やの句疑のやとしたる說あり。然してはやの置所あし。かにて難なし。おしあて問ふなり

サ　山鳥のちつとも寐ぬ[や]峯の月　宗比

ス　けうときは鷺の栖[や]芸のみね　蔬市

サ　三葉ちりて跡は枯木[や]桐の苗　凡兆

ソク　その蔓[や]西瓜上戸の花の種　沾圃

此やは何れも切れず。又やの字。遣ふ所にあらず。常に人のよく遣ひ誤る所。皆かくのごと。切るゝかもじなるべし又是に二品有。後編にいふべし。是に似て正しきはアへさみだれにかくれぬものや勢田の橋。是は切るゝ稱歎のや也。前のやと紛れ安し抑疑ふに。やと疑と。かとうたがふとのふたつはいとも紛れ安し。皆定りたる格あり。今も古も高名なる人の句ゝを見るに。此差別なく遣ひ誤る事の多きは。扨も〱杜撰なる事ぞと驚かしおく　ソクへ青柳のしだれや鯉の住所　一吼　是は正しき疑のやなり。疑の結び有は。切るゝやと紛れねば擧ず

サ　芭蕉葉は何になれと[や]秋の風　路通

何になれとやといふ詞とゝのはず

ア　旅寢して見し[や]浮世の煤拂　はせを

やの字居らず自旅寢して世の煤はきを見たる句ならば。見しぞとすべき格。人に問ふ句ならば見しかなるべし。見しやと疑ふすぢはなき句也

ア　簑虫のいつから[見るや]歸花　昌碧

いつから見るやといひては。てにはとゝのはず

、鶯になじみもなきや新屋敷　夢ゝ

新屋敷にて鶯が人になじまぬといふ心ならば鶯のなじみもなきかといはねば叶はず。人が鶯になじまぬといふ心ならば。鶯になじみもなしやとせねばかなはず。なきやにては切れず。總て如此見しや　見ぬや　なきやと續く詞より受るや文字は心すべし。皆疑の中に置やなればなり。

ス　秋風に蝶やあぶなき池の上　依ゝ

是も疑のやの扱にてとゝのはず。秋風にといはゞ蝶のあぶなしとすべき格なり。

ソク　夕立に傘かる家や眞一丁　圃水

前の句に似て異なり。やの字おらず。切もせず夕立やとして論なし。いはゆる稱歎の切やなり

ぬけがらにならひて死ぬる秋の蟬　丈草

死ぬるにては切れず。歎息のやなるべし

ヘ　餅みかん吹革祭やつかみ取。かくやの字を遣ひ誤れることむかしも今もいと多し此集にも

、小米花奈良のはづれや鍛冶が家　万乎

發句に切字なくてはかなはぬ事と思ひ。やとさへいへば切るゝと心え。何の差別もなく入たるやうのや也此やの遣ひざまよく有事也。たとへやの字にて切るゝとても。此所にて切ては句とゝのはず。續かねばならぬ所也

サ　そよ〳〵や藪の中より初嵐　且藁

ア　ちら〳〵や淡雪かゝる酒強飯　荷兮

此やもかなはず是に似てよきは

ア　きぬ〴〵や余の事よりもほとゝぎす　除風

ソク　折ゝや雨戸にさはる荻の聲　雪芝

ア　稚子やひとりめしくふ秋の暮　尙白

題に詠ずる物下る有ながら。上の五文字一句の要とする所なれば。や文字よく叶へり

ソク　すゝはきや御數一まいふみくだく　惟然

、松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　はせを

ア　ほとゝぎすどれから聞ん野ゝ廣さ　柳風

、何となく植しが菊の白さかな　巴丈

活く詞を躰言に遣ふ一格。句のたけ高く聞えて。天然なる物なり。くはしくいはゞ。すゝはきに御敷一まいふみくだくといへば。何故にふみくだく事ぞ。ふみ砕かねばならぬやうの事にも聞ゆ。依てふみ砕く哉ともいはるゝ也。砕きとすれば若者の元氣に任せ。俳に砕きしか。怪我に砕きしにもなる。又句により。砕く。へばりつく。とせねばならぬ所も有

ス へ竹の子や兒の歯ぐきのうつくしき　嵐雪　此句など。うつくしさとは遣はれず

ソク 白雲や垣根をわたる百合の花　支考

白雲の垣をわたるやと切るゝやならでは不レ叶。又垣根の根の字も作には劣て聞ゆ。是非垣根といはんとならば。白雲の垣ねをわたるといはでは

サ 馬かりて竹田の里やゆくしぐれ　乙州

是もよく人の遣ひ誤るやなり。此や切もせず。又やの字も居らず。

ア 連立や従弟はをかし花の時　荷兮

此句は連立ながら従弟はをかしといふ句なれば。て文字なるべし。ながらといふをての字に替て遣はねばならぬてにはなり。てはながらに通ふ

右行ちがひたるや文字の系有へ合すべし。猶くさ〴〵のや文字集中句に見えざるは後編にいふべし

ハ 萱草は随分暑き花のいろ　仝

もといふてにはにて。此外に貴兒凌霄百合などいろ〳〵暑きさまの花有事を余情にこめしものてには也。其中より萱草を見付出したる手がら有べし

ハ 日陸の松とは盡ぬ御代の春　利重

いひたきとあれど御代と有にはとかりて畧

サ 鶏の聲もきこゆる山ざくら　凡兆

切字なし。桐一葉にいふ所なれば畧す

サ 鼠ども春の夜あれそ花靫　半殘

此てには前にいへば合せ見るべし。是にてはとゝのはず

ア ちるたびに見ぞ拾ひぬけしの花　吉次

、 物いはじたゞさへ秋のかなしさよ　舟泉

しかして上へかへるてにはなり

、ねぶたしと馬にはのらぬ董草　荷兮
續く詞なるにより。然してには董草が馬にのらぬといふやうなり
サ 里人の臍落したる田にし哉　嵐推
なき事を有やうにいひたるは聞へたれど。しかしては詞たらで哉と留らず。里人の落せる臍か田にしはといふやうならでは
ア 青くとも木賊は冬の見物哉　文鱗
、月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑
、あの雲はいなづまをまつたより哉　はせを
ア 杜若生ん繪書の來る日哉　釣雪
サ 藪の雪柳ばかりは姿哉　探丸
皆かなとゝのはず

同集中　てにはとゝのはぬやうに聞えてさにあらぬ句〻

や文字のくさ〴〵
ア 行人や堀にはまらんむら薄　胡及
、梧の葉やひとつかぶらん秋の風　圓解
、撫子や蒔繪書人をうらむらん　越人

、桶の輪やきれて啼やむきり〴〵す　昌房
うたがひのやなり。切るゝやにあらず
ソク 松の葉や細きにも似ず秋の聲　風國
やはのとも有たきやうなれど。秋の聲をつよく聞せんとてのやの正例也。ずは別格也　ずして　ずけり　恨みずや抔遣ふ。言結るずは又違へり
サ 夜神樂や鼻息白し面の内　其角
ソク 鷄頭や雁の來るとき猶赤し　翁
白しは白き。赤しは赤き。とも有たきやうにおもはるれどさにあらず。霜夜のしん〴〵と物寂たるに。神樂の面の息見ゆるがごとし。是句の魂なり。白きと遣ひては何をなさず。上のやは。くつろげたるやにて。やの正例なり。夜神樂にとせば是も何をなさず。けいとうの句も是に同じ
ソク 明月や灰ふきすてる陰もなし　不玉
、明月や遠見の松に人もなし　闇水
切字二所有やうに思はるれどしからず。かくのごときの句作。常ゝよく有事にて。今も点取などの懷帋を

見るに。なしをなき。赤しを赤き。など加筆せし判者もあれど。そはてにはにくはしからぬ故の事なり猶次の條にいふべし

、初雪や門に橋あり夕間暮　其角

是も切字二所有て。ありはあるとせねばならぬやうなれど。ありといふも切字にてはなし。詞なり　ありとりの字に引れて。有（りらんれる）無（きしけれく）と活て一ツの格となりたる物なり。其角はよく此事を知て門に橋ありと手づよく遣はれしなり。是に紛れて前の白し赤しは又異なり。白は白。赤は赤にて語をなせばなり。有はあと斗にては語をなさず

サ　大比叡やはこぶ野菜の露しけし　野童

、七夕やあまりいそがばころぶべし　杜若

前になぞらへしるべし（しきくのはたらき又一格有　後へん又書時にいふべし）

フ　霜月や鶴のつくぐ並び居て　荷兮

此ゐてはつむゐてにて切也。ゐつといふべきを。ゐてと活したるなり。ての活てつとなる。又重ねてつゝともなる。つはての居たる也。是等は秘傳口授とやらんいひてもよき所ならんか。一ツいふ事をかくして遣ふ。てには此外にも數々あり。其かくれたるをしらで。表にあらはれたる所をのみいひ。彼是理非をいふは。童の如しと古學家にて笑へり。されど荷兮も此意もて作られしかはしらず

ア　凩の松の葉かき（馬ふんかき）と連立て　野水

是も前のてと同じ。意は連立つといふ句なるべしさなくては切るゝ所なし

サ　風流のはじめや奥の田うゑ哥　翁

ソク　無菓花や廣葉にむかふ夕すゞみ　惟然

中のやといふ一格。切るゝやと思ふべからず

、春の野やいづれの草にかぶれけん　爲紅

ア　野の宮や年の且はいかならん　扑什

サ　佐保姫や深井の面いかならん　良彈

野の宮のやは正例なり。野の宮故元日にはきつと元日らしき事があるか　いかならんと推したる句也　佐保姫の句は是に似て少し違へり

ア　菜の花や杉菜の土手のあひぐに　長虹

此類は下に詞をふくむ意

ソク 行としや親に白髮をかくしけり△　越人

、(連)蓮翹や其望の日としをれけり△　胡及

行年に蓮翹も。ともにすべきやうなるを。やの正義を立かく遣へり。やの正義は切の事にかゝはらず一ツのてにはなり。されど此頃は此教へ見えず。やと切ていはゆる二段切といふてにはにして見れば。行年の方はよけんなれど。蓮翹の方はいかにぞ聞ゆ。傳なくもかく變格にてとゝのひしは自然なる物也

ア 初雪や△おしにぎる手の奇麗也　傘下

ア 永日や△鐘つく跡もくれぬなり　卜枝

二句とも歎息のやにて切(マヽ)たりなりは言放したる輕きてにはにて心なし。歎息のやとて。俳諧の教にいふ（いたましや　うらめしや　はかなや／かなしや　物うさや　なさけなや）此類のみ歎息と思ふべからず。嬉しきにも面白にも感心したる時の事を歎息といふ。歎きの事のみにはよらず。かく同じ事幾度も言を。うるさしとなおもひそ。戀といふ事にも是に似し事有。戀の栞にいへば略。此事我友老佛に語き。

不請こは古學を學びざるが故なり

、物好やむかしの春のまゝならん△　越人

サ 春雨や屋根の小草に花咲ぬ△　嵐雪

是はくつろげたるや也。切の論にかゝはらず

、松嶋や△鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

是も歎息のやなり。名所のやといふ名もをかし名所にあらでも遣ふものを

右や文字のくさ〴〵是になぞらへしるべし。此外にもよきとあしきとあれど。うるさければ不レ擧（余は後編又講談にいふべし）

ス これかへす道も師走の市のさま　曾良

ソク 田植哥までなる兒のうたひ出し△　重行

ア あゝ立たひとり立たる冬の宿△　荷兮

ス ほとゝぎす啼ゝ風が雨となる△　利牛

ソク 職人の帷子着たる夕すゞみ△　土芳

此のはがに通ひ定たる結びにて切るゝ也

ア 肩つけはいくよになりぬ△長閑也　冬文

七卜大鏡田津守の哥（としふれど今もかすしてわ／いくよになりぬ住吉しまひめ）の浦に此うたの詞をつみしといふ　さも有べし。てにはの事は圖の

ア　ぞく二重（變格にて）にとゝのへり（此なりはにありのなりといふ俗に長閑ぢや 長閑であるといふ心也）
舞姫にいく度指を折にけり　荷兮

同大かゞみに元日より白馬　踏哥　端午　豐明と五度也　爰にて治定したればけりと留りたる物なり。古往今來珍らしきてにはにて。中〻凡慮の及ぶべき所にあらずと書れしは。此作者てにはにくはしからぬ故のとなり。古學にては變格として常に遣ふ珍らしき事にあらずをしむらくは此句。舞姫にいくたびもと。もの字あらば。いく度と察したる詞は濟て。五節の事も慥に含めり。是又字あまりの正例也。凡慮に及ばぬといふ程のてにはにてはなし

同集中定りたる切字なくしてとゝのひたる句

サ　薮ならぶ裏は乙鳥の通ひみち　凡兆
、　うき友にかまれて猫の空ながめ　去來
、　欄干に夜ちる花の立すがた　羽紅
、　おちつきは魚屋任せの櫻狩　利牛
ソク　伏見かと菜たねの上の桃の花　雪芝

ア　澤庵の墓を別れの秋の暮　文鱗
、　門松を賣て蛤一荷ひ　內習
ソク　余所に寢て團子の夜着の年の暮　支考
ス　踊べきほどにはゑふて盆の月　李由
、　鋸にからきめ見せて花椿　嵐雪
、　なじませて鶯一羽としの暮　知月
サ　常齋にはづれてけふは花の鳥　千那
ア　すびつさへすごきに夏の炭俵　其角
、　上下のさはらぬやうに神の梅　昌碧
、　からながら師走の市にうるさゞい　越人
サ　雜水の名所ならば冬籠　其角
、　待中の正月もはやくだり月　揚水
ス　みな〳〵に咲揃はねど梅の花　野坡
サ　此暮も又くり返し同じ事　杉風
ア　曉をむつかしさうに啼蛙　越人
、　いそがしき春を雀の柿袴　洒堂
ア　柿のなるもとを子供の寄處　利牛
ハ　霜寒き旅寢に蚊屋を着せ申　如行
ア　玉敷の衣かへよとかへり花　荷兮

右に擧たる句ゝ定りたる截斷字なし。上のかゝりて。にをはばとどものよりかゝり。下は動かぬ詞にて結たる物なり。のよりかゝるのゝうち。ぞに通ふのあり。がに通ふのあり。にはのに有。物をのをあり味ふべし。皆徒のかゝりにて下に請る切字なければ。是等を元祿のをしへには玄妙　心の切　無名切　中の切　挨拶切。に回しを回し或は天ぢやの地ぢやの挨ぢやの拶ぢやのと言て用に立ず迂遠なり。皆うち捨て。安き古學にならひ給へかし

ア　袖すりて松の葉契るけさの春　　梅古
、　さまぐの過しをおもふ年の暮　　除風
ス　初雪にことしも袴着て歸る　　埜水
ハ　ちり椿あまりもろさに續で見る　　野披
、　百姓も麥に取つく茶摘唄　　去來
サ　人に似て猿も手をくむ秋の風　　珍碩

是等の句前に似てさにあらず。定たる切字あり敎にいはざる所なれば其一二を擧

いろは四十七字皆切字といふ說

古人曰。いろは四十七字皆切字なりと。古人は誰去來抄曰先師曰。切字に用る時は四十七字皆切字なり。蓼太が雪の薄に幽齋法印。白雄寂栞には許六云とあり。こは古人の說あるを。許六のいはれしなるべし。支兀がいろは切には羽官と有。羽官何人かしらず。此事あれこれの書にも見え。予も若き時より聞しをながら。いかにおもひめぐらせども。あまりあらきをしへにより用にたゝず。たまく老たる人に聞ば。遣ひやうによりて皆切字ならざるはなしなどゝいひて蒙朧たり。今は昔三十年程跡。切字四十七字辨といふ物有。おのく引句を擧。折本にし書肆に出たり。今求るにさらになし。近頃それに類し。いろは切といふ物あり。此書わけもなきひが事をのみ書載たり。是等の書爰に取出いふべくもあらねど。四十七字皆切字といふ事を頑に思ひ信じて。かくのごと板本にさへ出したれば。初學の人ゝ天疎のたれかれ。十人に一人は。是等の事に心迷はさるゝもあらんかと思ひて

書出たるなり　借いろは四十七字。皆切字なりと教へしを麁(アラ)きをしへと言下す故は。五十韻五十字の内　い|　う|　え|　の文字ふたつ宛あるを一ッ取のけ。　高野大師の作りたまふ。いろは四十七字殘らず切字といへど。切字にはあらず　かな|　もがな|　けり|　らん|　まし|　のごく。二字三字組て切といふにもなれり。又一字にて。く|　す|　つ|　ふ|　む|　る|　や|　か|　ぞ|　なども。く|　は咲　す|　は任と。上の活きにより　て切となる。や|　か|　ぞ|　なども。上のかゝりによりて切となれば。一字にて切るゝといふ文字なし。四十七字皆てにはといはゞ麁(アラ)き内にも論すくなからん。此てにはといふうちにも。あ|　い|　う|　え|　お|の五文字はてにはに遣はず。遣ふのは。い|　え|　は。(マヽ)や行う|はわ行也。又わ|　る|　ち|の三字も遣はざれば。てにはと言も四十七字の内彼(カレ)これ四十二字には過ざるを。皆切字と古くいひ傳しよりあしといふ也　然るを皆切字とかたくなに思ふにより。さま〲のひが事も出來て。板本になりたる其始に。是も手爾於葉と書誤る。支兀支考が門葉ならば。支考は古今抄に手爾遠波とかゝれしものを

へいろは切に羽官曰。伊呂波四十七字ひとつとして切ざるはなしと有により。句に作りて見せたるは

イ　ちるに咲花の文臺。二見浮

ロ　夜をそゞろ。身に初秋の天津風

ハ　黑かちも實。角(カ)刀取の身のこなれ

ト　夕立の物くづるゝと。見えてゆく

ル　うきも春。めでたの空を雨に風

ワ　我三ッ輪ぐみも果さぬ氷風

ウ　草庵に搗米五斗。としの暮

エ　もまれ〲裂る松がえ。ちるふゞき

オ　緞にらん横にうゐのお。窓の秋

マ　走れ馬。麥刈空の片くもり

かくのごと。文臺のい|の字。春のる|の字。くづるゝとのと|の字。松がえのえ|の字に。○印を付。是を切字とせば。いかにも四十七字皆切字ならん。中にもをかしきは。うゐのおのお|の字。此字外に切かたなかるべしと傍註せり。まの字は不切。走れのれ|の字の力にてま|の字切字になると註せり。松がえ　此え|誰どのへなどいふへなり。へと

通ふといへり。つたなきにもかぎりの有もの。かばかりの事は。彼支兀が俳友の内にも誰か有て。早く絶板すべし抔諫言(イサメ)も有べきに思へば彼連も皆心よしと見えたり。かく思ふなかに大宗匠と名乘老人此書の跋に曰

いろは切は支兀が切字をあらたに句作せし也是はかの四十七字皆切字なりとあるにもとづきての巧言と見えたり。いづれも初心の爲には錦囊(キンノウ)の賜(タマモノ)開卷有益の先言見ずんば有べからず

と書添しはいかにぞや。此外にも書くにいひたき事あまたあれど。いかに我門の初學の爲に道を敎へんとて。我に敵をもとむるやうになりてもと筆をとゞむ

俳諧茶話

顧言

刻俳諧茶話序　［惠葊］

俳諧者小技也。然且有道存焉。詩也歌也連也俳也、雖各異其名而其致則一也。是故四者皆至其精妙之域、則感鬼神動天地矣。無他晋子所謂句中之魂吏之能然耳。譬如風雲月露及人物禽獸山海艸木無一而不俳諧中之物也。今人動輙以俳諧爲戯玩、遂至僻慮邪思而隋落于俳之魔道。悲夫。我東杵顧言先生、盖刀圭之暇、値雪曉則嘯其噎〻、値花晨則吟其郁〻。或誦月之淸輝、或詠霜之嚴肅、賦煙霞歌雲霧頌雨風。而懽欣憂苦愁悶悲傷發之言舒其情。然皆不失蕉翁之遺韻。且以其道諄〻諭其門人。吾儕從而肆之輯成一卷、名曰俳諧茶話。今又刻之以省謄寫之勞云。

嘉永甲寅四月佛誕日

可麿齋一柯謹再書　［保義］［一葉卿］

雪のあした月の夕毎に師が庵を訪ふて、誰彼が書集めし茶話を、こたび同門一柯の上木するになん。こはもとより一時の問に應ぜしまでの事にて、猶あたらぬ解の多かるべけれとて師はゆるさゞれども、壁に耳あれば（二字闕）ら高野の餘所にもれて、人〻が貸してよと望まるゝも詮かたなし。やがて魯魚のあやまりも心苦しと、ひそかにかくははからひしなり。かの茶てふものは、よく人の渇を止むるなれど、あながち茶のかはきを止むるにはあらじ。堀井の水のよければなり。茶話も又よく俳諧の渇を止めんや。是茶話の渇をとゞむるにあらず、蕉翁の眞流を汲めるによれり。さはいへど、人の口にはあふや否や。我もしらず、師もしらず。後の陸羽を待んとす。

嘉永七年彌生

不物菴許一述

俳諧茶話

東杵菴顧言先生口述　門人筆記

一問云、當時蕉門・雪門・其角座、其外にも一派〳〵有て各〻自門他門と申事、いかなる趣意にや。

一荅、詩ハ唐に比し明に擬し、あるひは宋元に比する、作者詩家の常也。皆その繩墨を出る事あたはず。我が俳諧に至て又しかり。貞德にあらざれば必ず宗因を稱し、芭蕉にあらず其角也と稱し、伊勢・美濃・雪門・杉家・葛飾と一派〳〵にわかれたれど、他門はしらず其・嵐・杉・素は蕉翁の風を學べるものなれば、伊勢も美濃も同じ流れの水とおもふに、門戶の別〳〵になりたるは、その人〻蕉翁沒後に、おのれ〳〵が見識を立て教えしまでの事にして、別に趣意あるにはあらず。されど其門人流傳して、おのづから一派〳〵のやうに云なせる事、是自然の勢ひしからしむるものなれば、唯それのみにてうち過んはよかるべし。こと〳〵敷自門他門と臂を張り、別派也と心得んは非が事ならん。

一問云、貞德・宗因はいかゞ。

一荅、貞德・宗因は蕉翁の風にはあらず、是は一派也。其作意みな本歌に俳諧歌あるが如く、其頃狂歌とてもてはやしたるを移して、連歌の狂句を宗祇の門人宗鑑作り始めし也。次で伊勢の守武、專ら是を世に弘めたり。その後松永貞德、此一風を盛に興して、御傘といへるものを著して、その式を連歌に習ひて、連歌に二ツのものを俳諧に三ツとゆるべて用ひられたり。餘もそれに准じて差別を立たり。是よりして俳諧の式始て定まれり。されば歌の俳諧体より連歌の俳諧体興りたる也。夫は宗鑑か老て思ひ付たるなるべし。同時に守武壯年にして此才に長じ、今も守武千句といふ書刊行せしもの殘れり。眞僞はしるべからず。宗鑑は師の連歌に及ぶ事あたはざるを看破して、別に洒落に作り出したる也。さるによつて筑波集并師の新筑波に習ひて、犬筑波といへる集を作りたり。則その名はや俳諧集の名に成たり。爰に古人の風流は深きところありてその

味ひあり。

一問云、許六が滑稽傳に、守武・宗鑑と次第したり、いかゞ。

一荅、いかにもさう也。され共宗鑑、實に俳諧の權輿也。守武は是に次て行はれしもの也。宗鑑は隱者也、守武は伊勢の神職也。世に立交ると、世をいとひたるとの差別ありて、宗鑑は守武の跡に付たるやうに世の人〳〵思ふ也。

一問云、晋子の句は解し難き事の多きに、幸に空然翁の五元集小鷦ありて、あらましは分りたれど、いまだしかと會得せざる句共まゝあり。先ツ、

　日本の風呂吹といへ比叡山

此句、小鷦の註に、日本天台根本三千坊ノ比叡山といふことを斯興じたる也とあり、いかゞ。

一荅、小鷦の解は、たゞそのあらましのみにて、猿蓑・炭だわらの注解のやうに委しくは書れぬなり。されば其餘意を愚案だけに說キ申べし。此句は晋子が句の中にても殊に解し難き句也。空然、始て此註を下せり。扨比叡山は、傳教大師唐土の天台山に受法して皈朝の後、延暦中に日本へ始て天台宗を弘る根ン本ン最初の山也。坊數三千坊あり。是よりの作意にして、晋子が弟子淡々などが好みし句風也。世に謎句といふ。されど晋子が滑稽酒落より出て一興の句作と知るべし。坊の字、ぼんと讀の例也。されば風呂吹の句にはあらず、比叡山の句也。それへ風呂吹大根の酒落はたらきを見るべし。三千本の風呂吹と心裏言外に見えて、日本の二字動かずと知るべし。

一問云、

　いざよひや龍眼肉のから衣

此句、小鷦の解に、十五夜明る迄月を賞玩して十六日の夜は、もはや專一と見る所の目もつかれたりといふ句なるべし。夫を例の酒落に龍眼肉のから衣と作りたる也。龍眼肉とはよくも思ひ寄たる手段、文字に力ありと云ゝ。其文字の力といふところいかゞ。

一荅、此ものゝ肉こそ藥にもなれ、売は不用のものなれば、我が眼もきのふは月の肉をよく〳〵詠めたり。今

は眼も心も草臥たれば、龍眼肉の売も一様にて十六夜の月はきのふの賞に及ばずと也。仍て龍眼肉の文字に力ありと云れたる也。

一問云、

芭蕉翁の沙彌かけものほしがりて、繪讃を乞けるに

せめてもの貧乏柿にんめの花

此句、いまだ會得まいらず、いかゞ。

一荅、小鵬にいわく、蕉翁の沙彌乞けるに幷〳〵なるもおかしからず。扨、歌人の家のこのみにはと心寄たれば柿ひとつ畫がきて、人丸の垣ほの柿・窻の梅と讃したるなるべし。貧乏柿とはあやしき垣と云んとなり。有レ梅山家得レ春の意也。通小町の謠曲に、歌人の家のこのみには、人丸の垣ほの柿、山の邊のさゝ栗・窻の梅・園の桃といふを取て一作せし也云〻。今案ずるに、柿・垣・書、三字いづれもかきの訓ありて皆その意を含めり。餘響猶味ふべし。實に作中の作人と稱せられしもむべ也。

一問云、

氷肌玉骨とかや

昔見し花にも香にも梅の皮

此句いかゞ。

一荅、氷肌玉骨は李益が青梅の詩に、青梅如レク豆ノ試ミニ嘗ムレ新ヲ。脆核虚中未レ有レ仁。擘ニ破スレバ收レメ香ヲ藏レスル白ヲ處一ヲ。氷肌玉骨是レ前身。と是也。句意と題書とよく味ふべし。昔は氷肌玉骨なりしも、今は枯瘁の老木なりといふ意也。梅の皮とは力ありて尤絶妙といふべし。猶小鵬の注にて見るべし。

一問云、

芭蕉庵をとひて

鶯や十日過ても同じ梅

此句いかゞ。

一荅、端書にて思ひめぐらすべし。鶯はもはやはつ音を啼に只此梅は、すでに十日を過るといへども猶同じ姿にて、いまだ得開かざる花あり。されば老木とは聞ゆ。扨、小鵬に云、其角おのれを鶯に譬へ、翁を梅にたと

へし也云々。此解にては其角が自負のやうにも成るべくや。愚案にては只翁をさして作れる句なるべし。しからば翁平常趺坐静心自若の有さま、無爲自得、三百六旬猶一日の如し、と言外に深く味ふべし。

一問云、

うぐひすに藥教ん聲のあや

此句いかゞ。

一荅、鶯は聲をもつて人に賞せらる。人間に音聲をよくする藥あれど、鶯に音聲の藥なし。もし鶯によき藥を我知りたらんには、此うへいかなる妙聲も發せしむべきものを、人と飛鳥と生を隔つれば、只此鶯を聞く度に歎息すと、洒落せし句意なるべし。あやは文にて猶艶(ツヤ)といふが如し。

一問云。

腕押のわれならなくに梅の花

此句いかゞ。

一荅、人は欲あるゆへに爭て衆人に冠ッたらん事を欲すれども、此梅は無心にして、おのづから百花の魁ともてはやさるゝ也と、觀想の意にして、腕押は俗に腕たてといふが如し。猶小鷸の解にて味ふべし。

一問云、

鶯の身を逆にはつねかな

此句いかゞ。

一荅、うぐひすの立春に至りて樹上に來り、囀々反側してはつ音を發するは、まさに人の聞あらんを欲するに似たり。一聲既に發すれば人皆これを賞す。凡物事數賞を得るには劬勞して始てこれを得る也。角が句を作るも亦然り。身を逆にとは、一聲すでに力を務むるの意也。句の頭書に止丘隅とあるは、鶯は其とゞまる處を知りて、かえつて人よりもまさる事のあるものをといふを表せり。猶小鷸の解見るべし。

一問云、

茶杓にとまりたる繪に

うぐひすの曲たる枝を削けん

此句いかゞ。

一荅、鶯の曲たる枝は餘の木にてはなく竹をいふ也。其

鶯の踏ミ曲たる竹を以て茶杓を作りたるやらん、さなくば今又來て此茶杓にとまりはせまじと打興じたる意也。

一問云、

（待乳山）こよひ滿り棹のふとんにのる烏

此句、待乳山よりの眺望、眼前体也と小鶴に注あり。猶こまかに承り度。

一荅、こよひ滿りといひて十五夜を含めり。月光あきらかにして白晝の如きに、烏もいまだ森に歸らずして、猪牙舟の小蒲團に人なきをうかゞひ寄りたる樣を句作れる也。棹のふとんといふにて舟を含みたり。晋子が句作如レ此所多し。よくその境に入らざれば聞得る事かたし。

一問云、

しかぞすむ茶師は旅ねの十三夜

此句、小鶴に、是は宇治の茶師といふ事を、鹿ぞすむと句作れる也とあり。其外に何ぞ意味ある事にや。

一荅、別に子細はあるべからず。晋子の滑稽大概斯の如し。上林某などの旅寐の頃を思ひ出せし句也。

一問云、

茶もらひに此晩鐘を山ざくら

此句いかゞ。

一荅、小鶴に、茶もらひ一服と所望して腰うちかけて休ふは、此山櫻の入相の鐘撞の風情を見んが爲也といふ句なり。入相の鐘をやまと顯言葉に取たる手爾葉也と云々。此句唯吟じたる斗りにては、初心の聞得がたき手爾葉也。惣て句作のこなし、理屈より出てその理屈、道理をのがれて一句の姿をなすは、晋子が句作の强みを覺えて自由自在の手爾葉をあやつるべし。句の善惡は時に取て出來不出來あれども、こなしの自在なる事、實に蕉翁の高足なるべし。扨此頃初心の句に、

鎌倉に杖の集る十夜かな

といふ句を作りたり。是にては年寄の多く集る事を理屈に云立たり。されば句とは云がたし。杖千本の十夜哉　と一直してこそ、理屈を離れて發句の姿は出來たり。されば初心には聞得る事かたくなるなれば、古人

の手段は初學の聞得ざるは元よりの事と心得て、よく其句を聞分るやうに執行すべき事肝要也。古事に據り歌を引き、あるひは詩を引きたる句は、その事にたづさはらざれば聞得る事ならぬもことはり也。さまでもなき句の聞えざるは、此道の執行・師傳の元手薄きゆへと覺えべし。

一問云、晋子が書れし終焉の記を、世の中に枯尾花の序といふは誤りにて、文体も序の格にあらず。されば宗祇法師の終焉の記によりて書たるものにや。

一荅、さも有べし。元祿七年十月十八日、此日翁の初七日にて百韻興行あり。右の集を枯梶花と標題す。其集の始にこの終焉の記を出せり。依て世に枯尾花の序と心得たるは實に誤也。猶文中に、愚かに終焉の記を殘し侍る也とあるにて明か也。

一問云、終焉の記に三更月下入無我といふを、宜麥の註に、入無我は入我・我入對したる所の一体也といへり。いかゞ。

一荅、宜麥の註當らず。そは江湖風月集巻一、三山ノ偃溪聞和尙の偈に、路ニ不貪レ糧ノ笑テ復歌フ　三更月下入ル二無一何ニ。大平誰ヵ整ヘン閑戈甲。王庫初ヨリ無ニ如レキ是刀一。と是也。其角、暗記の一失にて、何か我に書誤りたる也。

一問云、曠野集に、

蓮の實のぬけ盡したか(マヽ)蓮の實か　越人

此句、ある人の說に、越人、素堂亭へ行に、例の蓮池より蓮の實を取りてもてなすに、皆くひ盡して、ぬけ盡したる蓮の實がもうないかと、馳走を忝くするの挨拶也。物を殘すは不敬にあたれば、かくは興ぜし句作也といへり。いかゞ。

一荅、さにはあらざるべし。越人が素堂の所へ行て蓮の實の馳走にあひたるにもせよ、皆喰ひ盡して、ぬけ盡したる蓮の實がもうないかと、馳走を忝くするの挨拶也とはおかしからず。愚案にては、蓮は花の清香なるもの也とも云て、佛家その清香を愛して、專ら蓮花を玩びて佛坐とも成し、又淨土の池中、其花の大サ車輪の如しとも說り。唐土には美人の顏(カンバセ)にもたとへたり。

芙蓉も不レ及美人ノ粧といふも、其蓮花の清香の、かたちよりはまたまさりて美人なりといふ事也。芙蓉といふは卽ち蓮花の事也。今いふ芙蓉は木芙蓉といふもの也。素堂は山口氏某の隱遁したる也。かの謝靈運か癖を傳へて蓮を愛せり。蓮菴と云、素堂といふ。尤白蓮を愛せしと見えたり。其氣性淸潔たる、推して見るべし。その素堂に對して、越人亦其向上の趣意を句作れり。其ゆへは、此淸香淨潔の蓮に實の多くみのる事こそ本意なけれ。されば蓮の實は皆ぬけ盡して跡かたもなく、売ばかりに成たるが蓮の實の本意であるかといふ句作にして、尤蓮の實情を尋出し見附出したる向上の趣向也。唯ひと通りの挨拶・洒落の句にてはあるまじ。

　　朝顔や此花にして實の多き

といふ句をもつて解すべし。此句、作者忘れたり。おのづから句意明か也。

一問云、祖翁の附合に僞作ありと、宜麥が申されたるよし、さやうの事にや。

一答、それは書歌仙といふ書の序に、芭蕉の俳諧三百五十卷の中百五十卷は僞作也と、宜麥が自筆にて書れたり。猶又別に其僞作の卷、一句毎に凡俗也、精神なしなど評してあり。是も自筆にて書れたり。其書もいつぞや見すべし。實に宜叟は卓見にして、凡眼の及ぶ處にあらず。

一問云、古來傳書に百韻四花八月のうち定坐を立て、みだりになす事を禁ず。それは月花の景物、連俳の眼目なれば、短句にさせまじき爲也といへり。右の如く心得てよろしきや。

一答、しかなり。宗祇法師なども是等の事云置れたれば、さる事あるべし。しかれども蕉翁の俳諧は、宗祇の連歌を本として俳言を用ひ、連歌の式を取て連歌の式を用ひず、規外の有規・規中の無規と深意より出たり。規を守る時は連歌一轉の俳意なく、規を守らざる時は俳諧の連歌といふ意なし。されば四花八月は、百韻の式なれば缺く事あたはず。されど長短句の差別なく、時宜により差合・去嫌の場をよく見定めて居ゆる

也。依て蕉門に月花定坐といふ事なし。唯表には月なくてかなはず、裏に月花なくてかなはずと知るべし。されど今時の老俳、片腹いたき事どものゝしりて、祖傳の師傳のと口走るやから多ければ、猶わが覺えたる證句一二をいふべし。

○花摘　表四句目ニ月

川舟の綱にほたるを引立て　曾良
鵜の飛あとに見ゆる三日月　釣雪

○伊達衣　名殘表十句目ニ月

伽になる島鵜の餌をしたひ　等窮
四五日月を見たる蚤の屋　栗齋

○ひさご　表六句目ニ月

紫蘇の實をかますに入るゝ夕間暮　珍碩
親子幷びて月に物くふ　仝

○同集　裏十句目ニ月花結ぶ

旅姿稚き人の嫗つれて　路通
花はあかいよ月は朧夜　仝

○桃實集　名殘裏三句目ニ花

人日にたつと引なぐる珠數　洒堂
一息に地主權現の花ざかり　其角

○句兄弟　名殘裏四句目ニ花

老たるは御簾より外に畏り　芭蕉
花の名にくしどこか楊貴妃　彫棠

一問云、や哉やけりの事は、猿簑逆志抄にて會得いたしたれど、疑のやと申はいかなる事にや。

一答、やの字、上下の味ひにて詠とも疑ともわかるゝ事也。

よひの雨しるや(カ)土筆の長短か　闇指
かれはてゝ名にも恥ずや(ヌカ)女郎花　杉風
すこ／＼とつむや(カ)摘まずや(ヌカ)土筆　其角
夕やみは螢もしるや(カ)酒ばやし　水鷗
すゞしや(イカ)とむしろもてくる川の端　野水

これらはいづれも疑のやの正しき例也。いつ　たれなになど云詞の下には、やはつかはぬ例也。かは遣ふ也。たとへば、いつからかみると遣ふ也。

けうときは鷲の栖や雲の峯　祐甫

是はかといふべきを、やにあやまれる也。

春雨のあるかや軒になく雀　羽紅

御よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五

これらいづれもかと云て叶ふ句也。又かは問ふ心也。やはおもふ心也。

奥山はあられに減るか岩の角　湍水

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ國より去來がもとへ申つかはし侍ける

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

らん　けんなど置べき所も、みなはぶきたる例のみ也。これを中のかといふ也。（但し略すると略さぬと二例なり）

春の夜はたれか初瀬の堂籠り（スラン）　曾良

いく人かしぐれかけぬく（ラン）せたの橋　丈草

たれ人かこも着ています（ラン）花の春　はせを

天井まもりいつか色づく（ラン）　去來

夕立にどの大名か一トしぼり（ナレラン）　傘下

是等にて知るべし。又、

内藏頭かと（イフテ）よぶ聲はたれ　乙州

名月や富士みゆるかと（思ノテ）駿河町　素龍

盆の月ねたかと（イフテ）門をたゝきけり　野坡

これらのかとは、みな カト見テ　カト思フテ　カトキヽテ　カトイフテ　カトシテ などの心也。

一問云、中のやといふあり、いかゞ。

一答、中のやに二例あり。下のうち合せを畧すと、畧さぬと也。中のかに同じ。

永き日（ヘ）やけさをきのふにわする（レルヤウデアロウカ）らん　荷兮

子（ガ）やまた（ウカ）んあまり雲雀の高あがり　杉風

たふとさのなみだ（ガ）や直にこぼ（レルダロウカ）るらん　越人

是等皆中のやの正しき例也。又畧せる例ならば、

さみだれにかくれぬもの（ハ）や勢田の橋（ナラン）　はせを

たびねして見（シ）や浮世の煤掃（ナラン）　仝

名月に麓の霧（ガ）や田のくもり（ナラン）　仝

梅白しきのふ（ヘ）や隺を盗まれ（シ）（タカ）　仝

象潟の雨（ハ）や西施が合歡の花（ナラン）　仝

夕立に傘かる家（ヘ）やま一町（アルラン）　圃水

ながれ木の根(カ)やあらはるゝ花(ナラン)の瀧　如雪
風流のはじめ(ヘ)や奥の田植唄(ナラン)　芭蕉
すみれ草小鍋あらひし跡(ヘ)やこれ(ナラン)　曲翠
鷹ゆくかた(ヘ)や白子若松(ナラン)　芭蕉
山(ヘ)や花(サキツラン)かきね〱の酒ばやし　亀洞
麥跡の田植(ガ)やおそ(イカ)螢どき　許六
見おぼえんこ(レガ)やあらたまの年の海(ナラン)　長虹
笠島(ヘ)やいづこ(ナラン)五月のぬかり道　芭蕉
水鶏なくと人の(イフニヨッテ)いへばやさや廻り(マヽ)(スルラン)　仝

是等の類也。

一問云、よの字の義いかゞ。

一荅、よの心は上の詠のやの眞反(マウラ)也。五十音ヤとヨと眞反也。やはむかふへとゞかぬ心、よはこなたのあとの方へとゞかぬ心也。いなばのそよといふ人のなき　などよめるそよは、俗語にソレヨ〱といふ心也。此故にこのよはあり過たる事を思ひかへすほどの心也。これその今の場よりは、うしろの方にて循せられぬ場となりてある也。こゝの差別よく辨ふべし。これを知らぬやからは、〽思はずよ〽うらみずよ　などゝ、心得もなく常によむぞかし。此心ならで此よを用ひば、あたらぬ所もいでくべき也。やとよとよく味はゞ、眞反なる事手にとるが如くなるべし。

ちる花は酒ぬす人よ〱　舟泉

ちる花はあはれなる物とのみおもへば、酒ぬす人とは、人〱心もつかぬ事を歎息せる心也。この心をもてやと眞反なる事をさとるべし。

一問云、詠のもといふはいかゞ。

一荅、

あか〱と日はつれなくも秋の風　はせを
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　野水
またも大事の鮓をとり出す　去來

是皆詠のも也。

一問云、なの字の義いかゞ。

一荅、此なは物の持合の他のをよばざる歎息也。たとへば飯を食する時、そへてくふ物を俗には菜(サイ)といふ。いにしへは是をなといへり。そのいにしへなといひし

を、音にて後世はサイといふなるべし。さて今菜といふは、魚肉をも野菜をも押くるめていふ事、すなはちいにしへのなーといふ義にて、今なーといふは野菜の方にばかり残りて、魚にはいはぬやうになれり。（今サイといふはかへつていにしへによくあたれり）されば なーといへば、野菜の事とのみ世には心得たれど、さにあらず。すべてなーとは、魚肉・野菜ともに、飯にそへてくふ物の名也としるべし。此なーといふ名の義も飯とよく持合て、他の菓子などはおよばざるがゆへの名也。これひとつをもても、なーといふ詠嘆の心はしるべし。

むざんやなかぶとの下のきりぎりす　はせを

二日にもぬかりはせじな花の春　仝

落葉かく身はつぶねともならばやな　越人

是等の句にてもさとるべし。

段々の書留の
内より四時の吟
撰出し

蓬莱や見勝手もなく思はるゝ　埜熊

輪かざりをほぐれて来たり春の風　柯調

折取て尾花かざゝん鱸かな　吟蛙

明月や水見とめればもとの空　頤夕

花撰む心もつかであさ櫻　許一（村白改）

落ついた日の暮やうぞ濱の秋　空宜

試に水もゑらまぬ新茶哉　言関

あらかねの土に成る身を厚衾　樺柯

ちる櫻既に彌生も吹濟す　下総 柯丈

市の雪積り直して暮にけり　東和

うぐひすやくつろいで来る跡の聲　盧舟

心には松島書んほとゝぎす　月草

武蔵野のうけらが花歟雨後の月　記月

瓜むけばはや松風のそよぎけり　杉宇

鴛下りて朝凉拾ふ縄手かな　柯明

産毛剃る手元へ来るや冬の蝿　女 李蝶

橋越せどもとのひとりよ寒念佛　爲水

日印の柳へ戻る野みち哉　旦山
藤の花眠し〳〵と鐘が鳴る　景里
けふの月さて夫からも待れける　一柯
むつみあふて夜は氷るらめ鴛二ッ　靜雅
寒梅や客をまふけの新疊　一仙
秋近う成りぬ寐おくれ起おくれ　素學
磯の香に四五丁酔ふや小春凪　女 智光
朝皃のけふもひと重に咲にけり　秋良
春雨を我がもの顏のわら家哉　柯月
炎天や豆の飛込む隣畑　惡雨
青柳や吹井の水ののみ心　汶柳
名月が春は朧でおもしろし　宜參
爪琴に夜も霞まれて春の月　女 壽扇
降ぬけて一際立ちぬ天の河　柯正
鶯の來る木占へ雲の中　願言

かの禪師が唐茶の鍋煎はいさ知らず。番茶の湛の出流れたるに、爐中の熾をかき立つゝ、風話の耳にとゞまりて、二三子が早くもよく悟りたるは、汶村が稱嘆せる六ツの徳とやいはん。されば此けぶりには、落花の風もおろそかには吹まじと、そゞろに自慢顏して、山吹の盛り過るころ、松尾の松の千代かけて忍川巣の、氏より育つ素學が、壐長に卷末へ書つけ侍りぬ。（素學）

不白翁句集

不白翁句集敍 〔正剛創〕

本邦之和歌猶如中華之詩也凡有感於情必形於言矣謂異於其撰乎哉和歌之道岐而有聯歌有俳歌亦如詩有古風近體然其温柔敦厚優遊不迫此愈於彼也遠矣蓋藉本邦之性情使然焉耳斯集者蓮華老翁良辰美夕弄花嘯月所寓情于俳辭之麗什也翁雖固不用意締搆乎其天然韻致可掬而知矣自壯至老前後諷詠無一留稿者矣振々亭主宰迺交密談及俳事則随聞随記輙繋然成卷翁令嗣日々菴主得之珍襲不唯弊帚千金遂謀上梓廣布同志顧微余辨言夫翁之德之劭也實足不朽乎千載豈假斯一集雖余不能為臬市抑復為曹丘乎翁天資坦率不修邊幅不狹不泛齢踰八袠猶鑁鑠眞神仙人矣且至若其粹於茶儀則海内嚮恭之誠如斗山之咨慮亦可謂盛矣

寛政戊午季冬

蔭涼謙堂書



謙堂氏

不白翁句集序

茲に蓮華菴のあるじ不白翁は、茶道の先達にして盧玉川が皮、陸桑苧が肉、利抛筌の骨を得たる人也。紀劦新宮の産にして、姓は藤原、氏は川上といふ。すなはち新宮侯につかへて江都にいたり、十六歳の時千先生如心齋の門に入、京師に赴き、千家をあるじとして茶道を學び、默雷菴宗雪といふ。しかりしよりこのかた、日夜の修行・功夫・練磨は、礪礪もて美玉の明をてらし、礪砥もて雄劔の靈をあらはすがごとく、此道の奥儀悉く成就しければ、普く今天下に千家の風を弘めんものは、汝にあらでは。いでや東都に赴て身を立、揚名して我をあらはせよと、如師の嚴命をうけ、旅立ける時

秋風に乘て歸るや東人　如心

と餞別の一句は、是もろこしの飛衛が射を甘蠅に學て巧たる事、其師に過たりといふにたとへて翁をよみし。又沖虚眞人が風を御したる古事によて、誠に譽れある賜なり。すなはち習ゝとして此清風に乘じつゝ江府におもむき、するが臺に默雷菴をつくり、柴崎の社の傍には蓮華菴をいとなみ、左に酒瓶を提げ、右に茶筌を曳て、一た

び不案菴の幟旗をひるがへせば、地位清高の蒼生、千となく萬となく、皆風を望て門下にすゝむ。然れば竹園の花閣・松林の月亭に招引され、聚螢の草廬・映雪の野家に逢迎せらる。亦、向上宗乘堅固法身の樞機は大德寺大龍禪師に參禪し、大道無門の關を蹴破て乾坤獨步の躬となりしかば、竜師是に萬里一條鉄の錫杖を打て孤峰不白居士といふ。因て其友とするの智識は、大川・萬輝・無學・龍門。萬保・大嶺、其外黃檗山の湛江和尙・本方寺の貫主日詮上人のたぐひ、皆碩學の高僧也。長入・宗哲・淨益・正玄・利齋・庄右衞門が輩は、もとよりのしたしみにして擧るにいとまあらず。曾て翁の風雅あまりあるや、若き時は沾洲に會し、壯年には珪琳に逢、老ては我雪中菴の蓼太叟にちなみて、花に月に或は讃賛、物〳〵にふれつゝおもひを述し詠あり。又今の玄虛は我白屋に隣れば、常に行かふて雨に雪に芭蕉翁の迹追て、冬の日の閑居に炭俵の口をほぐし、猿が人まねの蓑笠に四五輩の考參ては、彼橋中の仙人のたのしみをたのしむがごとし。されば此夜話の折〳〵のむかし語に、口よりまろび出る玉の言葉も、我に琢よ磨けよとあるをしるしとゞめしを見れば、いつしか二百三十余章こそありけれ。是を、いとまなき我筆のいとまにつらね置しを、或時日々菴のあるじ見つゝ、是はこれ阿父の風骨、吾家の寶貨也。此集に序して得させよとあるにまかせッゝ、痴才の疎毫、鄙序はゞかりなきにはあらねど、たゞ其聞けるまゝを述けらし。嗚呼、茶者南方嘉木、翁乃紀陽英兒、遐齡八十益壯。孤峯不白居士、別号は蓮花菴・默雷菴・不羨齋・亭々亭・圓頓齋といふ。げに長命は飲茶にありとか。唐帝いまさば、此翁も又保壽亭におらしめ玉はむ。仍て狀し因て序す。後の此集を見んものは、翁の風流雅淸、高年、令名、もておもひ、もてうらやみ、もてしたはざらんやとしかいふ。

寛政戊午仲秋

雪太郎三駱誌

［雪太良］［三駱］

不白翁句集

雪太郎三駱撰

春之部

歳旦（旦）

茶の道や古きをもてけさの春
若水や夏より清き朝ぼらけ
門〳〵や何里目出たき松の春
うら白や表はあをき松の門
あたらしき海の詠やけさの春
松建て是へましませはつ日かけ
しづかさや門には松に松のかげ
去年は老としは若し松の色
我菴は臺司の方を恵方哉
大ぶくやかはらぬ色を初むかし

元日甲子

あら玉の玉をうち出の初日哉

大徳寺にて

鷲峯みるや世界の別の春

孤峯不白は大竜禪師の賜ひし号なり。仍て老の身の樂しびは、やすくながからむものなと、安永二年の春よりはこれをもて我名とし、宗雪をば嗣子宗引に讓て

ゆづりはの末葉こやせよ千世の春

天府君より、浪花のふる國とやらんが、住よしの小松引てまいらせたりし其松の根に付たる土にて、茶わん造りてと好みこし玉へるに手づくねしつゝ、岸に生てふとよみしわすれ草と名づけてまいらせける

此松にひかれて老をわすれ草

若菜　猿曳　鳥追

雪の間をまた二ツ葉のわかなかな
雪のゝを先駈したり若なつみ
飛〳〵に跡うつなみや礒若菜
猿引や世わたる業も綱わたり
鳥追やだみし調子もはるの風

梅

雪どけの垣ねつたひや梅花
梅がゝや隣もおなじ朝ぼらけ
梅もたぬ軒の端もなし里つゞき
神鏡にひづまぬ梅のすはひ哉

鶯

うぐひすの南向てはつ音哉
鶯や啼そむる日を揚松葉
うぐひすや朝ねの窓の夢に入

身延

黄鳥や通木橋のたに間より

霞

雪いまだ遠山白し夕がすみ
帆にかすむ大江の岸やみほつくし

春雪　春雨

日々菴にて茶湯の時、侍合にありしうち、
冴返りつゝ雪の降出しけるに
淡雪の降も茶湯の花香哉

宗雪云、其節の花生は無銘にてありしかば、すなはち乞て淡雪と銘ぜられし。

はるなれや櫻となつて暮の雪
春雨や枕も榮花物がたり
此ごろや去年は何して春雨

若草

若草や是より右へ春日山

洛外

わか草や乾坤杖の立所
蒲公や野渡まつ夢の枕元

春風　春月

冬としの皺をのしてや春風
しら梅の誰すむ宿ぞ朧月
雲と見し花より出たり春月

柳

青柳や水なでゝは見〳〵

清水にて

願へたゞ慈悲の光の柳かな

角田川渡舟賛

船頭のはなしを聞ば柳かな

初午

初午や福不可量の種おろし

涅槃　東禅寺にて

涅槃會や香のけぶりの夕霞

雉子　鳥巣　蝶　蛙

刈残す薄に花の雉子かな

鳥巣に僧も宿かる山路かな

蘂を喰た身に花吸て小蝶哉

雨近き野澤の月やなく蛙

新田に隠居家建て蛙かな

春日

はるの日や遅牛も淀鳥羽縄手

永き日や繪馬をみてゐる旅の人

利休忌

抛てる茶筌に花の匂ひかな

聚光院詣

春毎に勅許の居士や塚の花

聚のゆかりあれば也大徳寺の聚光院に靈をとゞめ給ふ不審菴抛筌斎(一)利休居士の寶塔を、東都万松山東海禅林にうつしゝてと思ひ立しより、いづれか此靈地ならんと、大徳寺三百七十世萬輝禅師、宗旭大和尚の東海寺九十二世の輪番はてゝ爰の清光院に在し玉ふに合躰して、そこらもとむるに、清光に隣れる琳光院は堂宇荒壊し、近ごろは住なせる僧もなく、庭は荊蕀心のまゝにひろごり、狐狸もえたる栖とやなすらん。是を再興し、且法塔建んは猶功徳大ならんと思ひけるころ、相摸國の杜多なるが、觀自在菩薩の御厨子再興に御佛を奉て此精舎に來つる。其破れたる厨子のうちに讖の筒入たり。折から佛意何ひみんと信心して是をとるに、第十八番なり。讖の詞にいはく、離暗出明時。麻衣變緑衣。舊憂終是退。過祿應交輝。とあり。此讖、奇なるかな妙なるかな。出明は清光に應じ、變緑衣は身立の意、交輝は則萬輝也。遇祿は此大和尚、琳光院を中興し給ふべき兆にして、誠に佛意・祖意にもかなひける大士の御教へと、發心決定し

て土石の功をつみ、居士の塔及び木堂・庫裏・門・塀迄悉く成就したり。殊に此門は、聚樂の御所の傍にありし居士の門を世に揚土門といひし、是をこゝに其摸したる也。將、此事跡を林祭酒信言朝臣撰述ありしかば、禪師筆を揮て石上に勒し、猶万歳を祝し玉ふ。則此供養は明和五年戊子春二月二十八日、居士の祥忌正當也。東海寺一山の智識をはじめ、各僧侶を招待し、偈をもて拈香供養、如在の禮をもて敬て供佛齊僧。時に萬輝禪師一偈あり、曰、

大千沙界現全身　一塔巍々東海濱
地先菩深今洒掃　烟雲瓦礫爲生春

云々。因て我又謹て和。

亳端点出現全身　塔院中興東海濱
莫被獰人無鼻孔　茶香偏滿万松春

落誠の慶讃、挿草の功績、既に事をはりぬれば、別に一句子を餘して

つぎ穂して古き匂ひや梅花

扨此院・此塔成就してより年々歳々の春、利休忌と号しつゝ此所に會して、先師如心齊(齋)の巧(工)夫に成し七事の式をもて、居士の靈を祭る事とはなりぬ。

めぐむ茶の恵みを摘て手向かな

東叡大王隨宜樂院の准后の宮、或時此琳光院に渡御ならせ玉ひけるに御茶奉りて

御園の花や竹田の森祝ひ

最上乘院法親王の上野の御本坊にめされて、御茶湯の事申上よと、おそれおほくも御師範の御ゆるし蒙りし時

伏てみる雲の上野の櫻かな

内裏へうち〳〵献じ奉り玉ふよし、准后の宮のおほせを蒙り、御花生たてまつりけるころ

九重の花に仰ぐや一重切

長門少將重就朝臣、茶御稽古の日、或とき花月を題して

晴曇る中にひらくや月に花

巨福山建長寺の山門は、同國長谷寺の觀世音の御堂なりしを、むかし其御堂修補の時、其古材を引て建たりしものとかや。夫を又此開

山大電關渓禪師五百年忌の法養に修營有しかば、土木の助チが微力を進めし時、此古柱一本乞とりて東都にひかせ、道安好の數寄屋たてゝ床柱に用ひたり。誠に千載の古木、友としてなを老を養ふべし。

活てみる春やむかしを花の友

三駱問、如何是茶。荅曰、

立歸みよ我宿のむめの花

花櫻

幾たびか又古道や櫻がり

杖立ていづこへゆかむ山櫻

先師如心翁とゝもに嵯峨に遊びけるころ、西行堂にて

西行のむかしをけふの櫻哉

あらし山

いとはじの花やあらしの山櫻

野々宮

ちる花を雪に黒木の鳥居哉

清水

白雲もひとつに地主の櫻哉

予十五歳にて、手束弓紀の新宮を出しより十とせを經て歸國

古郷の春やむかしを夕櫻

白居士問鳥窠禪師、如何是佛法大意。窠云、諸惡莫作、衆善奉行。白笑曰、三才孩子知是。窠曰、三才孩子言可云、八十翁不能行云々。(嗚)嗚呼語なるかな、我心肝に砭す。

八十とせの趾を老木の櫻かな

一とせ蓼太老人、振々亭にあそびけるが、晝のほどはまだ荅たりし花も、永き日のいつしか咲出たるゆふべを興じて、

とくさけと君やいひけん夕櫻

とありしをおもひで／＼、朝櫻みばやと眠鳥・蒼鷺などかたらひ、此亭に夜込して

雲雪とさくや櫻の山かづら

雲林院に、英巖和尚の時、茶所の催ありければ、予、路次を櫻の一式と好りしを、如心齋甚感じ申されしが、其程もなく巖師遷化せられしより、此事もむなしくなりてやみにし。

其のち或とし膳所侯へ茶に召れけるに宗哲ないざなひしが、此御城内に、櫻木の中に釣鐘の半ば草に埋たる有き。其さまいとおもしろかりければ、宗哲が此所のさまを路次にせば興あるべしといへりしを、歸て後如師に語りければ大に感激の余り、

つり鐘に櫻の路次のひとしくて

と口ずさみ、下の句決てのゝち、したゝめあたふべしとの玉ひしが、世中の其事この事にまぎるゝうち、如師も又世を辭し申されしが、爰に此句の不可思儀(議)なる、我藁(ママ)のいふべくもあらねど、遠く此道の内秘を仰ざ、近く此句の外理を顧ぐより、師沒後三十余年の今、心にうかぶにまかせたる下の句は、其優遊に對せんとにはあらねど、心をもて心に傳ふるには、

花はあけぼの雪は夕ぐれ

かく清寂の心を述しが、ゝ是を東海禪利の琳光院の路次に摸して、褒貶はよし、百世の明鑒にまかせんとす。

しづかさや花にさはらぬ鐘の聲

三绹云、此琳光院の路次數寄屋を、隨宜樂院の法王めで玉ひて花洛今出川の御閑居に、此ごくいとなみうつし給ひしとか。

日暮里に遊て

春毎に其日ぐらしや花心

花にきてみても物なし建長寺

修理大夫久貞朝臣の庭に甘棠あり。春毎に敵蒂たる盛なば、いませし時殊に秘藏し給ひしが、げにさる事よ、いにしへの人は翦となかれとしたひしものを。我も又

甘棠や君なつかしき花曇

汐干

品川にて

元船の火を吸付る汐干かな

大ひらめ泥にぬたうつ汐干哉

茶摘　宇治

唐音の外に花あり茶摘唄

暮春

行春やまだいとけなき櫻坊

行はるや梢にすがる花二輪

夏之部

更衣

わすれては袂さぐるや衣更

郭公

山彦のそへて二聲郭公

雨雲に消ゆく峯や時鳥

いたゞかぬ枕科なし郭公

獨尊とのたまふ朝やほとゝぎす

一泊り岩倉山やほとゝぎす

足柄山

あしがらや足の下から蜀魂

北野

さては此繪馬が啼たか時鳥

水戸黄門の君、いまだ相公にあらせられし時、東海寺へわたり玉ひし、御目通へめされけるころ

天邊より御意いたゞくや時鳥

牡丹　杜若

花ごゝろ深み草なり白牡丹

影うつすふりわけ髪や杜若

京種を江戸紫やかきつばた

卯花や妹が垣ねもみしりごし

身延詣しけるころ、切石とかやいへる民家に咲る花をみて

裏富士やかゝる里にも美人草

葵祭

御車の跡に二葉のあふひかな

二いろに神風ふくやくらべ馬

扇

もろこしの風も涼しき扇哉

或時は螢もまねくあふぎかな

五月雨　田植

五月雨や日に〳〵肥る瀧の糸

仕よしや植るを花の御田笠

蚊　蚤

春の野とみしもうつゝの蚊遣哉

關取の蚤にはまけてねぬ夜かな

閑呼鳥 水雞 鵜

柴の戸の何焚鍋ぞかんこ鳥
ねた人をみまふくるなの月夜哉
篝火や下る鵜ぶねの千鳥かけ
かゞり火の芦間縫ゆく鵜舟かな

清水にて

清かりし瀧の音羽や夏木立

十年ぶりにて古郷に歸り、熊野の御山を拜す

氏神の杉見遣る茂りかな

清水 夏氷

足あらふ水に事かく清水哉
若水の其清きよりしみづ哉
手にとれば齒のうく夏の氷哉

青田

日本の繪圖あり／＼と青田哉

暑

菅笠の影もひづまぬ暑かな
あら野行我影もなき暑哉

蟬 虫干 瓜

花とみし枝かしましゝ蟬の聲
虫ぼしや匂ひ目出たき具足櫃
鳰鳥の身やとんぶりと眞桑瓜

夕立

夕だちやぬれる短氣の無分別

薩摩中將のとの仰によて、數寄屋花月樓に物すきし、また其御庭の路次作りける日、夕立しければ

白雨や此地がための幾千とせ

雜夏

近衞殿下、御祈願所北野なる西王寺に成せられけるころ、御茶点じて奉れよと有て、御相伴は柳原亞相の君などわたらせ給ひし。御飾付はみな其御方のきよき御道具にて、壺の口切事 御覽あらんとの御事ゆへ、平手前に点じ、御茶碗は御臺に載て

たてまつる御茶や薫る風の色

旅立人を送る

青梅や口のすくなる暇ごひ

石寶殿

世〳〵を經し石の宮居や苔花

東呉の手水鉢といふは、そのかみ豐國明神の朝鮮を征し給ひし時、名にしおふ先鋒(鋒)たりし清正大將のいきほひは、撃ところ勝ずといふ事なく、攻るところ拔ずといふ事なし。されば彼國深く東呉とかいへる所迄攻入て、猛威を震ひし後の證にとて、其所の橋柱なりしを押折て携來りしものなりとかや。それを或奇人の賞翫し、京師にありしを、其古に似たる大和石をもて摸しければ髣髴として、いづれかそれならんと思ふばかりになん有ける。しかるに其本の石は祝融子の災にかゝりきとか聞。しかれば是ぞ其本をとゞめしぞ、よくも摸しせし事よと嬉しくて、いよ〳〵めでものにして

もろこしの露をく月や苔の花

橘寺

香ぞしるき橘寺のむかし哉

或ところにて

夕がほやたそがれ時を化粧卩や

父母及びおほぢ・とをつおやの菩提を吊(セ)ひまいらせんと、熊野新宮の本廣寺・東都雑司が谷鬼子母神に一石一字法華經を書寫して奉納す。

法界のもれぬ光や蓮の露

轉法院にて

宮の御茶

亭ゝと淸きを蓮の御茶かな

谷中安立寺開山日新堂建立して

法の花ひらきて蓮の臺哉

夏月

刈込の甲斐ある松や夏月

影おちて夜は早瀬也夏月

小石川の御庭を、宗雪とゝもに拜見して

すゞしさや月常住の橋の上

旅中

すゞしさを訪よる松の谷かな

銀閣寺

凉しさや雪にしてみる銀閣寺

四条

川中の中に火宅のすゞみかな

備前のかうのとの信敬朝臣の別業に遊ぶ。吹井戸にいたりて

すゞしさや心を洗ふはしり水

御秡

身の垢をすゝげる風や御秡河

秋之部

立秋

秌たつといふて來にけり荻の風

七夕

わたるかと星みて更つ天川

牛嶋を猪牙で行夜や銀河

朝皃

朝がほやたゞ露の間の三世心

しゝが谷の大文字は、弘法大師の御作とて筆力の余勢、今も盂蘭盆の送り火に凡俗の闇をてらしつ

加茂河の底をこがすや大文字

稲妻

いなづまや見合す顔も妹脊山

虫

草の戸の夜〱虫を枕かな

松むしやりんとして待しらせ鉦

月

照といふ花もありけりけふの月

名月や野ずゑの空に浪の音

明月や蟻の道ゆく垣隣

さして行牛嶋黒し月見舟

段〱に山染てゆく月夜哉

寛政丁巳の春、長崎の人より清人の書とて贈りこしたり。おもひかけぬ事ながら、ひらきみれば、

余曩者名聞鳳岸老渇之法清骨之味兩良之春館於　日本長崎円寂得熊君固東都有河上先生以產有之癖專精於時列侯貴人延爲賓師余想見其爲市野服品試窮門之狀爲同畏感詞寄呈木將神交乎千里之外爾

嘉慶七年八月
賜進士及第經筵講官南書房供奉都察院左都御史平湖沈
初書

云々、又其翌年の春、錢宇文陳晴山詩を贈て、予が八旬のことぶきをなす。各の風雅の志忝う して、これを謝せんとするにも、こゝ國の人なれば擢る事侍りて、彼仲麿と聞えし人は其國にては晁監とかいひしが、明州の津にて、あまの原ふりさけみたる心にはことなるべけれど、其風雅を忝うする事は、雲ゆく雁も告よかしと

もろこしへよい便ありけふの月

鶴岡

月古し神の御前の大銀杏

身延にて

月清き影見る鷲の御山哉

又

はれわたるわしのみ山の月は今
　身のぶのそらに影のさやけし

師如心齋は、寛延四・八月十三日、良夜に先だちて身まかり給ひしかば夫〳〵の法養、大徳寺にて修行して

大空にその名は満よ月の秌

師恩の厚きを拜して

三十年ふり積りけり月の雪

秋風

秋かぜの裏戸にそよとたそや誰

あき風や破れ障子の調子竹

身のぶにて

秌風や雲吹わけて七面

或時、紀の本宮より和歌山へ至る道にて、山河の出水にとゞめられし。此所は糧てふものも、麥にそら豆入て炊たるを喰て、一日二夜その蠶家に泊りしが、山中といひ、家居といひ、喰ものといひ、旅は憂事のためしにも、是ほどの苦しさは有まじと思ひし。

捨し身に何としみるぞ秋の風

新宮に、辨慶の産る楠(マヽ)とて、十抱にもあまりぬる大木有しが、古木となれば空穂と成しに、

野法師どもいすみかとなし、火をあやまつて
今は其燼根ばかりぞ殘ける。

ふんぞつて生れた根あり楠の杯

稻　花野

うちよする稻の穂波や花ごゝろ

鉦に掛稻の畫に

秋に富貴のりを花の田づら哉

雨の手に折つくされぬ花野哉

是にこそ小金の名なれ花野原

花ははな心の直なるをよみするに、左によぢ、
右にひねり、花な實をうしなへるは、花もさ
ぞめいわくにや侍らん

人心千ぐさに花のあらし哉

風早殿より、御花生きりてまいらせよとあり
し。是は、はこやの山のうち〳〵の御ながめ
に成べう侍ると仰こされければ、敬みて奉り
ける折に

けふよりは猶万代や竹の春

茸狩　鯊釣

茸狩や酔ねど山をちどり足

鯊つりや面壁九年岸の上

雁　小鳥

はつ雁や先井日は置ならべ

繰いだす雁の備や霧の奥

雲路にも八重の徑や渡鳥

砧

山がらやから〳〵とはなれ業

山ひとつ越て里あり小夜砧

西東風ふきわけてきぬた哉

夢やぶるね覺の里や小夜砧

菊

憂秋と思ひしが此菊の花

或所の讌に

千世やちよひらくためしや菊花

後月

木守の梢に寒し後の月

秋夜

長き夜やね覺て咄す友白髪

明かぬる夜や寐ながらの一字觀

鹿

糸による夜の戶ほそや鹿聲

鹿なくや時雨亭の北南

紅葉

下染のまだき時雨や初紅葉

東海寺

紫の寺を奪ふてもみぢ哉

海晏寺　袖浦

袖裏を浪のにしきや夕紅葉

峯も尾もげに名高尾の紅葉哉

松杉も色に出たり蔦もみぢ

今はむかし、和哥山を出て高野山に詣。古園、熊野(註)に趣きけるころ、はてなし越にかゝりしが、此山は人の行かふ事稀〳〵にして、たゞ杣山人のみ至る所にこそあれ。半ぷくより上は雲霧常に有て、禽獸すら棲とせず。おりしも秋なりしかば、一しほ霧深うして、晝頃まては咫尺もわかず。連たる僕のわづか一二間隔る顔もみわけざるばかりに、たゞ呼かはしつゝ聲を力に行先覺束なく侍るに、又虻といふ虫の多くむらがりて笠のうちに入、目鼻もわかずとゞまりければ、薄を折て打はらひ〳〵してゆく。

霧深き浮世の外も憂世哉

まことに王安石が、一鳥不啼山更幽なりといへりしも、かゝる所にや侍けんとおもはる。かくしつゝ行程に、此山中に山なまこといふて、大なるでゞむしの一二尺ばかりも有が、うね〳〵、岩はな・樹々の木ずゑ・道のほとりに有て、是にとりつかれば、いかならんうきめをやみんと、いとおそろしくぞありし。

立よれば大樹の露や山なまこ

扨たどり〳〵行に、水ひとつのむべき所もなく、かろうじて尾にいたれば、頂上に宋ひとつ有。居なしいやしからず、よしある家作なり。かゝる所にも人は住けりと、ふしぎにこそおもはるれ。是は國君の仰事うけ玉はる獵師にして、大小の熊皮のいまだ血に染たるを

軒に釣て、もの〳〵しきさまなり。則立より
て湯水などもらひ、息つぎしつゝ、あるじを
問に、しか〴〵のよしをいふ。さて熊膽所望
しければ、いつ〳〵調へられし事ありやと問
に、いかでか此山路しかる事あらんやといへ
ば、さあらばとて掛目九分與たり。是は少し
也、價はいかほども出すべしといへば、いや
〳〵此品多く賣まいらせたりとて藥の功・不
功をもいまだ不レ辨人に、多くは賣まいらせ難
し。病に用ひて利あらば、其節はいか程もま
いらすべし、是我宿の法なりとて、いかやう
乞ても五分の外はうらで、我姓名聞て書留た
り。是は後に乞の證なりとぞ。斯る山中我と
渠ばかりにて、誰人のしるべきならねば、い
程も當座の利にかへてんものを、まめやかな
る心ざし社、げにめでたくゆかしくて

雲霧に登らぬ月の心かな

其家をはなるれば竜岫が出る。黒雲は莫〳〵
として前後に覆ひ風穴に遮る。白雲は片〳〵
として左右にはしる。此雲を踏で下れば、と

つが村といふへ出たり。いはゆる是十津川に
して、ますら男のたけ〴〵しく、家居も巍く
しくして、鎗・長刀・弓・矢飾り、鏃きら〳〵磨
たてゝ、ふりにし建武の御名殘も今さらのや
うに思ひ出らる

緋おどしの御味方おほき紅葉哉

天府君にいざなはれ、上つふさなる大多喜に
まかり、猪狩をみて

浪うつてよせ來る勢子や花薄

終日狩くらして、各獲したる猪・鹿・猿・狐・兎
の類提げ、大守の御覽に入んと、五角山いへ
る山神の社の前へならべ立たるさま、げに物
〳〵しく、富士野・小金の御狩の事〳〵かり
し、是にぞ思ひあはせらる。其獲結付たる竹
を乞て茶杓に刪り、猪の牙と名づけて宗雲に
土産にす。

荒猪の牙もなごめつ草の露

或とし長月もけふあす斗なるに、濟松寺謙室
和尚の室に至れば、菊の花いろ〳〵唐の錦を
織はへたり。いにしへ祖居士、朝皃の茶湯あ

りし。夫はたゞ一輪に天下の譽れをとり、是は百花に禪林の寂をみせたり。

朝顏につゞくや菊に名殘の茶

金龍山の轉法院を、隨宜樂院の御座所にさだめられて、彼是御物ずきあるが中に、御床の御掛ものをはづせば、夫ほどに御壁をうがちて、遙なる富士の山を置ものゝ御詠めに遊ばしけるぞ又たぐひなくありし。或日此宮にて御茶有けるに、折から四方の景色、樹々は染て夕陽色をそへ、をのづからなる庭上蕭條錦繡林、山は雪に青天そばだち、まことに白雪千秋突兀看、げにいへらく、勝地本來無定主。太都山屬愛山人とかや。げに〳〵淸き風雅に遊び給ふける。此御まへにさぶらふ事のかけまくもかしこく、かたじけなき恐れおほさ、誠に有がたくて

天地のめぐみ身にしむ名殘の茶

冬之部

時雨

しぐるゝや肩もかくれぬ小風ろしき

西山を留守にして降時雨かな

山門にしぐれたのむや圓覺寺

凩　落葉

木がらしや拍子のぬける瀧の音

凩やみえすく奧に淨明寺

下枝に秋は殘て落葉かな

寶鐸を鳴して落る木葉哉

久米仙人贊

紅裏のちら〳〵と落葉哉

口切

利休翁の玉へる事有

口切の沙汰に及ぶや色付柚

口きりや友を松葉の數心

くち切や千世もと契る竹の色

啐啄宗匠、はじめて江都に下られし砌、目ゝ

菴の号を書て宗雪にあたへられし。其額びらきの茶は予を招じ、相客は津輕屋の武陵なりしが、あるじのまうけ、掛物は白紙を表具しつゝ予に所望しければ、則武陵に松を書しめ、其上に斯

口きりや日ゝに重る松の霜

達磨忌

達磨忌や枯木の風の味もなし

枯野

くれなゐの色おとろへて枯野哉

露に貸花の宿なし枯野原

冬籠　紙衣　頭巾

柴の戸や柴を焚ほす冬籠

紙子着て輕さや老の出立ばへ

年を經て都に登りける頃

顔に皺よるの錦や濃帋子

よの中をくゝつて丸き頭巾哉

水鳥

聲細う吹きる風やさよ千鳥

透間もる夜のにしきや浦衛

夕汐に浮洲の泡や鴨の淀

枯蘆を夜のふしどや鴛の妻

岩はなの假寐も鴛鴦の妹脊哉

顔見世　袴着

皃みせや春けき宵の人通り

はかま着や千歳も鶴の一歩より

神樂

氷る夜や内侍所の御鈴の音

千早振霜雪もふる神樂哉

水仙　寒菊　寒梅

皃わけも若葉盛や水仙花

先がけて室から梅の春邊かな

寒梅や其色としも雪の友

寒菊や花にしてさす葉のもみぢ

安永五年の夏四月日光山　御社參濟せられける其冬霜月、上野なる　准后の宮の　御本坊に　大樹のわたらせ給ふ日　御座の間の　御花つかまつれと、　宮の仰ごと有ければ、寒

菊を入奉りけるが心のうちに

寒菊や君が八千世を花心

御茶屋の御庭に大木の櫻あり。是に作り花を咲せつゝ、今を盛の春邊と、二なき御こゝろくばりに、又其御茶屋の御花には石南花の爛慢たるを、日光の御山よりとりよせられしを、すなはち仕て

石南花も歸るや冬の日の光

安永三年、先師知心齋廿五回忌追善の為に上京しけるころ、風早宰相の君・千種中將の君、予が草扉をたゝかせたまひ、しのびて御入ありけるに、御茶まいらせて

はゞかりの一間や雪に回り炭

或時轉法院にて、 法親王の御まへに侍りけるが、折ふし天寒かりければ、めさせ玉ひしおほんぞをぬがせられて下し賜ふ。おもひがけぬ有がたさ、身にあまりて

御衣の花咲けり老の冬牡丹

氷

流よるものをとらへて氷かな

瀧の音もたえて久しき氷哉

寒

下手念に今宵の雪や寒の入

雪

はつ雪や行居ざる庭の隅

初雪やせめて薄茶の仕廻迄

芭蕉翁の内に居さうた人は誰とい給ひしを思へば

はつ雪やよくも在宿つかまつり

又、一品が芭蕉葉は

初ゆきや雨となり又風となる

鎌倉にて

大乘の雪白妙や松葉が谷

老 床

夜は雪と思ひし事よされぱこそ

利休居士の立像は、雪中路次のさまをうつせるなり

飛石の跡踏ばかり雪の杖

啐啄宗匠出生の朝、千家の業へ、幾千歳もと心のうちに念じて

秀るや雪のあしたの男松

鷹

雪空の鼎に鷹のいさみ哉

むらさきや朱をうばふて歸鷹

歳暮

煤掃や竹のいく代のとし男

千年屋

大同の煤を掃也千世の竹

としの瀨や笑て流す年忘

春毎の世話に暮行師走哉

年もはや梅の一重の隣かな

よい春に明んと年の暮るぞや

胴炭も置心よし除夜の鐘

雜

振々亭に菓あり。此うちによきを撰て花生につくりてと有しかば、むかし利休居士、韮山にてかゝる事も有しと興じつゝ藪中にわけ入て、周り尺ばかりなるを掘せ、一重は愛たき事侍れば千年の友といひ、二重は其勢ひ青雲の擧るかたちにより登龍とし、根は春風のなこの海にうち霞るがごときをもて、遠帆とこそ名づけたりし

くれ竹の千世や月雪花の友

或日振々亭に遊びけるに、机上を探れば一草子あり。是我が老翁の、青山緑水に心をやり、花曙雪暮に思ひをのべ、又はかれに讃し、これが需に隨がひし五七五をば、夜話の折〳〵この主人にかたりあひ、且斧を乞れしを、雪太郎まめやかに筆し置れしもの也き。見る〳〵歡喜のあまり、亦我耳底にとゞまれるをも三四七八と是に增くはふれば、塵つもりて山の井の淺からぬ餘子の深切を拜し、猶其撰を乞て冊のついでをなす。たゞに阿父の癖として、事々物々捨るがごく、其日其時の興にしつゝ、しるしとゞむべき事もなければ、八十年來の玉藻の數もやゝ渚にひろふのたぐひなるべし。げに〳〵風雅には富りけるものを、是我川上の家の流たえせず、千載の龜鑑とし、ついではまた我黨茶道のたすけともならんやと、櫻木の花にもうつさまほしくおもふて是に跋す。

戊午の冬　日々菴宗雪　日々菴　自得

能靜草

荘丹

此みちにかばかりたくみなる人の今の世にのこれる事、きしかたゆくすゑ有がたかめるを、御會のたびにつよ〴〵としてまゐられし、としるされしは俊成卿九十の賀の記文なり。げに才と年とうちあひたるは、むかしよりまれなることとなるべし。莊丹翁、わかき頃よりいま八旬にちかきまでつくれる句どもをつみあげなば、たかき年の老もかくるゝばかりならんか。もとより名利のさかひに足をふまず、江戸のかまびすしきをきらひて一所に杖をとゞむる事なく、ひたすら閑を得靜をもとめむと、いまは与野といふ所に薄のほやつくりて人にしらるゝ事なからむとす。西行の撰集抄は遠ければいはず、元政の隱逸傳中の人なる事はうたがひなし。かくるといへども人ゆるさず、したがひまなぶものすくなからずとぞ。是その句にたくみなる故なり。翁たゞよく靜なれば、人呼て能靜翁といふ。此頃句集を上木せんとして、予にひとことそへよときこゆ。翁のいまだ若かりしむかし、猪武者の編集あり。その頃予幼名は良治とて作者の中に句をならべたり。つら〳〵おもふに是五十年の昔にして、翁はすでに渭濱の浪を額にたゝみ、われまた商山の霜を眉における朽入道となりぬ。かゝるひさしきまじはりもめづらしからずや。此集の序かゝむもの、われをおきてたれならむと翁の申さるゝにまかせて、なほゆくすゑもかゝれとぞおもふ、かゝれとぞおもふ、とかの俊成卿の杖にそへられしふる哥を、かへす〴〵うたひて隨齋成美序。

文化戊辰　成美

能靜草叙

吾蕉風にをけるや、翁が洒落は置て論ぜず。たゞ其・嵐の風骨をうかゞひ、蓼先師の譚笑をしたふ。しかるに壯年來の口號をしるし、かつ筆して、すなはち能靜草と題して巾箱のものとなし置るを、門生菜子ひたすらに寫し與へよの責めをふさぐ。もとより大邦の俳客の覽におづかるべきにあらざれども、譚古傳中、聊みづからの心の紛をとくものなりけらし。

享和元年季冬　莊郎書

能静草　藏二于黄蝶堂一者全矣

○春之部

時在二予田家一

馬の尾のしづかに垂る初日かな

大和行をおもふて

蓬莱やこゝろに花の吉野榧

はつはるや老をやしなふ草冊子

元日や。王。母が桃の童子教

白ヲ壽二四十ノ春一

わか水や。ま。づ立よれば。か。ゞみ山

初春や若きが中に干大根

はき燕脂の春めく肆と成に嶋

梅がゝに華こそさぐれ片折戸

綻る業平蜆むめの花

おどけ客七種うつて戻りけり

鶯の右手を放つて初音かな

はつ午やあまぎる雪の十二銅

初午やまづ拍手は酒杜氏

誌二壽藏一

うぐひすや朝な〳〵の布施に何

しら魚につらぬきとめぬ價哉

何作る日向の脊中桃の花

はる雨や二葉に眠る牛の角

春雨や橋場菴崎眞乳山

春雨や奈良の鹿には紅葉傘

筑波

むらさきの塵に交る御山哉

出流山

おがむ涙岩屋のしづく春雨歟

稲づまに其身を悟れ小鮎汲

江戸牛九郎、牛太夫と名をあらためけるに

はる霞いほり看板幾代へむ

うしほ煮の花柚なりけりちる櫻
庭作り旅に手をうつつくしかな
牽馬の若殿樣や花盛
花ざかり極彩色の日和かな
さくら見る人の歩みや臺事
朝〳〵の鏡見せばや家櫻

班石亭

鷄を雛子に見ばやの華の宿

途中

小娘の木登りしたる櫻かな

應牧君之需

もゝの花纔に入し御門かな

讀茶五千句

けふひと日此文覺は花の瀧

太平無日不春風

音信る囃子はいづこはるの風
螢見ればさもなき池や鳴蛙

臥龍梁

同スト嘉師

うめがゝの這渡りけり茶店が床

日本堤

うぐひすや堤八町むかし節

懷蓼師

わすれめや服紗さばきの海苔二枚
向上の一路なりけり海苔の味
出代や人のこゝろの鏡磨

駿府時雨窓菴有談笑道場之額

春は滿俳道場の旅寐かな

三保

かすむ日や松にもかけずしほ衣
寺町に雪蹈の音や飛胡蝶
欠する人の多さよもゝの花

季吟先生之墓

上野から寺は木間ぞ花の春
方丈の灯はしらみけり山櫻
山吹や蓑ひとつある筏乘り
欵冬や橋次が駒も歩行渉り

菅神法樂

墨の香の殊さらにこそ神の梅

涅槃會や雪も氷も四句の文

懤つらぬ頃でおがむやねはん像

磯邊明神

神の前むかし蒔繪の櫻かな

那珂湊

いざさらば青きを蹈んより若和布

讀蒙求

物よみの我も雀や春の空

觀唐崎新之助輕飛

ほめたりや蝶のふるまひ下り藤

我死ばもゝ梅柳うすき酒
かもの嘴鴫のむら雨　晋子

我しなば桃と櫻に草の餅

足利學校

釋菜の跡のしらべや春の鳥

行道山

岩角や水ぬるませぬ谷の聲

武州小河松調閣ノ藏百富士之寫ノ中別有ニ騰リ龍之形ー

靁のはるかに春の高根かな

寛政辛亥季春六日修ニ造ス蘇藏ノ。在ニ于武州足立郡鈴谷邨妙行寺ノ裡ー。因觀ニ衆好法師之和歌ー

華さくら雙岡のおもひかな

吾呼古されし菜窻の號を贈るとて

花ながら參らせ籠や薹立菜

○夏之部

うつせみの足袋片づけつ更衣

ひろ蓋に乗べき花のぼたんかな

妙観が鈍き刀や花牡丹

觀世水寶生雲やほとゝぎす

乙鳥に集などは借ず杜宇

草の戸に丁子がしらや子規
よし原のうしろ姿や郭公
探幽が墨繪かけた歟ほとゝぎす
ほとゝぎすをのが力や硯墨
しのゝめや袖摺稲荷ほとゝぎす
仰あがらねば見えぬなり
ほとゝぎす笠木ばかりを三めぐりの
杜鵑鳴や今さら朧月
紫陽花や只一輪のよし野山
筝やうしの角文字直な文字

題帶引朝比奈

筍や項羽が山をぬく力
灌佛のけふや鑄物師を摩耶夫人

鎌倉

右ひだり扇が谷や麥の塵

若宮神前

思禪師のむかしをおもひて

かくれたり鴨脚の陰の蝸牛
杜若帽子に名あり澤之亟

桑ノ弛・蓬ノ矢

大太刀を弓に蓬のかぶとかな
軒あやめいづれ幟の美髯公
下闇やところ得顔の藜

市川雷藏助六の出端

水〱と水の市川かきつばた
撫子や馬骨の中の唐錦

夕殿螢飛テ思ヒ悄然

大内へ推參したるほたるかな
鍬鍛冶の澤へうち出す螢哉
捥久に狂ふて見せるほたるかな
岸の竹ほたるに撓む斗なり

大傳馬町天王祭禮

祇園會や幟の義なら木綿店
腹中の書物にあらず夕すゞみ

題鐘入

ゆふ納涼鐘にうらみはなかりけり
よし雀の拍子揃ふや船大工

青丹よし楢の廣葉のわかか葉哉

人形町

人込を歌舞妓役者や夏の月

川狩の淺瀨とひ鳬都人

かはほりや衛も通ふ藏やしき

小金ノ御牧

夏草や莊子が云る眞の馬

幟見る風を端居のはじめかな

みじか夜や國守の泊る宿のこゑ

伊良少時師事先生於武江。爾後越在于四方。今歲四月念二日謹聆先生以去歲孟夏十有一日易簀。良不幸不得執之紼也。彼子貢六年之厚實不可企及矣。於是乎請諸宗之專章、且作鄙言、以奠獻先生牌位下。仰冀神夫享之。

夏衣着やこゝろの藤ごろも

偶佛生會之日、當喫蓬餻。

此時板齒搖落。於是乎有感。

花御堂既落葉のおしへかも

蓼師と周竹叟、みちのくの行を千住に送る舟中吟

夏川やはなれぬ鷺の船二艘

蓼先師のいはく、句は觀の一字と。

うの花や座せば明るき胸の中

〇秋之部

研上る刀に凄し今朝の秋

町もはや鯵すさましき光りかな

七夕やさそなら傘も春日山

たなばたや鳥羽白河の車かし

七夕やいとはなやかに竹の露

七夕や明るわびしき牛の面

けふ洗ふ若紫の硯かな

それながら糸屋の娘星祭

白瓜のひま行駒や靈祭

靈祭

鼠尾草や松山鏡水かゞみ

大平山

木の下露莧をあふぐ御山哉

名月や染らぬ色の糸すゝき

墨田川

名月や花にも寺の十五日

老らくのそら耳歟もし虫の聲

瑞巖信士一同忌　江戸半太夫也

その床の片瀬參りも寒かりし

雨竹庵にひと夜かり寐せしに

雨歟むしか枕に通ふ明のこゑ

誰家ノ玉笛ゾ暗ニ飛レ聲ノ

ほし合に吹はすさみそ一節切

鹿の音のながれて屆く莧かな

身じろぎを抑なさるよけさの秋

おもしろや飛蝗も牧の駒

張儀が筆のすさみよ三日の月

三日月やまばゆき昏の郷かざり

新場

夜がつをの火影なりしを秋のくれ

日本橋邊

朝霧や歌舞妓の太鼓河岸のこゑ

經にとく諸天の外や高灯籠

鳥さしのしらぬ梢や高灯籠

先人十三周に、其墓のちかきあたりに在て

此秋や吾健かと手向草

しらつゆや簾にかゝる朝清め

途中

女郎花多かる野邊や菌狩

后の月氷の鯉の篠かな

老境

廿ほしに寒き眼や十三夜

古河永仙院裏に、三喜先生の旧跡を尋て

跡やその道を傳への松の露

行秋や芒の波も飛鳥川

境、笛島氏にやどる。其夜は碁盤人形に殊更興じければ

出つかひや坐敷の錦木ゝならで

大江の佐國は天性はなはだ花を愛す。其子の夢みらく、亡父來り告て曰、蝶に化し、毎春花園に遊ぶ。其子追慕に堪ず。衆花を栽て、房ごとに蜜をぬりて羣蝶に供す。

しらつゆや佐國は蝶のいたり者

直道を孟母が機の花野かな

眺望

松嶋や定ぬ月の置所

新大橋の邊を散歩す

まつ宵と標客に見ゆるうしほかな

もの云はぬ亭主ぶりかなけふの月

神奈川に遊ぶ。折から葉落て十二天の汀明らかにして

波てるや我にことたる七日月

川霧や勤ほのかに弘福寺

名月や水想觀の水の物

○冬之部

手ごゝろの卵たゝくや初氷

濡て行數寄屋大工やはつしぐれ

水仙や兎の耳も旭影

いくばくの雨露や吸けん枯野原

はせを忌の花手向ばや芙蓉巾

旅中風雨に逢て艸廬に歸る

芭蕉忌や吾破笠も旅の味

あの中に鰥の家や濱ちどり

にぎやかに篷屋くらすよむら衛

宗八島

遙拜に里は小春の茶の烟

その音も冬來にけらし水車

家と見る灯かけはうれし枯野原

きぬ川

しら絹やしぐれに染ぬ川の面

故雪中葬忌日

木がらしや烟遣行齋支度

眞間行

落葉たく祖父は若木ぞ寺紅葉

市川

日あたりに小春の市のきほひ哉

舟中吟

月はひとつ影は江に鳴千鳥哉

至日閑居

一陽や寒きが中に鳥の聲

茶は春の色に冬至の日向かな

白氏負冬日の詩をよむ

醇醪の日に向けり冬の梅

爲メニ汝ガ安心覔ル

達磨忌や庫裡に大根の肘を斷

田家

日あたりに垣結ふ人やとしのくれ

歳々年々人不同

顔見せや綿を當着の雪の松

莊子云、藐姑射山有神人居焉。肌膚若氷雪、綽約若處女。

かほ見せの脂氷らぬ髮かつら

顔見せや燕脂ほの〴〵と朝朗

狂言綺語讃佛乗因

かほ見せや靈山會下の切落し

かまくら行

稲(マヽ)ふらも穂に出るものよ今朝の霜

千種ノ濱

かれ〳〵し果や千くさも浪の花

古河より十八町ほどに野渡村高福寺に兼栽櫻あり。

今も猶月もれとてか冬ざくら

梁雲信士一周忌

嘗て邯鄲の曲に淨瑠璃のふし付あり

邯鄲の其松風やしぐれ月

はたらきも三面六臂としのくれ

としのくれ其角と飲し人は誰

兒の紅粉翌殘りけりとし忘

越後屋

判とりの往來や年のくれはとり

閨室女七旬の賀

冬の夜や王母が桃のたまご酒

としの市晝夜を舍ず隅田川

附録

若葉の晴紀行

此山の茂りや妙の一字よりと、阿師の靈場の妙をつくせる遺吟も、あが信じ奉れる所なりけり。且は其境へ、住し年さゝげ申ぬる、常住のひゞき尊し春の山と愚吟せし、是を首途のちからぐさと、まだ朝じめりおかしつゝ、

こゝろには鶯谷を夏寒し

艸山の政師は、母のねがひにて、此御山に母を奉じてまうでられ、吾は父母親族の戒名、はた兩師の亡名をたづさへ、先達とたのみ奉れるは前の妙行師にして、旅ごろも日めもす夜もすがら枕となし袖になしぬるは、草山師の紀行一帖なりけり。草庐立出るは卯花月十一日、兎角して江戸に在て同じき廿四日、妙行師にしたがふ道心の僧と三たり、先堀之内の大ほさちまうでして、

うの花のそれを包むや御洗米

日高けれど下布田といふ所に舍る。

廿五日、晴。府中を過て藪むら藪天神にまいりける。けふといひことしは御神の九百年に當り給ふぬれば、ことにたうとくぞおもふ。さら更にむかししのばしく、八王子を經、駒木野の關こえて、こゝに旅まくらす。

廿六日、晴。小佛峠、郡内の嶮岨を過て鳥澤にいたる。

廿七日、晴。猿橋は腹のいたはりにて轎に凭てすぐ。

笹子峠を下りに、

ほとゝぎすふりさけ見れば有聲の畫

此夜は栗ばらといふにいたる。

廿八日、心にかゝる雲もなく晴たり。石和なる鵜飼川に高祖の徳をおもひ、遠妙寺に念珠し、庫裡に茶をたまひ、笛吹川をわたり、酒折宮にぬかづき、甲斐の善光寺はほどちかう立せたまふ甲府を過て、あら川・釜無河をわたり、鰍澤につく。夜雨ふる。

廿九日、晴。宿を出れば路邊、富士川のいしぶみあり。致景いふべからず。

　杜宇早瀬に寒し不二おろし

道のほとりより便船して下山といふに着。羊腸をたどり身延山にちかづく。此時にいたり、吾ねがひみてりと、そゞろ涙に袖をうるほし、御山の麓につかれをやすらふて竹の坊にやどる。

五月朔日、晴。御山高祖の御影、および御骨の寶塔に安じ奉るを拜む。草山師の歎息さこそとしのばれ、

　安穩のまこと仰ぐや夏木立

又

　一上靈山色　行ゝ雲氣深

　絕塵都世外　寶閣照人心

それより奥の院へ攀のぼり、坊にかへる。

二日、晴。坊をいでゝ麓のとある茶店にて、妙行師に袂をわかち奉る。道、西行坂・西行の松といふある峠に眺望す。

　夏蔭やしばしとてこそ人もよれ

三日、雨ふり、晴。萬澤より岩淵に出て、それより根方にいたる。

　歸路新晴日　延山終樹深

　滑稽甘水飯　自是故人心

　　栄窓先生遊身延山歸途、過茅屋敢和之。

　　　富士山下伊達綱博

醫家伊達甫折叟之令子、俳號曰多少。學儒京師巖垣氏、學俳雲中庵。

根方比奈村自足亭歌仙半折・伊達氏亭同一卷于茲略之。

　　雲歩恭阿彌陀佛應求

寛政十二年八月三日　於甸山養氣館

獨吟

風蘭の簷たちまちにけふの月　荘丹
　槇に霧たつ前栽の奥
篠の弓曳しぼりたる棹鹿に
　はさめる腰の烟管いやしき
洋〳〵と音なき川の水の色
　荷に作りにし綿の豐年

ウ
錫ふつて俊乘都の寺勸化
　兒に愛相もいふて別るゝ
とをり雨跡なくやみて日は斜
　樹〳〵に聳る城の萬歲
鞍上の顚に句を得る毫とりて
　金華の臘酒今に醒ざる
秋はたゞ窓の小草の朝じめり
　うちすてきぬた薄月の下
我戀は身を簑むしのしのび啼
　醫に問るゝもつらき煩き
花あかり土圭は鳴ど暮遲く
　めぐる茶臼の青き春かな

二
のどかさは隱逸傳の不審紙
　八端がけや栢莚が友
やね船を隅田河はらに乘放し
　いづれ菖蒲に百草を採
貧しさの中に養ふ母ひとり
　他國あるきもとし〴〵の留守
門並の新地はすこし佻めきて
　貰ふ祝ひの七ところ鋏醬
むらしぐれ傘とるまでもなかりけり
　未だ更がてに夜講果ぬる
蟀の吟そこここゝに月の頃
　圍爐裡にはねる栗の山里

ウ
中〳〵に咄せばやさし相撲とり
　たより求るかり物の禮
隼して鰭ふるまゝの苞の鯉
　猶たちまさる市の人ごゑ
瑞籬（西井清）のすが〳〵しくも花の中
　ながれは淺き如月の水

こはかき捨たりし詠草な、そのまゝここに附錄するものなりけらし。

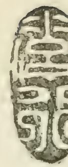
書ものもて人を導にあらぬ莊師の言行を世の人に施さんと、道の道にあらざる文のあやなるものを、その有のまゝになすと、う婆そこの茱萸、勸善懲惡の筆を信心のために採。

かくれ家も今は求めじいづくにも老のすみかは靜也けり。能靜老人、年頃の發句・獨吟の哥仙・身延の記行等を梓行す。冊子の後に完來筆とりて、その能靜なる老がすみかに贈る。

于時文化六年己巳冬霜月

をのゝえ草稿（さうかう）

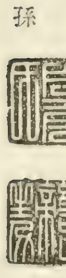
乙二



我聞、佛ののたまへることゝて、心の師とはなるともこゝろを師とすることなかれと。何くれのことにわたりて、いととうとく覺え侍りぬ。松窓乙二坊は、俳諧の伎に此境にもたどらで堪能なることは、駒の蹄のいたれる際み、舟の舳のとゞまるかぎり其名あまねく聞えて、何國となくす杖の停るところ、山梨のすき人等が年頃のまどひは、いなのめのあけゆくぞ明らかにもなりけらし。將、齡既に七十年のしほに近く、いたつきにさへかゝりて、え起もやらず侍るに、十竹坊はらからの女とかたみにかぞの叟のこゝろのはな、いたづらにちりうせ、言葉のはやしむなしく埋木とならんことをゝしみ、もしは末の世のため、且はなきあとのかたみとおもひて、こたびあるが中の金玉を撰びて板にゑり侍りぬ。おほよそかぞいろにつかふ道多かる中に、志を養ふをもてむねとすとか、古しへかしこき人のをしへにそむかぬこそ、いといみじきわざなめれ。

坊が其先はいさしらず、いその上ふりにし代より我家のけんざにて、坊は鬼子父君の遊びがたきにてさへ有ける。花をとひ月をおもふにつけつゝ、いと親しくつかふまつりぬるまに〳〵、予も又難波津の何事もたど〳〵しきいはけなき時より、此道のことなど、千代のふるみちふりにし文どもなど、かた糸のより〳〵にものしけるなさけの余波、みぢかき筆のつかのまも忘れがたく、又はかの、花の葉もみぢの下葉かきつめてこのもとよりぞちらんとす亂、とかいふふる歌にもよく協て、いとまめなることに聞なされて、渠が需にそむき得ず。そがことはりは松井権屋が眞名がきに譲りて、拙きかぎり世の嘲りを打忘れて、卷のはじめに、文政癸未季夏、白石城西常盤崎の隠荘聞蛙亭の北窓に筆を採る。

鬼孫



をのゝえ草稿

正月やわすれてあれば袖の月

母のあるむ月七日の寒かな

正月のころもにさはる染木哉

　　むつ月の閏あるとし、武さしの友人へ申おくる

元朝の不盡ふたつ見んうら山し

　　江戸に年を迎て吾妻橋より眺望

万歳ものぼれつくばの朝消

川風のさらば吹こせうめのうへ

大津絵は梅にうつらぬ寒かな

子を呼に出て子を連て梅ゆふべ

　　奥の細道に、月の輪のわたしを越てとある所也

かはる瀬の月の輪わたり梅の花

　　しのぶのおくにて

梅さけば茶の實植るときく日哉

うめの花これや小家は絵にも書

山間の空を嬉しとさく梅か

行方の海苔柴多き月夜哉

のり柴も風が吹ごやあさぼらけ

海苔のよるなぎさも過ぬ馬のうへ

松風や時うつりして海苔の寄る

ときん着て見れば淋しき柳哉

青柳の中より見たり朝朗

へなたりをへな〳〵と吹柳哉

正月の下戸くどり來る柳哉

寐て起ておろかもこれやはる心

吹ためて風は置やらはるごゝろ

麻の種三粒持てもきく蛙

のり喰に鼠は來るになく蛙

はるの朝蜆は黒きものぞかし

春の風市の月夜の身にそはね

鶯や田づらより來て見へずなる

反故燒て鶯またん夕ごゝろ

うぐひすのはつ影うつる紙帳哉

鶯やはらみ雀はくるしいか

老が身は薺屑にも劣けり
親と子の間にこぼるゝ薺哉
木のほやもかすみ殘さぬ夕かな
水呑て哀さめたり八重がすみ
鬼つらや井戸のはたなるうめの花
丈艸が宿や梅待茶摺小木
江の空や歸らぬうちは鴈のもの
月のある夜を唐めきて鴈の行
手習に越しはむかしはるの山

ふる事をおもひ出て

えほし着て白川越す日春の山

常盤崎鬼子公別莊

はるの山に取まかれてぞ住れける
鶴などはとしよるものをはるの山
いかのぼりまだつめたいか山の空

家に七ツになる三郎もちぬ

夜は夜とてわすれね紙鳶の置所
東風吹やまがきが嶋の注連はりに
水と山はるにして置ところ哉
春もまだ子の淋しがる月夜哉
うぐひすを吹や小城のあまり風
苣のうね藜の徑なりにけり
雨に鳴尾長もこれやはるの鳥
野の空をうけてあいくや春の鹿
雀子や家のうしろはあさぢ原
子をよぶかすゞめの聲のふとくなる
はる艸によきゆめ見るかはなれ家
春草にそつと置たし我いほり
きさらぎや起はぐれしも朝ぼらけ
霞戸や死んだふりしてけふは寐ん
かすむ日やあまき物くふ布留の里
雪どけや近おとりする妹が家
ちる梅の片空かけてなくひばり
小田に降雨見ても引小鴨哉
雛追てすぐにこがるゝ男猫哉

日黒みち

木がくるゝ人うぐひすよ〳〵

はるの夜のねぶたき眼にも峰の松

春の夜の爪上り也瑞巌寺

鶯の日はくれにけりきじの聲

花さくや朝めし遲き小商人

ちる花や脚布(ハヾキ)してゆく道のほど

花の雪ふすまかぶりし夜に似たり

はなの香や夜のこゝろのほそ長き

木の股の哀なりけり夜のはな

途中

莽に見ゆる花の山風ふきにけり

墨繩にうつくしうちるさくら哉

花守の不沙汰か小田の片あらし

上野にて　二句

ふるさとにくらふればちる櫻哉

佐保姫のたぶさの風か少しヅゝ

佐藤庄司が丸山の舘の跡へ、人〳〵とゝもにのぼりて

酒こほせすみれの外は山のもの

腰の法螺菫つむにはむつかしき

羅漢寺のものとなりけり春の暮

花に乞食增賀のころも着てありく

さきの世は朱雀の鬼かつゝじ賣

なまなかにつゝじ植てぞ山ごゝろ

露なしの里、鬼子公の別莊

まてば來るきゞすの外は松の風

小鳥らが餌もありけ也つばな原

芹提て出たりな鷺のすみかより

行かたにゆけば鴈にぞ逢れける

七くさの七朝過し柳かな

はる雨や木の間に見ゆる海の道

晝の月春は減るとも思はずや

ころもがえ根つかぬ松ぞものたらね

何となう子の日嬉しき袷哉

降雨にくらるつけたりほとゝぎす

梁川竹隱居が許

子規鳴やこゝにも山のつゆ
麥ふみし人のうの花咲にけり
しきみつむそこらあたりの若葉哉
若葉吹風やさけゆく馬の沓
山のはの空もほたるも夜明かな
螢火や雀が家の竹の影

乙二とは、をうなめきたる名なりといふ人に戯て荅ふ。

鉄漿捨に出れば艸の螢かな
鬼灯の花は暮たに飛ほたる
蚊一ッに青空ちかき夕哉
蚊に起て御皃淋しやみろく佛

こぞより江戸にありて、花にきさらぎの十五日も、つゝじに彌生の晦日も暮て

御ほとけのうまれし今朝や不盡の山
かたばみの花雨ふると鳴すゞめ
かたばみの花の宿にもなりにけり
さみだれのすゝきむら〳〵夜の明る
五月雨の水鶏鶯尾長鳥
みじか夜を寐たや牡丹の花の上

酒田高野の濱にて

よる波の砂に濁りて夜みじかし
ものゝ露落るも嬉し牡丹越
笠嶋の人が笠着て眞菰艸

書窓

かぐや姫紙魚の行衛ぞおぼつかな
哀げもなくて夜に入藜かな

酒田にて

古妻やあやめの冠着たりけり
ふるさとを思はぬふりぞ粽とく

仙府にありて

粽とかで雄嶌の僧はいなれける
投込で見たき家也さゝちまき
戸あくればけさの影さすあやめ哉
押水によごれぬけしのつぼみ哉
あやめふけ目白の不二の暮ぬうち
常盤木の大こゝろなる落葉哉

松島の方へ行業兆法師など、わすれず山の下流まで送る。

松葉ちる竹筒は酒の盡やすき

朝の間に見てゆく野路の清水哉

妻と子が大事のしみづ濁しけり

これはむすめが縁ならずして家に歸り、家刀自は病にあやうき時の句なり。

水かけてあかるくしたり苔の花

出羽行脚の頃

はし姫のひとりはあれよ最上川

かたびらや風のそばへる舟のうへ

嘉右衛門に帷子時の繪書かな

帷子にはなれ切たり朝の空

鵜匠らがひたと濡たり小夜嵐

ゆふけしき鵜のおし水にはじまりぬ

栗まくやわすれずの山西にして

旅ごろも奈須野のいちごこぼれけり

久保田旅寓あした

蚤のあときゆるまで見んつくば山

鮓なれよ松をかぞへてくゞるうち

桂女も鮎つる糸は流しけり

たちばなのつぼむとくさきむかし哉

途中急雨に逢し時

かれは塩がまの琵琶法師に踏つぶされ、これは多賀城のあとの畑守にもらひぬ。

青桐の笠に見てゆくしづく哉

山鴽の淺香も過つ青あらし

鳩の中はしり過たる鹿の子哉

風かほる暮や鞠場の茶の給仕

世わすれにはしり入けり青すゝき

蕗の葉を引裂て見る暑かな

ゆふ立にすはやこゝろの深山めく

すみだ川郎興

蘆の根に落すと見しかぬれ扇

水鶏なけ水乞鳥は暮なり

龍宮の圖

八大龍王すゞしさうにて小淋しき

山人は山草かれや夏の月

山の井にあすまで殘れ夏の月
蓮の糸はすの莖とも詠けり
しら雲や茅の輪くゞりし人の上
　宇考亭
土用東風天の川より吹やどり
　小松途中
暑ければ雲のいやしき山の上
さうぶ湯や濡手に受る雨三粒
水飯やあすは出て行くさの宿
　螢の泡、鬼のめしなどいふを
あぢさゐのあらぬ名を呼山家哉
　繖路山のほとりにて
紫陽花のあすはどこまで道つくり
あぢさゐやしまひのつかぬ晝の酒
　蘋林が我を見送てたてる兒も、ちいさうなりて双の關にいたる
松しまへ行影うつすしみづ哉
さくら花ちりぬ早苗の風まつり
鶯のうしろ見らるゝあつさかな

ばらの花ちりぬるをわが岡の家
　杵の木のまくらは、つぶりのいたきものなれ
南天の花こぼるゝよ腹のうへ
みじか夜の滿月かゝる端山哉
　成美が幼きむすめの一めぐりに申遣す
其親に其子とゝきし合歡や咲
　出羽のゆきゝ、闇丈が家にやどりて
松の葉の歸れば來れば軒にちる
螢火や屋根よりこける苔の音
花げしや空もかざりになればなる
ほとゝぎすまたあけぼのゝまみれ哉
　母の身まかり給ひし時
とり付てたゞ子ごゝろや夏の闇
　なきがらを棺におさめまいらすとて
煙さへとゞまるものを蚊屋の内
星となりて夜は見へたまへ母の影
高き木に花もあれかし星の戀
すゞしさや願の糸の吹たまる
星待やさもなき門の糸芒

しのぶちかき所にかり寐して

七夕の闇のひろがる名所哉

鉄船が魂を迎るとて

我つくる茄子の馬に乘て來よ

天の川田守と語る眞うへかな

母の喪にこもりたる頃

喪の家をはやくかたぶけ天の河

北の岡山に葬奉れば、あさ／＼其所の霧を分て

置露にいつまで減るぞ墓の土

萩ちらぬ方へ蒔なり雀の餌

右ゟ喪中の句也

よんべ寐しころにもなりぬ秋の月

蓮藏密寺にとまりて

粥腹のへるともしらね峰の月

さす月の寐所やすきすゞめ哉

かけのぼる背戸山あれや秋の月

名月や鯖野の奥は露どころ

秋立やうすは荻萩の葉にも劣らで

三日月や世すて人らが立さはぐ

鬼子公に扈從して

ふたり見る月こそ出れ千賀の浦

松のなき世ならば何とあきの月

けさも寐て行かむぐらの鹿くさき

住鹿の菅は秣に苅れけり

疎籟老人が山居を訪ふ日

露寒し我あし跡を又かへる

つゆちるや朝のこゝろのまぎれゆく

山にある家のやうなり露の闇

夕露の梢揃はずみちの隈

碁笥ほどの芋もちて候艸の宿

大風の紫苑見て居る垣根かな

寐冷せし家や紫苑の片なびき

十七回

つもる秋親のしらがに似る斗

あさがをや白き雀をけさも見る

堂守が茱萸まで喰ふからす哉

鄙たる聲と荒たる宿と並居たる人のなみだと、

ひとつ所にあつまりたる哀をさしのぞきて

木槿さけ〳〵とやあつさ呼ぶ

山風に別れていく夜旅の月

榎の實はむ鳥の中より鳴からす

篠垣をくゞれよ秋の花もらひ

平浮にて

鹿の聲うしほくさくもなりにけり

野分吹空もせまれり山しみづ

山陰の野に暮いそぐすゝき哉

三日月を見にこそ來たれすゝき吹

友人を訪ふ

扨は留主すゝきむすびて置れたり

さし餌して鴫に秋をぞかたれける

青空や芒に寒い癖がつく

疊にも荻のにほふか蟻の來る

山陰やこゝ佳人の木綿もふく

いなづまや谷の小寺のとまり客

佃島

親もたぬ舟のねづみやあきの風

角田川逍遙、雨に逢ふ

鴫とりのかづく蓑なし芦にあめ

初鮭やつゝめばそよぐすゝきの穂

波よけの合歡苅分よ秋の月

名取郡の道ばたに人まち皃の小家あり

田のくろに豆のかはりかきくの花

鴈などをころす家さへ菊の花

傘ほして浮世めかすな菊の花

窓前

しら雲は遠いものなりきくのうへ

赤いとて淋しがりけりきくのはな

上毛道中

ちゝぶねの裾引はへてきくの秋

きくを見てとしよりたまへたつた姫

出門口號

成美は題目にひたとかたぶき、巣兆ははやく酒に醉とか。みち彦は向ふ嶋に隱居するともきこゆ。

きくの秋しらがくらべにむさしまで

武さしのしたしかりし人〳〵の家も遠くなりぬ。たゞこの山のみ、ゆく〳〵我うしろかげた見送るもわりなく、大田原のすくに入時

秋これよりつくばねにさへ別ける

松窻獨坐

名月はすゞしき苔のにほひ哉

天の川名にながれたるこよひの月もうらみになりぬ。息せまる病の堪がたければ、紙帳の中へくゞり入時

あすの夜も御宿申さん月さらば

中秋無月

月にふりておのが哀となる雨ぞ

君が代の千世の數かも稲すゞめ

關守が棒の先なりあきの山

我が腰につけたる朝ぼらけに、はいかいの古人達を供養する事ありて

置露の菊勸進に出ばやな

老躬

ともすればきくの香さむし病上り

なぎの花こんにやくの花後の月

月となるうちも穂芦のいそがしき

日のさしてとろりとなりぬ小田の鴈

我ものとさはげや鴈の九十月

あさがほや今朝は八月十五日

月しろはかならず吹よ根なし風

立琴や家の四隅に風の吹

緒逸・春翠・素菊なぐして、天王寺といふ山里に分入て

霧雨やあまりにひくき木のうつほ

松のかづらの長くみじかきにかげろひて、夕ぐるゝ谷に人あり

鹿笛をひたすか水におよび腰

川稲の花おさまりし月夜哉

荒谷より澤邊といふまでは小みち四十里ばかりのよし。立るかゞしの弓と矢もこゝろぼそく見ゆるところ也。

いとせめて艸花多し道くだり

山の日玄々が許にて重陽に逢ふに、中尊寺の

十日の哀なら見せたしといふて、二溟法師我
　が使に我が來て
あすはさくにわらぢはけと云て歸けり
　同じ人の住ところは東谷なれば坊の名とす
木槿なく秋はいつまでひがし谷
　光堂
露の身にあかりさしけり堂の內
　仲秋末七日、祇詮が宿
素湯あまし末の三日月見るやどり
　吉岡と古川の間にて
稻たんとつけてみじかし馬の首
とんぼふや片脚鼻し鷺の上
　しのぶのおく
水はやし龍膽なんどながれ來る
山人は木祭すらしはつしぐれ
しぐるゝや山鳩取が來るところ
しぐれけりほち〳〵高き竹のふし
時雨雁箕手にならぶ時もあり
　下組の關を西に出て
時雨てや大分見ゆるさくらの木
とにかくに篠屋はむすべししぐれ人
　秋の別なきのふ吹送りしが、けさもやまで
月越の松風ぬらすしぐれ哉
淋しさに富や時雨のくだり間
　飯坂春翠
山水や鴨の羽いろにながれこむ
青竹のそなた表や池のかも
月の夜をきたなくするな鴨の聲
　其角にたのまれし吹井の鶴も、おのれが功な
　き(恨)限て今にこの日なや鳴らめ。
冬の朝日の哀也けりはせを翁
筵のかげ火桶にうつるあしたより
十月や日のくるゝ日のうめの花
塩買てかへる徑や落葉時
木の葉とはちる頃の名かこのはとは
　總路山ちかき家にて
灯の影は冬こそよけれ鹿のくる
ふすま着よ〳〵とやみねの松

家ありときくも寒しや山の陰
竹の葉の世にうつくしき寒かな
冬鹿のあまりちかきぞむとくなる
朝茶のむうちは居よかし冬雀

池魚の災にかゝりし時 二句

佛達をものゝ落葉にのせ申
琵琶形に雪の降けり家の跡
降雪の深山しきみは高くあれ

まがきが嶋を北に見る所は

小鳥井の小磯といはめ霜日和
梅も家も燒し四とせの冬が來た
針に苧を長く付たり冬の宿
湖の明ほの覗けみそさゞる

我があとにつきて來る太呂が背の高きに、など苅萱は枯てひくき。

野しぐれやさはこの御溫泉に降つゞく
冬艸やはしごかけ置岡の家
枯蘆の麁相にあける月夜哉

冬の夜や淺香の客はうめの花
塞空や筏にのせし鍋の跡
消まいぞあられの音がうそになる
落馬しておもしろげやむ霙哉
こほるゝとのみ申たし降霙

いたつきのいゆるをまつ事五日ばかり、太田の人〳〵に案内せられて足利へ行途中

くたら野の鶴にもまけし脚二本

あしかゞ學校

踏まじよ冬の齋も昔めく
水仙や齒朶買ふ心あすになる
冬三月折角あそべ濱ちどり
雄じまの夜またもつめたひめにあふた
みぞれにはさせる句もなし山の坊
田に麥を蒔國へゆけなくからす

草庵

雁鴨の日さへみじかくなりにけり

十時葬に行事六たび、さるほどに雪としぐれと降かはりて

都鳥なるれば波の鷗かな
小坊主は凧もひかぬや散このは
一しぐれするや素堂が嫁菜まで

門を出る時

いつの旅も時雨さそはぬ事ぞなき

いではの國へ赴とて

かさゝぎの巣をこそはこべ老の道

赤湯入浴　二句

松かぜや湯婆のさめる夜にも似ず
山烏のおのがすそ野も雪ふりぬ
尻去りに鴨見て入りぬ門の口
萩すゝき従弟のやうに枯にけり
親の日の朝日を拜む枯野哉
風ふけばふり込雨や炭けぶり
鷹狩の歌にもれたるわらぢ哉

きさらぎ廿五日、菅神法樂

きのふ見しこゝろには似ずうめの花
鳫よけもはるぞ名取は古郡
木鋏のおそろしけなり接穗時

四五文の油買ふ夜の花しろし

酒田日和山眺望

風すじはあつみになりてほとゝぎす
ほしの宵きくの宵にもなりにけり
馬の尾もくれゆく九月九日哉
五位鷺のくらゐまけする野分哉
すゝき野も薄垣一重雪の降

門前の老婆が何がし行脚をすゝめて、頭陀袋を燒せし火のあやまちたるにや、そこら野のやうになりしよし、あはれなり。されど膝をいるゝ所は恙なしと、人してふるさとの文にきこへければ

燒たるも殘るも古巣かへる鳥

法務の世を遁んと思ふとし、ものへまかりて

とく／＼と身の春さそふ山水歟
花見るやつほ／＼と鳴水のおく

六月朔日、つがる玉之亭

手にのせて氷見る間を朝こだま
むかし誰が旅寐はじめて梅に鳥

そもはいかいの旧跡須賀川に住て、世の人の見つけぬ軒より、ひとりは栗毛の馬に乘、ひとりは笠の緒の玉さや／＼と鳴らして、武さしへ旅だつは老人雨考と多代女なりけり。うらやまし、いくら寐てつくばねのはるを見るぞ、幾日經てすみだ川の鷗に逢ふぞ。

蝶のぞく宿なら覗け道のほど
山の月あられこぼせし皃もせず
師走野のあしもとにある畑かな

傾城の讃

赤人の眼にはすみれか寐る一夜
あすもふるとてけふも降しぐれ哉
今朝虹をかけしともいふ柳哉

草屋

花の香に出ては鼠の暮いそぎ

わたぼうしかづくは、波のうかれ女か蜑か母か

さも似たり風ふく中をゆく鷗

はこだての空は九月のけふ、冤の先がけなまたで

初雪や御雛の餅の過しけさ

草琚を訪ふに、一間なる所に上を着て殊勝におこなひ居るを、しばらくこなたに待て

いたゞいて御文置間やはしり炭

脇本といふ漁家にやどりを求る言葉

こゝは屋根よりして壁のかはりに蘆茅からめつけて、つぶりのさはるほどの口有。引よせ戸もふけたるかたはらに竹の筒をかけ置ぬ。いとあやしくて、とへば、蚫が鼻の崎を東に、小田面を西に、小舟をうかべて鮑つく時、波の上にしたてゝ海底をあきらかにのぞむ油を入る具なりといふ。また妻なるもの外もて來しが

しづくせし今朝の眼にあり燒わかめ
やす／＼と繭こむ草や家の内

こぞの冬、孫をもふけて

かさゝぎやむ月の中の子は肥る

我家は

水二筋夏花そゝぐと田へゆくと

またもまた秋たつやうな田の面の日

宮古嶋にありて

大せつなうづみ火ひとつかりの庵

なつほ峠より眺望

蜷ほどな舟にも冬のうつりけり

平角が別莊

そこらから出るとは眞事山の月

去年は人の國にありて大雪に肝つぶしたるにもこりず、ことしは我國に旅して鬼柳といふ迄ぐたり着ぬ。秋風のふくには中〳〵老が身のゆだんならず。

ちる事をわすれし萩の少しヅゝ

宇曾利山

山艸やこれも佛のみをむすぶ

横はまにて二十七夜の唫

八月もうらくづれして鳴ちどり

布席が住はこだてへ渡る舟の、追風なくて大間の湊に日を經るに、言づてやらん鴈さへ鳴ず。

思ふにも波をしほりの月夜哉

ひお曲坂

見よがしに青き實のありものゝ蔓

餘の艸は名のないやうに野撫子

ほしにかす心よ明る夜はかへれ

小鳥鳴門も野町の子の日過

馬さしが涙もろさよ御霜月

遊ぶ日は茶責になしや冬椿

たぐるなくしぐるゝ名なり艸枕

師走菜も茂む住家ぞみそさゞゐ

さます事煮梅に習へ子の寐起

一夜ほとけの一めぐりの日、矢越の崎のこなたに舟かゝりして、ねぶつ唱ひぬるに

見るのみか霧の雫を膝のうへ

富士見ゆる所や朝のかんこ鳥

螢滅る秋を淺香の橋つくり

へりゆくや月と酢瓶と薺と

声ばかりづらし師走の角田河

春をゝしむ

さほ姫もいく度けふをふりむくぞ

こま〳〵と穂にこそいづれ河原蓼

月さして歸るもありぬ墓參

はらむとは芒にやすき言葉哉

西王母讃

佐保姫の弟の君とも見られけり

富丘を出て木戸のうまやちかき西に、ほとゝぎす山といふをゆく〳〵見る。

片乘になる駕の戸や苗の道

久の濱とは、久に世を經る人の付たる名か、あしよはき老にも風景をゝしまず、さす日のかげの晴わたるもたのしくて

扇だけよけても波は來ざりけり

なこその關より道をいぬゐにとりて根岸山中に入る。さかしき坂にかゝる頃、駕かくものらが眼に村雨の降かゝりて、すゝみがたしといふを聞て

清水よりむすびかねけんわらぢの緒

石住と云奥山家にやどりをもとむ

皂角の花の香をのみ吹あらし

川野氏の息、うまれ年より七ッ目の兎の繪の贊

のぼりては月の中にもすむすがた

鴈門が何母九十の齡を壽て

十株ヅヽに千代添へきくの九うね

とんぼ追ふ影と、念佛申聲のやさしきが、眼と耳をはなれぬ無南道元小法師。

撫子とけさまで見しを佛の子

今としの良夜は兒孫を側に置て、月見るもおろかにたのしくて

旅寐せば月にも逢はじ葎の戸

分外にまたせてこよひ月は西

月うれし乳房はなれし子の心

鳴音は添水なるべし月の中

うねり笠はかぶらずも、卯月末の二日我につきたるは惟然が步行神か

出てゆくも紙魚のすみかの捨人ぞ

あぶくま川に小舟をうかべたるは誰そ

時鳥鳴ならしほれ釣の糸

我行道のさちあれとて、只竹あざりをはじめ人々、大粒の雨のあしばやに、すはたふげの茶店まで逃り来りぬ。携しひさご押すえ、盃をめぐらすうち、かたはらより、ひさに経ず歸れや〳〵と、うたひ出したるもうれしくて

こゝろみな涼したとはゞ雨の松

出羽と越後をさかふ太里塔下にて

來るも山しみづまたげば越の山

途中彌彥山を仰

草まくら神もすゞしと御覽ぜよ

長岡を流るゝしなの川に遊ぶ日、舟梁につらつえつきて、何やらん案ほれ居たる石海を驚し、問ふていふ、こゝはさいつとし、みち彥が、六人をつゝみて嬉し篷の雪　といひし下流ならずや。荅ていふ、しかりと。いはゞ、みち彥は上手たり、松窓は閑人たり。

帷子の袂やくめば水のもる

新潟にて

待星のこゝらや合歡も波の艸

七夕や拾ふてもどす蜑が櫛

新潟より海越の佐度山を望

小木の間の祖母もかすらめから衣

同じ處にて　はし書有

月の晝波のよるとて皆おどる

彌彥神社

束の間にかはるや住連(注)の風おもて

みのむしにまけぬ實もちて、などこの束の山のむら雨にぬれたる

笠敷て着る事しらず小楢の實

柏崎

町中にねまりたる御像はいとも尊し。今はむかし尾張のくすし何がしが、ひろく國〳〵の事をあつめてものせしものにもありけるよし

御ほとけもしめぢ貢子や待給ふ

わにの住大いその根と呼べきさいはま四里ばかりの間、裾にゆく〳〵波かけられて

蕣のさてもあかるき寒かな

直江の津の三夜さの月を、ひとり〳〵にあて見んとて待宵の日たどり着ぬ。あくるあした、うしほの風、旅やかたの窗に吹つけるより雨ふり出ぬ。夜もふる。ひとり〳〵といふは、ちくま川を右ひだりにしてすむ石海とゆつるとなり。

雨の神磯ありきする名月か

五智にて

住はこゝ椎の風折月さして

歸路

直江の津より黒井の間にて

たまぼこのこれが道かや蘆の中

米山麓にて

蔦の葉のおそらく赤し茶やの茶は

長月四日、柏崎にありて

九日に逢はゞ黄ぎくの寺とまり

重陽も同じ所にとゞめられて

初君にけふのきくにも逢ざりし

こほろぎ橋より思案小路と言にかゝるに、をかしき名の所なれば、しばらくさし覗きて

蘆垣の夜寒の鬼よ寐ずおはす

うき寐鳥のうか〳〵とつめたい秋になるのみか、日みじかな影の、旅のこゝろをせむるよ。こゝの椎谷に椎なくて我袖の上に置露を、ふる里人は夢にやみつらん。ゆめに見ば今少しまちて、蘆の葉分の古道に、蓑に雪ふるすがたを見よ。

繪によする戀にも似たりかへる波

一まがり出てあら海よ落し水

小千谷より高田・出雲崎の間に遊ぶ事四十有六日。長月十八日ふたゝび長岡に歸來て解〻庵に入ぬ。あくれば父の忌日にあたりぬ。

ぬかご燒て我いほふりに奉る

おなじ廿三日、長岡のひがしけ白(マヽ)といふ里に入

燒串にさめ〳〵と降しぐれ哉

時雨會

旅の哀たぶけせうものはせを佛

長岡より小千谷へ行途中

凍るぞといふ聲佗し草鞋緒

粟生津のやどり

寒い笘蜘彦の道を軒の下

むさしとむつの二法師、喜年が別荘にうつりて

年おしむ日もよき程ぞむくさの屋

かくいふは師走の末の六日なりけり。

こぞの秋もこのあるじのもとにありて、七夕や拾ふてもどす蛩が櫛　といひしが、この國をさすらへて又こゝの初がすみをかぶる。

蛩がはる櫛の繪の松はありふれし

乙姫の手向の齒朶かうき身宿

銭提てあらはしたなや薺買

緒絶の橋の其爪がもとへゆくに、德一といふ

山根を過

苗取も植るもひとり子もひとり

海外之部

名になふ怒潮を隔て南の空なしのぐ。影はそれと、此地の人〻にとはでしりぬ。つらなる山・はなるゝ峰、たとはゞ親の袂にすがれる兒、鏡のうへに腹ばへる孫に似たるべし。

待冬を岩木の山にかたれたり

しらかみの麓に、からくさき名のレフケと呼ぶ濱村につゞきて、宮のうたといふやさしく哀なる所あり。

畊となる風もふせがず小家ども

南にさかしく立る山を七面といふ。根山のなだらかにひろがりたる上より人すむ家あり。すこしくだりて、商家・青樓に十字街をなせる所、すべて山のうへとよぶ。

住はすむ七面の冬を背戸の口

斧の柄と名づけて僑居に移りし時

折柴の猶細かれや爐のけぶり

あくるあした

寒けれどたのもし月のもりし跡

はこだて斧の柄にとしを迎て、聞きさらぎのころは、松まへ靑標老人の方へうつらんと思ふこゝろあれば

置ざりになるとも知らず春の來る

かの艸をうちはやす事もなきならはしの嶋にあるに、雪さへいとふかゝりければ

薺なら垣根中なら見ざりけり

留主の嫗はさぞ鶴髪打たれて

藪つたの芽にいひ出すか歸る事

このやうにあやめ葺ても寒哉

去年よりの旅寐に老が身は、あすをもたのむべからずなど人につぶやきし事有しが

死なぬこゝろ今宵の月に見られけり

人の許より粽を贈りけるに、山菅にて結しばりぬ。この艸をヤヲメと呼ぶよしを聞て

あやめよりすゝきの名より哀あり

ほし合の空晴のきて、外が濱へおしわたるよき風の吹出たるとて水主ども、便船を乞ふ者のやどれる家／＼の戸たゝき歩行もいとさはがし。

舟人や梶の七葉の七ッ起

病すこしこゝろよければ、はこだてより松前へうつる留別

あさがほに立出る身は木槿かな

種ひてず麥まかぬはこだて・松前に四とせありて、鰺が澤へ歸郷の舟上りせしあくる日、山添に田ふ植る人を見る。されば道のかたはらに捨置たるすら、あまき露ふる蓬萊の艸のこゝちせられて

うれしさはこれにもたりぬあまり苗

小湊にて立秋

旅の夜はまだみじかいに秋の風

先人、手づから庭裡に數種をうつし植て、とく繁陰をいのり申されしは、二十六年のむかしなりけり。殊に雪のあした・月の夕は、此君ならでもこれに對して硯を鳴らし、盃を擧たまはざる事なかりき。ことし文月中の九日千秋のかたみを殘してなくなり給しが、吹風・置露も身にしみて、たゞ哀とのみ覺ゆるこよひ

名月や親の位牌を松の上

若艸や野に立る木もないところ

君見よや栂伐山を窓の先

ほたはらや芒の芽には波も來ず

古禪師の手向

芋あぶるけぶりにつれて去られしな

山家にやどりて

祖母ひとりいざよふ月を見ざりけり

江戸よりかへりて、草菴立春

旅寐せしはるは昔よむさし坊

御降もまれなる數におぼえけり

長嘯が鼻かむはるの月夜かな

あすの夜は滿月さそへはるの水

隣から南へむくや春の水

たんぽゝや一目に見やる莖と花

ねはん像ひまゆく駒も見ゆる也

これをふみに出て

蛤や波つまづけとならべ見る

六里來て田をうつあたり中尊寺

かすむ事わすれて居るか梢ども

有明は雫になりしさくら哉

月させどよく／＼闇き椿かな

箱が崎仙臺(六)大守公の別莊に、我が片倉君に陪從して春に逢ふ。

屠蘇なめて來る人よみな國の聲

松陰亭

さほ姫のやどりとならば軒の松

ふそくなく夜に入ものや梅の花

作寺に錢なきころやけしの花

山里のならひに

葺とはや霧吹かけるあやめ哉

秋立やうすは荻萩の葉にも劣らで

三日月や世すて人らが立さはぐ

燈籠が消ても來るや水もらひ

これがこのうしろくらさよ露の玉

晦日の又も過けり雪どころ

よきことはことはすくなし歸花

雪車負ふて歸るにしりぬ遠い道

こがらしのいぬるに去りぬ世捨人

木がらしや女あるじの明し兒

巣居が身まかれしよし、きよが許より文こしけるに贈て

けふよりや佛をつくる雪と見る

難波人の文を得てうらやむ事有

住のえの岸に行てふとし忘

旅思

待もせぬうちぞ狐の花も咲

寐る事をあまりきらいな小鴨哉

包まれてしづまる虻や白い紙

松前、そのゝえ早春

三日月を出て見るあとは嫁が君

ふむ苔の匂ふさうなり鳴かはづ

みのむしの雫にうつるほたる哉

あら海や佐渡に横たふ　とありし翁の句も、この地の裏にくらぶれば、中〱ものゝ數ならで

こさふくもこゝろもとなし天の川

事しげき人の爲にや月二夜

小園といふ里を過て、しのぶ摺の石ある所へ

山越する時

晩稲苅れ赤そほ水をふむあたり

しら雲の濁る日もある落葉哉

芋澤といふ山里にて

鳴けば名の聞たくなるや雪の鳥

伊勢にかしこき長官何がしの米字の壽の句を、同じ國の人より乞れて

遲日の神代に似たる翁かな

撫松樓辻翁壽詞

古稀なもろこしの人は逢がたきやうに申置ぬれど

千世の數貝まいらせよ伊勢の蜑

翁の道ばたの木槿の詠を楠亭の圖したるに、いせの人の賛を乞あり。甲子紀行の時を思ふて

旅の日のまだ露置ね句の心

中尊寺　二句

帷子を着て寒がりぬ御僧達

經堂を守る老ほうしは、いさゝかしり人にて

紙魚わかぬつるでに蚕のはなし哉

山鳥は人ひく鳥よ蚋のさす

酒呑のうるさがるなり蠅はぢき

ふたりの孫と笑ふ〳〵、六皮牛にむきて

瓜くふて蟻にひかれそ木かげまで

邊鄕

鶯の老にくらぶる老もなし

一抔(杯)の茶もの〳〵し扇置

他に三とせやみて、五年ぶりにてふるさとの

社會をつとむ。

我箸も苧殼にかぞへまぎれけり

法と願と糸による心のすじのひとしければ

七夕の夜もよそにせず西東

矢にはねをほしげもなくて立かゞし

これとてもさかり有けりまんじゆさけ

ずゞだまを植し母なし芙蓉咲

そこらうちいひ合せてや飛いなご

からす瓜そも〳〵赤きいはれなし

蕣のあはれをかへせ新酒汲

佛にも初穂といはめ木綿所

晝ばかり人來る家か梅もどき

日は西になりぬ柚みその釜の影

蘭白し蜘のふるまひにくけれど

わたり鳥とりの海には灯がとぼる

祭迄すゝき苅せぬ小村哉

朔日の禮からいふやけさの秋

雄嶌より南一丁ばかりさしいでゝ、此國の人

のはかなくなりにける遺骨をおさむる所有。

立ながら珠瓈する僧の後を見るに

泣人のなみだ吹きる野分哉

熱をくるしみて待つけたる空に月も戀しく、

戸口の萩も嬉しきはじめ、かたはらなる寶物

集をとりてよむに、尊く哀なる事多し。小槌

はめでたきたからながら、ものみな跡なくお

さましきよしをも書のせぬ。今の世にいかな

る鬼のこの寶を持つたひぬるにや。

打出した秋なら消な鐘の聲

尾花白阿がともがらのあるじせる遊舫に日の

かたぶきて

鯛に手をさゝれにけりな外が濱

多竹人なしに野ならしむ。我すみかにとゞまる一峨法師に贈る。

ふすま着てきけ鶯の歩行音

はつ雪や晝降ものとおもはせて

翁の日は朝とく起たれど何たかせん、樒つむさへものうくて

時雨まつのみをのゝえの朽法師

達摩忌や南天の入汁の中

荒神の松も買れぬみぞれ哉

鰒ひとつ來て見劣るや遊ぶ魚

宿かれば木綿の貫をふむ寒哉

うづみ火や蘆火たく家の更てある

ふし漬のしづむを覗く小舟哉

そも漁者の短艇にひかれ、閑鷗に伴ふは、詩つくる人のうらやむひとつにものしぬ。中にもひとり釣寒江の雪といへるはよき詩のよし。

嵐にへだてられて出羽の國矢代峠の麓の里にある事二日、猶すだれを押て戸外を見るに、斧の音かすかなる谷にひゞきて、木の間に暮いそぐ影は、世に繪がき殘したるゆかしきすがたなり。

雪に樵る翁もひとり蓑と笠

きのふには似ず、日はなやかにさしのぼれば、おなじやどりを出るに駕もかなはで

負れてもあしする雪の桂橋

橋の名はおかしけれど、寒くくるしきは負ふ人にもまさりたる老が身なるべし。

述懐

慮外なりなやらふ宵の足たゝず

ところは塩がまの法蓮寺とおぼしくて

はつ夢や訪へば出さるゝ桐火桶

春や祝ふ嵯峨袋にて向井平二良

白石城主の家の子の末のすへにつらなるものゝ中に、我庵ちかく住あり。

木兎曳も拾扶持もちぬ春立ぬ

所思

我とても墨はく烏賊の迯所

哀に悲しきは、またふる年にかはらざりけれ
ば、巣兆佛がたぶけに

朝毎にあさがほ植んひとつづゝ
木の芽くふ小鳥もまてば待れけり
山彦もぬれん木の間ぞ雪雫
めし粒もはるは來にけりいかのぼり
ものふりぬ梅の鳴子の鳴あたり
梅に月待れて出るもうと〳〵し
泥つきてゆかしくはるは何の玉

老　慵

爐ふさげといふ人けふもまたありぬ
かたばみの花雨降るとなく雀
卯の花の暮も見がてら茶振舞

山家の夏といふ和歌題を得て

爪木こる日をさて置て豆植る
井に落す硯もやがて夏の行
すゞしくも見へず大工の筆硯

竹竿頭上に付たる願文

我すむあたりより十府のすがごもゝ靈果も遠からず。道のほど、川〳〵もあれど人のかけたる橋ありて、かさゝぎを待わづらひなし。尤しのぶの空の忍ぶ山もちかく候。

戀せぬ夜あまくだりませ二ッ星

草の戸ざしの月夜〳〵は、訪ふ人もおもひ絶て

露なれてむしのやうにも寐ざりけり

仲秋無月

月やこの芙蓉も持ずくもる花

松前へ行とて旅立し蘭叟が、つがるにさすらはんと思ふ頃なれば

今宵しも雨の月見ん水鶏村
いざよひや不斷さくらの影がさす
十六夜の明てきこゆる鳴子かな

今宵の空に降そゝぐ雨のうらみは、姥すて山のふもとまで糸の如く引はへて、なぐさめがたし。おろかなる老心に束の間もぬれたるひかりを宿さんため、床にかつらの花を活、戸口にさゝめの蓑をぬぎ給ふ所をもふく。

待せはし月を迎にそこらまで

松竹になる氣もうせる野分哉

しらゝ迄こゝろをやりて扇おく

鎌ならす秋はどこでも稻葉山

老婆が七日〳〵の花も、呼ばもて來てたぶくる農家もあれど

稻かけてきくの日遠し垣隣

佛は軒にあやめのはつ時雨

木兎曳が身にも大事の月日哉

草菴を出て米澤へ行途中

冬來たぞ山路のきくにもらひ泣

みちのくと出羽の境、湯の原にて

ならの葉はまだなくならず柞の木

山風の吹出口なり冬の鳥

米澤高畑の里

餡包む見世の木の葉も冬けしき

同途中

晴いのる神もありげに遠小里

彼は來る人、我は行人

出ぬけたか橇ながら小さゝ原

寒月や御鷹の宿もするあたり

それ鷹に擧見せたり酉あかり

庚申の夜に逢ふ寺や樒明り

かまくらの代を先おもへはかり炭

先に立て鉈を腰にしたるは、山中に入て松きる親なるべし。手習の友にや行違ざまに、いづこへと問ふに、其いらへするをきけば

人の子やはるを迎にゆくといふ

今はむかし、越の喜年が許にありて、むさしの巣也とゝもに年をたしみ、ことしは尾張の不轉法師と、出羽の赤湯といふ靈液のわく山際の里にとゞまりて、年をゝしみ病を養ふ。

ひとつ橋あやうき老が年ぞ行

睦月十五日、赤湯の里の山に添ふて行事あり。鹿の飲流れも、氷のくさびひまなく打て、さらに春とはおもはれず。

大歩々に月日をねがへ谷の梅

万歳が留主の妻子や飯時分

あの畑はしつけぬ麥かとんど焚

遲き日に着たら倦うぞかくれ簑

酒折は十日も遲し植る菊

老てもはるは嬉しく

飯餉の飯より多し遊ぶ事

拾子や薺の花の夕ぐもり

山下・龜戸・川ぐちとめぐり詣る夢の中に

薺にも花さくこゝろ六阿みだ

ふんばつて解ぬ氣になれ松の雪

鶯や菜刀投て出るあるじ

森岡に久しくありて

暦書田山の冬も今少し

田山はめくら曆の出所をいふ。

病ながら松前よりかへりて、淸が許にて仲秋無月

雨の月ふたり見る夜を月の雨

うづら鳴野を片脇に水見舞

まんじゆさけ遊ぶ鳥さへ持ぬなり

まじなふて蚯蚓鳴せず菴の僧

我をはじめとして

はいかい師梢の柿の蔕ばかり

ふそくぞとおもふ朝なし痲の露

四十八年を經て谷地に至る書懐

小手まりやしらがと知らで昔見し

彌生末の九日より石關亭にやどる。ある日薺屑にも劣る老が身の旅情なたぐさめんとにや、あるじみづから閣に入て、床頭の器に挿たる影の夜に入けはひは、そも瑤池の仙か姑射の神か。

おしげなく活し牡丹を見るやどり

六田を前に、野田のわたりを跡にして

痲とてはまれに蓬のまがり道

舟中

氷雨ふりし雲納らず最上川

板敷山の麓、最上川の岸頭に家居せる古口にやどる。

おろおろし闇の皐月の初る夜

象浮の風景、みなみにうづもれし前の年なりけり。酒田にくだりてあやめふく日に逢ぬ。

今年又はからず爰にさすらへて此日に逢ふ。

かつてこの粽ときしがちまきとく

長翠佛、苗五寸を見て白川を越しより、予が庵を出羽のゆききの中やどりとして、莎雞の聲に草鞋をときはじめて、いく度といふもしられず。あるは松嶋の初日を詠、葛のまつ原に櫻さくかたを枕と覺英僧都を想像し、忍ぶ山には秋の日の暮てもくれぬその顔(影)をしのびしも、今は昔のかたみぐさと成ぬ。予もさいつとし、はこだてに病て、死なではかなくも生のびしが、身は老、命は露ながら、いまだ歩行神のはなれず。この塚に來て涙をこぼすは、濁りにしまぬ葉の上に向あはするも遠からじとおもへば

松ぞ散るひとり言いふ膝のうへ

河道上人の院内

さみだれや薬守の神もおはす庭

酒田より秋田の湊へ行。蓬の底に起臥して塩越にかゝるゆふべ、蚤が家にひとしき客舍にうつる。

老が身をしたひ來にけん舟の蚤

世に名高き跡のおのづからあれゆくは、あれゆくにつけてなつかし。この象潟のあらびたるに、荒びたる自然をうしなひしよしは、鳴神の音にのみ聞つたへて、けふしたしく見る事を得たり。まことさかしらに利をむさぼるものゝ一言より、汚のかぎり田となりて、能因嶋・から寸嶋をはじめ、ありとある嶋の松も、むなしく早苗吹よのつねの風にかはり果ぬ。さるにても立去がたく、そこらさまよふうち一村雨の降出て、たゞきさがたのとおりしむかしのけしきにかへりたる哀は、秋のみにあらず。

ゆふ暮は泣にふそくのなかりけり

蚶滿寺

苔ふみて花にもなさず岩根石 道すさ

秋田の湊に、つくしの乙游とゝもにかり寐する頃、波にぬれ露にしほれ來し旅衣ほす日なくて

雄鹿山も鵜も見ずなりぬ雨つゞき

久保田にある有石に巣兆が繪がけるえびす大
黒に贊を乞れて

むつましき神の宿にはうめの花

家〳〵に書てたぶくろ者の同じ心なるは

ほしの歌覺る事にせざりけり

乙彥、すけひらに伴れて杖のむくところに遊ぶ

砂山も道ありけりな初月夜

三崎山は二里斗の間石するどにしてわら沓を
嚙み、いはほ尖りて衣をさくよし。予あしの
病ありて、かの山ふみする事かなはず。本庄
の人〳〵の酒田へ舟にて送らんといふまこと
の心うれしくて、又四五日とゞまるに、帆かけ
る日なくて十三日になりぬ。

おもへたゞ盆の佛も越山路

高野の濱にて

吹浦とこゝろはなれず波の雁

枯木ほど更るものなしけふの月

羇中

露置や我も艸木にいつなりし

捨人の飯はつめたし柴苑さく

入るな月夜明ぬうちはけふの菊

最上川のほとり扇鼠庵に半月ばかりあるに

稲舟のいねともいはぬあるじ哉

松前の礒ありきして

指さしてさむからせうぞ岩の鹿

臘八のこゝろを

師走菜を召シにや山を出る佛

師走中の九日、三厩にて 二句

よる波のこゝぞ暦の軸はづれ

降雪を仕事にはくやかゝりぶね

奥の海

さむいにもよい程のあり楫枕

錢百で買れうならば波の鴨

素月は耕春寺の客として、予は希酷亭をある
じとす。

ものいはぬ人のうへにも年ぞ行

松前のかへさ玉之亭に齒桒買ふ頃よりありて、
三とせの草枕に老をかさねし書懷

はる立ぬ山にすみれを摘もせで
芦の芽に肝つぶしてや居ぬ千鳥
七くさの秋に逢へとて柳さす
芽柳を見ぬ人がいふさむさ哉
はるの夜や袂の熨斗を思出す
鶯やものゝ芽をはむこゝろなき
御法會の埒もとらぬに春の雨
菜の花の中や手にもつ獅子頭
さう鳴は嬉しい事かはるの鳥
加茂へ來て捨火の沙汰もはるの月
さりとては齡かたぶくさくらかな
廣大な事で泣れずねはん像
神鳴るを出て聞家や夏木立
さびきつて碇の暑し海のはた
村中の鏡くもるにわくしみづ
長生をするも詮なしひきがへる
穂に出れば一品くだる田麥かな
禰宜殿に馬も借れず麥の秋

清水をふみ、荻の香をつたひて雲居の住給ひし山にまうづ。

壺の茶のとふから盡てむかし寺
孑孑よ蝶になるさへにくきむし
蝸牛淺茅に花のさくをまて
露くさくなりぬべらなり汗拭
けしに須彌入れし心よ露の月
山吹や荒鵜に暮を見せに出る

病中春日

松島の鶴になりたやはるの空
入れば入る我も出羽の雲に鳥

今としも病を身とし、草をまくらとして

どこの花どこの芝生か死どころ
鶯に逢ぬ日はなし袷時

五日新庄接引梵刹に在て

我眼にはくすり降日も雨の露

秋田雄勝峠を越時

夏霧にぬれてつめたし白き花

神宮寺川を舟にてわたる。乘合の中に端を濃

浅黄の木綿にて縁どり、いたゞきも同じ色のを丸く縫つけたる深き笠を着、前に鉦鼓をあてたる人有。側に扉をひらきておろし置うちを見るに、こがね・白かねの箔きらめきて、さながら尊げなり。

すゞしかれ笈の佛も同じ舟

秋田湊

雨を伴ひ雨に伴れて此地にさすらへしより、小鯛と烏賊うる聲も十日ばかり絶て、又十日斗過ぬ。あはれ晝さへくらくて、たゞ海の鳴をのみ聞。

百合しみづ山路床しき折も有

いなづまの一夜になりぬ酒の味

松しまに隣る名の象潟の田となりしを、あらすきかへしてにくまれ業するは、そも何のくせぞと、さみだるゝ中におもひつゞけるあまり

降雨のほたるともなれ小百姓

ある行脚、予がみなとの侘寐をたづね來りければ、戯に行先をトしやるとて

水の粉の吹ちるかたへ往てやどれ

秋なさだむるはじめとは、七夕の夜を翁の申されし。

立秋の眞なしからね六日まで

風誘ふものゝみ多し御秡の具

ほし合や白き袴に更る人

岩木の山を言かよふ斗に仰ところにて

つゆほどに思はれにけり老が形

ふたゝび外が濱にいたる日は八月十二日なりけり。吹風身に砭し、眼のとゞくかぎり物みなすさまし

名月の來ぬに來るにや十三夜

よべかりそめに降いでし雨のやまず降に、帆をおろしいかりをおろして、はこだての内山背泊りにとまりぬ。誰がしらせたるにや、布席・草履・來車をはじめ人〻、竹筒・旅硯籠を載せて漕來たる迎の舟に乘うつり、ひとり〳〵に酒くみかはして、日さへ良夜といふ日、ふたゝび逢ふ老のいのちの嬉しさに泣けば、おの〳〵渡海の恙なきを賀して泣ぬ。とかくし

て楫取ものらがいざといふに隨て行〱山もゆくに、ひつじ過る頃鴈來舍に入る。やゝ醉色の顏にのぼりぬれば、しばらく遊仙の枕をあぐるうち、例の人〱またつどひ來りて、千鳥の空あかくなりぬといふ聲におどろかされて眼さむるに、すみにしあともゆかしければ

斧の柄の朽（朽）ても明な月こよひ

はこだての間にかゝりゐる中に、こゝろおぼへのみよしも見へずなりて

きくの日に逢はでいにけんつくし船

水張の菅家の像も十三夜

待もせぬ月や夜寒の黍ところ

橘に火かげさす家のきぬた哉

鬼灯や旅せぬ人はゆめに見ず

月をさへ先へまはして秋の行

枯野をかけめぐる　とありしも、けふの哀におもひ合せて

しぐれせよ翁の夢のきえしほど

寒月はなみだこぼれぬ照やうぞ

ある時は雲のふすまを着るやどり

鶴龜に見せたきものよ蛭子講

編笠を着た人寒し街より

埋火といふ名をもてり星ひとつ

むかし繪を見て

尻さやは誰やら雪の鈴鹿越

なき人の來る夜近かれ冬籠

花をふむ鳥よりにくし竈のつら

水仙に花なき里の小鴨哉

しら魚のとれる噺や水仙花

未練とはこれらなるべし薄氷

はこだて斧の柄居

いくたびかあぶるすゞりも年一夜

歳首

羽子板をやりたし雪の奥山家

奥のうみのこの嶋まで、日のめぐみいたらぬくまなきにつけて、やさしきかたもあるすまゐかな、と西上人のよめる伊勢にての哥を思ふ。

けさの春にし吹山にあるこゝち

七くさやうまや祭の猿もゆく

市姫の神もおよらじ若菜の夜

花椿鬼門射る矢のむけ所

　ねはん會の前夜、高龍闍者に詣づ

燈のかげもにほへねはんの經の紐

つく／＼し風の小松もうらやまず

御忌の鐘死なぬ藥もありときけ

さほ姫といふも正月言葉かな

また嬉し二日灸の過しはる

　みちのくに生れてきさらぎ廿五日も、まのあたり聖廟をおがまぬをうらむ。

空かける鳥ともならば一夜松

纖穂した木もなし酒も無あた（二字闕）

雛の君あづまくだりをなされける

袷着てまいり居るなり文使

卯の花にきのどくがるやめくら馬

ころんだを繪に見て久し鍋祭

川風のちどり思ふやところてん

我影の寐やうとするぞ夏の月

みじか夜や山の咄が水になる

　をのゝえの軒近き七面の山の奇景も、明暮て

　あやめふくけふに成ければ素月尼に贈る。

これ提て七面見に立テ粽二把

さらし井やよそへ家鴨を誂へる

龍宮でつく鐘の音歟五月雨

蓮一葉うくやうれしきものゝ數

　わらべどもの淺瀨に瓜を流して、あらそひ取て上ッ瀨に投やり／＼するを見る。

あかぬ間を玉川にするあそびかな

あけぼのゝはるを見せたし竹婦人

　むそじに四ッを添たる良夜

いのち也月見る我をくふ蚊まで

　去年より薺あるところに、しるしの竿を立置ぬるに、それさへ雪にうづみて

お雪めがとても逢せぬ薺かな

　途中立秋

けふからはほしの草なり野撫子

　六とせばかりおもてせぬ字（マヽ）考老人が、今としのはる世をさりしよし、此國に來りて聞、哀を赤湯の里よりおもひつゞけて

見し友をへらして今宵月の前

なら坂といふを、七めぐりめぐりて、このて
柏も見ず、綱木の里に下る。

つゝ鳥の木がくれみちもつゆの秋

檜原たうげをのぼりつめたる所に駕籠をすえて

山萩のちるや日のさす膝の上

行〱て

水音と鹿に又逢ふ山路哉

さかしきにうら表なき會津嶺のもみぢふみ分るのみにて

小男鹿や里へとゞかぬ聲をもつ

四ツ谷の里を過

麥萠て冬にしてあり小家の秋

あとの月の末　松韻が許にたどり着て重陽に逢ふ

けふまちぬ越路の露を見し日より

旅にしあれば椎の葉にもる、とありしむかしの人のくさ枕ならねど、老てはものにふれて心ぼそき事ぞ多かる

筍の飯も我家ならず后の月

後の月彌彥に寢しもはや昔

霧雨や白ききの子の名はしらず

行秋を鴫は迎に來たさうな

起しても又伏菊や九月盡

龍膽はどこの山根のはつ冬ぞ

枯てこそ忘中なれわすれぐさ

正月がいつくる事ぞ霜の齒朶

北枝があらはしたる集に、角つゝむ越後の牛の寒哉　といへる句を、この國にある日ふとおもひ出して

角つゝむ牛を見やうぞ散るこの葉

今年は長崎へ行んと思ふ心あれば

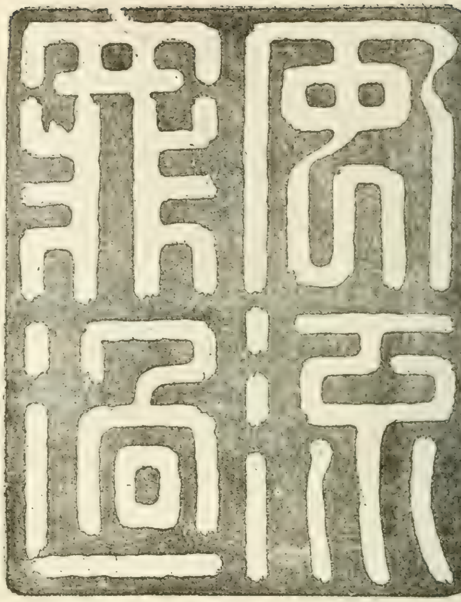
はつ夢や追れてありく須磨の波

右松窓先生句集一卷、句都若干、平生所吟詠隨得而錄之。門人曾請刻之、不許。蓋詹ゝ之言爲不足以傳於後乎。將有不慊於其心乎。庚辰之冬荷病自越歸荏苒三年。其子淸商迺與其姊謀竊取刻之。刻已成而先生逝矣。先生晩年蹤迹多在東海上。故其句亦多東海行間之吟。辛巳之春有西遊之志。欲以西遊諸州所得之句足前爲全集。罹病不果。抑往不許刻之者、其意亦不得不在於斯也。

文政癸未九月念五　松井元輔書

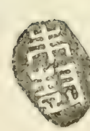
萍(へい)窓(そう)集(しふ)

樗堂

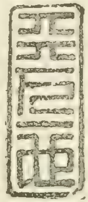


尋常一樣窗前月。纔有梅花便不同。樗堂氏が家の集、世の梅月を同じうするものとおなじからず。芭の糸の長くさびわたり、萩の露のよく栞して常に古人とこゝろを同じうす。

尾張朱樹叟
士朗序



萍窓集序



樗堂翁嗜誹詞也蓋五十年一日矣。乃雖造次之頃風雲月露未嘗離其懷。是以奇言俊語動有驚人者。翁本豫人。愛藝之三盤境頗幽奇、遂寄萍蹤於此多年。集成稱萍窓者以是也。予書其由冠卷首。

文化壬申春日劉元高撰
筆於三盤高橋盟水亭





萍窓集

春部

けさの春何所ぞに誰ぞ草枕

あたらしき此さびしさや菴の春

おもふ所先何ゝぞ、山館の梅・野亭の柳

あたゝかになるが嬉しき花の春

例の二三子とく集る

庵の春二日の夜より更にけり

九ゝ庵がかきたる不盡の畫に

我國の春たつ山の姿かな

遊ぶにはたらぬ寒さの梅若菜

青柳のうごくも寒し御忌の鐘

多㆓所思㆒

松處〳〵あり春草のむかし道

一日も捨る日はなし梅の花

格別な日はあたらねど梅の花

うと〳〵と虱を捫りつゝ

梅が香の我をやしなふ旦哉

須磨の日のちいさく出たり梅の花

月の夜に十日はやくて梅の花

門よくさしてよ、野良犬の壁かきこぼち、筵のうへを寐所にするぞと、および越に

つや〳〵と梅ちる夜の瓦かな

出たければ出る夜が出來て梅の花

寒い水は流れて去し柳かな

柳陰田を作ふとおもひけり

どし〳〵と枕もと踏あらす舟の男等が尾籠に驚き、篷のひまより首さし出せば

青柳や雨に濡たる淀の城

木の間から春の見へ初る柳哉

出て見れば春は柳にとられ鳬

春は春なりけり、西へ行人、東へ
行人

柳陰何所への旅かいとま乞

鶯の長居や小野の家づたひ

高臥避レ喧

黄鳥のこゝろに成て聞にけり

うぐひすとふたり春たつ菴かな

鶯や鳴の古餅を踏おとし

遊ぶにも月日は減るぞ百千鳥

竹の小窓突あけ、机の端を叩き／＼

寐は寐てもすむ身を春の朝雀

春の鳥寐る迄も啼林かな

今もゆかしき松は花より

辛崎の朧問ばや蜆賣

秋風も春風も寒き菴哉

海はみな白魚になれ春の雪

霞む田に下りて雨呼ぶ鴉哉

草の戸の餘寒や去ぬみそさゞる

ありく間に忘れし春の寒哉

書齋

火もくれぬ火桶に春の眠り哉

初午や兒見せによる乳母が宿

此頃の俳席五三夜もうちつゞくに
また草庵の月次を催す。

ちく／＼と見滅らす春の月夜哉

春の月むかしが見へて哀なり

春の日の足らで出て行月夜哉

春の夜は寐處に寐ぬ夜也けり

春の水酢賣とふたり渡りけり

陽炎の中へ散すや麻の粒

良峯より小塩へ越る山中、雲見へ
ずして雨降る事急也。

雉子の聲しばしは鳥の聲もなし

ものに氣の狂ふ鳥也松むしり

あはたゞし夢の中より歸る鴈

亂野も堅田も霞こめて、湖上の美

景ふたつみつを殘す。

見て居るや鴈行あとの峯の松

鴨滅て水のさびしき二月哉

蛙子の蛙にならぬ水もなし

　　槃特が箒は心の塵を拂はれしとや

出て啼けと蛙掃やる垣根哉

ものいふか田螺の口の水の泡

薹の出て荻の芽を喰ふ小庭哉

身のほどをしればしらるゝ寄居虫哉

猫の戀逢ふ夜がちにて哀なり

須磨の猫あかしの猫に通ひけり

　　漫遊の僧三河の普天に贈る

名を捨に行よ胡蝶の草枕

初櫻花の世の中よかりけり

けさがたや夢に笑ひし初櫻

ひと春を花にかたよる椿かな

おのこ子の無理いふて雛かざり凫

　　八尺庵探題得二筵字一

魚店ナや遲き日影のつり筵

爺婆の寐處出來て桃の花

　　雲雀鳴たつ道野邊のけしきは

花菫何所から來たぞちいさい子

　　倚レ杖看二孤石一

すくなしや春毎日の行處

十日ほど花に捨たる都かな

花盛散より外はなかりけり

　　岩のうへにも寐は寐なむ

暮かねて花に淋しや尾長鳥

けふの日の年に二度なし花盛

　　瓢酒空しく盡て

人の顏花に見られて居にけり

おほかたは散そめて花の盛かな

大炊川さて散花のさかりかな

　　我住む松山の南十里ばかり、阿山のおくに寺あり、岩尾といふ。高野大師の開かせ給ふ所也とぞ。尊くも金胎の峯さかしく立並び、眼

にふるゝもののみな千歳の俤を殘し、白雲常に覆ひて斧打音だにも聞へず。仙人の窟は蝙蝠ひら〳〵と行かひて苔の滴り乾く隙なく、梯子の禪定は老の足もとよろ〳〵と一歩もすゝみ得がたし。下に一宇の坊舍、いはほをかたどりてあやしき屋根に作りなしたり。此あたりわづかにひらけて登りくだるに、寒巖の老松落〻と聳へ、鈴鳥・佛法僧の聲〳〵水に落、谺に響て百千の音樂自然におこる。されば彼匡盧天台の御山も心にうつりて、見返り〳〵不請の念佛四五遍を唱ふ。そも花は風雪のはげしきにおかされ、開落をのづから他にかはりてやゝ遲しとぞ。

木がくれて櫻久しきさかりかな

牛馬の骨折見ゆれ山ざくら

山ざくら靜にうつる琵琶湖哉

土くれうつ老父を呼かけ、花は〳〵と尋れば、是もいさしら雲と答へけるぞおかしき。

人の行兎の道や山ざくら

遲ざくらつく〴〵見れば遲ふなし

しりがたき花のこゝろや遲櫻

漢人丸山に遊ぶ圖

花に鳥鸚鵡の舌のほしげなる

山吹に最早と出たりかたつむり

順禮の子や煩ひて木瓜の花

春〳〵とおもへば春も暮にけり

やよひ晦日よしのゝ麓にて

けふばかり春を六田のとまりかな

夏部

かさねて嵯峨に遊ぶ日

夏の來て夏はや深きあらし山

花青葉人の三月四月かな

庚申菴の小池をめぐる

かきつばた花にかくれん老の影

踏欠て卯の花つかむ夜道哉

關の東へ行人に馬の餞す

逢坂の朝酒すゝむ若葉かな

そろ〳〵と若葉になりし老木哉

村舍に立よれば

散罌粟の中より見ゆる白髮哉

見て居ればひとつもちらず芥子の花

茶筵に疊み込たり柹の花

室の津より船あがりして此さかひ遣わたりけるは、卯月もまだ三日月の影ほのかなる頃

麥枯る風が吹なり須磨の山

麥の穗を雀のからむ戸口かな

田を植て後に麥刈る山邊哉

草の戸や人の惠みの初がつほ

みじか夜のうしろに立り不二の山

夏の夜を足す毎日の枕かな

老ぬれば初音も遲し郭公

更てまた外のはつ音やほとゝぎす

懷古

夜疊る八島の海やほとゝぎす

只居れば晝も待れて蜀魂

御手洗へ渡らんとて風早の浦に出れば

蛤の口開くうへやほとゝぎす

伊勢の山神代より啼ほとゝぎす

ある上人は人を深山木にしてとこそ

靜なる四條の辻や郭公

何所までかこゝろを誘ふ杜宇

月の鳥雨の鳥也ほとゝぎす

行基菩薩は一生杖にも柱にも此木を用ひ給ひしとて、翁ある山中に

て世の人の見付ぬ花と聞へしも
西の木の栗に寐るかよかんこ鳥
樹を立て其後は見へず閑古鳥

白雲廬

蒔てある栗など拾へかんこ鳥
青鷺の我身もしらぬ眠り哉
朝雨や水鶏追行淀の犬
引よせて松葉さしけり蚊帳の穴
賓や扇ばち〳〵と蚊帳の中

かねておもふよしの丶山ふみも花にははぐれたれど、さすがに若葉・ほと丶ぎすの空なつかしく、吉水院のあたりかなたこなた見めぐりて、先蕉翁の吟跡を探る。

むかし聞ん夏衣うて坊が妻
花鳥の筵ふるへば蝸牛

ノ貫が侘にも落ず、蛇川が禪にもよらざる此あるじの高致に驚く。

靜さを鳥にとられな苔の花
竹はまだ植しまはぬに月夜哉
そこ退て竹植させよ蟇

一卷書を開き、一盃聖を樂む

水うつや掃や植たる竹のもと
鶯の氣みじかになりぬ五月雨

菖蒲菴の需

五尺ばかり出たり菖蒲の夏の月
砂川や鷺のまたがる夏の月
傘開けて行やうしろに夏の月
世忘れの風が吹なり夏の月
おもふ事品こそかはれ夏の月

快哉氷簟

けふの日の日出たく暮て夏の月
蚤の子の田植眞似るや磯の草
鴉の巣に鴉のとまりて眠り皃
六月や旅人に逢ふ夜の山
子のほしと晒布搗〳〵唄ひけり

草踏めばまたあらはるゝ淸水哉

樹下避暑

こちにこそ見て凉しけれ藻刈舟

凉しさのひとりにあまる菴かな

芭蕉の畫に

嵐雪は遲しはせをの下納凉

南湖山の遊び、局上烏鷺のあらそひ、日闌て客散ず。

小坊主や榎にすがる夕すゞみ

むかしある殿上人の扇に、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者といふ文を書てもたれけるを、御門御覽ぜられてこそ世をそむかせ給ふの御心しきりなりしさ。今聞さへもいとありがたく覺へ侍るに、いかなれば我等、あしたにはゆふべをのみたのむおろかさ。いづれの日か此心旨のひらけん事更に覺束なし。

おもふ事の捨處なり蓮の花

行て寐たし蚤蚊の居らぬ不二の山

秋部

來る秋の寐もせず荻と遊びけり

けさの秋皃も洗はず歩行皃

絲瓜・朝がほの垣根〳〵蜘の古巢拂はむとて、笹の箒よろ〳〵と振廻したる老の朝起ぞ憎まれがちなる。

柴の戸に入るや秋たつ山の影

いつくしまにて

秋たつや潮みち來れば鹿の影

ほつちりと眼に秋來ぬや啼雀

水りんとして初秋のかきつばた

出かゝれば來かゝる人や宵の稲

遊ぶ子に枕くれけり夜半の秋

此春のさし木の柳散にけり

無造作なるものは田家

さむしろや飯喰ふ上の天の川

のつと出る日の露けしや銀河

畫賛

踊れ〳〵露稲妻の夜短し

秋風の下に寐て居る漁村哉

住の江や鶴もとしよる秋の風

悼二大魯一

これ聞ふとてか此頃秋のかぜ

穐の風人ほど死ぬものはあらじ

老死薬なしといへど、無何有の郷のあなたにはまたありとやらむ聞ぬ。

秋風や鏡の翁我を見る

あら海やものに離れて秋の風

秋風に向けて飯焚く小舟哉

廣村瀑布観 別に記あり首尾茲に略

雄瀧あり雌瀧あり、水上遠く黒瀬の郷を経て出るとぞ。よしが淵・扇が淵などの數峯影を倒にうつして、見るさへもまた目くるなしき。龍の口といへるより、水ふたすぢに分れ落て其下一幅の帛を裂が如し。雲霧たちまち起り重りて、幾千尺ともさらにはかりがたし。かの小柑子のおほきさにて亂れ散と云しもの、覗ける岩にほとばしり、怒る聲・咽ぶ聲しばしもこゝろ安からざるに

つく〴〵と聞ば瀧にも秋の風

白露のうへにもしばし旭かな

小柴さす嵯峨野の神や露の中

しら浪のうへまで露の夜明哉

路うねりまがりて特牛月に吠る

露は露の心をつくす夕かな

霧雨や身を木にふれて鳴鴉

はら〳〵と稲妻かゝるばせを哉

朝がほのけふもめでたし花の上

我菴の朝がほ今朝もまた白し

十とせばかりを經て友人に逢ふ

あさがほやならべていはゞ花の皺

朝皃の一日若し花の朝

老懶愚事を休し、廬を出ざる事凡一月

朝がほやうか〱咲て菊の垣

荻の花散ねばちれとおもひけり

夕陽鴉背寒

荻のうへじつとして居ぬ日影哉

岡崎や念佛うち消す荻の聲

男塚はいづれ、女塚はいづれ

女良華立よれば踏む蛇の衣

行水の音聞すますとんぼ哉

道野邊や小萩にうつる稲の虫

元(先カ)へ〱行や螽の草うつり

一絃の琴を能する人の問れし折から

鈴むしの夜寒しらせる垣根哉

我死なば菴をゆづらんきり〲す

春夏に來ぬ人來たり初月夜

山陰は三日月ほどの月夜かな

默釣亭遠眺

三日月の下へさし行小舟かな

出るたびに秋は大かた月夜哉

山里や婿連ありく宵月夜

いつの夜も高き處に秋の月

常に見る夜はなかりけり秋の月

夕ぐれをおもひ捨れば穐の月

月いれたる槇の戸、けしきばかりにおし明たりとはかゝるけしきか。

人の來て燈ともす月の菴かな

葛の葉の裏まで秋の月夜哉

六俳仙の圖に

むかしとても人は數なし秋の月

見へ初てはや夜を照らすけふの月
名月や山の奥には山の月
清風明月、一錢の買事を用ひず
風流の罪かおそろしけふの月
けふ〳〵をいくつも捨て今日の月
青山ながれて流水とゞまらず。江上の風光仰ぐ處俯す處。
明月や眼を休ればあきの風
あり明て見れば大きな榎哉
荻の宿すゝきの宿や駒迎
壽硯
山里は月日も長し花すゝき
見るまゝの夕をうつす芒かな
廣野に行くれて夜もすがら琴の音を聞たりし彼梅頭が娘のしら骨は見へねど、哀なるさまの何となくおもひ捨がたければ
花芒鹿の泪によごれけり

よく見れば芒とはよく云に鬼
淋しさを芒にむかふすゝき哉
突立て杖にすがる田刈かな
夢捨に鴫の立行月夜哉
書まさりするもの、かきおとりするものゝあるが中に
鴈下りてはや海になる芦邊哉
辛崎や雁の來るたび夜の雨
夕ぐれは鴈の啼也和哥の浦
啄木鳥の月に驚く木の間哉
田の緣や追崩さるゝ秋鴉
栗刈ればやがて來て臥す小鹿哉
月露亭
此頃や菊の白きも只寒し
鶯の足音寒し菊の花
うす紅葉よき鐘の音の聞へ鬼
啼に來る山鳩寒し柿の色
末枯や日の出見に行園城寺

露霜に輕し雀の笹枕

　烏帽子着た船頭はなし

都鳥こゝらの水の秋もしれ

千鳥ほどの鳥が飛ぶ也秋の水

日の出てもたゞちからなし秋の空

　無常迅速のいとゞせはしきとて、ある法師は居(ヰ)處をさへ筵に付ずしておはしけるとよ。

鴫ならばつゝ立行ん穂の暮

秋の夜の明ればおもふ夕かな

此頃は夢にも秋の夕かな

　おもひ草臥て杖にすがりつゝ

秋の暮日は短うもなかりけり

冬部

十月や櫻は花の木なりけり

　瀬加井の清水・さへのゝ沼など尋ね佗けり

十月や枯木の中の花の寺

大原はざこ寐の沙汰や初時雨

初しぐれいろ〳〵におもふ住所

蛸壺の蛸も出て聞け初時雨

そよ〳〵と芒活出よはつしぐれ

　大津に赴く

走井や行あはせたる初しぐれ

　懺悔

淺ましや遊びごゝろの時雨會

奈良七夜降やしぐれの七大寺

鵜の舟を芒にかこふしぐれ哉

いそがしう世のおもはるゝ時雨哉

　山驛

荷を付てしぐるゝ馬や軒の下

時雨するまでも盛や山の萩

霜の夜の鼠來て踏む枕かな

初雪や鳥屋の鳥の啼立る

冬の日のさすや蠅とる庵の猫

無事此靜坐一日當二兩日一といへど

只居ても追はるゝ冬の日影かな

三日には三日月ながら冬の月

冬の月人に遠退て靜なり

忘れても居ずや師走の三日の月

こゝ住吉の濱邊にて

白浪や見事に出たる冬の月

松風のだまれば寒き障子かな

日頃來る人の絕て來ざりけるに

寒き日を捨れば冬はなかりけり

たゞ居れば只居るほどの寒哉

行逢ふて寒しやしばし人の影

投宿

寐さゝれて二階は寒し旅ごろも

葉がひとつ落ても寒し草の窓

南枝老人の葬を送る

こがらしにすがる煙の名殘哉

冬枯て鶴の眼はじく芒かな

衛啼川洲の芒枯にけり

牛飼ひ童の相撲場にせしあたり、いつしか露霜寒くふしおれて、殘れる風情よろ〳〵と

枯佗て時雨を招くすゝきかな

人を送りて歸ると云し心を

梵灯の烟のたねや枯尾花

義仲寺の祐昌身まかりけると聞て、千影のもとへ申つかはす。

外ならぬ終り處や枯尾華

平砂に筥を擧れば、子は泣〳〵盤を摑む。

浪に引ていぬべき家や枯尾花

引て行汐なき芦の枯葉かな

枯なりや菊押よせる柴の垣

行鳥の泪こぼるゝ枯野かな

冬枯の家に並ぶや桑の畑

茶の花をかゝへて蛇の活にけり

時雨・風間なく時なく孤客腸尤寒し

加茂川や菜の葉ながれて啼衛
磯千どりつめたき足も只置ず
むかしより千鳥啼也淡路島

あらけなく門打叩き、付廻しの一
順なりと投込てはしる長吉を呼び
〳〵

雨の夜の燈を消に来る衛哉
吹れ来て障子に月の千鳥哉
群て来て榎の實をこぼす衛哉
須磨寺は千鳥も踏や草の屋根
鸕鷀よなぜに寂しい山の池
鈴鴨やころ〳〵落る草の上
鴨の中よけてあちこち小鴨哉
積かへる柑に敷れなみそさゞる
柑つむや梅を相手の古畠
鐘の聲落けり柑の消るうへ

ともし火花を結びて丑みつを過る

ものおもひ居れば崩るゝ炭火哉
炭〳〵と手まねきかへす戸口哉
鶯も寒くばとまれ桐火桶
かぶり居て何もかも聞衾かな

無畏三藏の佛子を撲殺すと云れし
は、汝にまさりていかなる行徳か
ある。

命長き蚤よと衾振ひけり
烟してのどけき冬よ山の家
凩かげや道にして行冬の川
我國の冬は大かた梅の花
梅柳より出歩行て冬籠
けふがなくば明日は〳〵と冬籠

鉢たゝきの贊

月雪にほしくば叩け南無瓢
須磨迄の連に誘はむ鉢叩
淋しさを祖師のつたへて鉢たゝき

嬉しいか雪の古江のかいつぶり

これよいう〳〵と我名を呼るものあり。傾て雪い小蓑かいつゝくろひ、むしろ戸の陰よりつとさし覗けば、むかし相しれる人のいさゝか故ありて、身をこがらしのかくは落ぶれてぞありける。あはれ今のありさまを夢にだも見るべきかはと、

顏打そむけて居たりければ、いや

さなおもはれそ、窮達時あり、富貴いづれの日か髑髏を潤さむ。やをら尾を泥中に曳んこそと、柴火かきさがし、足焙り〳〵、よりもつかざろけしきなりければ杖も笠も取落し、そこ〳〵にして門立出ぬ。

世の中の沙汰なき雪の田畑哉

雪の鴈羽を叩き〳〵眠る也

降る中へふれ〳〵と雪の詠哉

呂洞賓云、雖貧綽有餘

巷の米雪の雀に喰れけり

浮雲やまた降雪の少しづゝ

雪の鳩堂掃く人にとまりけり

眠れは死たり、さむれば生たり

雪にばかり冬長かれとおもひ兒

雪の江の舟へ提行薪かな

蕉像開眼　二句

月雪の古びまたるゝ表具哉

雪ちるや筆の翁の襟祝ひ

宗祖五百五十年の御忌、大谷の御廟に奉る。

南無むかし何ほどか越の雪氷

人はくろしみを見てたのしみとおもひ、佛のたのしみ給ふをば、凡夫はくろしき事とおもふ。是を顚倒とも流轉ともいふとや。

鐘も氷る朝や手の先足の先

目の明て見れば師走の日なりけり

氣長さや師走の海の釣の糸

行としの行あたりけり梅の花

梅くれと邪魔しに行や年の暮

只居るを年おしむかと問れけり

風流は風流に役せられて百年一日

閑なるなし

一度見たし暮行年のよしの山

跋

坐右に文庫あり。叟のしらざるを幸に、偷出して此集成ぬ。これは瞽者の象を相するにたとふ。漆桶掃箒其一端を捜るのみ。世の鐵面大王なるもの、眞の全象をしるべし。もし人、叟を罪せんには、我等小子五百生が間眼なきものに生れむと、かしらを並べて五十棒に伏す。

文化九龍次壬申夏

阿岐　靜嘯廬鹿門

葛廬才馬

藝州御手洗山本町
肥前屋茄兵衛藏板

屠龍之技

抱一

屠龍之技序

輕擧道人。善誹諧十七字之詠。觸於目。感於心者。皆發之於言。其所發者。皆獨笑獨泣獨喜獨悲之所成也。而不知人之聞之者亦與我同笑耶泣耶喜耶悲耶。惟言其所言。發其所發焉耳。道人嘗自謂曰。誹諧體者。昉於唐詩。而和歌效之。今十七詠。蓋其餘流也。故其言不論雅俗。或雜之以土語方言鄙俚之辭。又何門風之有。諺云。可言而不言則腹彭亨。吾則言其可言。發其可發而已。道人可謂風流之巨魁得其髓矣。因題其首。

文化九年壬申十月　江戸鵬齋興　［鵬齋］

こがねのこま

うぐひすは鳴ともかたし腰瓦
から傘のほねのたくみも卿哉
筑山の戸奈瀨にをつるやなぎ哉
うめが香や爰の巨燵も周防どの
かげろふや野馬の耳の動く庭
ゆめに見し梅や障子の影ぼうし
芹喰ふて翼の輕き小鴨かな
雛よりもかしづく人のひゐなかな
花ひと木鞍置馬を蔽しけり

傾廓

夜ざくらや箱挑灯の鼻の穴
芋の實の四もたらでや暮遲し

讚戲畫

鶯の身をさかさまに初音どん
かわら燒く松のにほひや春の雨
花びらの山を動すさくらかな

牛ほどの蟻見付たり桃のゐだ

蝶〳〵や獅子のねむりの上を飛

樂徒よ兒木葉天狗よ山ざくら

連翹の苔喰ふかかわら鶏

鳥追の昔し相樣やうめに鳥

三月盡

箒木の袷尋る晦日かな

悼米翁老君

聰き人も耳なし山や呼子鳥

船頭も象と成けり夏まつり

舟行

ながれゆく椎木屋舗ほとゝぎす

無同剃髮しける時

よし野よく櫻ん坊の天窓かな

爐に寄ればよらるゝ夜也杜宇

守る人に枕かそふよ瓜ばたけ

居眠をりつばにさする扇かな

一樹の蔭他生の縁ぞ心太

ほとゝぎすこれを喰ふか栗の花

飛ぶ蝶を喰んとしたる牡丹かな

わか竹の弓にうたるゝそだち哉

郭公たゞ有明のかゞみたて

畫中に入梅のしるしやほとゝぎす

達磨の讃

石菖や尻も腐らず石のうへ

脫かへて花見虱に別れけり

近付の森のあたりやほとゝぎす

匡衡が壁をのづから五月あめ

紫陽花や硝子吹きが椽の先

闇暑し舟にもうごくあふぎ哉

とし〴〵や御秡に捨る多葉粉入

すゞしさは家隆の歌のしるし也

かぢのおと

星一ッ殘して落る花火かな

生鮹や納屋が柱の茱萸俗

明星や沖から戻る鴈の行
あゝ欠び唐士迄も秋の暮

少年行

飛ぶ駕や時雨来る夜の膝頭
こがらしや明は木の椌園の竹
河豚喰た日はふぐゝうた心かな

青樓

此年も狐舞せて越へにけり
繪馬かきやくれゆくとしの走筆
遊べ春梅の鼻毛の延次第
余處になき箸帋賣りや梅の紋

遠望

散る花を汲とも見へつ茵柄杪
車ほど舟押す人や汐干がた
ほとゝぎす手燭にくらき夜の空

空懸明月待君王

今上る客は化物ほとゝぎす
翌も又こゆる暑さや雲の峯

淺草の富士詣に

これよりして御馬がへしや羽織不二
すげ笠の紐ゆふぐれや夏秋

七里濱にて

浪に立人も馬鹿鳥礒の秋
かひ卷もとられし音の野分哉

後朝

湯豆腐のあわたゞしさよ今朝の霜

出山寺に晋子の發句碑たつるとて

草莖の今に殘るや人の口
告わたる木綿付駕や年の關
をさがりの雫萏むや梅若し
張子屋も梅は咲たり豆達摩

花街

松は昔人に植たる二日かな
青柳やいなりの額の女文字

春眠

たらぬ夜に日を足す日有花の雨

米翁老君の三周に

高宗が三年ははやし桃李

松山の花のけむりや春の風

鏘々錚　金鐵皆鳴

はつ秋や嗽茶碗にかねの音

榎嶋辨才天法樂

名月に松明もたのまぬ岩窟かな

沓音にくれたのもしき紅葉かな

神田明神祭礼

柿賣の逃行かたや猿のだし

上臈のひとり歩行や月の秋

今下す雁は小梅か卿しま

みの笠も草を道ぬ野分哉

雲の月見しやそれとも有馬筆

鶺鴒や井は見へず水のうへ

野路や空月の中なるおみなへし

先ひと筆〱や雁のふみ

傾廓

燈籠も鷄の啼と代りけり

素麺にわたせる箸や銀河

はつ秋や心に高し空の鳶

琴流君の一周に當給ふ

川風の行て歸らぬ網火かな

蜀黍やさしも隠せし闇の中

秋聲

蚊の觜にさゝらと言て初けり

紫式部の畫の贊に

明月や硯のうみも外ならず

乞巧奠

牽く牛のはなの穴そも星二つ

狸の腹鼓の畫に

うち落せ秋の夜雨のふる瓦

野分立つ空やからすの弱法師

臘八や隠者は山に入るも有り

うね火山耳なしやまや二た時雨

江戸畫圖の冬田や鶴の一跨

竹取の翁や煤の太郎冠者
もちつきの駒のかしらや杵の先
沽徳が手帋とゞくや塩がつほ

至日

藪陰のうめを探るや稲光

みやこどり

伐木丁々

山更にひゞ切る音や秋の風
豆莢の中道て居る弟かな
樹の丈に姿見へけり秋の雨
昔みし御花小判やけふのきく
木兎曳きや初笑ひし聟は
舟嚢の舳先にさみし九月盡
木榭の照葉見つけし時雨哉

傾廓

君平が占もあたらず大晦日

畫の讃に

かた足はちろり下げたか雪の鷺
餅花や昔ながらの筥階子
八橋やながるゝとしの疊臺
行年や株にかゝる金もがな
江を渡て恵方参りやうめ椰
ゆきみぞれつもり〳〵て梅花
夜ゝ捨し玉子の売や飛胡蝶
蚕玉を祭捨たる貧家かな
起よ今朝上野の門ぞ花の雨
初午や犬に吠れな此趣向

花礫亭の娘はつ鉄漿に

先ふくむかねは楪はなの春
錢賣の覗て行や朝ざくら

上巳

傾城やまづ曲水の椽に腰
深山木を几帳にのぞく櫻哉
鴨の花咲ひに来る夜明かな

多田薬師法楽

是は日の藥になるか花の雪
皀角に階子わすれて春の雨

牡丹一輪青竹の筒にさして送られける時

仲光が討て參しぼたんかな
案内子が小便したるわかばかな
ほとゝぎすいたき枕に寐たよ哉
もれ出る籠のほたるや夜這星

悼二嘉魚一

膝抱て誰もう月の空ながめ
山茨や卯の花をそき垣根より
五月雨やいつ見しまゝの淡路島

木埜が洲十と名改するに

筍やこの百性(姓)も六代め
山樵がきれ口にくしほとゝぎす
湯泉に立し人の噂や凉臺
羽をためす乙鳥高し今朝の秋
鵲のはし子呼也ほしの竹
此土手の馬追ひ虫や舟かふね
地にあらば二股大根天の川

中秋無月

物干の芒に雨を聞く夜かな
十六宵や去年の日記も雨の事
けふぞ知る鷺の愚かりの聲
鷹も田に居馴染む頃や十三夜
昏る日を荷ひ戻せよ紅葉賣
いつ月になりて時雨は松の聲
其以前鮟鱇くひし人の膽
寒菊の葉や山川の魚の鰭
水鳥の脊中を走る霰かな

丙午春詞

竹藪にうぐゐす笛も生けり
君が爲まくり手したり若菜摘
人の日の粥も雪間のわかな哉
鶯も舍那王どのやうめの時
藤房と正成と花ひとへかな

三味線の名にしをひぬる薺哉

花未レ開

笑わせて笑ぬ花や車僧

汐干狩比目の裏に哥書ん

艸色遥看近却無

何草と見へずに青く野は成ぬ

欵冬の水なぶりする夕かな

往昔のお腰かけ石藤のはな

うの花や槇の柱のわれにさせ

鶯の子は宗盛かほとゝぎす

畵賛狂句、彦根侍の口眞似して

さして見ろぎよやう牡丹のから傘タ

椎の木かげ

十八千句獨吟initialized頭

うぐるすに北野の繪馬かゝりけり

とぶ迄を走つけたる春雉哉

乙鳥や波ではなせし枯槹

ほとゝぎす鳴やうす雲濃紫

魚狗や簄をこもれて水のうへ

田の畔に居眠る鴈や旅つかれ

山陵の吸筒さがす夕かな

木兎も末社の神の頭巾かな

おし鳥のふすまの下や大紅蓮

蒼鷹の拳はなれて江戸の色

夕立や靜に歩行筏さし

綠樹影沈では

仙薬を魚もなめてや雲の峰

秋既ちかづきふへて螢がり

きぬ〳〵の橋に成たかあの鵲

雍やと言ふ禿またねずけふの月

花方に團子喰せつ今日のつき

名月やもと塩竈の人通り

印籠の一ツ下るやからす瓜

貝の斑の雀に似たり夜蛤

降り年や初茸賣りが聲の錆

重陽

太刀懸に菊一とふりやけふの床
見劣し人のこゝろや作りきく
冬の野や何を尾花が袖みやけ
見し夢や時雨の松の端から紙
來ぬ夜鳴く衛や虎が裾模様

俊成卿の畫に

おもふ事言はでたゞにや桐火桶

河人が初七日に橋場の保元寺に參り

松を時雨むかしうき世の鞠日附
仙人の碁盤に向ふ巨燵かな

望白馬津

市人の喧嘩やとしの川向ひ
甍にも手を組む松や師走山
としの菊うち拂ふ袖のほこり哉
行年や何を遣手が夜念佛

丁巳春興

いく度も清少納言はつがすみ
菜の花や簇落たる道の福
うぐゐすぞ梅にやどかる鳥は皆
のり初る五ッ布團やたから船
はる雨のふり出す賽や梅二輪
火もらひに鮑の売や梅の晝
出代の唇あつき椿かな
欺冬や水のけぶりも此ごろは
ちり積て山樵が荷や花一朶

却走馬以嫠

はるの田や畧繪の馬の幾かへり

更夜

音八が郭人形も袷かな
待ぬ蚊の聲の高さや杜宇
樹作りが衣かゝれり庭若葉
夏山の火串は幮の紙燭かな
板行のこれも久しきのぼり哉
たけがはもうつ蟬も碁や五月雨

はつ秋や寐覺て笛の指遣ひ

七夕の硯に遣ふ楊枝かな

秋にはたへぬと良經公の御うたにも

月の鹿ともしの弓や遁來て

黑樂の茶碗の歎やいなびかり

かけ稻を屛風に眠る小鷺哉

寬政九年丁巳十月十八日、本願寺
支如上人御參向有しをりから、御
弟子となり、頭剃こぼちて

遯るべき山ありの實の天窓哉

草の戶や小田の氷のわるゝ音

鴫立澤にて

三千風に見付られけり澤の鴫

箱根湯泉本歯佐九藏がもとにとま
りて

先むすべ冬の出湯泉のわく火鉢

御關所

冬枯や朴の廣葉を關手形

薩埵峠にて

夜山越す駕の勢や月と不二

降霰玉まく葛の枯葉かな

うつの谷峠にて

あとからも旅僧は來り十團子

汐見の觀世音に參り

あとになる潮のおとや松のかぜ

十一月十八日京着、木屋町にて

布團着て寢て見る山や東山

淸水寺に參りて

春待や柳も瀧も御手の糸

戸奈瀨い雲を

山の名はあらしに六の花見哉

朱雀野に日くれて

島原のさらば〱や霜の聲

佐谷川にて

水鳥は流るゝ音や橋の霜

江尻の驛寺尾与右衛門が許にて

置巨燵浪の關もり寢て語れ

光廣卿の倭哥によりてなり。

十日の夜小舟にとりのり清水の湊をこへ、三穗の明神を遙拜して、絶景言葉につくされず。

いつ迄も夢は覺るな霜の舟

十二月十四日江都にかへりて

鯛の名もとし白河の旅寐哉

ゆくとしを鶴の歩みや佐谷廻り

戊午春興

うぐひすや雲水の井を水かゞみ

塩竈のあたりに煙るやなぎ哉

千づかのいね

春雨のほろ〳〵和へや御ものゝ欄

鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉

水貝の鉢に小嶋やまつ嶋や

水無月なかば鉢扣百之丞得道して空阿彌と改、弄嫣に下けるに發句遣しける。

其夜降山の雪見よ鉢たゝき

はつ秋や夏を見かへる和田峠

夕露や小萩がもとのすゞり筥

泰室改名春來

嶋臺の鶴と成けり茗荷の子

刈除けて鳫待つ小田の景色哉

待宵や降出す庭の捨箒

明月や曇ながらも無提燈

晩器改名朝四

いろ鳥の中によき名を鶫哉

しらぎくや籬のうちの羽林軍

龍膽や慈鎭の菊の後にさく

をり屑の堰にかゝるもみぢかな

落葉して都の見ゆる菴かな

存義先師七七回忌

ふるごゑを鳴て千鳥の礒めぐり

雪おれの雀ありけり園の竹

ゆきの夜や雪車に引せん三布團

一年好景須君記

口切や南天あかしうめ白し

百兩と書たり年の關手がた

胡麻節を軒端の梅のつぼみ哉

はるさめやかるたの鬼も綱が手に

から猫や蝶噛む時の獅子奮進

人影や月になりゆく夕櫻

三月盡

ゆくはるを小塩の曲せや一と奏

老驥伏レ櫪而志在二千里一、烈士暮年
而壯心不レ止

唾壺も四ッ迄たゝく水鷄かな

妹許の櫻煙草や十三夜

鵙の枝踏むおとや冬木だち

庚申春詞

汐擔桶は沖のかすみや沒に行

讀二抱朴子一

首延て霞を呑か嶺のつる

ありと云ふ二王の筆やおぼろ月

松を畫に昏行梅や金砂子

はるさめや筏になりぬ竹かへし

朝妻ぶねの贊

藤なみや紫さめぬ昔筆

聞そめてなかぬ夜ゆかし鵑

きりはたり提燈持も虫撰み

東陽山

逢ふやいかに夜のにしきの星の竹

紅葉見やこのころ人もふところ手

歳暮

一文の日行千里としのくれ

辛酉春興

今や俳諧蜂の如くに起り、麻のご
とくにみだれ、その糸口なしらず。

貞德も出よ長閑き酉のとし

榎島参詣

さくら貝手ごとに拾へ島同者

悼無同

初七日に鼻くそ餅も間にあわず

名月や八聲の鶏の咽のうち

きくの宿非經見て居る主かな

會式

佛力やまだ見ぬ花のよし野紙

(又)門覺上人の院宣を持來たる處講たるに

伊豆千鳥その足あとを力かな

李笠翁にならふて

一幅の春掛ものやまどの富士

井の水の淺さふかさを門すゞみ

水になる白刹盥や雲のみね

永代橋のもとに銀鱸をあぐるとき

さし覗く顔も鴎や五兵衛舟

朝がほや花の底なる蟻ひとつ

新蕎麥のかけ札早し呼子鳥

良夜颯風驟雨

宵寐して雨夜の月は夢にみむ

露吸て蟲も千代經ん溪の菊

未白が一周忌に

ひとめぐり廻りて居るたかへ哉

月の晝うき寐の鳥をかぞへみむ

年尾

としの夜や庭火に白き犬の兒

植木屋が歳暮の梅のにほひ哉

潮のおと

鳥さしが手際見せけり梅林

から傘に柳を分るいほり哉

錢湯も淺香の沼の六日かな

鉞に氷を碎くあつさかな

物中に返事のおそき暑哉

とび移る蟬の羽赤きあつさ哉

御秡して各〱包む袴かな

立秋

先一葉秋に捨たるうちは哉

七夕

客に二ツほしきもの有り機道具

人有や暴風の中を飛ぶ筵

いなづまや夜と晝との田一枚

旅人にかしてうたするきぬた哉

蓑笠も立傘も有り作り萩

柿畠やけろりと二本休みとし

鶴の子の額は赤き梢かな

霜葉紅於二月花

もみぢ折人や車の醉ざまし

歳暮

ちよと鳴けとしくれ竹の庭雀

讀二王充論衡一

わか草や鶴の踏だる跡は皆

初子の日、長浦とゆふ所にて

松眞木も引けや若菜の茹加減

乙鳥の棚うちつけよ花のやど

是歳文化丙寅春二月二十九日晋子の百年忌たるにより、肖像百幅を畫き、上に一句を題して人々にまゐらせける。又追福の一句をなす。

囀れや魔佛一如の花むしろ

田から田に降ゆく雨の蛙かな

護田鳥の鳴く木屋が置場や宵の月

剖葦や燈火もるゝ夜の川

鷲の栖む其木末とは柏餅

さきのぼる葵の花や段階子

初幟を祝ひて

犗を餌に釣上たりな吹ながし

やよ水鶏さいたる門を敲とは

巨園八十賀に

突ふるせ神の切けん此藜

賣藥が黒き扇の暑かな

かみきぬた

百舌のなく木末は昏て十三夜

駒宮如岡を悼て
露霜に手を合たる紅葉哉
　肇輪石川侯口切出し給ふとき〻て
軒にけふはこび手前の時雨哉
　歳暮
鷹の栖む山は霞むかとし木樵
　卯春興
鴨のりて氷ながるゝ春日かな
　鎌田の梅見にまかりて
萬歳を居並て待つ田舍哉
はつ午やしるし斗りを揚豆腐
芹摘みに出て孫もるす彥も留主
　文化丁卯春、當流の宗義、積年の混亂悉く御裁斷有て、二月十八日築地御坊に召れ、關東三十三ヶ國の御末寺、各御教愛有り。本如上人の御德義四海にあふれ、誠に鳥驚きぬといへるも今此時也。
うぐひすに御堂の皷靜也

金澤の汐干に
經緯の潮や蜊の縞このみ
　漢土揚子江、日本隅田川
茶の水に花の影くめ渡し守
　甲子の大黑天を讃て
月花もいざうち出さん小槌より
　元木の彌陀に詣るとて
御影供の團子も花も降る日かな
　卯月の八日に
珍敷ひものが咲ます垣根かな
今ひと聲蒼る山やほとゝぎす
落る音おとすおと有り園の梅
　乞巧奠
袖ふるは廓の屋根や星の竹
牛牽て川越す人や星の宵
　堀川院の御時よりとぞ
虫撰聲なきは皆うつくしき
笠脱でみな持せけり萩もどり
馬市の借屋に一と夜秋の月

雲の飛とぎれは月のみなと哉
啄木鳥みねのあらしや谷の聲
つる引けば遙に遠しからす瓜
秋雨や筏の床の夕けぶり
燕の殘りて一羽九月盡
から傘を返せばもとの時雨哉
達磨忌や朴の落葉の沓片し
遠山に赤き宮あり冬木だち
鷹犬の繩に引るゝ枯野かな
時頼の寐酒を笑へみそさゞゐ
枯葉ゆく葱の小川や牛の繪馬
かみ置や男の肩にこぼれうめ
粥一ツくうや不レ喰や鉢たゝき
鶺のひと足ぬきや冬の川

歳暮

いせや伊勢今としも賣らす鏡研
注連なはの餅さしくべつ庭竈

春興

見て笑へ若菜の薺に天下筋
師遠が荅をひくやけふの松

墨子悲レ絲

そめやすき人の心やいとざくら
錢突て花に別るゝ出茶屋かな
かね撞ぬ撞樓有けり夕ざくら

瑞麟寺をよぎる

ゆきとのみいろはに櫻ちりぬるを
ほろ幮の山かげ忍べほとゝぎす
壹二丁先をゆく帆や麥の浪
山寒し瀧より下の蟬の聲
初茸や廻さば獨樂にまわるべく
屑買ひの吹れて歩行野分哉
海山と名の立分る角力かな
秋雨やそれは降る鳩晴る鳩

東陽精舍にまかりて

地に敷や佛の場の天竺花

はつ鴈やはつかの闇に聲は月

鶴貝判者披露

隱家は同じはちすの垣根かな

名月や洋に見なれぬ獸あり

芥川わたるところ繪たるに

抱かれたり展たり風の萩すゝき

いぎたなき隣も有を飼うづら

橘千蔭身まかりける。斷琴の友なりければ

から錦やまとにも見ぬ鳥の跡

吾書る菊に畫なしかた月見

山茶花や根岸尋る革文筥

しぐるゝは鷺の羽影や冬の海

きぬ〲のふくら雀や袖頭巾

神名川に旅泊して

さま〲の鳥を千鳥と聞夜かな

和田海の底もにしきや冬ざかな

歳暮

我かどに松展脊せ馬やとし備

市人の天狗礫や土のかね

春興

難波津の習ひ始やうめの花

うぐひすの遲音笑ふや垣の梅

初午や二ッ瓶子の黑羽おり

二月二十五日鞠塢が庭の菅廟にて、はゐかいもよふしける。

一順をつけよ蛙もうぐるすも

花見ても依怙ある人のこゝろ哉

畠うちのよくも反る也老が身を

己巳四月江の嶋辨才天三社惣開帳有ける時

扇にて扉ひらくや狂言師

八專に明るき姿の四一枚

かさゝぎの橋場を渡れ星迎

いなづまやしばし明るき椎が本

名月や筆法居士が露の不二

車井の音や雲井の渡り鶴

小夜千鳥未だ寢ぬ船の咄聲

水鳥や行あたりては右左

花ぬふとり

己巳の冬、居を藤塚といふところ
にうつして

取遣りもおかしき村の歳暮哉

莭季候は百囀(鶯)のはじめかな

元日の朝寐起すや小田の鶴

うめ守に硯借れば筆もなし

山蔭の梅まだ寒し活大根

うぐゐすや梅に氷れる枝もなし

梅を縫ふ糸ならなくに春の雨

棲洞に送る　前書省略

この道の手綱ゆるすや春の駒

朝三いつのとしか予と京師に遊ぶ。
ことし又心牛にいざなはれて花洛
におもむく。その餞して

當て來よ大和路かけて二の替り

鳥一ッ梭を投たりいとざくら

讀二仙經一、

朝々の洗ひ流しや蜂に成れ

小田返す初いなづまや鍬の先

人麿忌

ちる花やあまぎる雪の鍋鑄かけ

文葉之銘　前書略

しら魚や是も居杭の橋柱

花に飽て机にねむる胡蝶哉

佛生會

生れ出てうき世の花の一御堂

なま鯛や先綿をぬけ更衣

たゝかずに水鷄の入や戸なし庵

竹醉日

よひさめて竹もる月や十三夜

ゆふ立の今降るかたや鷺一羽

山梔子の花を相手や世捨いほ

七夕

かさゝぎとけふは呼るゝ鴉かな

晝寐して晩待星を顏に笘

十三夜

熱燗をふくや後の月の松

店賃のかりも結ばず九月嘛

野州旅行

問ひ來かし榎の紅葉地藏堂

山川のいわなやまめや散もみぢ

未春興

今朝解くや氷のわか茶霜の梅

鶴の來て豆煮おとや二日灸

三冬雪なし、睦月十七日雪ふる。

刈らでけふ雪待つけぬ庭の荻

鳥追の足袋の白さや川向ひ

人の氣のほころび初つはつ櫻

干海苔に小海老見付て哀也

をきふしも竹の自在や梅の花

榎見へ白壁見へてかすみ哉

芹賣れてさみしき鷺の栖哉

初燕くるふよふなり袖袂

江戸節一曲をきゝて

紫陽花や田の字盡しの濡ゆかた

ほとゝぎすなくや有馬の火見番

毛虫今蜘蛛のふるまひ杜宇

ほとゝぎす猪牙の布團の朝じめり

住吉をどりの畫の讃に

ふけや此すみよしの風うちはより

魚一ッ花野、中の水溜り

百舌鳥の尾のふる里寒し稻ほつち

鼠とる猫、鳥捕る鷹、みなこれ世上のありさまなり。

草の戸に蠅帚をながめけり

宇治の里一見の時

いな妻や一度にみせたる寺と橋

葉月十五夜寒光洞にて

十六宵も獅子の氣遣りか廓の月

名月に御哥所も覗きたし

藤澤にて

人知らでうけらの花の盛りかな

榎島法樂

すげ笠の月と時雨や山ふたつ

うめの立枝

客船に入日殘して時雨かな

傘はまだ時雨るゝ音や星月夜

から〳〵と日本堤の落葉かな

至日

今日よりして春の歩行や日の鴉

餅花や柳さくらを一木にて

歲暮

大名は鸚鵡に似たりとしのくれ

壬申春興

梅わか菜皆よし〳〵や庵の春

うぐひすの舌うちしたり花の味

紅梅や今朝は未だ來ぬ白すゞめ

人日

ふるとしのふる名は呼ぬ鈴菜哉

うぐひすや今谷を出て身づくろひ

む月十七日杉田にあそびて

觧き舟の橋を境やうめの華

これは〳〵爰をや梅のよしの山

上巳

居候夜着の洞出て桃のはな

すみだがはの花見にゆきて

遲りやいかに張良朝ざくら

蜘の園に暫く花も舞ふ小蝶

苗賣りに初音問ばやほとゝぎす

圓覺寺にまかりて

鐘涼し女の力聞へけり

權田坂と言ふ處にて

ほとゝぎす楓花咲く山路かな

禪經をよみて

解脱して魔界崩るゝ芥子の花

青樓草市

市分てもの言ふ花やをみなへし

新蕎麥や一とふね秋の湊入り

はつ茸や苔斗りの小むらさき

啼く山の姿も見へつ夜の鹿

良夜

名月や何に似たるぞ鍋の蓋

炮焙に何ふすぶるぞ秋の雨

蹤浪を追かけて刈るすすき哉

魦魚釣りや蒼海原の田うへ笠

みねとなり渚と成るや秋の雲

山紅葉照るや二王の口の中

又もみぢ赤き木間の宮居かな

みの虫や啼ねばさみし鳴く〔も〕又

歸去來

歸なむ居酒一と口菊寂ぬ

春興

うぐひすの口明く影や下地窓

梅白し眞の手桶の星月夜

こもれても若菜の土や二疊臺

む月二十五日、下谷源空寺の御忌にまかりて

圓なる春の光や江戸の御着

うぐゐすに糸針借む梅の宿

正月四日南岳畫師身まかりけるよし、門人寬茶が書狀とゞきけるに

春雨にうちしめりけり京昆布

初午や霜解道の竹いかだ

新梅莊滿開

朝飼かう鶴もまだ來ず梅の宿

終日花を詠て落日にいたる　林處之家か。

うめ暮て歸る鶴待つ端居かな

李太白

小閑波を歩行て取む春の月

葛城とゆふ謌曲、一聲一張(調)をうけたまわりて

開け春の夜の月なし梅しろし

詩骨牌に女もひとり春の雨

二月二十八日、駐春亭以一が利休忌にまかりて

竹椽にかすむ一間や無盡燈

狗子のころび歩行や花の雪

慈雲山にまかりて

暮の雉子鳴く度に散る櫻かな

三月二十三日夜、隅田川をわたり花を見る。歸路八百屋善四郎がもとにて

行春の袋比目や餅かつほ

卯月九日榎島参詣とて立出ぬるに

川崎を蜂の飛ぶ日や女旅

富塚にて

百貫目の長持ふるや若葉山

神奈川はれ澤屋にて

天に有らば千鰒のなりや杜鵑

八十の賀に

先づ祝へ八千代の春の椿餅

掴む手にあまる螢のひかり哉

高野山蓮華乗院を招じて

夏山に何射弓ぞ弦のおと

蔓ものも包ぬ草のいほりかな

三叉江擧ニ銀鱸ニ

いざ月に願かぞへむ活けすゝき

肴核既盡て樓船に藝子只二人

打水に目通ゆるす下部かな

なでしこや呉服穴織が手のすさみ

ふみ月三日木釜が身まかりぬるを聞て

波羅密の舟にもがもな桐一葉

敏行が驚れぬる三日の月

柳屋安五郎、さごしとゆふ魚を送る時

暑さにも（原註）さわらぬよしの見舞哉

遊ニ百花潭之水樓一

折琴よ纖三味線よすゞみぶね

ふぢ袴誰にひかれてほころびぬ

青樓八朔

仕附学の残る暑や節小袖

霞翠簾に蝶のはさまる野分かな

八十六翁巨園身まかりける時

仙境の新酒呑にかいなれける

良夜

名月や尻うちたゝく十寸の駒

文化十癸酉年夏六月、西洋商舶載ニ南粤巨象一來、將レ貢ニ江府一。故有不レ受、却ニ異邦一。

狭ひやら象は南へかへるかり

重陽

園の中の星にしたむや菊の酒

十三夜の月を見むとて、人々のそゝのかすにまかせて、玉河わたりに杖を引て

月の今日入べき山や稲ほつち

武藏之野無ニ山島一。月出ニ於艸一入ニ於草一。明萬曆中之人農丈人ニ言ものゝ詩なり。めづらしければ其意もてうける也。

栗焼て雨占む十三夜

うつおとは翌の豆腐もきぬた哉

懸魚やかけてぞたのむ鰯網

山蜂に乳房吸るゝ葡萄かな

飛そうなからす驚しや柿畠

駒形の碑を摺て來よ草の花

千両で賣るか小倉の初しぐれ

達磨忌

如何なれば祖師さいの目の納豆汁

藏經に目の引渡る長夜かな

十夜

種冬瓜汝も法然天窓かな

日蓮忌

山ざくら昔しながらの吉野紙

惠比須講

下戸も一ッうけて三郎ゑびす講

ぬくめ鳥明ればこぼす湯婆哉

芋頭鳶や落せし酉の市

扁は無か獅々はいかにや獸店

沽む哉花屋が室の玉つばき

持ながら雀を折む雪の竹

洗レ硯魚呑レ墨

わか鮎やすゞりを洗ふ流にも

烹レ茶鶴避レ煙

つる高き松の木陰や花見茶屋

卜鄰に送る 前書有

鴈金は燕にかへし巾候

甲戌春興

若菜ひく女の鶴の歩行哉

羽子の子や梅にとまれば呼子鳥

筏ゆく跡又白しうめの影

七種のうち揃たる田舍かな

はる雨に濡て戻し女貓哉

隅田川梅屋にて

默禮の思ひ出されず梅の道

藥王寺のうめを

枝垂梅彼岸ざくらに後ゞ向き

洲蛤月頭には酉に有り

うら人が握拳の榮螺かな

涅槃會

ヨヽにふる佛の道や春の雨

西行忌

其衣更着の餅草を團子哉

石濱にゆきて東岸の花を見る

帆が隱し帆が見せてゆく櫻かな

口明て鳴や燕の子安貝

三月五日隅田川を花を

騏驎の布引く花の堤かな

旺春亭利休忌に

螻蛄刻のうごくよふなる春の雨

傳とても花にねぬ夜はたきものな

ほとゝぎすいかに難面き笘枕

う月十八日古筆了意が宅にゆきけ
る時、岩倉三位殿不二の山見むと
て、忍びて吾嬬に下り給ぬとて、
立よらせたもうに不レ計謁見して

岩倉のしのび音もれつ時鳥

御かへし　三位殿

山寺の青葉がくれのほとゝぎす
　きく人がらに聲はそへぬる

夏草や深き思案の蒔の主

小金花亀住む池の玉藻かな

楞嚴經

摩登伽が化粧崩るゝ芥子の花

淺草人丸堂建立の時

俳諧師等も雪と見るさくらかな

扉の子の乳のむ音や苔清水

悼白貢

朝がほや瑠理の世界に人は今朝

此花莫遣俗人看　新染鵞黄色未乾
好逐秋風天上去　紫陽宮裏要頭冠

舞ひ人の冠に似たりねりの花

青樓俄狂言番組

大庭や家の床有萩すゝき

影は空にすみよし踊けふの月

荒神の繪馬かけるあふぎに

鼻聲の御釜拂や秋の蟬

鶺鴒や又來ては尾をふる井筒

さして行から傘白し初時雨

初氷うつりにけりな妹が顏

尾頭をいざ言問む海鼠うり

遠千鳥弓矢の沙汰もなかりけり

文晁が畫がける山水のあふぎに

夕ぐれや山になり行秋の雲

初雪や椽に小鳥の足のあと

至日

子を申聲も春めく冬夜哉

鶴の割る氷のおとや朝ぼらけ

善男子善女人御講參や西ひがし

戊歳暮

行や年すい煤竹の伏見町
節季候や竹の林の羣すゞめ
市人や雪に頭巾のひた兜
餅花やほこりの見ゆる朝掃除
煤臉榲柑の乾はきくの花
金杉も餅搗唄に廓哄し

書の讃に

釣上た鯛よ小判よとしの市

蓮雲樓にて

傾城ふくさ捌きや大晦日
松と梅折かけ垣の竹の障

去年甲戌の秋の頃より瞽者春雲と言
もの丶謎〳〵流行して江都に喧し。

去年かけた謎は解たり春の雪
程ヶ谷に駕乘捨つ梅の花
うぐひすにほ丶う日の出る山路哉

阮歳が三味線は晋子に聲なかりけら
れ

鶯や摺小木しばし朝朗
はるさめや更て箭に入石のおと

二月十七日追福秋香菴巢兆

名は殘る棟の實の木すへ哉
蒼蠅の糞して行ぬ白牡丹
うめ散て鷺草白き木陰哉
蛤のにじりながらや遠干潟
田の畔に花見て歸る鷹も有

篠作の里に蛙合戰ありとて人々まかりける

車前子に手負ひを荷ふ蛙哉

九皐のもとより初鰹送ける

魚の脊に鎌倉山の青みかな

その一ふしを龜田先生へ送ければ

初がつほ一句も出ぬうまみかな　鵬齋

勅をうけて切かねて居る牡丹哉
ふみ碎く蝶の刀や芥子の花

靜養庵を訪ふ。座いまだ濕ならず
して蕎麥を出す。其味奇々、更科
をそしり栗山を笑べし。

うつに曳く涼しき浪の勝手かな

およし姉禮を祝ふて

やよすゞし夏も屏風の蝶番ひ

仁德の御製にもれぬ蚊遣かな

風呂敷の日除も涼しみそぎ舟

乞巧奠

をり姫の織屑飛や星の影

秋に先仕たり新蕎麥新豆腐

かけほしの唐紬に似たりくれのをも（原註）茴香

啄木鳥に日暮殘る木末かな

初鶴や晴れば見ゆる無人島

晝の間の一ト時あつし夜半の虫

良夜

名月や引ふくらめし五人張

いざよひやいざ清見がた田子の浦

淺茅が原の松間を過とて

玉姫のたま〳〵見せつ月の顏

初鴈を聞て

さへかえる余時の木瓜かりの聲

八月廿日、弘福寺の普茶に罷て風
子惠良に謁す。玄關の左右、木槵
の大樹二本あり。

蚊方鐵牛何有二分別一

木槵や金銀の香を悟り不得

東陽山

賢を賢として色にかへての紅葉哉

上野清水にて

煙草から短冊の飛ぶ紅葉かな

髮置を祝て

冬の田に鶴脛長し飴ぶくろ

至日

むりやりに咲や一鉢冬至梅

古田高麗の茶盌を畫にうつし、其
上に讃しておくるとて

幾時雨ふるやふる田のかたみ哉

東叡山の清水に

如意輪の頬杖したる落葉かな

水却て炭を斗るやかたし貝

石落の日蔭は寒し猫の鼻

獺艮の崩れ次第や冬の川

歳暮

塩魚に正月ちかき日ざしかな

いざ珠を拾んとしの浦傳ひ

跋

覃識抱一隱君蓋三十有余年。隱君之操。終始如一。性好誹諧。善圖畫。覃雖不知誹諧者。觀其畫之日進。而又知誹語之韵。響中宮商矣。古云。詩有聲畫。畫無聲詩。隱君之思。有以有聲發者。有以無聲發者。有無不遺。亦何自在也。宜乎辭朱門而處白屋。含蒸灼而就閑曠也。居龍之技。可以消日矣。若夫庖丁之刀。目無全牛。陳平之肉。宰割天下。果何益矣。龍乎々々。屠而獲珠。如覃俗吏。希其鱗爪。亦不可得已。

文化癸酉清明後日南畝覃

書于緗林樓中

成美家集

上・下

此集は故有てはやう見めでにたれば、いで我も序をかきまゐらせてんと成美ぬしに契侍りしかど、ぬば玉の夜ひるとなく、四方八方の責をふせぎかねつゝ、春日・秋夜を、くれがたく明がたき物としも覺えず、たゞまぎれにまぎれ筒のみ在ふる間に、心にもあらで年さへこえぬべう成にたれば、萬なげうちてなん。抑、俳諧の道は我しらぬ事ながら、古今集にすでにはい諧哥を撰入られにたれば、其根ざしふりにたらずや。されば末の世には、橘の八千またに枝葉たち榮ん事うべ也けり。謌と俳諧のけぢめは、只みやび・里びの詞のみにあらず、其もとむる意に在とぞ。思ふに清少納言が船のみちを、とほくて近き物といひしにひとしかりぬべし。何がしとやらんの句に、麥くひし雁と思へど別かな　といひしなど、げに遠くて近き物となん、いと若かりしをりきゝ侍りき。今、成美ぬし、とし比この陰によりて月花は更也、をりにふれ事につけて、大方の思ひよらぬふし〴〵を、はつかなる句にいひのばへ給ひしを、埋木のくちはてなんをゝしみて、其木陰に拾集たまひて、こたび花ぐはしさくら木にゑりて、天地のいやとほ長く傳へてんとかまへ給ふるは、おのづから孝の道にもかなひ、且は世のすき人も、一時じくに此櫻の陰によりつゝ、名にしおふ芳野のはなをしも見が如く、唐にしき立田の紅葉なす、しく物なしとめでざらめや、たゝへざらめや。

賀茂季鷹

成美家集序

成美翁、俯仰古今之觀、包含自然之思、攬天地之慘舒推遷、人事之聚散離合、喜笑怒罵、所會之境、所遇之景、皆寄之徘(俳)諧。其抽思也無窮矣。故能寫人難狀之象、其吐奇也無測矣。故能述人所未道之妙。寄之山嶽歟、孤峯萬仭、絶嶺千丈、可以攬象緯、可以抉雲漢焉。寄之江海歟、浩蕩瀰漫、一瀉千里、波濤馳驟、風雲飛騰之狀、可以奪膽、可以駭目焉。寄之富貴華麗歟、金屋珠欄、紅翠分輝、紹瑞俊雅之豪、嬌嬪婧嬉之麗、可以悅人之目、可以動人

之心焉。其餘隱逸緇流俳優雜伎之意、千象萬狀、使覽者拭眥極目、心駭神悸、瞠乎莫甄別。其所以寄懷也。是以四海騷人推以爲一代之宗匠。嗣子包壽與及門之士、就其華林金谷之園、挹其菁華、咀其至味、錄爲二卷、上梓剞印、以布於世。雖未足罄翁之富贍、覽者須觀其瀾而測其浩瀚泛濫無所不有之大矣。文化丙子春正月

綾瀬　龜田長梓撰

古作春翠校字

成美家集　上之卷

贅亭諌圃全校
男常菴子強
坎窩久臧補定

春

としのうちに春たちける心を

ふゆの春卵をのぞくひかりかな

年のはじめに

けふに明て無筆歌よむ國の春

おろかにもをしみし年を君が春

看經もそこ／＼にしてはなの春

ぬけて出る夜着よりすぐに花の春

元日も過ゆくくさの扉かな

ものむつかしきあたりなれど、さすがに松ども立わたしたるは

小家みなわが春／＼とおもふかな

芒に霜の髭四十一と、はせを翁の

たはぶれ申されけるそのとしのはるをむかへ、吾蓬萊のかざりものに白蓮の交を思ひよそへて

わらへ人薺と海老とわが髭と

哭二素崎子一

雪あられふりあるゝにつけても、いかに〳〵と思はぬ日なし。さりとも梅さくはるにうつらばなど、はかなきたのみをかけしに、日こそあれ元日といふ夜のほどに、むかし人の數に見なしぬ。門にたてたる松竹も、いまは恨みのたねとなり、小庭に來なく鶯も、たゞなみだの友となるばかりなり。

なに事もひと夜につきし千代の春

元日もはやくくれて、ふつかもすでに過ぬ。

三日減るはるやそれだけ月になる

松しまもそこらにあるかはつがすみ

門さきの枯木もかすむこゝろあり

せりよめ茶すこしの事も霞けり

日にあきて龜のとびこむかすみかな

かすみ來てまぎれにけらしふる小袖

葎かきはらひて春をむかへしも、としはからず市中にありて

いまさらに面目もなしかどの松

人日にしたしき人のうせけるにおもひつゞけし

門まつもなみだをそゝぐものなる歟

人日對二久臧一

薺うつ江戸品川は軒つゞき

妹が子は薺うつほどになりにけり

老の涙年くはゝれども丈山翁の心操なし

春を見に淺草川をわたるなり

春のれうとて青竹にて製したる茶筅を賣人あり。その人病なくして卒にたふれたり。牛の價を論ぜし

よりも猶はかなさのたぐひなくて

大ぶくや泡と見し世の人のうへ

子日せし跡とや人の立ありく

まづひとり旅人通る子日かな

さくと見てふた夜過しぬ風の梅

咲梅にひかりあはすや貝のから

假家に名ふだかけけりうめの花

人すめば水もこほれて藪のうめ

われことし三十六、安仁が鬢の髪やゝしろみたり。宗祇法師が髭とはとたがひたれど

香をとめて白髪愛せん窗の梅

野の杭の人とも見えてうめのはな

ふる家や賣そこなふてうめの花

寒村野梅

古澤や牛に嗅るゝうめの花

淺くさや梅すくなくてはるの空

うめが香を袂にいれてそら寐かな

梅がゝや灯心かけし軒のつま

うめが香の家一ぱいに小雨かな

子どもの道中すぐ六といふものうつを見て

東海道のこらず梅になりにけり

擬古

梅に立や錢なき詩人清く痩て

紅梅に大根のからみぬけにけり

うめ柳ひとつふたつはとしもとれ

題畫

家ありてまた柳ありどこまでも

おもしろや柳の間を人のゆく

春の柳もたれごゝろになりにけり

でくるほのやなぎをわくる扇かな

家はみな春は柳でおもしろし

青柳に留主はあづけむ門の鎖

くゞりこむ春となりけり門やなぎ

魚提て柳がくれにもていりぬ

亡父の忌日に

しかられし夢は柳のしもとかな

階子とるあとは芽になる榎かな

とし寄の鳩によばるゝ木の芽哉

田家

わか菜摘てやがてけぶりを立にけり

猪のふむあとさへ春につむ若な

春の草ひきむしりても喰ふべし

よくいねて今朝日にかゝる春の草

はや誰か扇すてたるはるの草

別二玉屑一

はるの草心さぶさを抱きけり

草庵

鶯をきくにもさはる葎かな

うぐひすのうすくろくなるゆふべ哉

うぐひすのかくれあらはれ見えずなりぬ

うぐひすや浮世にすまば中二階

うぐひすのなく音を顔にかけてけり

鶯やふた聲ほどは楽のうち

かつしかの旧居のなつかしきに

住し藪の鶯かいま聲するは

と申いで侍れば、かたへにある人

春さびしとやしたひ来つらん

かく附侍し。これらはいかいの連歌といふべきにや。

海苔たゝく家とて杖を入やすし

正月はからかささへもおもしろや

正月のこゝろ崩るゝ彼岸かな

涅槃會のあくる日、すみだ川に棹さゝせて三河法師が幽扉をたゝく。

春さぶし月まつほどの後世かたり

ある禪師のいはく、風雅は俗にちかく、俗は風雅に遠しと。

はる雨や博打に隣る夜手ならひ

はる雨や窓はいくらもほしきもの

春雨はみるふさぬるゝ雫かな

はる雨や編笠ごしの音羽やま

春雨やふるにさはらぬ茶の煙

題按摩取

はる雨や化物ばなし錢五十
起〳〵や舌もつれしてはるの雨
朧月やなぎの枝をはなれたり
朧夜や吉次を泊し梳のおと
かまぼこの煙へだてゝはるの月
さゝやかばくもりもぞするはるの月

少年行

印籠をたづね戻るやはるの月
錢嗅(マヽ)き人にあふ夜はおぼろなり
くさの戶や丸くなくともはるの月
鯛の汁喰ふて出たれば月かすむ

讀論語

春の夜や酢を乞に來る隣あり

餘寒

はるの寒さたとへば蕗の苦みかな
古沓の唐までもゆけはるの海
光琳が譜に汲るゝやはるの水
すぢかひに寐ても見ゆるや春の水

墨水晩望

人うつす水のこゝろもはるなるか
はるの水まがり〳〵のおもしろや

乙二坊に對す

春風のあとさきもみな咄かな
鎌倉の世から畑うつおとこかな
寒食のこれをもいとへ唐がらし
かげろふやいせの御秡捨てある
陽炎や世はとにかくに捨にくし
何となく見らるゝ鳥のから巢かな
巢をたちて鳥の心はあともなし
艸の雨土器屑になく雉子
魚提て松やまゆけばきじの聲
草山や潮じめりにかへる鴈
かへる雁ばら〳〵になりて見ゆるなり
はたご屋は夜も戶たてずかへる雁
雲雀たつ七野をふたつ見殘しぬ
蛙なくそばまであさる雀かな

露の雨おのが二月となく蛙
かはづ鳴里の雨夜も小百年
春の鳥何をおもひぞ胸ふくれ
草臥や身をたふれたる蝶の中
とびたちてもろきは蝶のこゝろかな
ひら〳〵と墓原までもはるの蝶
蝶まふや薪一把も門ふさげ
白魚のすこしまかりて長閑なり
しら魚はお僧すこしはまゐられよ

わかき時より虚弱多病なるを、亡父のつねになげき思はれしに、病身つゝがもなくて、やゝ老の數に入ぬる事、わづかに孝のひとつとやいふべき。

かい撫の春やむかしに吾しら髪

讀二寡婦賦一

春の夢さめて隣のはなしかな
接木して花さくと夢に見たりけり

待花

はなやさく心にかゝる夜着の襟
何ごともなき世の中やはつざくら
あはたゞしけふ花さくと人はいふ

田家にひと夜ふたよ泊りて

寐過すや麥のあさ露桃のあめ
はら〳〵や桃はちるときをしいもの
番雛は花見る顔に書にけり
歸らうといふまで人の汐干かな
西行は汐干を見てもなかれけり
ねるほどは風ふく花の木の間かな
花の中大事にもてよ桶の水
をれながら芽をはる花の下枝哉
貧乏が追ふても來ぬぞ花の陰
おもふ事花にまぎれて何もなし
はなに寐て起てもとの春日かな
朝飯を過すや花の鐘がなる

わが多辯なるを人のにくみけるに

ものいふもいやなりけふは花の陰

へな〳〵とするや小橋もはな心

なまなかにかへる家ありはなざかり

花のなかすこしちれともおもふなり

源氏物がたりかり侍て、そのぬしなくなりて後、空庵へかへしつかはすとて

花鳥もおもへば夢の一字かな

江口の女の象に乘たる畫に賛のぞまれて

ねぶき眼をひらけば花の浮世哉

石川や飛わたりするはなごゝろ

上野にて

宮さまもおよらぬさうな花に風

俤草紙

ちとせふる松だにくゆる世中に

けふともしらでたてるわれかな

これは松樹のきりくひに火のもゆるを見て書寫の性空上人の詠じたまふとなり。

ちるはなの中にたちたる此身かな

花の句あまたよみける中

花を折こゝろいく度もかはりけり

頤に杖する花と身はなりし

某〻が七十の賀

いつまでもかくてませ〳〵はな千句

六になりける娘の、そのかの母と手たづさへて菫ほり、つばなぬきてあそぶに、あるやんごとなき方の花見し玉ふとて、上臈たちの立ありきつゝ、あこよ、名はなにと、としはとひたまふに、ふしめになりて名は糸とまうす。年はこれとて、ゆびひろげたるに、みなあひきやうありとてわらひ給ひぬ。たかき人に名をきこへあげしを、かれが一世のめいぼくにして、そのみな月なくなり侍しが、ことしかの花の陰もなつかしく、ひとりすみだ川に杖ひきて花見ありくに、

さらにこゝろもなぐさまず。古墳
の柳のみ風にうごきて、したふが
ごとくうらむが如し。

しなばやと櫻におもふ時もあり

晋子・嵐雪が像に、おの〳〵花の
句を題せよと人の望ける。二句

花に醉て涎もすぐに十万句
出ぎらひの身をふり埋め花の雪
重箱に鯛おしまけてはな見哉
掛乞の顏もわすれてはなの蔭

閑齋が古家もとめてすみはじめけ
るよろこび

うす壁や鼠なく夜もはなの空
をれぬすめとても花には狂ふ身ぞ

遲日を

泥水もはなをうかめて暮かねし

哭浙江

膝をかされ願をもたせて俳句に交
りし事二十余年なりし閑齋が閑
も、いまはまことの閑になりて、な
がく作意を聞事なし。

はる雨やそこにより居しはしらあり

いつのとしもすみだ川に腰をおさ
れてたづさへ遊びしも、ことしは

杖とたのむ人あらば花も見やうもの

閑屋の里のみやこ鳥、嵯峨の鮎く
ひにといざなはれて、旅ねの夜の
うす蒲團に東山のたゝずまひ、ま
づなつかしと、此曉杖をはじむる
秋香庵が笠のうちに顏さし入て、
かくぞさゝやきける。

踏ところ草鞋にかゝるはなの塵

あるやんごとなき人の、杖つくや
うやしりてあるとの玉ふに、なに
ともおぼえ侍らずと荅申せしに、
杖をいさゝかもたのむ心なくつく
べしと仰られし。此ことわり何事
にもかよひてたふとくおぼえし。
われ脚病、脛よわければ、はつ老

のけふより杖をもちふるに、かの
御ものがたりはおもひ出ながらか
くぞ申侍る。

たのむなり花の跡とふ竹の杖

さつとちるはなや拍子やもどりあし

灯ともすにこれはいつまでちる花ぞ

ちるはなや舞も出べき腰あふぎ

永日のこゝろを

よく見れば捨し山葵の芽になりし

こゝろのとまる戸がくしに咲たりな
ひのみこ阪の小ざくら

是はしなのゝくにの臼ひきうたな
りとぞ。此こゝろを發句にせよと、
柳莊がもとよりいひこせしに

あふむけば口いつぱいにはる日かな

野遊のこゝろを

くれるまで我もすみれの上にゐて

野の菫しづかにあゆむ鳥かな

狼に夜はふまれてはなすみれ

勇の字の題を得て

蜂の巣をひとうちにして晝寐哉

一瓢上人の新室は俳士をあそばし
めんれうなりと。われまづひと夜・
ふたよの枕に塵を汚さんとす。

夏ちかの誰も柱によりやすし

山吹に聲なく雛のすさましや

やまぶきや牛だまされて芹生まで

やまぶきやさくらがちれば我もちる

山ぶきに日のさす春もいますこし

菜のはなに夜のおぼろはやぶれけり

ものいはぬ人も春なりふぢの花

身のひまやうしろあゆみにふぢの花

かたげゆくこゝろとなるやふぢのはな

としよれば見さだめがたし藤の花

竹をみるこゝろとなりて春はゆく

よしもなきしる人ふえてはるは行

長恨歌

養在二深閨一人未レ識

ゆく春を鏡にうらむひとりかな
春の山けふはや夏におしかゝる

三月盡の日、江嶋にあそぶ

頼朝の献立つきて春のくれ

巣兆が千住の茅舍にひと夜とまりて

ゆくはるやおく街道を窗のまへ

おもくわづらひて、はるもなかば
すぎゆくころ

いかのぼりいかになりゆくわが身ぞと
おもふもそらにくるふこゝろか

夏

我まへに雲行影やころもがへ
耳のなるともわすれてころもがへ
更衣膝にまづおくひねり文
世まかせのこゝろともなれころもがへ

四月はじめ、はこねのゆあみに出
ろとて

う月たつ宿は草木にまかせたり
白ぼたん崩れんとして二日見る
このゆふべ鬼に喰れし牡丹かな
日くるゝにいつまでつぼむかきつばた
杜若花のそばよりつぼみかな
虫糞に葉はたちのびてかきつばた

人〳〵筆とりて一紙を畵けば一句
を題す。むかし清少納言が古歌の
一字をかへていひし事を、ふとお
もひ出て

かきつばた畳に墨はこぼれても
杜若人ありと見えてこぼれ米
灰捨てしばらくけしのくもり哉
すみよしの松の木間にもけしの花
よしや世は木棉ひとつに茄子さく
すめば世に山のひくみの麥ばたけ
橋ゆけば人に見らるゝ若葉かな

わか葉して佛のお顔かくれけり

あさ起も朝寐も竹の四月哉

　一日百句の中

ひろごりて伊吹にさはるとし竹

若竹やひきたわめても寐て見たし

竹の子やかたばみ草のとりついて

　待郭公といふ事を

はらのたつこゝろのはしもほとゝぎす

ほとゝぎす鳴や佛の爪はじき

ちら／＼と見しかとをおもふほとゝぎす

藪寺や葬月夜ほとゝぎす

はしり出て香魚も聞らん時鳥

　蟬夢法師の旅寓をたづねし日、月川上人・重厚法師などもろともに、いざ給へ、すみだ川の若葉のけしき見せ申さんと、かしこより小舟にのりて

ほとゝぎすもひとこゑさそへみやこ鳥

五加木茶やふり出てなく時鳥

柴かつぎ見あぐるそらやほとゝぎす

　市街はいかいうた

から臼のとなりにすめばほとゝぎす
　なけども／＼まぎれこそすれ

このすぢを人もきくらん蜀魂

はやつゆの草木となりて杜宇

鳳ほどのものが鳴なりほとゝぎす

夏來れば人しづまりて閑子鳥

やまぶきに實もとまるかや閑居鳥

石臼はぬすみ人もなしかんこどり

けふもまた梨子をかぞへてかむこ鳥

かんこ鳥柳のむしもかくれけり

　秋田の無事菴、わが草室にあそぶこと十日あまり。あるあさみづから木(髻)鳥おし切て、すみだ川の流にながし捨ぬ。その胸中ちりばかりの念慮なきをみな人うらやむ。從來の無事、またいよ／＼無事ならんとたはぶれて

似たものは客にあるじにかんこ鳥
鳴わびて戻るも見ゆる水鶏哉
世中を是でまぎらす蚊やりかな
蚊やりするはりあひもあり眞土山
後の世や蚊をやくときにおもはるゝ

葛飾三僧の中

蚤とりて有明の月は出にけり
なつのよは土器ぬれて明にけり
夏めきて人顔見ゆるゆふべかな

四月六日、草菴の名殘

鼠なき葎しけらん今宵より
みじか夜はとてもかくても過ぬべし

右移栖辭あり、略之。

短夜や蜆くふさへもどかしき
みじかよや橘にほひ月はさす

夏の人といふ事を題して何せよと
人の望けるに

夏の人月にもありのすさびかな

大磯に泊りける夜、ほとゝぎすの
あまたなくよし人のかたりける
が、曉までおとせざりければ

夏のよは燒酎賣のひと聲に

結制な

一笊の塩やとけゆく夏百日

五日

粽ほどくそれにつけても草の宿
粽ゆふ小冠者に戀のこゝろあり
をかしやな葎の中にふくあやめ
五月雨のあすは槍もたのみかな
五月雨や三日見つめし黑茶碗
きのふ見し旅人もどるさつき雨
五月雨や西もひがしも本願寺
さみだれに鶯なくや何のひま
さみだれのまたをとつ日に似たりけり
つゆの身をもてあつかふや五月雨
さみだれや吾かつしかは蕗の陰

いつのむかしならん、柴扉に杖な

むかへて在芝の三吟ありしも、た

ゞめのまへのやうなり。

さみだれて我宿ながらなつかしき

右一土朗翁一

味噌水もさみだれくさくなりにけり

さみだれの中に三度のけぶり哉

さみだれは喰ふてはこするたとへ哉

虎が雨といふ題に

尺八の雫におちよとらがあめ

蟬の羽も夏はへだゝる心かな

こゝもまた蟬を浮世に山の家

なにゝこの袴着る世ぞせみの聲

いて戻れ大津車にかたつぶり

百般の世塵靜ならず、たま〳〵入

來りて、いかにやなどいふにこた

へて

よの中はかくして過せ蝿はらひ

蝿打てつくさんとおもふこゝろかな

海までも吹てとれ〳〵蚊屋の裾

わびぬれば蚊の入かやもたのむ也

たちばなの香にせゝられて、とき

こえし風流にはたがひて

かつしかの蚊に寐かねつゝ椎の月

庭鳥もふりかへり見るゆりの花

我宿は夜さへ見ゆるゆりのはな

古家や草の中より百合の花

傘にあまりて見ゆる夏の山

丸山眺望

不二は眦よりおこり、三浦・かまく

らは腰のほどにつらねたり。欹も

のは箱根・あしがら、臥るものは

大嶌・はつ嶋、ちかきは眞崔のうら

つゞき、遠きは甲斐・信濃のやま

〳〵、さゝやかなるは三嶋・ぬま津

の家居、大なるものは

夏山や袂によする伊豆の海

橘やひと夜とめたる泣上戸

あなにくや猗(マヽ)老鬼婆のたぐひ、鈒

をぬきて追しといふ古こともおも
　ひ出て
よし原の蝿になげうつ小判かな
いづかたに夜はしらんはつがつを
　晋子が口氣
白眼に貧乏人やはつ松魚
ふたりまで友達死で初がつを
むつかしき世も日はくれてとぶ螢
小ふくべの青みにつくやとぶほたる
貧しさは螢とぶにもまぎれけり
南無〱といふにもくるふほたる哉
くさの家は百萬遍にとぶほたる
　塵境に身をしたがへて靜なるいと
　まなし。たゞ日くるれば俗事おの
　づからしりぞきて、しばらく寸心
　をやしなふ。
人に遠し宵よりこもる幮の山
たちばなやむかし小袖の賣に出る
　おくの東堀より十苻の里のすがご
　もをおくりこせり。うち見るより
　古き名のゆかしく、めづらしく、
　さていとすゞしげなれば、あした
　にしきゆふべにひろげつゝ、三苻
　もなゝふも誰をかふさせんなどめ
　で興じて
夏はたゞひる寐むしろに夜の月
　小梅閑室
　杜宇しば〱鳴わたり、水鶏まれ
　〱おとづれたり。ほたる飛かふ
　稻葉の風も、軒にしげれる木立よ
　りおとして、さらに扇もわするば
　かりなれば
月と雨かはる〱やなつ座敷
　あさぢが原の中に木だかき岡あり。
　そこに三阿法師がかたばかりなる
　菴しめてすみける比尋行しに、世
　ばなれたるすまひのすべて西上人
　の物ずきにかなへり。
松ふかし人目おもはで夏の月

庭中に梯子のかけや夏の月

施米といふ事を

麥米やころもの袖にあまるほど

貧しげに扇の見ゆる戸口かな

夏野行扇のはしもたよりかな

身のむかし戀せし人か夏野ゆく

うちはもつ人はこゝろのやはらかき

牛嶋にある釋迦像の貞觀の古碑、うすき墨にすりもとろかしたるを枕かみにかけたり。

凉しさや夢を佛に見せまうす

何事もむかしになりぬゆふすゞみ

すゞしさにいくらも喰ふや枇杷の玉

凉しさや百合も芒も手にさはる

すゞしさや家のまがりは夜見えず

貧すれば身をさま〴〵に夕すゞみ

すゞしやと人いふ聲をほだし哉

家〳〵にあひるもどるすゞみかな

南下の一草、はじめて京へゆく。

しれる人のもとへ狀書てそへよといふに、したゝめつかはすとて

夜すゞみやかならず袂ひくあらむ

とかくして崩れも行やくもの峯

題 范蠡

くものみねかくれ處は見ておきし

此ごろの見るものとては雲の峯

先師去年の此比、八仙人のかたを書て給りければ、とく一軸にしたてゝ見せ申さんとせしに、その事はたさず。今おのれがおこたりをなげきて

皐月來ぬ死なぬ藥も調そらごと

ほそみちの古きひとすぢをたどり、しら川の關こえんとする羅城法師をおくりて

夏草のおくものこさぬ杖ならむ

山芋の蔓にひかるゝ淸水かな

のら猫の眞葛わけ入しみづ哉

題西行
このおくにしる人あれな山清水
吼犬もしづまる蓮の夜あけ哉
撫子のふし〴〵にさすゆふ日かな
なでしこのばら〳〵になるもあはれ也

新成松齋

半日は浮世わすれてねぶの花

民玉子、みちのくの名たゝる所〻見めぐらんといふに、西上人のと葉をそのまゝにいひ出て、けふのこゝろをのばへ侍る。

合歡の旅ねおくゆかしくぞおもほゆる

素嶠居士は、なとゝしの春久しくやみて家になはりぬ。麥宇は、西の國へ下らんとして伏見の舟の中にて、にはかに病おこりてむなしくなれり。したしき友どち、本行上人のもとによりあひける日、懐旧の附合して此ふたりのなき玉をなぐさむとて、おの〳〵香や花やといとなみけるに

夏くさのつゆもかゝるや反古さらへ

曲直老人、七十初度の賀にあはせて、あらたに家つくられしを

なつ桃に老せぬ門とたづねけり
夕立や耳のそこなる雞のこゑ
白雨や安居の沓の流れさる
ゆふ立のむしりて給へ門むぐら

題長明

夕立や家こし車の雨そゝぎ
ゆふだちやまたあらためて百日紅
あつき日や軒のつまなし落もせず
暑き日や日をふるかたの烏賊の骨
あつき日のたよりともなれ青楓
あつき日やこゝろなぐさの桶の漏

天狗のうへた題にわかちて發句して戯けるに、呑二熱鐵一といふ事を

胸あつやあさ夕倦し茄子汁
あすも見むはつ花茄子吾なすび

讀二莊子一
ねぬや人蚤より大なるはなし
晝がほの赤みに人も秋ちかし
山家のなごし、いぐしたつるわざもなければ
おもふことみな白雨に流しけり
將屑の袂をぬける御秡かな
みそぎ川こゝろねだけし人もなし

成美家集 下之卷

贅亭謙圃
男 常菴子強 仝校
坎窩久臧 補定

秋

はつ秋や何の烟も眼にかゝる
はつあきやけさは柱に手のとゞく
立秋のこゝろを
灯ともすもまづめづらしや夜の秋
はや秋の柳をすかすあさ日かな
賣家のとなりにすみてけさの秋
淋しさにつけて飯くふ宵の秋
月僊上人の大なる茄子ふたつ畫るに書つく
汁好のうれしきあきにうつりけり
殘暑のこゝろを
七夕にねがひのひとつ凉しかれ

あふぎ臥あともまくらも天の川

ほしのあふ夜や我がちに草の花

薙髪してのち

たなばたや涼しいさへもうれしきに

竊郊卅をさらふによしなし

銀漢豆腐の水にかよへかし

桐ひと葉手を打かへすけしき哉

よをこめて鼠はじきにひとはおつ

かりそめや壁に釘うつ玉まつり

なつと秋とふたつにわりし西瓜哉

燈籠や顔見し友はひとりなし

高燈籠見まじとすればめにかゝる

をどり來て山もとちかくなりにけり

珠數のすく袂も秋のかたびらや

角力とり露の妻子もありときく

つゆの身とおもひもかけず相撲とり

秋のくれ立出にけりすまひとり

おくの乙二がもとより、かつしかの秋の風、垣のはこべ實やむすぶ

などいひこしける返しとはなくて

くさの露藜見し人をおもかげに

よく見れば露もしばらくひとさかり

ふつか三日四日五日露の置まさる

我歸る家は見ゆるぞ露の中

身ひとつは水汲ずともくさのつゆ

草庵餘長なし

のぞみならいくらもくれん露の玉

美しや世にたとへたる草のつゆ

つゆの身といふもまとやまくらもと

玉川はふたつも見たりつゆのあき

家はみなつゆの中にてうつ火かな

乙二とわかるゝ時

つゆ淺茅たがひにながめられにけり

いなづまや人のあゆみもおそいもの

稲づまや念佛十聲の間に入

いなづまや野にたつ人もあればある

稲妻とひとつになるやくそかづら
いなづまに梨子の接木のいたみけり
いな妻を待や佗ねの探しもの

杖を曳て梅山居をたづねゝに、無門の關たかく鎖せり。いかなるか是秋風一時の情。

秋の聲門たゝけどもこたへなし

あさがほの句あまた作りける中

情(精)出してさけよ朝がほ人もつゆ
あさがほのはや此秋を咲へらす
杓子とるいもがあさ顔咲にけり
あさがほをあすも〳〵とおもふ世か
あさがほのはやしぼむ見るけふの秋

草堂兀坐

あさがほのさく見てけふも過すなり
朝は蕣夜はいな妻の世となりぬ

一日百句の中

牛捨る野にも立るやをみなへし
そりかへるほどあはれなり女郎花

秋風をまつとてたつやをみなへし
はじめから吹をられけり女郎花
かなしさのちらりと見ゆる萩の花
簑むしよ甘露ふれりと人はいふ
有明や馬のなくまできり〳〵す
月や入癪(よカ)に鳴まるきり〳〵す
牛の尾にうたるゝ秋のほたる哉
小屏風やたてはさまるゝ秋の蝶

躡屐無勞問惠休

杖むけてまづあはれなり秋の山
柴の戸はあくるよりはやあきの風
人すめばすむとてふくや秋のかぜ
鴛鴦も吹わけられて秋のかぜ
身ひとつにかうまで吹かあきの風

鎌倉にて

名をとふや畠〳〵の秋のかぜ

病後

棲ふみてころびやすさに秋の風

ひとつ灯の消もはたさずあきのかぜ

あたりさへものむつかしきかきほに、はひまつはるものあり。夕顔の露けき風情にはたれも〳〵見なさず。そこに咲るはととふ人もなきに、たま〳〵柴扉をたゝける隱士に對して

はづかしや絲瓜にかゝる夕けぶり

なにはに一とせあそびて、來る年の月の比には必歸り來むといふに、老後の露命おぼつかなしなどおもひながら再會の期を約して

それまでの命こらへん風の秋

かまくらにて

里人の餠のぼりて月のくも

さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の山里。われまた庵ならべん心ざしあれば、其由上人の新居のまことにうらやまれて

月清しふところにせんかんなくづ

陰に居て月に座しきをゆづりけり

身のひまや朝寐よきころ月の比

名月の雲にほゆるや山の犬

脚病一歩なすゝめず

名月を追ふてひけ〳〵庭むしろ

名月を大事にふくや松のかぜ

名月やとばつゝしむ夜の人

名月やわするゝころを風のふく

名月も葎の宿にかへりけり

草花

名月のひかりばかりぞにぎはしき

名月にあふや小庭のひとつ瓜

名月を人にも見せずかくれざと

はや出しわが庭松に月は出し

家ふたつあれば月見るもやうかな

ふはとぬぐ羽織も月のひかりかな

十五夜

世にあくと人にはいひて月見かな

仲秋無月

雨見ゆるそれさへ月のちからかな

乙因が故郷におもむくわかれにのぞみて

有明のひかりしみつく袂かな

世中やなるこ曳てもわたらるゝ

ちる木槿掃あつめては見られけり

白木槿毎日しぼむころをみる

何もせず木槿さくまで世はなりぬ

門の秋木槿唉籬ほつれたり

亡人呑溟がみづから寫せるひとつ橋集、わが方にとゞめありしを、つま子のもとへかへしつかはすとて

葛の葉をかさねて夢の古さうし

秋江晩望

松芒そのほかのものなかりけり

ちゝぶ山窪いところや花すゝき

此おくにしる人もあれ花すゝき

これよりして秋の日よわるすゝきかな

芒はら果はしほやくにほひかな

飯櫃や下葉をれこむ風の荻

これさへもへりゆく秋よ唐がらし

秋はたゞなみだもろくも唐がらし

何人かすみて顔出すまどの蔦

ひと寐入よくしてきけばころもうつ

大かたの茄子たふれてうつきぬた

庚申の三弦のころきぬたかな

箒木にかくれてうてる砧かな

陽子なくなりてのち、狂句をかしきふしもなき事をくゆ。ひとたびは亡人をかなしみ、ひとたびはのこれる命をめづらしとおもふ。悲愛かはる〳〵胸をせめてこゝろはれたるが如く、狂せるに似たり。

しるやいかに我さま〳〵に秋の雲

浙江潮かれ盡てより春秋行かふと既に七度、ひさしく波浪の清音を

きかず。俗耳を洗ふによしなし。

風悲しわすれぬをわが秋の友

喰て寐る身のつたなさに秋のくれ

閑中日月長といふことを

秋の暮鐘長閑なり人なしに

露の家は鴈ともも寐や壁ひとへ

夜増戀といふ題に

夜の鴈かさねかけたるおもひかな

大竹もなびくや雁のわたりぞめ

破れ戸に釘うちきかずや宵の雁

秋の日は雁の羽風に落にけり

眼のまへに蝶死でなく鶉かな

古沓や荻にかゝりてなくうづら

おろ〳〵と人に見えけり曉の鹿

やせ〳〵や身をつまだてゝ男鹿鳴

しかきけば木の葉のやうな我身なり

三夜さきくおなじ所やしかの聲

食に肉なし

わびぬれば柚味噌の釜を喰ひけり

蜻蛉もちとふりかへれ神路山

蛤の息もつきあへず野分ふく

淺草やすゑは稲葉に三日の月

みか月のひかりをちらす野分哉

後の月鴈大聲にとぶ夜かな

のちの月葡萄に核のくもりかな

白雨居士の一周忌に、人〳〵あつまりて追善のはいかいしける日、懷旧のこゝろを

后の月かたりあふほどたのみなや

さゞ浪も身にかゝるかとのちの月

のちの月藜は杖にきられけり

尾花みだれてむなしくまねかず、桐おとろへて葉のおつることはやし。晦海主人、にはかの病に物故のよしをきく。時しもあれとおどろかれて

後の月あれよとおもふ人はなし

右哭二蒼園一

老懐

酒はいかい口はさかりてのちの月

寐られぬ夜に

おもひ出るむかしもなくばいかにして
寐ざむる秋の夜をすぐさまし

うれしさや夜さぶの陳皮唐がらし

茶をのめば目鏡はづるゝ夜さぶ哉

小判よむとなりをもちてよさぶ哉

長夜のこゝろを

秋の夜は松しまの松もかぞふべし

ながき夜を我にむかふや屏風の繪

骨柴の崩れてのちも夜ぞ長き

菊さくや五つはのこる唐の皿

夕ぐれにけふもまたなるきくの花

きく咲て雀の米も日和かな

行燈の蓋さへ見えてきくの宿

きくの香に下部が桐油こゝろせよ

ひと壺のなめものなれて菊の花

みそ焼は小金もへりて菊の花

菊を見て一日やりのこゝろかな

園女賛

菊の香をもてしづめたる硯哉

菊は花のとぢめなりとや、ものこゝろぼそきをりから

來年も見るとやすらんきくのはな

寒ければ顏もてよする柚みそかな

秋茄子藥に燒ぞあぢきなき

あきもやゝ黒みに入ぬからす瓜

落栗や兎のあそぶところなし

閑室獨坐

口は過る梢の柿と見あひつゝ

吾ふくべ種なるまでに秋を見し

椎ひろふ浮世過すもやすいもの

神田祭

鄙の拍子はむかしにて花芒大名衆の警固おごそかに、神輿のわたら

せ給ふさまいと尊し。神人・氏人どもけふをはれと出立つゝ、はなかざれる車ども曳つゞけ、笛・鼓おもしろく打吹たる、實に大(太)平の音なるべし。此車を花出しといふ、東の俗語なり。是は加茂・八幡などの祭に、出し車といふを出させたまふにおもひよそへてかくいふにや。

花出しやうごき出たる秋のやま

脊隣と舟をおなじうして此長流にあそぶ

かなしさや秋の日は入角田川
うら枯やふねは下るぞおもしろき
末がれやつきそこなひの鐘の聲
やま里は是を人目に案山子哉
見る人の唇かわくもみぢかな
水くむも浮世がましや夕もみぢ
我からの鼻息見えてゆふ紅葉
底すみて魚とれかぬる紅葉哉
ひよ鳥も來て悲しがるもみぢ哉
住なれて魚なき國のもみぢかな

若一王子の田樂師、さはる事ありて秋の末におこなはれけるに參りて、花のころは花もて祭るといふ古をおもひ出て

舞人よ紅葉のころは袖のかぜ
名月もふたつ過たりつゆしぐれ
秋の果龜は小藪にはひ入ぬ
朝がほを芋と見るまで秋たけぬ
あきの日のさすやかぎりと山の腹

小の九月に

この秋は晦日さへなくて暮にけり
ゆくあきや門の小草のほつれより

暮秋のこゝろを

秋の山すそは時雨とふりにけり
音にたてゝふくべもなるや秋の果

暮秋

きり〴〵す曾我ものがたりよみはてず

冬

猿曳の小春機嫌に出にけり

大名のもみぢふみゆく小はるかな

名所

犬吼る聲も淀野のしぐれかな

人ゆけばやがてしぐるゝ野中かな

宵の中上野淺草としぐれけり

人は寐て鼠の顔にもるしぐれ

青草のすこしもあれば時雨けり

梟の身をまかせたるしぐれかな

蕉翁の像數枚を畫がきて、人〳〵にわかちおくるとて

くま刷毛に上野のしぐれそゝぎけり

光廣卿聞書に、秀歌の躰大略猥雜無レ極者歟といはれたる定家卿の首をしめて、問たきなりと。此こゝろ誰もあるべし。

芭蕉會にその唇を守る哉

けふの供米を勸進申されけるにつかはすとて

はせを會に瓢の底をたゝきけり

几董が伊丹といふ所にて、にはかになくなり侍りしよし、はや便にいひこしける。風雅にかゝづらふ人の道路に死なん、是天の命也と、はせを翁も書のこし申されける事などおもひなぐさめて

旅笠をつひのやどりやかれ尾花

一天四海皆歸妙法

御命講子どもの親も呼れけり

十夜

酒賣の十聲ひと聲たのみあり

すくひとれ十夜の汁の芋杓子

見佛聞法

生海鼠さへこの時にあふ十夜哉

十夜とて袖ふりあふもたのもしや

葱の玉神のお留守とにほふなり

木がらしの人も草木に似るものか
こがらしのふくや瓢の種をさへ
木がらしになに事もなし豆腐槽
落葉して日なたに立る榎かな
貝むきが手もとまぎるゝ落葉かな
明るまで人はよく寐ておちばかな
鷗まで落ば寒がる風情かな
人さらに狸のあとをふむ落ば
この比の疊ざはりも落ばかな
落ばして小寺〳〵のあそびよき
鳥めらが來ては屋根ふむ落ば哉
日みじかに見てもをらるゝおちばかな
ちる木の葉いくへの下の我ならむ

花にうかれ月をもてあそびしも

すみだ川木の葉がちにもなりにけり
松竹におもひもいれずみそさゞい

浙江二七日に

人をとふ我も冬野のきり〳〵す
見るほどに歸らんとおもふ歸りばな

わがすむ軒端つゞきの其由上人は、今の月川大德の古き名を乞得て、狂句にあそばんといふをよろこぶ。

水僊に霜の白さをつたへけり
水仙は葱のきはにて咲にけり
麥まきやその夜狸のつゞみうつ
辛崎の松も見ゆるや大根びき
かまくらやをさまる御代は大根曳
大根ひくその夜や松にきり〳〵す
大根ひきて松はひとりになりにけり
長明が車もおせや大根びき
棒提てゆけば鴨なく澤邊かな
ぬす人も妹とぬる夜やなく乳鳥
川千鳥牛の喰ものなかりけり
肩ほねの鳴るにつけてもなく千鳥
すみ〳〵にものおく冬の夜はをかし
炭つむも物氣に入らぬ浮世かな

炭なしといふ聲小夜も更にけり

鐘なるやすみのはねしも宵のこと

炭といふ題に

木のはしの法師も炭により給へ

いつまでか鳶にもならで古ぶすま

引かぶるよし野のおくの衾かな

うなり出す三斗の釜も霜夜哉

旅人の捨た箸なり曉のしも

老　情

寐つくさへ拍子ものなり霜の月

哭二菜兆一

三十余年の旧交、たゞ一時のあだ
ことゝなりてながき恨ないだく。
書論の雅名も今朝一片のけぶりと
ともにあとかたなし。

なにごともひとつ殘らず霜の草

亡妻が墓まうでして

塚の霜われも苔にはちかき身ぞ

鋸をかるも戻すも寒さかな

家さぶく桐の赤葉のひとつ哉

寓　感

つたなさの寒さにつれてまさりけり

藤棚の下に米つく寒さかな

賣てやる夢さへも見ず冬ごもり

あさ顔の蔓もはらはで冬ごもり

うしろには松の上野を冬ごもり

ひとつ灯にひかりかはすやふゆの月

梅などもうめと見ゆるやふゆの月

はつ雪や灰にかいたる梅のはな

から家とおもへば煙る雪のくれ

あさのゆきおなじ文こす友ふたり

魚くふて口なまぐさし晝のゆき

さゝやくもたま／＼見えて雪の人

雪になほけしきもてとや鐘がなる

ゆきの日は腹たつ人も來ざりけり

擬一瓢

雪の日は疝氣の虫も音をいれぬ

ゆふべまで捨たい宿をゆきの宿

醉人狂客かはる〴〵見まひ來れば、塵のこゝろ物にうつりて靜なるいとまなし。

しばらくは雪にかくれん市の門

韓人不二を見る畫に

のけぞりて雪の上なる雪の山

ことしは市中に居をうつして

大雪や我を山家に庭の松

氷捨てたゞ何となくあはれなり

我やどは氷をつるすあたりかな

梅の咲をりもあらうか厚氷

柴の戸や氷しまゝに捨ておく

月霜や齒ぬけとなりて鉢たゝき

ふとん着て山さへ寐るをはちたゝき

枯菊をまたゝてはやすあられかな

豊鑑禪師の屏によりてねぶれる圖

冬至なりふたりのわつぱはや戻れ

冬至とて疊の墨を拭せけり

くすり喰箸を下せば鐘がなる

河豚汁妻といふものなくもあれ

君が代は誰もくふなりふぐと汁

孔子・盗跖一塵埃

河豚くはぬ人さへもまた夢なれや

久臧と題をさぐりて

から鮭は花さかぬ梅の木ぶり哉

暑天にあふぎ臥て、わが書をさらさんといひしものしりのうへにはさもあるべし。このはいかいのまじはりは

から鮭の腹にはかくすものもなし

乾鮭の梅を喰をるけしきかな

冬川を二度こす事がおもひかな

冬の夜やどこを明ても月はさす

寒月や藥の帋のそらにとぶ

寒月の柳などにはかたぶかず

寒月やひとり破れしくすり瓶

ひく汐の淺くさすぢや寒の入

寒聲を鬼もきけとや羅生門

埋火や我名わするゝこゝろあり

うづみ火やよし野のおくも是あらば

埋火や眉やくばかり小夜ふけし

虬戸ぬし、旧里にかへる。春はまたかへりのぼらんといふに、其詞かならずわするなといひて

梅さかばおもへ炉に手を交へしを

讀二莊子一

腮の髭火桶に臍をかくしけり

仁波海の外にながれて琉球の聘使まうで來しに、おほやけよりさまざまのものたまひ、から衣袂ゆたかに、おもゝちほこらしげにゆきかふさまめづらし。

よき時をうるまが袖に寒鶏卵

成美みづから心にとふ、かしらの雪霜はらふべくもなく、腰に梓の弓をかけたり。なにごとないとなみ、なにごかなれる。東都十年もなほ速なりといはむか。我こゝろ是にこたふるにことばなし。たゞ

籠の目にとしこそたまれ事納

すゝはきや水うちかけし松の色

まがはしや小家〳〵の煤はらひ

せきゐに市のかくれ家見られけり

節季候はいかなる人のなりぬらん

せきゐよ名のため狂ふ人もあり

せき候にふみ過らるゝ伏家かな

三十九の暮に

さすがまた老といはれむあすの春

年はかく氷をはしる入日かな

はや暮よ三日ばかりは何にせむ

題畫

畫襖の人にもとしのくれゆくか

かつしかの草堂

しづかさにおぼえられつゝ年ぞゆく

貧しさにたゞ居するなりとしの暮

脊をほすも入日がちなりとしのくれ
としくれぬ喰もはたさぬ店がらし

雑

秋の雲そゞろにはしりて、陽子が佛まのあたりをさらず。あしたのつゆむら〳〵見えて、陽子があだなるちぎりをおもふ。陽子なくなりて後、われ世にいけるかひなし。われさらに陽子をわするゝ事なし。陽子、地下にわれをなにとかおもふ。

ひとゝせはよくもへにける命かな

翁の像に題す

笠を着て草鞋ながらの佛かな

鶴

すほ〳〵と夕くれて見ゆ隺の尻

鸚鵡

る守〳〵と宿の鸚鵡にいはせけり

樵夫

木をこりてかくまで老ぬあすもまた

母のうせける時

母なしに我身はなりぬ身はなりぬ

去來叟百年忌辰

人は土地の清きによりてよく閑に、土地は人の雅なるを得て其名ます〳〵久しきにつたふべし。去來叟が落柿舍における、人と所とふたつながら相得たりといふべし。

それよりして見し人はなし嵯峨の山

初戀

きのふ見しも詠られけり庭の草
親猿の愚かに見ゆるもあはれなり
いづかたに車はとまる夜のあめ
我宿やとし〴〵山によりかゝる

跋

家君夙攻徘(俳)諧之學、簿書計算之暇、情之所遇、節序景物、離合忻戚、慨今懷古、備以成章、其至斟形迹於無朕、洩造化於傳神、乃語言文字外別出一機軸矣。於是四海賢達、郵寄賡唱、推爲主盟焉。晩罹疾退老、葛飾之瀕、顧志泉石、每長林淸寂、水流花開、環坐兒孫、吟哦自娯、積久成帙。人有請上梓刷印以貽於海區者、必拒之曰、老鈍頹唐、每意與境會、結習未除、聊復爾々、要之意薄色淡、奚足當觀哉。今玆二三同盟與子弟聾心期於必傳、因請刊之。乃拔爲六百三十七、裒爲二卷。又命余記其後。因謹錄背所聆左右者記其後云。

文化丙子春正月

男　包壽撰　［包壽］

萬笈堂
本石町十軒店
英　平　吉

曾波可理

巣光

叙

集兆翁。善二誹諧十七字吟一。厭二世之喧囂一而隱二于關屋之里一。其居之東。稲田萬頃。一望彌レ空。因號曰二秋香庵一。又自稱二茶翁一。性嗜レ酒愛レ客。錢到レ手則散レ之不レ惜。瀟灑脱落。其人可レ觀矣。翁又善レ書。氣韵高古。有二烏羽僧正之風一。其常所レ用之松甫印。卽其父山本龍齋先生表德之私印也。翁以爲二書中欵一焉。先生於レ余丈人行也。因余與レ翁交情殊密。翁弃二妻子一而行二于道山一者。已三載。今玆其弟子國村者。集二其句一而欲レ傳二諸同志之士一。乃徵二序於余一。讀レ之不レ勝二感舊之情一。於レ是濡二筆於涕一。而題二其首一。

文化十四年丁丑夏五月

友人鴎齋老人輿撰

巣兆句集序

秋香菴巣兆は、もと俳諧のともたり。花晨月夕に句作して我に問ふ。我も又句作して彼に問ふ。彼に問へば彼譏り、我にとへば我笑ふ。われ譏ばかれ題し、かれ譏ば我讃す。かれ盃を擧れば、われ餅を喰ふ。其草稿五車に及ぶ。兆身まかりて後國村、師を重ずるの志厚し。一冊の草紙となし、梓にのぼす。其はし書せよと言ふ。いなむべきにもあらず。頓に筆を採て、只兆に譏られざる事をなげくのみなり。

文化丁丑五月上澣日　抱一道人屋龍記

巣兆發句集

自撰全篁

歲旦

大あたま御慶と來けり初日影

俊成卿
玉箒はつ子の松にとりそへて
君なぞ祝ふ賤が小家まで

けふとてぞ猫のひたひに玉はゝき

從獅子が願ではらひぬ門の松

野店

酒旗やとうふ和らぐ御代の春

梅

藪尻にはづみのつくや梅の花

とりわきて蕎麥粉の禮や畠の梅

皿鉢の寒いうちなりうめの花

山家に遊びて

梅折やこれも雀の寶もの

とし毎に圍炉裏借るなり梅の主

坂倉素交と梅見にまかりけるに、
雪のけしからず降ければ

すべつても梅にすがらん杉田みち

難波にて

舟曳や五人見事に梅を嗅

梅散るやなにはの夜の道具市

鰯家根の出村へむくも梅の春

うめ散や蛤貝の蝶つがひ

柔隱が別莊

柿壺や奧に老木の梅の花

十團子に氣のつく梅の峇かな

苞もの脊負たる老人の繪に

今出た歟花の梅田を梅の花

母上の（蜜）密柑召けり梅の花

梅が香や樣子のよさに芹を摘

書島夜泊

梅が香やおもへば寐たる龜の上

七福の讃

隣から梅に階子や福祿壽
旅僧を布袋かと見し春の水

初寅

酒樽を鉾でまねくや否おろし

巳待

福天の御息もかゝれ玉の春
大黒天小ねらに松をひかせ給ふ
人麻呂に鯛もあれかし若惠比壽
乘かえの鶴もあるなり落し角

柳

青空に馴て米ふむ柳かな
黄昏は湯衣かけたる柳かな
傘かりて疎き人見る柳哉
待戀の翌日に延たる柳かな
青柳ほどけて枸杞の垣根かな
稲村を町家にまぜて柳かな

あかつき衣紋坂と云處を過るに

四ばづけか家根にもさつと青柳

人日

とく〱の水より淺き若菜哉
金春がひと群出たり摘わかな
七種や御末かしらに藤ばかま
むく〱と若艸はゆれ艸の庵
わか草や鍬のさわりし小笹道
へたと置鍋のめぐりも春の艸

菫

ゆく水に嗅で捨けりすみれ艸
市女笠すみれ尋ぬと荅へけり

なの花

菜の花や染て見たいは富士の山
菜の花の舞こんで居る坐敷哉
菜の花や小窓の内にかぐや姫
なの花に造り木見ゆる明屋かな
小袋のこぼれ花咲菜種哉
菜の花や初土器の非堰の里

山吹

山吹は峯入ちかき盛りかな
やま吹やぬき手を切て九折
山吹に蛙のたゝく扉かな

花

いくとせも花に風吹さくらかな
鵜の枯す木の間の花の咲にけり
道命とうしろあわせの花見かな
歸るさに松風きゝぬ花の山
簗かけて一夜明たり初ざくら
椀家具も音せで花の小塩山
かし鳥のあたりに今朝は花見哉
宿かりて又見ん花のあらし山
先花の大山崎やひがし白
ちる花や帶しめ直す石の上
緋ごゝろも燕持兒や門の花

隅田川にて

四阿を馬屋にしけり花の雨
暮そめて小家したしき櫻哉
白魚の爰等(マヽ)で孕むさくら哉
扇借せ花見出て來る鼻の先

老懐　遊女泉州大悦言に稿

挑灯のてれんも見へぬさくら哉
朝の間にさくら見て來て老にけり

金輪寺清音閣

村雨の若葉をいそぐさくらかな

畫蔦

片瀬からこゝろにかけし櫻かな
手のくぼに殘る小鯛や潮の花

生蔦奉納

藤折らし扇にかけると呼子鳥
腹赤燒家を卷なり藤の花
むかふから旭湧なり藤の花
藤咲てゆらつく橋のすがたかな
流れ汲隣もひたすつゝじかな
山姫や温泉壺に活し花つゝじ
三囲の鳥居とそだつ杉菜かな

苗松のひとつに育つ杉菜哉
紅梅にいともかしこし御鷹宿
放下師が雪をかほらせ桃の花
桃咲や西瓜畠のあらおこし

うたぶくろといふものに哥書たる
を見て

おもひ入る蛙や摘んつく〳〵し
はびこらぬ顔で芽を出すちよろぎ哉
駿河なる山葵越るや箱根山
連翹や鴫のわらじのかけどころ

國村、柳翠兄といせ參宮する馬の
はなむけに

双六の六部に逢ん宇都の山
太ゝや福引とりてぬけ參り

初午

鎌くらの佐助や誘ふ旅ごゝろ
朝ぐもり六浦の煤竹今や焚
太箸や削らぬさきの杉の月
蓮根の穴から寒し彼岸すぎ

初雷

あしがらはまだ出ぬ神のとゞろ哉
田やかへすへたら〳〵と谷の底
畠打や穴のきつねに餅居て
どこぞでは婆ゝにやならんたけり猫

田家

鶯の啼や色めく繩すだれ
うぐひすや竹の子見たる市戻り
鶯にこの曙を田舍かな
鶯を二籠釣て野は遠し
うぐひすの家根からをりる畑かな
鶯やもとの清水の原屋敷
鶯のみがく椿や藁屋なみ

かまくらにて

うぐひすや夢想國師の堂の前
雉子が啼餅屋の脊戸も塔の辻
高茅の刈らぬ裏戸も雉子の聲

二葉より豆鉄炮やきじの聲
廣畑に雛もまだなき雉子かな

鎌倉覽古

灰蒔し畠があればぞ啼ひばり
旅人の五日遲くばさぞ雲雀
つばくらに殘す築地や撞木町

蛙

かたむきて田螺も聞や初かわづ
我からと藻屑の中に啼蛙
禪門にをくれては飛胡蝶かな
鍬笊に盛ればこぼるゝ田にしかな
柴の戸や泥かけて行田螺とり
隣同士白魚買ん夕月夜
しら魚やしらぬ葉に盛舟の上

霞

和布を刈や霞くむかと來て見れば
霞む日や佛のあかし遲なはる
防風で濱は葺なり春の風

春風や一期さかえし榛の花
春雨や斯しておゐて峯の雲
はる雨や簾を卷て窪御覽
芹生にて芹田持たし春の雨
炭賣と手に手をとりて春の水
曲らずにくわゐの角や春の水
山里は麥飯すゝむ雪解かな
雪解や穴のきつねの宦上り

由井濱覽古

佐保姫の額に見ゆれ磯の浪
佐保姫の野道に建る小旗かな
佐保姫に駒もよまるゝ鼻毛かな
茅屋根に鵜の長閑也嶋の雨
山姫の動かす松に春深し

時鳥

谷へ掃はゝきのさきやほとゝぎす

啼け聞ふ木曾の檜笠で時鳥
遠山やところかはればほとゝぎす
ひがし山とつてかへすやほとゝぎす
よし田殿末社巡りやほとゝぎす
新しき橋のにほひやほとゝぎす
時鳥まだ見に来ずや隅田川
ほとゝぎす九反かけたよ紫屋
時鳥啼や御繪師の宿衣
いざやとて脊を干す鵜よ時鳥
あかつきは鉄漿もにほへやほとゝぎす
早乙女が横轉ふ庵やほとゝぎす
茶引草褥になびくやほとゝぎす
三囲で聞もやすらむほとゝぎす

艸庵の庸(虚)橋大雲にいたみて、わか
葉の頃も不沙汰なりける八千代の
隨なしのびあへざるに

ほとゝぎす啼けばむかしの軒端哉

上野國赤岩高恩密寺に高野大師の
持せ給ふ五鈴あり。それが中に松
虫とやらん、清音すぐれて涼しく
聞へたるありければ

松虫の音にふりたてよほとゝぎす

桐生米室を訪ふ

脊戸口の伏猪もやさしほとゝぎす
三井寺もほろ〳〵あへ歟ほとゝぎす

山寺

浴室に苔がはへたり閑子鳥
とゝ鳥の日馴て啼や閑子鳥
閑子鳥啼や朔日十五日
十景を握て啼や閑子鳥
眺なら常山の花やよし雀
笈佛の戸をたてゝ聞水鶏かな

成田にて

盃が出ればはや来るほたるかな
隣から灯かけのさして行ほたる
曲りこむ藪の綾瀬や行螢

豆の葉や豆腐に着せて飛螢

螢追ふ門や風呂焚やせ男

糸竹に蝙蝠の舞月夜かな

かはほりが眼を射てやらん小挑灯

蕐他が五禽の戯といふことをして

蜩の月後は臥猪の鼾かな

旅中

芒から蚊の出る宿に泊りけり

蠅追ふてひやうたん町に入にけり

紀の關も越ば伴へかたつぶり

艸庵に茶立虫といふもの啼。ある人のいひける。この虫の聲を聞時かならず好事あるべし。諺にかくれ里ともいへりと。

米櫃のそこらであらん隠れざと

蟬啼やとばしる瀧にはぢかれて

蟬の音に薄雲かゝる林かな

南湖

赤貝にひかるゝ裾やころもがえ

山寺や蜂にさゝれてころもがえ

艸堂

茶釜ほどある歟なきかの牡丹哉

門守の婆ゝも野等こく牡丹哉

打水の雲きりにたつ牡丹かな

岩からもはへずにやさし杜若

おし出して塔一盞の若葉かな

山路來て見事に歩行若葉哉

傘のちいさく見ゆる若葉かな

爺婆ゝが寐所掃出すわかば哉

ふるさとの梅の若葉や堂籠

路川が兒の追善に

卯の花やかくれん坊のそれなりに

うの花や振て投こむ松明売

卯の花を粉にはたきたる嵐哉

卯の花やそも〳〵これは土器師

庵を出て雪ほどしろしけしの花

鷺の來て伴ふ宿やけしの花
鴛の醉葵見しより醒てけり
あぢさゐや煮てかためたる花でなし

夕顔

夕がほや逢たき人の途飯時分
夕顔やよその空なる稲の殿
夕皃や夕越へくれば馬に餅
晝顔や芒の玉の消るとき
馬借て伊香保に行んあやめ哉
雷晴て蓼また苦き氣色哉
土持は買人やつきし蓼屋敷
若竹や竜這のほる藪からし
竹の子や筧の通る路すがら
竹の子や客に問れて雨の簔
たけの子や馬飼ふほどの藪の主
竹の子を花活に切る安さかな
竹植て犢鼻褌かけばやとおもひけり

舟中

見落すな合歡の小家の酒ばやし
合歡咲や柘の小櫛もほしげにて
藻の花やさそひ分たる紺屋形
川骨や砕けぬ花にさゞら浪
蓮の香に起て米炊あるじ哉

鴫立澤にやどりて

鷄が啼翌日はかならず席が雨

妻沼にて

五月雨やまくら借たる桑の奥
五月雨や眞野の長者の菅を刈
夕立やいたゞく桶もぬけるほど
ひるがほに足投かけし植女かな
植かけて飯くふ小田はなかりけり
夏の夜や茶木の栖に敷むしろ
みじか夜や三味せん草に蝶のかげ
夜をこめて打や淺黄の夏衣
六月は稲の葉伸に朝茶かな

端午

江に添ふて家〳〵に結ふ粽かな

こそ〳〵と夜舟にほどくちまき哉
尾上から大根おろしやはつ鰹
憂人の鮓にもすこし初がつを
飛魚の蝱のいきりやはつがつを
江の嶌や傘さしかけし夏ざかな
芋の葉で一夜育ん初なすび
村中にうからやからやひと夜酒
玉鉾の白ひ日傘も通りけり
凉しさは田舎に見ゆる夫婦かな
凉しさにかたちづくりす山の上
風薫るまくらや小笠小風呂敷
竹の葉や脊を擽るたかむしろ

清水

ひや〳〵と田にはしりこむ清水哉
駒の出んひさごをひたす清水哉
花桶もいたゞき馴し清水哉
見し人の鍋搔て居る清水哉
馬に鞍臀者を夏野の行衛哉

春夏部二百三十七句

巢兆發句集

善光寺客中

なに事かしなのぶりなる今朝の秋
秋たつや田の艸とりをよぶこ鳥
ひとわたり菜のかいわれてけさの秋
初秋や轡をうかゞふ五位の聲
猫のかくはしらもひかれ今朝の秋

隣家看白

夜ざらしの二布干なり天の川
星逢に見やる山田の立樹かな
鱸舟するゐによる瀨や銀河
七夕に星の入たる色紙かな
年〳〵や梅ほしくさきかし小袖

信州若人亭
七夕後朝

朝皃の花に澄けり諏訪の湖

文月七日

まつ島やされば琴引秋の風

かはほりも里のやつれや秋のかぜ

鳥蜩に打まかせてやあきの風

野分にも闕屋の声の片葉哉

しなのゝ國吹嵐と云處にて

粟少しこれや鳴子の吹あらし

もとあらの萩をしほるや秋の雨

尻へたの蚊を打芋の葉風かな

修理の太夫顯季卿なりしか、木賊刈その原山の秋かぜにみがゝれ出る夜半の月かげ、と詠るをその娘の君、鏡のうらに鑄させて戀しき時の父の記念と見たまひけるを、尼になりてのち法隆寺の峯の藥師佛におさめけるとかや。玉櫛のおくなつかしきおりにこそとおもひよせられ侍りて

盂蘭盆やたまに呼込鏡磨

老ぬれば西瓜に近るおどり哉

八朔や鰯の皃のめづらしき

鹿

馬屋より下に來て啼小鹿かな

笹山や小男鹿急ぐ夕間ぐれ

大坂の便に申遣る

河内屋で膳を出さばや渡る雁

旅ひとりひはら〳〵と鴈がなく

乙因を歎くもありや南部雁

鴫一羽來て搔まはす埜かな

友人蘭窓、野もせにすだく虫の音を狩て、あまた竹叢の軒端に掛おけり。唐もろこしの籠の目あらみ、赤土の露を絶さず、瓜・茄子の養ひおろそかならねば、うぐひすの子の笛に馴るごとく、たがひに淸音をたしなみて今〳〵とふり出る聲、長月のはじめに至るまでもうちかれず。是をもつて人間五音の

調べおよばざるを愧るといへども
むべなりける。

鈴虫になるや竈のきり／＼す

土へたの鐘もひゞけときり／＼す

まつ虫や風の吹夜は土の中

閑庭

ほつれ笠着た僕もあり虫の聲

探題

たもとから裾輪の田井の釜哉

蜻蛉や錢百つけし杖のさき

白露のたけもたゝぬやつゞれさせ

あら物おもひの翁や、上田の辨才・
松もとのはり箱とて、あだし仇名
のゆかりもなつかし。淺葉の湯げ
たあさくとも汲て見ましを、さゝ
のふし寐に。

はり箱がまくらに狂ふ夜寒哉

山家

年よりの推にもはまる夜寒かな

朝寒や夜明し寺の鼠ども

美濃の國善司野と云處にて

翌日はく草鞋打家の芒哉

一休が魂迎するすゝきかな

弓取の見込も深き芒かな

寐たがらぬ家を追こむ芒哉

隣家

荻咲て夫婦の小言かくれけり

立臼に小根がはへてや荻の花

病中重陽

菊添よおゐかながらも藥鍋

きくさくや驛／＼の酒祭

一枝折盗の戒を得ざる菴なれば

腹いせに溫石あぶるもみぢ哉

釣柿の干兼て染る紅葉かな

日ぐらしも啼ねば淋し初もみぢ

秋草

關の戸にほの／＼見ゆる糸瓜かな

先いはへ小ぬかに似たる稲の花
端近に客はおかれぬばせをかな
壁ぬりの隣へまはる紫苑かな
こまごまと垣根結びておみなへし
足弱の杖にからまる眞葛哉

露

艸の戸や井をとり込て露の玉
みよみよと夕兒つたふ露の玉

姥山良夜

里人や白髪になりに行月夜
明月に都は芹のもやしかな

廣田社

鳥居出るおしさや杉に秋の月
明月や小島の蜑の菜つみ舟

對清光病中

貝われの菜畠のおくや初月夜
抱おこせおのれ月見む萩芒

仲秋無月

十六夜もはづれて松の草鞋哉

中川といふ處に至る。小家がちなるあたり、それとなくしのばしくてさしのぞきけるに

どれからと萩の隣や後の月
象潟の合歡の落葉や后の月
柞原薪樵るなり秋のくれ

時雨

柴の戸に夜明烏や初しぐれ
兎や角と寛せしより降時雨
尼達の旅寐催すしぐれかな
取あへぬ山桝さかなやはつしぐれ
朝夕の不二もけぶらぬ時雨かな
市人の炮錄(烙)冠にしぐれかな
時雨ゝや一降ふつて峯の松

生田の森にて

小雪せよ笠着て舞ん神の前

急がねば初雪のふる旅路かな

初雪や關の清水の埋れむ

はつ雪や石に敷たるさんだはら

霜月なかば松もとより故郷へ歸るとて

初雪に着るや古手の蔦の紋

雪明りあかるき閨は又寒し

大雪に餅をならべし莚かな

初霜や田の土とりて竈をぬる

伊勢の御師の折敷に溜る霰哉

武甲山の谷間を通るに落來る瀑布のそのまゝに氷るあり。さながら千條の玉杖をかへたるが如し。まだ見ぬ人の土産にもがなとおもひけるほどに

鞍壺に瀧を負せん氷柱かな

こがらしや口もきかずに艸の菴

須磨夜泊

あら寒やかの村雨か閨の月

比企の郡毛呂と云處より同行の江戸に歸るを送る。この日十月晦日なり。

栞さそ小手さし原を歸る神

小笹吹風も何やら神無月

野火留や宵曉のかぶら汁

冬枯のなつかしき名や蓮臺野

鎌の柄を空に伸して冬木立

小金が原にて

莨蕩に馬の踏こむ狩場哉

梵院照法燈

明るさに蕎麥切賣も十夜哉

信爲柳莊追福

風邪ひかぬ御法の聲や御命講

月を見に今年も出ばや寒念佛

斗入法師身まかりけるしなのゝ國

七くりの湯といふ處に行て、その
跡を吊ふとて
惟茂とおなじけぶりや積落ば
梵論の行埜靜に落葉哉
かゞみ磨寺町のぞくおちばかな
爺婆ゝの有がたくなる木の葉哉
みちのく行脚の頃
榾焚てよしつね殿をひゐき哉
明ぼのを結びながすや炭けぶり
炭賣は小野で別し碁打かな
千どり
まつ原や馬にわかれば啼ちどり
には鳥が啼ば聞へぬちどりかな
旅鳥磯にともなふ千鳥かな
一年三百六十夜寒閨の恨をかこつ
といへる孀家の婦人をあわれむ。
きぬを踏踵より鴨のあぶら哉
越後からふたつ連てや浮寐鴨

芦鴨の寐るより外はなかるべし
かならずや三千の後宮、午房いち
からをたのむにあらじ。にんじん
を好ものゝ琴心を挑るとて、淺づ
けの淺からぬちぎりとこそかきな
らされける。
錦木や染ぬ大根に啼家鴨
むさしのゝ野中に引や土大根
盤栗の城下にやどりす。諸客混雜
の中にて
葱の香や浮世をわたる其中に
山家に遊びて
茶の花や茶菓子のなさにおりに行
神無月の末にやありけん、むさし
野を越ゆるとて
迯水の果や花さく茶の木垣
水仙や屋根が出來たと啼鳥
轉び人もなくてや殘る冬のきく
一夕相如が駕をうながせば、三日

東坡が千錢を愁ふ。あなあぢきな
や白鶴城東の乞食。

難波津や酒をひかへて參籠

年暮

煤竹もたはめば雪の雀かな

年暮ぬ市に住なら明石潟

行としや千代の衛の須磨の浦

我菴はよし原霞師走かな

秋冬部一百十九句

先師茶翁の句集一卷、弟子等がともがらはかりて、のちに傳へん事を欲す。翁世に在し時手づから撰て、そば刈と題するもの、已に春夏二部あり。其頃わづらひがちにして自撰するにいとまあらず。遂に黄泉に趣(ミ)ぬ。その餘若干句、等閑に捨べきにあらざれば、別に人を請ふてこの擧をはじめ、終に全部となして梓にあげぬ。庶幾は翁の志業を空しく虚さずと云。

園むら謹書

書房

大坂心齋橋南久寶寺町
河内屋八兵衛

江戸馬喰町三丁目
若林清兵衛

枇杷園句集

乾・坤

士朗

士朗先生以刀圭餘暇。慕蕉翁之風。至老益篤。雖身在城市。心常遊丘壑。其所居四窻皆有名。南曰朱樹。一根赤松。蔚掩比鄰。西曰枇杷園。疎雨蕭々。閑彈四絃。如珠落盤。故世或稱琵琶園主人。北曰絲蔓。黄鸝所宿也。東曰望山月。猿山新月。影升庭樹。先生對之曰。是吾煙霞疾也。蓋其賞心殊在月下。故其所詠最多。嘗遊須磨。又吟富嶽而歸。先生之癖。幾與二勝相並矣。此集則卓池椿堂蕉雨宇洋松兄所輯也。書成。謂余序之。顧余與先生往來最久。是以不題其集。而狀其行如此。

文化甲子之秋桂五望日　　一句井

枇杷園句集（乾）卷之一

春

年内立春

としの内に春は來にけり青莚

歳旦

何变もなくて春たつあした哉

元日子日

松はまだちつほけなれど花の春

佗盡し〳〵てぞはなの春

賀

としつむや年〳〵に年の美しき

若菜

老がつむ若菜をひとのもらひける

古のわたりにて

道くさは蚕の子もする梅若菜

壽

臘月六日のしぐれ杉村といふ處をゆくに、杉の生垣引をりたる、たゞにこのもしき菴あり。宵月の西にといへるけしきして、やがて葬を打出たり。

世わすれに葬打らん月と梅

梅

澤山な月日が出來てうめの花

花さいて梅をらぬ日はなかりけり

江の上や二人してをる梅のはな

白梅の大げしきなる野中かな

筑州山鹿いさと秋枝氏求に應じて若ゑびすといふ題を

釣のいとも香に匂ひけり梅の花

きたなきが人のこゝろかうめ乞食

九皆亭

うめがゝや藪の中まで掃ちぎり

初瀬にて

貫之の草のまくらぞうめの花

梅がゝやかたじけなくも宵月夜

芭蕉翁肖像開眼

眼も鼻もひらかせ給へうめのはな

月前

からびたる影や藪木のうめの花

暮雨巷法會

散うめはみな墨染の匂ひかな

五十は山の麓、六十は山の半腹、老の山路大儀にはあれど、そろ〳〵まゐる。つゞいて來させませ。

山にふるき春あり梅の下傳ひ

鶯

ほうと啼鶯遠し峰の松

鶯に霞のかゝるゆふべかな

ゆかしきは只鶯のこゝろ哉

北の小庭に鶯の來りたりとて、庭掃のをとこの告たりければ

鶯をもどすな梅に垣ねして

鶯に清瀧の水しづかなり

どこでやら鶯なきぬ晝の月

柳

青柳にうき世の垢はなかりけり

伊勢にて

青柳のあめや小家のひとつ口

青柳や暮て啼續淀の犬

矢矧にて

青柳の東海道は百里かな

若草

われに何なし若草みゆる塘哉

霞

とし寄のほく〱とゆくかすみ哉

古鶯のきげんなほりぬ朝がすみ

初瀬

朝螺貝の初瀬にこもる霞かな

春雪

はるの雪鳥のさはらぬ枝もなし

旅人よ雪はふれども春の空

土山にて

消のこる雪にもあそぶ子供哉

春雨

大佛のあめを見にゆくはる邊哉

春風

明日も出んあすも野に出ん春の風

はる風やむねにあてたる槍がさ

陽炎

陽炎を淋しきものとしらざりき

かげろふやつぶりと落しかたつぶり

春月

春の月雉の遠音に傾きぬ

春の月松にこぼれ竹におろ〱す

糊すれと鳥がなく也春の月

花

とし〴〵や花守やどの薪一駄

起〱に花見るやどの茶汁哉

散來るを花と見てこそ目はさむれ

泳といふ所にて

このもしき庵やさくらにさひかへり

虎尻菴

つく〲と見てをれば散る櫻哉

芭蕉堂新成矣。肖像安置し奉りて

蝶鳥もみなやすげなり花のかげ

贈㆓吳非㆒

よきことはいひたきものよ花のかげ

宇津の山にて

よきほどに花のかげある山路哉

間たきは花盜人のこゝろかな

芳野行

甲子吟行に曰、ひとりよしのゝおくぞたどりけるに、まことに山深く白雲峰に重り、烟雨谷を埋んで、と書れたるが、其雨けふも降出づ。おぼつかなき欠道を分入て、とく〲の清水のとく〲と聞ゆるをちからに山をくだる。つら〲此西行菴のさま・清水のやうを見るに、とく〲の音心にひゞき、散かゝる花袖に淸し。芭蕉翁の、こゝろみに浮世すゝがばや　とのたまひけるを思ひ出るに身はすゞろに寒け立ぬ。されば晝はわれ〲が訪ひ來るにも淸閑をけがすべけれど、夜はまとに常住の月澄て、心もいとゞすみわたりぬべし。

世を捨にありくさくらの山路哉

嵐山

松さくら一木邑なりあらし山

花七日ものもくはさぬ嵯峨の宿

ふたゝび嵯峨にゆきて

淋しかれとけふこそおもへ花のかげ

木母寺

花に鉦いかなる罪のほろぶらん

年〲に花の見やうのかはりけり

眉山の花見むと、豊宮崎の文庫を過て水に添ひて山村に至る。かり初に分入る山のやがてすまばやとさへおもひければ

花の木にむすびかけたる菴も哉

歸路

はなの事いひ〱もどる山路哉

こゝらの土は錢喰ふ土ぢやに錢まかしやれとうたひゆく童女に案内させて、幸洲の神宮に詣づ。

燒塩の幸洲のさくらけぶりけり

玉野行

玉野のやうをみるに、しづかなるを躰として淋しきを用とす。鳥の樹に啼水の岩にむせぶ音、いづれか淋しからざらん。されど躰は一にして用は百千にわかる。百千にあそぶ人猶多しとせず。況や一にあそぶ人をや。世のうきよりは住よかりけりと住る人にやあらん。ちいさき松の菴に文机の外見るものなく、かたはらに同じさましたる僧のありけるが茶を煮る。いかなる人にて渡らせ給ふにかと問へど、うち見たるのみにてものもいはず、うらやましき栖哉と、そこの石に尻かけて、

花の雲これらも閑ならざるや

いかゞとおもふ心よりかく申出侍りぬといへば、あなかしましとて、かたはらに有ける僧の戸をさしこめたるこそ、いとゞこゝろは床しけれ。日は西の山にかくれて見るものみな朧〱しく、小倉の山のをぐらき木の間にぞなりにける。

朧夜やおほつかなくもほとゝぎす

と口ずさみければ、かの僧の出來りて茶のよく煮へて侍るぞ、しばしとてむかへられたる、いとうれしくてたちいりぬ。

涅槃會

これほどに見事に死ねば佛哉

盗人の返してゆきぬ涅槃像

薪買にゆくひととへばねはん哉

茶花

茶の花に大名うねる麓かな

桂五亭

茶の花にそめよすゞめの柿衣

かくいひけれども親すゞめはさせるけしきも見へず、子雀は先に心得て

菜の花に口ばしそめて啼雀

梅に肥て菜の花吹はぬ鳥もなし

藪入

藪入や小さき箱をうち明て

歸鴈

三夜二夜聲絶て空に雁一ツ

西湖

いま一度堅田に落よかへる雁

熊谷にて

鳥雲に入る熊谷の塘かな

蝶

つまゝうとすれば蝶ゆき蝶とまる

菫

すみれ草けし人形をこぼしけり

几巾

凧巾かけてさびしき夜の柱哉

蛙

浮しづむ夜のけしきを啼蛙

人もふえかはづもふへて山家哉

燕

乙鳥の媒にもならぬ小兒かな

塩木つむ中を燕の往來哉

雉

かへり來て啼か燒のゝ雉の聲

ほろゝとは花に雉なく拍子哉

岡うつりしては又なくきゞす哉

幻住菴にて

松もとの雉聞へけり菴のあめ

雛

ひなの鶴花いかげよりみへそめぬ

すゞめ子も來るや雛の膳まはり

桃

伏見にと口くれて來たりもゝの花

汐干　久能山の麓にて

汐干ともしらで過ゆく波間哉

藤

藤のはゝながくもがなとおもふ哉

客半日の閑を得れば、あるじ半日の閑を失ふ。されば閑は得がたきもの也。小原の霜にともなひ、高野の霧にまじはりし後世菩提の修行者も、閑を得るに骨をりければ、柴引むすぶ菴のうちに松の枝折くぶるけふ半日の樂は、主人もゆるし給ふべし。幽篁に琴を彈て月をのみ友とすといふ、けふのわがこゝろばへ也。

山藤の棚はしかけし住居哉

題しらず

ふうはりと鷺は來にけり春のくさ

父母のありかを竹になくすゞめ

美しき砂に小松のみどり哉

月花を捨て見たれば仏の風

花とりやさらでも竹はみどり也

善光寺に通夜こもりする人の念佛の聲は、まつ風にたぐひておびたゞし。夜明るまゝに見れば老たるひと半に過たり。まことに佛の手をとらせたまはではと見ゆ。旅になれたる衣の袖うちはらふけしきもなく、よろほひ出て群集しけるぞかたじけなき。

朝な〳〵虱掃出す御堂かな

暮春

あさ〳〵は寒し春ゆく荻の門

ゆく春をあはれむ竹の日影哉

椿堂輯

枇杷園句集　卷之二

夏

更衣

けふこそは父のもの着ん更衣

老懶

更衣人のけしきにおどろきぬ

卯のはな

卯のはなもしらで垣ゆふ男かな

時鳥

美しき空や高音のほとゝぎす
ほとゝぎす思ひ捨ても月夜かな
むら雨はむら降もするを時鳥
住よしの橋かゝりけりほとゝぎす
野にやまに身は三ツもあれ時鳥

菩提山萱堂にて

念佛を米かむやうにほとゝぎす

なかぬ間は空一ぱいのほとゝぎすとは北草法師の風興なり。こよひの月殘霞につゝみて、ほとゝぎすの來べきけしきなりとて、二三子は例の瓢携來て、松下の飲に數奇の足どりちらしぬ。

迎には誰をやらうぞほとゝぎす

若葉

逢さかやいつまで寒きうら若葉

御塩殿にて

御塩荷をつくる榊のわか葉哉

茂

たう〳〵と瀧の落こむ茂り哉

灌佛

尾花が崎をゆき過るに、山のかたはらに旅ゆくひとの結緣にとて、むしろの上に御坐して花御堂をつきすへたり。

道ばたで佛はうまれ給ひけり

竹子　蝸牛

たけの子や子供たてこむ寺の門

眠たさに竹の子をりに出にけり

伊勢が家はきのふうれたり蝸牛

牡丹

どや〳〵と牡丹つりこむ塀の内

苟（芍）藥

五六代苟藥つくる山家かな

芥子

白けしに窮屈もなき小家かな

あらし過て又咲出たりけしの花

苔花

苔生ぬはや花咲ぬ露もちぬ

諌鼓鳥

閑古鳥青葉まじりの花の中

蚊帳

連日のあめに日たくるまで寐すごして

餌ひろふやすゞめのありく蚊屋の外

螢

宵の間や大竹原をゆくほたる

粽

此殿やむかしながらのさゝ粽

うれしさにいくらもほどくちまき哉

五月雨

五月雨のいせに鐘なき夕かな

萱津の里

さみだれがやめば屋ね堀（掘）る烏哉

粟手の森

ひとりたつ鷺の白さよ五月雨

竹酔日

たけ植る日もひとの來て遊びけり

竹うゑてまた植にけり苔のはな

竹なき庭は人の住居もきたなく俗なりといふいにしへ人のことの葉を

きゝ侍て、俄に小さき竹を植たれ
ば、したゝかにおもしろき人とは
なりたるつもりぞ。

たけうゑに來た兒で啼すゞめ哉

青嵐

むしろ取てたてば舟ゆく青嵐

青田

うゑて去る山田を鹿の通りける

いせ吉兵衛が茶店にあそぶ

田を植るひともかへりぬいざゝらば

松ざかにて

雨雲の匝鼻ゆけば青田かな

水雞

さまよへばくいな啼出る草の門

古井のさと雨〻風〻亭にて

こゝゆかむ水雞の小田といふ處

紫陽花

紫陽花やみやこを雨の木間より

夕がほ

夕がほやもたせかけたる老の杖

鵜川

待ほどもなくて過ゆく鵜舟哉

金花山の麓に立て

鵜のかゞり消て長良に灯の一ツ

短夜

みじか夜や關屋に殘る笠の露

夏月

太秦は竹ばかりなり夏の月

夏の月ぬれ〳〵しくもみゆる哉

團扇

光琳がちどり啼なり古團扇

清水

鶯の笹葉を散らす清水かな

蟬

蛭の口搔ば蟬なく木かげかな

蓮

晝ねぶる身の尊さよ蓮の花

暑

あつき日や小庭のまつに逃かへり

大蟻のたゝみをありくあつさ哉

雲峰

道ばたに撫子さきぬ雲の峰

夕だち

夕だちや頓て火を焚藪の家

納涼

あらましのすゞみ草なり栗と稗

居こぼれてすゞしき月のむしろ哉

檀溪

すゞしさに人の來ふるす菴かな

丙午の年六月木曾にゆきぬ。谷のひま〳〵雲をつみ、檜原のおく花を殘して、四時のけしきひとつとしてのこるものなし。何ぞ別に仙境を尋ねむ。

(密)とし寄の多さよ木曾の夕すゞみ

御祓

御祓してはや花いろの袂哉

宇洋輯

枇杷園句集（坤）卷之三

秋

初秋

はつ秋の川瀬にたてる小ざゝかな

獨坐

松の露落て秋しるひとりかな

ちゝめくや秋たつ竹のぬれ雀

菴の戸へ拾ひ入たり桐一葉

星夕

かも川やたれやらわたる星の夕

天の川糺のすゞみ過にけり

水あびに鳥もゆくか天の川

舟行

一さほに舟漕入れよ天の川

灯籠

灯籠の油ながるゝ榎かな

露

檀溪

露に音あり誰住なれて茶の烟

素外法師がむかはりの追福の日、
なりにふれて思ひ出る人〴〵は、
丹波の青阿法師・舞津の紀風なり。

白露に取あつめたるおもひかな

いなづま

いなづまや終にすゞしき庭の松
山に居れば稲妻みゆる海の上

舟よりあがりて

稲妻に爪づく淀の塘かな

秋風

あきかぜや舟より舟へゆくからす
秋風の吹すかしけり藪の月
須磨寺は戸を閉にけりあきのかぜ

悼二松兒一

むつましきかぎりを師弟の中といへば、まして此松兒は身にそへる子のたぐひにて、年のよはひもいと若く、老を捨ては先だつまじきならひなるに、けふのなげきは何事ぞや。

秋風や行空もなき夜の鶴

朝皃

ひや〳〵と蕣のさく垣ねかな
朝さかぬあさ皃はなし朝な〳〵
いくほどの世を蕣のまつの枝
蚊屋ごしに蕣見ゆる旅ね哉

萩

露萩やむすび捨たる縄すだれ
のぞくまでものかく萩の夕かな
よきほどによごるゝ萩の小庭哉

桂五亭

よき夜とて土間にも居たり萩芒
萩にしをれ芒によわる西日哉

萩

虹のねや暮ゆくまゝの荻の聲

これとても老ゆくものよ荻の聲

女郎花

をみなへしみやこはなれぬ名なりけり

芒

陽炎の秋にもあへり花すゝき

芒より出てますをのすゝき哉

淋しさにたへてや野邊の芒散る

霧さめのさとに日のさす芒かな

都にて

法輪のすゝきをかたる雨夜哉

艸花

鴬のなく日のさびしさよ艸の花

稲花

湖のみづのひくさよ稲のはな

蛬

明る夜のあらしを啼かきり〳〵す

きり〳〵す啼やいつまで瓜のはな

雁

雁並ぶ聲に日の出る河原かな

かならずやくれて雁なく門田哉

十日ほど荻吹しきて雁の聲

雁がねに鳥のまじる堅田哉

三河の桂堂を訪ふ日、小舟に棹さして矢矧川の下流にあそぶ。

はつ雁のおのが空問ふ夕ぐれや

童謠

雁ゝ竿になれ、あとの雁先へなれ、先の雁あとへなれ、鍵になれ、竿になれ、竿になれ、鍵になれ、雁ゝさほになれ

雁ひとつさほの雫となりにけり

鵯

わが聲におされてひさる鵯哉

鴫

驚くれてまたたつ鴫もなかりけり

砧

小夜ぎぬた闇のひがしはあはれ也

小松吹伊賀はきぬたの夕哉

芙蓉

月宵〳〵芙蓉日〳〵にはなの露

月

宵〳〵に來るものなれば月を友

須磨行

ひぢがさ雨の降出ければ、あやしき小家にはしり入て

海人が家は袖にもたらず月の雨

あかしへゆかむとする曉

須磨すだれ捲るも月の名殘哉

あかしにて

月高く鳫がね低し淡路島

蜑が家を覗てありく月夜哉

ひや〳〵と月に聲ある木間かな

萬代や山のうへよりけふの月

松かげのはや月にてぞ有にける

名月といふはめでたき月夜哉

月見とてゆけば錢とる小橋哉

十五日山行

おなじ人と同じ事してあそぶほどおもしろきものはなし。されば二日三日の月のころより例の人々かたらひかはして、南陽が母の住る露もる山の柴の菴をとふ。白雲跡をかくしてわが來し道もさだかならずといふけしきながら、思ひしよりはいと淺くて市中を去事わづかに一里、晴嵐夢をやぶりて現に秋色にたどり入る。木々の梢も月をまねきて、けふの日のくれ初るぞことに嬉しく覺ける。

松やまを枕にあてゝ月見かな

雨の日信濃にゆく人を送りて

姨捨を雨にのぼりぬけふの月

雨晴山月高

海山を洗ひあけたる月夜哉

中秋前一夕雲月なつゝみてくらく、十五夜は雨いたく降、風木をならすばかり吹あれてすだれを揚ず。

降あめをながめくらしつけふの月

秋の夜は明てもしばし月夜哉

白圖亭

古さとや老の寐ざめに出る月

卓池亭

夜もすがら月の侍する菴かな

山家に宿かる月のけしきおもしろければはや〳〵も寐ず。主出て此夜ごろ鹿の軒ちかく來てなくといふに、待となけれどこゝろにかゝりて終に其夜をあかしぬ。

夜あけてもはなれかねたり萩と月

畫賛

海老を喰ふほとけの膝も月夜哉

贈伯先四十賀

千代の坂路のほどには雪もけ、花もけ。月の光りはとによくけ。

おもしろう年よるひとよ月の秋

となりにはむしろ疊むか月の雲

硯靜亭

いざよひや月になりゆく狹の聲

八月十六日、瓢合といふ事をして

十六夜の闇にぬれたる瓢かな

井戸田にて

いざよひも過て月見る在處哉

十三夜

梅いろの田にたつ人も月見かな

三河紀行

空也上人はこゝろもと葉も世人には引ちがへておはしければ、わが住給ひける山の菴のさはがしきとて、都の四條が辻に菰むしろ引廻して住給へり。そは行徳を積かさねての上のことにこそ。あはれ貴くかたじけなし。愚癡の身にはおもひとるべきわざにもあらず。山にそひ水にそひ、心のはるゝかたもやと、三河の國におなじ心したるひと〳〵をかたらひ出て、そこの大樹寺といふ御寺にまうづ。時は九月十三日なりけり。又、瀧の山寺といふ處あり。清淨幽閑にして夕霧の底には水聲を湛へ、白雲の頂には秋の色をとゞめたり。ありがたき地なればと

て、頓て岩根の松のかげにこゝろをすましぬ。

名を得たる月なればこそ瀧のうへ

秋夜

秋の夜や壁にかけたる泣面

秋の夜のありさまを思ひつゞけて書出るに、帋十ひらにはたらで七ひらにはあまりあり。いとむつかしきすさびかなと、其もの／＼をかぞへあぐれば、みな古へ人のいひふるしたる古言のみぞ多かる。うるさしや、きたなしや、墨引けしてかいまくねたれば又淋しく閑にして、西行・はせをのあとなつかしく、

これ迄のすがた作らば朽木哉

朽木はなに／＼、うめかさくらか、思ひ入にはよき木かげながら、山の奥にも鹿の啼ば、こゝすみよしとは誰人かおもふべき。頓て心をひきちがへてかたぶく月にさしむかふに、夜のけしきぞあはれは深き。

秋の夜は山のおくにもまさりけり

秋雨

秋挙が菴にて

佳なれしさとこそよけれ秋の雨

ころもが浦にて

秋のあめところ／＼に日は入ぬ

彼岸

藪寺の鳩に豆まくひがんかな

秋山

枯て久しき松こそみゆれ秋の山

秋水

鶺鴒の毛ごろも染よあきの水

鹿

鹿老て妻なしと啼夜もあらん

イめばけもなしゆけば鹿の聲

音聞山雲江が菴にあそびて

門たてにゆくひともなし鹿の聲

秋葉山の麓和田の屋といふ處にやどりて

啼鹿の聲より深き栖かな

明果てかなしくも鹿の啼音哉

菊

しらぎくの山路わすれぬもあはれ也

むだことに身は老くれぬきくの花

送㆔花叔歸㆓故郷㆒

父母を見るたのしさを菊の花

訪㆓草菴㆒

うらやまし菊もつくらぬ庵の庭

白露のしらでありしか黄ぎく哉

花ことに菊にもあらず八重葎

客中九日

たび人に一枝くれよきくのはな

紅葉

かへり来れば水に散しく紅葉哉

秋暮

西に見る山の高さよあきのくれ

よい月が出やうとするぞ秋のくれ

大蘇亭

日のくれぬ日はなけれども秋のくれ

案山子

おもしろきひとにはなりてかゞし哉

無題

蜻蛉の十ばかりつく枯枝かな

稲こくや刈や田に焚夕けぶり

片扉閉て久しき匏かな

松かさよ松露よ菴の灯はほそし

悼㆓如東㆒贈㆓帶梅㆒

あきはものゝ人の親さへつれてゆく

八月八日の日、遊行上人近江の國へわたり給ふとてひしめく。やがて四十九院といふ處につかせ給ふ。輿の内をみれば鬚髭はおどろにして御膝の上をもすぎて、いと殊勝にぞましく／＼ける。

おどろふくあきや遊行の旅の空

東須磨にて

何をしてひとはくらすぞ須磨の秋

九月十六日、遠江の國有玉といふ處にて

月と日の間に澄り不盡のやま

卓池輯

枇杷園句集　巻之四

冬

時雨

はつ時雨野守が宵のことばかな
鳴海にてしぐれそめけり草鞋の緒

竹葉軒
さゝ竹にさや〳〵と降しぐれ哉
獨居や古人がやうの小夜しぐれ

芭蕉忌
世にふるはさらにはせをの時雨哉

素堂は蕉翁の善友なり。一日風のばせをの破れやすく、霜の荷葉のかるゝを悲しみ、世の形見草にもとて甲子吟行を評して曰、静なるおもむきは秋しべの花に似たり。その牡丹ならざるは隱士の句なればなりと。けふまた其静なる趣を弄して手向草とす。

月時雨さりとては古きけしきかな
一雲に夜はしぐれけり須磨明石
山茶花に手をかけたれば時雨けり

茶室迎レ友
窓ぶたになるやしぐれの松のかげ
夜しぐれに小鮠焼なる匂ひかな

東門公子と申奉る公子おはします。雪後の野邊に狩くらして御獲ものあまたあり。中に雁ひとつを平の士文子に下さる。此士文子琵琶の上手になんありける。其家に奥捌といふ家の子あり。ちか比あらたにはつ音といふ琵琶造り出してまゐらせたり。そがはつ音聞まほしとて人〳〵の入つどひ給ふ夜は、かの雁たまひたりける夜なりけり。狄野撿校、その夜の宗匠として四絃かきならしたりければ、嘈々切々と聲をまじへ、まことにあはれにして、時雨も月もけしきをはこびぬ。

時雨來るか雁がはつ音の琵琶の上

かゝる夜のありさまこそ世の勝事なれとて、琵琶ひらきのと葉をつゞりぬ。

落葉

落葉たく軒のまつ風夜をさらず
あさ〳〵や落葉搔下す屋根のうへ

不破の關にて

霜にあけて馬の鼻ふく落葉哉

大和の國を行脚して散火のやまはいづこ、耳なし山はどれぞとたづねありく。水のあなたに樵夫の立たるを呼かけて、のう〳〵もの申さん、のう〳〵もの問むとひしめけど、聞とがむるけしきもなければ、

此人も耳なし山よ落葉搔

水枯

こがらしやけさはふへたる池の鴨

梅間亭

ちら〳〵と日もこがらしの苔の上
こがらしや日に〳〵鴛鴦のうつくしき
こがらしや海一ぱいに出る月

網代守

宇治に妻ありあじろにかゝる思ひ哉

千鳥

生海鼠ほす袖の寒さよ啼ちどり
柿寺や藪のうちにも啼ちどり

五道亭

鴛鴦がなけば枯たつ芦邊哉

大津にて

湖を鴨で埋たる夜あけかな

冬月

あくまでも閑に出たり冬の月
さり〳〵と苔ふむ冬の月夜哉
さま〴〵と降あぐ空や冬の月

大魚追悼

泣は父なかるゝは子よかれ尾花

枯野

むつましう住やかれ野ゝひとつ家

詩仙堂歸路

丈山のさたもくれゆく枯野哉

訪二野雀一

かれ〳〵や野邊に出向ふ庵の犬

雫岡が菴を訪ひて

これ見よと霜の田芹を菴の窓

花にかたらひ月にちぎる夫妻の枕は、五百生の宿緣と聞へながら、一夜の露ときえぬるぞはかなき。青霞も此悲びに逢り。そが中にいたはしきみどり子の殘れるあり。いまだはへばたて、たてばあゆめといふばかりにはたらで、花ちるあとの實一ツを見るこゝちせらる。是も又なみだなれとせめてものちから艸也。

山吹の實や霜寒き枕もと

鵜沼のさとを經て關にゆく

雉も啼犬も霜夜の山邊哉

氷

勝山を舟さし下せば藤竹引まとひて日を見ず、風あらく雪さへ降て寒さはだへを徹す。

白浪のかけては氷る小ざゝかな

冬木立

芭蕉翁百回忌千句卷頭

ちなみよるもの無量也冬木立

雪

青天に雪の遠山見へにけり

はつ雪や人のくれたるひの木笠

曙やあらしは雪に埋れて

雪掃やわがあとへ來て啼雀

さはつても雪は降なり奥山家

月雪やこよひも月は宵の内

衾

笹に音あり衾にさはる夜もすがら

鉢たゝき

あともなき寐ざめの友よ鉢たゝき

南無月夜南無雪時雨鉢たゝき

歳暮

年のまさに暮むとする日、末森といふ所にゆく。爰に湖水あり、猫が洞といふ。蘆竹をよぢ渓水をわたりて其上に出づ。池塘尾花枯て雪のごとく、鳬鷗影沈て水底に淸し。是より路を西にとれといふ。苔路中〱に廣く、松高して民家適に見ゆ。いざや年の用意にとて蓬萊のかざり松・齒朶やうのもの引とりて、

ゆくとしの廿九日も子の日かな

こはことしむ月の一日、したしきもの三五輩、暮雨巷の大人にいざなはれて共に子日せし處也。竹にあけ柳にくれ、はな・ほとゝぎす・月・雪とのさばりつゝ、おもはずも亦爰にめぐり來て、一年の始終を松によせたる事、いとめでたくいと感あり。

野秀亭

煤はきや飴の鳥うる藪のかげ

ゆくとしのこそりともせぬ山家哉

年もはや小松うり來る日、市上に立て童戲を見る。

としくれぬ松葉角力のあらそひに

花月一縷のあそびにけふの日も既にくれて、としもはや一瓢の酒の殘りすくなく成ければ

瓢單(簞)で鯰おさへてとしくれぬ　蕉雨輯

枇杷園句集　巻之五

雜

倉澤

けふも見へ／＼けり不盡の山

よしのゝ馮月が四十の賀に

よしの山若きはひとの耻かしき

大空に隈なき在のよはひかな

住わびてかしこき竹のはやし哉

海人の子等の潮の干潟にむれ出て、汐木拾ひあるきけるが頓て汐みち来れば、みな芦邊をさして歸りけり。さて驚かしたるにはあらねど、おりゐる潟のなくなれば、葉／＼に立あがりて多くの鶴の鳴ゆくは、幾千代を重ねたらんといとめでたし。

寉啼やからりころりと和哥の浦

大黒賛

花よ實よ四時かやうの子の日草

多春園の櫻見せさせ給ふ。參りてうかゞひ侍る。泉石のやうは申さず、抑木を植ること予のごく植させ給ふ。七日の日早き櫻はちり浮びて、汀のけしきことに／＼おもしろし。かの花の上漕と聞へたる象潟の景色もおもひやられて、花に漕出よ小ざゝ舟　とはつゞけ侍れど、こゝにかしこに心も身もはしりありきて、五文字はいまだとゝのはず。遲ざくら木深き處に分いりて停雲岡に登る。

朝上停雲岡　雲在花深處

暮下停雲岡　花深雲未去

鍾津晩望

東望三千五百峰　晩雲中間出芙蓉

芙蓉白雪千秋色　長入簡林照古松

平曲會式

床頭置琵琶二面。

彈中或弦斷則預設一面急其代之。曲中豪談笑・吹銅管、打唾壺、必應有意。凡曲調者貴舒暢、々々則說盡。

心中無限事

鶯の聲こまやかに月の光閑なり

何の御時にかありけん。瀧のもとにて連歌あそばされけるに、岩走る水の音の心にさはりて、句案にわづらはしくおほせばとて、頓て瀧壺に松が枝を打入させて音をとゞめ給へり。ありがたき事にこそ。

曲終不敢撥、更唱祝世之句。

舉米助音

ことぶきの曲終て撥を弦のうらにはさむ。

吃袴。

把盃。

洋峨在心形、喜已忘蕩然、山頽亦復不妨。

瓢歌序

形便〻としてみづから不用の才をたのみ、自然をたのしむ瓢有。ある翁の是に一口をひらき給へば、居然として忽有用の物となる。赤人の菫・西行の庵の落花・寂蓮・顯(昭)性の歌の反古・高野大師の爪印・芭蕉の翁の雫と雫・越人が風雅の藻思までもみなおし入たれば、さらに便〻として磊落たり。瓢歎じて言て曰、わが自然をうしなへり、わが自然を失へり。翁叱して曰、汝に炭をもらば何とかいはん。曰、寂し。酒をもらば何とかいはん。曰、躁し。米をもらば何とかいはん。曰、靜なり。又叱して曰、閑ならば汝何ぞ自然をたのしまんや。瓢、愕然として歌て曰、

鴫〱機をわすれたる鴫
　同じ流の藻塩草　虛瓢
鴫〱機をわすれたる鴫
　同じながれのふる瓢　虛瓢
　ながれ出ばや冬の海　虛瓢

松兄輯

跋

朱樹の翁、常にいへる事あり。一年三百五十余日、風月花鳥をそゝのかして日ゝに狂唫すること三百余句。自得のものわづかに八九、余はみな棄つと。こゝをもて年ゝ叟自得の八九を拾ひあつめて琵琶園句集なせり。かくて風月狂吟の情をしたふは、輯る者の雅情といふべし。

帚足庵　岳輅

尾張名古屋
東壁書房　永樂屋東四郎

素檗句集

佛像造立の願を感ぜられて蘇生すといへども、食物には荷葉ばかりあたりて、よろづの物を食するにみな吐かへし、荷葉のみ氣味よろしく食せし人ありと也。福莽素檗はいかなる願を感ぜられしにや、よろづの物氣味よしとせず、たゞ花鳥風月をのみ氣味よろしく餐して、したゝかに腹ふくれし人なり。則此風月華鳥は、其腹に味はひふくれたる處の花鳥風月なりけり。

文政癸未年五月　　嵐外書

素檗發句集

春の部

春はやく不盡の白雲出にけり

年のはじめに

一日の物おほへなり不盡の山
元日はあまりに淺し不盡の山
元日もよほどくらしぬけふの内
元日のこゝろのみこむ二日かな
世中は起ると春になれにけり
朝霞わが年徳はいづくにぞ

閑居歳旦

今日人が訪はねばとても我春ぞ
むやくやと春は來にけり雪の宿

蓬萊

手のくぼに蓬萊のかけ匂ひけり

蓬萊の中道かけて春の月

霞

はつ霞起たばかりの謂れかな
有といへばなくてもありぬはつ霞
松持た手を振ひけりはつ霞
静なれば寒さも寒しはつ霞
かの岸の不盡も見にけり春がすみ

万歳

万歳やさればこれはの春の友
存分に万歳見たり老が目に
万歳や春は霞の袴着て
丁寧に万歳舞ふや松のかげ
万歳や世は鶴龜の草枕
五六人万歳ふへて通りけり
万歳や歯朶うら白に腰かけて

若菜　芹薺

古へもこんな物かははつ若菜
磯わか菜煮て喰ふまでを霞みけり

夜明なば二種は世にふれ芹薺
老ぬれば上手に喰ひぬせり薺

子日

嬉しさは手にもかゝらぬ小松かな
君がため筆も植たし小松野に

草庵

松毬の椀に飛込む子日かな

黄鳥

黄鳥はしらで啼けり福壽草
黄鳥のへちりと立や初音すぎ
鳴きらぬ聲を黄鳥の姿かな

社頭

神さびてどの黄鳥も音の高き

梅

梅一輪よろづの花を動かしぬ
花はしらず梅は苔てふさがりぬ
明る戸や葎の梅の一たまり
千代のいろを先うちこして梅の花

一日にさくや信濃の梅の花
おしいかな鶯遠し梅の花
忘れたる枝も出て來て梅の花

朧　朧月

寒き夜を柑一本の朧也
睦月はやあまり晰せば朧なり
横に見る月やはじめて朧月

長閑　若草

正月もうき世といへば長閑なり
長閑さは旅寐にあまる言葉哉
長閑さは何がはじめぞ人ごゝろ
長閑さの開ゆる春の山路哉
若草を心にしむや薄がすみ
若草を十日しのびぬ八重葎

柳

七種のあと吹おくる柳かな
ほの〳〵と中に物なき柳かな
鈍な枝のあるがまことの柳哉

しばしとてこそ立どまりつれ
旅人の足をくるめる柳かな
木を伐て山田に殘る柳かな
我植しわがまゝ柳みどりなり

猫戀

薪わりが掴んで行や猫の妻
梟の面もつくるや猫のつま
歸れとて火をうつ宿や猫の戀
留守の戸に猫の氣遂直りけり

歸雁　雉子

行かゝり〳〵てやかへる鴈
花守がいふにちがはずかへる鴈
啼にくき事か只行春の鴈
わかるれば鴈は去年の姿かな
身のほどを越て啼たつ雉子哉
雉子の尾や尻につかへし一霞

春雨

雨はじめて日頃の春は今宵哉

美しやはつ春雨の少しづゝ
春の雨鳥の足に泡のつく
ほの〳〵と目にからまるや春の雨
寐ごゝろにゆられて床し春の雨
遠山はけふの宿なり春の雨

春風　春の月

はや過てふたゝびふかず春の風
寒がりに人は出にけり春の風
古里は久しくふきぬ春の風
をかし氣な春のしるしや月ひとつ
梅咲てはじめて高し春の月
人の來てながめ出しけり春の月

菫　椿

小男はいやしからずよすみれ草
菫草人繁ければ咲たらず
花につれてみどりをいそぐ椿かな
散てからいきほひの出る椿かな

花　さくら

咲もせぬ櫻をる日や初ざくら
今ン日の名にこそあらめ初ざくら
初ざくら朧は花の道理なり
嬉しさにこりても見たき櫻かな
花なれば淋しさもたる櫻かな
棄べきはこゝろの花よ山ざくら
一重にも足らぬは穗屋の山櫻
もとめたるあはれはなくて山ざくら
年〳〵に櫻すくなき故郷かな

草庵

櫻花さくや葎の花じめり

鷺澤山

花の中は猶もかはらぬ日かげ哉
蝶と遊ぶ稽古も出來て花見哉
今ひとりすまばつぶれん花の宿
出てゆけといはるゝまでを花の宿
ちる櫻根をうしなはぬばかり也

睡后

ちる櫻骨もおらずにながめけり

小町讃

花なれば散ことも足る櫻かな

桃　藤

夜の桃あたゝかなれば哀也

咲あへず色染にけり桃の花

畑うちの月代長し藤の花

松に藤かけろふ花のあて處

くさ〲

弼杖や花守が子の抄子顔

旅人にけさはなりたし縣召

西行忌

我骨あはれみ給へ春ごとに

鶴さもあれ若いは先に並ぶ春

よしや世に草臥て見ば春の雪

畑うちの霞むもしらでかすみけり

おもひ出し〲飛蛙かな

若鮎やどの瀧壺を生れ口

嘶するこゝろありけり雀の子

今こゝに居たも忘るゝ胡蝶哉

隙を得て川にし音を啼諏方の湖

初午

珍らしき神の名聞や午祭

おもふさま旅で喰けり雛の飯

色なくて春をふくめりつく〲し

櫻にはおくれて赤きつゝじ哉

山吹の友崩れする垣根かな

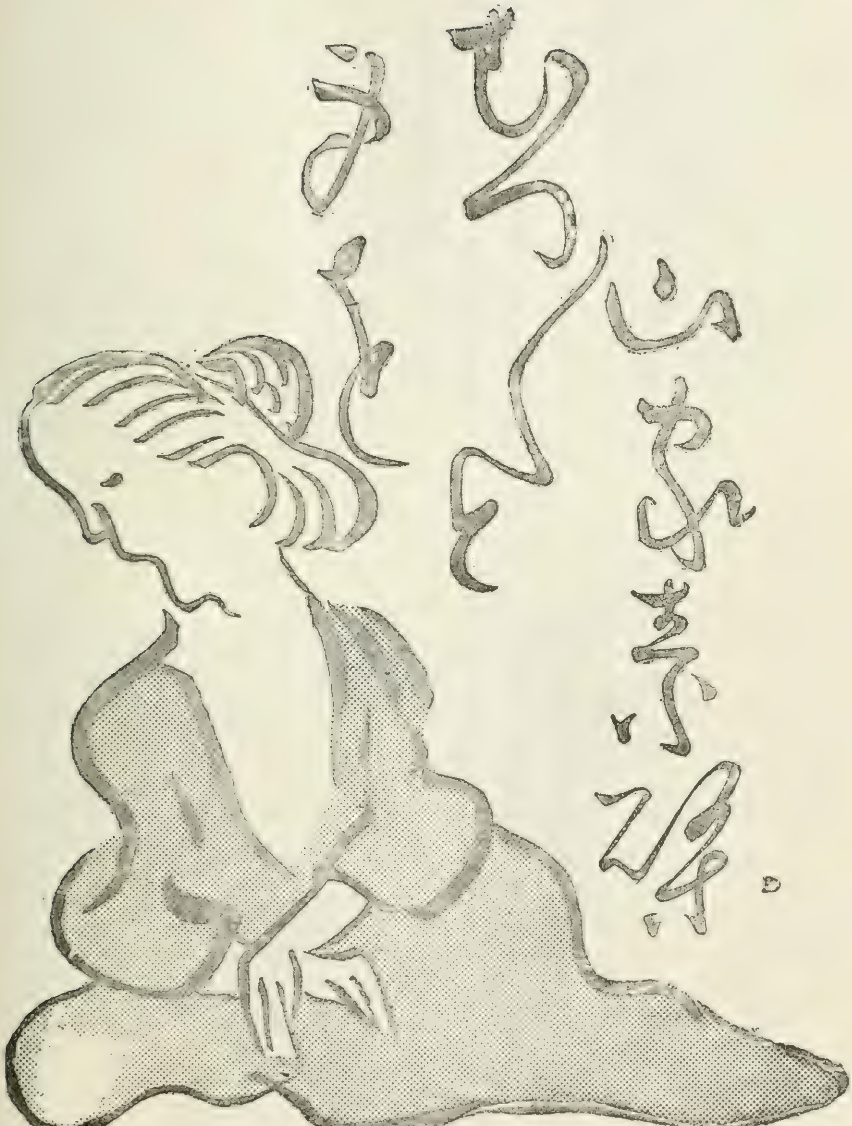
春の夜は旅の姿で寐て見たき

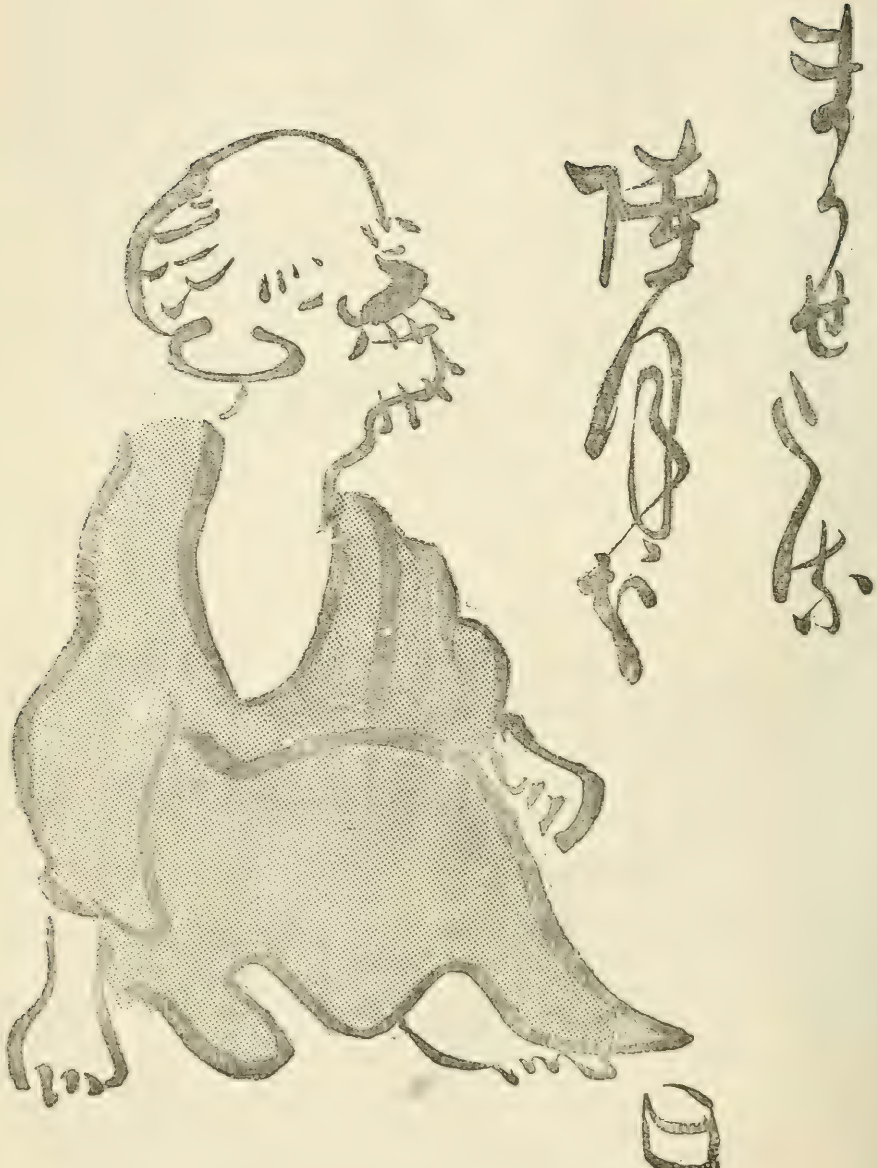
清水みな誘ひ出しけり春の水

寐て居ても春がたまるぞ椎が本

暮春

行先に春のつもるや晝の月





夏の部

更衣

片袖はけむたきいろや更衣
澤山に着るや山家の衣がえ
雨の手を捨たこゝろや更衣
ぬぎ捨し布子と我と並ぶ朝

牡丹

花のうき世おくるゝは此牡丹哉
老が手に植てとほしき牡丹哉
誰人か醉ふて提行牡丹かな

燕子花　若葉

いづれをか初花にせん燕子花
燕子花夢の藤浪殘りけり
卯月まで春風は吹若葉哉
淺みどり其中に今朝若葉哉

灌佛　螢　笋

灌佛の跡まで洗ふ小庭かな
産れ佛翌日はいづくへ遣り申
先消て其後を初ほたるかな
明る夜の鮓屋を出る螢かな
竹の子や手より落して賑はしき
竹の子の二本はことに姿あり

ほとゝぎす

しづかさや初子規二度に來て
今朝はじめて何とか啼し子規
四五日や飛ことしらぬほとゝぎす
橘やもとの空より郭公

草庵

蓼紫蘇を庵の若菜や子規
卯月來て燈火やさし郭公
魚鳥の涙時かなほとゝぎす
かはり合て空はひとつの子規
一聲の腰かけ雲やほとゝぎす
啼そ〳〵あだしの山の郭公
からき音は峯にかくれて子規

住人もなき庵にやどりて

聞ためて庵かへさむほとゝぎす

みじか夜の空飛露や郭公
ほとゝぎす汝も裸のみじか夜か
時鳥なくやしのぶの宿便り
時鳥雲の近道飛出して
ほとゝぎすきのふをあてにするばかり
ほとゝぎすあまりちかさに似もつかず
郭公すべり落たり朝の聲
子規夜るのうき世にながらへて
ほとゝぎす聲より聲へ飛うつり
ほとゝぎす笠着て寐たる心して
時鳥二つ並ばゝあつからん
ほとゝぎす逃ても〳〵庵の空
ほとゝぎすたのまぬ時が最中かな

蟬

ほつかりともがれて行や竹の蟬
空向て不斷とまるや蟬の形
今年中逗留顔ぞ庭の蟬

閑古鳥　蠅

飛もやらで音につながるゝ閑古鳥
人にものをいはせぬ鳥か閑古鳥
澤山な蠅のいのちよ八重むぐら
おのれらも寐られぬ事か夜の蠅

早苗　田植

投つけてみどりの出る早苗かな
青鷺や人も蓙着る早苗時
嬉しがりて旅人通る田植かな
四五人の身をひろげたる田植哉

五月雨　鵜

五月雨や夕皃棚の屋根の出來
五月雨の降きる竹の間かな
川ひとつ吞んとするぞ鵜のけしき
少しづゝ鵜も臆病になる日かな

みじか夜

短夜の浪はよろけて明にけり
みじか夜を横おりふせり葱草
みじか夜に紫陽花ばかり朧月
朝〳〵の明やすければ又淋し

夏の月

おひ／＼に夜のこゝろや夏の月
西に見る夜は常ながら夏の月
吹よする皐月あかりや夏の月
夏の月しばし葱のあれた夜に

扇

弱法師が扇くはへて寐入けり
人も我もよく笑ふ日の扇かな
淋しさに扇かりけり早泊り
足あふぐ扇夕皃のゆかり哉

蓮

開とは蓮にかぎりし言葉かな
植るとて軒端むしるや蓮の花
風音をはねかへす蓮の盛哉
月夜にはあひたき物や蓮の花

蚊

身がはりに枕殘さん蚊の馳走
草鞋も笠もおほへてつく蚊哉

帷子

帷子に魂の入る晝寐かな
帷の袖は淺茅が夢なれや

暑　涼

我に似た人のみ多き暑さ哉
暑ければいやしくなりぬ草の蝶
涼しさや動かぬ瓜の起かへり
涼しさのほど經て淋し蛭の跡

百年歡樂

涼しさの旅はねづよき裸かな
たらぬがちに吹て涼しき夕かな

くさ／＼

花も見ぬ人にとはるゝ卯月哉
葉の青きはじめ見て居る菴哉
葉ざくらのあるじとならば三日頃
日をふれば猶こまかなり若楓
芍藥に樂しみかへる菴かな
紫陽花や咲あまりたる花の媚
新麥に蓬菖蒲の味もがな

咲かけて半老けり栗の花
世の常に花撫子の日數かな
月に植ばいかなる竹に成やせん
諏方の湖によろひつれけり蓴とり
朝な〱藪に戸のあく皐月哉
おもしろふなるまでは見る淸水哉
夕だちや疊の上の足いそぎ
水無月や桃の葉にたつ一あらし
晝見れば寐ころびて鳴水鷄哉
うさんなる葉につられたり蝸牛
あはれさやおなじ火串の色かはる
祇園會や扇の風の神さびて

六月二十五日聖廟奉納

榊葉を見る〱松の匂ひかな
長い手を延して涼し夏神樂

湖邊逍遥

御祓の夜涼しき椀にとりあたる

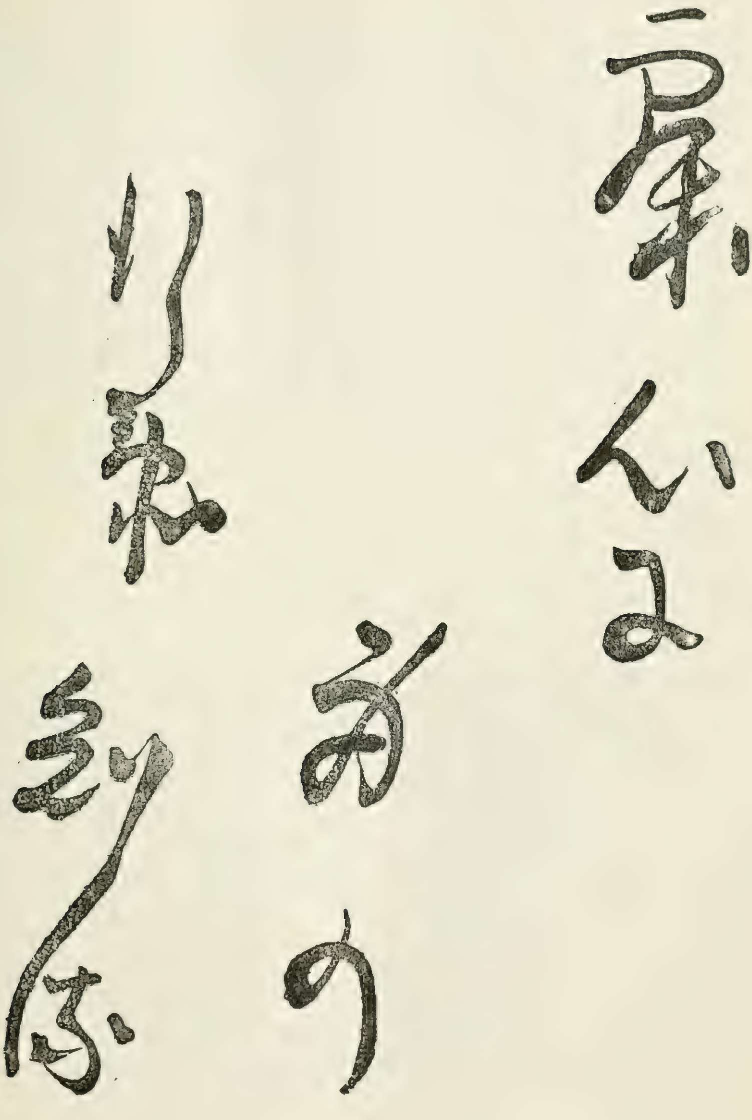
穐の部

立秋

秋たつや一夜二夜のつぶれ蚊屋
夕皃の下掃出すや今朝の秋
今朝の秋むかしの秋も手傳ひぬ
さむしろに勢ひ持ぬけふの秋
存分にきのふは遠しけふの秋
秋やけふ常の秋にはいつからぞ

七夕

七夕や入相の鐘をはつ便り
七夕は竹にくるまり給ひけり
七夕の飯たく宿の芒かな
七夕は橋をわたるが傳授かな
七夕やむかしながらのひとり道
妻もしるや七夕の字の一字二字
星合や空は今宵の壁隣
星の夜を鬼灯賣の旅寐かな





朝がほを嫁入草とも見る夜哉

おなじく後朝

ねぶり〳〵露に酔ふ夜は明にけり

文月のかげや扇の下あかり

蕣

花と見るまに朝皃は事たりぬ

朝皃は桶と盥を栞にて

朝皃や花のとまりは若葉して

女郎華

女郎花疊におけば朧なり

女郎花うさんなればぞ哀なる

朝皃はいろ〳〵あるに女郎花

虫　燈籠

外のむしをみな寐入せてきり〳〵す

名も顔もしらぬぞ哀れ庵の虫

燈籠ひとつまるめこんだり艸の門

消いろを幾日ゟ見する灯籠哉

御射山祭

しな〳〵と吹や穂屋野の飾鑓

柱まてますほになるや穂屋の家

翌日ほどく庵を結ぶや穂屋薄

穂屋の日や薄引するまくら本

秋風

消れどもどちらにかありて秋の風

山〳〵の名も飛出てあきの風

闇の夜も日はいそがしや秋の風

月見れば音もちがひぬ秋の風

水の上に消るはしぶし秋の風

秋風や垣より下りて飛蛙

善光寺

秋風のくたりと消る草鞋かな

穐風に吹あまさ(マヽ)さるゝ僧ひとり

戸一枚あれば實の入あきの風

鹿

じだらくに鹿は歩行ぞ哀なる

なかずして鹿のさわぐや奥山家

遠山になみだ引てや鹿の聲

松茸　竜田姫

松茸をたゝき出したる扇かな
松茸やこれもちとせの種のはし
御名の出ぬ日はなかりけり竜田姫
鬼灯の山かせもがな竜田姫

二日・三日月

しりつゝもけふ聞名なり二日月
二日ともしらで見たしや二日月
燈籠の空うつりして二日月
さも扨も二日の月のあり處
これを見て翌日は何せん三日の月
二三度に三日月さすや草の門

月

人も老たり我も老たり

名月をおほへたまゝの霍かな
名月の初かげかゝる軒端かな
名月や來年までのひとり言
名月や一夜二夜の露の出來
名月や暮れば弱る夜の湖
生涯の先に立けりけふの月
あのまゝで〳〵けふの月は入
消る空なくてやけふの月に鴈
見た空をみな打捨し月見哉
あの月におもへられたる月見哉
眞夜中を染山子にゆづる月見哉

いにしへ洛の言水順禮の頃、更科や馬の恩しる秋の月　といへるも、百里の旅をたどりての句なるべし。

何となく月には人の丈夫なり

此歸路八幡の里を出て姨の俤を去る事二日

朝な〳〵月は若くぞなりにける

苅萱道心六百遠忌

夢の世はとてもかくても在明の
月をやどせる露の間ぞかし

ときゝおきて

復も覺へる今朝にぞ行ける月のかげ

いく夜さも十五夜つゞく山家哉

世中はよき月夜のみ殘りけり

旣望

十六夜は月の下道潜りけり

何やかやいざよふ月の雲たまり

いざよふて隣へ飛や月の雲

寐られねばふしぎに月はいざよひぬ

後の月

垣あれて月三味(昧)の十三夜

曇日の夜は何と眠らん十三夜

十五夜は無月の年

十五夜にこりて寐かぬる十三夜

すくなげに日はくれ初て後の月

さむしろの因緣深し後の月

菊

菊遲し花をもまたぬ葉の匂ひ

白菊におもへば露が不足なり

宿の菊愚にかへりたるうこん哉

しら／＼と黄菊のさめし山路哉

山里は常にも菊は慾(欲)しき哉

紅葉

色見へて埒の明たる紅葉かな

簑むしの靑葉へもどる紅葉哉

花に來た宿も見へなく紅葉する

紅葉ゝや秋すむかたにはさまりて

紅葉見し足はからびて戻りけり

ゆかしさは有べき葉にて草紅葉

秋暮

何處を見て人はおちつく秋のくれ

晝にあるをしらで過しぬ秋のくれ

蚊に蠅に中よき宿の秋のくれ

あのまゝで鴈も寐こくれ秋のくれ

くさ／＼

何すぢの遊びをしてや魂まつり

露の玉ふたつにわれんばかり也
桐の葉のたまりて涼し竹の中
ひとつ穂のひらけば足るや花薄
花もたばしのばしからじ惢草
雀麦は何ともしれぬ秋の色
只中の一ゆるみする芭蕉かな
香は古く華は新らし藤袴
たつ頃か又見る鴫の飛あがり
古き世のつらしてたてりすまひ取
豊は消る姿をもちし踊かな
少しづゝ鴈は遲くぞなりにける
宇宙のはりきる秋のゆふべ哉

冬の部

時雨

我宿は四五尺遠し初しぐれ
此まゝやまた四五日は初しぐれ
簑むしの飛かとばかり初しぐれ
松かげに今朝のあと足す時雨哉
かた〳〵は枕でやめるしぐれ哉
枝に並ぶ鳥の欠るしぐれ哉
落栜やこれもしぐれの戻りかけ

千鳥

曙や田に飛こんで啼ちどり
枯芦にとまるとうせる千鳥哉
山高み鳴や湖水の小夜千鳥

氷湖

諏方にては年をもとらぬ千鳥哉
しやひ〳〵と啼や歩行や川千鳥

冬の月　鉢扣　蕪

見て寐すば猶寒からん冬の月
靜さは我家ならぬぞ冬の月
鉢たゝき心ありける寒さかな
茶筌うり師匠の皃に似る頃か
我宿の垣根草ひく蕪かな

松は霜蕉は露のあはれ也

雪

初雪の二度ふれば二度かはりけり
初雪の降かけて朝は朧なり
啼ことも忘るゝ雪の烏かな
むかし降し雪のふる也奥山家
家ごとに道もつ雪の山家かな
雪積て心をねらす山家かな
片空は雪で垣もつ山家かな
雪積や夜るはたしなき人の數
降をさへわするゝ雪のしづかさよ

信中寒殊切

旅人に一夜かくしぬ夜の雪
露おかばせはしくもあるを今朝の雪
我雪に不足な雪はなかりけり

隆之追悼

此雪を花とも見つるあはれさよ

煤掃　年暮

居ぬ人の煤を拂ふや笠の上
煤に醉て草の戸を出る夫婦哉
ほつりんと年はくれけり諏方の湖
年の暮雨の來る夜は夜の殘る
年くれぬ又節季ゆにだまされて

くさ／＼

蛭子講諏方は神代の馳走哉
小春とて蟾の啼夜を馳走哉
十月や苅田の不盡の背過る
冬枯や芒にとまる不盡の山
水仙の花のおこりは霜雪か
葱植て華盗人も年のよる
翌日も亦ひとりにならへ冬の花
君もつくれ蓑を手本に乔衾
何處やらで鳴子のなるや玉霰
死にかぬる海老は霙の名殘哉
門明て茶のから投る雪吹かな
イと屋根をかぶるや網代守

おし鳥の飛龍踏出してさわぎけり
炭竈やちからを入てたく煙
着て見れば簑はさわがし寒の内
芦火焚人や寒さをゆづりあふ
木の葉焼榾たき梅を匂はする
罪のなき發句書ばや御佛名
雨雪と寒さのわかる師走かな
世がたりの雪は降りけり年一夜

除夜

寐てや見ん翌日はどふした春が來る

我住かたに雲見る方角を案内す。諏方は諏方にて往昔諏方の一國なり。天平の頃信濃の國ニ入。

はつ雪や神の御狩の道しるべ

天滴の井はつねに雨降井にて、一宮の瑞籬のうちにあり。

木の間〳〵雪をもふらせ給ひけり

湖はきさらぎの頃氷とけ雪消て、四時不盡のかげを淺す。

すはの湖や盡せぬ雪を種として

天龍川は諏方郡より流れ出て遠江の境にいたる。天の中川ともいひ、また雨流れ川ともよめる川也。

一時雨ながれたあとや夜半の雪

善光寺は、いにしへ善光よしすけ、如來の尊像を守り奉りて水内郡に來り、芋井の郷に佛祠をひらきたり。

よしすけが脊中たゞねん今朝の雪

千曲川は佐久郡より流れ出て、越の境にいたる。

うち越て雪の瀬もあり千曲川

木曾路の梯は、都て岨道のかけ落たる處を、木をもて土をとゞめしなり。

隣へも梯かけよ今朝の雪

高井山は高井郡の名によりて、高き山〳〵をなべていへり。

大年は上なき雪のゆふべ哉

御ン嶽は木曾也。葉月の頃より雪ふる山なり。

御たけや雪つむ中の雲ちぎれ

安布知の關は阿智の驛なり。駒場といへる處也。向關・中關とていにしへの跡のこれり。

雪の戸の二關越て行とし歟

久米路の橋は更級・水內の境にわたす長橋なり。中虫はみてあやふからん事をよめり。

積雪や崩れもやらず橋の上

清水の里はいにしへの驛なり。家ごとにわき出る清水あり。

雪ちるや伏家〳〵の清水かけ

佐倉山は甲斐の境より、佐久郡へつゞきたるちさき山の重なれるをいへり。

一雪に來るや佐倉の朝あらし

筑摩郡林・神田の二村の間なる小山に、男神女神をまつれるほこらあり。其山の左右より流れあふ川を相染川といへり。

雪にさへつながる水の行衛かな

出湯あまたある中、名くはしき溫泉七ところあり。

月雪や老を養ふ七ところ

古禮毛我崎は湖の東南にして、不盡の嶺を望む所也。

はつ雪や衣が崎をいくめぐり

淺ば野は草もおどろもあさ〳〵と見へて、はつかなる野なり。

雪寒し何をあさばの草の宿

しばし里あるとよめる御射山は廣き原なり。穗屋のまつりといへる祭あり。芒して庵をつくる也。

穗屋むしろ着る人見ばや雪の朝

園原は伊奈郡也。古哥によめるはゝき木は、木曾路より見入たる處をよめり。

はゝき木も雪の小松となる日かな

菅のあら野は薩熊の野を横ぎる中道也。其邊は空飛鷲の羽音さへ絶す。

哀なり荒きあら野も雪にうせて

風こし山は伊奈郡にして、木曾につゞきたる峯なり。

吹かへす雪や天路のうら表

桐はらはいにしへ牧也

朝ぎりや桐原駒の雪なぶり

姨捨山はさらしな山をいふなり。おば岩は華にあり。いさゝか庵のかたありて、むかし住にしあとゝぞいふ。

姨とひに鳥の行や雪の朝

木曾路は木立しげり、空せばまり、峰長く、道高し。

小木曾女やはつ雪たはむ額髪

有明山は峯の木立四方になびきて、安曇・筑摩の間にたてり。

月とゝもに雪をなびかす峰の松

淺間山、煙絶せぬは常ながら、時ありて焔立のぼる事又哀深し。

雪はゆきで降ものながら淺間山

たのめの里は今小野といふ里なり。誰かたのめの里といふらんとよみし處也。

老ぬれば我はたのまじ夜の雪

木曾古城

白砂にこゝろはあれて夜の雪

木曾の御坂は古への官道也。美濃の國より木曾に入て安布知の關へ通る山路也。八重たつ雲の中をたどり、あるは千尋の谷にくだりて、

行かふ人の心をなやます山路なりしを、今は此道すたれたりとなん。

耳に來る御坂の雪のひかり哉

此國は隣國の境〳〵により高山多き中に、蓼科山は十郡のうちのたゞ中にたてり。諏方・佐久の二郡にまたがりたる山也。此山はるかに見やれば、峯より頂上まで松のみどりをたゝみあげて、嶮巖さらにおもてにあらはれずして、其かたち柔和なる山也。いたゞきまろらかにて器物にものをもりたる如く見ゆれば、土人飯盛山ともよぶ也。

山の名のひとつあかるし雪の空

戸隱山は水内郡の西北の間にして名たゝる深山也。外山いくへもかさなりてさながら人界を放れたるがごとし。常に雲霧おほひ隔りたる靈山也けり。

雪遠くして松は目にしむ寒さ哉

安曇郡大町の郷に佐野といへる細野あり。越路にかよふ道なり。永暦の頃西上人此國行脚の折から、こゝに住ける二人の聖の往生をとげられける時行かゝり給ひて、なき跡のしるしなど殘し置れし處なり。

はつ雪やふたつの笠の有處

柿枝の渡といへるは村上の軍破れし時、義清が妻女千曲川のほとりにて舟をこふに、渡し守とかくむつかしく渡さゞりければ、かざしのかうがいをあたへすかして漸一瀨をわたすに、猶兵どもおひ〳〵に追來るをしのびかねて、二瀨の渡にいたりて終に身を投、むなしくなられけるとなん。さしもあはれふかきわたりにこそ。

雪とんで花とも見へず日は寒き

犬飼山の外山に放光寺山といへるあり。古へ木曽の一族此山の名を氏として、犬飼半左衛門といへる人の住しと也。犬飼の名此處よりはじまりて、水内郡までもつゞきて山〻鷹多すめり。埜に犬飼のさと・犬飼の御湯などいふあり。

狩人の御湯あらし行雪吹かな

筑摩の御湯は修理大夫惟正の哥などあり。白糸の湯ともいふ也。

白糸の空にも降て夜の雪

笠原の庄のうちに六道の原といへるあり。行人稀にして何となくあはれなる野なり。其ほとりなる小山をあだしの山といふ也。

雨見ても雪見ても山は世に遠し

浦野山は筑摩より東へ出る山路にして、木草生しげり、おぐらき山也。此かたへなる小縣に向ひたる外山を望めば、野につゞき岡にそひて、平らかなる山あまたあり。なべて浦野なり。浦子の山も此うちにありとなん。

浦野山かくれ〲に雪ぞ降

ことはりやこゝぞ浦子の雪の花

都井は、信濃の宮と申奉りし宗よしの親王の此諏方にわたらせ給ひし時、都井の名をゆかしみたまひ御哥など侍り。其後又多〻良の親王と申せしもいらせ給ひけるとぞ。其頃より都井を御所の清水ともよびたりとなん。今も田圃の中に清水の涌出る處あり。みな古への都井の水脉なり。

都井の名にこそはるれ雪よ雪

石井は磯邊の郷にありしとたり。今は戸倉に其名あり。

雪清し石井いかなる石なれば

雅好旧庵

たゞさへも道出る宿に今朝の雪

望月牧

はつ雪や望月の駒先白し

川中嶋

夜は明ぬ千鳥のかよふ雪の上

寐覺の床

はつ雪のちるや降やと夜もすがら

雑

いつとても朝のまゝなり不盡の山

松はたゞ閑なるをぞよろこびぬ

松にこそ人は豊に眠らるれ

醉ずとも身は入安し竹のかげ

夜るまでも竹の清さは殘りけり

素檗が薙髪の時、願王和尚のいはく、檗が五十年の俳諧、一髪剃とや。其そりかみ、風月にこぼれ花鳥にちらかりたるを、頓てかきあつめて此一冊子となす。

濤觀若人

書肆　江戸日本橋通二丁目　野田七兵衛

彫工　黒川友三郎

梅室家集

上・下

自撰　林曹挍

梅室家集　全二冊

京都書林　懐玉堂梓

梅花室に遊べる誰かれ語りあひて師翁の歸杖をまつ事、一仙家の桃實をうかがふ心地して欠伸しけるに、はからずも一封の鴈書飛來れり。ひらき見て先は恙なきを悦ぶ。はた其文にいへる、こたびみづから筆を勞し、家集めきたるものを書すさみて、おのれに一言をそへよと贈りこし玉へり。凡風流の大家枚擧すべからざる中に、師が風骨、仙家の幻術にひとしき一筋ありて、門下のわれ〳〵龜鑑を得まくほりするを、理にしあればすみやかに梓にのほせて、同盟の人〳〵にみせんと囁きけるを、書肆懐玉堂耳はやく聞つけて、彼の桃實を盗とる事とは成ぬ。さればおのれ如きの筆とるべきわざにはあらざめれど、師言の重きを荷ひて、此書のしりへにひとくだりを添るになん。みる人あざみ玉ふ事なかれ。

水哉舎

于時天保丙申仲秋　通流誌　［水哉書屋］［通流］

玄子書

例言

一嚮年此集を企ることありて既に草稿なれり。しかるに一時池魚のために紛失して其事やみぬ。こはその後師の記憶せられしを、より〳〵に記し置るあり。はた吾徒の記し置るをもつよりあはせて、こたび木にのすることになりぬ。

一近來大小の集あまた世に行れて師の句をのせざるはなし。されど誤おほくして師を怒らしむる事しば〳〵なり。今この集を見合せてその誤をしるべし。

一再案の句あり。又校合にのぞみて直されしもあり。はじめ、

櫻なる音といふを紅葉折とし、雪に眼のちるとありしを、花に眼のちるとし、小橋かなを、丸木ばしとして題詞をくはえられたり。此類尙有べし、惑ふべからず。又、鶯の影たゝみ込屛風かな　海棠の朝かげたゝむ屛風かな　此兩句は同巢(マヽ)なり。一句は省くべしとあるに或人論じて、こは換骨奪體(マヽ)なりといへり。其論いまだ治定せざれども、兩句ともにのせて衆人の論をまつ。

一師云、自作自撰はいとしにくきものにて、校をふるごとに見劣して、是もかれも省さたしと墨を引れしもの、なかばに過たり。かくては編をなすに足らざりければ、わが徒しひて擧るものすくなからず。見ん人悉は師の得意にあらざるを思ふべし。

天保十亥年梓行　　林　曹　誌

梅室家集　上

歲旦之部

元日や鬼ひしぐ手も膝の上

元日や二日はあれど翌はなし

元日はかくて二日の待れける

東都は大(太)陽東海より出て西山に沒す。この金城は又是に反せり。

海山の枕かへしやはつ寢覺

御さがりやこゝぞと開く朱傘

酒掃の奇特見へけり初日影

初鷄　はつ鳥

初とりやすみかへ歸る狐なく

吾こゝろわれにある時初がらす

元日は日たけて起出けるに、訪ふ人もまれなりければ、終日ねむり覺ず。

寝にかへる聲を今更はつ鴉

蓬萊　門松

ほうらいや夜は曾祖父の枕元

新宅を祝して

蓬來（萊）の山におさへし柱かな

我人の物とは見えず松かざり

吉原も女松は立ず門かざり

屠蘇　大箸　雜煮

佐保姫の袴のいろか屠蘇係

指につくとそも一日匂ひけり

太はしをふとく思ふもひと日かな

箸につく柴のほこりも雜煮かな

福壽草

福壽草くさとは見えぬ影ほうし

春興之部

萬歳

まんざいや跡の太夫は色白き

市中卜居

万歳の袖にも足らぬ戸口かな

萬才や休みがてらの本國寺

遠望

五人の中に萬歳わかりけり

人日　小松曳

人の日と思へばをしき曇哉

君が聲そふて引よき小松かな

手ばたきの若き翁や小松引

正月のちからわざなり小松びき

わか菜

買たほどこぼして行しわかな哉

わすられぬ詞つゞきや芹薺

やがて煮る薺をはやす稽古かな

忘井にちら〳〵浮やわかな屑

つむあともなくて家〻にわかな哉

眼にあかで暮るまで摘若なかな

郊外にあそびて

芹薺事かはりたる有どころ
是ならば踏でも來たり佛の坐
七艸の屑にえらるゝはゝこかな
見て置て捜しにやるや蕗の薹

突羽　紙鳶

人の親の窮羽子取に長階子

山里に春をむかへて

羽子つくや住ばみやこと思ふさま
蓬生や日暮ておろす凧の音
かゝり凧うらやましけに戰ぎけり
高鳴をして夜に入ぬかゝり紙鳶

梅

梅さくや旅人山へかけのぼる
祖父が田は四隅もなくてうめの花
ほそ道の末はしれけり梅の花
梅の月七たび見ればなゝけしき

賀

千代までの杖にと梅の立枝かな

追悼

をる梅にいさみのなきも泪かな
人だかりするや山家の梅の月
此ごろや朝茶夕酒うめの花
梅かつぐ一人にせまし渡しぶね
山里や垣のはしらもうめの花
おひ分や鈅先家の梅のはな
花賣が梅はつめたき雫かな
をられても春戸より門の梅花
垣通す枝のさきにもうめの花
日は西に梅ほろ〳〵とこぼれけり

貧交

飯焚て梅をりゆきぬ庵の友
くせにして梅にもたすや釣瓶竿

いがの國尾山長引てふ所にて

山鳥の尾にひく梅のにほひかな
神の守るやうでをられぬ野梅哉
疾起たいさみに折やうめの花

文臺に記す
すゝみ出て膝にのせけり梅の影
里も暮野もくれ山の梅白し
桑の樹も氣力ましけり梅の中

柳
寢勝手のよさに又見る柳かな
人呵る聲に見劣る柳かな
旅人と婆ゝと見てゐるやなぎかな

宇治にて
橋守の鐘はし姫のゆふ柳
上坐して柳の雨をかぶりけり

米字賀
根深きを翠に見する柳かな
ふり上る杵すれ〳〵の柳かな
柳見た灯で庵の灯をともしけり

夢裡
柳見て思ひ出しけり酒の債

發會
わが庵の草木をかねし柳かな
居眠もうまし柳も見に出たし
雨ひと日降はことしの柳かな

浪花にて
蠣わりのくらい灯で見る柳かな
三木あれど森にはならぬ柳哉
見おろせし柳見上る泊かな
何處そこのせんさく無用遠柳

餞別
縮ぬれば袖にもはいる柳かな

鶯
鶯も拜まれて居る朝日かな
うぐひすもつゞいて飛や馬に鞭
鶯や二こゑ聞ば見たくなる

四塚・竹田を過て
黄鳥の名所がましや小枝橋
柴をれば鶯かへる夕べかな

聖廟の尊像を懸奉りて

鶯も来さふな二十五日かな

鹿嶋遙拜

うぐひすの寢に行かたを拜けり

鶯やほうと鳴ねばならぬ兒

うぐひすも驚く午時の時計かな

よく聞ば飼鶯ぞ森のおく

尾を反す鶯やがて鳴にけり

黄鳥の影たゝみこむ屏風かな

神祇

鶯の七五三に憶する榊かな

うぐひすや松の中なる若松に

鶯や妻もあらふに一羽づゝ

耳順の賀

黄鳥や耳の果報を算ふ年

うぐひすや河はゞよりは聲ちかし

椿

椿にも一筋つきぬ山のみち

つばき落鷄鳴椿また落る

椿おちて池の夕浪立にけり

船あてゝおくやあまりにちる椿

古稀の賀

花さくやことしも折らぬ椿杖

春月　朧月　霞

一夜かる宿も廣かれ春の月

人だかりした跡ぬくし春の月

人ならば笑ひざかりやはるの月

門口に綱やいかりやはるの月

白濱や鶴たつあとのおぼろ月

開山や霞めばもとの磯の形

年を經て御堂たちけり霞けり

通る人皆顔なでる霞かな

有磯にて

とりとめぬ蠶が仕事や薄霞

題酒銘霞關

關守も往來も醉ぬ八重霞

野雉　雲雀

山陰の田も乾たか雉子の聲
聲ほどに威義はつくらぬきゞすかな
鳴きじのきほひや岩を踏はづす
田八反ひばり十丈庵五尺
地にあれば萱にもひそむ鸙かな

雲雀より上に休ふ峠も、足高山は
はるかに望むなるべし。富士のた
かねはいふもさらなり。

雑木を見おろすのみのひばり哉

春雪　餘寒

淡雪や神酒に醉たる朝の内
あは雪や年をこえたる壁の草
春寒し荒神松の深みどり
池浚へまでした寺の余寒かな

粟津が原にて　前書有

木曾殿にこりよ粟津の春の雪

春雨　春風

春雨や野になりそふな遠干潟
一日のはる雨竹にたもちけり
春雨や杭のかしらに鳥の飯
春風やわざくれらしき扇折

猫の戀

ねこ老ぬ只一春のおもひより
五器の内妻にもわけぬ牡猫かな
なま壁に爪とがんとすうかれ猫

白魚　蛤

百錢の白魚消るばかりなり
白魚の眼にも見ゆる歟不二筑波
蛤や口をあくれば京の水

海苔

山深く來て海苔の香はまさりけり
海苔の香や障子にうつる僧二人
のりの香の掃ても殘る一間かな

菫　たんぽゝ

眼にしみる色に又つむ菫哉
鍬の刄に菫をのせて子を連て

尼たちのすみれ摘けんこぼれ米

すみれ草はすみいれ草をつゞめたる名なりとぞ。そは木のたくみがもたる墨壺てふ物に、花のさま似たればなるべし。

薄すみれ見て濃菫覺けり

山吹はなしたんぽゝの小金原

わか草のぬくみ通るや一重壁

福祿壽の片足上たる畵に

春の草ふむも命の藥かな

混題

よく寢たり陽炎のぼる枕前

傀儡師しの田の森に入にけり

馬殿も一抄まるれ春の水

たふれ木に添てめぐるや春の水

こしらへて泣や涅槃のからし和

御冥加に畠ふまれつねはんの日

春の田へすゝむで行や山の水

春の山窓から見ても時うつる

神風といふかぜの吹汐干かな

委折れといふ節のたつ蕨哉

寢てる歟早蕨つむか岨の人

山門へ糞しにかよふ巣鳥かな

化鶉

田鼠や春にうづらの衣がえ

雛

實盛が佗し姿を雛哉

手にとればはやにこ／＼と賣雛

歸雁　燕

別れとて寢耳に入ぬ雁の聲

にくけれど我田に肥て歸雁

田を賣て手打ば鴈も歸りけり

馬のみゝすほめて通すつばめかな

家はまだ見かけぬ岨の乙鳥かな

藪中の裏戸おぼえし燕かな

奥山や雪ある門へ來る乙鳥

蝶　蛙　田螺

乞食も蝶も日長し下河原
舞蝶を門にたてこむ上野かな
ぬる蝶の影早き瀬に流れけり
初かはづ麻の二葉にさし向ひ
鴨の來る水筋たえて鳴蛙
子を持て靜なものはかはづ哉
樋口から落て息つく蛙かな
井も桶も蓋して蛙聞夜かな
限の雨をしぼり出しては鳴蛙
そも〳〵といふ行義にて初かはづ
鳴たてゝ鷺を歩ます蛙かな
すいりして鯰をうかす蛙かな
たつ鴫の腋からおとす田螺哉

菜の花

垣こえしなの花いやし松の庭
菜の花や屋根に鷄哇に猫
なの花や住吉の松を果にして

常陸十六嶋てふ處にて

菜の花や奥ある嶋の鷄の聲

桃花　海棠

さし植の素性はなれず桃の花

上巳

人の手にあればめでたし桃の花
木母寺の先は桃さく在處かな

吉野山に遊ぶ日は彌生三日なりければ

みよしのゝ里にも桃の節句かな
海棠の朝の香たゝむ屛風かな

花　さくら

雲ばかり見るまで入ぬ花の奥
松風もたしかに吹て花ざかり

あらし山

花と松ひとり〳〵に向ひけり
いつとなく花になりけり峰の雲

矢背にて

見えそむる花にいそぐや花の中

寢をしみの二人出あひぬ花に月

待花

花といへば早幻に嵯峨御室

嵐山斜陽

花と人はなるゝときかさわがしき

東叡山二句

跡もどりして鐘きくや花の中

陸尺の大袖ふつて花見かな

閑坐

灯につくや花の香雨の音

戰々兢々渡浮世

花に眼のちりてあぶなし丸木橋

色外にあらはして花の往來かな

侍の定家やう書花見かな

羽織きて花折さふな女かな

あるうへに灯置たし花に風

髑髏の上を粧ふといへるに對して

錢もたぬ心の鬼も花見かな

幽泉亭即事

にぎはしや竹には雀花に客

興に長ずれば必不興至る、とかの
鼎をかづきて舞出たる法師の昔に

散花に狂ふて突目おこしけり

つくばね櫻に題す

折て來た花にたかるや一在所

翅ある花や雲にも入るたぐひ

洛の幻華坊、生前には東行の志あ
りしも竟に果さず。わきて上野・隅
田河の花の頃は、いかばかりの思
ひにやと今更おしはかられて

まぼろしを誘ふてけふの花見かな

右は天保三年三月十一日、於東都大徳寺中小祥忌執行
廟上の吟

あるときひとつの趣向をさぐり得
たれど、五七五は更なり、七々を
そへてもおよばず。よて短哥めき

たるものを吟じてこゝろをのぶる。

雲と見て　のぼれば是は　山ざくら
又あなたなる　つぎ根みに　今を盛の
花あれば　いざとのぼりて　詠むるに
是ぞ誠の　雲にぞありける

又あるときの醉興に

咲しやと問へばちりぬとこたふまで
　花をこゝろにのみ暮しけり

筑紫の雨堂餞別

予は雲とたちて故園に歸れども、われ龍となりて是に從ふことあたはず。されば韓雲孟龍の盟もむなしきかなと、頻に盃をすゝめて別れをゝしむに、情話おのづから和して雲龍の實有。一盃〳〵又一盃、醉に乘じて終ニその虛實を忘る。

いひとれぬ花とさくらの別かな
日暮るや杉に抱こむ山櫻
明た夜はとりかへされず散櫻
人去ば一ゆるみしてちるさくら

途中

馬士にゆるされて折櫻かな
散かけて人にしたしむさくらかな
深草は露の里なり遲ざくら
木陰にははや菜ありはつ櫻
ひし〳〵と木を伐る傍に初ざくら

牛を隱すといへる當麻寺の庭の松は今もありやなしや。越後國吉木のさとなる勝徳寺の庭のさくらは、稀代の大樹にして室に牛を隱すべし。

雪國にそも無量壽の櫻かな

山姥てふ謠曲に、佛法あれば世法あり、煩惱あれば衆生ありといへり。その衆生あれば俳諧あり。はいかいあれば上手あり、上手あれば下手あり。柳はみどり花は紅の色〻。

煩惱(四)としりつゝ花の山めぐり

混題

棚せゞば家とられよぞ藤の花
山吹のしづくの下の小家かな
着よごれの羽織を春の名殘かな
ゆく春やいつ眼をさます小田の鶯

夏之部

衣がえ　袷

太良より次郎がさきに衣がえ
鯛賣のこゑを景氣に更衣
綿ぬきてほすもうるさしまのあたり
膝に手のおさまりかねる袷かな
あはせ着て耻し氣なり桑門
試にきたあはせにてついと出る
橋錢を袂に鳴らすあはせかな
たち喞するうち寒しはつ袷
道づれが袖い塵とるあはせかな

卯月　短夜

塵ほどに鳶舞上る卯月かな
水底の草も花さく卯月かな
さき〳〵に橋普請あるうづきかな

越前にて

短夜のあさむつ河を垣根かな
みじか夜や玉江の芦の一嵐
みじかよを吹て取たる渚かな
明易き夜やすり鉢のたまり水

子鵑

久かたや聞ぬ年なきほとゝぎす
鳴そめてなく空もちぬ時鳥
子規つき出すふねを十文字

凌雲閣に宿して

ほとゝぎす鳴や屛風に寒山寺
東には山ほとゝぎす西に月
鳴とて歟亦木隱れし郭公
往て歸るほどは夜もなし子規

松に風そのまつかぜに不如歸
ほとゝぎす雲と曇の間にて
鶯のかいこのといへるに
うぐひすに寢起慣はず時鳥
影さすは鳶なり空にほとゝぎす
大路にたてる葵車の花やかなるに、時鳥二こゑ三聲鳴て行かひたる空のけしき、たゞならずおぼえて
あふひ祭おなじ雲井を時鳥
木戸さして境内しんとほとゝぎす
ほとゝぎす鳴や手ぬるき斧つかひ
しなのにて
聲白し黑姫山のほとゝぎす

蚊　蚊遣　蚊帳

我ひとり喰て淺茅に鳴蚊かな
閑靜をほめて晝蚊にさゝれけり
茅屋
蚊はおろか螢もはいる壁の穴
懷古
たなびきて跡なき須磨の蚊遣かな
月の空たゞ立のぼる蚊やりかな
我宿へよりもつかれぬ蚊遣かな
大津夜泊
唐崎と矢ばせを蚊屋の釣手哉
蚊屋つれば蚊もおもしろし月に飛
人もなき蚊帳に日のさす宿屋かな
幮つりて椎の樹めぐる獨かな

牡丹　杜若　芥子

散ぼたん重ねて置ぬ留守の内
四五輪に陰日南ある牡丹かな
成田不動尊深川にて開帳
錢金を砂の臺のぼたんかな
人について麥分行ばかきつばた
足代のうちにさかりやかきつばた
灯を見せて猶剪にくし杜若
取次のをれ葉ことわる杜若

預りて雁にさすや燕子花
ゆふ晴や床にも飛てかきつばた
息つめて苔をきるやかきつばた
露もつもかわくも芥子の一重かな
けしの散る光ひまなし枕元
すれあふてちるやけしにも一競
花の底覗けばにくし芥子坊主
床にけし庭に芥子あり田舎茶屋
白壁の前でもしろしけしの花

わか葉　若楓　茂

年きれの木綿のさはる若葉哉
雫をれを健氣に隠すわかばかな
花も實もゝちて椿のわか葉かな
見こみよき寺やわかばに柿衣
寐た跡に若葉うつりて又寐たし
紅葉より赤くてそれも若楓
おしあふて槻もゆれる茂かな
宮守は貧しけれどもしげりかな
貝吹ば小虫こぼるゝしげりかな
それ〴〵に池の小嶋も茂かな

常陸松江の追善

洩るものは泪ばかりの茂かな

卯の花　百合　撫子

卯の花や人がこぼして溢れくせ
卯の花を添て戻しぬ破傘
蜘の糸ひくやねぢむく百合の花
客遲く亭主もゆりも眠けり

敦盛の塚にて

なでしこの哀につよし一の谷

松魚

寢ながらに引さゝげたり初松魚
庖刀の血を見せ申すかつをかな
見おくれば小家に入ぬ松魚賣

蝸牛　孑孑

蝸牛淵にのぞむや篠のさき
かたつぶりはふや茶實の來た匂ひ

斧入る木に落ついてかたつぶり

蝸牛角ふり分よ須磨明石　とこの句のさまをおもへば、鍬がた打たる兜を着、母衣をおひて波打ぎはに打出たる無官の太夫を、はるかに望みたる心地せらる。

蝸牛扇子鳴らせばふりかへる

ほうふりも降たか雨の溜水

尺蠖の屈するは伸んがためなりといへるに

孑孑よ身のふりよいが楽しみ歟

灯蛾　蝿　蚤

草に月何乏しくて灯取虫

すさましや早瀬の舟に灯蛾

灯を消せば我を責るや灯蛾

蝿をうつ時はちいさき心かな

打つけに蚤のはなしや旅歸り

老鶯　水雞

鶯や餌にほだされて老を鳴

音を入た鶯もあり道具店

水門の内からたゝく水鷄かな

雲やけを見て驅もどる水鷄哉

舟虫につくか磯輪に鳴くひな

閑古鳥

夕暮に似たあけぼのや閑古鳥

吹れ来て一日なくやかんこ鳥

戸をさせば戸の外へ来て布穀

箒川一度もこえずかんこどり

訪ニ隱士ニ不レ逢

閑古鳥二十日は留守の十日坊

灯もせばあちら向けり閑古鳥

若木では鳴れぬ聲ぞかんこ鳥

鵜飼

舟ばたに心はなさぬあら鵜かな

鵜つかひの目くばり凄し艀ごし

鵜もふねも煙まとふて過にけり

葛の葉の火風によわる鵜川哉

青鷺　行ゝ子

青鷺のなくや立去る雨宿り

柳橋てふ所にて

あを鷺のねぐらなるべし柳橋

見たやうでまだ見ぬ鳥や行ゝ子

行ゝ子鶯よりも身は靜

鹿子

親に似て月につゝ立鹿兒かな

赤鳥居目あてに走るかのこかな

筍　茄子

いつまでぞ竹の子まとふさねかづら

竹の日をほる丹誠や人たかり

かごのめを洩らぬばかりぞ初茄子

百もぎる跡に花さく茄子かな

天保巳の年卯月二日は、亡母三十七回忌の逮夜なれば、香花かたばかり供へ、牡丹餅をねり澁茶を煮て、人〻とゝもに懷旧を語りつゝけぬ。

夏草の數かぎりなき恨かな

三日は深川淨心寺中において寸善の法事を營み、齋侍る。けふの命も父母の賜なる事を今更に嘆じて

竹の子のこぼす雫も笹の露

又

けふこぼす泪もはゝの記念ぞと
おもへば袖もしぼりわびけり

青梅　覆盆子

實になれば忘れもおかず藪の梅

青梅に塩のしむ夜か蟾の聲

青梅や折ふとしたるその枝に

いとけなき子を失ひし人を悼

手のひらの泡とこぼるゝいちごかな

田植　早苗

乳を隱す泥手わりなき田植かな

泥足で禪寺ぬける田うえかな

すてゝある苗やおぼえのたばねくせ
植とめはどふ押廻す早苗ぶね
山の日を襷にかけてさなへ取

菖蒲　紫陽花

葺てある門でしひるや菖賣
莖長に刈を手がらやあやめ草
旅人の笠にやどるやあやめ賣

田叟の没〻を悼む。終焉五月四日なれば

あやめ葺日にさへなれば泪かな
紫陽草のしづくや地にも花の跡

粽　幟

粽ゆふ手ばかり見ゆる簾かな
親ごゝろかたちよかれとゆふ粽
淺茅生や笠に並べてつる粽
御ふくろの細工か曾我の紙幟

五月雨

雪解も果なし利根の五月雨
棧や藤つなゆるむ皐月雨
降殘し〱雨の五月かな
さみだれの果ぬ匂ひや茗荷竹
雪の日にいづれ山家の五月雨

前書有

露さへも旅はおもきに皐月雨
さみだれも伽になるほど老にけり
藏の戸をあはせて淋し五月雨
蝶に羽のあるも不思議や五月雨

苔の花

とく〱の清水にて

西行の米やこぼして苔の花

趙北枝先生墓享保三戊戌年五月十二日終焉

右は古墓の銘なり。加州河北郡卯辰山淨土宗心蓮社境内に有。天保四年今の翠臺、梅田年風催主として土を築き石を積て一丈

餘に築土・玉垣を結ひ、灯籠一對を置、傍に新碑を建、銘を予に需む。

銘曰

趙北枝先生は北方の逸士なりと略傳にもいへり。さるに近世に至りて下流をくむもの海内略なかばにも及べり。吾徒の愉快是に過たるはあらじ。年風こたび古墳を再飾して舊跡を輝せり。大徳百世これを祀ふといへるも、人必これをまつるにあらず、天人をして祀らしむるものならんかしと、頓首再拜して識之。

讃

千代をふる初花咲ぬ塚の苔

信州さか木橋吹にて

せんだんの花吹まくや笠のうち

競馬

我思ふ人は落にきくらべ馬

扇子　團扇

出女に扇子とられて泊りけり

酒のみの日に〳〵かはる扇子かな

須磨寺にて

笛の記をあふぎに書て泣にけり

扇子買にふねをつけるや花川戸

寢た人に會釋してかるうちはかな

鎗もちの小學を取て團扇かな

螢

ほたる追ふて足元の闇は忘れけり

たち木かと柱をめぐる螢かな

吹つけしまゝや葛葉にねる螢

はなす手にしばしそばへて行螢

吹落て笘にはさまるほたるかな

日暮れば我笠からも飛ほたる

我まゝに飛で靜なほたるかな

あちこちに呼ばさまよふ螢かな

蟬

桐の木や雨のながるゝ蟬の腹

夕露の口に入るまで鳴せみか

草籠を飛出すせみやたき火影

楠公の墓にて

蟬に身をかりて時雨よ墓の松
煎つける聲に蟬なく瓦かな

悼淡路素原

はかなしや蟬さへ秋を待ものを

今年竹

雪といふ物が降ぞよことし竹
わか竹に衣ほしけり御影堂

ひる皃　夕皃

晝がほやあぶらのやうな松の露
ゆふ皃は是ぞとしりぬ時處

蓮

蓮の香や遠し近しと敷筵

夏の月　雲の峯

ついて來て我田のうへに夏の月
夏の月苔の色なる青だゝみ
吹さわぐ芦を根にして雲のみね
ぐるりから月夜になりぬ雲峰
雲の峰夜もくづれず泊り川
淡路にも隣出來けり雲のみね

麥秋　麻刈

麥秋や雲よりうへの山畠
麻刈ばつれなく折れる蓬かな

氷室　夏の雪

開く口も裏白そよぐ氷室かな
箸つけていたゞかせけり夏氷

越後赤倉温泉にて

湯煙のとゞくところに夏の雪

帷子　虫干

かたびらにまばゆくなりぬ廣小路
須磨寺に女客あり土用ほし

清水

報謝より清水をしへよ里の姥
池こえて清水に入ぬ鳥一羽
笠の影終日たえぬ清水かな
蕗の葉で清水のみけり馬の上

暑

あつき日や立寄陰もうるしの木
暑き日に長口上の見廻かな
麦籾の人に喰つくあつさかな

涼

涼風に身をおしあてゝ歩行けり
坐の辭宜に涼しき柱殘りけり
煎豆を抓みにもどるすゞみかな
鵜のまねの鴉もすゞし岩の上
暑かりし喘のみきく納涼かな

家産のためには夏雨を喜び、風雅のためには秋月を弄ぶ。風雅の花のうろはしからむは、只家産の根をかたくするにありと、ある人にしめして

隙あけて月待ころ先涼し

神田に居を移して

柳原ちかしといへば先すゞし

打水　風蘭

うち水やあらし集る樹ゝの中
文字書香の煙や風かほる

賀

青稻を穂長にかへて祝ひけり

御秡　茅の輪

風そよぐ女房達の御秡かな
夕かぜのむかふへまはる御秡かな
えぼし着た心でくゞる茅の輪かな

梅室家集　下

立秋　文月

烋たつや驚かれぬる我いびき

釣て行松に聲ありけさの秋

あるうへに米を買けりけさの烋

伏見

はつ秋や爺婆ゝおほき上り舟

松帆の浦

松ごとにまねくも烋のすがたかな

秋の來て出來た様なる入江かな

文月や晝寐がはりの草なぶり

烋風

軒下の田水あかるし秋の風

あき風や奥底しれぬ蟻の穴

烋風や板繪馬さわぐ藪の神

里見えて牛もはしるや秋のかぜ

湖南夜泊

近過て只あき風の三井の鏡

露　稲妻

うれしさになぶりなくしぬ笹の露

山住や柴に焚こむ露の玉

跡もどりする人もあり草の露

竹の友といへる酒銘に題して

君子にして是に醉ふべし竹のつゆ

金令居士十三回忌に

花と降露も供養の光かな

數日雨なく、黒部四十八瀬は只一面の白河原となりぬ。

雨遠し五十瀬の浪も草の露

稲妻のしばし流るゝ大河かな

いなづまや松の香こぼす青疊

いな妻や畠むかふの咄しごゑ

稲妻やをんなの端居つらにくき

小西來山の所蔵せし小雷といへる

大盃あり。一たび池魚の災にかゝれるを灰燼の中にたすかり、ふたゝび藤村の家に傳はりしとぞ。是に發句せよとあるに

稻妻に棚から落な小かみなり

朝　皃

朝がほの日覆とや見ん草の軒
あさがほや花にかまはずそよぐ蔓
蕣のつるとゞきけり籠まくら
朝皃や蔓をちからに花のつる
朝がほや八朔からはかへり花
日を見ぬ日咲朝皃も一期かな

明石にて

朝がほや人丸の宮ほの〲と
をれかねて哀のさめる木槿かな
咲かひも茶畑の垣のむくげかな

そのかみはせをの翁、文月六日この坂本なる山田が家にやどりて句あり。をのれゆくりなくこよひこの家に遊ぶ。句なくてやみなんもいと本意なければ、翁の發句につゞきをつけてあるじの責をのがる。

文月や六日も常の夜には似ず
　木の間の月も其六日の夜

銀河　霧

天の川見つめて居ればつにむせる
蜘の糸見ゆるや闇のあまの河
天の河たらひにうつす胴ふくら

山　館

旅人は皆おさまりぬ霧の中

越後臨海堂にて

霧がくれ皆こゝもとへむかふ舟

同姫川にて

秋暑き中たち切て水寒し

一　葉

かざし來て馬おどろかす一葉かな
三葉のうちひと葉落けりことし桐
もげやうを二階で見たる一葉かな

芭蕉

ばせを葉や音も聞さず破つくす

萩

身をよけて通るばかりの萩見哉

留守の間や鼠もこぼす萩の花

二分咲て一分こぼしぬ萩の花

心得てゆけど萩ふむ山路かな

庭掃が役のほかなりこぼれ萩

萩の花一本をればみなうごく

送別

隔ればどちらも寂し萩芒

おなじく

露の萩つかむに似たる別かな

荻

長風呂の客を見舞ふや荻のこゑ

行燈で小橋見せるや荻の聲

夜着かりに舟から來るや荻の聲

刈萱　女郎花

雀麦や雨をふくみて見ちがへる

蜘の網の執着深しをみなへし

をり力なくて又折をみなへし

盆の月

宿とれば先浄土なり盆の月

美翠園の庭中に湯盥を置、朝暮浴して殘暑を凌ぐこと數日。

湯だらひの功徳池もあり盆の月

玉祭　攝待　迎火

魂棚やつひのなじみの臺所

桃栗の三とせは夢や玉祭

わざくれて蓮の葉かぶる生身魂

攝待にやとはれ給ふ佛かな

迎火や裾風たてゝ人通り

をどり

松の根をよけ〳〵をどる山家哉

秋もやゝ西にきこゆる踊かな

角力

なでしこのおされ兒あり角力取

兒に日のさして猶豫ふすまふかな

案山子

吹あれていさみのつきしかゞしかな

立にゆく案山子大勢おくりけり

高みから見て置直すかゞしかな

鳴子

里〳〵の晝寐さめた歟鳴子引〻

鳴子引いづくも見えぬ藪の中

八朔

八さくやきのふうえたる塀の松

越中泊にて

八朔に正月するや寺おとこ

風たえて海のおもても田面の日

月

越中三日市にて

百里來てまだはつ月の三日市

待宵は月見た跡の月夜かな

待宵すみだ河にて

月はやし今戸の煙きえぬうち

船頭の氣隨なだめて月見かな

名月や草木に劣る人のかげ

松風は大事なりけりけふの月

名月や鶴とも見ゆる白德利

名月やさかなにかざす松の影

草陰の猫もけしきやけふの月

めい月やどの舟からも柴拾ひ

新橋のわたりに宴して

芝の鐘きゝはづすまじ月今宵

一とせ廣澤のほとりなる寺に宿して

冥加なや名所の月を在あかし

おなじ所にて

月の雲ふくやちかくにあらし山

月の雲鶴はなしたる氣色かな

風をいとひ雨をいのる田守の翁が

心づかひに、老の身をも忘るなら

む。

雨降ばさぞな月さへもる小家

大伴黒主の讃

おもかげやかゞみの山の世ゝの月

越中泊橋本堂即事

はし本に入るとき拝む秋の月

いざよひや疵のついたる小さかづき

いざよふ歟山よりはこぶ雨白し

いざよふとしれけり傘の下明り

よべの月に草臥けん、つれ來る人も來ざりければ、いざよひは宵よりふして

膝たてゝ寐るをけしきや庵の月

望の夜は雨いたく降、風ひややかにして仲秋の空ともおぼえざるに、今宵はなごりもなく晴わたりけるに

いざよひやきのふの雪の不二の山

朝寒　夜寒

朝寒や舞臺にのぼる影ほうし

都には加茂河ありて夜寒かな

寐るもをしする事もなき夜寒かな

乙鳥の巣に鼠鳴よさむかな

秋暮

秌のくれ松見て立ば人もたつ

秋の暮寳のぞけば鮑一つ

物申に肝つぶれけり秌の暮

山臥の山に入けり秋のくれ

きぬた

隣には人をとめた歟やむ砧

漁のなき夜汐と見えて礒かな

祇王寺のきぬた鉦より哀なり

やとひ女の出直して來て砧かな

行ゆけば左右になるや灯と砧

芒　尾花

釣人のわめいて通る薄かな

土橋の下にもまねく芒かな
田の中にそも／＼からのすゝきかな
まねくとて岩角たゝく尾花かな
水つきの泥の中より尾花かな

稻

いねの浪はる／＼と來て枕元

八幡宮奉納

稻を啄む鳥はゆるさじ弓矢神

賀

此うへに年をつむべし稻の花

おなじく

青いねを穗長にかへて祝ひけり

西瓜

寺入の子の名書たる西瓜かな
庖刀に赤みのうつる西瓜かな

薙髮の祝

なでるほど齡の長き瓢かな

虫

手をさへる草にひよくやきり／＼す
小庭にもおちこちあるや虫のこゑ
たゝずめば虫鳴出すや笠のかげ
虫鳴や枕にちかき松ばしら
蛼やまださめきらぬ風呂の下

幽屋の里にて

むしなくや晝の戶ざしも里の癖

秋の蟬

やゝもすれば家に入けり秋の蟬

山行

ふところに入らんとしけり秋のせみ

悼

聲はわが耳に殘りぬ蟬の殼

秌の蝶　秋の蠅

秌のてふ途をうしなひぬ鳩の中
秋の蝶たてこまれけり秣部屋
人中で生れたやうに秋の蠅

いなご

十里ゆく舟に飛こむ螽かな

蜻蛉　ひぐらし

とんぼうや帆ばしらあてに遠く行
蜻蛉のおさへつけたり鮓の壓
とんぼうの羽にもすくなり三上山
ひぐらしやつひに飛こむ月の松

鈴鹿山にて

ひぐらしや近江の入日いせの月

秋鮎　崩簗

まし水や茨にさゝるゝ下り鮎
見るうちに鮎のさびるや市の雨
腹見する鮎のよわりや逆落し
焚ほどに干るや瀬落の崩やな

雁

畑あらす行義ではなし雁の列
さわがねば野になじまぬか渡鴈
まだ聲を聞ぬ雁なり田に並ぶ
竿なりも崩さず雁の旅寢かな

鶉　鴫

入相の鐘なき里やうづら鳴
おし水や人はさはぐに鳴うづら
立鴫の兒にうつるや長柄の灯
大池の眞中ゆくや鴫一羽

小鳥

眞白に又まつ黑にわたり鳥
小椋鳥さへわたるや海は鳥の道
いかなれば鳴より肥し木啄鳥

草花　花野

小料理もする宿ならん草の花
門ありて國分寺はなし草の花
息才な子やくさ花を餅のさい
金襴の袈裟吹れ行花野かな

菊

雨のもる最中菊の匂ひかな
留守事になめて見にけり菊の露
菊の香に一坐しばらく默りけり

雨風や菊の香うちへ皆はいる
よめがはぎ九月は菊に成にけり
菊をると威して亭主起しけり
塗格子牛輪出たるきく白し
ぬつくりと菊の屋かたに蕣
給はれといひよくなりぬ十日菊

熱田法樂

久しさや蓬のまゝの菊の花

日光山中

菊の香や水音もする垣の內

紅葉

紅葉折音ひと谷にひゞきけり
家遠く闇にかたけし紅葉かな
さし出たる枝にもあらず初もみぢ

通天橋

足元に雨吹おこる紅葉かな
掃分ておくやもみぢと檜皮屑
此ごろは晝月のある紅葉かな

鹿

道もなき茅原に立り明の鹿
鳴しかや森の一つ灯立ふさぎ
山端へ出てはもどるや雨の鹿
蟬丸も琵巴(琶)さし置ぬ鹿の聲

いせ朝熊にて

こゝかしこわたる聲なり月の鹿

後の月

落着の黑椀さむし後の月
奥山で見た月出たり十三夜
日あたりもよい田のうへや後の月
あつ物に坐敷くもるや后の月
灯臺のもとをてらすや後の月

長月はつかばかり醍醐のあたりを過けるに、唐がらしを摘みてほすとてかずの莚にかきひろげて、軒もかきねもからくれなゐに道もさりあえぬばかりになん。供しつる

をのこ打うめきて、あなおびたゞし、かばかりのものを人は一とせのうちに喰ひつくすめり、あなおそろしとつぶやきける。いとおかしけれど、こゝろあまりてほ句にはならでやみぬ。

唐がらし笠にさすべき色香かな

いつこりて鶏もつゝかず唐辛

番菽箸いたはりて撮みぐひ

空家のたなに殘るや唐がらし

琴柴書齋てふことをこめてほ句せよとあるに

むだことに松葉をかく秋のゆくゑかな

例のわざくれ

述懐

水かゞみ見れば見るほど我かげは
やせの山田のかゞしなりけり

冬之部

三日月もあるやまことの初時雨

しぐるゝやしぶとく青きたばこ莖

義仲寺のふみ濡て來る時雨かな

沖見ゆる障子の穴もしぐれけり

しぐるゝや鵜は水くゞる一おもひ

洩るまでは聞すましけりさよ時雨

しぐるゝや戻駄賃のまけをしみ

琅玕翁三回忌

おとゝしの竹色かへぬしぐれかな

はせを忌

けふこそは日比忘れぬ時雨かな

播州別府の松

ながらへるはづよ時雨もゝらぬ松

しぐるゝや棒立なりの筏さし

時雨して入かはりけり池の鳥

笠に着た黒木は賣てしぐれけり

霜

夜もすがら雨を聞しにけさの霜
よく見れば蓼のふしにも今朝の霜

翁の像を安置して

さむしろの霜も世にふる宿りかな
霜月もこほるゝものは松葉かな

追善

塚の霜とけるを見てもなみだかな

落葉

木の葉ふる奥にひかえて松の月
田の水にわざとがましきおちばかな

旅中

膝にふる木のはを夢や馬の上
掃よせた落葉うごくや蟾の穴
落葉火や一もえづゝの窓明り

こがらし

凩の日に松うえる長者かな
日暮るゝに凩ふくに磯の鶴

奉納

木枯の野に住吉の宮居かな

小春

京の鐘聞ゆるさとの小春かな
みの虫に人たかりする小春かな
水底の砂も小春の日なたかな

惠比須講

鑰かけに洗足させて夷講
鯛くはぬ乞食もなし夷講

歸花

かへり花闇にも見えて哀也
さた聞て夜る見に行ぬ歸花

はせを忌

木の下にたつかひありや歸花

枇杷の花　茶の花

掃だめの所かへけりびはの花
茶の花や余計日のさす芥塚

枯野

すみれ咲ばかりに成し枯野かな
日暮れば皆山になるかれのかな

枯尾花

空也寺や町から見ゆる枯尾花
吹よれの戻らでかるゝ芒かな
鼻はやき牛さへ嗅ず枯を花

すみだ河にて

紫はかうもさめる歟かれを花

大根

角力取宿もちけらし大根引
婆ゝが子は傳馬休て大根引
大根を鯛ほどほめる山家かな

麥蒔

麥まきや野路の玉川一またぎ

あられ

二三合蜆にまじる丸雪かな
鵜はしづみ鷺は雲井に霰かな
降こんで肩をぬかするあられかな

氷

氷る足ぬいて飛けり泊り鷺

雪

まばゆさにまけて雪掃戸口かな
雪ちらし〳〵箖に入森の鷺
ゆき持て水にひたりぬ沼の家
跡先に人なし雪に撓む松
雪ふるや行灯むける戻り馬
松の雪物たしなみのよいあるじ
明る戸にのさばりこむや雪の竹
はつ雪や人の底意はいとけなき

大森にて

海苔柴や遠浅かけて雪の花
おもたさの衾ほどあり雪の傘
雪掃て埋み生姜もなくしけり
袖のゆき見せて佗人起しけり

雪日漫興

御肴にまひとつころべ雪の人

降雪をいとふ御顔やゆき佛
ゆきの竹撓むもしらぬ宿鳥かな

ある人の薙髪に

雪ならで黒髪はらふ袂かな

琉球人來朝

わが國の雪見に來た歟うるま人
松の雪猶豫し過てかぶりけり
埋まれたふりしてゐるや雪の鳩

寒

糊の干ぬ行灯ともす寒さかな

はせを像前拈香

寒けれど背きかねけり窓の月

鷹

影ほうも眠らぬ鷹の旅寝かな
岩山や切れとを過る鷹の聲

鷦鷯

雪花をまぶたにつけてみそさゞい
飛先が月夜になりぬみそさゞい

千鳥

望汐の橋につまづく千鳥かな
里に來て桐の實鳴らす千鳥かな
日よければ千鳥もいやし里わたり
藁塚にねぐらはなさで飛千鳥

明石

蛸つぼに跡もどりして鳴ちどり
志賀の山深入しては鳴千鳥

をし鳥

かざし羽の帆になるをしの浮寝かな
陰日なた隔てぬをしのつがひかな

鴨

鴨なくや汐さす堀の行留り
風呂に居て鴨の料理の差圖かな

水鳥

水鳥のあさり消したる日南かな
水鳥に夜かけかぶせて峰の月
水鳥もふねも塵なり鳰の海

水鳥の中つきわつて長いかだ

風雅の流れ滔々として犀川・淺野川とゝもにつきず、諸家連綿とたち好士爭然と起ろ。こたびさらに松裏庵の立几を祝す。

水鳥に慣ふてあそべいつも春

河豚

鰒にくし魚の錦の市に出て

へつらはぬ腹つき出して店の鰒

生海鼠　杜父魚

なまこさへ逆るこゝろか手をすべる

魚だなやかくぶつばかり藁敷て

巨燵

出た跡をふさぐも巨燵思ひかな

松風やこたつの底の炭の音

寐くたれて踏飛したき巨燵かな

火桶

膓もにえよと抱く火おけかな

又出たとはじめはうとむ火桶かな

西山の薄日にほすや張火桶

炭

鬪ずみを先うたがふや炉の煙

炭もえて今朝まで殘るけむりかな

口解かで虚になしけりすみ俵

かた炭や臺所婆ゝがひとり言

老慵

炭わりし勇氣暫く殘りけり

炭がまをさして飛けり夜の鶴

榾

一里ほど見かけて來たり榾明り

ほだ焚やけむりの中に嫁が皃

膝出せとすゝめる榾の馳走かな

衾　帋衾

百足はふ音すさましや帋衾

ぬくもりの宿鳥に劣るふすまかな

水もくみ火もたく所化のかみこかな

音のするたびに目のつく紙子哉

納豆

叩く音もらすを罪や納豆汁

椀の湯氣額のゆげや納豆汁

網代守

水は行月は落るにあじろ守

しづかさに犬もおどさず網代守

冬月

脊高き法師にあひぬ冬の月

在明て入る山遠しふゆの月

寒月や雨さへもらぬやねをもる

冬ごもり　冬の夜

鼻にまで墨を付けり冬籠

窓へ來る雀ふえけり冬ごもり

ふゆの夜や針うしなふておそろしき

神樂　袴着

我子等が笛も身にしむ神樂哉

はかま着や稚ごゝろに威義の眉

歳暮混題

煤掃の中からたつや木賃客

すゝ掃や取かへされし鶴の雛

草庵のむかふなる家に

うぐひすの江戸子鳴なり寒の内

節分の日大内に詣でゝ

鈴の音に泣やこゝろの鬼やらひ

我宿は柊さゝず鬼も來ず　と先師は申されしが、もとより鬼はおそろゝにたらざれども、福神を招く心はいさゝかなきにしもあらず。

我門やひゝらぎさせば人笑ふ

年の市藁一把にもかけ直かな

龜の尾のみじかく歳は暮にけり

人について吹しづまりぬ除夜の風

年内立春

青筵賣と買とに古年ことし

春までが來て手を取ぬ年の暮

十六日立春

春ちかく正月遠きことしかな

無季之部

初參宮

けふの命はじめて嬉し神路山

春秋もとゞかぬ不二のたかねかな

はし立や見ながすにさへ一日旅

題酒銘老松

老てはますます壯にして、醉てはいよいよ樂む。仙境の遊といへども、げに此うへや有べき。

春秋も醉てわすれて松のごとし

ある數奇者の庭に相生の椎の樹あり。これに發句せよとあるに

土も木もむつましき宿や茶のかほり

淨書したゝめ終りし後、つくづく思ひ出るあり、又人の告しらするあり、さし出たる句にもあらねど、紙のあまりあればのするものなり。

四季混題

元日や玉に角ある人ごゝろ

元日や人の妻子の美しき

鶯のくせおぼえけり影ぼうし

春の草喰へる限は覺へよき

青柳や人立こみし居合拔

鳩のくふほどになりけり柳の芽

藪ごしの月夜にあへり初ざくら

遠里にあらし聞えて遲ざくら

布干せばまばゆき兒の蛙かな

此外に柳さくらやねはん像

ある人の薙髮に

さびしくば螢を入よ紗の頭巾

家一つ野中に消してゆく螢

磯くさき松からもどるほたるかな

百合いける人や小首をゆりの花

入梅ばれや先見る山の大文字
ゆふだちの長橋わたるをとこかな
芋の葉に溜てはこぼす夕立かな
夕立におはるゝ鷺やひと田づゝ
ゆふだちや羽織ながるゝすみ田河

秋參宮せしとき

しづかさの事かはりけり秋の青葉
いづち行膝行ぐるまぞ怺の風
茶は水になりしといひぬ秋のくれ
落馬する人あり空にさわぐ雁
いかめしく風折したる紫苑かな

よし野の擣衣てふ題を得て

音よきは葛のころもの砧かな
室町や二階に見ゆる菊の花
小宿には傾城をらずきくのはな
引かけた藻取のける紅葉かな
蟷螂や水に落てもまけおしみ
桐の葉の二日にふた葉落にけり
大名もひと夜とまりや虫の聲
雨にあふて人らしくなるかゞしかな
捨ぶねに雨たまりけり神無月
突出した舟はのがるゝ時雨かな

翁の讃

かうばしき翁なりけり冬の菊

はせを忌　二句

はせを忌や伊賀の干そばみのゝ柿
眼の花のとしゞゝふえる霜夜哉
つかねたる手にさはる迄落葉哉
塩賣の赤手さし出すほだ火かな
脱すてゝ見れば恐ろし雪の簔
宵に來た人もめづらし雪の朝

人のあらたに造りたる家に年たこえて

古きものは我身ばかりぞ花の春
上京や桶屋がおけも花の枝
名月や小門に立し白うるり

白露の中で手をやく蚊遣かな

うぐひすや人は汐時しらぬ里

この外猶脱漏おほかるべし。又えり捨て載ざるも多し。追〻に遺れるを拾ひ、はた自今以後の作をもまじへて次編に出すべきなり。

或人問て云、哥集には戀の部といふもの必あり。すべて發句の集にこれなきはいかなる故にやと。荅て云、俳諧にも戀の句なきにはあらねど、戀の題といふ事なければ、おのづから稀にして。部を分つほどには至らず。我家の戀は附句をもて專とす。さきに予が附合集を著し、戀の部を擧ぐ。開て見給ふべし。

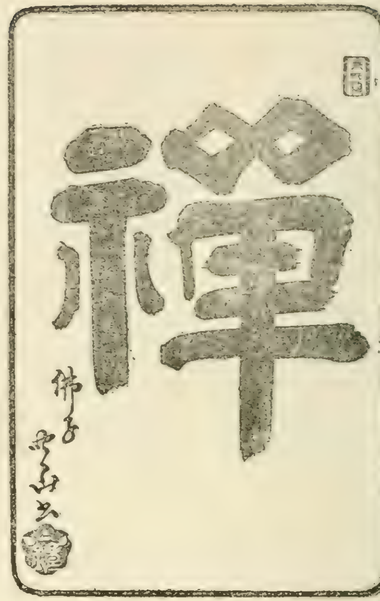
方圓齋
藏　板

、自撰梅室附吟集　一册　年風校　出版
、同　家集　二册　林曹校　全
、同　後編　二册　おなじく　近刻
、同　文集　おなじく　全
、同浪花附合集　二册　おなじく
百五十遠忌祖翁追福集　梅室選　礪山校

浪華書肆　心斎橋安土町南え入東側　河内屋和助梓

鳳朗發句集

上・下



叙言

先師鳳朗、一たび句藁を上總の船路にて、わだつみの神にかくされ、二たび續集を難波の旅寐にて、相やどりのをの子にうばゝる。さらずば八十有余年の吟章、万をもつて算へつべきをと門生是を歎きあへり。されど師は常に、古人歌を水に投じ、發句を烟になしたるふる事など語り出て、我は求めずして句數のへりぬるは風雅のうへなき幸なりとて、たゞ暗記の詠のみいさゝか書遺されしを、こたび社盟の手記これかれ取集て梓に上せぬ。かゝればかのかくされ奪るゝのうれひあらじと、よろこばしさに筆を操れり。

百済堂如息 〔悠然〕

鳳朗發句集 上

春の部

正月

蕣のけて正月さする柱かな

元日

元日や頭にゐます弓箭神

世に住ば元日世話し箸三度

山田に年を越て

元日の底の見ゆるや五十鈴川

元日の日のさす眉のあはひかな

やつと來た元日が只一日かな

花春

守口如瓶

色も香も其木〳〵の花の春

初日

大空のせましと匂ふ初日かな
人の見たあとのみ拜むはつ日哉
夜に入にもひとつほしき初日哉

初霞　初手水

日の出のは一先きえてはつ霞
養老の瀧壺くめやはつ手水

惠方

惠方はと問はゞ年〱よしの山

筆始

はせを翁の不審に荅ふ

角折た鬼を本尊に筆はじめ

御降　御慶

御降や庵の嘉例のもりはじめ
連の名もひとりでいふて御慶哉

万歳

万歳や鶴なくかたへ行野道
万歳のはやしといひぬ立月日

福壽草

拜まれぬだけが草也福壽草

去年今年

八十の春秋、人の問にこたふ

此うへの夢は覺えず去年ことし

八十の上に一ツある事をしりて
いと珍しくおもひしに、其上に
また二ツも有けり。

去年今年夫もきのふの言葉哉

二日

春や世話し二日は月の入はじめ

松の内

ことしにもきのふが出來て松の内

福引　羽子板

福引や御降濟て殘る雪

福祿壽讃

曳當た寶見せうぞ梅柳
羽子板の箔のこゆるや小笹垣

子日　小松引

踏出した瘧に紙はる子日哉

ある日かしこき男の、うらゝかなものよ子日の　と句作りて、又なき句也と思へり。されど余情にあるべきうらゝかをさへおしあらはしたるのみかは、物の字の手づゝなるはいかにぞや。趣向のをしければかくいひておのれが句とす。

白濁りするや子日のたまり水

年／＼に曳ても足らぬ小松かな

曳を見て居て氣のつまる小松哉

葉のさした跡寒がるや小松引

若菜　薺　鈴代

こぼるゝを姿におくる若菜哉

初若菜三筋四すぢとかぞへけり

むかしから薺のあての垣根哉

めでたさにせゝりちらかす薺哉

喰ものとなればさびしき薺かな

東都繁花

葛餝の舟荷にとるや薺屑

すゞしろや春も七日を松の露

藪入

養父入や白無垢見せる立はしり

女子ひとりふたり連立たる土佐畫に賛す

藪入のあと連待や小原道

春雪　淡雪　殘雪

人中に舞てはひりぬ春の雪

淡雪や僧に刀の供まはり

柊も掃やられけり殘る雪

余寒

うれしさの丁度ほどよき餘寒哉

霞

空むいて子供弓射る霞かな

明石夜泊

夜霞は須磨とあかしのとぎれ哉

長閑　麗

灰蒔てのどかにしたり門はたけ

老懐

長閑さにおさへ歩行や膝の皿
うらゝかな仕事見ゆるや野に柱

長日　遅日

長き日のながき覚がつきにけり
暮遅き加茂の川添下りけり

山笑　畠打

桃亭にて
こゝ向て笑ふて居るや東山
山うてばかま鉾形のはたけ哉

春夜　春宵

春の夜や心眼にうき耳に出る
はるの夜や逢坂こゆる人の聲
大船に坐敷もありて春の宵

春月

春の月若う見られに歩行けり

東風

東風そふや開くをまぢる藏の塵

春風

はる風やわびいふて出す塩肴
春風や人の見残す鳥部山
はるかぜの吹かくしても須磨の浦
春風やあつてもいらぬ門の錠
野間の内海に義朝の昔のあとを
春風や馬も乘人も友眠り
撫やるやむしろの下の春の風
内に居る日の耳際も春の風
築上て春風流す堤かな

春雨

はる雨の夜〳〵はるゝ旅路哉
流れしと見ゆる跡ありはるの雨
もの植ぬ庭こそよけれ春の雨
春雨のうれしさう也池の水
居風呂に肱うかしてはるの雨
西月が身まかりけるよし、その
門人より告こしけるに
春雨にぬれてとゞきぬ須磨の状

春山 春海

いざそこへ膝すりよせん春の山
もどかしき日の越ぶりやはるの海
見かけより夜深かりけり春の海

春水

土積ば潜つて行やはるの水
山蜂の踏で迯るや春の水

梅

何の木によりても梅の匂ひ哉
入相がいくら鳴てもうめの花
世の中に門は幷べて梅のはな
梅が香や散ての後も二三日
今日迠はちらりともせずうめの花
梅か日かわきまへかねる匂ひ哉
鷹すゑて次手ぶりする梅見哉

難波の八千房、男子をまうけしよし申こしけるに

土地がらや松が生ても梅の花
香をひくや梅取次てのく袂

家根もり柱朽てむさ〳〵しかりければ、いそぎ新造してわたましけり。起臥のいといさぎよからんと思ひやりつるに、はじめのはにふも今のも同じ躰心にこそ。

白いのでしろくおもはず梅の花

柳

こゝろ添心はなるゝ柳かな
枝影の組ではのぼる柳かな
さし枝に所望のたえぬ柳哉
くらがりへ枝とり迯す柳かな
蔓むしのはなさぬ風の柳哉
曳ば来て相手にならぬ柳哉
すら〳〵といく夜も明日柳かな
まがふもの二月にもなき柳かな

椿

氣もつかずなる迠にさく椿かな

眞夜中をしらせの椿落にけり
椿ではしれぬ月日のいそぎ哉
うりかひも落ながらすむ椿かな

若草　露叢

若草もけぶりそめけり鳥部山
若草をのぞくや鹿の片足たち
坐敷から急な無心や露の叢

鶯

うぐひすや已が鳴音に立すがり
黄鳥のうぐひすになるはつ音哉
うぐひすの來ぬ日春めく木の間哉
黄鳥や雀の米に眼もふらず
鶯やなかで立日もをしまるゝ
うぐひすを見もせぬうちの初音哉
黄鳥や聲のおもてを垣の外
黄鳥と我とはしをりかゞみ哉
うぐひすに踏れてうくや竹柄杓

玉澤に一瓢上人を訪ふ。廿とせばかりの昔がたり盡べきにあらず、かたみにまめやかなるを悅ぶのみ。將、諸堂の破懷(壞)をあらためて再建の大願、きゝしに倍せる大功に眼を驚かす。

鶯も並〱ならず雲に聲

雉子

山彥や京へとり次きじの聲
往還もすぐなはさびし雉子の聲

雲雀

麥國の二ヶ國幷ぶ雲雀かな
草ふみに稀にはもどるひばり哉
笑るゝまで見つからぬ雲雀哉

駒鳥

奥ありて駒鳥なくや關屋村

百千鳥

吉田詠久が老父、なとゝし米の賀なうけられしが、二とせかされて九十歲のよろこびをすゝむ。

此するゑなほ幾年かひさしからん。

此うへの數もにぎはし百千鳥

猫の戀

京の夜にしてはさわがし猫の戀

かたみかとおもふほど也猫の五器

戀にうとき猫とはなりぬ物おそれ

白魚

白魚やつまんだあとのうす曇

をしさうな白魚うりの手つき哉

白魚にこゝろ遣ひや傘雫

朗詠

あが若冠のむかし、父が求て得させられし肥前守盛町が作の鋏あり。あはれ坐右の用をなしけるに、累年を考れば、ことし天保七年丙申は還暦にあたれり。よつて彼を賀し賞するに、紙袋を穴の如く拵、是をあたへて多年のいさほをねぎらふ。

空鋏む小蟹ともなれ春遊び

大雪に閉られ、火桶頼みにやゝ日のふりゆくもしらず。ふと出てそこら逍遥しつれば、いつしか松も過て案の外のどやかなる空にぞ有ける。古人は初秋に驚き、我ははじめて春におどろく。

見えもせぬ凧にあわてつ春の壁

正月は朝きさらぎはゆふべかな

二月

畑がちに見ゆる二月の麓かな

默ては居られぬ二月尖かな

初午

はつ午や御庭の橋の渡りぞめ

橙の酢もはつ午の名殘哉

帋鳶

嵯峨にあそびて

きれ凧や柿の木過てあらし山

日は凧に別れて先へ這入けり

淡州志津木の浦、静女の古墳にて

今も操そのをだ卷や呑鳶

朧月

鳴し行朧月夜の扇かな

中ほどやみじかい橋も朧月

ひいと鳴ものゝ吹たしおぼろ月

朧夜の眞向は四条五条かな

事納

いつも見る月の出てあり事をさめ

彼岸　涅槃

彼岸とは花さく頃の名なりけり

淡路の濱漁網船の目印に妙法蓮華經の旗を立たるあり。殺生のうへには似つかはしからぬ事なれど、思ふにけふは二月の十六日也。自然の結緣のがれがたき因緣あればにやと、時にふれてひそかに隨喜す。

御涅槃のあと追魚のいのち哉

山燒

山〱や燒くせ付てひるもやく

若芝

觀世音奉納

若芝やこれもこゝろのさしも草

紅梅

手から手へ紅梅わたす小性(姓)哉

初櫻

ちる梅を待てなけれどはつ櫻

高砂や尾上はふるきはつ櫻

待た日のいくら過てもはつざくら

菜花　大根花

菜の花に色うしなひし佛哉

法螺ふくや菜の花の方うち向て

筑波をも見る眼のはしや花大根

五加木

春の香もこゝらは淋し五加木汁

歸鴈

雁に霜一かたならぬ別れ哉

かへる迄みじかかりけり雁の足

乙鳥　鳥巣

草庵

雨やどりばかりに寄し乙鳥哉

巣のふちへ乗ちゐつきぬ燕の子

閑居

鳥の巣の影もさしけり膝のうへ

蛙

くらき夜のはるかの奥やはつ蛙

己が影さすや蛙の咽の下

けしきみな山に暮こむ蛙哉

鳴ぬ間も喉のたゞ居ぬ蛙かな

蝶

はつ蝶をわするゝ頃や飛小蝶

大津へも京へもいらず舞小蝶

田螺

鳴といふはなしのみきく田螺哉

ふと鳴たやうな田にしのゆふべ哉

若鮎

鮎のぼる瀬のわれて来る山根哉

二替り

いにし天保七とせ、種いもの實のらず、未聞の凶歳にして、世の中飯うゑすなるばかりなれば、歌舞妓も見べき人さへなく、例の顔見世もとり置ておの／＼變にたへざりしと、人のかたるを聞て

七轉八起のはるぞ二の替り

雛

雛譽る心づかひや忌言葉

犬猫や雛にかざれば睦ましき

四日にも四日と見えぬ雛かな

花

花の香や朧も空の咎ならず

いとまなき日ばかり花は咲にけり

賤山にて

花と我間にきゆる月夜哉

遊石獄

立歩行われのみ花でなかりけり

いく度か初手見た花に車坂

花を出て空うしなひしおもひ哉

丙申の上巳、嵯峨天龍寺中南芳院に泊る。五更過るばかりに吹あれ來り、やゝさわがしかりけるが、やがてうちやみたる後は、はじめのほどよりも猶靜さ増りにけり。

花のちる音かと雨をきく夜哉

明るおそしと渡月橋に漫(マヽ)歩す

木よりちる花にはあらずあらし山

塔の峯をこゆるこゝろのこゝになくて

見ゆるかと〳〵花のよしの山

おもひつめし花見て足のふるへけり

花七日散ての後ぞしられける

上野

あちらでも我にはぐるゝ花見哉

面倒に耳の聞る花見かな

旅に病ける後

餅さめて臍のさびしき花見哉

口もとでけふもくらしぬ花の山

よい癖や花見る人のもの言ず

見えもせぬうちから花の夜明哉

芝冷て立わかれけり夜の花

江戸を出て川崎わたり迄は、途りの人〳〵多くていまだ旅情なし。六郷を渡りて

旅しらぬ友まじはりや花に鴨

薩陲(埵)嶺にて

つく〳〵と見るや松にも花の浪

いたづらに星霜を經るの耻かしめも思はず、たゞ暗然として八十の賀をすゝめらるゝ禮節にあふて

花は雲何をいつまであすならふ

櫻・

ふりかへる時雲となるさくらかな
露ほどの花も殘さぬ櫻かな
一もとは散のもほしきさくらかな
ちらぬ間もちらずには居ぬ櫻哉
ちるを見ればさくのもをしきさくら哉
散を見て氣の高うなる櫻哉
散たれば明日の日のあるさくら哉

三觀大悟を身に行ひ、世にあき人にあき我にあき、三義もつて生涯を果したる人也。

西行の大口きかぬさくらかな
山ざくらきのふ我來た足のあと
夜も出て鳥啼里や遲ざくら

桃

梅にかつ月はもたずやもゝの花
桃の花何とて雨にむつまじき
うつとしき譽人の來るや桃の花
桃をればよい年してと笑はれし

海棠

海棠に春のさびしきゆふべかな

梨花

夕ぐれになる空すむやなしの花

藤

朝の事わすれ果たりふぢの花
藤の花岩屋に鬼はなかりけり
我のみの人通り也藤の花

辛夷

咲て居て花ともしらぬこぶしかな
によき〳〵と花になじまぬ辛夷哉

山吹　つゝじ

山吹や馳走に並ぶ薄草履
山吹のみな一重めくさかりかな
山吹や氣の休らぬ馬のうへ
山吹や今朝出た家の遠ぐもり
ない道をつゝじの蜂に追れけり

菫

色こくてむね打さわぐすみれ哉
嵯峨山や只の道にも花すみれ

むすんだら結ばつてゐるすみれ哉

ゆかしさに葉も見届けず菫草

母子草

佐保姫のゆかりの色か母子ぐさ

茶摘

唄ふので等閑になる茶つみ哉

蚕

一おろし蚕に来たり山の冷

春暮

原・よし原を中央に

かた〳〵は不盡かた〳〵は春の暮

行春　三月盡

四ッ谷を過、笹寺のあたりをたどる

行春の人牛馬にかくれ鳬

何氣なや三月盡の明の鐘

題詠

獅子舞を追て歩行や春の塵

起〳〵は膝もめづらし春ごゝろ

道芝にこす枕なし春心

忠度墓

しほるには片袖たらず春の露

吾をうかすわれ哉春の科ならで

奉送喜綠侯

ふりあふぐ別れまばゆし雲に雀

夏の部

四月

旅人も草も夜明の四月哉

男にも女にもむく四月哉

更衣

見附の宿を過てはや春の心なし

ふりかへる不盡とはなりぬ衣がへ

我名を鳳朗とあらたむる時

大空の洗濯もしてころもがへ

武府を出しは稲妻の如く、皐都に入はかげろふのごとし。

今日としるきのふさへなし更衣

袷

懸おけば薄ぐもりする袷かな

思ひよらぬ事に老の衰はあるもの也

年ましに縫上のいる袷かな

ぬれ色に出來てうれしき袷哉

夏衣　綿貫

白地にてあるべきものぞ夏ごろも

着た日から月のさしけり夏衣

金洞山夜泊

水音の寐覺冷すや夏ごろも

綿入つ拔つ年經るころも哉

拔し綿與がるまでに重かりし

短夜

みじか夜やうたゝ寐の森ほど近し

一旦にみじか夜いふな二寐覺

夏坐敷

月に名のたゝでいぶかし夏坐しき

夏の月

はた〳〵と寐しづまりけり夏の月

夏の月つまめば消る菓子ばかり

灌佛

灌佛の跡まで洗ふ小庭哉

夏入

夏に入ば明る間遲し茶立むかし

扇　團扇

奇麗さにかこひ古せし扇かな

義仲寺にて百五十回忌を奉扇會に取越行ふとて、發句望み來りければ、十とせの秋も百いそとせの昔語

白扇古郷と書て手向けり

蚰のさわぎにうせしうちは哉

蚊屋

宿の幮蚊迠はひりて泊りけり

蚊屋際に手燭も置や馳走ぶり

幮のうち足手の捨場なかりけり

牡丹

夕風や牡丹崩れて不二見ゆる
ひわ／＼と牡丹によわき枴かな
袖風のゆらりと越る牡丹かな
一日は牡丹につぶす家越かな

芍薬

芍薬やけふは野守の小酒盛
芍薬を見せぬが庭の趣向哉

葉櫻

葉ざくらに古跡めきたる飼屋哉

應〻尼を悼む

葉がくれて春も殘さず姥櫻

橘

香の戻る花橘の闇風かな
夢迫がはな橘の匂ひかな

杜若　一八

花の似たあやめにも似ず杜若
剪て來て明る日咲ぬ杜若
一八の手入も漏の次手哉

卯花

紙燭して垣の卯の花暗うすな

小雨村

卯の花を折手の甲や雲煙る

若葉　青葉

矢一筋もたで分入若葉哉
朝風を壘にこぼす若葉かな
丹誠で若葉になりし植木かな
火ともさぬ若葉とてなし伊都岐島
加茂川となる雫する若葉哉
蚰蜒の早住ふるす若葉かな

竜田にて

われ見たり青葉にも染む瀧(竜)田川

夏木立　下闇　茂

行燈を馳走につるや夏木立
下闇へまな板提て這入けり
下やみを露にも持や一盛り
好もしき下やみもあり旅の空

網見せて友達まねく茂り哉

若楓

細川家の別邸なりし戸越の一構
にいざなはれて行ぬ。およびを
かゞむれば四十有余年の再遊に
ぞ有ける。

其まゝで松にあやかれ若楓

麥秋

跡もどりして宿かるや麥の秋
麥秋のうつりの黄ばむ野松かな
旅空やけふも出ぬけぬ麥の秋

米嚢花

迷惑なとゝけもの也芥子の花
種えらみした甲斐もなしけしの花
芥子の花けふ二篇(遍)めの盛りかな
用心に伐添た芥子散にけり
貰ふたが不丁管なりけしの花
散た芥子跡のゆるりと見ゆる也

玉巻芭蕉　葵

玉をまくうちもあぶなきばせを哉
加茂川や結んで見れば葵草

棕櫚花

棕櫚の花葉にさわがれて哀なり

百合

百合一寸のせし埃りや笠のうち

信陽遊峠

切たのを置日かげなしゆりの花

夏草　空豆花

夏草を花さくものとしらざりし
蝶に雨うき空豆も花ざかり

杜鵑

待ものとおもひ定めつほとゝぎす
時鳥なかぬきのふは待ざりし
山路來て其日も過てほとゝぎす
木に鳴て啼ずに飛ぬ子規
聲捨よ〳〵ひろはん不如歸
なくなかぬにはかぎらじな蜀魂

錦帯橋

一橋に一夜づゝなけほとゝぎす

閑古鳥

二羽となく日もなけれども閑古鳥
人ひとり見付てなくやかんこ鳥
羽音して鳴ず止けり布穀
住うともまだ定めぬにかんこ鳥
かはる日を閑人ひとりに閑古鳥

老鶯　行々子

黄鳥の連になりけり老の坂
世話しいはしれた月日を行々子

鵜

かくれ火の山に明るき鵜船哉
草先を鵜の影ほうの登りけり
鵜の篝朝あらしとぞなりにける

鰹魚

明ほのは夏の花なり初鰹
手奇麗な提やうをする松魚哉
もてはやし過て朝經しはつ鰹
引さげて量欠ぬく松魚かな
鰹見てはつきりとする寐覺哉

螢

瀬田こえて旅へおもむく螢哉
山川や見えぬ螢の影うつる

蝸牛　蚤

売になる無常もありて蝸牛
逃る蚤高い椽から飛にけり
飛蚤の事ともせぬや向ふ風

蚊　蚊遣

父なうしなひまゐらせて
御影像の蚊を追拂ふ泪かな
早船に漕すてられて鳴蚊哉
此庭やよその蚊遣の通り道
松山に焚込である蚊遣哉
酒肴より急にいふ蚊やり哉

五月　端午

深山木の底に水澄五月かな
孫六が太刀の銘きる端午哉
侍になつた子の來る端午哉

幟　粽

押立て見れば程よきのぼり哉
震ふ音のみで木深き幟かな
ゆで上た色を粽のさかり哉
穂か花か出さうに見ゆる粽かな
ほどきや〳〵とくちまきかな
壳の中ひとつ實のある粽かな

競馬

鞍馬をも蹠こしさうな競馬哉

五月雨

湖へ不二を戻すか五月雨
一隅も晝の空なし五月雨
五月雨せんかた盡て馴にけり
桃灯の底ぬかしけり五月雨

五月闇　帋が雨

簾かけてかくしてあるや五月やみ
帋が雨田のよろこびと成にけり

菖蒲

月遠し折角さした軒あやめ
あやめ草切よとひけば延にけり
腰老て二重に廻るあやめかな

鵲翁が新宅を賀す

軒ふかく根はかたまりぬあやめ草

田植

親子して二日植たる山田かな

呂叟が松島行脚を送る

旅は日さへわするゝものぞ田植唄

早乙女

早乙女となれば若やぐすがた哉
早乙女や家毎に出て只二人
早乙女の來て給仕する泊哉
二三ばい早乙女渡す艀かな

竹植

植た日のむかはり竹に來たりけり
植續て去年の竹の掃除かな
しるしして留主也竹の植どころ
竹植ぬ山の影さすあしらひに

合歡　樗

降ぬにもおとつた雨やねぶの花

合歡の陰帶仕直しにかゝりけり

日の前の雲すわりけり花樗

青梅

難波津や青梅見てもなつかしき

苔花

西行の茶碗につきぬ苔の花

口を經るやたゞ苔の香の苔の花

神路山

杉の香や一かたならぬ苔の花

萍　藻花

浮草のうかしておくやおのが花

引よせたのは花もなき浮藻哉

撫子　紅花

撫子に日すがら遠し浦の山

いたづらに抓みて見るや紅の花

十藥

十藥や夏のものとて花白し

鹿子

鹿子はや峯に立事覺えけり

水雞

朝しばし日和の水雞鳴にけり

風ほどは水雞もとはぬ柴戸哉

庭つくや水雞の小田も繩の内

聞かたに夜晝のあるくひな哉

浮巣　輕鳧子

親鳥のかちわたりする浮巣哉

かるの子や水見覺て浮に行

蟬

板の間にへた〳〵寐るや蟬の聲

六月

六月や事もなげなる日枝の山

北國紀行

六月や音には波も有磯海

氷室

明りさすさへ氣遣ひな氷室哉

暑

暮すてゝ其日〳〵の暑かな

飯時を子にすねらるゝ暑哉
暑き日や葉虫みだるゝ軒の竹

涼

涼しさやすゞめとせがむぬしもなく
すゞしさや苔へわたるも石傳ひ
涼風に氣のつかぬ迠すゞみ皃
暮過や人の納涼を見て通る
來ぬ人のかはりに涼むゆふべ哉

加茂川

すゞみけり家鴨を陸へ追上て

丸亀旅亭

涼まずに居てさへすゞし千ゝの波
土くさくなるまですゞむ莚かな
月涼し袖に吹込鳰の聲

四条川原

またがねば祇園へこせずすゞみ臺

風薫

薄月やすれあふ人に風薫る

深山木も人と見なさば閑なるべからず、陋巷も仙蹟とおもはば安かるべし、偶、水鶯家を訪て

塵の奥の青空あをし薫る風

夕立　雲峯

夕立の二三日めぐる埜かな
雲のみね淡路の右とひだり哉
波みれば出たあともなし雲のみね

清水

たまる迠待ちからなきしみづ哉
泡にして百粒流す清水哉

祇園會

暑がるゝ祇園まつりの愛相哉
鉾済や流るゝやうな人通り

土用

岡本氏水楼

あら海や磯の芥を土用掃

心太

賣きれて埜にもなし心太

灯取虫

灯とりむし腹あらはして居たり皃
筑波根もこゑよと投つ火とり虫
くらがりを鳴いて通りぬ灯取むし

青田

小松川にて

五畿内で名の通りたる青田哉
風と成てみな江戸へ入青田哉

蓮

蓮の後曙の夏なかりけり

風雅の間に一物あり、名付て神といふ。森羅萬象の宗なり。俳諧にやどりて正風と現ず。

花もさかず蕾も咲ず蓮の花

晝皃

ひる皃にしめりの行ばしぼみ皃
ひる皃を跨だ裾の雫かな
晝皃の朝さく秋のきざし哉

御祓

灯に通ふのみの風ある御祓哉

茅輪

通れともいはでくゞらす茅輪かな
茅の輪から見ゆるも常の紙かな
我限でくゞり仕舞の茅の輪哉
出迎ふや茅の輪の先の秋の山

朗詠

蘿風侯の庭園にて

打水のきかぬほど也夏坐敷

田家にやどりて

灯もとらぬ蝶迠舞や小くらがり
苅てまで麻につれ添蓬かな

鳳朗發句集 下

秋の部

立秋

そも／＼は秋も闇から立そめぬ
秋立やまとまりかねて少しづゝ
萬代の秋は立けり日の御門
心のりばかりの秋の立にけり
蚤取てゐれば秋たつ衣かな

初秋

今年夏はつる日は丁度水無月晦日に當れり。明るあしたとく起出て

初秋や朔日をさへ見しりなき
宵朝と來て初秋と成にけり
はつ秋やたゞ近付の空と雲
初秋にふかれて泡の流れけり

殘暑

今朝秋にうつりしときく暑かな

稲妻　秋聲

稲妻に追るゝ瀬戸の夜舟かな
稲妻や草に珠數くる僧の皃

甲州谷村の西に白瀧といへる有
蕉翁此地に遊びていきほひあり。
氷柱消ては瀧津魚　其角讃、某が
家に祕藏す。予も是に倣て

いきほひの稲妻けすや瀧のおと
稲づまの所定めぬ夜は寒し
すれあふや草にはじまる秋の聲

七夕　天川

棚ばたや近頃にない夜の雨

羇旅

棚ばたや馬かすほどはへだゝらず
夜中にも見つくろひけり星の空
星合をきのふがましや男山
事なけに雲のわたるや天の川

雨なかなしむ織女にかはりて

月の出る山さへ見えず銀河

魂棚　魂祭

魂棚とのみ見て過す月日かな

有とある常をあつめて玉祭り

魂の坐に露は直らせ給ひけり

燈籠　草市

簑笠の向合につる燈籠かな

めぐらせばよそほひのつく切籠哉

まぼろしを賣ちらかすや草の市

施餓鬼

七月十六日吉原の驛より伊豆の國にさかふ浦々の限り、浪打際に數千の篝を焚て、海上に命をあやまり、底の藻屑と成し、ゝの跡を弔ふとて、濱施餓鬼といふ事をするを見て

施餓鬼火や不二を屛風に駿河濱

踊

くらがりへ休みに這入をどり哉

水の音踊たあとへ戻りけり

踊子や兒月になり闇になり

扇・團扇置

餞別

扇より二日もはやき別れかな

捨際もたゞでなくなる團扇哉

露

白露の果はこぼるゝばかりなり

光明のさす露もあり露の中

明石の一香子泉下に去給ふと告來しける。封めも切あへず

あわたゞし百里をしぼる袖の露

秋日　秋夜

さかしまに空ひく秋の日ざし哉

秋の夜のこゝろをほどく焚火哉

秋風

月と日の向合に出て秋のかぜ

常に吹ものとはなりぬ秋の風
若き時も吹はふきたれ秋の風
しばらくは日にかくれけり秋のかぜ
秋風の長き寐覺に餘りけり
秋の風火でも水でもなかりけり

源の直義、波にてる日はつれなく
もとよめりけるを思ひ出て

蚊柱に秋風きくや須磨泊

秋水

窻の灯の際から深し秋の水

槇の原より大井川を望みて

谷形りに空のたゝえて秋の水

冷

身はぬれ紙のとり處なき

冷つくや袷の下の旅の垢

桐一葉

書ものもなくて捨けり桐一葉
たゝまつて雨水やらぬ一葉かな

散柳

秋中に果さうもなしちる柳

木槿

官をやめる心ざしなりて、道ばたの木槿と聞えし晉翁のいましめにならふ。

かくれ家や馬もしらざる花木槿
つゝがなく木と成とげしむくげ哉
跡を捨〳〵さく木槿かな

稲

酒折宮

苗取て夜には幾夜ぞ稲の露

朝皃

蕣の朝でない日も出ざりけり
朝がほやいく朝見ても咲ばかり
あさ皃の葉のうるはしや花の側
朝がほの氣遣ふほどに傾ぎ皃

活やうの祕事とて人の傳へけるこ
ろ

蕣の水揚て咲てしほみけり

朝がほやおのが蔓では咲たらず

藤袴

當させにつかみて出るや藤ばかま

女郎花

すこしでも長う折たし女良花

おろ〳〵と立や嵐のをみなへし

花と花の間ひも黄なり女郎花

澤山な心地はせぬや女良花

月に立ぬ暮ると見えし娘へし

芒

うちふれば蟷螂のもどる芒かな

夜はもとの通りに揃ふすゝき哉

痩たれば名のつり合ぬ花薄

二見の浦にて

折しけば扇に似たりすゝきの穂

都の旅寐にいみじきなゐふりにあふ。人屋破れ橋落などしけれど、我も人も身のわざはひなし。是や又君が代のかたじけなきひとつならんかし。

ゆりすてゝやすきにかへる芒哉

おのが葉のさゝえてかたくすゝき哉

萩

日の影の萩よりしめるゆふべかな

もと〳〵へ寐せて起すや椽の萩

探題に高臺寺といふを得て

過去帳に定まつてあり萩苅日

ひとゝせ余りの旅がへりに、留主もる呂叟がまめやかに草一葉あれまさぶりければ、心よく長途のつかれをやすむ。

寐處に蛛もたからず露の萩

荻　雀參

七月晦日、松橋の浦邊に夜遊す

しらぬ火やひとつ消ても荻の聲

かるかやゝ尋過ては見つからず

桔梗

提た手に桔梗の開くひゞき哉

白いのにふいと見當る桔梗かな

中明て見たき桔梗の莟かな

草花

ゆれるのか匂ふでもなし草の花

草の花錦と見ればさわがしき

草の花折にかゝればをるもなし

芭蕉

夜の葉の傘おどろかすばせを哉

糸瓜　秋茄子

日につれて縮まりもせぬ糸瓜哉

實ひとつに色せまりけり秋なすび

番椒

唐がらしまづしき色はなかりけり

けなげにも泪さそはす唐がらし

蟋蟀

折〳〵はまたれてもなけ蛬

傾けば晝の月にもきり〴〵す

鳴うちはかへつて隙歟蟋蟀

長鳴がすわりになりぬきり〴〵す

松平四山子、竹をわりて一絃をすげ、さま〴〵の和歌などに曲節をものして彈ぜらる。其音瀟にして簫瑟たる事妙にわたる。

須磨琴の裏こゑ更せきり〴〵す

秋蝶

黄ならぬはまことしからず秋の蝶

雨やどりした儘飛ず秋のてふ

かくれもし出て飛もして秋の蝶

秋蟬　蜩

手のいたみに勞れてしばらく午睡するに、行脚一人來りて蕉翁の像を乞ふ。圖出來て高吟を書んとする時夢さめたり。

時雨ゝと見しは夢にて秋の蟬

蟬といふせみ蜩に成にけり

秋蚊　蚤

残る蚊や蚊にもまじらず一ツづゝ
ぬれさうなもの降かゝるいなご哉

鴫

己が影さすともしらず草の鴫
立鳴の引残したる流れかな

鶉　鵙

處ではなくともいはぬ鶉かな
一聲の鵙に引たつゆふべ哉

鹿

鹿に指さす間に暮る尾上かな
立鹿に虹の片足かゝりけり
空さまに立のぼりけり鹿の聲
鹿なくや今にと語る口の下
立添や鹿にひとむら芒の穂
聞にけり笛にも一度鹿の聲
礒山を日のさす鹿の傳ひけり

治れる御代のありがたさは

鹿聞や傘さして下駄はいて

案山子　鳴子

今立たかゞしにもあるゆふべかな
きら〳〵と音に日のさす鳴子哉
引ぱつたばかりに騒ぐなる子哉

八朔梅

八朔はけふかきのふ歟梅の花

初月

初月や藪になれとは植ぬ竹

待宵

こゝろみの名月すめり前の宵

今日の月

ぎつしりと空にはまりぬ今日の月
居こもればひとりのうれしけふの月
有明もせぬ立派さや今日の月

名月

名月のぐるりの空やうや〳〵し
名月に一足よれば木の間哉
名月の枝うつりする山路かな

名月やけぶりて仕舞夕明り

名月といふ迹もなき今宵哉

名月や月夜と迹は眼も及ぶ

名月やむら雲ひとつ見殘さず

名月や草には草のすみだ川

魚眼射レ涙紅なりとは、此山の
ゆかりを賦せろよしなり。

名月や玉ある阿蘇の後より

めい月は秋をもらさぬ夜なりけり

名月雨

名月や雨ふればこそわすられね

雨の中名月一寸こぼれけり

名月の雨さへたぐひなかりけり

秋月

はじめから夜毎つゞきて秋の月

おどろくや旅でもあはぬ秋の月

一夜さの十五夜ならし秋の月

仲秋無月

耳底やみなぎり流す秋の雨

晴をまつたのしみ出來ぬ月の雨

月

すみだ川を棹さし　りけるに、
夕汐に向ふてはかゞしからず。

待宵をあすに氣のせく月見哉

仲秋の淸光近頃に覺えたき今年
なりけり

見明さん人にもかくと語るほど

新月

蚊のうせて夜の奇麗な木の間哉

月を待手は揃ひけり四ツの海

歸庵

小車や巡りをうせて月に逢

川べりに灯を釣月の遊びかな

うれしさにいらぬ水くむ月夜哉

(狹)挾むしろへ取次月の手紙哉

見るとなく見て居る月のかたぎ鬼

隣りでも月が漏との寐聲かな

一香子を悼む

素よりや眞如の月の明石人

十六夜

いざよふを待ひまもなし秋の月

十六夜やくらしと迄は見もとめず

いざ宵や待て日暮てもどかしき

十六夜の雨といふ題にて

くらきにもいざ宵はあり傘の下

星月夜

季節をいれずして秋の句せよと
いふに

星ばかり出ても闇夜はなかりけり

ものいはぬ神輿うつしや星月夜

長夜

さむしろにはれものいたむ夜長哉

なま中に耳は聞えて夜の長き

夜寒

よき香さへあれば夜寒き衣かな

かけろふの巻よみかゝる夜寒かな

夜寒さや鳴してわたす納屋の鎖

人聲の處のしれぬ夜寒かな

獨りほど夜寒きはなし五位の聲

何ぞからこぼれたやうな夜寒哉

野分

熊谷の堤でたるむ野分かな

あやにくに月の出て居る野分哉

秋夕

十重廿重笠のぐるりの秋の暮

無事問ば無事とこたへて秋の夕

秋のくれきのふの息もつきあへず

蚌と皃見合せて秋のくれ

秋の暮あまりの事で苦にもせず

蝶にのみ日のさす秋のゆふべ哉

砧　新酒

似た音の添てふけ行きぬたかな

うつ音に陰日向ある砧かな

はじめから跡振て見る新酒哉

落水

門行を見ればはづかや落し水
干川迸出た跡はあり落し水

木犀

長崎客舎
木犀や麝香鼠の通ふ壁

柿　梨

同所聖堂の侍に去來が住ける跡とてあり。落柿舍の事などおもひ合す。
柿の木や嵯峨のむかしも忍ばるゝ
人の來て語れば落す夜の柿
庖丁の手のうち見せん梨の露

蕎麥　松茸

上毛吾妻郡を經て
更科を隣に白しそばの花
梵論〲に逢たばかりや蕎麥の花
松茸やほる嬉しさに疵付し

鴈　渡り鳥

はつ鴈のよそへ〲とわたりけり
いつになや起て居るうち渡る雁
鴈なくや訪かへしても和歌の浦
雁の來てしまふた空の青さ哉
今來たも見わかずなりぬ鴈に雁
ついそこで鳴やきのふの天津鴈
そく〲と影の通るや渡り鳥

菊

朔日はまちもせねども菊の花
菊見よと驚かされし九日かな
菊の香のしづめ課せし埃り哉
菊提た手の小半日匂ひけり
年久し同じ株から菊の花
岡崎や大根の中のきくの花
脊の高き菊作りけり松の露

紅毛人旅舘
硝子の障子も寒しきくの花
丈と葉にのみ菊肥て果にけり

后月

後の月心細さに見明しぬ

青空の押えて居るや後の月

等閑におもふな月の後の月

池いまだ古くもならず后の月

木母寺茶店

此木の間誰もしらぬや後の月

御遷宮

文政午年九月神風の伊勢に旅寐して

御迁宮只ゝ青き深空かな

太ゝや蒼人草をからにしき

紅葉

道かへて我からぬるゝ紅葉かな

友よぶに聲うけのよき紅葉哉

簗守に戻りをちぎるもみぢ哉

ことはれば鐘もつかする紅葉哉

牛馬の鼻でおしやるもみぢ哉

戸隠山下

橋の名になつて折れぬ紅葉哉

やごとなき御館の人々船場まで旅送りしけるを、うしろになしたる心のわりなくて

見かへるにあまる名残の紅葉哉

祖翁の尊號をかしこみ奉りて

神の戸の開き時なり野は錦

末枯

うら枯や布施の魚買小商人

末枯や京をわすれし東山

行秋

行秋のけふに成ても秋のくれ

行秋やひとり轆轤の幾廻り

秋名殘　風爐名殘

病中

うき秋の暮さへけふの名殘かな

春雀侯草堂を訪せ給ひける時

沸音の時雨を風爐の名殘哉

九月盡

さりげなや大根畑の九月盡

　　前詠

咲花を秋の凋めて廻りけり

　　むかしより名もなく、いとちひさき虫の、葎の底にあまた鳴あり。其聲の一ッ處にちりて空に響き、さものどやかに聞ゆればにや、近頃世にもてはやして草雲雀と呼はじめけるぞをかしき。

野を花に秋とはいはじ草の春

山付に見處多し八九月

綿弓や板でもさける秋の聲

　　天目山懐古

水音やゆゝしき秋の草の果

雁鴨の來ぬ先からの耄覺哉

　　賀

鳫鴨の影くみかはす祝ひ哉

冬の部

　　初冬

はつ冬の山〳〵同じ高さかな

　　神無月

多いものは日暮ばかりぞ神無月

赤〳〵と礦山兀て神無月

　　小春

膝のぼりするや小春のきり〴〵す

狼の子を祝はるゝ小はるかな

　　冬日　冬海

冬の日もまた白菊の明りかな

蒼うても枯ぬけてあり冬の海

　　亥日

御玄猪や鼠の巣にも明りさす

疱瘡神のねだり事いふ亥の子哉

　　時雨

定めなきものなればこそ初時雨
われをよけ〳〵してはつ時雨
日の早う暮たばかりぞはつ時雨
箒心に存分降りぬはつ時雨
なつかしき文見つけたり初しぐれ

時雨會

今日にあふのみか旅して初時雨

小夜の中山にて

蓑ほしと石も今日泣けはつ時雨

時雨

降らぬ日の猶定まらぬ時雨哉
分けあふたやうな時雨や少しづゝ
起出る間に音絶えし時雨哉
しぐれ川水の覺えに曲りけり
時雨するほどは間もあるゆふべ哉
延た夜にしては甲斐なき時雨哉
しづ〳〵と來たのにぬるゝしぐれ哉

東盛寺を桃青寺と書る古圖に題す

うたがふなむかし時雨し月の松

時雨會

いたゞいて硯ならぶるしぐれかな
深川の豆煎噺時雨けり

花本大明神贊

なべて世は留主なき神の時雨哉

木枯

凩や大和の地にもとゞまらず
木枯の水海くゞる響きかな
根つよく木がらし不二に當りけり

冬月

山伏に並ぶ春はなし冬の月
大灘に眞中のあり冬の月
冬の月空なき空にやどりけり
我眉の日にかゝる也冬の月

寒

手にふるゝものよりうつる寒さ哉
寒いのも寒さこらゆるちからかな

寒さうで脊もあてられぬはしら哉
水引やとけぬ寒さを箔のちる
いはぬ日もなくて親しき寒哉
あまりにて日も出兼る寒かな
しのがれぬ寒さや後も先も闇
口あてゝ吹てもさめず手の寒さ

枯野

鳴に出て居るや枯野のむら雀
物しばし匂ふて止みぬ枯野原
春抔が立さうもなき枯野哉
ゆふ日さす枯野の高み低み哉
見たほどは踵もさゝず枯野原

冬籠　冬構

眼ごゝろの不盡を小徑に冬籠
一ぱいに日のさす屋根を冬ごもり

多くの人を深山木にといひけん、こゝろにくし

冬ごもりわれをあるじにしたりけり
僻時に山の笑はん冬がまへ
うぐひすの好にまかせむ冬がまへ

火桶　火鉢

常人と住にはまさる火桶かな
籠いれて浮世のとれし火鉢哉

埋火

うづみ火に庵預けて寐たりけり
埋火の灯をつゝむくもりかな

炭

ともをれやうたれし炭とうちし炭
炭こへば火をほりにくる宿屋かな

榾

燒をれて二本になりし榾木哉
ひる焚ばうは烟りする榾木かな

蒲團

爪先で裾卷こむやうすぶとん
ぬくもれば懷もあるふとんかな
出す音のどさりと響く蒲團哉

枚方の朝日をはたくふとんかな

納豆

抑のも馳走に間す納豆かな
嵯峨ふけて納豆うつや一所

鞁

鞁とまで身を旅に捨にけり

十夜　御取越

炭つかみ行や十夜の人の臭
親船に内客のあり御取越

夷講

えびす須の讃

海原を臺所にしてえびす構（講）

霜

鉧うつ槌のひゞきや軒の霜
瓢の音霜夜は妙を出しけり
花ほどはあはれのしまず霜の鐘
霜の華廿九日をはじめかな

霙

傘さしてやるや鰒さく夕霙
さら〳〵と烹よや霙の小豆粥

雪

初雪と見る間につのるあらし哉
はつ雪の降て居にけり明る朝
初雪やあぶればしめる小風呂敷

豊見城王子來貢の折ふし、雪のしきりに降ければ

初雪や不二でもてなすうるま客
積にけり消る力のなき粉雪
あぶなしや海へかたむく雪の山
二日路といふや舳先の雪の山
ほち〳〵と雪うつ雪の雫かな
雪のうへ乗て見たれば乗られけり
雪の中の雪見付たりひとつ松
跡へ二里先へ三里や雪の暮
なさけなく門さす雪の詠め哉
ひとつづゝ窓があるなり雪の家

起さねば飯のはてぬや雪の客
雪の人行暮ふりに見ゆるなり
淺草の眼當や雪の本願寺
大雪のつみ殘しけり腹のうち
ない事のやうに來ていふ深雪哉
あかるさに蝿の出て行深雪哉

朗詠

もめあふて雪も時雨も來ぬ日哉

病中

よそ事にへがたく見ゆれ雪霰
氷見て雪をぬくしと思ひけり

氷

駄荷もけさ起た沙汰ある氷かな

橇

橇や女子がはけばはしたなき

散紅葉

よく見ればちる影もちる紅葉哉
ちるちからついて日のたつもみぢ哉
黄ばまずに散日のたつ紅葉哉

落葉

一日南あてゝ屋根はく落葉かな
神事も過て夜の澄落葉哉

東灯住庵

名のないはひとひらもなき落葉哉
鳩などのぬけ羽もいぶる落葉哉
夜すがらや落葉の音にそふこゝろ

閑居

みの虫の無事を問るゝ落葉哉
老とのみ見らるゝもの歟落葉掻

木葉

ふる木の葉東しらみになりにけり

桑門契月、新庵ひらきけるに、
くだものにそへて送る。

たち花や木の葉の色にまじはらず

復花

かへり花今年はじめて咲木かな

たのまれぬ葉に并びけり歸り花

祖翁の遠忌に當りて神號を給りける有がたさを、伊賀の連衆に告まほしう立寄ける時、塚の御前にすゝみて

隱るれば葉まで明るしかへり花

枯柳

入らぬ枝は一筋もなしかれ柳

傾城に枯て見せたる柳かな

枯たれば暗くもしたし門柳

冬梅　冬椿

恙なや梅見ぬ里の冬の梅

冬の梅義理にせまつて折にけり

贈二高木先生一

しる人に先一枝や冬のうめ

日の本や梅薫らずば冬しらじ

冬椿みな白かれとおもひけり

枯尾花

かる〳〵とした日和なり枯尾花

散はせで舞て仕舞ぬ枯尾花

芭蕉忌

夢を穗に殘して枯し尾花哉

鎌倉よりかへる道のほど

川べりはまだ相摸なり枯尾花

枯菊　枯萩　枯荻

白菊やおめずおくせず枯かゝる

野の冬の序に枯つ庭の萩

聲はまづありのまゝにて荻枯る

水仙

水仙の寒さかぎりを咲にけり

根あぶりに水仙下る御次かな

水仙や撰退た葉も無疵もの

水仙や花好な子の手もつけず

大根引

たび人の國ほめ行や大根引

千鳥

啼やむに夜一夜かゝる千鳥かな
羣て居て慾に友よぶ千鳥哉
聞てさへ居れば夜明る千鳥哉
先一つ來て種となる千鳥哉
千鳥聞く家も三ツ四ツ五ツかな
ちらほらと晝來たきりや川千鳥

水鳥

水鳥の闇の出口や八軒家
水鳥や兵追し兒もせず

鴨

鴨のなく聲よりうへの月夜哉
言付た迎ひの來ぬや鴨の聲
暗がりや鴨鳴方の北らしき
見たよりは松山淺し鴨の聲
小一時門たゝけども鴨の聲
鳴ぬ鴨ばかり晝つく門田哉

病床、夜に倦

折〳〵や唯近付の鴨の聲

鴛鴦

をしの羽音しのびやかにもなかりけり
妻をしの影さす鴛の横身かな

鶺鴒

尾の聲歟頭の聲歟みそさゞい
みそさゞいこけたやうにて居ずなりぬ
物おそれしてしほらしやみそさゞい

木兎

木兎聞て逃て來た木兎鳴にけり
木兎や明るい方が聲の裏

河豚　生海鼠

河豚さげた供も連たし旅の空
ひつぱれど一分も延ぬ生海鼠哉

杜父魚

杜父魚のやすげな腹や空ながめ

網代

かみ下と一年置の網代かな

夜興引

喘すには手品もいるや夜興引

冬至

行水のゆくにまかせて冬至かな

待て居て忘れてゐるや冬至の日

神樂　御火焼

くらがりを面の見て居る神樂哉

をし鳥のふすまもかさず小夜神樂

御火焚や鎌倉山は星月夜

顔見世

顔見せやまぎれぬものは天の川

鉢扣

東都へ修行に鉢叩の來りければ

はちたゝき眞似て見たればさわがしき

鉢たゝき池を廻らば案内せん

鷹　鳥叫

區〳〵や鷹の日和を鶴の聲

鷹あれて雪の袂と成にけり

鳥叫びや海へ吹込む星明り

暖鳥

わりなしやことし巣立の煖鳥

並〳〵に朝餌拾ひぬぬくめ鳥

寒入　寒月

家並に精進するや寒の入

寒月や庖丁ひろふ納屋の門

寒月の燃付もせぬすゝき哉

寒梅

寒梅やをればほつきと手にひゞく

老病快然

寒梅や雪洌ちらす枝ちから

乾鮭

乾鮭の塩引わらふ眼口かな

師走

下駄の歯を蹴欠て戻る師走かな

雨二日師走の宵寐まうけたり

節季候

節季候のにくまれいはで殊勝也

大千世界中の三大都會にて日本

の武府第二に位すとかや、實に
もさる事ならん。

節季候や隅田渉しても二三杯

煤掃　餅搗

煤掃て休て常の掃除かな

形のよき餅ひとつなき莚哉

大黒の槌ふり上たるに讃す

やよ拾へみかん橙年の餅

來ぬ筈か仕似せにならぬ餅の札

豆打　挿柊

豆うちや初手一聲は咳ばらひ

くらがりを相手や豆をうつちから

手ざはりや蒲團の下の鬼の豆

さし柊無理に枯葉と成にけり

年忘

壁ごしの鼾とふたり年忘れ

顔子にならふにあらねど

年を先あとは急がぬ忘れ事

如息侯にて當坐

梅はとく年を忘れて見ゆるなり

年市　年取

ふと買て無用な笊や年の市

庵中

ほちりとも鳴らず年取炭火哉

門松營

松賣がまけに餝りぬ庵の門

年暮

年の暮二度たつ用もなくて濟

老後の月日一瞬にたらず

手のひらをふせて休めて年の暮

一跨年の暮からとしのくれ

朗詠

椎樫やえり殘されて枯もせず

梅迠は待課せけり年のうち

雜

頂の白ければこそ不盡の山

大空のとりまはしけり不盡の山

松島やこゝろさぐれば夢ならず

はしだてのなくば見られん与佐の海

銅山

棧や雲も柱の片相手

鳳朗老師は近世俳場の畸人にして、行跡は我浮居にたぐひし、精神は老莊の無爲に遊ばしむ。かゝれば作ゝ自然の新奇、凡眼の見る處を異にし、俗耳の聞をよろこばしめむとにあらざる事尤しかなり。たゞ心月の光りと德華の匂ひと、五七五にこぼれ出づるものならんか。

護持院權僧正梧靑 有盛

蘭洲島鷗書

惺庵西馬 編

可布庵逸淵
梨雲舍萑翁 校合
卽事庵詠久

訂正

蒼虬翁句集

上・下

希世の名玉もみがくことおろそかなれば、共うるはしき光を見がたし。いはむや瑕をおはせ泥をぬるにおいてをや。さきにあらはせし對塔庵句集は、老師蒼虬世にいませしとき、人〳〵の乞求るのしきりなるに、ひとつ〳〵荅ふる事のわづらはしとてをしへ子等に託し、庵中の書記どもよりひろはせて木にのぼしたるものなるを、老師迁化の後はいよ〳〵かぐはしき名の遠近に聞へわたれば、四方のすき人この集をきそひもとめつゝ、これや今の世に蕉門正風のよきのりにして、すゑの代かけしよきかゞみなりとたふとみあへり。さる中にも殊に此道にふかくこゝろざすともがらは、此集に書あやまりのさはにて手爾を葉のたがひたるを恨み、またはよき句のもれたるををしみつゝ、おのれにせまりてたゞし改む事をほいす。おのれ日頃老師にしたしくをしへをうけ、さきにこの事にもあづかりながら、かゝるあやまりを後の世に殘さむ事、常に心おだしからねば、ことし冬籠の机によりて同じ心の友どちをかたらひ、そのあやまりをかうがへたゞし、もれたるをくはへ、うたがはしくまたはおなじさまなるをはぶき、やがて木にのぼせてさきのとがをあがなふ事とはなりぬ。されどかの玉をみがゝむとしてかへつて瑕をおはせたるかも。後の人たほよくみおきて光をまし給むことをいのるにこそ。

弘化丙午仲冬　　　平安　青厨舎梅通　謹誌

傳

蒼虬翁は成田氏にして加州の藩中高錄（祿）の士なり。天性大量、和克雄偉にして若きより弓馬の道をきはめ、かたはら俳諧をたしみて闌更を師とす。故ありて仕を辭し、洛に入るの後師が終焉にあひて、遺旨にまかせ東山芭蕉堂を守り、南無庵にあるじす。のち退隱して八坂のさとに對塔庵をむすび、老を養ふ。そも〳〵俳祖芭蕉翁、此國に自然にそなはれる風雅の道の中頃よりせまくなりたるを歎き、萬葉集の趣をうつし、俳諧に正風のまことを入れ、俗談平話を旨として風雅を弘く都鄙におよぼし給ひし處、迁化の後門下の高弟或はみだりに變風を好み、あるひは

俗談に過て野卑となるなどさま〴〵にくだりしが、さすがに十哲の人〴〵は正風の微旨を失はずといへども、其門葉支流に至ては、たゞ一癖を傳るのみにして次第におとろへ、のち百年は此道絶たるが如し。さるを安永・天明の頃、洛および尾張・加賀に名哲競ひ起りて專ら蕉門正風をとなへ、諸風士を導くといへども世の人たゞ俗談平話を輕しめて、累年の弊風をあらたむることかたし。ゆへにかの祖翁が開發の始に倣ひて、春の日・冬の日などの高調より導かんとせしかば、おの〳〵一世に本意を達することあたはず。ひとり虬翁長壽をたもち、しかも名吟海内に響きて、發句の姿は青柳の小雨にたれたるが如く、附句は薄月夜に梅の薫れるが如くなどしめされし祖翁の骨隨を得て、終に天保の始より虛を設け、詞を餝るの弊風を改め、日前平話の正風をあらはし、諸師の本懷を達し申されける。されど天年限りあれば天保十三壬寅とし彌生中の三日、八十三歲にて滅み對塔庵裡にしめす。なきがらは二条の東妙傳梵刹のうしろに隱して、かたばかりなるしるしの石は苔むすとも名は千載に朽ずして、實に蕉門中興の祖師と仰ぎ稱すべく、また有がたき翁なるかな。

蒼虬翁發句集（上）

春之部

柴の戸を左右へ明て花の春

しら雪のすゑより見えてよもの春

元朝やよつにたゝみし帋衾

元日や峰をさだむるひがし山

古稀の齡をかさねて

ひとつづゝものなつかしやけさの春

高田の旅寐にとしくれければ、五智の人〴〵に迎へられて坂木小林何がしがかたにやどる。このあたりは旧府にして、いにしへのさまもしのばるゝに、今は北陸のちまたとなりて古鄕入の往來も多く、ことさら此亭は國の守も休らはせ給ふとかや。かゝる所に春をむか

ふる事のひとかたならずおぼえはべりて、けさはひとしほ大路のさまもなつかしければ

旅人に盃さゝむ花のはる

ことしは隅田川の流に手洗ひ口そゝぎて、よろづ心のまゝなる春を迎へて

箱根ある事もわすれて花の春

一聲の姿も見たし初がらす

備中の玉島にて

太箸の嬉しさしるや草枕

太箸をふとしと思ふひと日哉

持て出て夫に並ぶ雜煮かな

蓬萊にしばらく向ふ夜明かな

蓬萊の橙あかき小家かな

この雫にまづつゝがなし福壽草

ひと雫するや朝日のふく壽草

しほらしき根の薄氷や福壽草

己がなまりのぬけたるにはあらねど

古さとは同じ聲なる御慶哉

雪花も正月らしや膳のうへ

万才のうしろ見かけぬ智恩院

萬歳のまづ作法ある扇かな

万才や堤を通る高足駄

万才のことしも譽る柱かな

柴さして置けり雪の下若菜

手にとれば松風わたるわかなかな

犬ひとつ先に立けり若なつみ

甚五郎も出て來てはやす薺哉

雪花や薺子の日のはる永き

西東飛ぶ鳥多き子の日かな

ちさきほど松はめでたき子の日哉

見世先をかるや松引身ごしらへ

ちよつとした煙をたてゝ小松引

若中や日に／＼人のむつましき

わか草の志賀も過しぬ舟の者

黄鳥のよき開場なり池の面

鶯やおどろを潜る身のほそみ
うぐひすの骨折きくや桑ばたけ
黄鳥の引て出たり田毎の日
日馴るや鶯垣のうらおもて
鶯の鹿相や笹葉踏はづし
うぐひすや去年の初音も此あたり
黄鳥の踏で行けり小かはらけ
うぐひすやさゝ啼交る蛭づたひ
鶯の川浪かぶるところかな
黄鳥の心も見ゆるはつ音哉
うぐひすの手がら顯たり聲の隙
鶯や隣まで來て隙の入る
うぐひすの夕啼聞や朱雀口
ひと吹雪黄鳥こゆる堤かな
ちか〳〵と鶯きくや船の窓
（題）金貝屋にて
鶯や裸まいりの行木の間
眞中に窓ある家や梅の花

山水の走りとまりやうめの花
島のうめおよそ一里といふ處
人の見るが表なりけり野路の梅
すくなきは庵の常なり梅の花
山里や梅の咲日もあればこそ
大日枝や小日枝の下の梅の花
折かけて人呼で居る野梅かな
家に添ふた跡もあるなり岨の梅
大空に近いけしきやうめの花
山間や白梅すこし家すこし
しらうめやまだ風あらき岩の注連
春の夜のみじかくなるも梅の花
梅が香やよその夕暮先見ゆる
近よればまばらに成ぬさとの梅
梅林夜を啼わたる鴉かな
うめひと木夕山近く見ゆるなり
梅の花ものにかくれぬけしき哉
山間やきつと暮もつうめの花

うめさくや木かげの柴もへる時分
みちて來る潮やみつよつ梅の花
西院の梅正月ごとに遠く見る
藪川やうら戸〱の梅のはな
つぼみからすき間も見えず垣の梅
あるはづの朝月見えずうめの花
世の中の願はしらず月とうめ
すき間なく冴かへりけり月と梅
雪とけたばかりの庭や月と梅
酒賣らぬ恨は捨て月と梅
空のないけしき成けり月と梅
人のいとま齋も過て月とうめ
立退て見てもはなれず月と梅
十五日たつや左右の梅やなぎ
いとまあるものや柳にもどる舟
近道はまた雫する柳かな
子細なく平地にふとる柳かな
降雨にこりず見に行柳かな

青柳のある顔もせぬ小家哉
きぬかけたやうに成けり江の柳
ついさした枝と言ふなり門柳
干網の間〱のやなぎかな
柿寺と日ごろおもへど柳かな
藏米を運ぶちまたの柳哉
遠ざかり近まさりする柳かな
何口とも人の定めぬやなぎ哉
ふた輪三輪盥にたまる柳かな
座掃てまた活ておく柳かな
あら壁にけさは影ある柳かな
庭はきの肩にかけたる柳哉
どし〱と米踏音や糸やなぎ
雨一日おのが柳になじみけり
撞く鐘の響おさへる柳かな
街道にかまはぬ里の柳かな

蔦の家の垣根にさし木せし柳の、
やがて老の手のとゞかずなりて

やなぎのみよそにおとらぬみどり哉
鵜のやどる下の椿も咲にけり
春中の花の相手や赤椿
幹見れば二木なりけり落椿
淡雪や葭簀かこひの小料理や
黄鳥の詠めて啼や春の雪
ぬれ柴の間〱やはるの雪
いつ暮て水田のうへの春の月
玉水も井手もわら家ぞ春の月
行燈のいやしき夜あり春の月
炭がまのけぶりのはたの春の月
竹の葉に袖すれそめて春の月
鍋洗ふ水をてらすやはるの月
暮たれば朧になりぬはるの月

闕寺のほとりにて

杖に手を重ねて見るや春の月
山の井に盞する音や朧月
山水の何こ古びておぼろ月
紫陽花の宿はいづこぞ朧月
引汐やその有明のおぼろ月
朧月夜の更てある九條かな
猫の戀馬蘭がくれに覗きけり
松かざり二日立ぬに猫の戀
淺茅生の隣も見えて猫の戀
寺〱の鐘に都の余寒哉
椿樫の堀(掘)捨てある餘寒哉
材木の障らずにある余寒かな
ひよ鳥の地に啼春のさむさ哉
木守の柚ひとつ殘る餘寒哉
藪入や梅津桂の雪はれに
藪入に言れて拜む持佛かな
やぶ入の撫て通るや古榎
付て居て掃すや脊戸の蕗の臺
鐘の聲田一枚ヅヽかすみけり
朝がすみ掉(棹)の雫のひろがりぬ
人の無事問はしなれや朝霞

小橋まで歩行て來たり朝がすみ
沙汰なしに汐は滿たり春の雨
春雨や鼠も古き法隆寺
はるさめや物落付ぬ晝はたご
春雨や山路入ほど鷄の聲
隙あいたやうに思ふや春の雨
はるさめや大和路ははや綿売火
一泊りまづ白魚の馳走かな
紅梅や住あれたれど崕造り
しほらしき薄紅梅や花のしべ
〔連〕連翹の葉は覺えぬぞ花の時
連翹にさはつては行雀かな
立よれば松の月夜や啼蛙
まだ聲も古葉の下の蛙かな
松の根にひとつ聲よき蛙かな
次第して啼や四隅の田の蛙
野ゝけしき年〳〵雉子の遠音哉
雨のきじ流石に聲の遠くなる

ひる過や命投出す雉子の聲
大瀧や小瀧のさまもきじの聲
瀧つぼに入よと見えてきじの聲
雉子雲雀啼や十歩の杖のうち
きじ啼や嶋の夕は近いもの
ほろ〳〵と雨かゝりけりきじのこゑ
きじ啼や永い居酒も一しまひ
朝雉子のはしり出たり二尊院
如才なく雉子は居るなり小松原
朝きじの歩行て下る小坂かな
とつかけて雉子啼ふもと〳〵哉
夜は山へ歸ると見えてきじの聲
行先の見えてあるのに磯のきじ
苅あとのするどき篠やきじのこゑ
ひとつづゝおのが田を持雲雀哉
關の戸を出るや空に啼ひばり
大橋の末より揚るひばりかな
嬉しげに揚る羽ぶりや初雲雀

それさうにしては居直る雲雀哉

東風吹やふす〳〵けむる田中の温泉

春風や小藪の隣も伊勢海道

子を持ぬ蚤が家はなし春の風

かちやしきの人〳〵に別れをなしみて

はる風のまことは寒きものなるか

畑打の尻つき合す日暮かな

只ひとつ鳫は行なり石部山

浦の夜は秋ほど鳫の歸るなり

春の夜のものにはしたり風の芦

梅ほどの寒み持けり鮒なます

はつ花や夜は力なき犬の聲

脉取て見るや花の夜只ひとり

小寒きはさすがに花の盛り哉

朝日さへ心おかれて花のうへ

翌は花の盛りぞと見て此夕

花の雨おぼつかなくも暮にけり

うつくしき手で錢をよむ花見哉

花に來てしばらく遣ふ扇かな

人音や花のあとなる石ひろひ

庵の花遲くて雨をのがれけり

病後に杖を曳て

たのしさや花に莨のひとひねり

朝の花見んととく起て木母寺に至れば、夜はしら〳〵と明わたりて

たばこ火を余斗曜ふて花見哉

よく寐るものはものゝ修行は覺束なしと、門人南溪が薙髪に申おくる。

油斷して門たゝかれな花の朝

あらし山の雨の景色は

ひし〳〵と心に花のひゞき哉

若狹にて

はつ花をふもとにおきて後瀨山

岱李・若雅が參宮しけると聞て

いせの花不斷櫻もわするゝな

夜は花に木兎啼てひがし山

嵐山にて

じり〳〵と寄るや夕の花と水

おなじく

日は峰にかくれて花のさかり哉

ほとゝぎすまねくか麥の村尾花と百とせの墨色いとうるはしきを拜し、吟風が齡のめでたきをかたりて

花鳥のこゝにあつまる林かな

月をさへたのむけしきやはつ櫻

谷底に塩賣る聲や初ざくら

櫻もちて人は歸るに旅のそら

松山のこなたに午刻の櫻かな

我さくら見て居る嵯峨の小家哉

なか〳〵に夜深く見ゆる櫻かな

すわるより早名殘あるさくら哉

柴になるほどはのがれて山櫻

道〳〵もさくら見て來て嵐山

嵐山にて

山水や櫻やしなふ夜の音

よき雨のはれて戸口の桃の花

もゝの花こゝろ安さに見て歩行

梨の木のかげに幾代の雛かな

あら壁に雛落つく燈かな

男手もからでひゝなの馳走哉

眠ざむるや枕の先の中の餅

松の聲けふの汐干も暮ぬべし

犬も出て汐干の川を渡りけり

菜の花にくるり〳〵と入日哉

なの花をめぐるや水の跡戻り

なの花をあしらふふりや松の風

堀捨てあとでひらふや野大根

溝ひとつまたぎ歩行や雛菜摘

ちよつぽりと菫影もつ西日哉

山吹は靜なものよ水ぐるま

山吹や竹を年貢のひと在所

家毎に山吹ちるや桶の水

山ぶきに一あし踏や人の春戸

茶を好る人の岡崎のあたりに住け
るを尋て

山ぶきを入口にして藪の家

近江路にて

春の水渡るところやかゞみ山

今おりた鳥も見えけり春の水

さゞ浪に折ふしなるやはるの水

杜夢が江戸にくだるを送りて

ひるからは水ますものぞ春の川

春の海淺きとまでに思ひけり

日永しとひとり思ふや鳩の聲

鶉のなくもかまはずうそのこゑ

むら雨に袖打ぬらす茶摘かな

年風が初老の賀に申贈る

花はいつ笈負ふつれは出來にけり

八十二歳自壽

花に鳥退屈しらぬ齢かな

屋敷衆の几巾よけて行堤かな

をとつひは花のさかりなりと嵯峨
人の言けるに、けふは早若葉とな
りて大井川の流れは其塵だに見え
ず。

行春は筏の下にかくれけり

夏之部

山水の音もほどよき卯月哉

聞しらぬ小村の鐘も卯月哉

松風の世界となりし卯月哉

去年の冬より東武に遊びて、むつ
ましくいひかたらひし人〻に別れ
を告るとて

杖とりて見ても卯月の朝曇り

したしげに鳩の啼日や更衣

綿ぬきのつい手に掃や鼠の巣

みじか夜と思はるゝ也貴船川
鳥もけさ取つきかねるわか葉哉
棒突て旅人出る若葉かな
嶋先に一つくなりのわかば哉

嵯峨の大悲閣にて

一日の心を得たるわか葉かな

春畦が別莊にて

若楓人まつふりのそよぎかな
鐘供養済だ空なりわか楓
我庭と思ふ日もあり若楓
古井など人の覗きてわか楓
若楓午時に間のある戰かな
三日月のちよつとはさゆる新樹哉
ものをしみする神垣の新樹哉
世わたりのしれぬ小村の新樹哉
花御堂八瀬のさと人並びけり
灌佛や盥のはしに啼すゞめ
霜よりも白きは芥子の一重哉

墨繩の墨が付けりけしの花
道ばたや一足づゝに芥子の散
蟻の來て引ずるけしの一重哉
けしの花下行水にそよぎけり
なまぬるもかする音して芥子の花
うれしがる手にくづれけりけしの花
膳につくまではありけり芥子の花
古溝を苦にする庵の牡丹哉
藏の間二丁も過て牡丹かな
ほつちりと落ぬ牡丹の一雫
廣澤や一輪見ゆるかきつばた
杜若竹のはづれに見えそむる
みじか夜の花は咲けり杜若
材木をあつかふ中やかきつばた
山かげや咲もほこらず杜若
かきつばたなどもあらふぞ由良の海
燕子花開くや松のひと雫
たつた今活た處也かきつばた

卯の花や薺には見ぬ此小家
卯の花とともにぬるゝや垣の幣
なつかしき加茂の卯の花狊たらず
卯のはなや物なつかしき古諦
うの花や折て見たれば折おとり
ほとゝぎす遠き在所の月夜かな
ぬくもりは臥猪のあとか郭公
蓬生の夜の大きさやほとゝぎす
時鳥夜も物喰ふ神の馬
一嵐靜まるや江のほとゝぎす
時鳥啼や夜汐のひたくと
ほとゝぎす水鷄にゆづる夜は明て
薄雲の夜の隅よりほとゝぎす
杜鵑なくや楓の花が散る
冷やりとして落來るや郭公
時鳥啼夜の雨をおほえけり
薪つき穴盡き空に時鳥
筋違に飛くせの有り杜宇

踏付し蕗の匂ひやほとゝぎす
百草のかほるや空に郭公
蜀魂ゆかり有べき野のすがた
その聲は霜夜に似たり時鳥

妙喜庵にて

抄引て無言のうちのほとゝぎす
靄を出てもやに入間の杜宇
不用意に出て野深し時鳥
ほとゝぎす聞や野にたつ身のしめり
追かけて聞や大野のほとゝぎす
時鳥折くこすや高卒都婆
人の行衛ちいさく成て閑子鳥
夏ならぬ峰の夕日や閑子どり
閑子鳥啼や檜原の吹返し
かむこどり草山高き晝の月
日のさせば居らず成けり閑子鳥
此里も年寄多しかん子どり
青空やそれにも啼て閑子鳥

ひとりして此山を啼閑こどり
草むらに家藏見えて啼水鷄
朝露のこぼれじまひをなく水鷄
草の戸の油をへらす水鷄かな
いさゝかな水に都のくゐなかな
灯をともす家のうちよりなく水鷄
花からの草臥出たり水鷄の夜
草の戸の腰かけ客や啼くひな

艸庵のさまを

壁の穴ことしも水鷄聞ゆなり

世をのがれて龜井戸に住ける誠阿
夫婦に對して

そら豆の花に眼のつく住居かな
蚊柱や通つて見れば通らるゝ
身ひとつをあふいで廻る蚊遣哉
夕ぐれは蚊に浮世めく住居かな
蚊遣火に幷べて行や一德利
燃あがる蚊遣に見ゆる馳走哉

旅人の箸で扱ふかやりかな
朝毎や葎に近き庵の蚊帳
竹の子や牡丹にも此露はなし
若竹の葉につく月の光りかな
青梅や月のゆかりもなきけしき
紫陽花や溜てはこぼす雨の音
あぢさゐや澄切てある淵の上
紫陽花や仰山過て折らずなる
紫陽花と同じ色なり筑波山
あぢさゐや舟も通はぬ元在所
百合切て幷べておくや草の上
馳走した其後は來ぬ鹿子かな
色香なき夫婦の中もはつ鰹
野の末や幟のうへの鳶からす
松かざりせねど蓬は葺にけり
けしきあるものや粽の朝使
五月雨の覺悟もなしや芦火焚
さみだれやわすれて居りし淡路島

さみだれやふしぎに烱る山の家
五月雨や枕もひくき礒の宿
早乙女に祝ふ詞もありぬべし
はてしなう見るや田植の初あした
木がくれて猶なつかしき田うゑ哉
一里ほど先から見えて桐の花
杭際の渦にまかるゝ螢かな
二階から見るや浮巣のはるか過
流れ來るあくたに開く浮巣哉
山風や是迄と見る鵜のかゞり
草の風やがて出て來る鵜舟哉
落來るやむしも松葉も鵜の篝
のびあがり〳〵見る青田かな

山本石露子が初孫を祝して

ゆたかなる青田の中や宮參り
はつ蟬や須广の鍋屋の戻りがけ
せみ啼や心に遠きひとしきり
淸瀧や夢のやうなる蟬の聲
旅人の木かげ掃けり蟬の聲
裸身や團扇をしほの遠歩行
大水のひくや川邊ははやうちは
江戸ばなしするくらがりの團哉

草庵に團扇あり。大なるを太良冠者とよび、小なるを次郎冠者と呼て常に机邊をはなたず。

山ひとつあなたへ行ぞ團扇こせ
麻かげをけふも流るゝ淸水かな
里人のちらほら通るしみづ哉
晝顏の花くふ礒の鴉かな
ひるがほに一息つくや米飛脚
夕皃やすだれのうちも花ひとつ
ゆふがほやたしかに白き花一ツ
ゆふ顏の上に行合ふ煙かな
淩霄や水なき川を渡る日に
なでしこにひとつ聞けりひるの鐘
口盛や蜘に引るゝ蝿の聲

六月や待事多き晝の空
松の葉の散るさへ移る火串哉
箸かたしのせて淋しや一夜酒
腰かけて蟻にさゝるゝ蓮見かな
剪をりに行合せけり蓮の花
さむしろのはしに蓮見の小脇差
しほからきもゝ喰たき蓮見哉
夏の月むさと落たる野面かな
己が戸に向ふて蚤の納涼かな
ゆく水の四条にかゝるすゞみ哉
ひとり前掃てはすわる納涼哉
韮くふて來てさむしろのすゞみ哉
涼しさや來るあと殘る浪がしら
すゞしさや手に松脂のつく夕
涼しさや雀もしらぬ椎が本
すゞしさや唐蘭一本をれてある
涼しさにくせの付たる門田哉
すゞしさや根笹に牛もつながれて

茶筅など潮水に捨て暮涼し

大津梅林にて

梅さへも涼し木の間に海を見て
暑き日や啼たる蟬も居らずなる
あつき日やふつと見かゝる屏風の畫
根氣よき人をうらやむあつさ哉
あつき日や柱踏ばる土ふまず
眞中に膳すゑて有る暑かな
蔦の葉やあつき中にも眼のとゞく
樹に花の咲たぐひ也くもの峯
走り穗のちら〳〵見えて雲の峯
たま〳〵に居る人は寐て雲の峯
身の上の夕立なれや池の鴉
夕立のあとで暮るや斧のおと
ゆふ立の過るや森の夕神樂
ゆふだちや願のわるき氷うり
待わびし夕立そなへなかりけり
夕だちや未(末)も通らぬ芥川

湖邊

唐崎がなくば何所まで麥の秋

先師の十七回忌を營とて、一枝の花のかげにふして一炷の香の煙にむせぶ。

夏草の心に高きばかりなり

同二十五回忌に

あり〳〵と芥子のうへにも立日哉

同三十三回忌に

めざましき手向草なり百合つゝじ

蒼虬翁發句集（下）

秋之部

犬も尾をきりゝと卷てけさの秋

吸がらの道にけむるや今朝の秋

山の井の花は咲けりけさの秌

人ひとり田中にたちてけさの秋

はやまりて葎引しぞ今朝の秌

何なりと市に買ばやけさのあき

もの言ぬ柱によりて今朝の秌

くらいから起て居たれば四方の秋

江のひかり柱に來たりけさのあき

わきひらも見ず加茂へ來てけさの秋

今朝の秋まづかゝりに遣る宇治拾遺

けさのあきつく手に戻る鐘の聲

草庵
うつかりと起て見たればけさの秋
來る秋やしたしき隣もつ心
一二寸清水もふえてけさの秌
立秋や涼しかれとて灯も置ず
秋立や堪忍のなる庵の水
あきのたつ日より芒は水のうへ
たつ秋やすいと眼に入る鐘の聲
はつ秋や夜明て起て口をしき
初あきやたばこ火殘る竃の下
はつ秌やまだ市くらき摺火打
初秋や洗ふて立る竹箒

はつ秋の頃墨の江にて
住吉の秋のせて出る小舟かな
稲妻に翌の水汲伏家かな
いなづまや更行夜の身のたゆみ
芦かげは早稲妻の小舟かな
いなづまや藥休みし宵の空
朝がほや花のあたりは夜の露
市中や初蕣のふたつみつ
あさがほや地にしみ殘る宵の水
蕣をしるしにいふや瀬川の家
あさがほに磯の匂ひはかくれけり
朝がほに蔦は下葉と成にけり
朝皃や是ほどの世を花の瑕
桐一葉うらも表も青かりし
おき床の團扇に並ぶ一葉哉
梶ひとはくれてやるより庭すゞし
梶一葉提て出るや藏やしき
七夕は隙で鐘つく野寺かな
七夕や出て詠るわが垣根
たなばたを思ふて居る賤渡し守

殘暑を凌がむとふたりみたり伴ひ、
加茂川堤をのぼるに、いなづまの
かげすゞやかなれば
七夕や秋にめでたき此けしき

叢寺の空まで星の逮夜かな
加茂川の上に都のあまの川
ふるさとの夜は早長し銀河
薄くれは見殘すものぞ萩の花
石垣のほめきをうけて萩の花
來たときに見た斗なり萩の花
咲とはや萩は日かげに成やすき
枝ごしに肴をはさむ萩見かな
花少し散より萩のさかりかな
おき直す盥やはぎのひと盛り
行人の影さす萩の垣根哉
ものに飽日やちら〳〵と萩の花
ゆら〳〵と夕日をうけて山の萩
なか〳〵に萩におくれてちる木槿
どれほどの雨にもまけぬ木槿かな
ひる中に剪て活たる桔梗かな
かるかやゝ瀧より奥のひと在所
夕ぐれや見捨てもどる女郎花

手をり人に露をかけゝり女良花
井戸の名も野の名も知らず女郎花
蟹が子の打檻すむで荻のこゑ
門の荻よそ〳〵しくも聲す也
荻のこゑ星はかよふに逵ひなし
飛込だ鴉も居らぬすゝきかな
見ず知らぬ野とはいはれじ花芒
花すゝき翌のあはれを吹殘す
暮いそぎして暮殘る薄かな
山中ッで一はしそよぐ芒かな
山伏の螺にしづまるすゝき哉
水おとの峯にまであるすゝきかな

雪兎窟にやどる日は秋の雨いと靜に降て、殊更見風老人のむかしを忍ぶに、となみ山の高さも有磯海の深きも、この亭のあるじこそしるらめと、翌の旅寐も猶たのみあるこゝちして

佗人の便りをそよぐすゝきかな

梅室が東に行をおくりて

分行もやすし芒も穂に出て

面影の似て面白や荻すゝき

くれぬより蚊帳釣宿や荻薄

心得て火を焚蔦のやどり哉

いつく嶌にて 三句

とり分て盆はめでたしいつく嶌

是でたる秋のけしきや大鳥井

虫の音も神慮に似たり波の上

見ごゝろの付けば露けし盆の月

大文字やはじめにほつと一けむり

燈籠や釣ばえのする竹の奥

しら露の中に手を打踊かな

月ひとつ野に捨てあるをどり哉

土橋をこして夜深し高燈籠

さし鯖や隣へやるも表むき

刺鯖に添けり伯母のひねり文

吉備よりのかへるさ播磨路にて

まだ残る暑を辰や日笠山

おく露のちまたに響くきぬた哉

小夜碪そこらあたりは山ばかり

金澤へこゆる道にて

鎌倉にとまらでくやし小夜碪

人住ばかくは降まじ山の露

早稲の香やむく起ながら遠歩行

わせの香や水打てある床几先

晴て行雨や隣の稲のうへ

大寺の朝寐も見たり稲の露

なく鳥の尾上はなれて秋の露

をちこちの聲と成けり秋の蝉

日ぐらしやみの山見ゆるやまの間

虫いろ〳〵艸のみだれを聞夜哉

隣なき夜とは成けりきり〴〵す

行燈による隙出来てきり〴〵す

腹撫て寐る宵〳〵やきり〴〵す

土間の灯のきかぬ四隅やきり〳〵す
こほろぎの聲に月ひく軒端哉
しら濱やはてはよわりし秋の風
水と日のしたしくなりて秋の風
竹われば竹の中より秋のかぜ
塩濱に人の動きてあきのかぜ
秋かぜを綿に吹かせて山の家

親しらずを越ゆる日は秋風ことにはげしくて 二句

あきかぜや命をはしる波のひま
命活てやすらふ岩も波の泡
梔の香の薄らぐ空や秋の風
ひか〳〵と干浮を吹や秋の風
魚さけて霧の垣根をめぐりけり
鶏頭やまづ朝市の口ひらき

参宮しける時、松野とかいへる茶店にいこひて

鶏頭や草鞋しめしてひと詠め

是のみの小野の小家か唐がらし
草むらに染ても淋し唐がらし
一日もおくけしきして秋の雲
石山に心のちりやあきのくも
雁なくや横をりふせる夜の山
夕陽に引もどされなあとの雁
藪こゆる時よく見えて雁の腹
蓬生に入とまで見る月の雁
水際の松葉こぼれて天津雁

備中笠岡の太六が初老を祝して

秋の賀にゆたかな日なり天津雁
聲見ゆるほどに暮けり小田の鴫
くれの鴫朝がほほどの世も持ず
世並よき秋につれてや渡り鳥

伏見にて

草も木もみな人顔よ花火の夜
三日月や土なぶりせし手のかわき
植木屋の木の間覗くや三日の月

椽先のぬれたやうなり三日の月
一とせの色は見えけり秋の月
松かぜは明る夜に似て秋の月
しづかなるものを丸めて炑の月
見ては行見ては行けりあきの月
野に居れば野が捨られず秋の月
傘かへす宗はよく寐て秋の月
藪山を終に出ぬけて秋の月
ものかげは常よりくらしけふの月

望の夜は例のごとく眞葛が原に出て

竹一葉ふたばさはるやけふの月
月今宵明るけしきはなかりけり
月こよひ風の吹べきかたもなし
名月や摺火こぼるゝ松のかげ
名月や一夜深山に住こゝろ
明月の汐にぬるゝや人の裾
名月やなつかしとのみ見る斗
年〳〵の名月歩行たらぬなり

名月や梅の立枝も久しぶり
名月の傍に更たり水ぐるま
名月や行燈見ゆる谷の家
名月や物なつかしき野のゆきゝ
炭なんど運ぶやうすも月見哉
さむしろのはしに鎖おく月見哉
鳰ひとつ相手に池の月見かな
出しほ見て心落つく月見哉
落残る土橋のうへの月見哉
榮耀したあとで畑のつきみ哉
松葉かく男も月のあるじかな
なか〳〵に首骨たるし月の雲
押ぬぐひ〳〵行月のくも
峰だけはさすがに見えて雨の月
人に逢て歸る氣出たり山の月
藁少しあるをたのみぞ須广の月
思案してとざして入りぬ月の門

堅田にて

月代やはや人聲の野に響く

八月十五夜眞葛が原に床几をすゑて

月の露ちるや心に隙のなき
十六宵の闇をのせたり浪花舟
いざよひやきのふの道の裏通り
十六宵にしばらく覗く木の間哉
小海老煮る火は限りある夜寒哉
牛にもの言ふて出て行夜寒哉
芋葉さく音を夜寒のはじめ哉
はつ韮やそつと並べる盆のうへ
ひと德利別にちいさき新酒哉
秋の野の幾ところにも夕日かな
聲たてゝ引や西日の鳴子守
鳴子守夜はちゝはゝも有ぬべし
夕山を下に並べて鹿の聲
江をへだつ心も付ずしかのこゑ
日のさして一聲啼や谷の鹿

草の戸の外は思はず秋の雨
眼の前に暮るばかりぞ秋の雨
あと低きすわり心やあきの雨
菊の日や御嶽鳥も出て啼
里深し藪またふかしきくの花
夕かげとなるや一しほ菊の花
住吉の松は暮たにせどの菊
きくの香やすべり込たるかくれ里
山里のきくも盥も日なたかな
垣ごしに貰ふや菊は皆赤き
畑菊の外に垣根のきくの花
兩隣同じ根分の菊のはな
きく作り妻にしたしきふりもなし
なまぬくき湯桶の上や菊の花
高つきは古風でよいぞ菊の宿
白ぎくにとゞく莨のけぶり哉

かちやしきの若水がもとにやどる人〳〵に對して

さま〳〵に咲けり菊の匂ひけり

瑠璃燈もひとつは淋しきくの花

姫川や鴈さへつらをみだし行

立山にかゝれば近し秋の雲

伊勢路記行

是ほどの礎は聞ず石部山

鈴鹿あたりにちいさき焼栗を、串のみつまたなるにさして有ければ

くし栗も古事あらむ鈴鹿山

椋本の驛はふるき神社なども有べきやうにおぼえ侍るに、只大なる椋の木のみありければ

椋木や宮は見えねど鴫の居る

老行まで宮川を渡らざる事を心に悔けるに、ことしはからずも兩宮を拝み奉りて

けふの心人に語らむ神路山

うたがひもはれぬ二見の秋にさへ

小家ごとに竈馬もひとつ相の山

白馬城のもとにことし庚申の夏、ひとつの草庵をむすび、とみに十境わかち定めたり。さるをわづかに拾薪庵の名あるは、道を修することを本意とするなるべし。ときは文月廿日にあまりの空はれわたり、秋色胸にみちてしばらく眺望のまぶたをふさげば

秋の詠め終には松にもどりけり

甲午の秋東武にくだるを人〳〵におくられて

新わらやどこで休もとまゝなとし

暮秋八ッ橋にて

花の時來て見直さむ杜若

ぐるりから秋は暮けり三上山

宇都の山にて

うつむいて旅人來たり秋の暮

山ひとつこゆるや岨のあきのくれ

我たてるけむりは人の秋の暮

一さとを日は打こして秌のくれ
庭はけば掃ほど淋しあきの暮

不破にて

何なりと見ねば立れず不破の秋

吳山が寶普堂を尋侍るに、先に越後に杖を引てこのほどは佐渡に有と聞ゆ。ともに水食雲樓の身は何なかへだてむやと、やがて留主の戸の葎をかたぐりツヽ、柱に蓑笠打かけたる、いと興あり。爐あれば飢る事なく、油あれば寐覚も安しと、今宵訪ひ來る人〳〵に對して

物たらで猶むつましや庵の秋

甲申の秋九月、修學院へ御幸有けるを加茂河のほとりより拜みたりて

御幸済て松風秋をかへす也
一まはりちいさく出たり后の月
かゝはらぬ杉の木立やのちの月
上京へ行ほど晴ぬ后のつき
こゝに居て程よき谷のもみぢ哉
畑からおりる小寺の紅葉かな
よう染る木部屋のうへの紅葉哉

箕面にて

もみぢ皆夕くれないの中の瀧
ゆく秋や雀の歩行草の中

冬之部

十月や歸る所有る松葉掻
十月や早珍らしき赤椿
くれがたや障子の色も神無月
あたゝかなものよ小春の雑木山
藪掃て望みたりたる小はる哉

松坂のあたりは紀の御領にして、取わけ鶴の多かりければ

日も永いやうぞ小春の稲に雀
羽をこぼす梢の鳶や小六月

野は鶴の脊ふりあげて初しぐれ
はつしぐれけふ汐竈も薄烟り
降にけり紅葉のうへのはつしぐれ
はつしぐれしばらく有て波ひとつ
茶に塩のたらぬ朝也はつしぐれ
稲垣の見ゆるところや初しぐれ
家間に野水の見えて初しぐれ
一聲は鶏もうたふや初時雨
芥火の細口あけてはつ時雨
剪ておく菊を洗ふや一時雨
ひと岬は汐汲で居るしぐれ哉
一しぐれすかさず啼や山の雉子
杣が火のけぶり行あふしぐれかな
白菊の残る甲斐あるしぐれかな
しぐるゝや絶ず網打川むかひ
時雨るや手元へうつる斧の影
しぐるれば出る事にして五位の聲
鵆啼もあてにはならず夕しぐれ

下京はしぐるゝはづよ塔ひとつ
斧の音とゞきて雲のしぐるゝか
泉涌寺を額でをしゆる時雨かな
しぐるゝや一隅うごく池の水
まな板の音時めかすしぐれかな
橋筋は夜の賑ふしぐれかな

二見にて　二句

ひと朝の時雨の色も拝みたし
御さがりと言ん二見の初しぐれ

佳景を見ては人を思ふ。此日この興その人にあり。

夕山や紅葉に翌の時雨雲

氣比宮

砂清し時雨過行鳥居さき

座をゆづりて朝陽にしめす

心せよ時雨も早し東山

御幸塚に登りて三湖を望むに、今江湖は往還につらなり、なかばは

龍松の梢にかくる。柴山浮ははるかに藪村の炊烟にへだゝり、牙浮は眼下にして岸の殘葉水面にうつるもさぶし。しばらく夕陽をながめる中に

ふたつの江尻眼にかけて初しぐれ

翁忌にみちのく行脚の昔を思ひ出て

米山のふる道ゆかむはつしぐれ

翁忌

月時雨もるを庵の會式かな

けふだけの水は來る也時雨の樋

赤みそのしぶみをほめる會式哉

掃よせた木の葉も塚と見る日哉

我會式余所の十夜の鐘のころ

水仙やまだ葉斗の手向草

木兎も夜を來てさやせ翁の日

ものたらぬ月や枯野をてる斗

ありがたき御膝の上の木のは哉

洞津の翁忌に

安濃の塋に木の葉かゝせむ翁の日

義仲寺にて

ひとしぐれ塚をめぐると見る斗

翁の日坂木にありて

義仲寺の灯がともれるや飛衛

去年の翁忌は木母寺に會し、今年は庵に籠なとりて

十ばかり柿も樹におく會式哉

舟つけて草原あがる十夜哉

心すみ行や木の葉のちる度に

近〳〵と城の崎見えて散木のは

しら壁にあたる月夜のこの葉哉

次〳〵へ木の葉散行天氣かな

人〳〵のかへるを待て

音のするたびに出て見る木の葉哉

客中香花を備えてはせを庵のむかしをしのぶ

常にさへゆかしかりしを散木のは

山鳥のひとり寐に行落葉哉

恵心寺を行過したるおちば哉

鶏の來てくふもの〻ある落ば哉

木がらしやねぐらを鶴の聲もるゝ

凩の日をけづり行膝のうへ

こがらしの吹もへらさず彌彦山

凩や猪の來てふむ脊戸の芝

敦賀にて

こがらしの浪吹わけてかねが崎

奥山にかゝる日和や大根引

我畑の卑下もやさしや大根曳

堀(掘)たての大根ぬくし山のはた

大根曳御城の見ゆる天氣哉

志賀にて

大根引志賀は人氣の揃ひけり

行雲の家より低き枯野かな

時めいて來るや枯野の柱賣

はなしあふ脊中のぬくき枯野哉

水際のたちて日の入るかれの哉

折節は高うもなるや枯野の灯

酒しほに醉て見に出るかれ野哉

鵜の道も一すぢ出來るかれの哉

須磨にて

こがらしの中にも須磨の夕かな

さびしさをはなれて久し枯尾花

蔦かれて浮世に近し庵の壁

ひと林揃ふて高し冬木立

小春の空の長閑なるに、杖を曳て
近きあたりに遊ぶ

雲かへり盡て裾野の冬木立

かくれ家や冬をさかりの菊の花

寒ぎくの文や傍からもらはるゝ

寒菊や提て來たる葉のぬくみ

寒ぎくや夜はむつましきひと薫り

珍らしき月夜も見たり石蕗の花

散ほどのちからは見えず歸り花

君が代の松風添ぬ冬牡丹

公水が難波に卜居しけるとき

たのもしき垣根や冬の蕗の臺

水仙の名所らしき月夜かな

水仙や脊戸は月夜の水たまり

水仙や筒の工夫に日のくるゝ

水仙や田へ行水のもる垣根

山茶花を椿ときくも草枕

壁ぬりが山茶花折にもどりけり

澤庵が色見たあとで納豆汁

逢坂を雪踏でこすや蛭子講

約束の松風吹て冬ごもり

鈴ひとつ鋏につけて冬ごもり

ひと廻しまはしてあたる火桶哉

冬がれに問ず語りや須磨の僧

上京は似た人多き帋衣哉

紙衾梅にゆかりのあるをとこ

炭竈やひとつふたつの夕鴉

すみの香や夜の心を富貴にす

炭賣の道や幾世の朝じめり

丹後の内宮にて

猶寒し炎の中の日のはじめ

腰越にて

寺へ來てこぶしを握る寒さかな

寒空や磯の小松の親もなし

水鳥と同じうねりの丸太かな

水鳥の羽にもつけぬよ二日月

越中の國布勢の海に舟をうかべて

水鳥もものいひ顏や布勢の海

朝〳〵にかぞへる池の小鴨哉

夕雲のてるや藪根のひとつ鴨

汲水の波をよけ行小鴨かな

鈴鴨の虚空に消る日和哉

すゞ鴨や日くれさかひの野の曇り

何處からか出て來て並ぶ小鴨かな

朝川にひたして赤し鴨の足

夜すがらの心づかひや眠る鴛

あら海や別に千鳥の夜が聞ゆ
松のうへに道が付けり朝ちどり
西に月千鳥聞にはよき夜頃
有明にたつあし見ゆる千鳥哉
川上は柳もなくて啼ちどり
きはまりて道よりするや川衛
波に入る月見て居れば飛千鳥
あら礒や我足あとに啼ちどり
笠ふんで啼あら礒の千どりかな
啼ときは見えず成けり川ちどり
ひと走りしてたつ朝の衛かな
ひと吹雪千鳥のまはる岬かな

有明の濱にて

ありあけのはまやさながら飛衛

ことしは長成が大祥忌にあたりぬ。さるものは日々にうとしといへども、老の身は月に花にたゞ人のなつかしくて

夢に見たまゝを寐覺の衛かな
蔓つたひ屋根へ行けりみそさゞゐ
結搆な日は何處に居て斥鷃
網代守夕ぐれは子もある男
とかくして旭にあへり網代守
網代守うしろの家へもどりけり
餅搗た夜から来ぬなり網代守
戸口から芦の浪花や冬の月
此家も人の居るのかふゆの月
上加茂へふと参りたき冬至哉
行水のとゞまる霜のわら家哉
むつましき烟こそたて霜の家
へつたりと窻さゝれけり霜の家
里の灯も曉らしきしも夜かな
背に網かけて過るや橋のしも
霜拂ふ音は入江の小舟かな

白子の子安堂に詣て

御誓の内のさくら歟霜の日も

はつ雪のひるにもなるか斧の音
けさ迄はしらぬ芦あり庇の雪
につと日の出る山間やけさの雪
鳥の道ばかり有る也雪の山
見出せば見出す雪の隣かな
芦に舟雪に見るもの揃ひけり
何となく明るさかひや雪のうへ
やゝありて一枝ちりぬけさの雪
雪の舟世間かまはぬ姿かな
ゆき近し水田にうつる松の影
松明買ふて出にくうなりぬ雪の家
雪の眼を休むる麥の堅田かな
よき流れ持て暮るゝや雪の里
大雪と成けりけさは鶴のこゑ
木つゝきの一雪かぶる木の間哉
雪花やまづ行先は淺草寺
月さえて二日に成ぬ雪佛
吹て來て袖に付けり竹の雪

　播磨にて
降たらぬ雪を明石の姿かな
　睟鷗亭雪見
かく降れば雪ものどけし庭の松
　越后妙法寺にて
垣根かと見るとき雪の日くれ哉
　氣比濱眺望
大雪の降とは見えず浦のさま
　丙寅の冬ふたゝび古郷を出て、細呂木の關をこゆるとて
雪ちるや何處で年とる小田の鶴
見る日より雪の願ひや与謝の海
すれ合ふて樋口に氷る薄かな
桐の實のこぼれそめけり厚氷
五六間飛や霰の網の魚
野の末の雲に音あるあられ哉
寒月やありともきかぬ須磨の藪
寒月の加茂にもひとつ小家哉
咲たやら折たあとあり寒椿

あすの夜は月もかゝらん冬の梅

水仙の花なき宿や鰒と汁

鰒汁や今宵枯野の月はすむ

俵なりのあとつく雪の師走哉

うす雪のかげより出たり鉢叩

枯盡す梢の音歟鉢たゝき

すゝ掃やはたして居らぬ池の鴛

田の中に雉子つくなりて年の暮

驛見えてひと息つくや年のくれ

讃岐富士は飯の山といへるよしをきゝて

行年の宿はなくとも飯の山

大年や風情の出来る日暮方

折て来て灯で見る除夜の柳哉

雜之部

橋立や戻る文珠(殊)も夢ごゝろ

餘所へちる氣色は見えず不二の雲

あし高は見ぬ日もないに不二の山

追加

伊賀の國月が瀬の勝地に對して發句を乞はるゝ故人吉野に句なしといへることはりにおぼえ侍りて

何の木も斯くは咲まじ梅の花

蒼虬翁句集跋

むかし芭蕉の翁、人丸・杜子美が幽玄を此道にうつされしより、其陰とし〳〵にひろごり月ゞにしげりて、今やたかねに薪こるをのこ、荒磯にみる苅海士も、さびしをりの名目を聞しりて常に向上の境をのゝしる。されど大かたは一時の巧言に議諍のあらそひを事とし、たま〳〵古人の室をうかゞふ輩も、連句に巧を好るは發句の姿つたなく、やゝ句に体を得たりと見ゆるは、俳諧の變化にうとしとぞ。こゝに我師なりける蒼虬翁は、句に連にふか

く祖翁の骨髄(髓)を得て、生前の風雅至れりつくせり、試に是を古人に比せば、誰か貞享・元祿の作家二三子の内にとらざらんやと思ひ出るもなつかしきに、ことし句集の再刻なりて猶も世に耀んことのよろこばしくて、我はた其向上をのゝしるひとりなるものから、口を戸ざすことあたはず、すゞろに蛇足の一言を添るにこそ。

伴水園芹舍

華雒書舍

六角通柳馬場西ぇ入町

平野屋茂兵衛

通說

本集には、假に名けて一茶時代と稱する——文化文政を中心として寛政より天保に到る——時代の俳話と發句とが輯められてゐる。先づ此時代の俳話に就て、後に其發句に就て私見を述べようと思ふが、さて、此時代の俳話の特色といふべきは、考證、訓詁を主としたものであつて、體驗や批判を語つたものでない事である。一言にして云へば、考古的であつて、鑑賞的ではない事である。芭蕉時代の俳話たる「去來抄」「三冊子」「山中問答」などいふ書は、概ね作家としての體驗を語り、又は作家たる立場から作品の批判をしたもので、其言葉は暗示的であり又は獨斷的ですらあるけれども、其內容には說者の見識が見え、少くとも說者の個性が出てゐる。蕪村時代の俳話になると、此個性味は大分にぼやけて來てゐる。けれども、麥水は芭蕉の古池の句を「少々不出來の方」などゝ批判し、几董は蕪村等が句作に苦心する體驗を話したりしてゐる。それが此一茶時代の俳話になると、全然考古的になつてしまつた、誰々がどういふ芭蕉の書翰を藏してゐるとか、其角の此句は斯ういふ意味だとか、要するにそんな事以上に出ないのである。之を好い風に云へば、研究的態度の勃興であらうし、惡く云へば、取も直さず創作的精神の衰退であつて、さういふ研究ならば句作道に多年の精進をした俳人を俟たずとも、讀書する閑暇と根氣とのある博覽多識の人ならば誰にでも出來る事だとも云へるのである。

「誹諧根源集」の著者、素外は談林を宗として「誹諧を以て一家を江戸に爲し」(北山の序)たる人であらうが、誹諧といふ文字の出所などの穿鑿をした末に、「俳諧は滑稽なる事を悟さむ」といふのだから其頭の堅さは解る。彼に從へ

ば、「滑稽を嫌ひ閑寂をむねとする」芭蕉の徒は俳諧といふ正しき言葉の意義には合しない邪宗門なのであるけれども、さうも云ひきれずに、「閑を好まば閑なるうちにも滑稽の意の扱ひあらんか」などゝ云ふのはちと苦しい。乍然、此書には史記滑稽傳、古今集其他の歌集の誹諧歌、連歌の誹諧等々、誹諧といふ文字の文献を集めてあるので辭書的には便宜である。又、誹諧の根源を知るといふ事は必ずしも誹諧の本體を知るといふ事にはならぬといふ事實も此書が(著者の意圖に反して皮肉にも) 好く語つてゐる。此點に於ては、其本を明かにして其末を知るといふ東洋流の名分的觀念よりも、其發達の狀態を以て其物を究明するといふ西洋流の史的觀察の方に眞理があると私は思ふ。

同じ著者の「玉池雜藻」は、俳諧に限らず、いろんな話を書集めてあつて、衒學臭紛々たる所が、斯うした雜筆の一種の興味だといへぬ事もない。此中に、百日紅は夏か秋かといふ辨、晝寢を夏とするのは「圓機活法」に據る爲だ、老鶯を夏、枯尾花を冬とするのは誤だといふやうな事が、鹿爪らしく如何にも大事らしく說かれてゐる。夏とか春とかいふ暦の上の區別は人間が定めたもの、百日紅はそんな事に頓着なく咲く、圓機活法を見た事のない百姓が一層好く晝寢の味は知つてゐよう。「うぐひすや竹の子藪に老を啼」は鶯の句(春)にしようとも竹の子の句(夏)にしようとも、此句の價値に變りはあるまい。今日、此の案外の說を讀んで、如何にも馬鹿らしいと感ずる程の方は、進んで、一體、何の題は春だ、何は夏だなどゝいふ季題の規約を固守して、俳句の趣味は爰にありと考へてゐる現時の俳壇一般の常識に就ても、懷疑の眼を開かれていゝ筈である。

「枇杷園隨筆」(士朗著)は、重に芭蕉關係の古い反故を集めただけのものだが、其反故に考古的價値の高いものが多いから、研究者にとつては好い書である。笈の小文の里程を書いた猿雖宛の書簡など、後の諸書に好く引用されてゐる。丈草の長い書簡も甚だ面白い、之は潘川が丈草の消息を貰ひたい爲に彼の所へ筆を送り、其筆で返事として書い

たものらしく、「はじめには走り好き筆、後にねばりなき墨おくり給り、誠ものもらふ友といひし古も、今もかはらねど、ふるき事をくりかへし、御拔事とて中入候事、隣人の所作と御しかりなく……」、炬燵と鍋と茶碗の外は殆ど無一物であつた丈草の氣持が味はれる、又そこへ訪ねて來た去來と、蒲團がないので、起きたまゝ話し續けて夜を明した有様などもしのばれる。

「芭蕉葉ぶね」(鶯笠述)は、當時の一家言としてなか〳〵聞くべき點が多い。「句はさびたるをよしとす、さび過たるは骸骨を見るがごとし、皮肉をうしなふべからず」など彼は確かな事を云ふてゐる。彼の考は素外とは正反對であつて俳諧といふ名に拘泥してはいけない、名は所詮かりものである、何と云はうとも苦しくない、といふ芭蕉の言を據どころとして、彼は俳諧と稱しながら其字義にかゝはらずともよろしいと主張する。「そも〳〵蕉翁は一家の道人にして傍に俳諧を好まれしなり、しかるに此癖終に捨がたく、幸に其道をもて一筋の新風を發し、生涯のはかり事となして是に道志をのべられしなり」、斯うまで云ふと、一種の臭味となつて感心せぬけれども、それでも素外の滑稽傳統說よりもよろしい。又、點取の流行する卑しい風を嘆き、諸國俳士の番付などいふものが出來た事に眉をひそめてゐるのも、當時の俳壇に對する苦言として聞くべきであらう、蕉風に心を寄せる比較的まじめな人だとても「たゞ議論辯のみに走り、口授口訣ばかりを聞きたがりて術を練るにうとく、たゞ上へ走りて天狗づらをする輩、當世のはやりもの也、かゝる人は決して上手にはならぬもの也、是を名けて節用俳諧といふ」と、此言は敢て其當時のみではなく、今日の俳壇にとつても蓋し頂門の一針たるべきものであらう。

「隨齋諧話」(成美著)は「枇杷園隨筆」と共に研究家に珍重されるものである。史料たるものは何でも掻き集めたといふのではなく、そこに撰擇が行はれてゐるのは編者の眼が高いからである。一體、芭蕉を中心とした周圍の事實に

は記錄の微すべきものが割合に少いのだが、其故にこそ近世になつて考證家といふものが其研究を擅にする餘地が與へられたので、常に是等考證家の對象となる所から、芭蕉といふものが雲の上にある何かのやうに、ほうばくとしてゐる所が貴いといふ風な感じを自然と與へられたのである。若し、芭蕉の門下に一人の克明な記述家があつて、亘細な事實まで殘らず書殘しておいたならば、考證的研究の必要はなく、好事家の注意を引く<u>たより</u>がないので、是ほどに芭蕉の名が喧ましく云はれず、從て其道も是ほどに弘まらずに終つたかもしれないと、さうした皮肉な觀察も出來ない事はない。芭蕉の發句にしても、解つたやうで解らないものが多いが、其が却て宗教的の有難味を加へる所以となり、後世いろ／＼な說を出さしめて、遂には芭蕉を偶像化せしめずばやまぬやうになつたのではないか。いや、そこに俳諧發句といふものゝ元來漂渺たる味があるとも云へる。「芭蕉の句の中、初心には聞得ざるもの少からず、是にさま／＼の論辨をまうけて解をなす者あれども、多く其意に的當せず、たゞ自らつとめて深く味ひぬれば、多年の後自然に豁然として眼の開くる時あり」と成美が云つてゐるのは一理ある事である。

「嵐窓誹話」(奚疑著)には又、蜩は夏だ、蓬は春だ、蟬のからは蕉門にては夏だ、淡雪も蕉門にては冬だなど、、斯うした穿鑿に力を盡してゐる。青葉といふ題でも、「あらたうと青葉若葉の日の光」「目に青葉山ほとゝぎす初鰹」等の句を證として、漸く「蕉門は夏なるべし」と論斷するのだから、まだるこい事ではないか。然し、其を笑へない。「氷といふ題は夏かい、冬かい、冷し氷は雜かい、歳時記を見なければ解らない」といふ俳人が今日だとても、なか／＼多い事なのである。

「俳諧茶話」(顧言著)には其角の解し難い句などに解をつけてゐる。解つたやうで解らない句は却て有難味を添ふる場合もあるけれども、其角のやうに、まるで歯が立たぬ句は人困らせである。然し、謎句とすれば又其謎の解きやう

もあるといふもの。其を解きかして、之は理屈より出でゝ理屈を離れたる所などゝ賞めあげてゐるのは、好い氣なものである。

「古學截斷字論」(北元著)は古學即ち國學の文法を以て發句の手爾葉を論じたもので、宣長出でゝ後、言葉の用格が科學的に研究された今の世の事も知らずに、俳人達が芭蕉や支考の說を頑固に守つてゐるのは時代後れである、而して今の說を以て發句の用語の誤を指摘されると、いや、それは歌の事だ、俳諧には俳諧の手爾葉があるなどゝ遁げるのは間違つてゐる、日本の言葉に二つはない、芭蕉だとても誤は誤であると此著者の云ふのは同感である。而して芭蕉が好く使ふ文の癖である「高欄のもとに鵜飼するなど誠にめざましき見物なりけらし」「誠に愛すべき山の姿なりけらし」のなりけらしに、なりけりを斯く延べて用ふる例はないと槍玉に擧げてゐる。それから古來、切字を論じた書に就て批判をしてゐるが、國學者が俳句を知らずして單に文法上より非難するのは當らぬと云つてゐる程、此北元といふ人は俳人だけあつて、發句の事は一通り解つてゐる。其評もずゐぶん肯綮に當つてゐる。然し、それでも發句のリズムといふものを無視して重に國學的見地から、此句はとのはぬなどゝ云つてゐるものゝ中で、

ぬけがらにならびて死ぬる秋の蟬　丈草

死ぬるでは切れぬから死ぬやとせねばならぬといふ如き——死ぬやといふては嘆息の意が強すぎる、それで死ぬるとゆるめた調子、これはリズムの問題であつて、文法の上からの非難は當らぬ、又「秋風に蝶やあぶなき池の上」(依々)は「秋風や蝶のあぶなき池の上」とすべしだと云ふが、前句のリズムと後句のリズムとは各別なのであつて、前句のやうに現したい場合もあらうし、後句のやうに現したい場合もあらう、之はどちらが好い句になるかといふ批評とはならうけれども、語法上から一つが正しくて一つが誤だなどゝいふ事は云へない譯である。

次に本集に載つてゐる士朗、成美、抱一、乙二、其他の俳家の發句に就て一言しよう。此時代の發句を概觀的に云へば、先づ大衆的である。元來、發句は和歌に對して見れば、大衆的、民衆的、平民的などゝ云へようけれども、芭蕉の發句のほんとうの味といふものは、しかく大衆的に味解されるものではない。蕪村になると猶更である、詩人的の高踏趣味をもつてゐるものでなければ共に共鳴することは難い。勿論、芭蕉時代にも蕪村時代にも、平俗なる趣味を以て門戶を張つた俳人は澤山に居たのであるけれども、佳い作品を殘した人達は何れも藝術の岡に象牙の塔を高く築いてゐたのである。所が、文化文政時代の俳人になると、さういふ風はなく、其發句は誰にも解り、誰にも同感されるやうな所ばかりをうたつてゐる。芭蕉蕪村時代の發句には、古歌を基礎としたり漢詩を翻案したりしたものも少くないが、此時代にはそんな學者らしい事は好まれず、芭蕉の句を換骨脫胎せしめる位が關の山である。試に同じ題の句を取つて見よう。

鶯に感ある竹のはやしかな　芭蕉
鶯や遠路ながら禮がへし　其角
鶯や茶の木畠の朝月夜　丈草
ほのかなる鶯きゝつ羅生門　來山

以上芭蕉時代の句

鶯のあちこちとするや小家がち　蕪村
鶯や聟に來にける子の一間　太祇
うぐひすや銅蓮水をたゝへぬる　召波

以上、蕪村一黨の句。是等の句の味は、句作に相當苦心したものでなければ、それが「鶯」として面白いといふコツが一寸解るまい。ところが――

鶯や浮世に住まば中二階　　成美

鶯に此のあけぼのを田舍かな　　巣兆

鶯や田づらよりきて見えずなる　　乙二

斯うした一茶時代の句になると、誰の耳にも入り易い、句作道に少しも骨を折つた者でなくとも、之を聞けば其意味を解する事が出來る。此點から見て、此時代の句は、芭蕉時代や一茶時代に比して著しく大衆的色彩を帶びて來たといふ事が出來る。此大衆的といふ事は內容――趣向の上に於てと共に、其表現――調子の上に於ても云ふことが出來る。芭蕉時代の句、殊に蕪村時代の句には、言葉に一種のハリがある、ヒビキがある、內容としては平常の事であつても、調子をもつて上手に詠ひ生かしてある句が少くない。右の鶯の句でも解らうが――

五月雨をあつめて早し最上川　　芭蕉

五月雨や雲雀鳴くほど晴て又　　支考

五月雨やしきりに暮るゝ水の上　　太祇

五月雨が好く降る、水が出るといふ誰も云ひさうな平常な事を取材としてゐながら、表現の調子が高いので、佳吟となつてゐる。所が此時代の句になると、取材が平常であると共に、其表現も亦、きはめて平常である。

五月雨の又おとつひに似たりけり　　成美

さみだれの芒むら〳〵夜の明る　　乙二

大水のひくや川邊ははや團扇　　蒼虬

調子にハリがない、ヒビキがない、つまり調子が低い。而して其調子の低い所が、俳句の調子といふものゝ特殊の味を理解しない一般の人々には親しく平易に語りかける言葉となるので、そこが一般向きであり、大衆的たる所なのである。で、俳句は大衆的な文學としてこそふさはしいものだといふ見方を主とすれば、此時代の大衆的傾向は非難せらるべきではあるまい。然し、大衆的といふ事と月並的といふ事とは區別せられねばならない。上に擧げた句の「大水のひくや川邊は皆團扇」の如き、之は月並調である。抑も月並的なる俳諧趣味といふものは、此時代に始まつたものではなく、遙かに元祿時代から糸をひいてゐるものではあるけれども、文化文政を過ぎ天保時代に入て梅室蒼虬の徒が、餘りに大衆趣味に媚びた爲めに、通俗より卑俗となり、其が殆ど全國的に俳壇を風靡するに到つた。明治の俳壇は其を承けて、文學的には殆ど墮落しきつてゐたのである。そこで、子規が、發句の革新を叫んで、天保調を輕蔑する意味で（彼等が月次句會を開き自ら月次の發句と云つて發表してゐたのをそのまゝ）彼等に月並派といふ名を與へたのである。月並趣味も亦大衆趣味の一つではあるけれども、月並的になつては、もう文學とは云はれぬものである。

雪といふものが降ぞよことし竹　　梅室
蜻蛉のおさへつけたり鮓の壓　　同
畑あらす行儀ではなし雁の列　　同
影日向へだてぬ鴛鴦のつがひ哉　　同

これらが月並調の代表であらう。

鶯の鳴くやきのふの今時分　　樗良
鶯や去年の初音も此あたり　　蒼虬

鶯がちよいと隣のついでかな　　一茶
鶯や隣まで來て隙の入る　　蒼虬

尾がしらの心もとなき海鼠かな　　去來
尾の聲かあたまの聲かみそさゞい　　鳳朗

お手打の夫婦なりしを更衣　　蕪村
色香なき夫婦の中も初松魚　　蒼虬

此一双の句の取材や見方や表現や、外見相似てゐるやうであつて、其內的價値は霄壤の差がある。前者は正しい句、後者は月並調である。

次に、なほ此時代の發句の特質を求めたならば、個性なき事といふ事も云へよう。芭蕉一門の人々は好く芭蕉に統率されてゐたけれども、其角、嵐雪、去來、丈草、素堂、許六、惟然、野坡等夫々に其個性が出てゐる。外に、鬼貫、來山、才麿など異色ある作家が其時代には澤山あつた。蕪村一黨とても、太祇、召波、几董とそれ〴〵に特色はあるし、曉臺、蓼太、白雄、樗良、闌更、靑蘿といふ風に其時代の作家には各自の持ち味があつた。所が文化文政時代の作家は――一茶一人を除いては――其持ち味としての個性が甚だ乏しい。名前を隱してしまへば、誰の句とも判別し難いといふ風である。之は決して賞めた事ではないが、此時代の大衆的傾向、平凡主義といふ事から自然と斯うなつたのである。も一つ、此時代の句には、新しみ（フレッシユネス）が乏しといふ事も云へよう。新しみ（フレッ

シユネス）とは、珍しい取材とか前人未發の試みとかいふ事ではない、ごく有りふれた事柄をごく普通の言葉で現してゐる句で、百年二百年を經ても、ちつとも舊くならない句がある。

蝶の羽のいくたびこゆる塀の屋根　芭蕉
ほんのりとほのや元日なりにけり　鬼貫

此句などがさうである。所が、新しい取材を使つて、新しさうな表現をしても、出來たてから舊い感じのするものがある。即ちフレツシユネスがないのである。文化文政時代の句は概してさうである。つまり作者の感覺が鈍くて神經が老い込んでゐる爲め、ほんとうに物を感ずるといふ事がなく、胸に感ずるより早く頭で解つてしまふ所から、深く思ひ入る事もなく、何れも淺いまゝに要領を得てしまふ通弊から生ずるのである。又、次の句を較べられよ。

（三井寺や日は午に迫る若楓　蕪村
（若楓午時に間のある戰ぎかな　蒼虬
（六月や峯に雲おくあらし山　芭蕉
（六月や事もなげなる日枝の山　鳳朗
（ひよろ〳〵と猶つゆけしや女郎花　芭蕉
（おろ〳〵と立や嵐の女郎花　鳳朗

若し後句が前句から脱胎せしめたつもりの作とすれば、何と拙い脱胎ではないか。寧ろ前句が後句より脱胎したやうにすら見える、それほど前句の方にははたらきが多い。又、假に作の前後を念頭に置かずして、句として味つて見れば、前句には一種のフレツシユネスが感じられるけれども、後句はたゞ舊いと思ふ。其句が元祿時代に出てもやは

り舊いと云はれたらうと思ふ。以下各家の集から私の好きな句だけを拾ふとしよう、各家の歿年の順に並べて採る。

「不白翁句集」——川上不白、晩年江戸の人、文化四年歿——

船頭の話をきけば柳かな

凩やみえすく奥に淨明寺

見わけも若衆ざかりや水仙花

「素檗句集」——藤森素檗、信州の人、文化四年歿——

夜の桃あたゝかなれば哀なり

星の夜を鬼灯賣の旅寐かな

あのまゝで〳〵けふの月は入

十月や刈田の不盡の晝過る

「枇杷園句集」——井上士朗、名古屋の人、文化九年歿——

鶯に淸瀧の水しづかなり

青柳の東海道は百里かな

たう〳〵と瀧の落こむ茂り哉

ひとり立つ鷺の白さよ五月雨

夕だちや頓て火を焚く藪の家

天の川紅のすゞみ過にけり

朝さかぬ朝皃はなし朝な〱

湖の水のひくさよ稲の花

こがらしや日に〱鴛鴦のうつくしき

煤はきや飴の鳥うる藪のかげ

「骨波可理」――建部巣兆、江戸千住の人、文化十一年歿――

青空に馴て米ふむ柳かな

蟬の音に薄雲かゝる林かな

象潟の合歡の落葉や後の月

かゞみ磨寺町のぞく落葉かな

「萍窗集」――栗田樗堂、伊豫松山の人、文化十一年歿――

青柳や雨にぬれたる淀の城

今もゆかしき松は花より

唐崎の朧間はどや蜆うり

三日月の下へさし行く小舟かな

末枯や日の出見にゆく園城寺

「能静草」――高柳荘丹、武州與野住、文化十二年歿――

よし雀の拍子揃ふや船大工

濡て行く數寄屋大工やはつしぐれ

日あたりに垣結ふ人やとしのくれ

顔見世や燕脂ほの〴〵と朝朗

「成美家集」——夏目成美、江戸の人、文化十三年歿——

しら魚やお僧すこしはまゐられよ

重箱に鯛おしまげて花見哉

藪寺や笋月夜ほとゝぎす

五月雨や西も東も本願寺

寒ければ顔もてよはる袖みそかな

落葉して日なたに立る榎かな

うしろには松の上野を冬ごもり

「をのゝえ草稿」——釋乙二、奥州白石の人、文政六年歿——

松風や時うつりして海苔の寄る

春もまだ子のさびしがる月夜かな

花さくや朝めし遲き小商人

天の川田守と語るまうへかな

梅も家も燒けし四とせの冬が來た

荒神の松も買れぬみぞれかな

いなづまの一夜になりぬ酒の味

「屠龍之技」——酒井抱一、江戸の人、文政十一年歿——

紫陽花や硝子吹きが椽の先

羽をためす乙鳥高し今朝の秋

口切や南天あかしうめ白し

剖葦や燈火もるゝ夜の川

花に飽て机にねむる胡蝶かな

塩魚に正月ちかき日ざしかな

「蒼虬翁句集」——成田蒼虬、金澤の人、天保十三年歿——

いつ暮て水田のうへの春の月

朧月夜の更てある九條かな

山吹や竹を年貢の一在所

羽をこぼす梢の鳶や小六月

惠心寺を行過したる落葉かな

「鳳朗發句集」——田川鳳朗、熊本人江戸住、弘化二年歿——

我眉の目にかゝる也冬の月
御火焚や鎌倉山は星月夜
空むいて子供弓射る霞かな
暮遲き加茂の川添下りけり
夕ぐれになる空澄むや梨の花

「梅室家集」——櫻井梅室、金澤の人、嘉永五年歿——

蟵わりのくらい灯で見る柳かな
つばき落ち鷄鳴き椿又落る
貝吹ば小虫こぼるゝしけりかな
麥秋や雲よりうへの山畠
糊の干ぬ行燈ともす寒さかな

（荻原井泉水）

日本俳書大系第十四巻 終



昭和二年七月五日印刷
昭和二年七月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（14）

著作者　神田豊穂

發行者　神田豊穂
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一一四・二二二四

